

禁野本町遺跡2

枚方市

## 禁野本町遺跡2

公務員宿舎枚方住宅(1期)整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

一〇二二年七月

2012年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

枚方市

# 禁野本町遺跡 2

公務員宿舎枚方住宅(1期)整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター





カラー写真1 8区第1面（南西から）



カラー写真2 12区第2面（南東から）



カラー写真3 10区（A2棟）第5面（北西から）



カラー写真4 9区 第6面（北から）

## 序 文

淀川は、大阪の地にとって、景観としても資源としても欠くことのできない川である。その川を望む枚方市禁野本町の高台において、このたび公務員宿舎枚方住宅（I期）整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた。

先史時代の石器から近代の火薬庫までが調査の対象となり、幾多の遺構・遺物を取り上げ記録した。なかでも今回の発掘調査では、古代の集落と近代の火薬庫という、同じ土地における人間の営みの結果としてはある意味対照的なふたつの貌を見ることになった。

奈良時代を中心とした集落跡では、足の踏み場もないほど重複関係の著しい掘立柱建物群をはじめ多くの遺構が見つかった。遺物も豊富で、土師器や須恵器といった土器ばかりではなく、長岡京内の遺跡との同範関係にある軒瓦、遠くの地からもたらされた緑釉陶器や灰釉陶器なども出土した。

いわゆる禁野火薬庫については、火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、廐、貯水池といった諸施設が立体的に姿を現した。近隣にも多大な被害を及ぼした昭和14年の大爆発から70数年の星霜を経ているが、爆発の痕跡はそこかしこに見られた。被災した強固なコンクリート構造物、あるいは散乱する幾多の砲弾片や薬莢など。それでも時勢は、昭和20年の終戦まで火薬庫の稼動を求めた。そこに、軍事施設の冷徹な性格がうかがわれる。

禁野本町遺跡の発掘調査および整理作業では、財務省近畿財務局、株式会社浅沼組、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、公益財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめとする諸機関や多くの方々に多大なご理解とご協力を賜った。衷心よりお礼申し上げるとともに、今後ともなおいっそうのご支援をお願いするものである。

平成24年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理 事 長 田邊 征夫

# 例　　言

1. 本書は、大阪府枚方市禁野本町二丁目 1844 - 1 ほかに所在する禁野本町遺跡（調査名：禁野本町遺跡 10・1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社 浅沼組が実施する「公務員宿舎枚方住宅（Ⅰ期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査」で、財団法人（平成 23 年 4 月から公益財団法人）大阪府文化財センターは、平成 22 年 4 月 30 日に委託契約を締結し、平成 22 年 5 月 1 日から平成 23 年 4 月 30 日まで現地調査を行った。その後平成 23 年 5 月 1 日から平成 24 年 4 月 27 日まで遺物整理作業を行い、平成 24 年度本書刊行を以って完了した。
3. 調査・整理は以下の体制で実施した。

## 〔調査〕 平成 22 年度

調査部長 福田英人、調整グループ長 江浦洋、同主幹 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、主査 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹（全期間）・島崎久恵（平成 22 年 11 月から）・市村慎太郎（全期間）、技師 奥和之（平成 23 年 2 月から 3 月まで）、専門調査員 水久保祥子（全期間）・村上智見（平成 22 年 8 月まで）・櫻田小百合（平成 22 年 6 月まで）・河本純一（平成 22 年 9 月）・前田俊雄（平成 22 年 10 月から平成 23 年 2 月まで）

## 〔調査〕 平成 23 年度

調査課長 江浦洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹・島崎久恵・市村慎太郎、専門調査員 水久保祥子〔整理〕 平成 23 年度

調査課長 江浦洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、主査 陣内暢子（平成 24 年 1 月まで）、副主査 本間元樹

## 〔整理〕 平成 24 年度

調査部長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査（中部総括）秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹

4. 石材については奥田尚氏、動物骨については安部みき子氏のご教示を得た。禁野火薬庫にかかる調査成果や諸資料については、調査課主査 駒井正明から教示を受けた。遺物の保存処理・樹種鑑定等については、調査課主査 山口誠治が行った。

5. 調査・整理の実施にあたっては、地元である枚方市教育委員会、公益財団法人 枚方市文化財研究調査会、大阪府教育委員会をはじめとし、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい（五十音順・敬称略）。

安部みき子、井戸竜太、奥田尚、高橋照彦、竹原伸仁、西田敏秀、馬部隆弘

枚方市立中央図書館市史資料室、大阪府警察本部、大阪府枚方警察署、財務省近畿財務局、陸上自衛隊第 103 不発弾処理隊

6. 本書の執筆分担は目次に記すとおりである。整理作業は、遺物は陣内が、遺構その他は本間が担当した。ただし、遺構その他については、現地調査中に市村をはじめとする各担当者が作成した各種資料や、10 区の第 4・5 面については島崎による覚書も活用している。

7. 本書の編集は、本間が行った。
8. 本調査にかかる写真・実測図などの記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡　　例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を基準とし、プラス値を記している。なお、T.P. 表記は省略する場合もある。また、使用単位はメートルを基本とし、小数点以下第1位までを記している。
2. 遺構平面図などに付す座標値はいずれも世界測地系（測地成果 2000）により、それに準拠した平面直角座標系第VI系の座標系を使用した。単位はメートルである。
3. 本書で使用した北は座標北を基準とし、磁北は西に  $6^{\circ} 38'$  、真北は東に  $0^{\circ} 12'$  振っている。
4. 断面図の土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、その記載順序は、土層では記号・色名・土質、土器では記号・色名とする。
5. 遺構番号は、遺構の種類にかかわらず調査区ごとに1からの通し番号とした。その記載順序は、番号・遺構種類である。なお、検討の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。
6. 掲載図面の縮尺は、調査区平面図 150～400 分の1、建物類 100 分の1、個別の遺構 40 分の1 を基本とするが、対象物の大きさに応じて適宜縮尺を変更したものも多い。遺物は、土器・土製品・瓦・煉瓦 4 分の1、便槽鉢・土管 8 分の1、石製品 3 分の2・3 分の1、金属製品 2 分の1・4 分の1・6 分の1、木製品 4 分の1・6 分の1・8 分の1とした。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
7. 掘立柱建物を構成する個々のピットについては、柱根や柱痕跡を含む最も特徴的な位置の断面を図示した。また、より上層から掘り込まれたことが明らかなピットには、断面の上部に点線を加えた。掘立柱建物の平面図では、基本的にピットの完掘状況を図示した。
8. 遺物実測図において、土器類の断面は、須恵器をアミフセ 10%、その他を白抜きとした。口縁（又は底部）が 6 分の 1 未満残存のものは、口縁（又は底部）の線を切っている。土器表面に付着した赤色顔料・炭化・灰釉はアミフセ 10%、綠釉陶器の釉の濃淡はアミフセ 10% と 20% で表現し、図の横にそれぞれ何を表すかを文字で示した。図上復元できない土器の小片は、「内面・断面・外面」と配置した。打製石器の新欠部分は黒塗りとした。
9. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号とした。
10. 各報文作成者による見解の相違や、文章表現法、使用文字などについては必ずしも統一していない。
11. 写真掲載される土器類の縮尺は任意である。石製品・金属製品・近代遺物の一部については写真図版に縮尺を示した。
12. 現地調査および遺物整理は、財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年8月)、および、『遺跡調査基本マニュアル』(2010年12月)に可能な限り準拠して行った。

# 本文目次

カラー写真図版	卷頭
序文	i
例言	ii
凡例	iii
本文目次	iv
図目次	v
表目次	viii
写真目次	ix
第1章 調査にいたる経緯と経過 ..... (市村慎太郎・本間元樹) .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境 ..... (本間) .....	7
第1節 地理的環境 .....	7
第2節 歴史的環境 .....	7
第3章 調査・整理の方法 ..... (本間) .....	13
第1節 調査の方法 .....	13
第2節 整理の方法 .....	17
第4章 遺構の調査成果 ..... (本間) .....	18
第1節 基本層序 .....	18
第2節 1区(道路・ガス管)の遺構 .....	19
第3節 2区・2-2区・3区・4区(土壌)の遺構 .....	25
第4節 5区(調整池)の遺構 .....	28
第5節 6区(集会所)の遺構 .....	42
第6節 7区(E棟)の遺構 .....	43
第7節 8区(D棟)・8-2区(防火水槽D)の遺構 .....	50
第8節 9区(C棟)・9-2区(防火水槽C)の遺構 .....	77
第9節 10区(A棟)・10-2区(防火水槽A)の遺構 .....	101
第10節 11区(B棟)の遺構 .....	149
第11節 12区(立体駐車場)の遺構 .....	176
第12節 13区・14区・15区(人孔・管路)の遺構 .....	200

第5章 遺物の調査成果 .....	(陣内帽子) .....	201
第1節 近代以降遺物 .....	.....	201
第2節 中世・古代遺物 .....	.....	226
第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体 .....	(安部みき子) .....	276
第7章 禁野本町遺跡の植物遺体 .....	(山口誠治) .....	277
第8章 まとめ .....	(本間) .....	280
第1節 概要 .....	.....	280
第2節 古代集落の変遷 .....	.....	281
第3節 禁野火薬庫の変遷 .....	.....	287
掲載遺物観察表 .....	.....	305 ~ 332
遺構写真図版 .....	.....	写真図版 1 ~ 74
遺物写真図版 .....	.....	写真図版 75 ~ 108
報告書抄録 .....	.....	卷末

## 図 目 次

図 1 遺跡位置 .....	8	図 15 5区第3面中央部 .....	36
図 2 調査区配置と地区割り .....	14	図 16 5区第3面竪穴建物 1 .....	37
図 3 地区割りの方法 .....	15	図 17 5区第3面竪穴建物 2 .....	38
図 4 断面模式 .....	18	図 18 5区第3面掘立柱建物 1 .....	39
図 5 1区西壁断面 .....	20・21	図 19 5区第3面掘立柱建物 2 .....	40
図 6 1区第1面 .....	22	図 20 6区南西部断面模式 .....	42
図 7 1区第2面・第3面 .....	23	図 21 7区南壁断面 .....	44
図 8 2区・2-2区・3区・4区 .....	25	図 22 6区・7区第1面 .....	45
図 9 2区・2-2区・3区・4区断面 .....	26・27	図 23 6区・7区第2面 .....	46
図 10 5区南壁断面 .....	29	図 24 7区第2面3~16枕木土坑 .....	47
図 11 5区第1面 .....	30	図 25 7区第2面21石組溝 .....	47
図 12 5区第1面土墨基礎 .....	31	図 26 7区第3面 .....	49
図 13 5区第2面 .....	34	図 27 8区南壁断面 .....	51
図 14 5区第3面 .....	35	図 28 8区第1面 .....	52

図 29	8区第1面7建物・8石組溝	53	図 65	10区第2面	108
図 30	8区第1面7建物・8石組溝 ・18土塁東辺東側断面	54	図 66	10区第2面熔填作業場(西)	109
図 31	8区第1面10職工廁	55	図 67	10区第2面250構造物	111
図 32	8区第1面19土塁	56・57	図 68	10区第3面	113
図 33	8区第1面20建物	58・59	図 69	10区第4面	115
図 34	8区第1面9貯水池	61	図 70	10区第4面掘立柱建物20	116
図 35	8区第2面	63	図 71	10区第5面	117
図 36	8区第3面	65	図 72	10区第5面掘立柱建物21	118
図 37	8区第4面	66	図 73	10区第5面776・781溝	119
図 38	8区第5面	68	図 74	10区(A2棟)第4面	123
図 39	8区第6面	70	図 75	10区(A2棟)第5面	124
図 40	8区第6面西半	71	図 76	10区(A2棟)第4・5面掘立柱建物 ・柱列配置	125
図 41	8区第6面掘立柱建物1	72	図 77	10区第4面353・357井戸 第5面630井戸	126
図 42	8区第6面249井戸	73	図 78	10区第4面353井戸	127
図 43	8区第6面92～94ピット ・110～112ピット	74	図 79	10区第4面掘立柱建物1	128・129
図 44	9区北壁断面	78	図 80	10区第4・5面掘立柱建物2	130
図 45	9区第1面	79	図 81	10区第4・5面掘立柱建物3	131
図 46	9区第2面	81	図 82	10区第4・5面掘立柱建物4	132
図 47	9区第2面55土塁基礎・軽便軌道	82	図 83	10区第4・5面柱列5	133
図 48	9区第2面56土塁基礎	83	図 84	10区第5面掘立柱建物6・柱列7	134
図 49	9区第2面57土塁基礎	84	図 85	10区第4・5面掘立柱建物8	135
図 50	9区第2面土塁基礎下部の石垣	85	図 86	10区第4・5面掘立柱建物9	136
図 51	9-2区第2面1建物基礎	86	図 87	10区第4面掘立柱建物10 第4・5面掘立柱建物11	137
図 52	9区第3面	89	図 88	10区第4・5面掘立柱建物12	138
図 53	9区第4面	90	図 89	10区第4・5面掘立柱建物13・14	139
図 54	9区第4面121土坑	91	図 90	10区第5面柱列15・16	140
図 55	9区第5面	92	図 91	10区第4・5面掘立柱建物17・18	141
図 56	9区第6面	94	図 92	10区第5面掘立柱建物19	142
図 57	9区第6面東部	95	図 93	10区第4面289土坑・297ピット ・298土器群・299ピット・351土器群 ・352土坑・356ピット	144
図 58	9区第6面掘立柱建物1	96・97	図 94	10区第5面504土坑・617ピット	145
図 59	9区第6面掘立柱建物2	98	図 95	11区南壁断面	150
図 60	10区南壁断面	102	図 96	11区第2面	151
図 61	10区第1面	103	図 97	11区第2面男休憩所	152
図 62	10区第1面1建物北出入口B周辺	105			
図 63	10区第1面2建物南辺東部	106			
図 64	10区第1面2建物西出入口	107			

図 98	11 区 第2面女休憩所	153	図 135	近代以降遺物 煉瓦(2)	215
図 99	11 区 第2面男廁(3~6便槽)	154	図 136	近代以降遺物 金属製品(2)	216
図 100	11 区 第3面	156・157	図 137	近代以降遺物 木製品(1) ・金属製品(3)	217
図 101	11 区 第3面8~45 枕木土坑	159	図 138	近代以降遺物 金属製品(4) ・コンクリート製品(1)	218
図 102	11 区 第3面2・202 枝	161	図 139	近代以降遺物 金属製品(5)	219
図 103	11 区 第4面	164	図 140	近代以降遺物 金属製品(6)	220
図 104	11 区 第4面316~321 ピット	165	図 141	近代以降遺物 木製品(2) ・金属製品(7)・ペークライト製品	221
図 105	11 区 第5面	166	図 142	近代以降遺物 木製品(3)	222
図 106	11 区 第6面	168・169	図 143	近代以降遺物 木製品(4) ・金属製品(8)・コンクリート製品(2)	223
図 107	11 区 第6面掘立柱建物1	170	図 144	近代以降遺物 金属製品(9) ・コンクリート製品(3)	224
図 108	11 区 第6面掘立柱建物2	171	図 145	近代以降遺物 コンクリート製品(4)	225
図 109	11 区 第6面掘立柱建物3	172	図 146	5 区 古代遺物	237
図 110	11 区 第6面掘立柱建物4	173	図 147	8 区 古代遺物(1)	238
図 111	11 区 第6面525・526 ピット	173	図 148	8 区 古代遺物(2)	239
図 112	11 区 第6面674 土坑	174	図 149	8 区 古代遺物(3)	240
図 113	12 区 東壁断面	178・179	図 150	9 区 中世・古代遺物	241
図 114	12 区 第1面	180	図 151	9 区 古代遺物(1)	242
図 115	12 区 第1・2面2 建物	182・183	図 152	9 区 古代遺物(2)	243
図 116	12 区 第2面	184	図 153	9 区 古代遺物(3)	244
図 117	12 区 第2面18・25 上管列	185	図 154	9 区 古代遺物(4)	245
図 118	12 区 第2面3 土壘南辺	186	図 155	9 区 古代遺物(5)	246
図 119	12 区 第3面	188	図 156	9 区 古代遺物(6)	247
図 120	12 区 第3面28・29 桁列	189	図 157	10 区(A1棟) 古代遺物(1)	248
図 121	12 区 第4面	191	図 158	10 区(A1棟) 古代遺物(2)	249
図 122	12 区 第4面中央部	192	図 159	10 区(A1棟) 古代遺物(3)	250
図 123	12 区 第4面掘立柱建物2	193	図 160	10 区(A2棟) 古代遺物(1)	251
図 124	12 区 第4面85 土坑	194	図 161	10 区(A2棟) 古代遺物(2)	252
図 125	12 区 第4面掘立柱建物1	196	図 162	10 区(A2棟) 古代遺物(3)	253
図 126	12 区 第4面89 積穴建物	197	図 163	10 区(A2棟) 古代遺物(4)	254
図 127	12 区 第4面78 土坑	198	図 164	10 区(A2棟) 古代遺物(5)	255
図 128	近代以降遺物 陶磁器・ガラス製品 ・金属製品(1)	208	図 165	10 区(A2棟) 古代遺物(6)	256
図 129	近代以降遺物 陶器(1)	209	図 166	10 区(A2棟) 古代遺物(7)	257
図 130	近代以降遺物 陶器(2)	210	図 167	10 区(A2棟) 古代遺物(8)	258
図 131	近代以降遺物 陶器(3)・瓦(1)	211			
図 132	近代以降遺物 瓦(2)	212			
図 133	近代以降遺物 瓦(3)	213			
図 134	近代以降遺物 煉瓦(1)	214			

図 168	10区 (A2棟) 古代遺物 (9)	259	図 177	11区 古代遺物 (1)	268
図 169	10区 (A2棟) 古代遺物 (10)	260	図 178	11区 古代遺物 (2)	269
図 170	10区 (A2棟) 古代遺物 (11)	261	図 179	12区 中世・古代遺物 (1)	270
図 171	10区 (A2棟) 古代遺物 (12)	262	図 180	12区 中世・古代遺物 (2)	271
図 172	10区 (A2棟) 古代遺物 (13)	263	図 181	12区 中世・古代遺物 (3)	272
図 173	10区 (A2棟) 古代遺物 (14)	264	図 182	12区 古代遺物 (1)	273
図 174	10区 (A2棟) 古代遺物 (15)	265	図 183	12区 古代遺物 (2)	274
図 175	10区 (A2棟) 古代遺物 (16)	266	図 184	12区 古代遺物 (3)	275
図 176	11区 中世・古代遺物	267			
図 185	古代の主要遺構				282
図 186	古代の建物等の変遷 (全体)				283
図 187	古代の建物等の変遷 [10区 (A2棟)]				284
図 188	禁野火薬庫の主要施設				295
図 189	明治 42 (1909) 年の大坂陸軍兵器支廠禁野弾薬庫				296
図 190	大正 2 (1913) 年の大坂陸軍兵器支廠禁野弾薬庫				297
図 191	昭和 8 (1933) 年の大坂陸軍兵器支廠禁野弾薬庫				298
図 192	昭和 11 (1936) 年の大坂陸軍兵器支廠禁野弾薬庫				299
図 193	昭和 12 (1937) 年の大坂陸軍兵器支廠禁野弾薬庫				300
図 194	昭和 14 (1939) 年の爆発前の大坂陸軍兵器支廠禁野倉庫				301
図 195	昭和 14 (1939) 年の爆発後の大坂陸軍兵器支廠禁野倉庫				302
図 196	昭和 17 (1942) 年の大坂陸軍兵器補給廠枚方分廠				303
図 197	昭和 20 (1945) 年の大坂陸軍兵器補給廠枚方分廠				304

付図1 禁野本町遺跡の最終遺構面

付図2 禁野火薬庫の主要施設

## 表 目 次

表1	各調査区遺跡面の対照	16	表7	禁野本町遺跡の動物遺存体	276
表2	煉瓦集計表	207	表8	イヌの下顎骨の計測値	276
表3	木ネジ集計表	207	表9	イヌの肩甲骨の計測値	276
表4	釘集計表	207	表10	古代の掘立柱建物・柱列	286
表5	薬莢・爆管刻印一覧	207	表11	禁野火薬庫の配置図等	288
表6	犬釘集計表	207	表12	禁野火薬庫の主要施設	290・291

# 写 真 目 次

## 卷頭カラー写真図版 1 近代

カラー写真1 8区 第1面（南西から）

カラー写真2 12区 第2面（南東から）

## 卷頭カラー写真図版 2 古代

カラー写真3 10区（A2棟）第5面（北西から）

カラー写真4 9区 第6面（北から）

## 写真図版 1 1区遺構

写真1 1区 第1面（南から）

写真2 1区 第1面（北から）

写真3 1区 第3面（南から）

写真4 1区 第3面（北から）

## 写真図版 2 2区・3区・4区遺構

写真5 2区・3区・4区 機械掘削状況（南西から）

写真6 2区（南から）

写真7 3区（東から）

## 写真図版 3 5区遺構（1）近代

写真8 5区 第1面（南西から）

写真9 5区 第1面（東から）

## 写真図版 4 5区遺構（2）中世～近代

写真10 5区 第1面9土壙溝（南西から）

写真11 5区 第1面11土坑断面（南から）

写真12 5区 第1面45土坑断面（南から）

写真13 5区 第2面（南西から）

## 写真図版 5 5区遺構（3）古代

写真14 5区 第3面（東から）

写真15 5区 第3面中央部（北から）

## 写真図版 6 5区遺構（4）古代

写真16 5区 第3面竪穴建物1（南から）

写真17 5区 第3面竪穴建物1土器出土状況（北東から）

写真18 5区 第3面竪穴建物1カマド被熱解除去状況  
(南から)

写真19 5区 第3面竪穴建物1カマド炭層検出状況（南から）

写真20 5区 第3面竪穴建物1完掘状況（南から）

## 写真図版 7 5区遺構（5）古代

写真21 5区 第3面竪穴建物2（南から）

写真22 5区 第3面竪穴建物2検出状況（南から）

写真23 5区 第3面竪穴建物2カマド（南から）

写真24 5区 第3面竪穴建物2カマド出土土器（南東から）

写真25 5区 第3面竪穴建物2完掘状況（南から）

## 写真図版 8 6区遺構 近代

写真26 6区 第1面（東から）

写真27 6区 第1面（南西から）

写真28 6区（+7区）第2面（東から）

## 写真図版 9 7区遺構（1）近代

写真29 7区 第1面（北東から）

写真30 7区 第1面（南西から）

写真31 7区 第2面（西から）

写真32 7区 第2面3～16枕木土坑（南から）

写真33 7区 第2面21石組溝（南から）

## 写真図版 10 7区遺構（2）古代

写真34 7区 第3面（東から）

写真35 7区 第3面（西から）

写真36 7区 第4面（西から）

## 写真図版 11 8区遺構（1）近代

写真37 8区 第1面（東から）

写真38 8区 第1面西部（南東から）

## 写真図版 12 8区遺構（2）近代

写真39 8区 第1面7建物・8石組溝（南から）

写真40 8区 第1面8石組溝検出状況（東から）

写真41 8区 第1面8石組溝検出状況（西から）

### 写真図版 13 8区遺構（3）近代

- 写真42 8区第1面8石組溝完掘状況（東から）  
写真43 8区第1面8石組溝完掘状況（西から）  
写真44 8区第1面8石組溝・7建物断面（北から）  
写真45 8区第1面8石組溝断面（北から）

### 写真図版 14 8区遺構（4）近代

- 写真46 8区第1面10職工崩（南東から）  
写真47 8区第1面14便槽断面（東から）  
写真48 8区第1面17便槽断面（東から）  
写真49 8区第1面10職工崩・21軽便軌道（西から）

### 写真図版 15 8区遺構（5）近代

- 写真50 8区第1面19土壠・20建物（北東から）  
写真51 8区第1面20建物（南から）

### 写真図版 16 8区遺構（6）近代

- 写真52 8区第1面20建物床面（北東から）  
写真53 8区第1面20建物南面（南西から）  
写真54 8区第1面20建物南面中央部（南から）  
写真55 8区第1面20建物南面東端（南から）  
写真56 8区第1面19土壠西辺西側内面（北東から）  
写真57 8区第1面21軽便軌道（南から）  
写真58 8区第1面21軽便軌道断面（西から）

### 写真図版 17 8区遺構（7）近代

- 写真59 8区第1面9貯水池（北東から）  
写真60 8区第1面9貯水池（北西から）  
写真61 8区第1面9貯水池（西から）

### 写真図版 18 8区遺構（8）中世～近世

- 写真62 8区第2面東部（西から）  
写真63 8区第2面西部（東から）  
写真64 8区第2面西部（南西から）

### 写真図版 19 8区遺構（9）古代～中世

- 写真65 8区第3面東部（西から）  
写真66 8区第3面中央部（南西から）  
写真67 8区第3面西部（東から）
- 写真68 8区第4面東部（東から）  
写真69 8区第4面東部（西から）  
写真70 8区第4面西部（東から）

### 写真図版 21 8区遺構（11）古代

- 写真71 8区第5面東部（東から）  
写真72 8区第5面東部（西から）  
写真73 8区第5面西部（東から）

### 写真図版 22 8区遺構（12）古代

- 写真74 8区第6面東部（東から）  
写真75 8区第6面西部（北西から）

### 写真図版 23 8区遺構（13）古代

- 写真76 8区第6面掘立柱建物1（南から）  
写真77 8区第6面掘立柱建物1検出状況（西から）  
写真78 8区第6面123ピット断面（南西から）  
写真79 8区第6面125ピット断面（西から）  
写真80 8区第6面130ピット断面（西から）

### 写真図版 24 8区遺構（14）古代

- 写真81 8区第6面249井戸断面（北西から）  
写真82 8区第6面249井戸完掘状況（北東から）  
写真83 8区南壁中央部断面（北から）

### 写真図版 25 8-2区遺構

- 写真84 8-2区第1面（東から）  
写真85 8-2区第2面（東から）  
写真86 8-2区第3面（北西から）

### 写真図版 26 9区遺構（1）近代

- 写真87 9区第1面（東から）  
写真88 9区第1面（西から）

### 写真図版 27 9区遺構（2）近代

- 写真89 9区第2面（東から）  
写真90 9区第2面（西から）

### 写真図版 28 9区遺構（3）近代

- 写真91 9区第2面55土壠基礎（南から）  
写真92 9区第2面55土壠基礎（北から）  
写真93 9区第2面55土壠基礎（北東から）  
写真94 9区第2面土壠基礎下部の石垣（北東から）

### 写真図版 29 9区遺構（4）近代

- 写真95 9区第2面軽便軌道（東から）  
写真96 9区第2面56土壠基礎（西から）  
写真97 9区第2面57土壠基礎（北西から）

**写真図版 30 9区遺構（5）古代～近世**

写真 98 9区第3面（西から）

写真 99 9区第4面（西から）

写真 100 9区第5面（南西から）

**写真図版 31 9区遺構（6）古代**

写真 101 9区第6面（東から）

写真 102 9区第6面（西から）

**写真図版 32 9区遺構（7）古代**

写真 103 9区第6面掘立柱建物1柱穴段下付状況（北から）

写真 104 9区第6面掘立柱建物1柱痕跡半截状況（北から）

写真 105 9区第6面掘立柱建物1柱穴半截状況（北から）

**写真図版 33 9区遺構（8）古代**

写真 106 9区第6面323ピット断面（西から）

写真 107 9区第6面324ピット断面（西から）

写真 108 9区第6面325ピット断面（西から）

写真 109 9区第6面328ピット断面（北から）

写真 110 9区第6面332ピット断面（南西から）

写真 111 9区第6面333ピット断面（東から）

写真 112 9区第6面335ピット断面（東から）

写真 113 9区第6面336ピット柱根出土状況（西から）

**写真図版 34 9区遺構（9）古代**

写真 114 9区第6面322ピット断面（南東から）

写真 115 9区第6面322ピット枕木出土状況（東から）

写真 116 9区第6面332ピット完掘状況（東から）

写真 117 9区第6面掘立柱建物1完掘状況（北東から）

写真 118 9区北壁断面（南東から）

**写真図版 35 9-2区遺構**

写真 119 9-2区第1面（北東から）

写真 120 9-2区第2面（南から）

写真 121 9-2区第3面（北から）

**写真図版 36 10区遺構（1）近代**

写真 122 10区（A2棟）第1面（北から）

写真 123 10-2区第1面（東から）

**写真図版 37 10区遺構（2）近代**

写真 124 10区（A2棟）第1面（東から）

写真 125 10区（A2棟）第1面（西から）

**写真図版 38 10区遺構（3）近代**

写真 126 10区（A1棟）第1面1建物北出入口B（北から）

写真 127 10区（A1棟）第1面1建物軽便軌道（南から）

写真 128 10区（A1棟）第1面1建物北辺側溝（東から）

写真 129 10区（A1棟）第1面1建物北出入口C（東から）

写真 130 10区（A2棟）第1面2建物北出入口（北東から）

写真 131 10区（A1棟）第1面2建物西出入口（西から）

写真 132 10区（A1棟）第1面2建物軽便軌道（西から）

**写真図版 39 10区遺構（4）近代**

写真 133 10区（A2棟）第2面（南東から）

写真 134 10区（A1棟）第2面（東から）

**写真図版 40 10区遺構（5）近代**

写真 135 10区（A1棟）第2面北部（東から）

写真 136 10区（A1棟）第2面（西から）

**写真図版 41 10区遺構（6）近代**

写真 137 10区（A1棟）第2面焼塙作業場（西）（南から）

写真 138 10区（A1棟）第2面141ピット断面（西から）

写真 139 10区（A1棟）第2面164ピット断面（西から）

写真 140 10区（A1棟）第2面165ピット断面（西から）

写真 141 10区（A1棟）第2面166ピット断面（西から）

写真 142 10区（A1棟）第2面171ピット断面（西から）

写真 143 10区（A1棟）第2面219枕木群（南から）

写真 144 10区（A1棟）第2面250構造物（南西から）

**写真図版 42 10区遺構（7）中世～近世**

写真 145 10区（A2棟）第3面（南東から）

写真 146 10区（A1棟）第3面（南東から）

写真 147 10区（A1棟）第3面西部（南東から）

**写真図版 43 10区遺構（8）古代～中世**

写真 148 10区（A1棟）第4面（南東から）

写真 149 10区（A1棟）第4面（南から）

写真 150 10区（A1棟）第5面（東から）

写真 151 10区（A1棟）第5面（西から）

写真 152 10区（A1棟）第5面東部（北西から）

写真 153 10区（A1棟）第5面中央部（北から）

**写真図版 44 10区遺構（9）古代**

写真 154 10区（A2棟）第4面（北から）

写真 155 10区（A2棟）第4面（東から）

**写真図版 45 10区遺構(10) 古代**

写真156 10区(A2棟)第5面(西から)

写真157 10区(A2棟)第5面(東から)

**写真図版 46 10区遺構(11) 古代**

写真158 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠検出  
状況(西から)

写真159 10区(A2棟)第4面353井戸断面(西から)

写真160 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内完  
振状況(西から)

写真161 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内部(西から)

写真162 10区(A2棟)第4面353井戸掘方四分状況  
(南東から)

**写真図版 47 10区遺構(12) 古代**

写真163 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠外面  
(北西から)

写真164 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内面  
(北から)

写真165 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠最下段  
(北から)

写真166 10区(A2棟)第4面353井戸完掘状況(北から)

**写真図版 48 10区遺構(13) 古代**

写真167 10区(A2棟)第4面掘立柱建物1(北から)

写真168 10区(A2棟)第4面257ピット段下げ状況(北から)

写真169 10区(A2棟)第4面257ピット断面(南西から)

写真170 10区(A2棟)第4面259ピット断面(東から)

写真171 10区(A2棟)第4面259ピット柱根出土状況  
(東から)

**写真図版 49 10区遺構(14) 古代**

写真172 10区(A2棟)第4面260ピット断面(東から)

写真173 10区(A2棟)第4面261ピット断面(南東から)

写真174 10区(A2棟)第4面262ピット断面(北から)

写真175 10区(A2棟)第4面263ピット断面(北から)

写真176 10区(A2棟)第4面264ピット柱根跡土器  
出土状況(東から)

写真177 10区(A2棟)第4面266ピット断面(西から)

写真178 10区(A2棟)第4面267ピット断面(西から)

写真179 10区(A2棟)第4面268ピット断面(北東から)

**写真図版 50 10区遺構(15) 古代**

写真180 10区(A2棟)第4面289土坑遺物出土状況  
(西から)

写真181 10区(A2棟)第4面297ピット遺物出土状況  
(東から)

写真182 10区(A2棟)第4面298土器群遺物出土状況  
(北東から)

写真183 10区(A2棟)第4面299ピット遺物出土状況  
(北から)

写真184 10区(A2棟)第4面308ピット(西から)

写真185 10区(A2棟)第4面331ピット縦板出土状況  
(北から)

写真186 10区(A2棟)第4面351土器群遺物出土状況  
(東から)

写真187 10区(A2棟)第4面352土坑遺物出土状況  
(南から)

**写真図版 51 10区遺構(16) 古代**

写真188 10区(A2棟)第4面356ピット遺物出土状況  
(北から)

写真189 10区(A2棟)第4面370ピット遺物出土状況  
(西から)

写真190 10区(A2棟)第5面504土坑遺物出土状況  
(南から)

写真191 10区(A1棟)第5面781溝遺物出土状況  
(東から)

写真192 10区(A2棟)第5面1007石群(東から)

写真193 10区(A2棟)東壁断面(北西から)

写真194 10区(A1棟)西壁断面(東から)

**写真図版 52 11区遺構(1) 近代～現代**

写真195 11区第1面(西から)

写真196 11区第2面(東から)

写真197 11区第2面東部(北から)

**写真図版 53 11区遺構(2) 近代**

写真198 11区第2面女体廻所(南から)

写真199 11区第2面266ピット(東から)

写真200 11区第2面267ピット(東から)

写真201 11区第2面268ピット(南から)

写真202 11区第2面269ピット(北から)

- 写真図版 54 11区遺構（3）古代**
- 写真 203 11区第2面3～6便槽（北から）
  - 写真 204 11区第2面3便槽完掘状況（西から）
  - 写真 205 11区第2面3便槽完掘状況（西から）
  - 写真 206 11区第2面4便槽（東から）
  - 写真 207 11区第2面4便槽完掘状況（西から）
  - 写真 208 11区第2面5便槽（東から）
  - 写真 209 11区第2面5便槽完掘状況（西から）
- 写真図版 55 11区遺構（4）近代**
- 写真 210 11区第3面（東から）
  - 写真 211 11区第3面（北西から）
- 写真図版 56 11区遺構（5）近代**
- 写真 212 11区第3面西部（北から）
  - 写真 213 11区第3面238鉄管溝（北から）
  - 写真 214 11区第3面238鉄管溝の昭和11年路（1）
  - 写真 215 11区第3面238鉄管溝の昭和11年路（2）
- 写真図版 57 11区遺構（6）近代**
- 写真 216 11区第3面1土管溝（北東から）
  - 写真 217 11区第3面1土管溝完掘状況（北東から）
  - 写真 218 11区第3面240土管溝（北から）
  - 写真 219 11区第3面240土管溝完掘状況（北から）
  - 写真 220 11区第3面202枡・244土管溝（南西から）
  - 写真 221 11区第3面202枡（東から）
- 写真図版 58 11区遺構（7）近代**
- 写真 222 11区第3面第2荷造場（北から）
  - 写真 223 11区第3面第2荷造場東出入口（南から）
  - 写真 224 11区第3面第2荷造場西出入口（北から）
- 写真図版 59 11区遺構（8）中世～近世**
- 写真 225 11区第4面（東から）
  - 写真 226 11区第4面中央部以西（南東から）
  - 写真 227 11区第4面北西部（西から）
- 写真図版 60 11区遺構（9）古代**
- 写真 228 11区第5面（北東から）
  - 写真 229 11区第5面（西から）
  - 写真 230 11区第6面337ピット検出状況（北から）
  - 写真 231 11区第6面337ピット断面（南から）
- 写真図版 61 11区遺構（10）古代**
- 写真 232 11区第6面（東から）
  - 写真 233 11区第6面（北東から）
- 写真図版 62 11区遺構（11）古代**
- 写真 234 11区第6面東部（北から）
  - 写真 235 11区第6面西部（北東から）
  - 写真 236 11区第6面北西部（北東から）
- 写真図版 63 11区遺構（12）古代**
- 写真 237 11区第6面据立柱建物1（北から）
  - 写真 238 11区第6面578ピット断面（南から）
  - 写真 239 11区第6面580ピット断面（南から）
  - 写真 240 11区第6面582ピット断面（南から）
  - 写真 241 11区第6面525・526ピット遺物出土状況（南から）
  - 写真 242 11区第6面674土坑断面（北東から）
  - 写真 243 11区第6面674土坑遺物出土状況（東から）
- 写真図版 64 12区遺構（1）近代**
- 写真 244 12区第1面（北東から）
  - 写真 245 12区第2面（南東から）
- 写真図版 65 12区遺構（2）近代**
- 写真 246 12区第2面（北から）
  - 写真 247 12区第2面（東から）
- 写真図版 66 12区遺構（3）近代**
- 写真 248 12区第2面1建物・3土塁南辺（西から）
  - 写真 249 12区第1・2面2建物（南東から）
  - 写真 250 12区第1・2面2建物（南西から）
- 写真図版 67 12区遺構（4）近代**
- 写真 251 12区第1面2建物東出入口（東から）
  - 写真 252 12区第1面2建物南出入口B（南東から）
  - 写真 253 12区第1面2建物西出入口（北西から）
  - 写真 254 12区第1面2建物西邊床下換気口（西から）
  - 写真 255 12区第2面2建物南辺側溝（南西から）
  - 写真 256 12区第2面2建物断面（北東から）
  - 写真 257 12区第2面4土塁南辺外側（南東から）
  - 写真 258 12区第2面4土塁北辺（北東から）

写真図版 68 12 区遺構（5）近代	写真図版 81 近代以降遺物（7）金属製品（3） ・スレート製品・コンクリート製品（1）
写真 259 12 区第2面5軽便軌道・6軽便軌道（東から）	
写真 260 12 区第2面5・6軽便軌道（西から）	写真図版 82 近代以降遺物（8） コンクリート製品（2）・金属製品（4）
写真 261 12 区第2面5・6軽便軌道分岐部（南西から）	
写真 262 12 区第2面5・6軽便軌道分岐部（東から）	写真図版 83 近代以降遺物（9）金属製品（5）
写真図版 69 12 区遺構（6）中世～近世	写真図版 84 近代以降遺物（10）金属製品（6）
写真 263 12 区第3面（北東から）	写真図版 85 近代以降遺物（11） 布製品・金属製品（7）
写真 264 12 区第3面（南東から）	写真図版 86 近代以降遺物（12）金属製品（8）
写真図版 70 12 区遺構（7）古代～中世	写真図版 87 近代以降遺物（13） コンクリート製品（3）・金属製品（9）
写真 265 12 区第4面（北東から）	
写真 266 12 区第4面（南東から）	写真図版 88 近代以降遺物（14） コンクリート製品（4）
写真図版 71 12 区遺構（8）古代	写真図版 89 近代以降遺物（15） コンクリート製品（5）
写真 267 12 区第4面掘立柱建物1柱穴段下げ状況（北から）	写真図版 90 中世・古代遺物（1）土器（1）
写真 268 12 区第4面掘立柱建物1柱半截状況（北から）	写真図版 91 中世・古代遺物（2） 土器（2）・土製品（1）
写真 269 12 区第4面掘立柱建物1完掘状況（北から）	写真図版 92 中世・古代遺物（3） 土器（3）・土製品（2）
写真図版 72 12 区遺構（9）古代	写真図版 93 中世・古代遺物（4） 土器（4）・土製品（3）
写真 270 12 区第4面78土坑断面（南西から）	写真図版 94 中世・古代遺物（5）土器（5）
写真 271 12 区第4面78土坑遺物・石出土状況（北東から）	写真図版 95 中世・古代遺物（6）土器（6）
写真 272 12 区第4面78土坑遺物・石出土状況（南西から）	写真図版 96 中世・古代遺物（7）土器（7）
写真 273 12 区第4面78土坑完掘状況（南西から）	写真図版 97 中世・古代遺物（8）土器（8）
写真 274 12 区第4面85土坑断面（南東から）	写真図版 98 中世・古代遺物（9）瓦（1）
写真 275 12 区第4面85土坑遺物・石出土状況（南西から）	写真図版 99 中世・古代遺物（10）埴・瓦（2）
写真 276 12 区第4面85土坑遺物・石出土状況（南東から）	写真図版 100 中世・古代遺物（11）瓦（3）
写真 277 12 区第4面85土坑完掘状況（南東から）	写真図版 101 中世・古代遺物（12）石製品（1）
写真図版 73 12 区遺構（10）古代	写真図版 102 中世・古代遺物（13） 石製品（2）・金属製品
写真 278 12 区第4面89壁穴建物断面（北西から）	写真図版 103 木製品（1）近代以降
写真 279 12 区第4面89壁穴建物（北東から）	写真図版 104 木製品（2）古代（1）
写真 280 12 区東壁北部断面（西から）	写真図版 105 木製品（3）古代（2）
写真図版 74 13 区・14 区・15 区遺構	写真図版 106 木製品（4）古代（3）
写真 281 13 区（南から）	写真図版 107 木製品（5）古代（4）
写真 282 14 区（南から）	写真図版 108 木製品（6）古代（5）
写真 283 15 区（南から）	
写真図版 75 近代以降遺物（1）紙製品	
写真図版 76 近代以降遺物（2）便橋跡・土管	
写真図版 77 近代以降遺物（3）瓦	
写真図版 78 近代以降遺物（4）煉瓦	
写真図版 79 近代以降遺物（5）金属製品（1）	
写真図版 80 近代以降遺物（6）金属製品（2）	

# 第1章 調査にいたる経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

今回の報告に関する事業は、公務員宿舎枚方住宅（1期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査である。

公務員宿舎枚方住宅（1期）整備事業の実施方針は、民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）（平成11年法律第117号）第5条第3項の規程により、平成21年7月28日に財務省近畿財務局長により公表された。

この事業目的は、国有財産の有効活用の観点から、京阪神地区に散在している土地の有効活用が図られていない公務員宿舎や老朽化などにより建替えが必要な公務員宿舎を、今回の整備の対象となる本事業の計画地に集約・立体化の上、早急に建替えを行う必要があり、その際、本事業をPFI法に基づき実施することにより、民間の資金、経営能力および技術的能力を活用し、財政資金の効率的な使用を図ろうとするものである。

平成22年3月23日に、PFI事業者選定結果が公表され、入札参加表明のあった7グループのうち、株式会社淺沼組を代表企業とし、株式会社アール・アイ・エー大阪支社と近畿ビルサービス株式会社を構成企業とする、淺沼組グループが落札者として決定された。

上記の実施方針には、事業内容に「埋蔵文化財発掘調査」が盛り込まれ、また、「公共施設等の立地並びに規模及び配置に関する事項」の「立地に関する事項」や「土地に関する事項」の中にも、計画地は文化財保護法に規定される周知の埋蔵文化財包蔵地である禁野本町遺跡に指定されており埋蔵文化財の発掘調査が必要な旨が記されていた。

今回の調査地は、平成15・16年度に行われた公務員宿舎枚方住宅整備事業に伴う禁野本町遺跡発掘調査（以下、本書では、「平成15・16年度調査」とする）地の東側と北側に位置する。平成15・16年度調査では、旧日本陸軍の禁野火薬庫にかかわる遺構、遺物が良好に確認できたほか、弥生時代後期後葉から庄内式期や奈良時代後半から平安時代初頭などの遺構・遺物も確認された。同調査については、（財）大阪府文化財センター調査報告書第140集『禁野本町遺跡』として、平成18年3月に報告書が刊行されている。また、この際の調査地内には、火薬庫の土壘をモチーフにした公園が作られている。これは、土壘の裾にあった石組溝に使用されていた間知石や軽便軌道に使用されていたコンクリート製枕木を再利用し、平和の大切さを訴えるモニュメントとしたもので、調査の際の写真も盛り込んだ案内板も設置されている。

今回の調査に先立ち、財務省近畿財務局を委託機関とし、平成20年2月21日から3月27日まで、枚方合同宿舎埋蔵文化財発掘確認調査業務として、今回の調査地を含む公務員宿舎枚方住宅1期地区と北側の同II期地区において、地下の埋蔵文化財の広がり、遺構面の深度等のデータ採取を行い、当該文化財の保存のために必要な資料を得ることを目的とした確認調査が行われた。その結果、調査対象地南側の主にI期地区では、禁野火薬庫にかかわる整地層や包含層が、比較的良好に残存していることが確認できた。

上記の平成15・16年度に行われた調査により禁野火薬庫に関係する遺構・遺物が良好に遺存する部

分もあることが判明していたことに加えて、この確認調査の結果、禁野本町遺跡の時代については「弥生～中世、その他（近代）」として近代が加えられ、発掘調査の対象となった。

## 第2節 発掘調査の経過

今回の事業について、平成22年4月30日に、財団法人大阪府文化財センターは、株式会社淺沼組との間で公務員宿舎枚方住宅（Ⅰ期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査委託業務の委託契約を締結した。委託期間は、平成22年5月1日～平成24年7月31日である。

また、実施にあたっては、文化財保護法第92条第1項の規定により、平成22年4月19日付け大文セ第4-1号で埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、大阪府教育委員会は、平成21年5月19日付け教委文第12-11号により埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

今回の発掘調査は、調査部調査課調査グループが行った。調査の体制、期間等については、例言に記したとおりである。

現地における本格的な調査に先立ち、平成22年5月18日に、今回の調査区と既設の公務員宿舎住棟（以下、「旧住棟」と記す）のコンクリート基礎が重複する部分について、大阪府教育委員会による立会調査が行われた。また、同日から25日まで、最初に着手した11区（B棟）部分のアスファルトなど表層部分の機械掘削や既設住棟との重複部分の住棟基礎の撤去が行われた。

これらを経て、5月27日から11区の機械掘削に着手した。なお、各調査区とも発掘調査にかかる機械掘削以前に、アスファルトなど表層部分の機械掘削や既設住棟との重複部分の基礎撤去を行った。機械掘削後には人力掘削を行い、禁野火薬庫に関する遺構面を1ないし2面調査した後、禁野火薬庫に関する施設を撤去し、再び重機により禁野火薬庫造成に伴う盛土層やそれ以前の作土層、近世作土層や包含層等を掘削した。そして、人力掘削により、中世以前の遺構面を1ないし4面調査した。各調査区とも調査途中の禁野火薬庫にかかわる遺構面と最終遺構面については、大阪府教育委員会による立会（以下、「府教委立会」と記す）を受けた。

検出した各遺構面では、検出した遺構の図面（平面図・断面図・立面図等）作成をはじめ、遺構面の平面図、調査区の断面図などの作成、遺構・遺構面の写真撮影を行った。なかでも、禁野火薬庫にかかわる遺構面と地山層上面にて検出した最終遺構面については、クレーン撮影による図化作業と高所作業車による写真撮影も行った。

各調査区の機械掘削の開始から人力掘削の終了までの経緯は、調査着手順に次のとおりである（カッコ内は本体工事の構造物の名称）。各調査区の位置は図2（14頁）に掲げる。

### 11区（B棟）〔平成22年5月27日～10月15日調査〕

当区の禁野火薬庫に関する遺構面は、比較的遺存状況が良く、軽便軌道、荷造場などの諸施設を確認した。同面については7月20日に第2回府教委立会を受けた。

ただし、7月23日には、砲弾出土地点について砲弾に鉛成分が含有される可能性が考えられ、この場合土壤汚染が疑われるため当該部分については土壤汚染調査の結果を待たずして調査に着手してはならない、との通達が枚方市公害監視センターよりあった。これは、平成22年4月1日施行の改正土壤

汚染対策法に基づくものである。そのため、11区の北西部については禁野火薬庫に関する遺構面以下の調査を保留し、該当部分以外の調査を行った。

この部分以外の11区について先行して調査を進め、禁野火薬庫に関するコンクリート類の撤去後、禁野火薬庫以前の作土層などを重機で除去し、人力掘削を再開した。9月10日には最終遺構面について第4回府教委立会を受けた。

なお、上記の汚染土壤が疑われる箇所についての土壤採取作業は9月9日に行われ、9月22日に掘削可能となった旨の回答を得て、速やかに調査を行った。10月6日に最終遺構面について第5回府教委立会を受け、10月15日に調査を終了した。

#### 7区（E棟）〔平成22年6月7日～8月10日調査〕

旧住棟および同撤去時の搅乱が調査区の広範囲におよび、遺構面が残存する部分はきわめて少なかつた。

7月8日に禁野火薬庫にかかる遺構面で第1回府教委立会を受け、その後8月10日の第3回府教委立会で最終状態を確認された。

#### 6区（集会所）〔平成22年6月14日～7月8日調査〕

当初設計以降に形状変更が行われ、これに即して調査を行った。しかし、7区以上に旧住棟および同撤去時の搅乱の範囲が広く、遺構面の遺存状況は悪かった。

7月8日に第1回府教委立会を7区とともに受け、同日で調査を終了した。

#### 9区（C棟）〔平成22年6月17日～10月26日調査〕

土壌の基礎や軽便軌道などが検出された禁野火薬庫にかかる遺構面については、8月10日に第3回府教委立会を受けた。その後、11区と同様にコンクリート撤去等の作業を経て下層の調査を行った。

最終遺構面において調査区東側で多くの遺構が検出され、とくに9区東端で南北に並ぶ柱列が掘立柱建物を構成するものと推定されたため、10月6日の第5回府教委立会において東側へ調査区を拡張し柱穴の分布状況を確認するよう指示があった。これを受け調査区の拡張を行った結果、東側柱列が検出され、南北方向を主軸とする桁行5間・梁行2間の掘立柱建物と確定できた。この建物について、10月22日の第6回府教委立会では、遺構の養生と位置の明示を行った上で埋め戻すよう指示があり、これに従い埋め戻しを行った。この養生した上で埋め戻した部分については、11月5日の第7回府教委立会の際に確認を受けた。

#### 5区（調整池）〔平成22年7月20日～11月26日調査〕

7月20日から開始した機械掘削は中断をはさみつつ8月19日までで終了したが、9区と11区の人力掘削を優先したため、5区の人力掘削は10月13日の開始となった。10月22日には、禁野火薬庫に関する遺構面について第6回府教委立会を受けた。5区は掘削深度が設定されており、調査区東側については禁野火薬庫にかかる遺構面の段階で掘削限界に達した。その後コンクリート類を撤去して下層の調査を行い、11月15日には最終遺構面について第8回府教委立会を受けた。

5区の最終遺構面では、豊穴建物などの遺構が確認され、クレーン撮影後にも豊穴建物床面以下の記録作業等を続行し、最終的に11月26日までに調査を終了した。

#### 8区（D棟）〔平成22年8月20日～23年1月28日調査〕

8区西側のD1棟部分については8月20日から機械掘削を開始した。この段階で、8区東側のD2棟部分は現地表面に残る貯水槽が撤去できなかつたため、D1棟部分のみの機械掘削にとどまった。

貯水槽の撤去後の 10 月 27 日から D 2 棟部分の機械掘削を行った。8 区は、今回の調査地内では禁野火薬庫に関する遺構が良好に遺存していた。11 月 15 日には禁野火薬庫に関する遺構面について、第 8 回府教委立会を受けた。11 月 18 日から 25 日まで、禁野火薬庫のコンクリート基礎などの解体撤去と機械掘削を行った。

その後、下層の調査を行い、地山面では総柱の掘立柱建物や井戸など、古代の遺構を多数検出した。同面については、平成 23 年 1 月 19 日に第 10 回府教委立会を受けた。遺構の完掘作業や記録作業等を継続し、最終的に 1 月 28 日まで調査を終了した。

#### 2 区・2 - 2 区・3 区・4 区（土壤）〔平成 22 年 11 月 5 日～11 月 9 日調査〕

これらの調査区は、水銀による汚染土壤が存在する箇所であったが、改正土壤汚染対策法に対応して、計画段階と調査実施段階で汚染土壤に対する方策が変化しており、明らかな汚染土壤の除去は当然ながら、その下部にある措置範囲土壤において当該層を対象とした発掘調査が行えるのか否かについて解釈の不一致があった。平成 22 年 10 月 25 日の枚方市公害監視センターと淺沼組との協議において、土壤汚染対策として汚染土壤およびその下部の措置範囲土壤は、ともに汚染深度内の土壤であるとの見解が示された。なお当初設計時よりも汚染土壤撤去箇所で掘削深度が包含層まで達する調査対象部分が 1 箇所増え、この調査区については 2 - 2 区と呼称することとした。

これらの協議などを踏まえ、11 月 5 日の第 7 回府教委立会で、汚染土壤を撤去した段階で包含層の途中もしくは地山層直上程度であった 2 - 2 区と 3 区については、汚染土壤撤去後の掘削底面の精査を行い、顕著な遺構が存在した場合のみクレーン撮影を実施し、これ以外の 2 区と 4 区も含め主要部分の断面図を作成するように指示があった。この指示を受け、2 - 2 区・3 区の平面精査を行ったが、顕著な遺構は存在しなかった。これらの各調査区は、断面図を作成し 11 月 9 日までで調査を終了した。

#### 10 区（A 棟）〔平成 22 年 11 月 15 日～23 年 5 月 16 日調査〕

10 区は調査地場内へのゲートと進入路にあたるため、調査が先送りされていた。ようやく 11 月 15 日から数日間、一部で機械掘削を行った。この後、しばらく中断をはさみ、12 月にも断続的に機械掘削が実施された。最終的に年が明けた平成 23 年 1 月 25 日のゲートの切り替えを待ち、全域の機械掘削を行い、27 日までに機械掘削を終了した。

2 月 2 日に禁野火薬庫に関する遺構面について第 11 回府教委立会を受け、同日に 10 区の A 1 棟部分についてクレーン撮影を行った。また、A 2 棟部分は 2 月 4 日にクレーン撮影を行った。10 区は昭和 14（1939）年の禁野火薬庫の爆発前後とも遺構面が良好に残存していたので、この爆発後の面をクレーン撮影の対象としたが、その後爆発時およびそれ以前の禁野火薬庫にかかる遺構面の調査もこの後に行つた。同面の調査は A 2 棟部分で 2 月 18 日まで、A 1 棟部分は 25 日まで調査を終了し、引き続き機械掘削を行つた。ただし、A 1 棟の一部は、土壤汚染のため掘削できない箇所があった。この土壤汚染範囲については、3 月 18 日の第 13 回府教委立会の際に、汚染土壤の撤去はやむをえないが、範囲周辺の調査で顕著な遺構が存在した場合には、可能な限り調査を行うよう指示を受けた。

土壤汚染範囲以外は、地山面までの調査を進め、A 1 棟部分は 3 月 30 日に第 14 回府教委立会を受け、4 月 7 日にクレーン撮影を行い、翌日には一部を除き調査を終了した。

上記の汚染土壤範囲については、4 月 22 日の第 16 回府教委立会の際に、対象箇所の周辺では顕著な遺構が検出されなかったことと、枚方市公害監視センターからの土壤撤去許可が下りるのが 5 月中旬以降という見通しを報告した。府教委からは、汚染土壤撤去の許可が下りた後に、この範囲については

できうる限り最終遺構面で汚染土壌の除去作業を中断し、記録を作成し、それをもって調査を終了してよい旨指示を受けた。

他方、A 2 棟部分は地山面より上面の第4面で古代の遺構が多数検出された。この遺構面については、3月5日開催の現地説明会の対象としたため、3月2日に同面について調査途中の検出面について府教委に確認を得て、現地説明会後の3月18日に第13回府教委立会を受けた。その後、地山面までの調査を行い、4月20日にクレーン撮影を行い、22日に第16回府教委立会を受け、27日までに調査をおおむね終了した。

さらに、汚染土壌のため調査が保留されていたA 1 棟部分の一部を5月16日に補完調査し、現地での調査を完了した。

#### 1区（道路・ガス管）〔平成22年12月1日～23年3月2日調査〕

道路部分については、掘削限界が設定されていた。この予定掘削深度までを重機にて掘削したが、盛土層中で掘削限界に達した。12月3日に第9回府教委立会を受け、6日までに掘削を完了した。

道路部分の調査が終盤に差し掛かった頃、その下層にガス管を埋設するための調査が追加された。ガス管部分の調査は、その敷設部分のみで幅約0.4m、深さ約1m、延長151mの細長いもので、大部分については平成23年1月13日までで調査を終了し、1月19日に第10回府教委立会を受けた。

その後も、補完的な調査を行い、最終的に3月2日までで調査を終了した。

#### 8・2区・9・2区・10・2区（防火水槽）〔平成23年1月5日～3月30日調査〕

設置位置が未確定だったもののうち、3箇所の防火水槽の調査を平成23年正月明けから開始した。調査区名については、上記の住棟の調査区に隣接することからその近接する調査区に枝番をつけることとし、8区の北西に接する防火水槽Dは8・2区、9区の北西に位置する防火水槽Cは9・2区、10区の南東に接する防火水槽Aは10・2区とそれぞれ呼称した。いずれの調査区も1月6日まで機械掘削を終了し、人力掘削に移行した。

8・2区の最終遺構面と9・2区・10・2区の禁野火薬庫に関する遺構面について、1月19日に第10回府教委立会を受けた。8・2区はこれで調査を終了した。

9・2区・10・2区は、いったん埋め戻しをした上で、H鋼を打設し、調査終了部分を再度機械掘削しつつ横矢板を設置し、人力掘削を行った。両調査区は、3月30日に第14回府教委立会を受け、調査を終了した。

#### 12区（立体駐車場）〔平成23年1月31日～4月20日調査〕

12区では、発掘調査に先行して既存の住棟基礎の撤去および表層掘削を平成23年1月18日までに行なった。1月31日から2月7日までは、機械掘削を行なった。12区には禁野火薬庫に伴う遺構面が良好に残存していた。2月16日にその面のクレーン撮影を行い、18日に第12回府教委立会を受けた。同面の遺構の記録などを23日までに終え、コンクリート基礎類の解体や機械掘削へ移行した。

その後、人力掘削にて地山面までの調査を行い、4月13日に第15回府教委立会を受け、15日にクレーン撮影を行なった。最終的に、20日までに全ての調査を終了した。

#### 13区・14区・15区（管路・人孔）〔平成23年4月13日～4月15日調査〕

調査地内に多数予定されていた人孔・管路については、平成23年3月18日の第13回府教委立会の際に、8区と12区との間に予定されている人孔および9区西方に予定されている複数の人孔については、個々に調査するのは困難かつ非効率なので、一連の調査範囲として調査し、工事影響深度で調査

を終了してよい旨指示を受けた。

その後、4月中旬に管路と人孔の位置が確定した。調査箇所は結果的に3箇所で、これらを13・14・15区とした。いずれも4月13日に機械掘削を行い、即日、第15回府教委立会を受け、搅乱のみの部分は現状で調査を終了してよいが、14区の禁野火薬庫にかかる遺構が残存する部分については、これらの調査を行った上で調査を終了してよい旨指示を受けたので、15日に測量や写真撮影などの記録をし、調査を終了した。

以上のように、現地における発掘調査の実働期間は、平成22年5月27日から平成23年5月16日までであった。諸施設や住棟を建設する本体工事も平行して行われていたが、平成23年1月からは一層本格化し、7区（E棟）の住棟部分の杭打ちも開始された。

その後の発掘調査期間中には11区（B棟）、9区、（C棟）、8区（D棟）と建築工事も進展し、これに沿つて遺跡調査に伴う通路や掘削土置場の変更についても、現地において随時連絡・調整が行われた。

また、発掘調査中には、平成22年6月11日の11区での出土を皮切りに、ほぼ原形を保つ砲弾が計237点（1区：1点、9区：1点、10区：224点、11区：11点）出土した。これらは、出土のたびに淺沼組から枚方警察署、大阪府警察本部、枚方市危機管理室など関係諸機関への連絡が行われ、速やかに警察へ引き取られた。多数の砲弾が出土した平成23年3月11日には、警察とともに陸上自衛隊第103不発弾処理隊の出動があり、自衛隊に引き取られた。

発掘の成果報告等として、調査中の平成23年1月30日には、当センター主催、枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会共催の「発掘・復元・検証 いま、よみがえる枚方の20世紀」にて、調査成果のうちとくに禁野火薬庫についての発表を行った。次いで、2月19日には、枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会主催、当センター共催の「歴史シンポジウム 交野ヶ原と平安貴族」にて、古代の調査成果について発表を行った。さらに、3月5日には枚方市教育委員会の百済寺跡調査と財団法人枚方市文化財研究調査会の禁野本町遺跡調査と合同で、「特別史跡百済寺跡・禁野本町遺跡発掘調査合同現地説明会」を行い、234名以上の参加を得た。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

禁野本町遺跡は、大阪府枚方市禁野本町一・二丁目、中宮北町、中宮本町に所在する（図1）。枚方市は、大阪府の北東部、淀川左岸、大阪市と京都市のほぼ中間地点に位置する。旧河内國の最北部にあたる。市域は、東西約12km、南北約8.7kmの広がりをもち、面積65.08km<sup>2</sup>、人口約41万人で、府内の市町村で面積は9番目、人口は4番目である。

枚方市域は、東側が生駒山地の北西端に接することから、巨視的に見ると、市域の南東部の山地が最も高く、北西の淀川左岸の沖積地へ向かって下がる地形である。北東から南西にかけて、男山丘陵、長尾丘陵、交野台地、枚方丘陵といった丘陵や段丘が占める。それらの間に生駒山地から流れ下る船橋川、穂谷川、天野川が開析し、市域の北西側を琵琶湖から大阪湾に流れ下る淀川に注いでいる。

禁野本町遺跡は、天野川北岸、交野台地の北西端部に位置する。今回の調査地の標高はおよそT.P.+29～31mで、南東から北西にゆるやかに傾斜している。一方、調査地の西方は、部分的に急傾斜地の危険箇所や被害地域に指定されるほどの段丘崖になっている。今でもその際に立ち西を望むと、手前に淀川を、その背後には摂津の山並みや大阪平野に広がる街並みを望むことができる。

#### 参考文献

井上正雄 1922『大阪府全誌 卷之四』清文堂出版株式会社（複刻）

高谷好一・市原実 1961『枚方丘陵の第四紀層』『地質学雑誌』第67卷第793号 日本地質学会

枚方市史編纂委員会編 1967『枚方市史 第一巻』枚方市役所

有限会社平凡社地方資料センター編 1986『日本歴史地名大系第28巻 大阪府の地名』平凡社

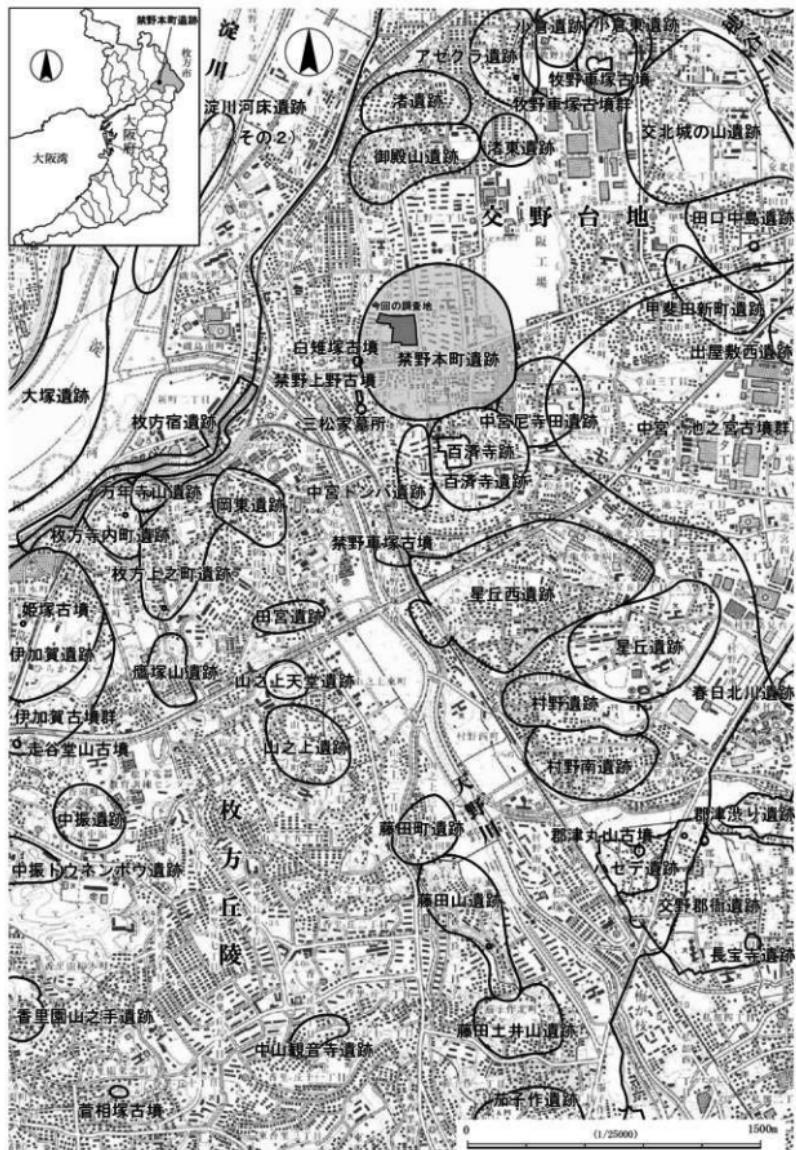
### 第2節 歴史的環境

図1に掲載した範囲の遺跡を中心に記述する。

**旧石器時代** 穂谷川流域の交北城の山遺跡や、禁野本町遺跡の南方に位置する星丘遺跡、星丘西遺跡、村野遺跡で、後世の包含層などに混入したナイフ形石器や舟底形（角錐状）石器が採集されているが、明確な遺構は検出されていない。枚方丘陵上の茄子作遺跡でも、国府型ナイフ形石器が確認されている。

**縄文時代** 交北城の山遺跡では、後・晚期の土器や石剣・石棒が出土したほか、晚期の大型深鉢を埋納した遺構が3箇所検出された。淀川に面した淀川河床遺跡（その2）からは、少量ながら各時期の土器などが採集されている。天野川流域の岡東遺跡や茄子作遺跡からも、晚期の土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡が増えた。交野台地において弥生集落は前期に出現し、中期後半から後期にかけて枚方丘陵や長尾丘陵にも営まれるようになる。穂谷川流域の交北城の山遺跡では、中期の42基の方形周溝墓と9棟の竪穴建物が検出された。天野川流域の星丘西遺跡では、前期の土器が出土し、中・後期には集落や方形周溝墓が検出されている。集落の範囲は後期には東に接する星丘遺跡にも広がり、古墳時代前期まで存続する。村野遺跡や藤田山遺跡などでも中期の竪穴建物が確認されている。



この地図は、国土地理院が平成14年に発行した『牧方』1:25000とともに作成した國に大阪府地図情報提供システムの埋蔵文化財道路範囲を加筆したものである。

図1 遺跡位置

後期には集落が急増する。天野川右岸の禁野本町・星丘西・星丘・村野・村野南、左岸の鷹塚山・山之上天堂・藤田山・藤田土井山・茄子作の各遺跡で竪穴建物が検出されている。鷹塚山遺跡では、竪穴建物の内部からベッド状遺構や二連竈と思われる遺構が検出され、小型重圓文仿製鏡や分銅形土製品なども出土した。山之上天堂遺跡では、平面形が六角形や隅丸方形の竪穴建物が検出されている。

後期後半の天野川流域では、星丘西遺跡に柳葉形鉄鎌を副葬する大型木棺墓、鷹塚山遺跡に楕円形のマウンドを持つ木棺墓、茄子作遺跡に墓前祭祀用大溝が付随する方形周溝墓などが築かれる。中宮ドンバ遺跡や中宮・池之宮古墳群では、弥生時代後期末から終末期の埴丘墓がみられる。

禁野本町遺跡では、第47次調査で後期の土器が出土し、第1・3次調査で終末期から古墳時代前期の竪穴建物などが、平成15・16年度調査でも円形の竪穴建物が検出された。

**古墳時代** 天野川流域の前期古墳としては、万年寺山古墳、禁野車塚古墳、藤田山古墳などがある。禁野車塚古墳は天野川右岸に築かれた全長120mの前方後円墳で、近年の測量調査によって奈良県桜井市の箸墓古墳と墳形が相似形であることが確認された。また、穂谷川左岸の台地上に立地する全長107.5mの前方後円墳である牧野車塚古墳は中期古墳とされていたが、前期に遡ることが判明した。

中期には、古墳分布の中心は穂谷川流域に移る。

後期には、禁野本町遺跡の南西に禁野上野古墳や白雉塚古墳が築かれる。後者は前方後円墳の可能性もあり、片袖式の畿内型横穴式石室を持つ。石室内壁に赤色顔料が塗布され、鉄刀・鉄鎌・馬具などが出土した。

後期末から飛鳥時代初頭には、小倉東古墳群のような木棺直葬主体の低埴丘墓が牧野車塚古墳の周辺部に群集して築かれるようになる。

集落遺跡は、弥生時代後期中頃から引き続き増加傾向にあり、古墳時代前期には天野川流域の星丘遺跡、穂谷川流域では交北城の山遺跡、小倉東遺跡、田口中島遺跡などで集落が営まれるようになる。中期の交北城の山遺跡や茄子作遺跡などからは、韓式系土器が出土している。後期の集落には星丘遺跡、藤田町遺跡、中振ドウネンボウ遺跡などがあり、柱穴や掘立柱建物などが検出されている。

禁野本町遺跡でも、第1次調査で後期の円墳の周濠、12次調査で後期の柱穴、平成15・16年度調査で掘立柱建物や竪穴建物が見つかっている。

**古代** 禁野本町遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけての遺跡が比較的多く分布している。百濟寺跡、百濟寺下層寺院、中山觀音寺遺跡には、建物基壇などからなる古代寺院跡がある。百濟寺跡に隣接する禁野本町・百濟寺・中宮尼寺田・中宮ドンバの各遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物の柱穴が比較的大きく、この一带に百濟王氏関連の集落が形成されていた状況が想定されている。アゼクラ遺跡、田口中島遺跡、甲斐田新町遺跡からも、古代の遺構・遺物が見つかっている。

禁野本町遺跡の南に接する百濟寺跡は、8世紀後半に創建されたと考えられている百濟王氏の氏寺である。両遺跡は位置・遺構・遺物とも密接な関係を有する。ただし、百濟寺遺跡第27・44・54次調査において百濟寺創建以前と考えられる掘立柱建物が検出され、百濟寺南遺跡第1・22次調査では白鳳期の複弁蓮華文軒丸瓦や須恵質の鶴尾片が出土していることから、百濟寺に先行する寺院の存在も想定される。禁野本町遺跡でも、第103次調査の8世紀前半ないし中頃の井戸から「大領」銘木簡が出土し、当遺跡内に郡衙が存在した可能性が示唆される。すなわち、百濟王氏が難波から移動していく前から、当地の開発が進みつつあったと推定できる。

百濟王氏は、齊明天皇6(660)年に百濟が新羅と唐の連合軍により滅ぼされた際に、日本に亡命、

帰化した百濟の王族で、亡命後朝廷に仕えた。『日本書紀』によると、天智天皇3（664）年に難波に居住地を賜り、持統天皇の時に百濟王の氏族名を賜ったという。その後、百濟王氏は交野の地に移住する。『続日本紀』に、百濟王敬福が大仏造立に際して聖武天皇に陸奥の金を献上し、これにより天宝勝宝2（750）年に河内守に任せられたという記述があり、百濟王氏が居所を難波から交野郡に移したのはこの頃と考えられる。

百濟寺が初めて文献に見えるのは、『続日本紀』延暦2（783）年10月16日条である。桓武天皇の交野行幸に関連して、「百濟王などの行在所に共奉せる者一両人に階を進め爵を加う。百濟寺に近江・播磨二国の正税各五千束を施す。」とある。正税が施入されていたこと、また出土瓦の中に、吹田市吉志部瓦窯から出土した平安京と同範の瓦が存在することから、この時期に百濟寺が官寺的な扱いを受けていたことが考えられる。

発掘調査成果などからも、百濟寺の創建は8世紀後半と考えられている。寺域は約140m四方で、伽藍主軸方位は座標北から約5度西に偏る。南門から発した築地大垣で囲まれ、中門から連なる回廊は東西両塔を囲んで金堂に取り付き、金堂の北側に講堂、食堂が配置される。このような双塔式伽藍配置は、朝鮮半島の統一新羅時代の感恩寺に類例があり、渡来氏族に相応しいものであるとされる。また、百濟寺跡は、埴上積基壇を採用し、四面に築地大垣を巡らせ、中門・南門の他に北門も備え、東面回廊の東側に別院も設けられるという中央寺院と比較しても遜色のない整備が施されており、このような点からも百濟寺が官寺に準じる寺院として重要視されていた様子が伺える。

禁野本町遺跡では、第1・5・6・12・69・71・100・103・129・148次および平成15・16年度調査などで、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が見つかっている。これら掘立柱建物の中には、柱穴が一般の掘立柱建物に比べて大きいものがある。第69・103次調査では、南北方向の道路状遺構が確認され、この遺構が500m南に位置する百濟寺跡の伽藍中軸線上に一致することが判明した。さらに、この南北道路に交差する東西道路や、南北道路に軸方位を描えて配置された掘立柱建物、井戸、方形区画域などが検出された。方形区画域は一辺長100m余の溝を外郭としており、内側には一辺27mの溝で囲まれた内郭が存在し、内郭・外郭の四辺の各中央に出入り口を備えていたと想定されている。このような特殊な構造と規模から、『続日本紀』記載の延暦4（785）年と延暦6（787）年に桓武天皇が交野で行った天神を祭る祭祀「吳天祭祀」の関連遺構、あるいは同書に登場する交野行幸に関わる遺構の可能性が指摘されている。

出土遺物も豊富で、土師器・須恵器をはじめ、瓦、木簡、墨書き土器、縁釉陶器、円面鏡、折敷、木製品、馬骨などがある。平成15・16年度調査では、百濟寺跡と同範の軒丸瓦が出土し、長岡京内の鞆岡廃寺との同範瓦も確認されている。第103次調査では、「大領」「池井里」「□冊束代□」「田三段」「□三段内」「阿□弥女」「字遅マ連秋□□」「肥人」「□麻呂」といった地名、人名、稻の収納、田畠経営などに関する内容が書かれた木簡や木簡削屑群が出土しており、記録文書作成が日常的に行われていたことを示唆する。墨書き土器には「大領」「少家」「□家」「真山」「T」字状のものがある。

『続日本紀』や『日本後記』には、奈良時代後半から平安時代の初めにかけて、桓武天皇や嵯峨天皇がたびたび交野に行幸し、遊獵していたことが記されている。禁野本町遺跡の周辺には、文德天皇の第一皇子惟喬親王の別荘である諸院があり、親王も遊獵や遊楽に訪れていたようである。また、藤原俊成の「またや見ん交野のみ野の桜がり花の雪ちる春のあけぼの」など多くの和歌にも詠まれている。

文献史学によれば、当遺跡周辺が一般的狩獵を禁ずる天皇の遊獵地であったことに由来する立ち入

りを禁ずる「禁野」となるのは 10 世紀前半と推定されている。10 世紀後半には百濟王氏は没落し、その頃から禁野本町遺跡とその周辺では遺構・遺物が希薄になる。

**中世** 鎌倉時代以降、禁野本町遺跡周辺の遺跡では遺構が減少するが、中宮尼寺田遺跡で柱穴や溝状遺構、中宮ドンバ遺跡で溝、井戸、池状遺構、土坑などが検出されている。

鎌倉時代中期以降、農村において、農業や手工業の発展につれて農産物加工品や手工業生産物などの特産物が産出され、農民たちによって商品として売り出されるようになった。これにより、古代以降調庸物や年貢物の運送路として瀬戸内海と京都を結んできた淀川は、商品輸送路としての性格も強めた。流通経済が発展したことに伴い、淀川沿いにも船から関料（通行料）を徴収するための関所が設置された。禁野周辺にも、讃岐国善通寺や興福寺の修造費用を徴収するための関所などが設けられた。

**近世** 豊臣秀吉は大坂と伏見に築城の後、文禄 5（1596）年、淀川の治水対策と伏見と大坂間の交通路を整備するために、いわゆる文禄堤を築造させた。この文禄堤をもとに京都と大坂を結ぶ京街道が整備され、禁野本町遺跡から天野川をはさんで西側には、岡新町・岡・三矢・泥町の 4 村から成る枚方宿が設けられた。枚方宿遺跡では、発掘調査により、文禄堤の両側に盛土をしてその上に枚方宿の町家を構築していた様子が確認されている。

商品経済の発展につれて、淀川の水運は物資流通の面からより一層重要性を増した。淀川は、大坂と京都という二大消費地を結ぶだけでなく、日本海側や東海地方の物資が琵琶湖の湖上交通を利用して大津へと運ばれた後、京都から大坂へと運搬される交通路でもあった。江戸時代の淀川には、物資を運搬する船はもとより、旅客を乗せて京都と大坂間を行き来する三十石船や、船の乗客や船頭に飲食物を売っていた茶船（くらわんか船）をはじめ多くの船が往来していた。

**近現代** 明治維新の後、現在の枚方市域の村の多くは大阪府、河内県、堺県の管轄となり、再び大阪府に属した。禁野本町遺跡を含む禁野村は、明治 22（1889）年 4 月 1 日の町村制施行に際し、旧牧野郷に多くが属する周辺 9 村と合併し交野郡牧野村大字禁野となった。明治 29（1896）年 4 月 1 日には茨田郡と交野郡と讃良郡が合併して北河内郡となり、昭和 10（1935）年 2 月 11 日には牧野村と招提村が合併し殿山町になった。昭和 13（1938）年、殿山町が枚方町など計 6 町村と合併し枚方町となり、昭和 22（1947）年 8 月 1 日には市制が施行された。平成 13（2001）年 4 月 1 日には特例市となり、今日の枚方市に至っている。

この禁野の地において、陸軍は火薬庫設置のために明治 29（1896）年から土地の買収に着手し、明治 30（1897）年 4 月、禁野本町一带に砲兵第二方面本署禁野出張所を開設した。施設の名称は、同年 9 月に大阪陸軍兵器本廠禁野彈薬庫、明治 36（1903）年に大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫、1936（昭和 11）年頃に大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫、昭和 15（1940）年には大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠へと変遷する。ただし、一般的に禁野火薬庫と通称されており、本報告でも基本的に禁野火薬庫と称する。

禁野の地に火薬庫が築かれた理由は、「禁野火薬庫ノ沿革」（1925 年）には「記録ナキヨ以テ不明」とある。しかし、淀川上流の宇治火薬庫と下流の大坂城内にある砲兵第二方面本署との中間地点に位置することから、水運に便利で、かつ、高燥の地として選ばれたようである。

禁野火薬庫では、大きな爆発事故が 2 度発生している。一度目の爆発は、明治 42（1909）年 8 月 20 日であった。2 号清涼火薬庫内のダイナマイトに続き、隣接する 1 号乾燥火薬庫でも相次いで爆発し、施設の大半が倒壊した。幸い死者はなかったが、兵士 4～5 名と民間人 10 名が負傷し、周辺の約 1500 戸に被害がおよんだ。この爆発後、防爆対策のため大規模に土地買収が行われた。その目的は、「鉄

砲火薬類取締法施行細則」にうたわれた火薬庫と人家との間に 50 間以上の距離を確保するためであったよう、拡張された範囲に施設が築かれることは当面はなかった。今回の調査地の東部は、この時期に拡張された敷地内に相当する。

他方、明治時代末から大正時代初期には、それまでの水運に不都合が生じた模様である。大正 5 (1916) 年の「禁野弾薬庫道路拡張ノ件」によれば、その解決策として表門から京街道までの道路拡幅が行われ、京街道を経て淀川沿いの伊加賀（禁野火薬庫の南西約 3 km）に至りここからの水運を利用するようになった。昭和 5 (1930) 年には枚方大橋の完成により、東海道本線の高槻駅から鉄道を利用して方法に変化する。これに対応して、昭和 18 (1933) 年頃からは、さらに、大規模な用地買収と火薬庫内施設の新設工事が行われるようになる。さらに、昭和 11 (1936) 年には片町線の津田駅から火薬庫に至る専用線建設が完成し、火薬庫構内と鉄道線路が直結した。

二度の大規模な爆発事故は、昭和 14 (1939) 年 3 月 1 日午後 2 時 45 分頃に発生した。砲弾の爆発をきっかけに計 29 回の大爆発が生じ、その爆発音は京阪一帯に響き渡った。炎は禁野、中宮、渚、磯島、三矢、岡などの近隣の集落にまで及び、翌 2 日午前 3 時ごろようやく鎮火した。爆風による倒壊や半壊も多く、死者 94 名、重軽傷者約 550 名を出す大事故となった。事故翌日の朝日新聞は「破れるような爆発音に耳をつんざく」と伝えている。事故報告にある「事故発生直以前ニケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、敷地内で多数の爆発穴が生じたことが記されている。

陸軍は爆発後の復旧整備を昭和 16 (1941) 年まで行い、敷地の 3 分の 2 は枚方製作所に譲渡、残りは未填薬弾丸庫・薬莢類倉庫として使用した。太平洋戦争の戦況悪化につれて、禁野火薬庫に貯蔵する弾丸類の近隣への分散疎開も行われた。昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日の終戦により施設の稼動は停止した。その後、しばらくは分散格納した薬弾・薬莢の処理が続けられた。

戦後の昭和 21 (1946) 年から昭和 42 (1967) 年まで、禁野火薬庫の一部と枚方製造所の西半は大阪大学工学部の枚方学舎として利用された。枚方製造所の東半は昭和 27 (1952) 年に小松製作所（現コマツ）に払い下げられ、以後工場用地として活用されている。

禁野本町遺跡では、第 1 次調査で防空壕や地下倉庫が検出された。その後の調査では、ピットや溝、井戸といった遺構が散見される程度であった。しかし、今回の調査地の西側に隣接する平成 15・16 年度調査地では、禁野火薬庫に関連するものとして、火薬試験場、1～4 号火工場、倉庫、乾燥火薬庫、石組溝、貯水池、軽便軌道などの遺構や、砲弾、煉瓦、枕木、犬釘、土管、ヒューム管、工具、道具類などの遺物が多数発見され、戦争遺跡として注目されることとなった。

#### 参考文献

- 竹内理三ほか編 1983『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店  
財团法人大阪府文化財センター編集・発行 2006『禁野本町遺跡』(財) 大阪文化財センター調査報告書第 140 集  
財团法人大阪府文化財センター編集・発行 2011『シンポジウム 発掘・復元・検証 いま、よみがえる枚方の 20 世紀』  
財团法人枚方市文化財研究調査会編集・発行 1988『図録・枚方の遺跡』  
財团法人枚方市文化財研究調査会編集・発行 2009『図録 考古資料でみる枚方の歴史』  
枚方市史編纂委員会編 1972『枚方市史 第二巻』枚方市  
枚方市史編纂委員会編 1977『枚方市史 第三巻』枚方市  
枚方市史編纂委員会編 1980『枚方市史 第四巻』枚方市  
枚方市史編纂委員会編 1995『枚方市史 別巻』枚方市  
枚方市教育委員会編集・発行 2004『楽しく学ぶ 枚方の歴史』  
枚方市教育委員会・(財) 枚方市文化財研究調査会編集・発行 2011『歴史シンポジウム 交野ケ原と平安貴族』

## 第3章 調査・整理の方法

### 第1節 調査の方法

**調査区の位置** 禁野本町遺跡 10 - 1 調査区は、禁野本町遺跡範囲内の西部、大阪府枚方市禁野本町二丁目に位置する（図1）。

**調査区の呼称** 「禁野本町遺跡」の後の「10」は、受託契約初年度である2010（平成22）年度の下2桁、次の「- 1」はその年度の当遺跡内の工事発注の順を表す。

今回設定された調査区（図2）は、道路・ガス管部分（1区）、汚染土壌撤去部分4箇所（2区・2・2区・3区・4区）、調整池部分（5区）、集会所部分（6区）、住棟部分5箇所（7区：E棟、8区：D1棟・D2棟、9区：C棟、10区：A1棟・A2棟、11区：B棟）、住棟に隣接する防火水槽部分3箇所（10 - 2区：防火水槽A、9 - 2区：防火水槽C、8 - 2区：防火水槽D）、立体駐車場部分（12区）、人孔および管路部分3箇所（13区・14区・15区）である。これらは、上記の「10 - 1」に続けてそれぞれの調査区番号（たとえば、住棟E棟であれば7区なので「- 7」）を付け、「禁野本町遺跡 10-1-7」のように表示する。

**方位** 国土座標軸の座標北を採用した。調査時、遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ6°38'、真北より西へ0°10'振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面（T.P.）を適用した。T.P.と大阪湾最低潮位（O.P.）とは、T.P.+0.0 m = O.P.+1.3 mの関係にある。

**地区割り** 当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年）に定められた方法で地区割りを行った（図3）。世界測地系（2002年4月以降）に準拠し、調査対象地にメッシュをかける方法である。

当センターが調査領域とする大阪府内は、平面直角座標系の第VI座標系の範囲内である。

大阪府の南西端は、第VI座標系のX=192,000 m・Y=-88,000 mにあたる。

第I区画は、そこを基点とし大阪府全域を南北（縦）6 kmごとにA～Oに、東西（横）8 kmごと0～8に分割したもので、1/10000地形図の範囲に相当する。今回の調査範囲は「K 7」。

第II区画は、第I区画を南北（縦）1.5km、東西（横）2 kmごとに各4分割、すなわち16等分したもので、1/2500地形図（都市計画図）の範囲に相当する。第II区画は、南西端を1とし、東へ4まで、1から順に北に5・9・13、北東端を16と平行式に表示する。今回の調査範囲は「1」。

第III区画は、第II区画内の北東端を基点とし、1辺100 mの正方形に、南北（縦）をA～Oの15に、東西（横）を1～20に区画したもの。今回の調査範囲は「13 A・13 B・13 C・14 B・14 C・15 B」。

第IV区画は、第III区画内の北東端を基点に、南北（縦）をa～jの15に、東西（横）を1～20の1辺10 mの正方形に区画したもの。表示は横・縦の順に「8 d」等。

したがって、今回の調査範囲の内10 × 10 mグリッドは、「K 7（第I区画）- 1（第II区画）- 13 B（第III区画）- 8 d（第IV区画）」等と表示される。第I・II区画の「K 7 - 1」は全域共通なので、図2には第III・第IV区画名を表示した。第IV区画が、遺物取り上げ等の基本単位となる。

**面と肩の呼称法** 調査区ごとに、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付した。

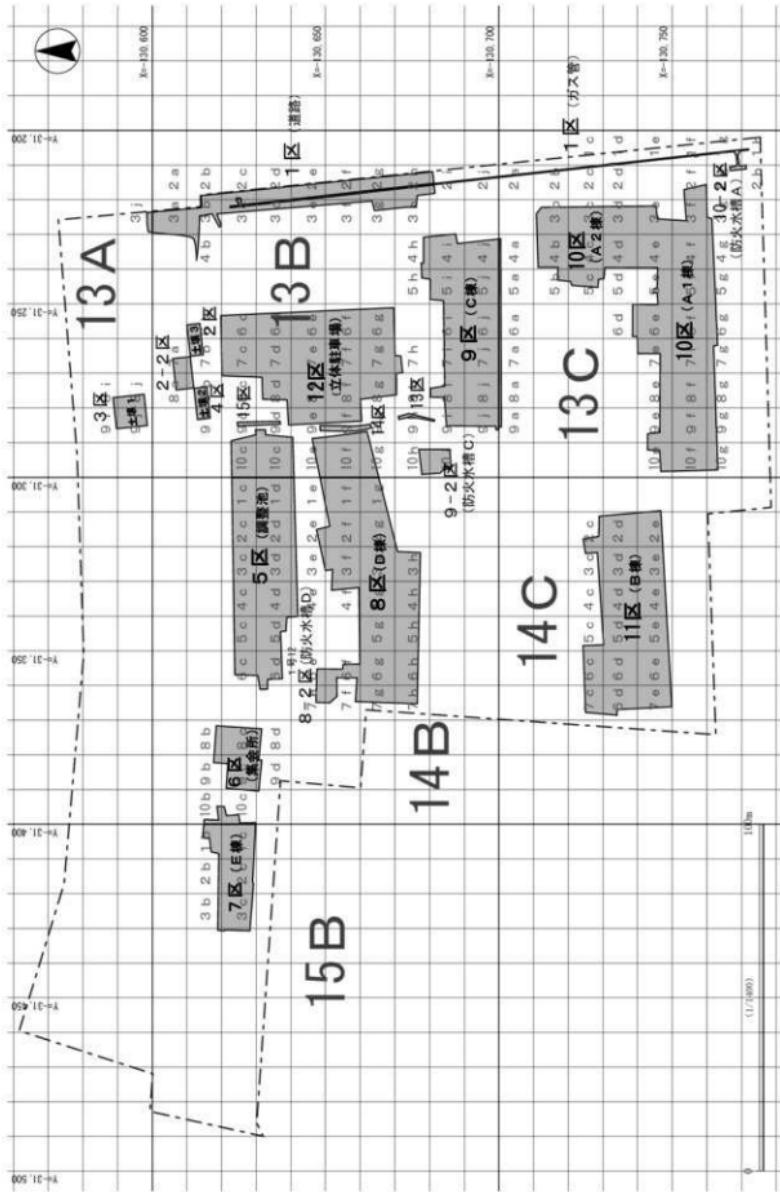


図2 調査区配置と地区割り

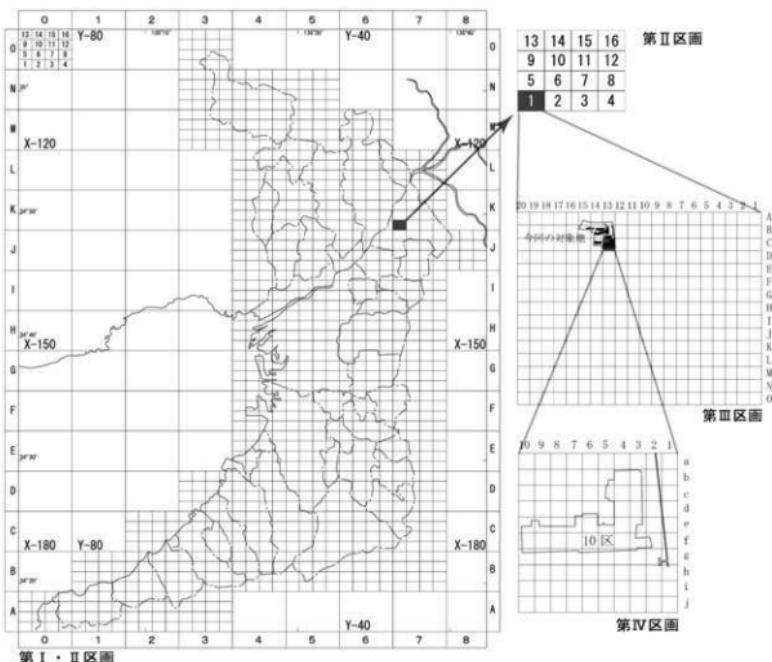


図3 地区割りの方法

層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。ここでいう「算用数字の層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、これは観察の結果、細分されることがある。したがって、同じ名称のたとえば「第4面」といっても、調査区によって異なる遺構面を指すことになる。そこで、今回の調査地全体を通した基本層序として、「ローマ数字の層」を設定した。それらについては、表1に整理した。

遺構番号 調査区ごとに、遺構種類にかかわらず通し番号とし、番号の後に遺構の種類を付けた。番号をつけた遺構は計約2900箇所であった。

掘削方法 基本的にオープンカット方式で調査区の壁面に法をつけて掘削を行った。地山面が高いため掘削深度の浅い調査区では壁面に法をつければ掘削を行った。防火水槽部分のうち2箇所(9・2区・10・2区)は、掘削してから簡易矢板を設置するあて矢板工法を使用した。

旧住棟(昭和40年代の住宅団地)建設等に伴う盛土層やこれ以前の旧表土層等を機械掘削の対象とし、禁野火薬庫にかかわる近代の遺構面を検出した。それ以下は、人力掘削により調査した。ただし、確認調査等の結果から、上層の禁野火薬庫にかかわる近代の遺構面より下層の遺構面までの間に禁野火薬庫造成以前の盛土や旧作土層等の近世層が分厚く残っている調査区については、禁野火薬庫にかかわる調査の終了後それらを対象に第2次機械掘削を行い、中世ないしそれ以前の遺構面から再度人力掘削により調査を進めた。

表1 各調査区遺構面の対照

基本層序と遺構面の時期	1区	5区	6区	7区	8区	8・2区	9区	9・2区	10区 A1棟	10区 A2棟	10・2区	11区	12区
旧住棟盛土上面													第1面
第0層（旧住棟盛土）	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第1層	第0層
昭和14年爆発開通層上面	第1面		第1面	第1面			第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第2面	第1面
第1層（昭和14年爆発開通層）	第1層	第0層	第1層	第1層	第0層	第0層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第2層	第1層
昭和14年爆発開通層下面	第2面	第1面	第2面	第2面	第1面	第1面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	(第2面)	第3面
第0層（火薬庫盛土・旧作土）	第2層	第1層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第3層	第2層
中世～近世の面		第2面			第2面	第2面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第4面	
第Ⅲ層（古代～中世）	第2層	第2層		第2層	第2層	第2層	第3層	第2層	第3層	第3層	第3層	第4層	第2層
古代～中世の面					第3面	第3面							第3面
第Ⅳ層（古代～中世）					第3層								
古代の面					第4面		第4面	第4面				第5面	
第V層（古代）	第2層	第2層	第2層	第4層		第4層			第3層	第3層		第5面	第3層
古代の面					第5面		第5面		第4面	第4面			
第VI層（古墳時代後期～古代）	第2層	第2層	第2層	第5層		第5層			第4層	第4層		第5面	第3層
古墳時代後期～古代の面	第3面	第3面	第3面	第6面		第6面			第5面	第5面		第6面	第4面
第Ⅶ層（地山）				第3層									
					第4面								

**調査深度** 大阪府教育委員会からの指示により、住棟部分7箇所は無遺物層である地山層上面まで、それ以外は工事対象の深さまでとされた。

**記録作成** 検出した遺構・遺物等を対象に、調査区全体・遺構・遺物出土状況等の実測・観察所見・写真撮影等の記録作業を行った。

各区の禁野火薬庫関係面と古代遺構面については、基本的にクレーンによる空中写真測量を実施し縮尺50分の1の図化を行った。その他の遺構面については、平板測量または地区杭を基準とした測量で50分の1ないし100分の1の全体図を作成した。地層断面図は縮尺20分の1に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況等は対象物に応じて10分の1ないし20分の1で適宜図化した。クレーン測量以外の図面は、当センター所定のA2判実測用紙に記録した。

**写真撮影** 写真媒体は、記録用として35mm白黒・リバーサルフィルム・6×7白黒フィルムを基本とし、さらに主要な対象は6×7リバーサルフィルムでも撮影した。台帳用にはデジタルカメラを使用した。現像後のフィルムは当センター所定のアルバムに収納し、各種フィルムの情報を盛り込んだ写真台帳を作成した。

**遺物の取り上げ** 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに、平面的には10×10mの区画(第IV区画)ごとの取り上げを基本とした。さらに必要に応じて、トータルステーションを用いて、3次元で出土位置を特定して取り上げた遺物もある。

出土遺物には、遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号等を記した当センター所定のマイラーベースのラベルを添付し、洗浄作業・注記作業・デジタル台帳作成作業を行った。

**現地での遺物整理** 調査現場でデジタル台帳への登録と洗浄を優先し、注記も行った。

**立会** 主要遺構面である禁野火薬庫関係面と最終遺構面については、基本的に調査区ごとに約16回、大阪府教育委員会の立会を受けた。

## 第2節 整理の方法

**遺物整理** 遺物は、調査の現地において出土後速やかに、洗浄、乾燥、注記作業を行った。注記は「調査名（カタカナ）・調査区名・登録番号」と定められており、たとえば5区の登録番号72の場合「キンヤホンマチ 10-1-5-72」となる。その後、登録番号ごとに分類と集計を行い、報告書掲載のものを優先して実測や写真撮影等を進めた。それ以外の遺物は、登録番号ごとに収納袋に納めた。遺物量は内法54×34×15cmのコンテナ（セキスイ TS-28等）に換算すると約270箱分である。

そのうち実測・掲載遺物は約1100点である。実測対象遺物は、一部について接合・復元作業を行い、当センター所定の実測用紙に原寸で実測し、ピックアップ台帳用にデジタルカメラで撮影を行った。一部の遺物では拓本も採った。実測後、レイアウトとトレイスを行い、版下を作成した。遺物実測図はファイルに収納した。

**台帳作成等** 出土遺物については遺物登録台帳を、実測遺物についてはピックアップ台帳を、それぞれ作成した。台帳は、ファイルメーカー社のFile Maker Pro 8によるもので、デジタルカメラで撮影した写真をインポートし、遺物登録台帳には、出土遺物に添付したラベル内容・遺物の種類・遺物の処理（圧縮収納・ピックアップの有無等）・収納したコンテナ番号等の情報を、実測遺物台帳には、遺物の種別・器形・時期・残存率等の情報を、それぞれを入力した。

現地で作成した遺構実測図は、内容に応じて整理した上でA1判ファイルに収納し、登録番号・内容・縮尺・収納ファイル等を記入した図面台帳を作成した。これらの図面等をもとに報告書掲載用の遺構図版原図を作成し、トレイスを行った。

**写真撮影** 現地で撮影したフィルムは、デジタルカメラ撮影以外は、現像の後、所定のアルバム類に収納した。デジタルカメラにより撮影した写真は、上記の登録・遺物台帳同様File Maker Pro 8による写真台帳にインポートし、写しこみラベルに記した情報や、他の撮影媒体各々のアルバム番号・シート番号・ネガ番号等の情報を入力した。これらの中から報告書掲載用写真を選択し、写真図版版下を作成した。

写真掲載遺物については、写真室にて撮影を行い、写真図版版下を作成した。

**遺物の編年観** 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

弥生土器：寺沢薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年・近畿編II』木耳社

須恵器：田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ

中村浩 1978『和泉陶邑出土遺物の時期編年』『陶邑III』大阪府教育委員会

古代の土器：奈良国立文化財研究所 1974『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告VII』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告X-I』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1993『平城宮発掘調査報告XIV』奈良国立文化財研究所

古代の土器研究会編 1992～1994『古代の土器I～3 都城の土器集成I～III』古代の土器研究会

縄軸陶器・灰軸陶器：平尾政幸 1994『第四部平安京の遺物 第二章土器と陶磁器 4 縄軸陶器・灰軸陶器・白色土器』『平安京提要』角川書店

瓦器：中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

# 第4章 遺構の調査成果

## 第1節 基本層序

個々の調査区での土層断面も別掲するが、調査地全体の基本層序（図4）を概観すると次のようになる。

**第0層** 禁野火薬庫以降の層である。昭和40年代前半に建てられた旧住棟（アパート）建設に伴う盛土層などで、砂礫やコンクリート塊などを含む砂混じりシルト層を主体とする。機械掘削の対象とした層である。

**第I層** 昭和14（1939）年3月1日の禁野火薬庫爆発に関連する層で、爆発時に形成された屑や爆発後の整地層などに細分できる。細分が困難な場合は一括して、爆発関連層とする。

**第II層** 禁野火薬庫造成に伴う盛土層を主体とし、造成以前の旧作土層なども含む。盛土層には、第0層の盛土層と同様に包含層や地山層のブロックが多数混じる。旧作土層は、基本的に砂混じりシルト層である。

**第III層** 古代から中世の遺物を包含する層。5区中央部・8区東部・9区・11区東部・12区で比較的明瞭に確認できた。砂混じりシルト層を主体とする。

**第IV層** 主として古代、一部中世の遺物を包含する層。多くの調査区では第III層との分離が困難で、第IV層として分層できたのは8区のみである。シルト層を主体とする。

**第V層** 古代の遺物を包含する層。やや暗色を呈するシルト層を主体とする。

**第VI層** 古代以前の遺物を含む層。暗色を呈するシルト層を主体とする。

**第VII層** 地山層である。

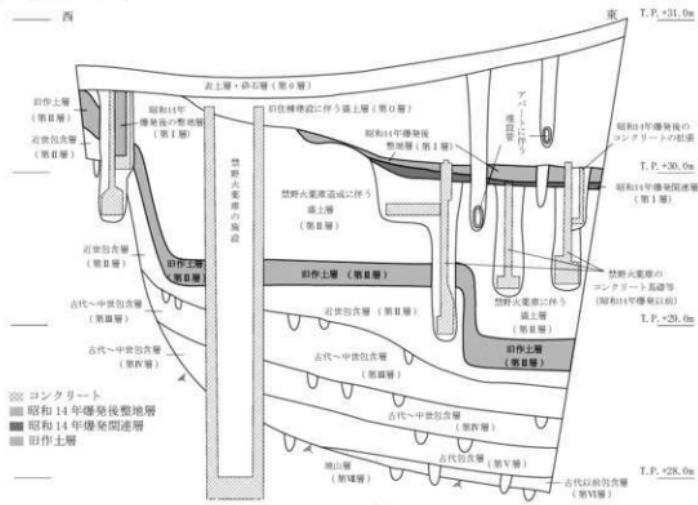


図4 断面模式

## 第2節 1区（道路・ガス管）の遺構

1区は調査地東辺に位置する。道路及びガス管理設に伴う調査である。

このうち、道路に伴う調査範囲は、およそ T.P.+30.9 m の現地表面から T.P.+30.4 mまでの調査対象が昭和40年代に造成された旧住棟建設に伴う盛土層内で収まったため、機械掘削のみで終了した。

ガス管に伴う調査は当初設計ではなく、道路部分の機械掘削後に追加された。ガス管を埋設する範囲のみのため、東西幅約 0.4 m に対し南北の延長は 151 m と非常に細長く、工事との関係で数回に分けて調査した。調査深度は約 1 m、最終面での調査面積は 60 m<sup>2</sup> である。

### 層序（図5）

1区西壁の断面を掲げる。

第0層は、基本層序の第0層に該当する。1区中部以南では、基本的に昭和14（1939）年の爆発後の倉庫建設に伴う造成層（1）である。直径 20 m と記録された爆発穴（4）も存在する。北部も爆発後の盛土層（2・8）が主体を占める。

第1層は、基本層序の第I層である昭和14年爆発層（12）に該当する。今回の調査では鍵層となるものだが、1区ではその分布範囲は狭い。

第2層は、基本層序の第II層・第III層・第V層・第VI層に該当するものと考えられる。そのうち他の調査区との対比がしやすいのは、第II層の火薬庫造成に伴う盛土層など（13～59）、火薬庫造成以前の旧作土層（58～62）である。それよりも下層の包含層（63～65）については、遺物の出土も僅少で、基本層序の第III層・第V層・第VI層のいずれに該当するものか判然としない。

### 第1面（図6 写真図版1・1・2）昭和14年以後

第0層を除去し検出した面で、禁野火薬庫の昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）の上面である。一部で黒色層が複数確認できたが、幅約 0.4 m と狭い調査区であるため、攪乱部分などを利用して下層の状況を確かめながら昭和14年爆発関連層を探した。

第1面としたのは、1区中部から北側にかけてはおよそ T.P.+29.6 m に黒色層が存在した範囲の上面である。中部以南では黒色層が存在しないので、火薬庫造成に伴う盛土層の上面と考えられるおよそ T.P.+30.2 m の面を第1面とした。北端から南へ 30 数m の部分では、第1面がすでに失われていると判断した。

遺構として、1区南部で、コンクリート基礎を検出した。いずれも、西側に隣接する10区第1面で検出した基礎の延長部分である。心々距離 10.8 m の3組の基礎は、南から、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」記載の第16号倉庫・第17号倉庫・第18号倉庫（以下、禁野火薬庫の諸施設は付図2参照）に該当する。第17号倉庫の基礎の間に存在するコンクリート土間は上面の高さが T.P.+30.5 m で、10区で検出した同倉庫のコンクリート土間の上面が T.P.+30.6 m であったこととおむね符合する。

一方、1区北部では、同図に、南から第3号雨覆庫、第24号倉庫、第4号雨覆庫が描かれている。しかし、1区北部では第1面が攪乱されており、それらに相当する基礎が確定できない。さらに、第24号倉庫はともかく、雨覆庫はその名称が示すように屋根がけの簡便な施設であったと考えてよけれ

ば、重厚な基礎が設けられていなかった可能性もある。

## 第2面(図7) 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層(第1層)を除去した面である。第1層の存在する範囲が限られていたため、新たに第2面として検出できたのは1区の中部から北部にかけてでのみであった。面の高さはおよそT.P.+29.5m。

第2面とした範囲では、顕著な遺構は見られなかった。しかし、断面なども含めて禁野火薬庫の資料と対比すると、第1面で検出した第18号倉庫の下層にやや北方にずれて存在する基礎が、第3号雑器庫に該当すると考えられる。

北部では、北端に存在する側溝、心々距離10.0mの基礎、基礎の抜き後の可能性のある搅乱などが、昭和12(1937)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫要図」に(朱書きハ軍需勤員二件フ臨時構築物ヲ示ス)として追記された記載の南から第10号・第11号・第12号火工場の基礎の痕跡である可能性がある。とくに、心々距離10.0mのひと組の基礎は、位置的には第11号火工場の該当する可能性がある。ただし、その場合、同じような構造と推定される第10号・第12号火工場の基礎が見当たらないことになる。また、他の建物の配置をみても、建物南北幅・建物間隔ともに10m程度の場合があり、現状では建物を特定することは難しい。

1区は、明治43(1910)年頃から禁野火薬庫の敷地となるが、顕著な施設はない。昭和8(1933)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫要図」に填薬弾丸庫の土塁が描かれているものの、遺構としては検出できなかった。

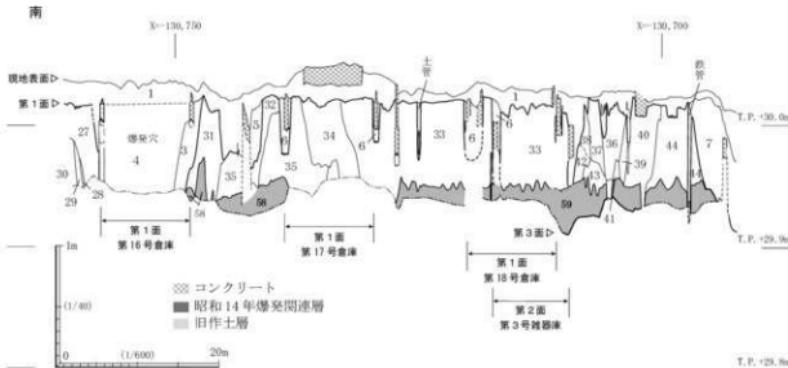
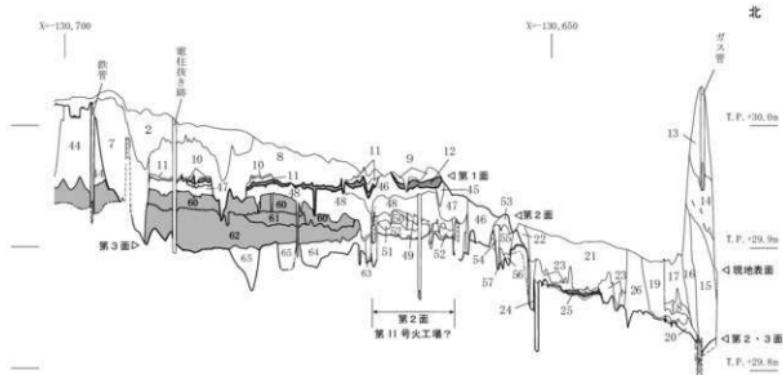


図5

- 1 7.5M/1 案灰 線混じり細砂～中砂 砂が混じる
- 2 2.5M/2 壊灰質 シルト～纖維じり粗砂に2.5M/8 明黄褐 シルトブロックや  
3M/6 灰 シルトブロック等が混じる 残2～3mmの礫を含む
- 3 10M/5.5 黄褐 細砂～粗砂と10M/1 底白 細砂～粗砂と
- 2.5M/5 黄褐 細砂混じりシルトが斑に混じる
- 4 10M/3.5にぶい黄褐 細砂～粗砂に径2～10cm程度の円礫や  
長径15～20cm程度の角礫が多量に混じる 粗砂片・炭化木を含む
- 5 10M/5.2 黄褐 細砂混じりシルト 繩をきわめて多く含む
- 10M/3.2 黄褐 細砂～中砂
- 7 5M/1 底白 細砂～粗砂混じりシルトにT.5M/2 オリーブ葉 粗砂混じりシルトと  
5M/1 青灰 シルト～灘じり粗砂～粗砂が斑に混じる 径1～3mmの繩  
繩状物を少々含む
- 8 2.5M/3 黄褐 シルト～細砂に2.5M/1 底白 黒シルトブロック等が混じる
- 9 10M/5.6 黄褐 シルト～粗砂 地山2ロットを含む
- 10 2.5M/3 黄褐 細砂混じり細砂～中砂
- 11 2.5M/3 黄褐 シルト混じり細砂～中砂
- 12 10M/2.1 黄褐 細砂～粗砂 径2～3mm以下の繩が混じる (昭和14年爆発開削渠)
- 13 2.5M/1 底白 線混じりシルト～細砂に5M/1 底白 シルトと10M/5.8 黄褐  
シルトが混じる
- 14 10M/4.3にぶい黄褐 シルト～纖維じりシルトに筋状に黒色層が入る
- 15 2.5M/1 底白 シルトブロックと2.5M/3 浅黄 中砂～粗砂と10M/7.1 明青灰  
シルトと5M/1 黄褐 細砂混じりシルトと径2～3mmの繩が混じる
- 16 10M/4.3にぶい黄褐 シルト～纖維じりシルトと2.5M/1 黄褐 シルト  
10M/6.8 明黄褐 細砂混じりシルト5M/1 底白 細砂じりリントが混じる
- 17 2.5M/2 底白 シルトに明青灰 2.5M/8 シルト～中砂が混じる
- 18 10M/4.3にぶい黄褐 中砂～粗砂と10M/4.3にぶい黄褐  
シルト混じり繩砂～中砂が混じる
- 19 2.5M/4.3にぶい黄褐 中砂～粗砂に2.5M/3にぶい黄 色シルトブロックが混じる
- 20 2.5M/4 浅黄 細砂
- 21 10M/6.6 明黄褐 シルト～粗砂に2.5M/6/4にぶい黄 シルトなどの小ブロックが  
大量に混じる
- 22 10M/4.3にぶい黄褐 細砂混じりシルトにスレートを含む
- 23 10M/4.3にぶい黄褐 細砂～纖維じりシルト 木片を多く含む
- 24 10M/5.8 黄褐 細砂混じりシルト 木片を多く含む
- 25 10M/2.1 黑 線混じり粗砂
- 26 2.5M/6.4にぶい黄 中砂～粗砂に5M/6.6 明黄褐 シルトブロックや  
10M/3.2 黄褐 細砂混じりシルトが斑に混じる
- 27 10M/6.4にぶい黄褐 細砂混じりシルト ブロックと繩を含む
- 28 10M/5.1 底灰 細砂～粗砂 植物の地下茎が多い
- 29 2.5M/6.6 棕灰 中砂～粗砂に10M/6.6 明黄褐 ブロックが混じる
- 30 5M/5.6 明赤灰 中砂～粗砂
- 31 2.5M/2 壊灰質 シルト混じり細砂～粗砂と2.5M/1 底白 細砂混じりシルトと  
10M/6.6 明黄褐 粗砂混じりシルトが斑に混じる
- 32 10M/7.8 黃褐 細砂混じりシルトブロック
- 33 10M/6.6 明黄褐 シルトブロックと10M/5.1 底灰 シルト混じり細砂ブロックと  
10M/4.3にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 34 10M/6.6 明黄褐 中砂～粗砂に2.5M/6/1 底白 シルトブロックと
- 35 5M/1 底白 シルト～細砂が混じる
- 36 10M/4.4 黃褐 細砂混じりシルトブロック
- 37 10M/5.6 黃褐 シルトブロック
- 38 5M/6.1 底白 シルトブロック
- 39 2.5M/5.6 黃褐 細砂混じりシルトブロック
- 40 5M/4.8 底白 粗砂と2.5M/6/3にぶい黄 粗砂の五層に
- 41 5M/6.1 底白 細砂～粗砂
- 42 10M/5.6 黃褐 シルトブロック
- 43 2.5M/7.6 明黄褐 線混じりシルトブロック
- 44 5M/6.1 底白 細砂～粗砂混じりシルトと2.5M/2 壊灰質 細砂～粗砂が斑に混じる  
繩状ブロック
- 45 2.5M/5.6 黃褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 46 2.5M/5.6 黃褐 細砂～粗砂混じり繩砂～中砂
- 47 10M/5.4にぶい黄褐 シルト～粗砂に2.5M/3 黄褐 シルトブロックが混じる
- 48 2.5M/5.6 黃褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5M/2 壊灰質 細砂～粗砂が斑に混じる  
繩状
- 49 2.5M/5.6 黃褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5M/6 黃褐  
50 10M/6.1にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5M/6 黃褐  
51 10M/5.6 黃褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5M/6 黃褐  
52 10M/5.6 黃褐 シルトに10M/5.4にぶい黄褐 シルトの小ブロックが混じる
- 53 10M/5.6 にぶい黄褐 細砂混じりシルトに粗化粧を含むブロックが混じる
- 54 10M/5.6 黃褐 細砂～粗砂
- 55 5M/3に混じるがシルト質で、本片やスレート片を含む
- 56 2.5M/4.4 黃褐 細砂～粗砂 無機性堆土や灰分を含む
- 57 10M/5.6 黃褐 細砂～粗砂
- 58 2.5M/4.1 底灰 シルト～灘じり中砂～粗砂 (旧作土層)
- 59 5M/4.1 底白 細砂混じりシルト (旧作土層)
- 60 2.5M/5.1 底灰 シルト混じり細砂～中砂 (旧作土層)
- 61 5M/6.1 底白 シルト混じり細砂 (旧作土層)
- 62 5M/5.1 底灰 シルト混じり細砂に5M/3 底白 オリーブ シルトが筋状に混じる  
(旧作土層)
- 63 10M/5.2 底灰 黒シルト～粗砂
- 64 10M/5.3 にぶい黄褐 細砂混じりシルト
- 65 2.5M/2 底白 オリーブ 細砂混じりシルト



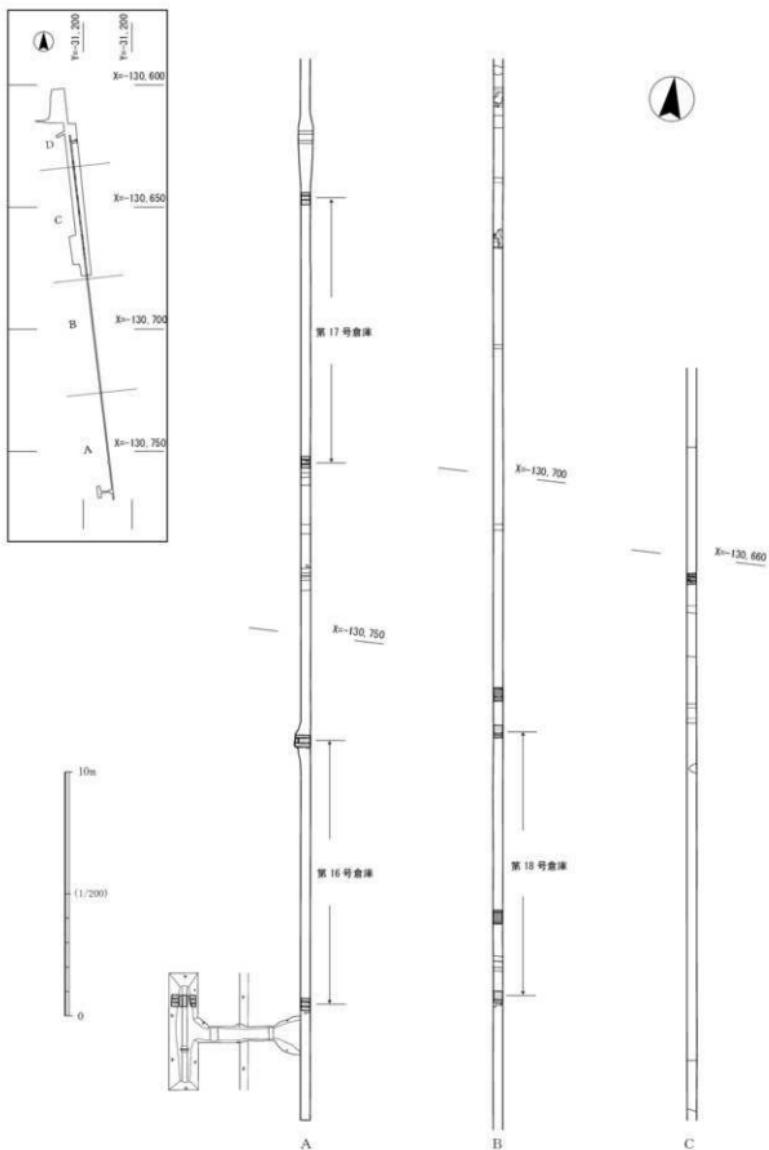


図6 1区 第1面

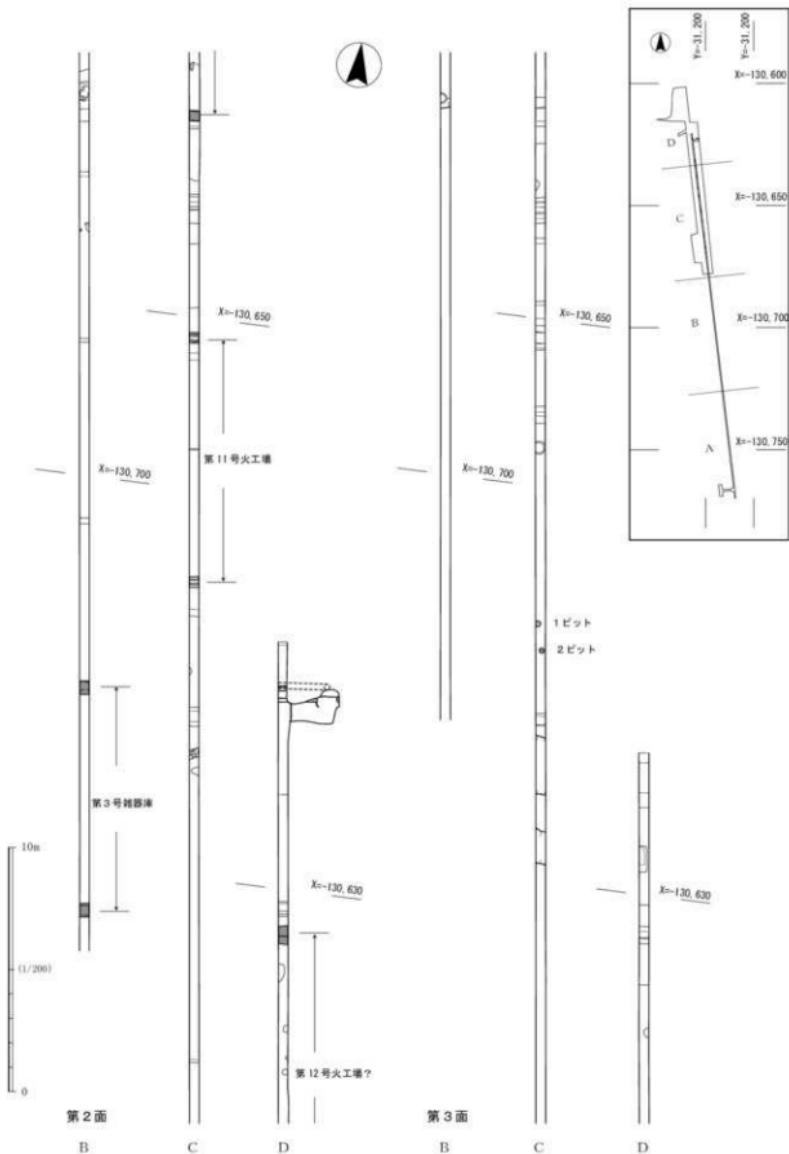


図7 1区 第2面・第3面

### 第3面（図7 写真図版1・3・4）古代か

禁野火薬庫の造成に伴う盛土層や旧作土層などの第II層を除去した面である。1区南部では、禁野火薬庫造成に伴う盛土層や旧作土層（第II層）中で、掘削限界であるT.P.+29.3～29.5mに達した。一方、1区中部以北では地山層上面まで掘り下げ、ピットを2個検出できた。その高さは、1区中部でおよそT.P.+29.0mだが、北部ではT.P.+28.2mにまで下がる。

**1ピット** 平面はほぼ円形で、直径22cm、深さ24cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。土器細片が出土した。

**2ピット** 平面円形で、直径20cm、深さ30cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。出土遺物なし。

### 第3節 2区・2-2区・3区・4区（土壤）の遺構

2区・2-2区・3区・4区（図8 写真図版2-5）は、調査地北東部に位置する。汚染土壌の撤去に伴う調査である。2区・3区・4区は、計画段階では最終遺構面で10 m四方（100 m<sup>2</sup>）となるようそれぞれ10 mの間隔をおいて設定され、調査中に2区と4区との間に2-2区が追加された。

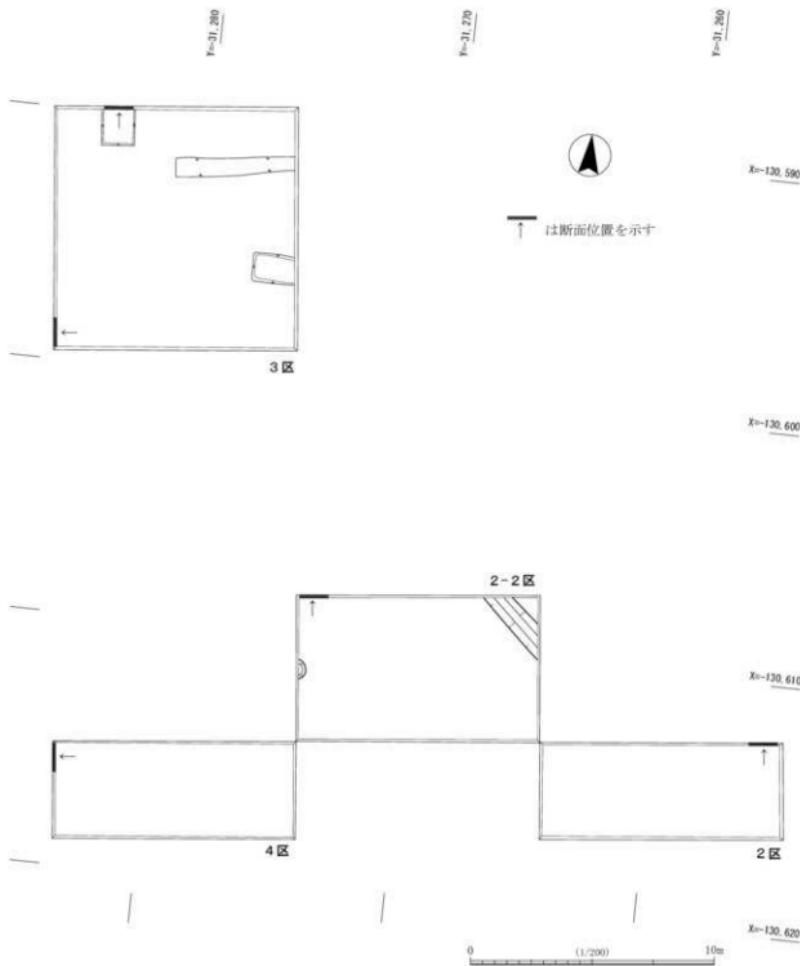


図8 2区・2-2区・3区・4区

各区の現地表面から調査を開始したが、機械掘削の途中で汚染土壌の存在により作業が一時中断された。最終面での調査面積は4つの調査区合わせて260 m<sup>2</sup>である。

## 2区（写真図版2-6）

現地表面がおよそT.P.+28.0 mであり、盛土層を約20 cm除去するとT.P.+27.8 mの掘削深度に達した。さらに、南部において、南北4 m・東西10 mの範囲で汚染土壌をT.P.+26.7 mまで除去し精査を行ったが、遺構・遺物ともになかった。

### 2-2区

南北6 m、東西10 mの範囲において、汚染土壌を撤去した掘削底面のT.P.+27.2 mで精査を行った。その結果、北東部で北西-南東方向に延びる深さ5 cm程度の溝状のくぼみと、西部で直径80 cm、深さ3 cmほどのピット状のくぼみがみられた。しかし、遺物は出土しなかった。

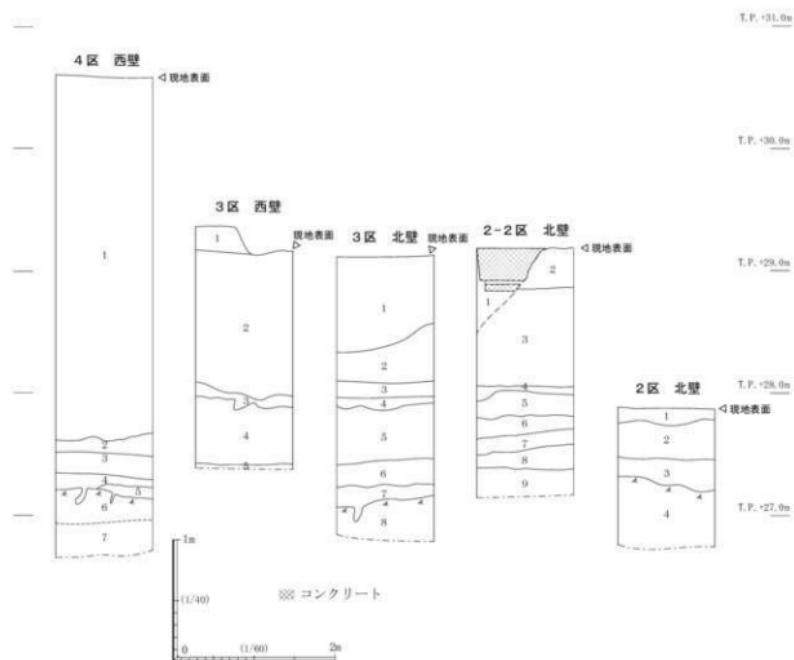


図9 2区・2-2区・3区・4区 断面

### 3区（写真図版2 - 7）

汚染土壌撤去を行った掘削底面のT.P.+27.3 mで精査を行ったが、遺構・遺物はなかった。さらに、3区北西部で下層確認を行い、T.P.+27.1 mで地山層上面を検出したが、遺構・遺物ともになかった。

### 4区

盛土層内でT.P.+27.8 mの掘削深度に達した。その後、南部において南北4 m・東西10 mの範囲で汚染土壌をT.P.+26.7 mまで除去し精査を行ったが、遺構・遺物ともになかった。

禁野火薬庫の諸記録を参照しても、これら2区・2-2区・3区・4区の範囲には、顕著な構造物はみられない。わずかに昭和14（1939）年の爆発後、大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫の大部分が大阪工廠枚方製造所に移管されたことによって設置された境界施設の検出が予想されたが、それも見当たらなかつた。

#### 4区 西壁

1. 2.035/4 黒鳴 シルト混じり細砂～粗砂に径2～5 cmの礫、コンクリート片が混じる
2. 2.035/1 黄泥 細砂混じりシルトに 10YR5/6 黄泥 細砂混じりシルトが混じる
3. 2.035/1 黄泥 細砂混じりシルトに 10YR4/3 に 5YR 黒鳴 細砂混じりシルトが混じる
4. 10YR5/1 黒鳴 細砂混じりシルトに 10YR4/2 黄泥 黃泥混じりシルトが混じる
5. 10YR5/1 黄泥 細砂混じりシルトに 10YR4/2 黒鳴 細砂混じりシルトが混じる
6. 10YR5/8 黄泥 細砂～粗砂混じりシルト（地山層）
7. 2.035/1 黄泥 粗砂に 10YR6/6 明黄泥 細砂混じりシルトと 10YR4/4 黑鳴 細砂～粗砂が混じる（地山層）

#### 3区 西壁

1. 2.035/2 黒鳴 細砂～纖維混じりシルト
2. 2.035/4 黄鳴 シルト混じり細砂～粗砂に径2～10 cmの礫、礫丘が多く混じる
3. 5YR4/1 灰 細砂～纖維混じりシルト
4. 5YR1/1 灰 細砂～纖維混じりシルト
5. 7.035/1 灰 繊維混じりシルトに 10YR5/6 黄泥細砂～中砂混じりシルトが混じる

#### 3区 北壁

1. 2.035/4 黄鳴 シルト混じり細砂～粗砂に径1～10 cmの礫が多く混じる
2. 2.035/4/1 墓オリーブ灰 細砂～粗砂混じりシルトに径2～10 cmの礫が多く混じる
3. 2.035/5/1 墓オリーブ灰 細砂～纖維混じりシルト
4. 5YR1/1 灰 細砂～纖維混じりシルト
5. 5YR5/1 灰 細砂～纖維混じりシルト
6. 7.035/1 灰 細砂混じりシルトに 10YR5/6 黄泥細砂～中砂混じりシルトが混じる
7. 5YR5/1 灰 細砂混じりシルトに 10YR5/2 黒鳴 細砂～中砂混じりシルトが混じる
8. NT/1 灰白 シルトに 10YR5/8 黄鳴 細砂～粗砂混じりシルトが混じる（地山層）

#### 2-2区 北壁

1. 継層
2. 5YR1/1 灰 細砂に径4～5 cm程度の礫が多く混じる
3. 2.035/6 オリーブ灰 細砂混じりシルトに径5～10 cmの礫、礫丘、木片、コンクリート片等が混じる
4. 5YR1/1 灰 シルト～細砂
5. 2.035/1 黄泥 細砂混じりシルト
6. 2.035/2 墓灰黄 細砂～中砂混じりシルト
7. 2.035/2 墓灰黄 細砂～中砂混じりシルト
8. 2.035/4/2 墓灰黄 細砂混じりシルトに 10YR4/4 灰 細砂混じりシルトが混じる
9. 2.035/1 黄泥 細砂混じりシルトに 10YR1/4 墓灰 細砂混じりシルトが混じる

#### 2区 北壁

1. 10YR5/4 に 5YR 黄泥 細砂～粗砂混じりシルト
2. 10YR4/4 灰 細砂～粗砂混じりシルト 径5 mm～1 cm程度の礫を含む
3. 10YR5/6 黄泥 中砂～粗砂混じりシルトに 5YR1/1 灰 中砂～粗砂混じりシルトが混じる
4. 10YR5/8 黄泥 細砂～粗砂と 5YR1/1 灰白 細砂～粗砂が混じり合う（地山層）

## 第4節 5区（調整池）の遺構

5区は調査地北部に位置する。調整池の設置に伴う調査である。およそT.P.+31.2mの現地表面から、T.P.+28.6～29.6mの第3面まで調査した。最終面での調査面積は1300m<sup>2</sup>。5区では、旧住棟建設などのため各遺構面とも搅乱により失われた範囲が広く、昭和14年（1939）爆発関連層も不明瞭であったため、機械掘削の段階で旧作土層や地山層まで掘り下げざるをえなかった。

第1面は昭和14年（1939）爆発関連層などを除去した面である。禁野火薬庫の土塁や建物の基礎、溝、土坑とそれ以前の溜池やピットなどを検出した。

第2面は中世～近世の面。溝やピットを検出した。

第3面は地山層上面。古代ないしそれ以前の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピットを検出した。

### 層序（図10）

5区では、南壁の断面を掲げる。ただし、南壁の東部は土塁基礎により破壊されているので、堆積状況が明らかなのは中央部以西のみである。また、5区南壁は階段状に屈折しているので、図10は北からみた3つの面を1枚につないでいる。

第0層は、基本層序の第0層と第I層に該当する。ただし、この5区では、今回の調査で禁野火薬庫についての鍵層として認識している昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）が不明瞭であり、そのほとんどは昭和40年代の旧住棟建設に伴う盛土層（2）である。

第1層は、基本層序の第II層に該当する。昭和11（1936）年以降に造られた土塁の裾に巡らされた溝（3～11）、明治42（1909）年の爆発後に造られた建物の基礎跡（12～14）、火薬庫造成に伴う盛土層など（15～59）、火薬庫造成以前の旧作土層（61）、中世～近世の包含層（62～70）に分けられる。

第2層（71～74）は、基本層序の第III層・第V層・第VI層に該当する。遺物は少ないが、古代～中世の包含層である。この層を除去し、地山層上面である第3面に達した。

地山層（77～81）は、基本層序の第VII層に該当する。5区の最終遺構面である第3面以下の下層にトレーニングを設定し、無遺物・自然堆積であることを確認した。

### 第1面（図11 写真図版3・8・9）昭和14年以前

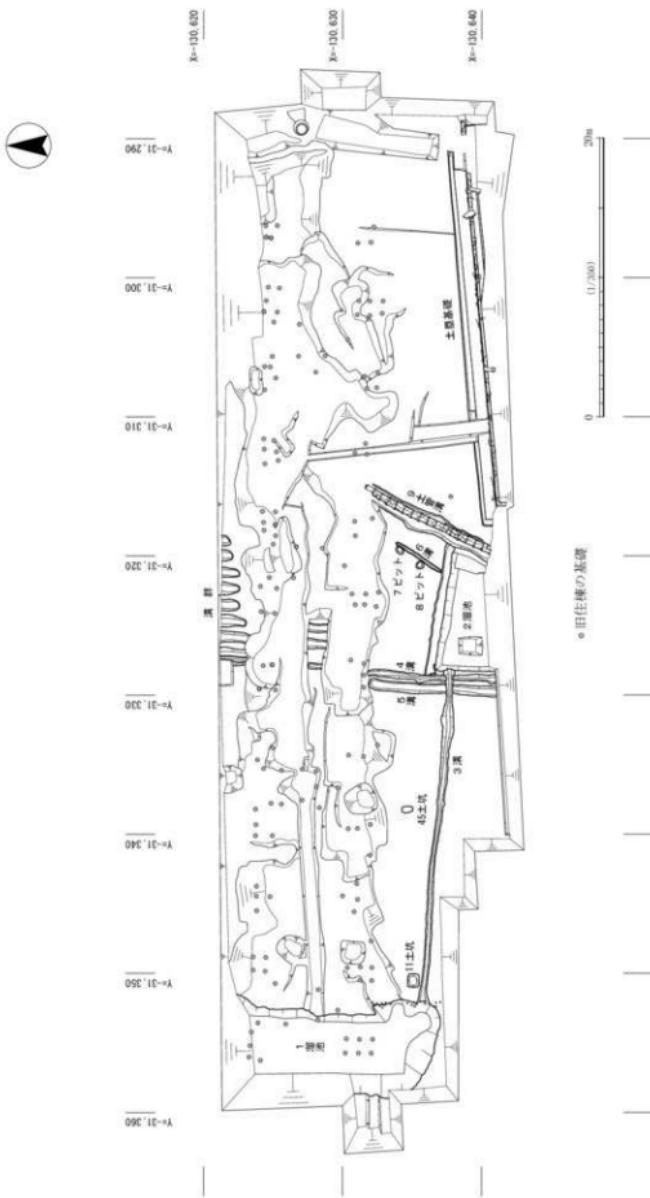
昭和14年（1939）爆発関連層（第I層）を除去した面ないしそれよりも下層の面である。しかし、この5区では、今回の調査で禁野火薬庫についての鍵層として認識している爆発関連層（第I層）が不明瞭であり、また禁野火薬庫関係の遺構の遺存状況も悪い。搅乱などを除去した面の高さはT.P.+28.9～29.6mで西側が高いが、断面観察からは本来の禁野火薬庫面の高さはT.P.+30.6～30.9mであったと考えられる。遺構として、土塁や建物の基礎、溝、土坑、溜池、ピットなどを調査した。

**禁野火薬庫関係の遺構** 第1面検出の遺構のうちを、まず禁野火薬庫関係の遺構を報告する。

**土塁基礎**（図12） 5区南辺東部に位置するコンクリート基礎である。8区第1面20建物とした昭和11年授受の第4師団兵器部保管建物を囲む土塁のうち、建物北側の土塁の南辺基礎にあたる。基礎の上部は破壊されており、内部の鉄筋が露出している。表面には型枠の痕跡が比較的明瞭に残る。基礎の下方、フーチングよりも約20cm上方には、直径4cmほどの水抜き孔が0.7～1.2m間隔に開けられて



図11 5区 第1面



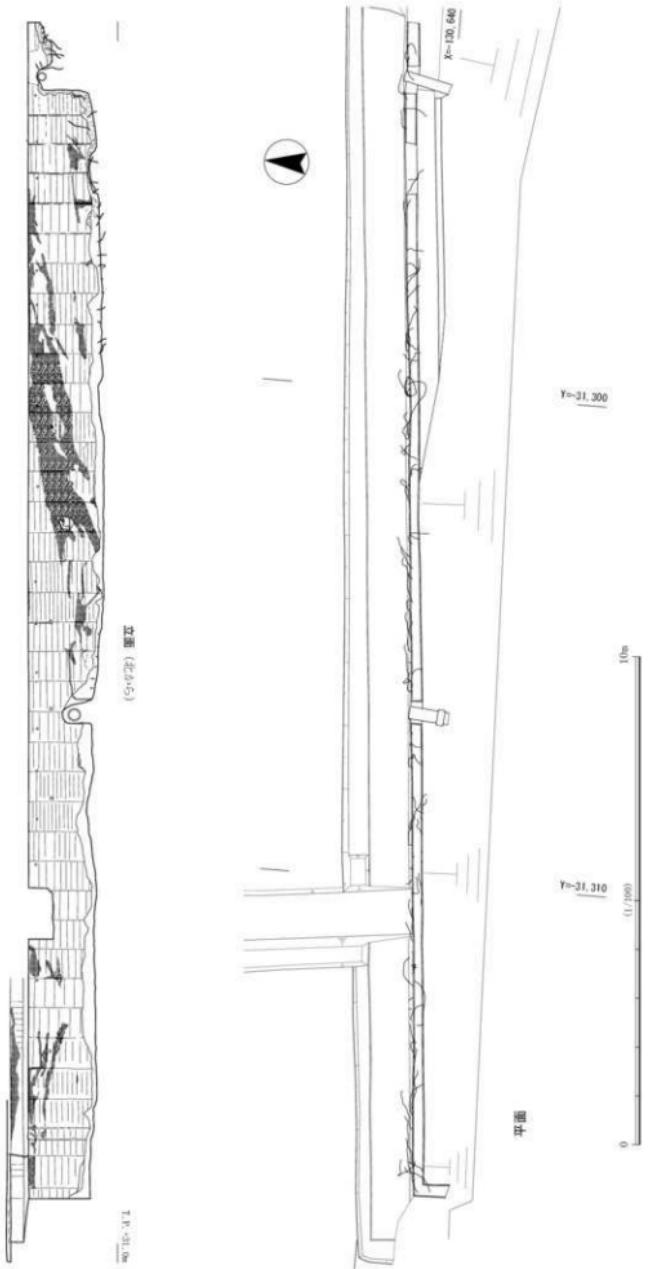


图 12 5 区 第 1 面土壁基础

いる。

この土壁は、昭和 11（1936）～昭和 13（1938）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には、他の土壁よりも小規模に表現されている。それが通常の土壁表現になるのが、昭和 14（1939）年の「事故発生直以前二於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」である。一方調査では、このコンクリート製擁壁は、土壁を構築した後にその盛土を切りこんで打設されたことが判明した。これらの記録と検出状況とを考えあわせると、昭和 11 年から昭和 13 年頃までは擁壁が存在せず土壁のみ存在した時期があり、その後昭和 14 年初頭までに今回検出のコンクリート擁壁が構築されたと考えることもできる。爆発は昭和 14（1939）年 3 月 1 日に発生するが、今回検出のコンクリート基礎南側の側溝内から、この爆発に伴うと推定される黒色層と多数の瓦片が出土しており、この推定を補強する。

**建物基礎** 5 区南西部に位置する。明治 42（1909）年の爆発後に築かれ、当初は 7 号火工場（9・2 区第 1 面 1 コンクリート基礎として検出した昭和 10 年の第 7 号火工場とは別物）とされ、昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」に 6 号火工場として記されている建物の検出が予想された。しかし、これは断面での確認に止まった。

**9 土管溝（写真図版 4-10）** 5 区中央部南側に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、検出長約 10 m、幅 1.0 ～ 1.6 m、深さ 30 cm 以上。検出できた土管は 17 本で、一部の土管には「アイチ 並管 トコナメ」という文字と山形に T 字の刻印がある（図 129-26）。

9 土管溝の位置は、上記の土壁の下層にあたる。5 区南壁断面（図 10）を観察すると、2 潟池（51）よりも新しく、昭和 11（1936）年築造の土壁盛土に覆われている。周辺施設の整備状況などから昭和 11 年に近い時期に設置された暗渠と推定できる。

**11 土坑（写真図版 4-11）** 昭和 8（1933）年前後の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」などを参照すると、7 号火工場のすぐ西側、土壁との間の狭い部分に位置する。平面隅丸方形で、東西 1.0 m、南北 0.9 m、深さ 0.6 m 以上。埋土は、検出面から 20 cm ほどは 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルトだが、それよりも下層には炭が詰まっている。防湿を意図したものであろうか。

**45 土坑（写真図版 4-12）** 7 号火工場のすぐ東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、南北 0.8 m、東西 0.5 m、深さ 0.6 m。内部には炭が詰まっている。11 土坑と同様な機能を持つと推定される。

**禁野火薬庫よりも古い遺構** 次に、本来は第 1 面よりも下層の遺構であるが、搅乱を除去した結果露出してしまったをものを報告する。

**1 潟池** 5 区西端に位置する。上記建物北西側の土壁の下層にあたる。深さ 1.5 m 以上。澗池の東辺南部には南北方向に杭が並んでおり、護岸的な施設と推定できる。断面観察から、明治時代末年の土壁構築時に埋められたと考えられる。土器細片が出土した。

**2 潟池** 5 区中央部南側、火工場周囲の土壁の下層に位置する。昭和 11（1936）年以降の土壁構築時に埋められた状況である。土器細片が出土した。

**3 溝** 5 区南西部で、1 潟池と 2 潟池を結び東西方向に延びる。長さ 24 m、幅 0.4 ～ 0.9 m、深さ 21 cm。埋土は、上層が 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト、中層は 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR6/4 明黄褐色細砂～粗砂混じりシルトのブロックが混じる、下層が 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルトである。出土遺物なし。

**4 溝** 5 区中央部の南西寄り、2 潟池の西辺で南北に延びる。次の 5 溝とともに 3 溝よりも古い。検

出長 9.2 m、幅 0.4 ~ 0.6 m、深さ 19 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色細砂～粗砂混じりシルトに、2.5Y6/8 明黄褐色シルト～粗砂のブロックが混じる。土器細片が出土した。

**5溝** 4溝のすぐ西にそれと平行してある。検出長 9.2 m、幅はおよそ 0.7 m、深さ 26 cm。埋土は、2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じりシルトに、10YR5/4 にぶい黄褐色シルトや 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じりシルトが混じる。土器細片が出土した。

**6溝** 5区中央部に位置する。主軸方位は北東・南西で、長さ 3.9 m、幅 0.3 m、深さ 5 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色、2.5Y7/4 浅黄色、10YR6/6 明黄褐色のシルトがブロック状に混じり合う。

**溝群** 5区北部に位置し、さらに北方に延びる。旧作土層上面にみられ、耕作に伴うものと考えられる。埋土はいずれも、10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂～礫。

**7ピット** 6溝の西側に位置する。平面は北東・南西に長い楕円形で、長径 58 cm、直径 46 cm、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**8ピット** 平面はややいびつな円形で、直径約 50 cm、深さ 14 cm。埋土は 7 ピットと同じ。土器細片が出土した。

## 第2面（図 13 写真図版 4 - 13）中世～近世

禁野火薬庫に関する第1面の調査後、禁野火薬庫に伴う盛土層と旧作土層（第II層）を重機で除去した。5区東側では、盛土層や旧作土層の途中で、設計掘削限界深度の T.P.+28.64 m に達した。

5区中央部よりも西側では、第2面として、旧作土層など（第II層）を除去し検出した第III層上面を調査した。面の高さは T.P.+28.7 ~ 29.6 m で西側が高いが、断面観察からは本来の遺構面の高さは T.P.+29.2 ~ 30.4 m であったと考えられる。第2面では、溝やピットを検出した。

**溝群** 5区中央部に集中する。主軸方位は、東西のものも数本あるが南北のものが主体で、個々の溝は、幅 0.1 ~ 0.4 m、深さはごく浅い。埋土は、第II層下部と同じ灰白色などの砂質シルトである。耕作に伴う素掘り溝であろう。出土遺物なし。

**ピット** 以下の5個のピットは、いずれも5区南西部に位置する。出土遺物なし。

**10ピット** 平面円形で、直径 22 ~ 26 cm、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。

**24ピット** 平面円形で、直径 50 ~ 54 cm、深さ 16 cm。埋土は、上層が 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト、下層が 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。

**30ピット** 平面はややいびつな円形で、直径 38 ~ 42 cm、深さ 10 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

**33ピット** 平面は南北に長い楕円形で、長径 42 cm、短径 30 cm、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

**34ピット** 平面は南北に長い隅丸方形で、長径 68 cm、短径 58 cm、深さ 10 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

## 第3面（図 14・15 写真図版 5 - 14・15）古代以前

地山層上面である。5区の一部には、古代の包含層と考えられる第IV層もしくは第V層と考えられる黒褐・褐灰色のシルト層が残る部分があった。第3面はこれらを除去して検出した。面の高さは T.P.+28.6 ~ 29.6 m で、西が高く、東が低い。遺構として、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピット

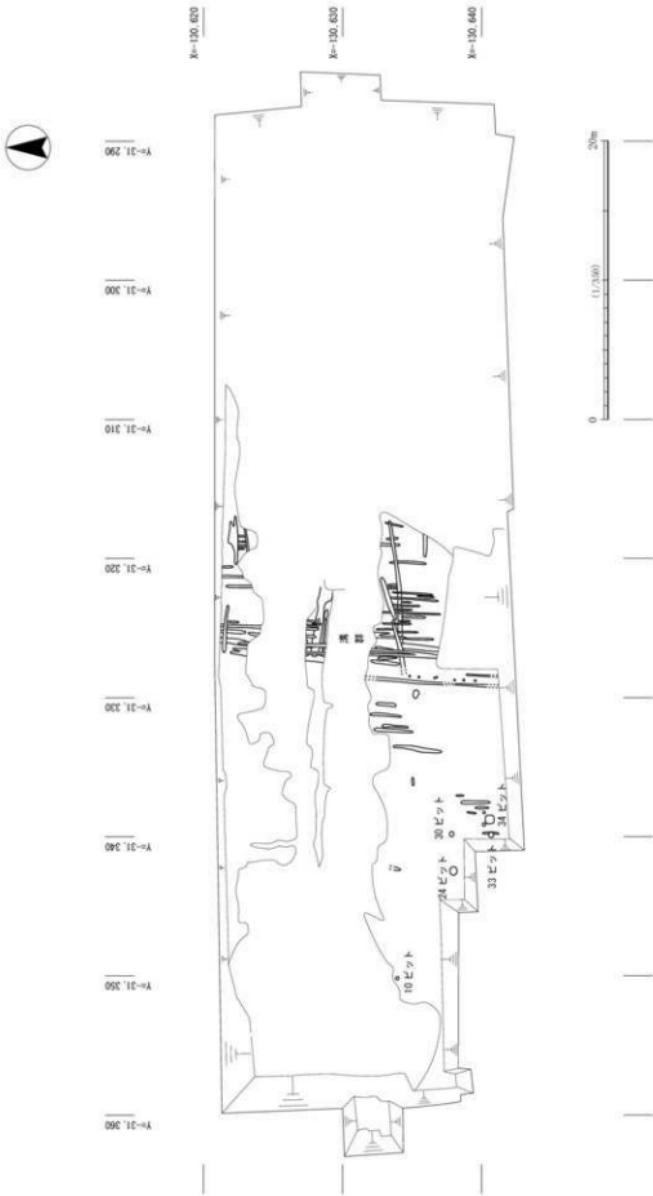


図13 5区 第2面

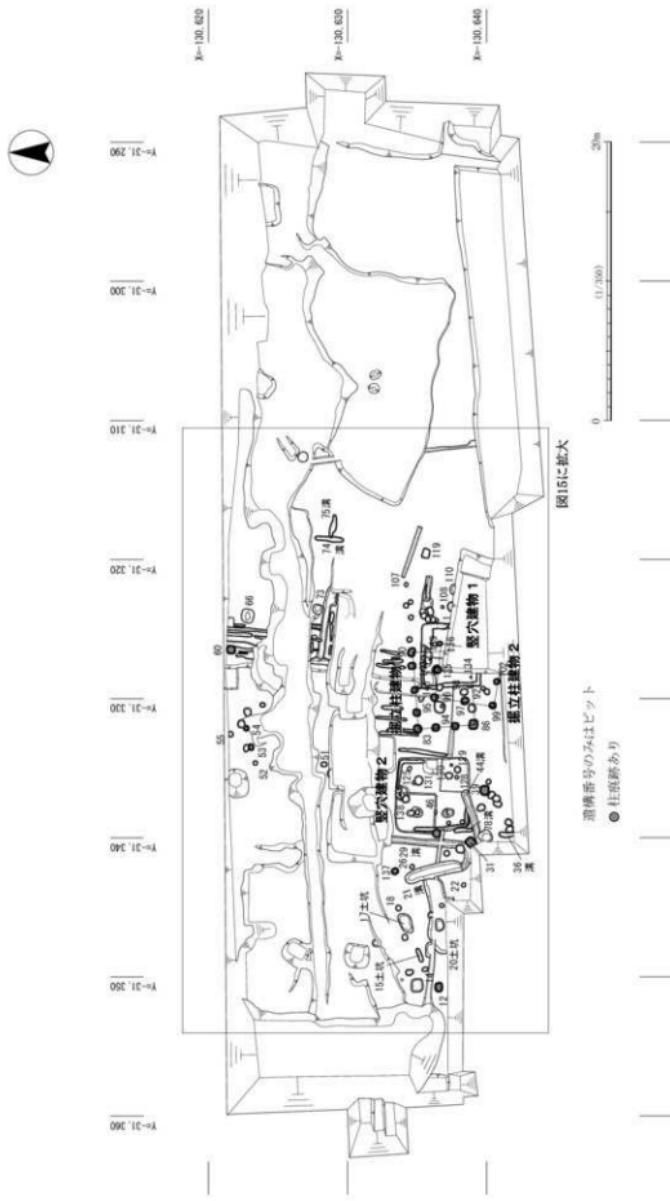
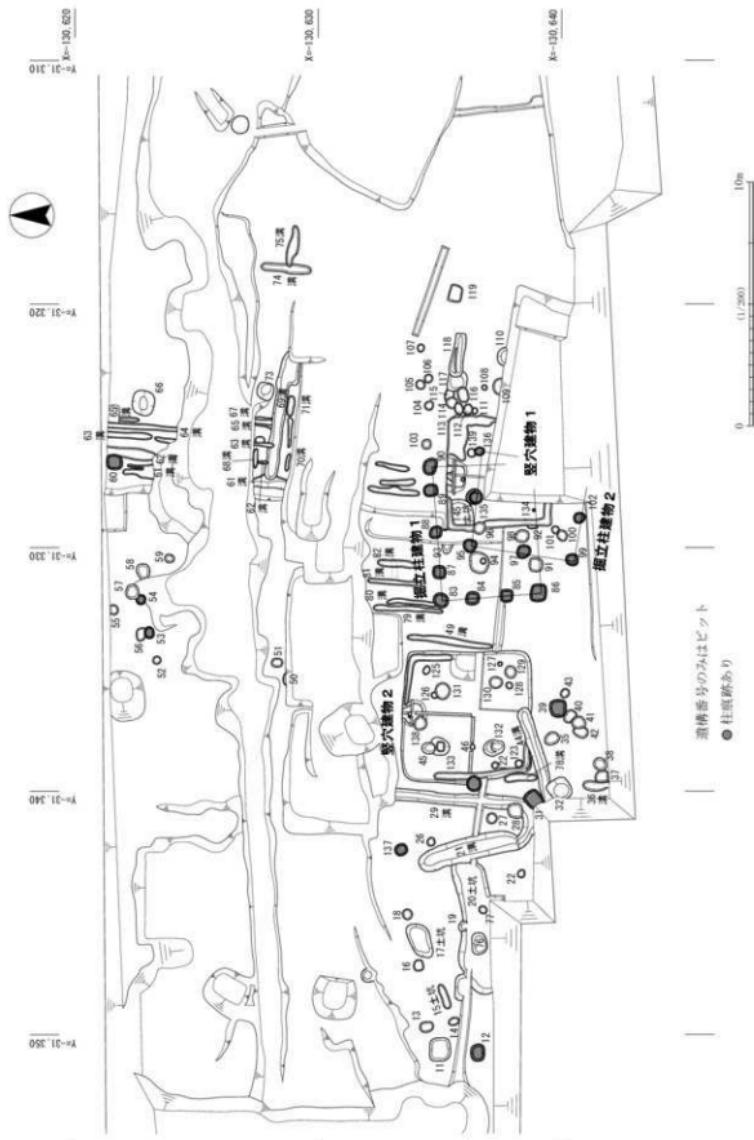
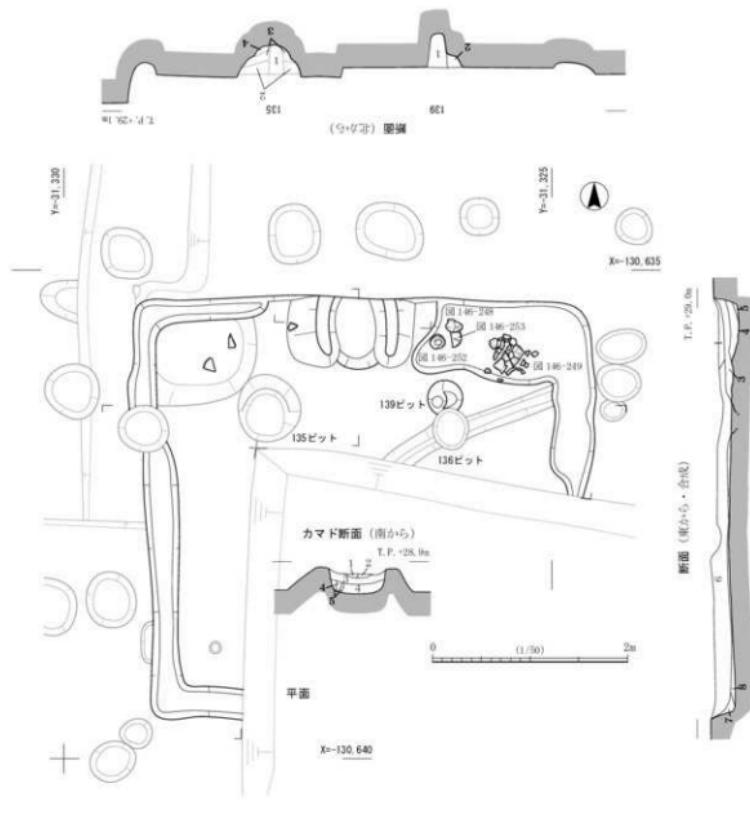


図14 5区第3面





**139ピット**

- 1 2.5V4/2埋灰黄、粗砂混じりシルト
- 2 2.5V5/4黄褐、粗砂混じりシルト 層を含む  
(孤立柱建物2 135ピット)

1 10V5/2埋灰黄、粗砂混じりシルト

2 10V5/5埋灰黄、シルトブロックに、層6/1灰 シルトが混じる

3 5V6/1灰 シルト

4 10V6/4にぶい黄褐 シルト

**カマド・壁**

- 1 2.5V7/2灰黄、粗砂へ複数じりシルト
- 2 2.5V8/2灰白、粗砂へ複数じりシルトは 10V4/3にぶい黄褐 壁土ブロックが少量混じる
- 3 7.5V5/3にぶい灰~7.5V6/6灰 壁土、灰を含む
- 4 2.5V6/3にぶい黄 シルトは 10V7/6明黄褐 シルトブロックが混じる
- 5 7.5V6/1灰 シルト
- 6 2.5V6/5にぶい黄 粗砂混じりシルト
- 7 2.5V5/2埋灰黄 粗砂混じりシルト
- 8 2.5V5/2埋灰黄 粗砂混じりシルト (基礎)

図16 5区 第3面竪穴建物 1

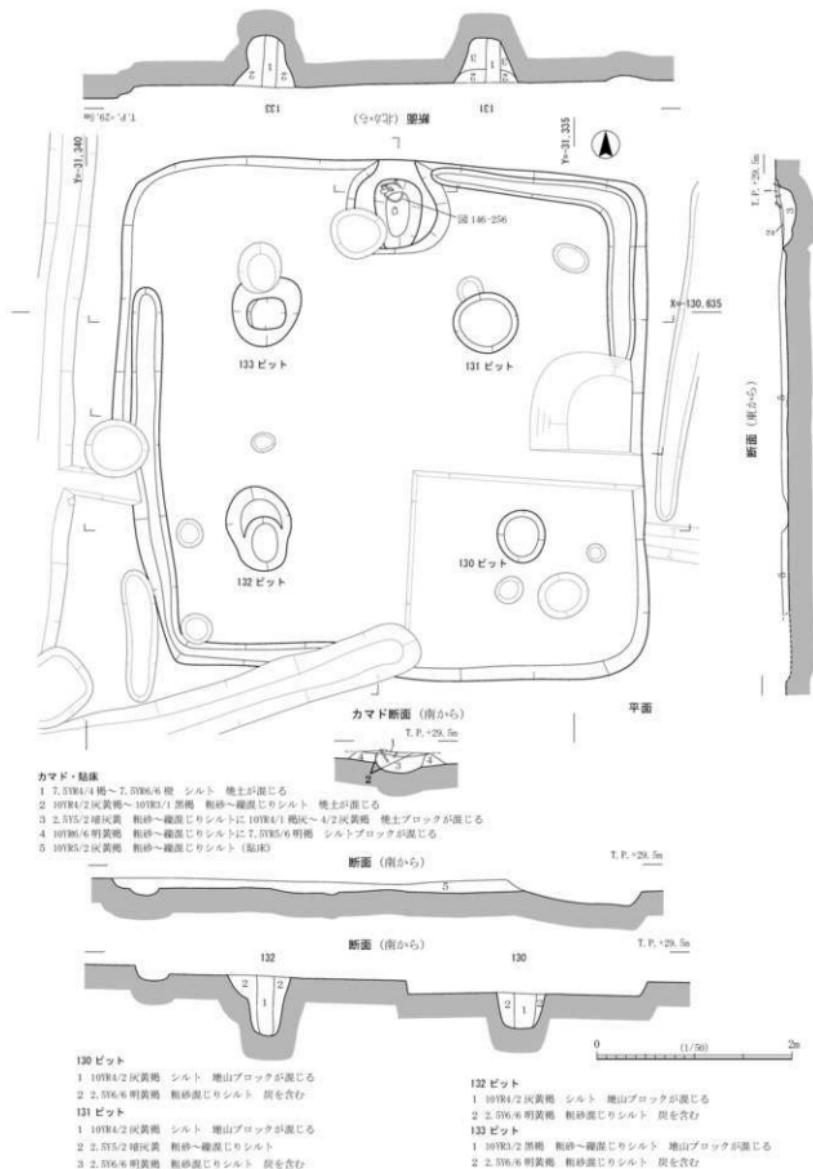


図17 5区 第3面豎穴建物2

を検出した。

**豎穴建物1**（図16 写真図版6・16・20）5区中央部南西側に位置する。南東部が近代の溜池により攪乱を受け全体の3分の1程しか遺存しない。東西4.7m、南北4.3m、検出面からの深さは0.2m。建物北東部の床面で主柱穴と考えられる139ピットを検出した。

建物北辺中央部では第3面検出段階から、焼土や炭屑が認められた。これらの状況に加え、比較的精良な白色の粘土を使用した袖と考えられる施設の存在からカマドと判断した（写真図版6・18・19）。豎穴建物1北東部の埋土から、8世紀前半の土師器壺（図146・248・249）、須恵器鉢（図146・252）・平瓶（図146・253）などが出土（写真図版6・17）し、他にも、8世紀前半の土師器（図146・247）・須恵器（図146・251）や8世紀後半の土師器（図146・254・255）が含まれていた。調査時には、これらの土器は豎穴建物1に伴うものと考えていた。また、西壁際溝が掘立柱建物1南辺の92ピットと重複関係にあり、現地では西壁際溝の方が新しいと判断していた。

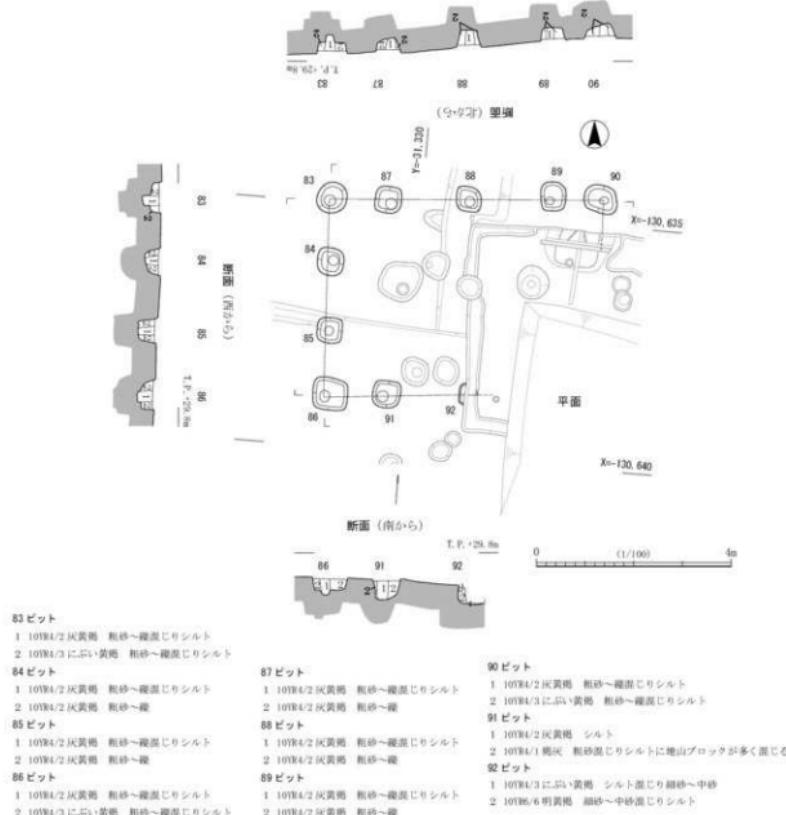


図18 5区 第3面掘立柱建物1

しかし、土器の出土した範囲が西壁際溝に比べて形がくぼれた幅広の溝状にくぼんでおり、さらに後述の奈良～平安時代と推定される掘立柱建物が重複していることから、8世紀の土器は掘立柱建物あるいはそれに関係する土坑状のくぼみの遺物とも推定できる。また、西壁際溝と掘立柱建物Ⅰの92ピットとの切り合い関係は認証であったかもしれない。

竪穴という形状で、東壁際溝から6世紀後半の須恵器（図146・250）が出土し、さらには西方約5mに同時期の土器が出土した竪穴建物Ⅱが存在するということを考えあわせ、ここでは竪穴建物Ⅰも6世紀後半の所産と判断しておきたい。

**竪穴建物Ⅱ**（図17 写真図版7・21・22・25）5区中央部南西側、竪穴建物Ⅰの西約5mに位置する。上部が削平され、遺存状態は悪い。東西約5.5m、南北約5.3m。建物南東部についてはやや掘りすぎたが、それ以外の部分では床面と考えられる遺構面を確認し、主柱穴である130～133ピットを検出した。これらのピットからは遺物は出土しなかった。

建物北辺中央部にはカマドがあり、焼土などが認められるとともに、支脚に転用された6世紀後半の

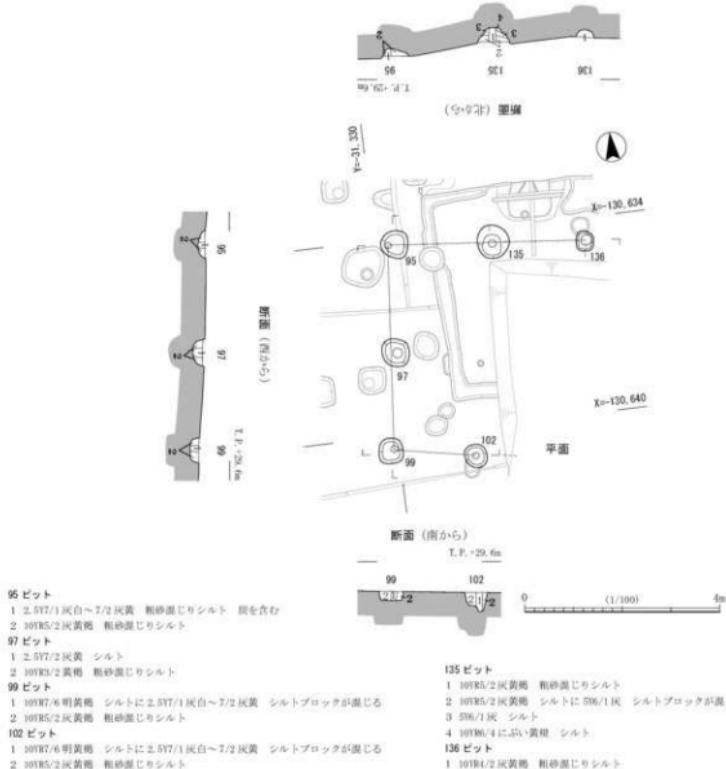


図19 5区 第3面掘立柱建物2

土師器甕（図 146 - 256）も検出できた（写真図版 7 - 23・24）。

竪穴建物 2 の埋土からも、6世紀後半の土師器・須恵器（図 146 - 257・258）などが出土した。

**掘立柱建物 1**（図 18）5 区中央部南側に位置する。主軸方位は N 86° E で、桁行 4 間（5.6 m）・梁行 3 間（4.0 m）、面積 22.4 m<sup>2</sup> の側柱建物である。

西辺の 84 ピットから古代の土器細片が出土したが、他のピットからは遺物は出土しなかった。

**掘立柱建物 2**（図 19）掘立柱建物 1 の南部に重複する。竪穴建物 1 と同様に南東部が擾乱されている。主軸方位 N 8° E、桁行 2 間（4.2 m）・梁行 2 間（3.9 m）、面積 16.4 m<sup>2</sup> の建物と考えられる。中央の柱の存否は明確ではない。

北辺の 135 ピットから 8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯（図 146 - 261）、136 ピットから 8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯（図 146 - 262）、南辺の 102 ピットから 8世紀末～9世紀初頭の土師器（図 146 - 259）・須恵器（図 146 - 260）などが出土した。

**15 土坑** 5 区南西部位置する。平面は東北東・西南西を主軸方位とする長楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.3 m、深さ 4 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**17 土坑** 15 土坑の東北東 1.1 m に位置する。平面は北東・南西に長いいびつな楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.3 m、深さ 9 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。7世紀後半の土師器甕（図 146 - 270）などが出土した。

**20 土坑** 15 土坑の南 1.2 m に位置する。溝状の規模の大きな土坑で、東北東・西南西を主軸方位とする。長径 5.6 m、短径 1.3 m 以上、深さ 21 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。7世紀初頭の須恵器（図 146 - 272）、8世紀中頃の土師器・須恵器（図 146 - 271・273）などが出土した。

**145 土坑** 竪穴建物 1 の北西部に位置し、それよりも古い。平面は隅丸方形で、東西 1.2 m、南北 1.0 m、深さ 24 cm。埋土は、上層が 2.5Y7/6 明黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～粗砂ブロックが混じる、下層が 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂～中砂に 10YR6/6 明黄褐色シルトブロックが混じる。古代の土器細片が出土した。

**21 溝** 20 土坑の東端と重複関係にあり、それよりも新しい。20 溝とほぼ直交し、北北西・南南東を主軸方位とする。長さ 4.2 m、幅 1.0 m、深さ 25 cm。埋土は、上層が 10YR6/1 褐灰色粗砂混じりシルト、下層が 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルトと似た層相であるが、その層境に 2.5Y7/2 灰黄色細砂が薄くはさまる。8世紀中頃の須恵器（図 146 - 274～277）などが出土した。

**その他の溝** 地山層上面であるこの第 3 面にも、第 IV 層・第 V 層が存在しない範囲では、第 2 面と同様な耕作に伴う溝がみられた。それらの溝のうち、44 溝から 8世紀中頃の須恵器（図 146 - 278・279）、146 溝から古代の土器細片などが出土した。

**ピット** 柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は、掘立柱建物や竪穴建物の柱穴となるもの他にも、12・31・39・53・54・60・96・98・121・123・137 ピットで認められた。平面分布をみると、柱痕跡のある 137 ピットから 2.1 ～ 2.5 m 間隔でほぼ一直線に西に並ぶ 18・16・13 ピットのような例もあるが、それら 3 個のピットは浅く埋土も单層で、柱穴と断定するには根拠が弱い。その他のピットは单層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。

それらのピットからは、6世紀後半～8世紀の土師器（図 146 - 265）・須恵器（図 146 - 263・264・266～269）が出土した。

## 第5節 6区（集会所）の遺構

6区は調査地北西部に位置する。集会所の建設に伴う調査である。T.P.+30.8～31.2mの現地表面から、T.P.+29.8～30.0mの第2面まで調査した。最終面での調査面積は268m<sup>2</sup>。

6区の大部分は旧住棟の基礎および基礎解体時の搅乱を、また南部は水道管理設による搅乱を受けており、遺構面を検出できたのは6区南西部のごく狭い範囲に限られた。平面は7区とともに掲げる（図22・23）。

### 層序（図20）

6区ではそのほとんどが搅乱のため、層序を観察できる調査区壁面がほとんどなかった。そこで、かろうじて堆積状況の手がかりが得られる6区南西部をもとに、断面模式図を作成した。

第0層（1）は、基本層序の第0層に該当する。昭和40年代の旧住棟の建設や撤去に伴う搅乱層である。

第1層（2）は、基本層序の第1層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当する。

第2層（3）は基本層序の第II層以下に該当するが、遺存状況が悪く遺物も全く出土しなかった。

### 第1面（図22 写真図版8-26・27）昭和14年以後

禁野火薬庫に伴う昭和14（1939）年爆発関連層（第1層）上面である。面の高さはT.P.+29.8～30.0m。顕著な遺構は検出できなかった。

### 第2面（図23 写真図版8-28）昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第1層）を除去した面で、地山層上面である。面の高さは、部分的に第1面よりもわずかに低いが第1面とほぼ同様のT.P.+29.8～30.0m。この面でも顕著な遺構は検出できなかった。

6区は地山層が高いため、中世以前の包含層（第III層以下）は確認できなかった。

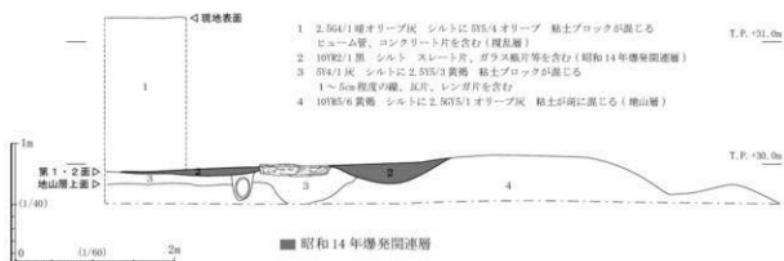


図20 6区 南西部断面模式

## 第6節 7区（E棟）の遺構

7区は調査地北西部、6区の西側に位置する。住宅E棟の建設に伴う調査である。T.P.+31.0～31.2mの現地表面から、最深部でT.P.+29.6mの第4面まで調査した。最終面での調査面積は471m<sup>2</sup>。

7区中央部は旧住棟の基礎および基礎解体時の擾乱を、北端と南東部は旧住棟に伴う埋設管による擾乱を受ける。そのため、遺構面を検出できたのは7区の北東部と南側の一部であった。

### 層序（図21）

7区で堆積状況が比較的良く分かるのは、南壁西半部のみである。

**第0層（1～8）**は、基本層序の第0層に該当する。昭和40年代の旧住棟建設時の盛土層などが主体を占める。

**第1層（9～11）**は、基本層序の第1層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当する。

**第2層（15～26）**は基本層序の第II層・第III層・第V層・第VI層に該当する。ただし、この7区は今回の調査地の中では現地表面や地山層上面が最も高い地点ということもあってか、他の調査区に広く分布している火薬庫造成以前の旧作土層やそれ以前の包含層はほとんど残っていない。第II層のなかでも禁野火薬庫造成のための盛土層が主体となっている。

7区では、第3面が地山層（第VII層）上面となる。

### 第1面（図22 写真図版9・29・30）昭和14年以後

禁野火薬庫に伴う昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）の上面である。面の高さはT.P.+29.7～30.2mで、南西部が高く、北東部が低い。第1面の顯著な遺構は検出できなかったが、第2面の遺構が頭を出していた。

### 第2面（図23 写真図版9・31）昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第I層）を除去した面で、禁野火薬庫造成に伴う盛土層（第II層）上面である。面の高さはT.P.+29.6～30.1mで、第1面と同様に、南西部が高く、北東部が低い。遺構として、枕木土坑、石組溝、溝、ピット、土坑を調査した。

**3～16枕木土坑（軽便軌道）**（図24 写真図版9・32）7区北東部に位置し、東西方向に延びる。個々の枕木土坑は、南側が擾乱されているので長さが不明だが最も残りの良い6枕木土坑からみて0.95m以上、幅約0.3m、検出面からの深さは17～24cm。埋土は、10YR3/2黒褐色シルト混じり疊。枕木の間隔はおよそ0.7mだが、6・7枕木土坑間が他と比べて0.1mほど狭く、そこから5m西の13・14枕木土坑間も他よりもわずかに間隔が狭いので、その間がレールの継ぎ目とすれば、後述する11区第3面8～45枕木土坑と同様にレールの長さが5mであったと推定できる。この軽便軌道は、明治42（1909）年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫一般配置図」にはみられるので、これ以前の竣工であろう。廃絶は、昭和14年の爆発によると考えられる。

6枕木土坑から砲弾関連品（図141～200）、14枕木土坑から磁器が出土した。

**17～20枕木土坑（軽便軌道）**7区西端に位置し、南北方向に延びる。3～16枕木土坑よりもさらに残りが悪い。この軌道は、大正13（1924）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫図」にはみられる



図21 7区南壁断面

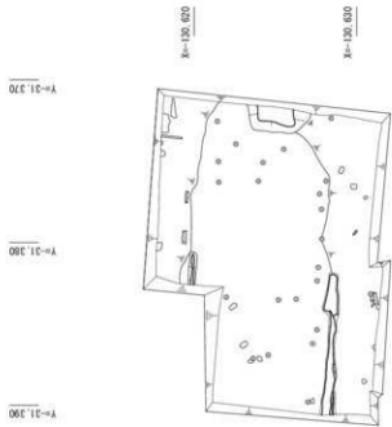
44

図22 6区・7区 第1面

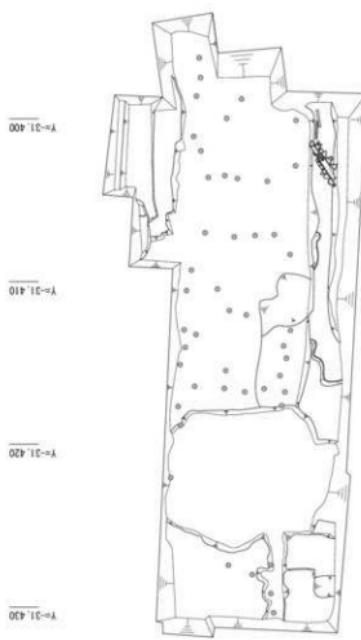
20m  
(1/200)

●旧住棟の基礎

6区



7区



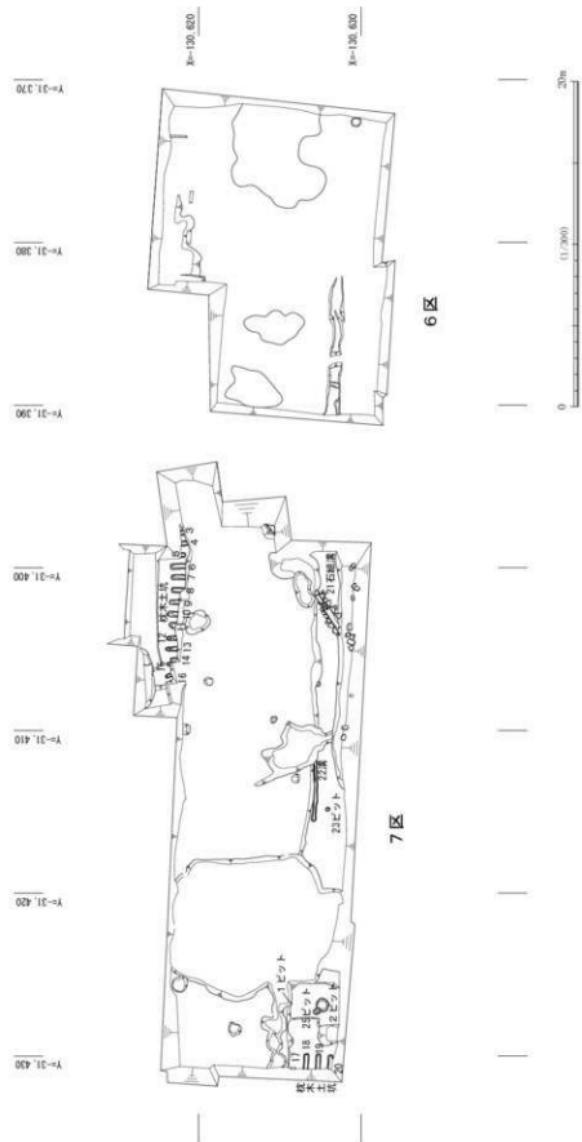


图23 6区・7区 第2面

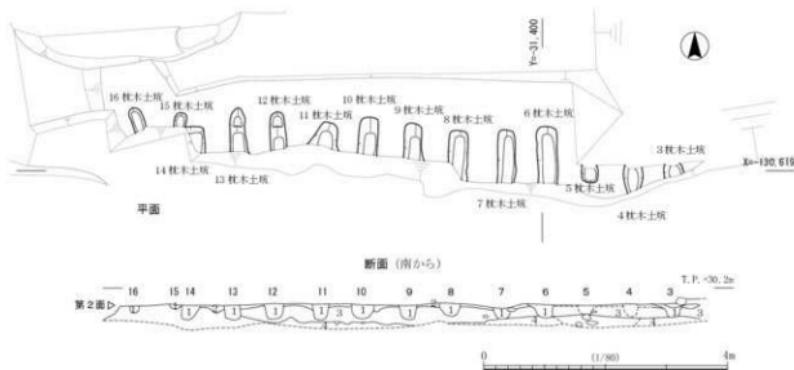


図24 7区 第2面3～16枕木土坑

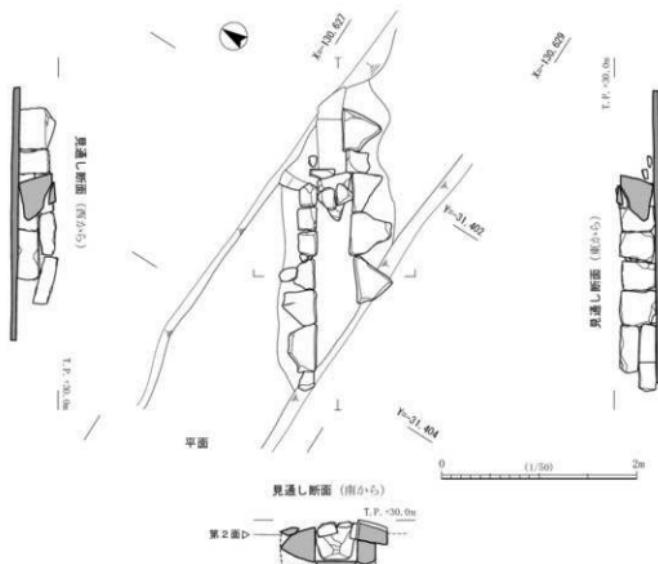


図25 7区 第2面21石組溝

で、これ以前の竣工であろう。3～16 枕木土坑と同様に、昭和 14 年の爆発で廃絶したものであろうか。

**21 石組溝**（図 25 写真図版 9・33）7 区南東部に位置する。主軸方位は北東・南西。溝の内法は幅 40～45 cm。深さは現存する間知石からみると 40 cm 以上だが、周辺から出土した笠石（長さ 114～116 cm、幅 15 cm、高さ 13～14 cm）を加味すると、55 cm 程度はあったものと推定できる。間知石・笠石ともに花崗岩である。溝の底には、モルタルが厚さ約 6 cm に敷かれている。この石組溝も 3～16 枕木土坑と同じく明治 42 年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫一般配置図」に記載されている。石組溝は軽便軌道の両側あるもののように、今回の検出の石組溝の西側では軌道が検出されなかったことから、溝の東側である 6 区と 7 区との間に北東・南西方向の軌道が存在したと推定できる。

**1 ピット** 7 区南西部、17 枕木土坑の東約 3 m に位置する。ピットの中部以北は擾乱され、南部のみを検出した。平面円形と仮定すれば推定直径約 30 cm、深さ 30 cm。埋土は、上層が 10YR3/3 暗褐色シルト、下層が 2.5Y 暗灰黄色シルトに炭化物が少量混じる。

**2 ピット** 1 ピットの南約 1.5 m に位置する。第 2 面調査時には、平面円形で、直径 78 cm、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに炭化物が少量混じっていた。第 3 面での直下にさらに、10YR1.7/1 黒色の細砂～粗砂に 10YR5/8 黄褐色シルトブロックが混じるものに砲弾片や煉瓦を含むピットを検出したが、これは 2 ピットの掘り残しであり、深さは合わせて 32 cm であったと判明した。砲弾片、鎧（図 136・79・86）、金属製品（図 137・132・133）などが出土した。

**22 溝** 12 区中央部南側部に位置する。主軸方位は東西で、検出長約 3.7 m、幅 0.2～0.3 m、深さは 6 cm と浅い。埋土は、5YR3/4 暗赤褐色シルトにマンガン斑が混じる。

**23 ピット** 22 溝の南約 1 m に位置する。平面円形で、直径 21～24 cm、深さ 17 cm。埋土は、10YR4/4 褐色シルトにマンガン斑が混じる。

**25 ピット** 2 土坑の北西部にあり、重複関係にある 2 土坑よりも新しい。平面円形で、直径 21～24 cm、深さ 17 cm。埋土は、10YR4/4 褐色シルトにマンガン斑が混じる。

### 第 3 面（図 26 写真図版 10・34・35）古代か

地山層である砂層（第Ⅶ層）の上面である。面の高さは T.P.+29.6～29.9 m。ピットを 2 個検出した。

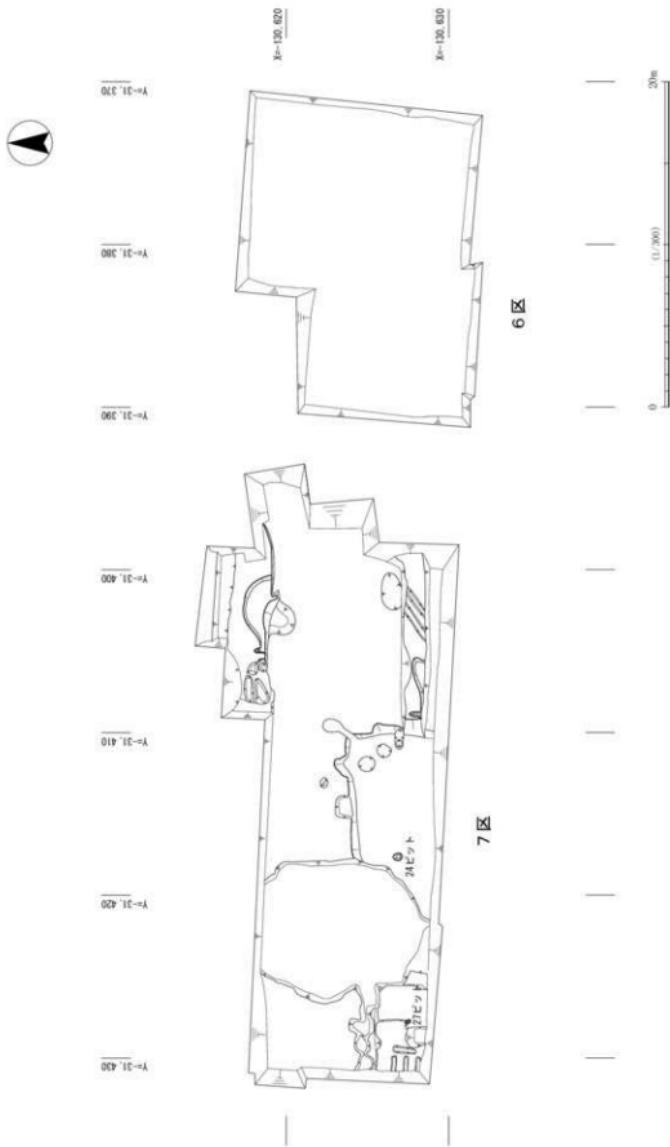
**24 ピット** 7 区中央部南西側に位置する。平面不整円形で、南北 55 cm、東西 48 cm、深さ 11 cm。埋土は、5Y4/1 灰色シルト。

**27 ピット** 7 区南西部に位置する。平面楕円形で、北西・南東に長い。長径 30 cm、短径 22 cm、深さ 5 cm。埋土は、5Y5/1 灰色シルト～細砂に 10YR6/8 明黄褐色粗砂が混じる。

### 第 4 面（写真図版 10・36）

地山層の確認のため、7 区の西部でのみ第 3 層を掘り下げて検出した。第 3 層中から遺物は出土せず、T.P.+29.5～29.8 m の第 4 面では遺構はみられなかった。これらの状況から、第 4 面ではなく第 3 面が地山層上面であると判断した。

図 26 7区 第3面



## 第7節 8区（D棟）・8-2区（防火水槽D）の遺構

8区は調査地中央部に位置する。住宅D棟の建設に伴う調査である。8-2区は8区の北西側に接する防火水槽Dの設置に伴う調査である。以下、とくに区別する必要がない場合は両者を合わせて「8区」と記述する。T.P.+30.4～31.3mの現地表面から、T.P.+27.7～30.1mの第6面まで調査した。最終面での調査面積は、8区と8-2区を合わせて1419m<sup>2</sup>である。

第1面は禁野火薬庫の面。搅乱部分も多かったが、8区西半では明治・大正時代の建物、土坑、石組溝、土塁、職工廻が、8区東半では昭和時代の土塁、建物、軽便軌道、貯水池、溝、ピットが良好に残っていた。

第2面は中世～近世の面。土坑、ピット、溝を検出した。

第3面は古代～中世の面。土坑、溝、鋤溝群を検出した。

第4面は古代の面。溝とピットを検出した。

第5面も古代の面。溝、土坑、ピットを検出した。

第6面は地山層上面。古代ないしそれ以前の掘立柱建物、井戸、溝、土坑、多くのピットを検出した。

### 層序（図27 写真図版24-83）

8区では最も残りの良い南壁の断面を掲げる。

第0層は、基本層序の第0層と第I層に該当する。第0層は、今回の工事に伴う碎石層（3）ならびに昭和40年代の旧住棟建設時の盛土層（11）や各種埋設管など（4～8）を主とする。第I層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕は残りが悪いが、禁野火薬庫関係の土塁基礎（12・14～18）や溝（13）は確認できる。

第1層は、基本層序の第II層に該当し、昭和11（1936）年以降に造られた19土塁の盛土（19～27）、明治42（1909）年の爆発後に造られた18土塁の盛土（28～37）、火薬庫造成以前の旧作土層（38・39）、中世～近世の包含層（40～49）に分けられる。火薬庫造成直前の旧作土層は、段状に設えられている。

以下、第2層（50・51）は基本層序の第III層、第3層（52・53）は基本層序の第IV層、第4層（54～56）は基本層序の第V層、第5層（57）は基本層序の第VI層にそれぞれ該当する。第IV層が明瞭に認められたのはこの8区だけであった。第6面が地山層（58・第VII層）上面で、西が高く東に向かって下がる。

### 第1面（図28 カラー写真図版1-1 写真図版11-37・38、25-84）昭和14年前後

8区では、第I層は遺構埋土などでは確認できたが面的には良好に遺存しなかったので、第II層上面を第1面とした。面の高さは、8区西部ではT.P.+30.4mで、そこから東に向かって緩やかに下がる。遺構として、禁野火薬庫に関係する諸施設を検出した。

8区の西部と8-2区は、明治29（1896）年に用地買収され明治40年代に火工場や土塁が築かれた部分である。大正2（1913）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図」などによると、8区周辺では旧地表面が西に向って下がっているが、調査でもそれが追認できた。

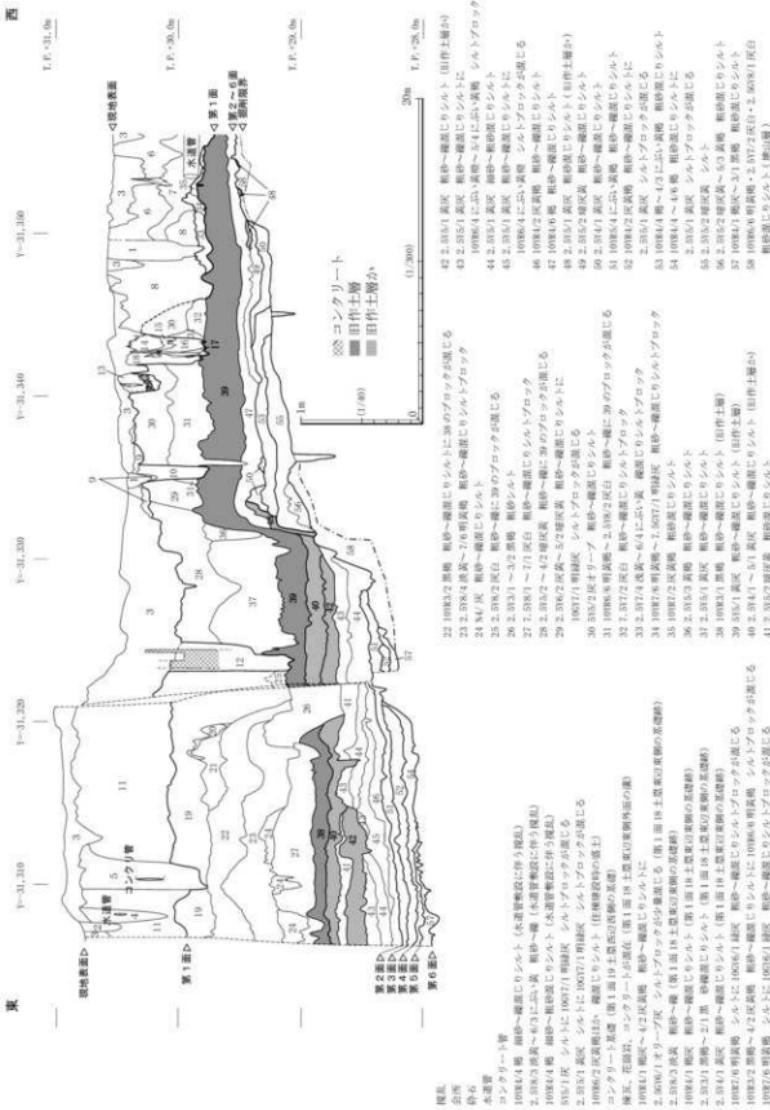


図 27 8 区 南壁断面

図28 8区 第1面



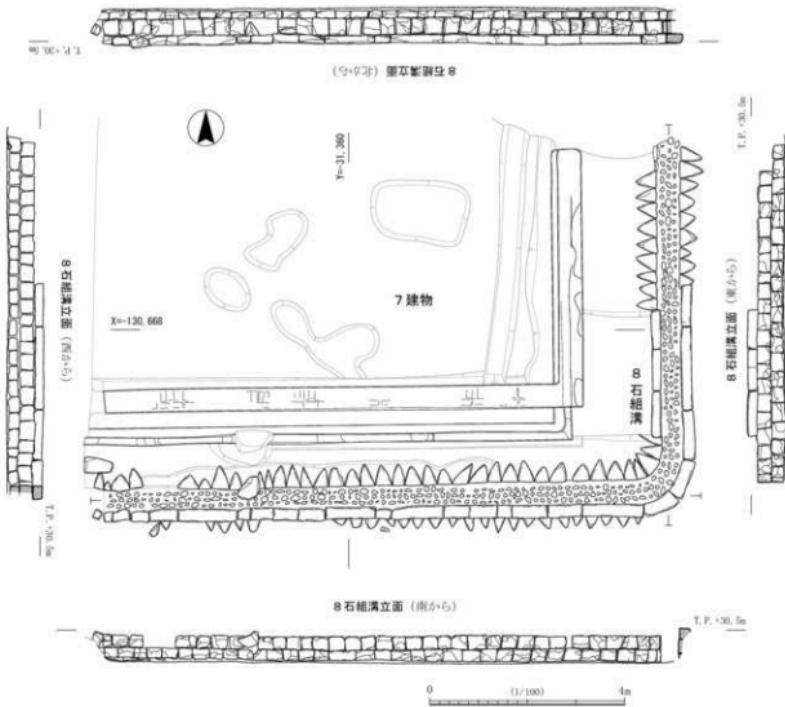
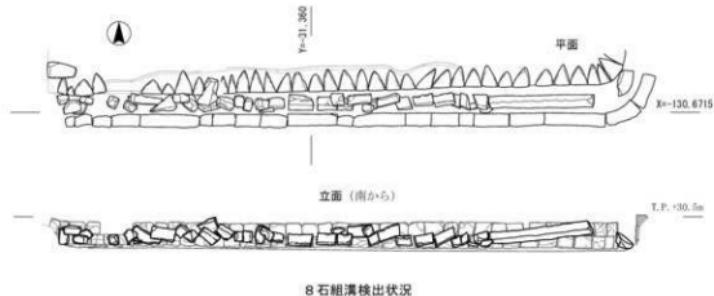


図29 8区 第1面 7建物・8石組溝

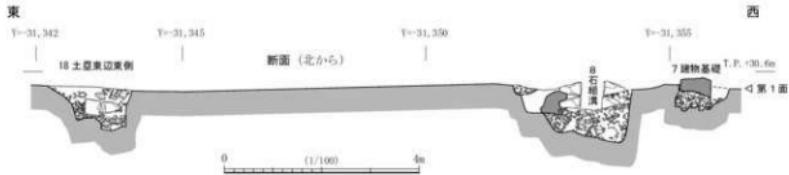


図30 8区 第1面 7建物・8石組溝・18土塁東辺東側断面

一方、8区中央部以東は明治43（1910）年に用地買収され、盛土により平坦化された後、昭和10（1935）年頃から諸施設が設けられた部分にあたる。

**明治・大正時代の遺構** まず、8区西半に位置する明治・大正時代に造られた建物、土坑、石組溝、土塁、職工廻から報告する。

**7建物**（図29・30 写真図版12-39・13-44） 8区西端に位置する。平成15・16年度調査で検出された昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」記載の第18号倉庫の東側部分であり、それ以前の火工場・倉庫の跡でもある。建物基礎は、溝を掘り、栗石を入れ、その上にコンクリートを打ち、さらにその上に煉瓦を積んで構築されている。基礎上部に使用された煉瓦のうち製造会社が判明したものは、岸和田煉瓦製であった。

この建物は、明治42（1909）年8月22日の爆発時には工事未着手で、爆発後に新築され、明治43（1910）～昭和9（1934）年は6号火工場、昭和10（1935）～昭和14（1939）年は5号火工場と称されていた。

昭和14年の爆発後には倉庫になり、昭和16（1941）年には第30号倉庫、昭和20（1945）年には第18号倉庫と呼ばれていた。爆発後の倉庫の基礎の南辺は、爆発以前の火工場の基礎よりも心々距離でおよそ0.8m南に設けられている。北辺も、平成15・16年度調査成果からみて北へも拡張していると考えられる。東辺は、爆発以前の火工場の基礎を再利用した上で、南北へ延伸されている。

**8石組溝**（図29・30 写真図版12-40～13-45） 7建物は東・南・西辺を土塁で囲まれており、土塁裏には間知石を2段積みその上に笠石を置いた石組溝がめぐらされている。そのうち、7建物の東辺と南辺東部の部分を8石組溝として調査した。

溝の南辺には爆発時に崩落あるいは廃棄されたと考えられる溝の笠石などが転落しており（図29上）、それらに混じって金属製品（図138-136・140-183）、スレート瓦（写真図版81-1102）、煉瓦などが出土した。溝底は、3列の円礫を配しモルタルで固められていた（図29下）。

間知石の石材は、禁野本町遺跡から南東約4km離れた交野市倉治付近に産する中粒黒雲母花崗岩である（奥田尚氏のご教示）。

**43～45土坑** 3基とも7建物と8石組溝との間に位置し、建物に沿った方向に長い楕円形を呈する。第1面では見つけられずそこから約20cm下がった第2面で検出したが、内部には炭が充填されており周辺の土層とは一見して区別できる。したがって、7建物の存続時期のある段階に設けられた遺構だが、7建物や8石組溝が廃絶した時期には、地表面下に隠れていたものと推定できる。火工場に伴う施設で、除湿を狙ったものであろう。

**43土坑**は、平面は南北に長い楕円形で、南北1.1m、東西0.8m、深さ1.0m以上。鉄釘が出土し

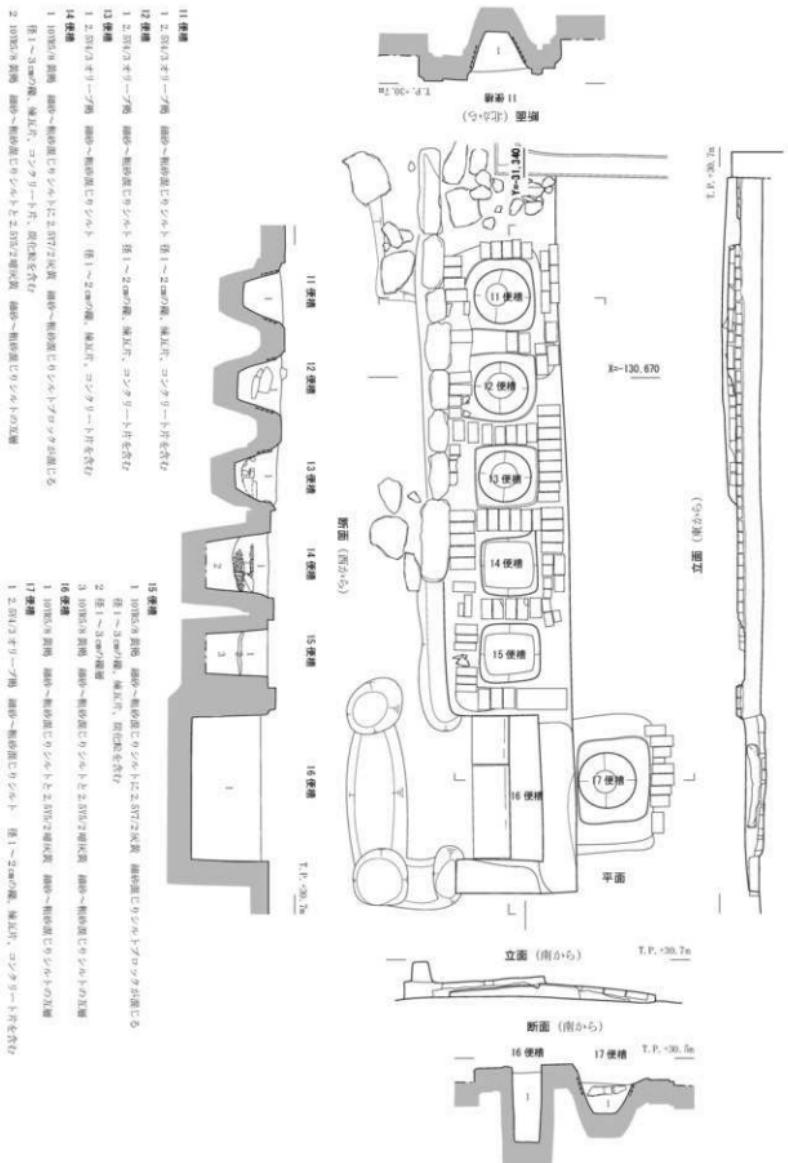


図31 8区 第1面10職工廻

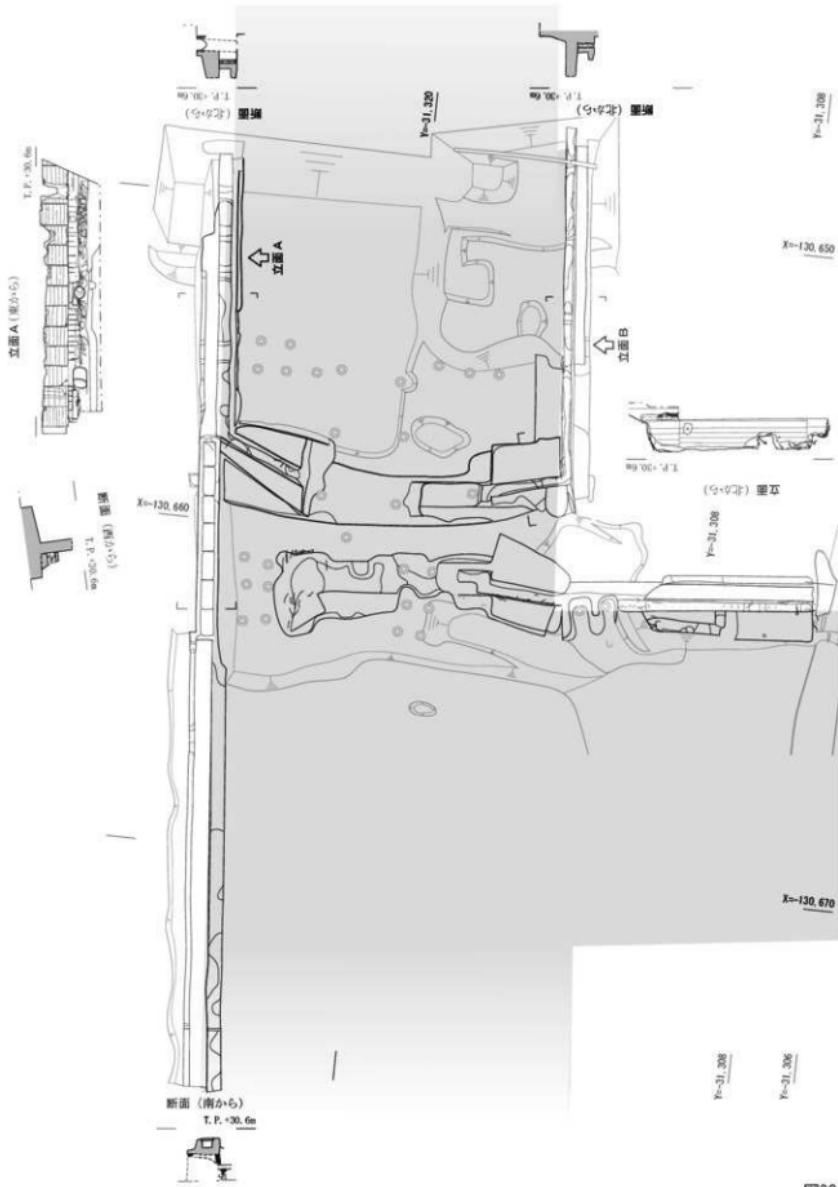
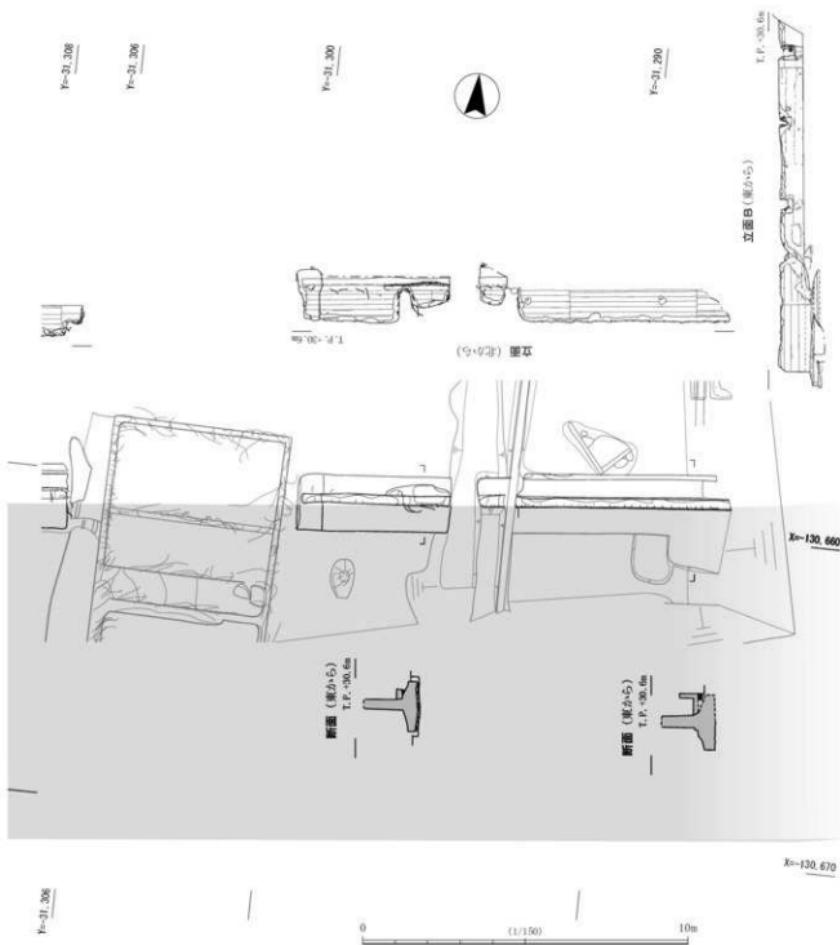


図32



8区 第1面 19 土壁

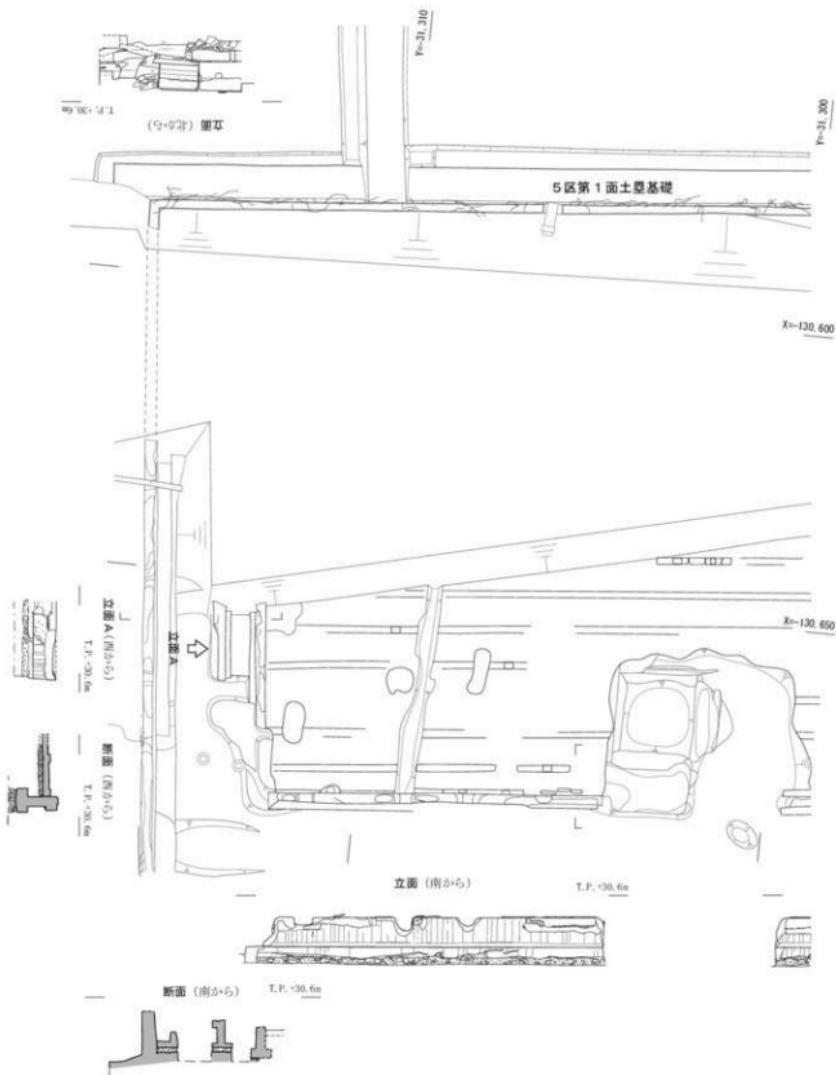
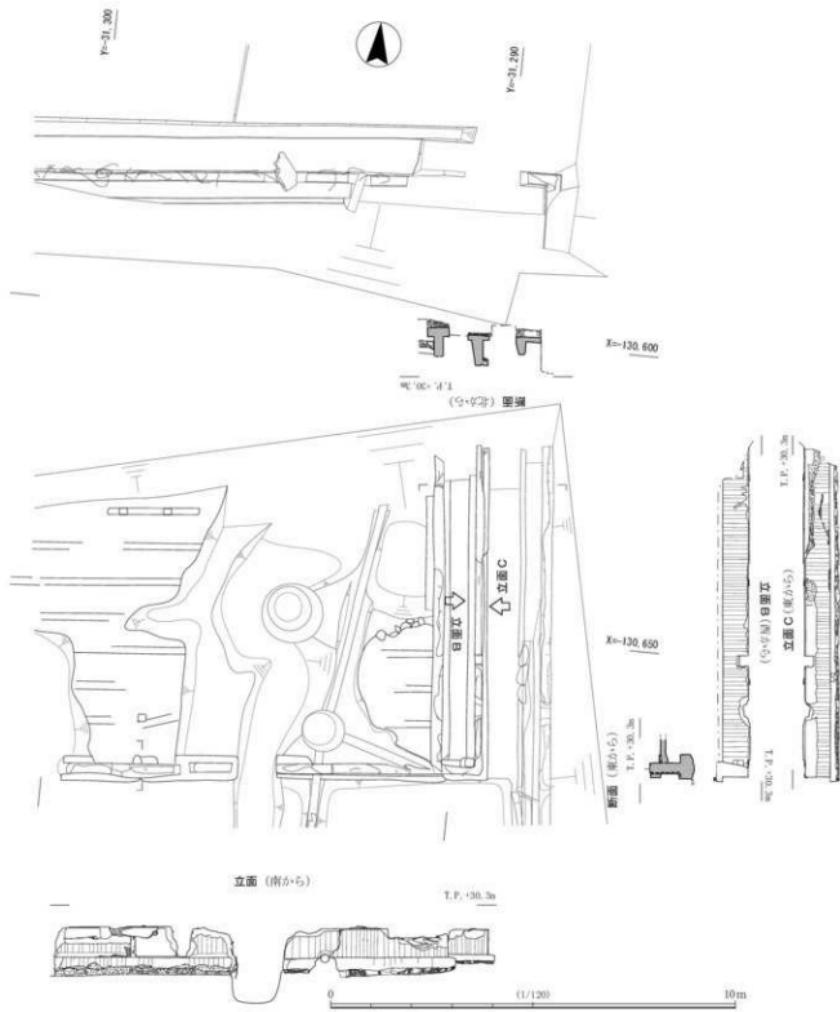


図33



8区 第1面20建物

た。

44 土坑は、平面は東西に長い楕円形で、東西 1.1 m、南北 0.6 m 以上、深さ 1.2 m 以上。

45 土坑は、平面は東西に長い楕円形で、東西 1.2 m、南北 0.6 m 以上、深さ 1.3 m 以上。

18 土壘 7 建物の東側から南側にめぐる土壘である。心々距離にして 7 建物の 2.1 m 東にある 8 石組溝が 18 土壘の南北部分の西側外間にあたる。18 土壘東辺東側には、図 30 に掲げるように断面観察により基礎と考えられるコンクリート塊などがみられた。痕跡から推して、18 土壘の基底部幅は約 10 m と考えられる。

10 職工廄（図 31 写真図版 14・46～49）18 土壘の東側に位置する。溝を掘り込み、栗石を入れ、コンクリートを打ち、その上に煉瓦を積んだ基礎である。この構築方法は 7 建物と類似している。コンクリートと煉瓦基礎に囲まれた方形区画部分に便槽を設置し、その周間にコンクリートを打っている（写真図版 14・48）。使用された煉瓦は、日本煉瓦株式会社の刻印が確認できた 1 点以外は、岸和田煉瓦製である。

南端にある平面長方形の 16 便槽が小用で、鉢の埋められた 11～15 便槽が大用であったと推定できる。さらに想像を逞しくすれば、東側に張り出して設けられた 17 便槽は、その位置と当時の弾薬庫における関係者の男女比からみると、女子便所であったのかもしれない。

11～15・17 便槽に使用された陶器の鉢（図 128・19～129・22）は、内面に尿石などの付着はみられず、容量もさして大きくない。維持管理の方法が気になるところである。

この職工廄は、大正 2（1913）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」などからみて、大正時代頃（1910 年代から 1920 年代前半頃）に機能していたと考えられる。

昭和時代の遺構 次に、8 区東半の昭和 10（1935）～11（1936）年にかけて新設された土壘、建物、軽便軌道、貯水池、溝、ピットを報告する。

19 土壘（図 32 写真図版 15・50・16・56）8 区東部、次に報告する 20 建物の東西および南を囲む形で検出した。土壘の規模は、基底部幅約 10 m、高さは遺跡周辺の現存する土壘や下部のみが残る土壘断面の表面が約 45 度の傾斜であることと頂部に幅の広い平坦面を造っていないことから推して約 5 m であろう。

土壘の盛土を支えるコンクリート基礎は、礫を敷き、フーチングを造り、その上に基盤を設けるという手順で構築されている。配水管が設けられた部分もある。

基礎外面には、全体的に型枠痕が残る。西辺西側内面や西辺東側外面上には、セバレータ（仮設型枠間隔保持材）の跡も点々と残る。水抜き穴は、西辺東側外面上に直径 5～6 cm のものがあり、南辺北側外面上では基礎の一部を壊して新たに水抜き孔を設け、その周囲をモルタルで埋めたものもみられる。さらに、南辺北側には、木板の痕跡が残る打継目や、側溝の床面が剥離した痕跡も残る。上部が破壊された部分では鉄筋が露出していた。縱方向には 16 mm、横方向には 6 mm 径の鉄筋が使われている。

昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」によると、同年に東西方向の軽便軌道が新設されたと推定できるが、この軽便軌道が土壘をトンネルで通過する部分は、側溝にはコンクリート製の蓋が被せられ、盛土で覆われる土壘の内側部分にもコンクリート基礎が設置されている。この 19 土壘と後述する 9 区第 2 面 55 基礎と名付けた土壘基礎でも、トンネル北壁の下部に基礎があり、それらは土壘の外方に向かってハの字状に開いた平面形をしている。

**20 建物** (図33 写真図版 15・50~16・55) 8区北東部に位置する。建物のおよそ南北分を検出した。昭和10(1935)年9月16日起工、昭和11(1936)年7月30日授受の火工場2棟のうちの西側に存在した第4師団保管建物に該当する。この建物は昭和14(1939)年の爆発後、昭和16(1941)年には第28号倉庫、昭和20(1945)年には第16号倉庫となっている。

建物の基礎は、溝を掘り、栗石を入れ、捨てコンを打ち、その上にフーチングを築き、さらにその上にコンクリートを打って構築されている。基礎の外面には形枠痕が残るが、南辺では壁面にさらにモルタルを上塗りした部分もある。調査では、爆発後の倉庫への転用時における建物基礎の東西方向への拡張も確認できた。東西の壁の心々距離は、拡張前が22.0m、拡張後が23.8mである。

この基礎のうち、建物南側と東側、西側では、出入口の扉に伴うであろう溝状のくぼみなどが確認できた。南側の出入口は、後述する軽便軌道との荷物の積み下ろしのためと推定できる。一方、東西の出入口は土壠との間隙が狭く、とくに拡張後では1mもない。したがって、物資の出し入れには不向きで

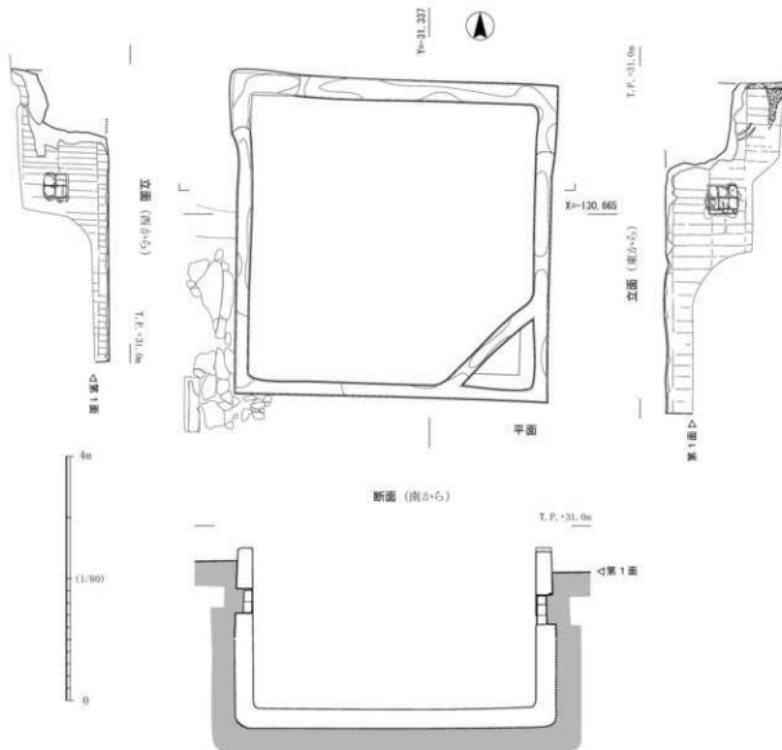


図34 8区 第1面 9貯水池

あり、作業員の出入りや換気などが目的だったのかもしれない。

建物内部の土間コンクリート上には、薙の痕跡や地下足袋で歩いた痕跡が多数見られた（写真図版 16・52）。また、アンカーボルトなどが埋められていることから、コンクリート上に木材を組み、その上に床を作っていたと考えられる。

**21 軽便軌道**（写真図版 16・57・58） 9職工廻の東側と 19 土塁との間で、南北方向に並ぶコンクリート製枕木を原位置で 11 本と遊離した 2 本検出した。個々の枕木（図 143・228・229）には犬釘を打ち込む孔が 4 個開いており、その位置からすると軌間（ゲージ）は 600 mm であろう。

『分廠歴史』によると、この軽便軌道は、昭和 8 年に「軽便軌道（延長）240 米（未填薬弾丸庫新設二伴フ付帶工事トス）」として敷設されたようである。他方、「大阪兵器支廠禁野彈薬庫圖」によれば、昭和 7（1932）年には存在し、昭和 8（1933）年ではなく、昭和 9（1934）年以降の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要圖」に再度描かれるようになる。昭和 17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要圖」にもみられることから、昭和 14 年（1939）年の爆発後も機能していたと考えられる。

**9貯水池**（図 34 写真図版 17・59～61） 8 区西部、8 石組溝の 10 数 m 東に位置する。『分廠歴史』記載の昭和 16 年 9 月 18 日に中部軍經理部より授受した 5 箇所のコンクリート製貯水池のうちの一つである。

貯水池の周囲は、平成 15・16 年度調査で検出されたものには雨水を溜めやすくするための勾配がつけられていたが、この 9 貯水池では残りが悪く痕跡的に認められたのみであった。

外側には型枠痕が残る。図 34 にあるように 9 貯水池の東壁には、予め型枠を入れ空間を確保して周辺のコンクリートを打った縦 49 cm、横 48 cm の孔に、長さ・幅とともに 17 cm、高さ 15 cm のコンクリート製ブロック 6 個と煉瓦 2 個を詰め、貯水池の内面からモルタルを塗り込めて孔を塞いでいる。西壁にも同様な孔があり、こちらは縦 40 cm、横 39 cm の孔に、コンクリート製ブロックを 4 個詰めて、貯水池の内面からモルタルを塗り込めて孔を塞いでいる。

内面は平滑に仕上げられており、内法は一辺 4.6 m、深さ 2.6 m である。貯水池の南東部には切梁が設けられており、それに扼された南壁には貯水池の上端から 50 ～ 60 cm 下に南からのびた鉄管が開口している。その鉄管は、9 貯水池付近から出土した接続部に栗本鐵工所の社印と「昭和十六年」と鑄出されたものと同種のものと推定されるが、それは貯水池の設置時期と一致する。貯水池底部の南東角付近は幅 20 cm、高さ 5 cm にわたって高まっており、切梁の真下も帶状に 10 cm 高くなっている。

**溝とピット** 以下の溝やピットは、8 区南西部に分布する。いずれからも遺物は出土しておらず、時期不詳である。

**1溝** 主軸方位は南北。長さ 1.6 m、幅 0.3 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト。

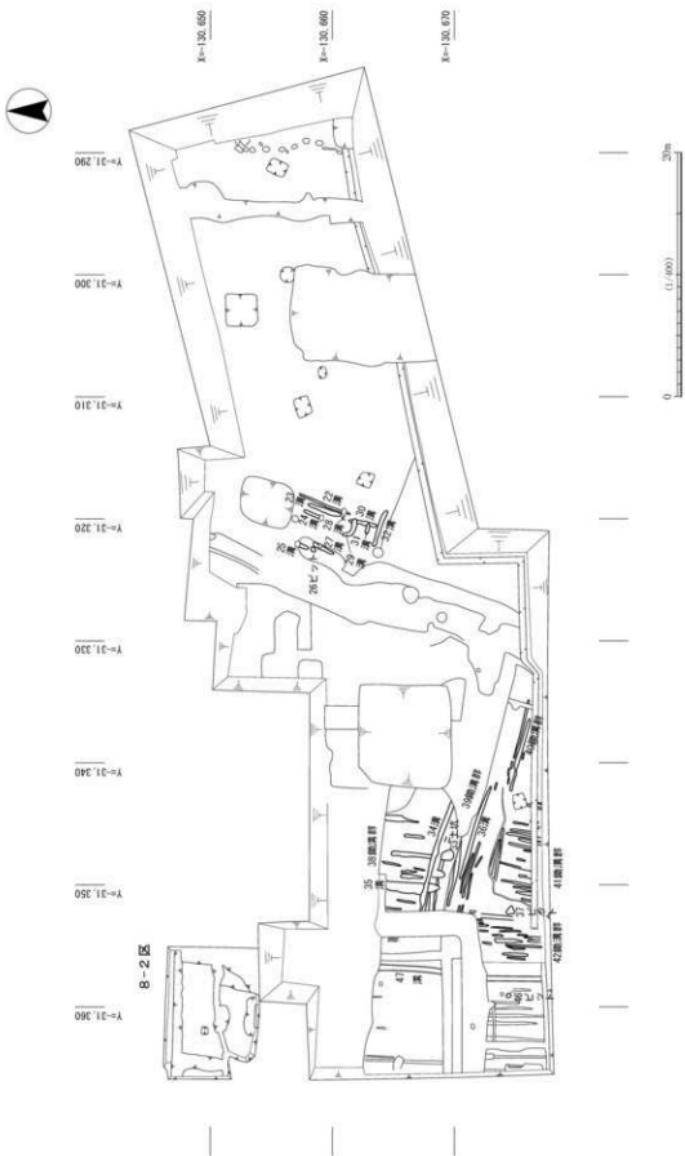
**2溝** 主軸方位は南北。長さ 2.2 m、幅 0.2 m、深さ 3 cm。埋土は、1 溝と同じ。

**3ピット** 平面隅丸方形で、東西・南北ともに 58 cm、深さ 8 cm。埋土は、7.5YR5/8 褐色細砂～粗砂混じりシルト。ピットの底に木杭が打たれている。何らかの柱穴の痕跡であろう。

**4溝** 主軸方位は南北。検出長は 2.1 m で、南部を 5 溝に切られている。幅 0.3 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色シルト混じり細砂～粗砂。

**5溝** 主軸方位は南北。検出長 0.9 m。幅 0.6 m、深さ 14 cm。埋土は、5YR5/4 にぶい赤褐色シルト

図35 8区第2面



～細砂。

**6 ピット** 平面不整円形で、直径約45cm、深さ11cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに10YR5/8 黄褐色シルト混じり細砂～粗砂と2.5Y5/3 黄褐色細砂混じりシルトが混じる。

## 第2面（図35 写真図版18・62～64、25・85） 中世～近世

禁野火薬庫に伴う盛土層と禁野火薬庫以前の旧作土層など（第II層）を除去し検出した第III層上面である。面の高さは、T.P.+28.1～30.3mで、西が高く東が低い。この高低差は、地山層上面である第6面まで同じ傾向にある。遺構として、8区西部において散在する土坑やピット、さらに溝を多数検出したが、東部や8・2区では顕著な遺構がみられなかった。

**26 ピット** 8区中央部に分布する溝群の西部に位置する。平面は北東～南西に長い楕円形で、長径45cm、短径30cm、深さ4cm。埋土は、5Y4/1 灰色シルト混じり細砂～粗砂。位置・形状・埋土からみて、このピットの北西にある溝25と一連のもの可能性もある。

**33 土坑** 8区西部に位置する。平面は北北西～南南東に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.9m、深さ9cm。埋土は、7.5YR6/1 褐灰色細砂～粗砂。

**37 ピット** 8区南西部に位置する。平面不整円形で、直径60～76cm、深さ4cm。埋土は、10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂。

**46 ピット** 8区南西部に位置する。平面円形で、直径34～36cm。深さ46cm。

**溝群** 耕作に伴うと考えられる素掘り溝を多数検出した。主軸方位は、8区中央部の22～25・27・28・30溝や西部の41鉗溝群は北北東～南南西、それらにほぼ直交するのが8区中央部の29・31・32溝や西部の34・36溝・39・40鉗溝群である。35溝や42鉗溝群はおむね南北方向を主軸方位とする。方位の違いが時期差の反映かもしれないが、細片ばかりの出土土器からは不明である。溝は、いずれも第II層下部と同じ10YR4/6 褐色粗砂～礫混じりシルトや2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂～礫混じりシルトを埋土とする。

## 第3面（図36 写真図版19・65～67・25・86） 古代～中世

第III層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+28.0～30.3mで、西が高く東が低い。8区西端と8・2区では、第III層を除去したこの段階で地山層（第VII層）が露出した。遺構として、土坑、溝、鉗溝群を検出した。

**51 土坑** 8区南西部に位置する。平面は西北西～東南東に長い隅丸方形で、長径1.7m、短径1.0m、深さ14cm。埋土は、2.5Y6/6 明黄褐色シルト混じり細砂に2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂～粗砂がブロック状に混じる。出土遺物なし。

**8・2区1土坑** 8・2区西部に位置する。平面はほぼ円形と推定され、南北1.1m、東西0.9m、深さ44cm。埋土は、上部が2.5Y5/2 暗灰黄～2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混じりシルトに10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～礫混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**52 溝** 51土坑のすぐ南に位置し、東西方向に延びる。検出長3.6m、幅0.6m、深さ16cm。埋土は、2.5Y6/6 明黄褐色シルト混じり細砂～礫に2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルトのブロックや炭が混じる。出土遺物なし。

**53 溝** 8区南西部に位置し、主軸方位は北北東～南南西で、南側は調査区外に延びる。検出長2.6m、

図 36 8区 第3面

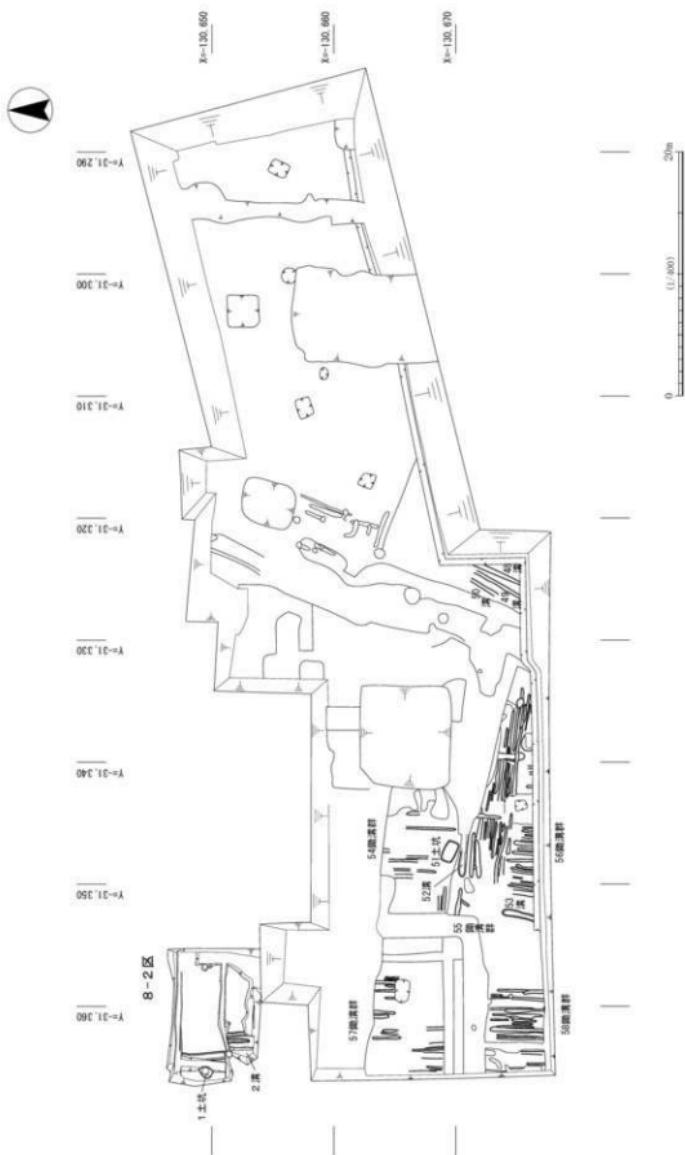
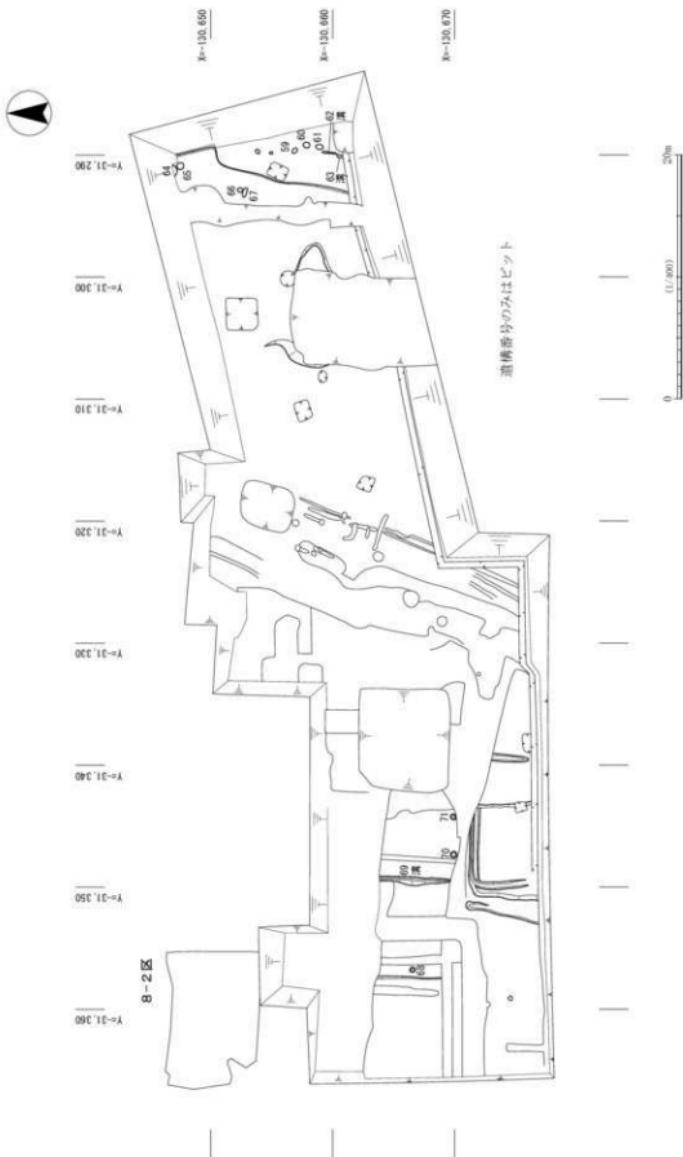


図 37 8区第4面



幅 0.6 m、深さ 6 cm。埋土は、5Y5/2 灰オリーブ色シルト混じり細砂～粗砂に 5B5/1 青灰色シルト混じり細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**8 - 2 区 2 溝** 8 - 2 区南西部に位置する。主軸方位はほぼ南北で、検出長 5.9 m、幅 0.7 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色～10YR4/1 褐灰色に粗砂～礫混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**溝群** 8 区西部と 8 - 2 区の搅乱されてない部分では、一面に南北あるいは東西方向のいわゆる鉤溝を検出した。その幅は 0.1 ～ 0.4 m 程度、深さは 2 ～ 4 cm と浅い。埋土は、基本的に第Ⅲ層と同じ 10YR4/4 褐色粗砂などが多いが、41 鉤溝群の一部では 2.5Y7/3 浅黄色細砂と 2.5Y7/1 灰白色シルト混じり細砂が混じり、48 ～ 50 溝は 2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルトに 10YR5/8 黄褐色細砂～中砂混じりシルトが混じっている。48 ～ 50 溝から土器細片が出土した。

#### 第4面（図37 写真図版20-68～70）古代

第Ⅳ層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+27.9 ～ 30.2 m で、西が高く東が低い。遺構として、溝とピットを検出した。

**62 溝** 8 区南東隅に位置する。主軸方位は南北で、長さ 1.1 m、幅 0.1 m、深さ 5 cm。埋土は、10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**63 溝** 62 溝の南部に位置する。主軸方位は南北で、検出長 0.5 m、幅 0.2 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/2 黄灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂～粗砂や礫が混じる。出土遺物なし。

**69 溝** 8 区西部に位置する。主軸方位は南北で、検出長 6.0 m、幅 0.8 m、深さ 14 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色シルト混じり細砂～粗砂。出土遺物なし。

**ピット** 59 ～ 61・64 ～ 67 ピットは 8 区東端に、68・70・71 ピットは 8 区西部に分布する。68 ピットは 34 cm とやや深く、埋土は上層が灰褐色シルト混じり細砂～中砂、下層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～中砂混じりシルトで、全体にマンガン斑を含む。それ以外のピットは浅く単層である。68 ピットから 6 世紀末の須恵器杯などが出土した。

#### 第5面（図38 写真図版21-71～73）古代

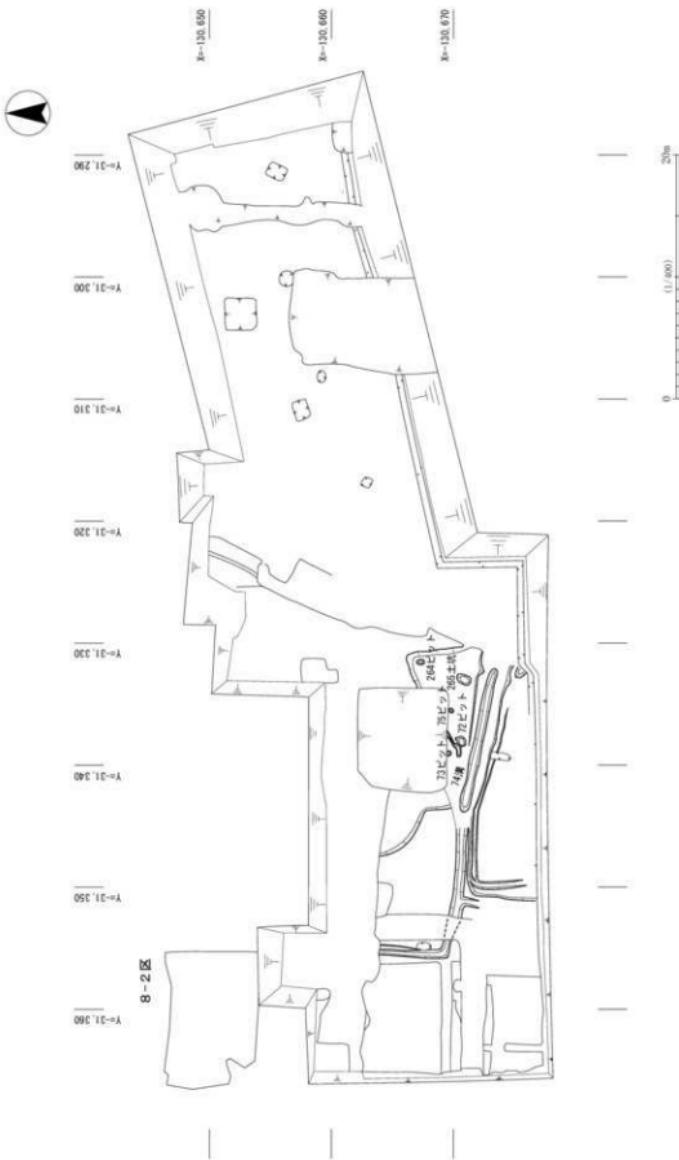
第Ⅴ層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+27.8 ～ 30.1 m で、西が高く東が低い。遺構として、ピット、溝、土坑を検出した。いずれも 8 区中央部に位置する。

**72 ピット** 平面は北東・南西に長い不整円形で、長径 93 cm、短径 82 cm、深さ 11 cm。埋土は、7.5YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂が混じる。重複関係からみて、74 溝よりも古い。出土遺物なし。

**73 ピット** 北部は搅乱によって失われているが、平面円形と推定され、直径 35 ～ 38 cm、深さ 9 cm。埋土は、7.5YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**74 溝** 主軸方位は、南端では東西だがそこから北東に延びる。検出長 2.3 m、幅 0.4 m、深さ 4 cm、埋土は、7.5YR4/2 灰褐色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

図 38 8区第5面



**75 ピット** 平面不整円形で、直径 37 ~ 41 cm、深さ 26 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色シルト混じり細砂～粗砂を主体とし、炭や上部には 10YR6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**264 ピット** 平面は南北に長い楕円形で、長径 62 cm、短径 43 cm、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂が主体を占め、底部に薄く 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂がみられる。出土遺物なし。

**265 土坑** 平面は北北東 - 南南西に長い楕円形で、長径 1.3 m、短径 0.7 m、深さ 11 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色細砂混じりシルトに 10YR6/2 灰黄褐色細砂がブロック状に多く混じる。出土遺物なし。

#### 第6面（図 39・40 写真図版 22・74・75）古代以前

第VI層を除去した地山層（第VII層）上面である。面の高さは、T.P.+27.7 ~ 30.1 mで、上記各面と同様に、西が高く東が低い。調査区西半の地形がやや高い部分を中心に、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、多くのピットを検出した。

**掘立柱建物 1**（図 41 写真図版 23・76・77） 8 区西部に位置し、北東部を昭和 16（1941）年に設けられた 9 貯水池により破壊されている。主軸方位は N 10° W で、桁行 3 間（6.7 m）・梁行 3 間（5.9 m）、面積 39.5 m<sup>2</sup> の総柱建物である。ピット（写真図版 23・78 ~ 80）の掘方は一辺約 1.0 m、柱痕跡の直径は 0.4 m 程である。ただし、ピットの深さは 0.2 m 程度と浅く、かなり削平されていると考えられる。

出土遺物には時期差がある。南辺の 123 ピットから 6 世紀末の須恵器杯と平瓦細片、北西隅の 128 ピットから 6 世紀末 ~ 7 世紀初頭の須恵器杯、屋内柱である 126 ピットから 6 世紀末 ~ 7 世紀初頭の須恵器杯・8 世紀の須恵器杯・青銅製品（図 148 - 316）、南西隅の 131 ピットから 8 世紀の土師器甕などが出土している。新しい時期の遺物によればこの掘立柱建物 1 は 8 世紀の所産と考えられるが、6 世紀末 ~ 7 世紀初頭の可能性も否定はできない。

**249 井戸**（図 42 写真図版 24・81・82） 8 区中央部北側に位置する。漏斗形の素掘り井戸である。検出面での平面は北東側に突出した不整円形で、長径 3.6 m、短径 2.9 m。直径約 1.3 m の比較的整った円筒状に掘り下げられているが、井戸枠はない。検出面からの深さ 3.0 m で底に達するが、底部には灰白色のシルトが溜まるのみで、集水施設（水溜め）の構造物も見当たらない。出土土器には 6 世紀後半 ~ 7 世紀初頭のもの（図 148 - 332・333・344・345）も含まれるが、主体は 8 世紀（図 148 - 317 ~ 331・335 ~ 343・346 ~ 351）である。曲物底板や火付け棒などの木製品（図 149 - 352 ~ 355）、金属製品（図 149 - 356）、ヒノキやヤブツバキの木片やスギの炭化材も出土した。

埋土を水洗したところ、イネ科の苞穎、ヒユ属の種子、ヒヨウタンの果皮片などを検出できた。珪藻分析とあわせて、人間活動や生産活動が盛んであったことが想定された（「第7章 禁野本町遺跡の植物遺体」参照）。

**107 溝** 8 区中央部北側、249 井戸の南側に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、検出長 2.5 m、幅 0.5 m、深さ 8 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

**116 溝** 8 区中央部に位置する。主軸方位は北でわずかに西に偏するがほぼ南北で、検出長 8.0 m、幅 0.8 m、深さ 8 cm。埋土は、7.5YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト。掘立柱建物 1 や後述の 110 ~ 112 ピットと主軸方位が類似している。8 世紀末の須恵器杯（図 149 - 372）などが出土した。

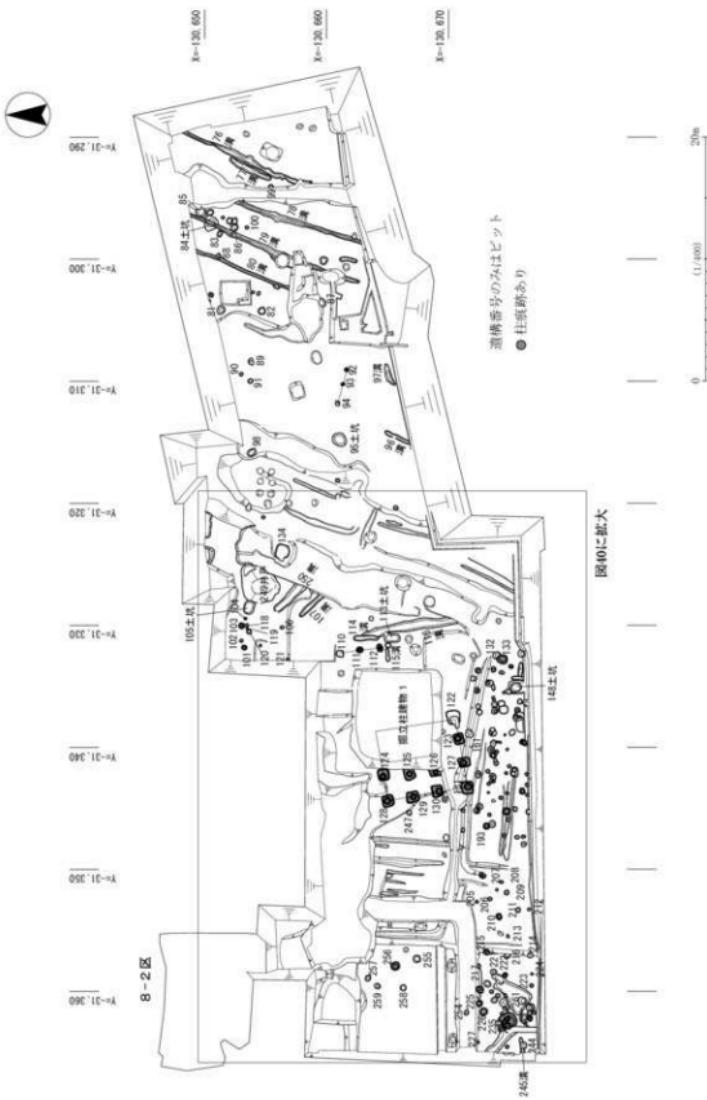
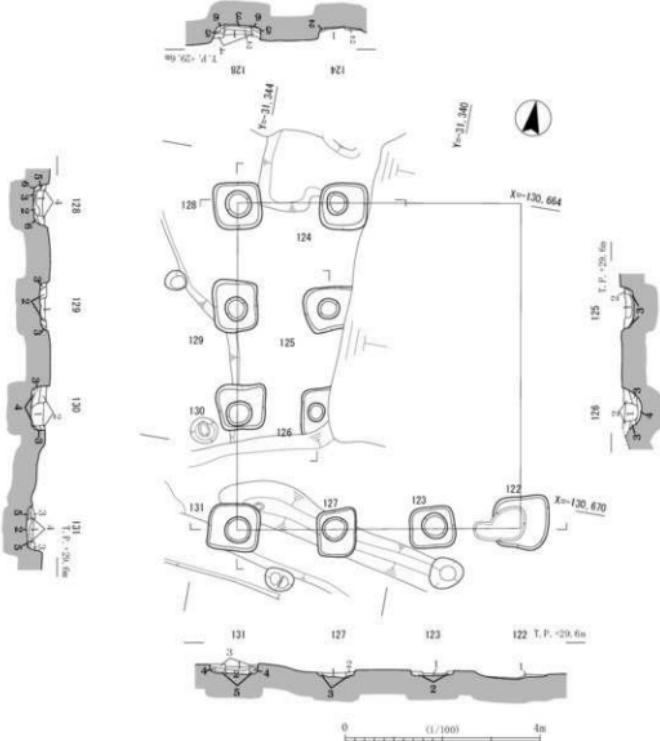


図39 8区第6面



图 40 8 区 第 6 面 西 半



#### 122 ピット

1 10YE5/8 黄磚～10YE5/2 灰黃磚 シルト混じり中砂～粗砂

#### 123 ピット

1 10YE5/2 灰黃磚～10YE4/6 磚 シルト混じり細砂～中砂

2 10YE7/1 灰黃磚～10YE4/6 磚 シルト混じり細砂～中砂

#### 124 ピット

1 10YE4/2 灰黃磚～10YE5/6 黃磚 シルト混じり粗砂～礫

2 10YE4/3 に亘る黄磚～3/3 磚 砂シルト混じり中砂～粗砂

#### 125 ピット

1 10YE4/2 灰黃磚～4/3 に亘る黄磚 中砂～礫

2 10YE5/2 ～4/2 灰黃磚 シルト混じり中砂～粗砂

3 10YE5/8 黄磚～10YE5/1 磚 砂シルト混じり細砂～粗砂

#### 126 ピット

1 10YE4/6 磚～10YE5/8 黄磚 シルト混じり中砂～粗砂 磚をわずかに含む

2 10YE6/2 灰黃磚～10YE7/1 磚白 中砂～粗砂 磚を含む

3 10YE5/2 灰黃磚～10YE4/6 磚 シルト混じり細砂～中砂

4 10YE5/1 磚灰～10YE4/6 磚 中砂～粗砂混じりシルト

#### 127 ピット

1 10YE6/3 ～4/3 に亘る黄磚 シルト混じり細砂～中砂 磚を含む

2 10YE7/2 に亘る黄磚～6/2 灰黃磚 中砂～粗砂

3 10YE5/8 黄磚～10YE5/2 灰黃磚 砂シルト混じり粗砂

#### 128 ピット

1 10YE6/1 磚灰～6/2 灰黃磚 中砂～粗砂

2 10YE5/3 ～5/4 に亘る黄磚 シルト混じり細砂～中砂

3 10YE4/3 に亘る黄磚～4/4 磚 中砂～粗砂混じりシルト

4 10YE4/2 灰黃磚～10YE6/1 磚灰 シルト混じり中砂～粗砂

5 10YE4/3 に亘る黄磚～4/4 磚 シルト混じり中砂～粗砂

6 10YE4/4 ～5/6 磚 粗砂混じりシルト

#### 129 ピット

1 2.5YE1/1 黄灰～6/2 灰黃磚 シルト混じり細砂～礫

2 10YE5/6 黄磚～6/2 灰黃磚 シルト混じり中砂～粗砂

3 10YE6/2 ～5/2 灰黃磚 中砂～粗砂混じりシルト

#### 130 ピット

1 10YE4/3 に亘る黄磚～10YE6/1 磚灰 中砂～粗砂混じりシルト 磚をわずかに含む

2 10YE5/8 黄磚～10YE5/2 灰黃磚 シルト混じり中砂～粗砂 磚をわずかに含む

3 10YE4/2 灰黃磚～10YE5/8 黄磚 シルト混じり中砂～粗砂

4 10YE6/2 灰黃磚～10YE6/8 明黄磚 細砂～中砂混じりシルト

#### 131 ピット

1 2.5YE1/1 黄灰～10YE5/8 黄磚 シルト混じり中砂～粗砂

2 2.5YE1/2 黄灰～5/6 黄磚 細砂～中砂混じりシルト

3 2.5YE1/2 灰黃磚～10YE5/8 黄磚 シルト混じり中砂～粗砂

4 10YE5/6 黄磚～5/7 黄灰 細砂～中砂混じりシルト

5 10YE6/1 磚灰～4/6 磚 中砂～粗砂混じりシルト

図41 8区 第6面掘立柱建物1

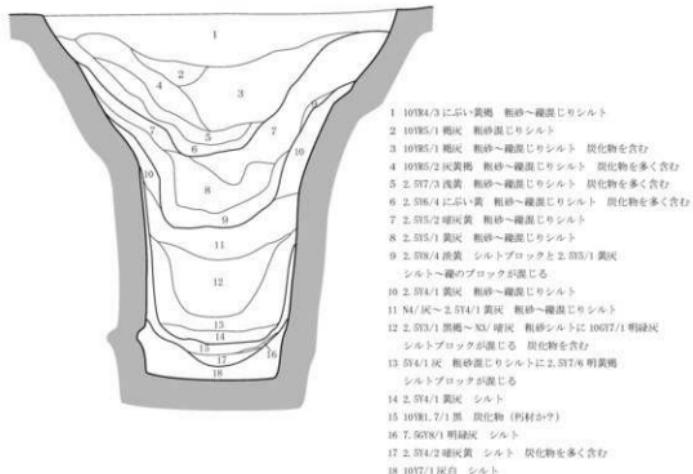
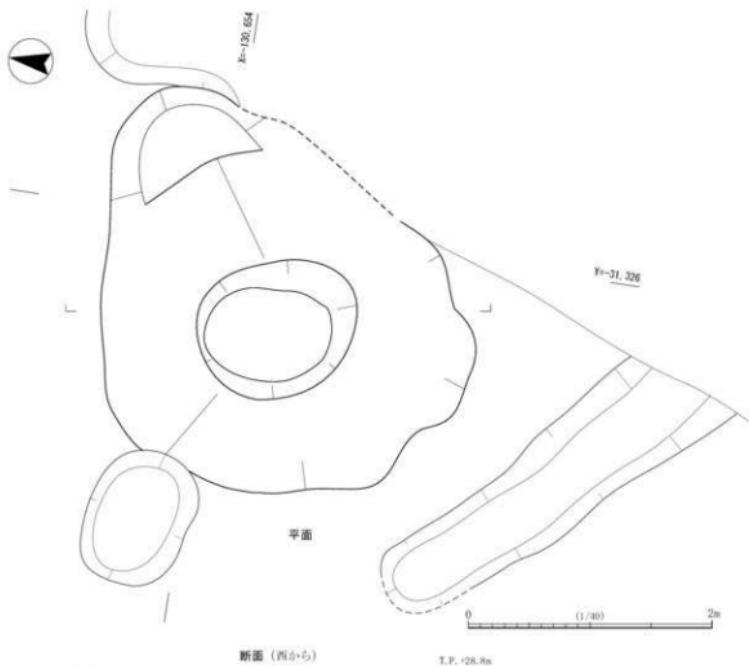


図42 8区 第6面249井戸

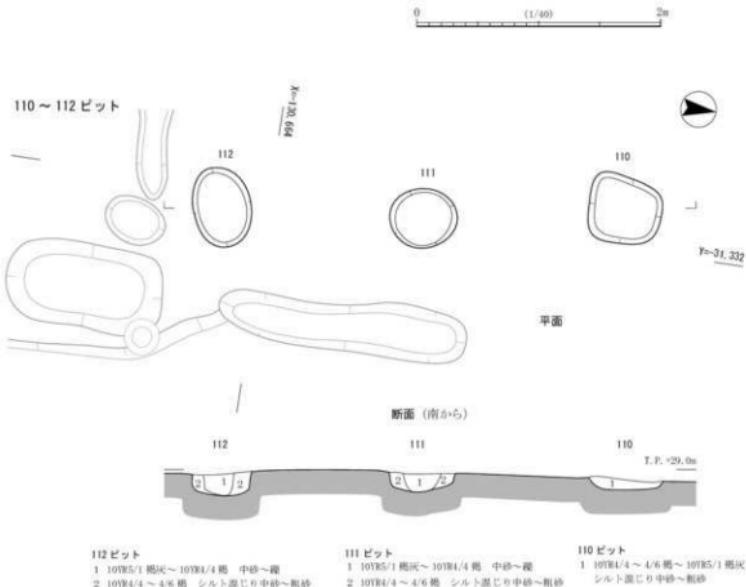
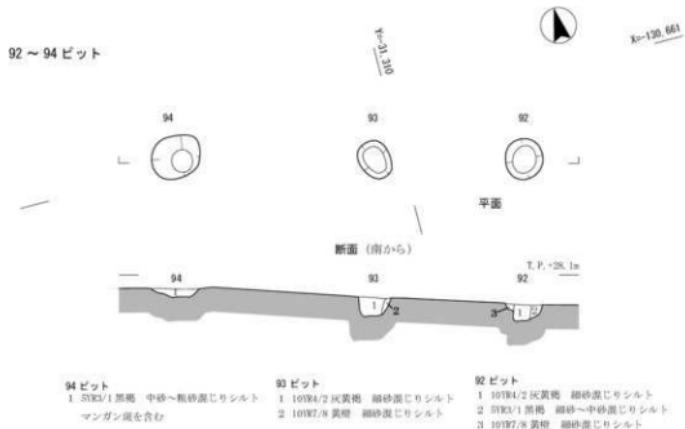


図43 8区 第6面92~94ピット・110~112ピット

**237 溝** 8区南西隅に位置する。主軸方位は北西・南東で、検出長2.2m、幅0.7~0.9m、深さ16cm。埋土は、2.5Y6/2灰黄色細砂混じりシルトに10YR4/6褐色細砂混じりシルトや礫が混じり、炭化粒を含む。出土遺物なし。後述する220土坑と主軸方位がほぼ直交し、埋土が似ていることから、両者は6世紀末~7世紀初頭に併存していたと推定できる。また、溝の東端は263土坑とつながっている。

**250 溝** 8区中央部北側、249井戸のすぐ南側に位置する。主軸方位は107溝と同じく北西・南東で、検出長3.2m、幅0.9m、深さ10cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色中砂~細砂混じりシルト。出土遺物なし。

**その他の溝** 地形的に低い8区東部で検出した76~80溝は、耕作に伴う溝群と考えられる。主軸方位は、いずれも北北東・南南西。埋土は、溝によって若干異なるが、5Y3/1オリーブ黒色細砂~粗砂混じりシルトを主体とする。土器細片が出土した。8区中央部南東側の96溝や主軸方位を異にする97溝、中央部で主軸方位を南北とする114溝や東西方向の115溝などの小規模な溝も耕作に伴うものと考えられる。これらの溝の中には古代の土器細片が出土したものもある。

**84 土坑** 8区北東部に位置する。79溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面不整円形で、直径1.0~1.2m、深さ25cm。埋土は、上層が2.5Y5/1黄灰色細砂混じりシルト、下層中心部は2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じりシルトに2.5Y5/3黄褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる、下層周縁部は2.5Y4/1黄灰色細砂混じりシルト。7世紀後半と考えられる須恵器壺(図149-368)などが出土した。

**95 土坑** 8区中央部東側に位置する。平面不整円形で、直径1.1~1.3m、深さは7cmと平面規模の割には浅い。埋土は、7.5YR7/8黄橙色礫混じりシルトにわずかに7.5YR4/4褐色細砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**105 土坑** 8区中央部北側、249井戸の北西部と重複関係にあり、それよりも新しい。西北西・東南東に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.8m、深さ10cm。埋土は、10YR5/4にぶい黄褐色細砂混じりシルトにマンガン斑が混じる。出土遺物なし。

**113 土坑** 8区中央部に位置する。平面は南北に長い隅丸長方形で、長径1.3m、短径0.7m、深さ14cm。埋土は、上層が7.5YR3/3暗褐色細砂混じりシルト、下層が7.5YR5/1褐色細砂混じりシルト。8世紀後半の須恵器壺(図149-369)や瓦質土器などが出土した。

**134 土坑** 249井戸南東1.4mに位置する。平面は隅丸方形に近い不整円形で、直径1.1~1.3m、深さ25cm。埋土は、10YR3/2黒褐色細砂混じりシルト。6世紀後半~7世紀初頭の須恵器杯(図149-370)などが出土した。

**148 土坑** 8区南部に位置し、その南部は調査区外に延びる。平面は南北に長い長方形と推定され、南北1.3m以上、東西1.1m、深さ27cm。埋土は、10YR4/2灰黃褐色細砂混じりシルト。古代の土器が出土した。

**220 土坑** 8区南西部に位置する。先述の237溝とほぼ直交し、北東・南西を主軸方位とする。平面は背の高い不整台形で北東部が突出する。長径3.7m、短径は北東部で1.0~1.2mだが、南西部では2.1mと幅広になる。深さ15cm。埋土は、2.5Y6/2灰黄色細砂混じりシルトに10YR4/6褐色細砂混じりシルトや2.5Y7/4浅黄色細砂~粗砂や礫が混じる。6世紀後半~7世紀初頭の須恵器杯蓋(図149-371)などが出土した。

**263 土坑** 8区南西部、237溝の東端につながる。平面不整円形で、直径1.1～1.2m、深さ14cm。埋土は、2.5Y6/2灰黄色細砂混じりシルトに10YR5/8黄褐色細砂混じりシルトや径1cm程度の礫が混じる。底面は黒い。出土遺物なし。

**92～94ピット(図43)** 8区中央部やや東寄りに、西北西～東南東にピットが3個並ぶ。心々距離は、92ピットと93ピットが1.2m、93ピットと94ピットが1.6m。92・93ピットでは断面観察により柱痕跡が認められた。ただし、周辺に他のピットなどは見当たらず、建物を構成しない。柵列であろうか。

出土遺物は、94ピットの8世紀の土師器杯、92ピットの古代の土器細片である。

**110～112ピット(図43)** 挖立柱建物1の東約6mに、主軸方位N8°Wで3個のピットが並ぶ。掘立柱建物の主軸方位N10°Wに近い。心々距離は、110ピットと111ピットが1.6m、111ピットと112ピットが1.7m。110ピットでは不明瞭だが、111・112ピットでは断面観察により柱痕跡が認められた。ピットがさらに東西に展開しないので、掘立柱建物1に伴う壙的な遺構であろうか。出土遺物なし。

**その他のピット** 柱根の残っていたピットはない。しかし、掘立柱建物1や上記のピットの他に、101・133・169・186・193・195・204・210・218・222・225・256ピットで柱痕跡が認められた。不明瞭だが103・215・240・246ピットも柱痕跡の可能性がある。平面分布をみると、掘立柱建物1の南西側で、193・195・186ピットが心々距離2.0～2.1mで北西～南東に並ぶ。249井戸西侧の101・103ピットも現状では2個だけだが心々距離1.7mの位置にある。8区南西部にも柱痕跡のあるピットが散在している。これらが建物や柵列などを構成する可能性はある。

その他のピットは、埋土が単層あるいは水平方向に堆積するものであり、建物などの復元には至らなかつた。

ピットからの出土遺物は、6世紀後半から9世紀頃におよぶ(図149-357～362・364～367)。

176ピットからは須恵器片とともに鉄滓(図149-363)が出土した。

## 第8節 9区（C棟）・9-2区（防火水槽C）の遺構

9区は調査地東部に位置する。住宅C棟の建設に伴う調査である。9-2区は9区北西側の防火水槽C設置に伴う調査であり、とくに必要がある場合にのみ「9-2区」と表示する。T.P.+30.8～31.1mの現地表面から、9区本体では最深部でT.P.+28.5mの第6面まで、9-2区ではT.P.+28.4mの第4面まで調査した。最終面での調査面積は、9区と9-2区を合わせて968m<sup>2</sup>である。

9区には中央や北側の東西方向に旧住棟の建設および解体時の搅乱があったが、北部と南部で遺構・遺物を調査できた。9-2区も北部が大きく搅乱を受けており、調査できたのは主に南部であった。

第1面は昭和14（1939）年爆発関連層の上面である。土壌や建物の基礎、枕木土坑、舗装道路を検出した。

第2面は昭和14年爆発関連層を除去した面。土壌基礎、枕木土坑、基礎石垣、土坑などを検出した。

第3面は中世～近世の面。溝群とピットを検出した。

第4面は古代の面で、9区中央部以西では地山層上面である。段、溝、土坑、ピットを検出した。

第5面は9区東部の古代の面。土坑、ピット、落ち込みを検出した。

第6面は9区東部の地山層上面。古代の掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

### 層序（図44 写真図版34-118）

9区では、第1層が比較的良好に残る北壁の断面を掲げる。ただし、北壁の東部は第1面の55土壌基礎に、西部は56土壌基礎によりそれぞれ破壊されているので、堆積状況が明らかなのは中央部のみである。

第0層（1～6）は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層を主とする。工事の過程であろうか盛土層（6）の上面が土壤化した層（5）もみられる。

第1層は、基本層序の第1層【昭和14（1939）年爆発関連層】に該当し、断面図の西半では爆発時形成層（12）と爆発後整地層（8）に分離できる。

第2層（15～40）は、基本層序の第II層に該当する。火薬庫造成に伴う盛土層を主体とするが、それ以前の旧作土層（32・35・39）なども含む。

第3層（41～45）は、基本層序の第III層に該当する。この層を除去した第4面調査段階に9区中央部以西では地山層上面に達した。

第4層（46）は基本層序の第V層、第5層（47）は基本層序の第VI層にそれぞれ該当する。今回の調査地が、基本的に南西が高く北東が低いことにより、第4層・第5層は9区では東部にのみ分布し、第6面が地山層（第VII層）上面となる。

### 第1面（図45 写真図版26-87・88、35-119）昭和14年以後

禁野火薬庫に関する遺構面のうち、昭和14（1939）年爆発関連層（第1層）の上面である。ただし、9区ではそのほとんどが土壌部分に該当し、第1層の分布範囲は中央部北側の狭い範囲に限られる。その範囲では黒色を呈する第1層が比較的明瞭に確認でき、面の高さはT.P.+29.8～29.9mである。遺構として、土壌基礎、枕木土坑、舗装道路、さらに9-2区で建物基礎を検出した。

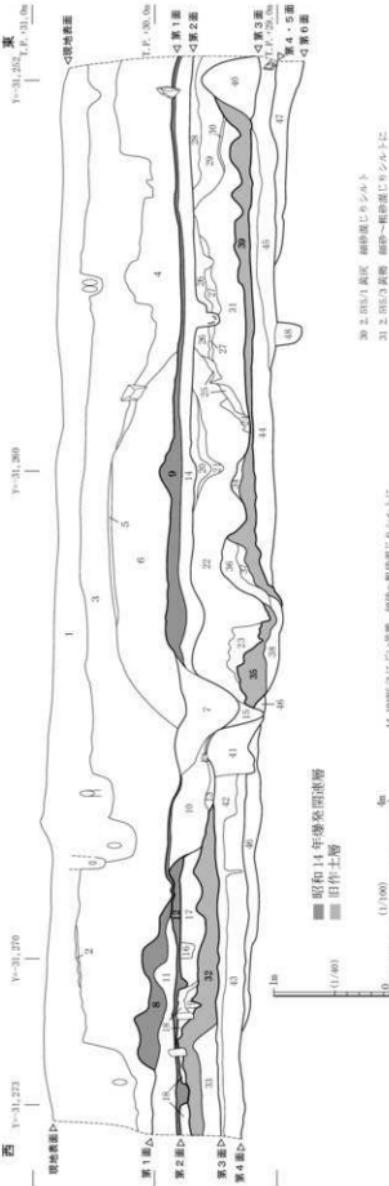
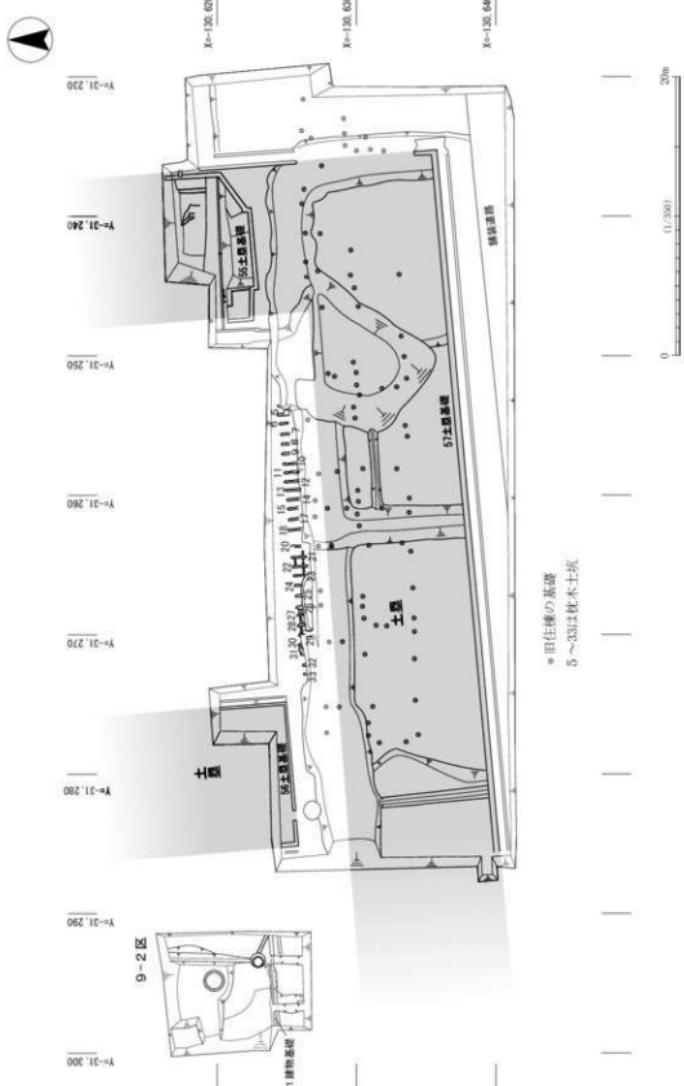


図 44 9区 北壁断面



**55～57 土壘基礎** 昭和10（1935）年に築かれた土壘の基礎である。昭和14年の爆発後は、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠新築増築概要図」では第25号倉庫、昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠構内図」では第13号倉庫と改称された建物を囲む土壘としてそれ以前と同様に機能していた。それぞれの部分については、第2面で記述する。

**5～33 枕木土坑**（軽便軌道） 9区北辺、55基礎と56基礎の南辺で東西に延びる。調査時には第2面で検出したが、昭和14年の爆発以後の状態についてはここで述べる。倉庫（火工場）南側に敷設された軽便軌道は、爆発までは複線であったが、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠新築増築概要図」によると爆発後は単線となった。枕木自体が残っていた箇所は少ないが、土坑の形状が枕木と相似形であることから、いずれにもコンクリート製枕木が設置されていたと推測できる。土坑の形状は、後述する11区の枕木土坑に比べ概してシャープである。枕木土坑間には、線路の圧痕と考えられる筋状の浅い落ち込みが検出できた箇所がある。この幅は約50cmであり、軌道幅と考えられる。枕木土坑周辺の一部では、道床の可能性もある砂礫が混じる変色部分も見られた。

**舗装道路** 9区南辺、57基礎（土壘の南辺）の南、約1.9m幅でコンクリートが打設されていない部分のさらに南に東西方向の舗装道路（コンクリート土間）がある。昭和11（1936）年授受の舗装道路で、昭和14年の爆発後も機能していた。

**9・2区1建物基礎** 調査区が狭いために一部のみの検出にとどましたが、昭和16（1941）年に新築された第27号倉庫の南辺に該当する。昭和20（1945）年には第15号倉庫と改称されている。なお、この建物の前身は、昭和10（1935）年授受、昭和14（1939）年の爆発時まで存在した7号火工場である。

## 第2面（図46 写真図版27・89・90、35・120） 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第1層）を除去した面である。面の高さは、一部に低い部分もあるが、おおむねT.P.+29.7mである。遺構として、土壘基礎、枕木土坑、基礎石垣、土坑などを調査した。「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」などによると、昭和14年の爆発の前後に同様な位置に諸施設が存在したことわかる。なお、第1層は9区の中央部北側にのみ分布するので、それ以外の範囲については第1面と同様である。

**55～57 土壘基礎** 昭和10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要図」に描かれた8号火工場（12区第2面1建物）を囲む土壘の基礎である。

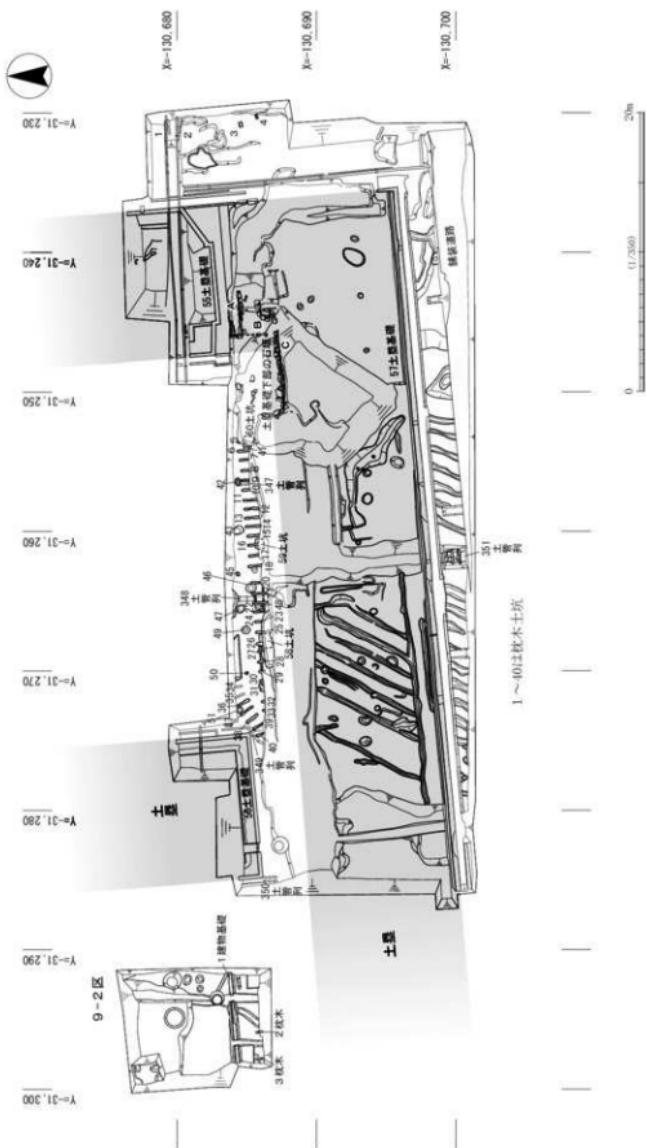
**55 土壘基礎**（図47 写真図版28・91・92）は、9区北東部に位置する。8号火工場の東側の土壘のコンクリート基礎である。この基礎の下部には石垣状の石積み（写真図版28・93）が確認できた。石材は、石の隙間に詰められた小ぶりで黒っぽい石1点を除き花崗岩である。当該部分に禁野火薬庫以前に存在した溜池上に重量物を構築するため、その基礎として設置されたものと考えられる。

55 土壘基礎の東西外側にはコンクリート製側溝が設けられている。さらに、南西角外側にはコンクリート製枠がある。枠からは南側への排水はなく、55 土壘基礎西側に穿たれた孔から、痕跡的に検出できた土壘盛土内に埋設された上管を通して、地形的に低い北方へ排水していたと考えられる。

**56 土壘基礎**（図48 写真図版29・96）は、9区北西部に位置する。8号火工場とその西側に位置する7号火工場との間にある土壘の基礎である。

56 土壘基礎にも東西外側にコンクリート製側溝がある。東側の側溝では途中でコンクリートにより

図 46 9 区 第 2 面



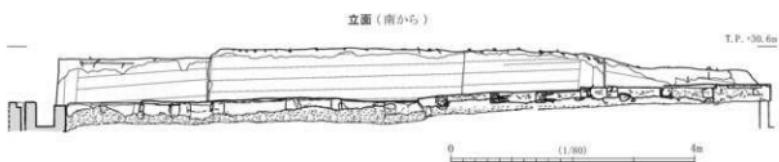
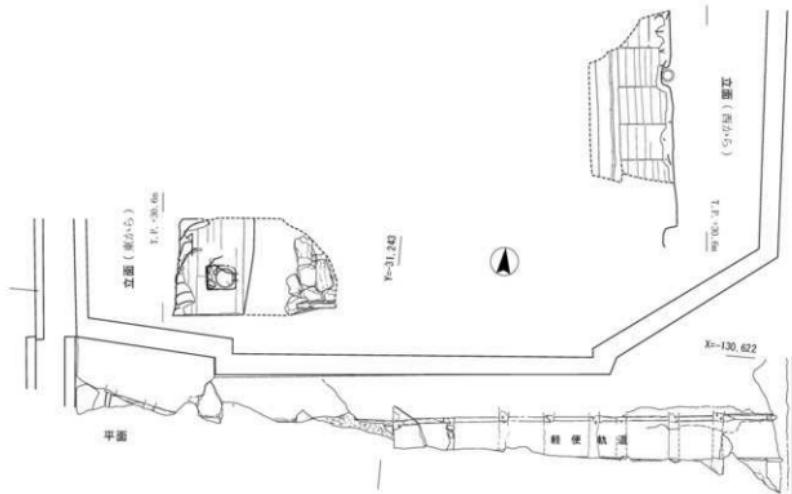
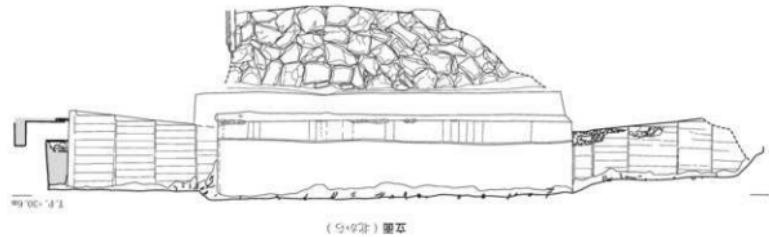


図47 9区 第2面55土塁基礎・軽便軌道

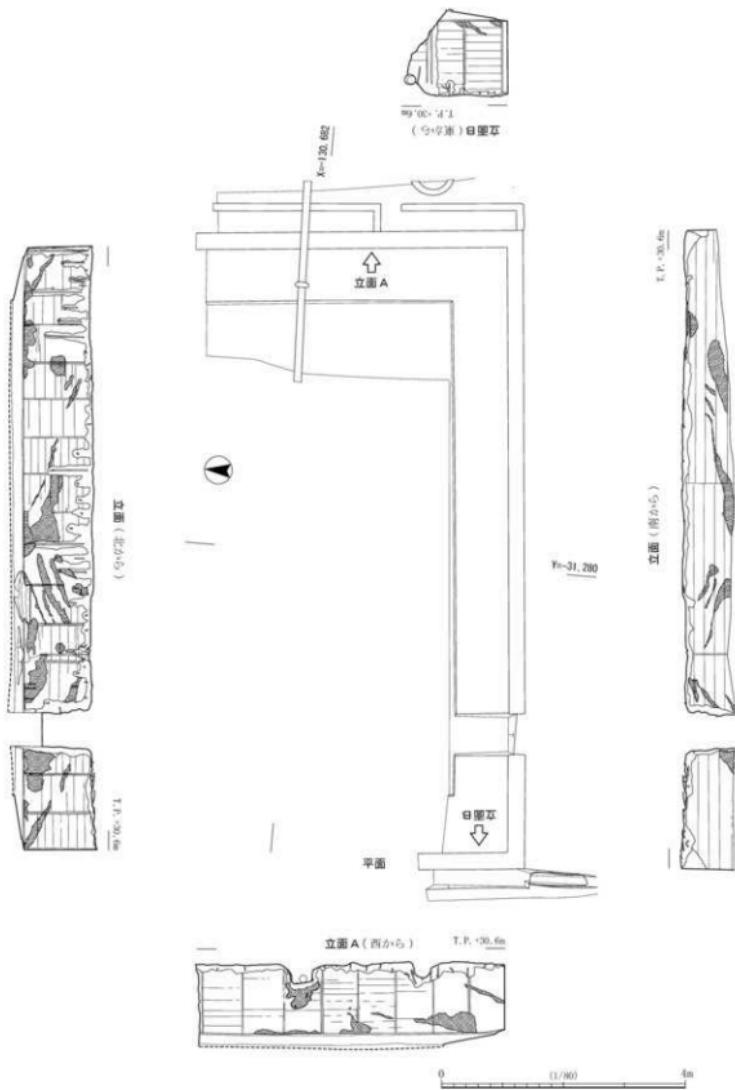


図48 9区 第2面56土壌基礎

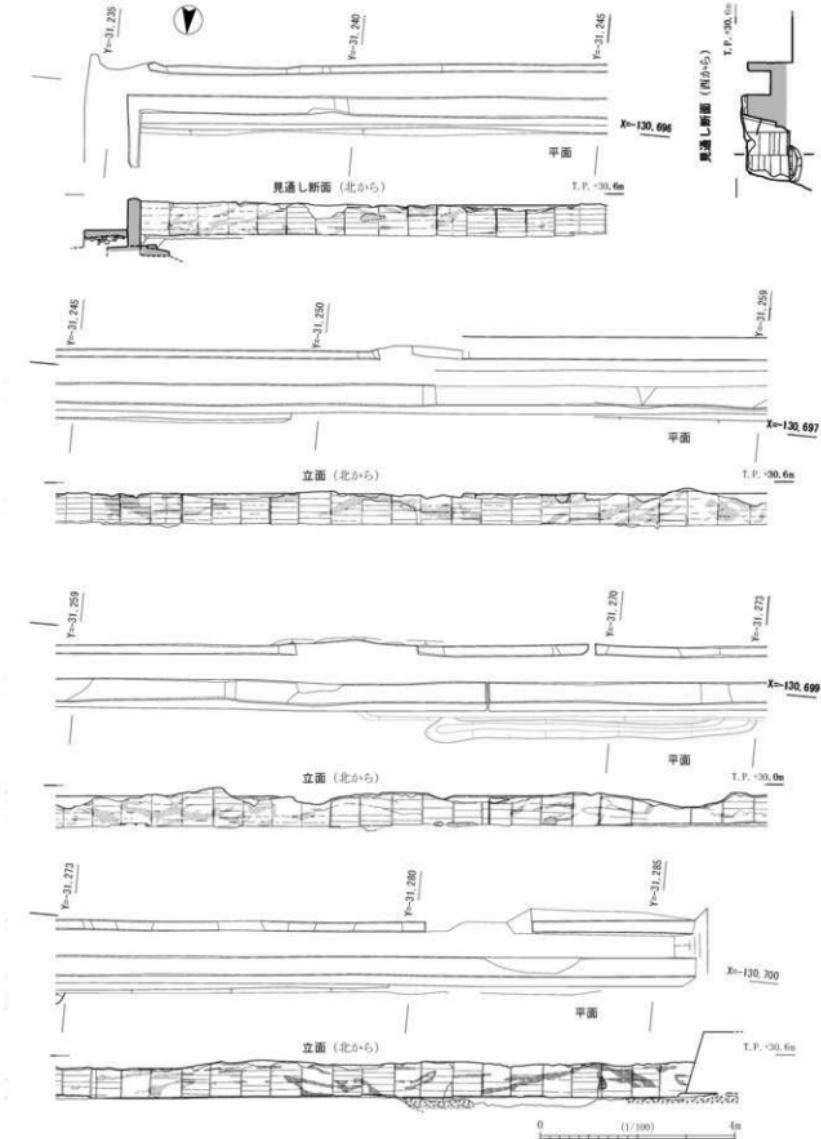


図49 9区 第2面57土壌基礎

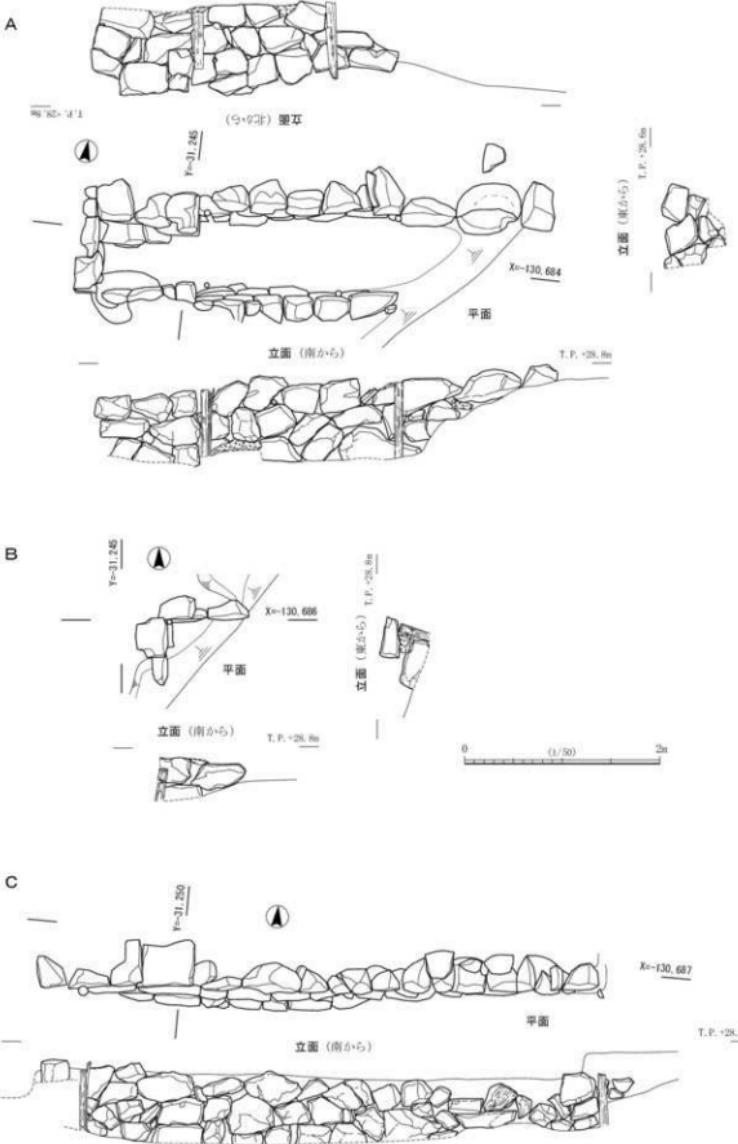


図50 9区 第2面土壁基礎下部の石垣

蓋がされているが、その部分の土塁基礎には水抜き用と考えられる孔が開いている。一方、蓋よりも南では側溝に土管が接続し、西側の側溝でも南側に土管が接続している。これらは、55 土塁基礎の場合とは異なり、南への排水を意図したものと推定できる。

**57 土塁基礎**（図 49 写真図版 29 - 97）は、9 区南部で東西に延びる。8 号火工場と 7 号火工場の南側の土塁南辺の基礎となるコンクリート擁壁とその南側に付随するコンクリート製側溝である。擁壁の内側（土塁の土を受けるこの擁壁の北面）は直立ではなく南側にやや傾斜し、擁壁の南側（土塁の外側）には側溝が一体となって成形されている。この 57 土塁基礎は 9 区南東部で直角に北へ曲がり、その北側は擾乱により遺存しない部分もあるが、55 土塁基礎の南東角に連続する。

**土塁基礎下部の石垣**（図 50 写真図版 28 - 94）55 土塁基礎の下部と同様の石垣状の石積みが、その南西側のかつて溜池であった部分にもみられる。位置的に、57 土塁基礎を南辺とする土塁の北辺の基礎下部にあたる。用いられている石は全て花崗岩である。軟弱地盤上に重量物を上部に構築するための造作と考えられる。北東から順に A・B・C として図 50 に掲げる。位置は、第 2 面（図 46）を参照されたい。

**9 - 2 区 1 建物基礎**（図 51）昭和 10（1935）年授受の 7 号火工場の南辺と考えられる。建物の内側に当たるコンクリート基礎の北側では碎石層が確認できた。

**1～4 枕木土坑（軽便軌道）** 9 区東端で南北方向に並ぶ。1・2 はコンクリート製枕木で、3・4 は痕跡的な枕木土坑である。土塁の東側を南北に走る軽便軌道に該当する。

**5～40 枕木土坑（軽便軌道）** 9 区北辺に位置する。昭和 10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要圖」や昭和 13（1938）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要圖」では 1 条に描かれているが、調査では 5～33 枕木土坑によって構成される東西方向の軌道と、34～40 枕木土坑からなる北方に分岐した複線部分の 2 条を検出した。この事実と後述する 12 区第 2 面の調査成果から、図では単線であっても実際には複線である軽便軌道が存在することが判明した。35 枕木土坑には枕木（図 144 - 230）が残っていた。

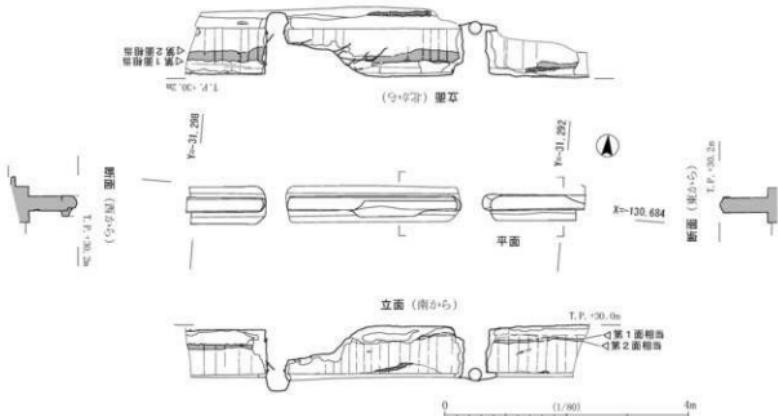


図51 9-2区 第2面 1建物基礎

14 枕木土坑から砲弾関連品（図 140 - 186）、20 枕木土坑からワッシャー（図 136 - 97）や木ネジ（図 137 - 102）が出土した。

この軽便軌道の東の延長にあたる 55 土壠基礎の南側では、コンクリート製枕木が上間コンクリートに埋め込まれていた（図 47 写真図版 29 - 95）。8 区と同様に、この部分には土壠に穿たれたトンネルが存在したと考えられる。コンクリート基礎の平面形がハの字状を呈することも 8 区第 1 面 19 土壠と同様である。

**9-2 区 2・3 枕木** コンクリート製枕木 2 本のみの検出だが、昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」記載の、7 号火工場南側の軽便軌道のうち北側に分岐して複線化された部分に該当しよう。なお、昭和 14 年の爆発後はこの軽便軌道は単線となっているので、第 1 面段階では複線部分は存在しない。

**舗装道路** 9 区南辺に位置する。「分廠歴史」などにみられる昭和 10（1935）年 9 月 16 日起工、昭和 11（1936）年 7 月 31 日授受の「舗装道路 一式 八〇〇米」に該当する。道路部分には、舗装以前の遅くとも大正 13（1924）年までには軽便軌道が敷設されている。さらにその下層に、南北方向に 351 土管列が埋設されている。土管（図 130 - 31）の口径は 80 cm あり、今回の調査で出土した土管では最も太い。

**58～60 土坑** 9 区北部において第 3 面で検出したものだが、その様態と出土遺物から火薬庫に伴うものと考えられる。この範囲は明治 43（1910）年に土地買収されているが、昭和 9（1934）年までは顕著な土地変更はみられない。心々距離は 58 土坑と 59 土坑が 7.0 m、59 土坑と 60 土坑が 7.2 m とほぼ等間隔に並び、昭和 10（1935）年には敷設されていた軽便軌道の下層に該当することから、その敷設直前に掘られたものと推定できる。3 基とも平面隅丸方形である。

**58 土坑** は、東西 1.1 m、南北 0.9 m、深さ 1.3 m。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト～中砂と 2.5Y7/2 灰黄色シルトの互層で、下層ほど圧密を受け土が締まっている。陶器、鉄釘、瓦などが出土した。

**59 土坑** は、東西 0.7 m、南北 0.6 m、深さ 1.0 m 以上。埋土の主体は 2.5Y7/2 灰黄色シルトに 2.5Y5/1 黄灰色シルト～中砂が混じるもので、下層 20 cm 程は 10GY6/1 青灰色シルト。土管、瓦、鉄釘、木製品などが出土した。

**60 土坑** は、東西 0.8 m、南北 0.8 m、深さ 1.1 m。埋土は、上層 30 cm 程が 2.5Y4/1 黄灰色シルト～中砂のブロックと 10YR6/6 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトのブロックの互層で、下層 80 cm 程は N5 / 灰色細砂混じりとシルトと 10YR6/6 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトのブロックの互層に礫が混じる。瓦などが出土した。

**給排水施設** 土壠基礎に付属する側溝以外にも、土管や鉄管などの給排水施設が存在する。

9 区東側から、昭和 11（1936）年の栗本鐵工所製の銘がある鉄管が出土した。上水道管の可能性もある。

東西方向の軽便軌道（5～33 枕木土坑）の下層で痕跡的に検出された南北方向の 347～350 土管列は、接続方法からみて、12 区の南縁で 1 建物として検出された昭和 10（1935）年授受の 8 号火工場の南辺から 9 区に存在していた土壠の北辺に向けて排水されていた可能性が高い。各土管列の土管を、図 129 - 27～130 - 30 に掲げる。

**畠溝群** 9 区では第 1 層【昭和 14（1939）年爆発関連層】は、中央部北側にのみ残り、大方を占める

土壠部分には現存しない。そのため結果的に、土壠部分では第2面として禁野火薬庫造成以前の旧作土層上面を記録した。その上面には、幅0.3～0.5m、深さ0.1～0.3mで、北東・南西を主軸方位とする畝溝群がみられる。

昭和8（1933）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図」に書き込まれた「秘 土地買取要図」によると、9区部分は明治43（1910）年12月に買収されており、この景観はその頃のものと考えられる。

### 第3面（図52 写真図版30・98、35・121） 中世～近世

禁野火薬庫に伴う盛土層と火薬庫以前の旧作土層など（第II層）を除去し検出した面である。面の高さはT.P.+29.1～29.5mで、9区中央部南側が高い。遺構として、溝群とピットを検出した。

**溝群** 9区中央部以西に分布し、埋土はいずれも第2層の旧作土層と同じ10YR5/3にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトで、主軸方位も第2面の畝溝と同様に北東・南西である。出土遺物なし。耕作に伴う溝群であろう。

**ピット** 9区南西側に散在する。平面は円形が多く、直径19～43cm、深さは3～23cmで、埋土はほとんどが単層である。62・69・79ピットから土器細片が出土したが、時期が明確なものではない。

### 第4面（図53 写真図版30・99） 古代

第III層を除去し検出した第V層上面である。面の高さはT.P.+29.0～29.4mで、第3面と同様に9区中央部南側が高い。9区中央部以西では、第III層を除去した段階で地山層（第VII層）上面に達した。遺構として、溝状落ち込み、段、溝、土坑、ピットを検出した。

9・2区では、第2面調査後一度埋め戻し、その後横矢板を設置しつつ機械掘削を行い、旧作土層を除去して検出した地山層の上面が第4面である。面の高さは、およそT.P.+28.4m。溝とピットを検出した。

**90 溝状落ち込み** 9区中央部東側に位置する。落ち込みの北部は擾乱されている。屈曲はあるが、北北東・南南西が主軸方位である。検出長約13m、幅2.6～4.2m、深さ32cm。円面硯（図150・390）や9世紀後半の縁釉陶器皿（図150・391）などが出土した。

**段** 9区南西部に位置する。北東側と北西側に縁のある高さ10cmほどの段である。

**溝** 段の主に北東側には、段の縁に並行して北西・南東を主軸方位とする125～133・142・171～175溝が存在する。また、それらの溝とほぼ方位を同じくするものとして、9区北東部に82～87溝がある。また、9区中央部には、北東・南西を主軸方位とする105・109・111溝がある。埋土はいずれも、2.5Y4/2暗灰黄色～2.5Y5/4黄褐色細砂～粗砂混じりシルトとなっており似ている。87・105・109・111溝から土器細片が出土した。いずれも耕作に伴う溝であろう。

**9・2区5溝** 主軸方位は北北東・南南西で、検出長3.2m、幅1.5m、深さ14cm。埋土は、2.5Y5/1黄褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

**121土坑**（図54） 9区中央部南辺に位置し、その南部は調査区外に延びる。検出部分から推定すると、平面円形で、直径4.6m以上、深さ1.0m以上となる。埋土は、図54のように細かく分かれれる。7世紀後半の須恵器甕や9世紀の灰釉陶器碗などが出土した。

**ピット** 9区中央部などに多くのピットが存在する。しかし、柱根や柱痕跡の認められるピットはなく、110・140・150・153・156・168・170ピットで埋土が複数に分層できた以外はいずれも単層

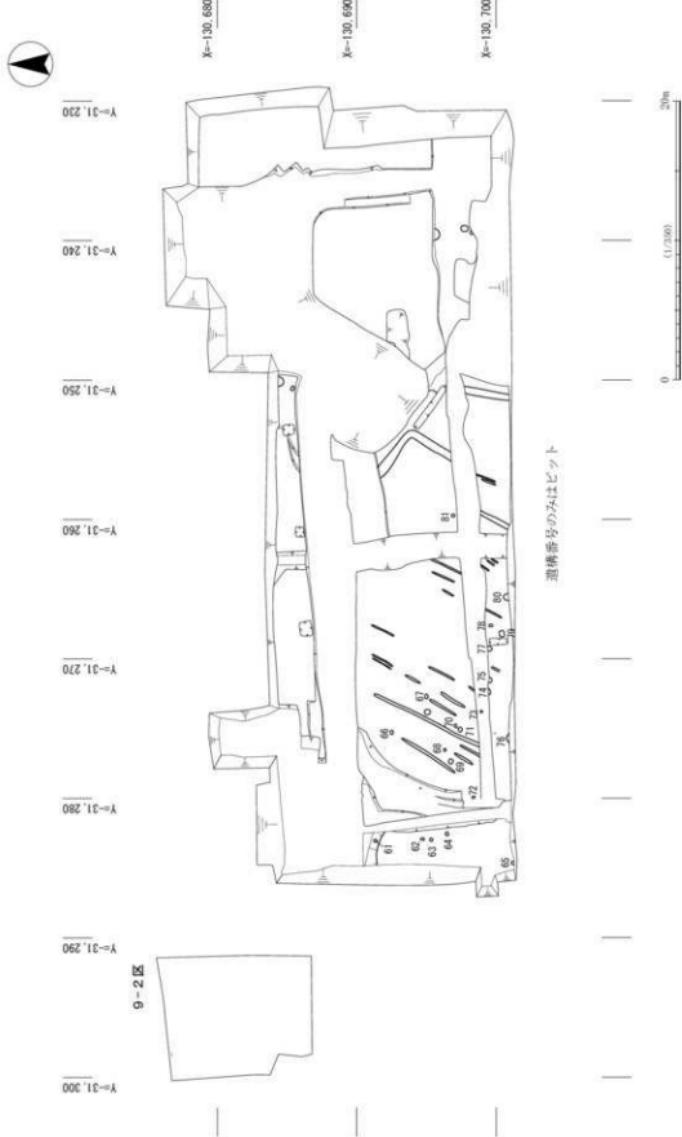
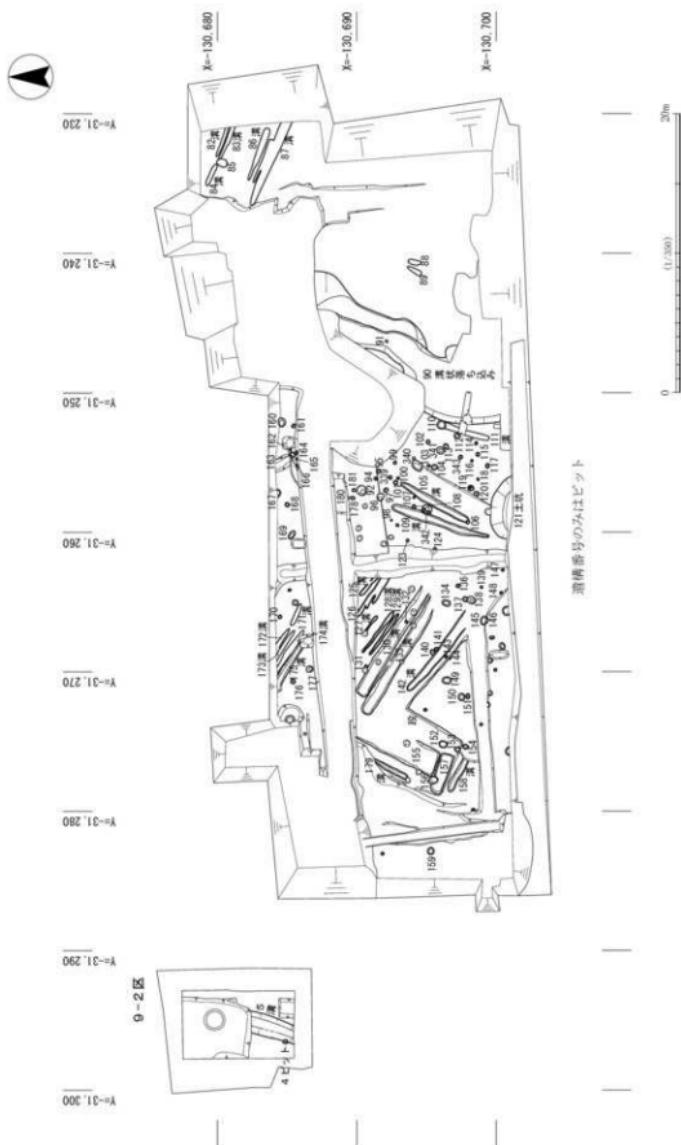


図52 9区 第3面

図 53 9 区 第 4 面



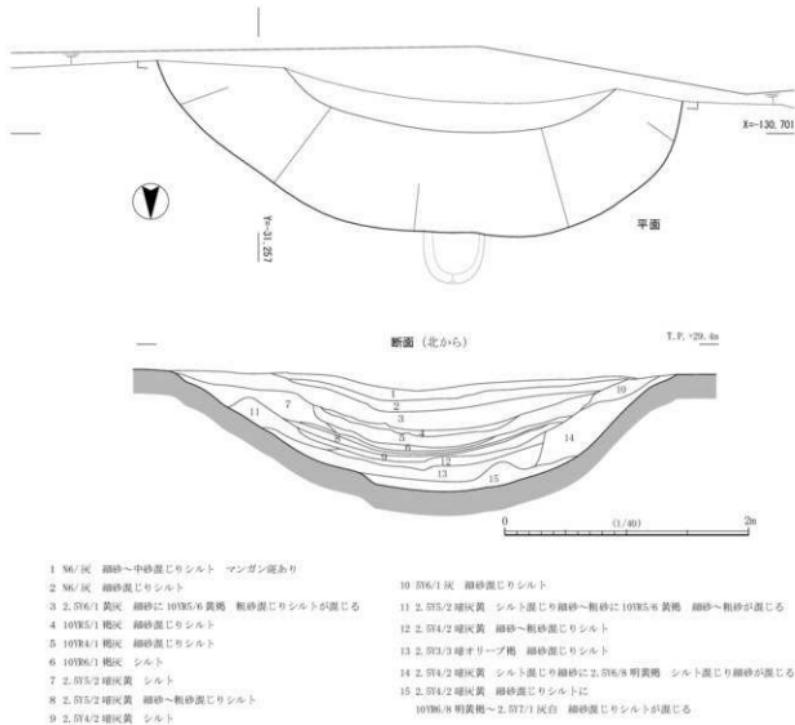


図54 9区 第4面121土坑

である。掘立柱建物などを復元するには至らなかった。

出土遺物には、104ピットの8世紀中頃の須恵器杯蓋（図150-387）、110ピットの土錐（図150-388）、342ピットの8世紀末の須恵器（図150-389）、123・140・181ピットの製塙土器細片などの他、複数のピットからの古代の土器細片がある。

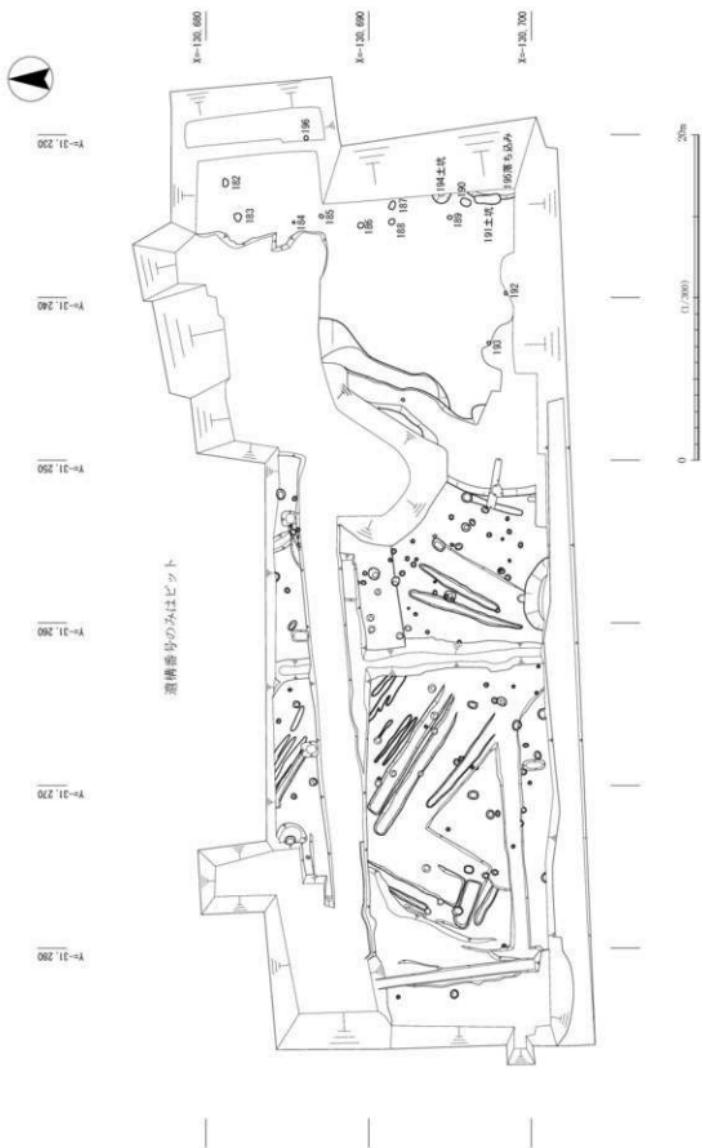
**9-2区4ピット** 平面楕円形で、南北35cm、東西28cm、深さ13cm。埋土は、2.5Y4/3オーピー褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

#### 第5面（図55 写真図版30-100） 古代

9区では東部にのみ分布する第V層を除去し検出した面である。その範囲の面の高さは、T.P.+28.8～28.9m。遺構として、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

**191土坑** 9区南東部に位置する。平面は南北方向に長い長楕円形で、長径1.6m、短径0.6m、深さ8cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色細砂～粗砂混じりシルト。8世紀中頃の土師器皿（図152-421）などが出土した。

図55 9区 第5面



**194 土坑** 9区東端に位置し、その東部は調査区外に延びる。平面円形とすれば、直径約1.1m、深さ26cm。埋土は、上層が10YR4/2灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層が10YR5/6黄褐色細砂混じりシルト。8世紀の須恵器杯などが出土した。

**ピット** 9区東部において、183～189ピットが南北に並ぶように見える。しかし、その心々距離は1.8～3.5mとまちまちで、これらを含め全てのピットの埋土は柱痕跡が認められず単層である。

出土遺物は比較的豊富で、182ピットの須恵器甕（図151-413）、185ピットの8世紀後半の土師器甕（図151-414）、186ピットの須恵器蓋と黒色土器A類、187ピットの土師器や瓦（図151-415-416）、189ピットの瓦（図151-417・418）、190ピットの須恵器杯（図152-419）、196ピットの黒色土器水滴（図152-420）をはじめ、多くのピットから古代の土器細片が出土した。

**195 落ち込み** 9区南東隅に位置する。検出は南北3.0m、東西0.6m、深さ0.3mだが、そのほとんどは調査区外に広がると考えられる。埋土は、上層が10YR4/2灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層が10YR5/6黄褐色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

#### 第6面（図56・57 カラー写真図版2・4 写真図版31-101・102）古代

9区では東部にのみ分布する第VI層を除去し検出した面で、地山層（第VII層）上面である。その範囲の面の高さはT.P.+28.5～28.8m。範囲は狭いが、古代の土器や瓦などの出土量が多い。遺構として、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

**掘立柱建物1**（図58 写真図版32-103～105）9区北東隅で掘立柱建物の西側部分を検出したところ、大阪府教育委員会より指示があり調査区を東側へ約2m拡張した。その結果、南東側に未調査部分は残るが、主軸方位N5°W、桁行5間（約11.5m）・梁行2間（約4.5m）、面積51.8m<sup>2</sup>の掘立柱建物と判明した。柱間寸法は2.2～2.5mを基本とするが、桁行中央の柱間寸法が狭い箇所は約1.8mである。ピットの埋土は図58に示すとおりで、東辺の335・336ピットにはスギ材の柱根（図155-530・156-531）が残っており、それらを含め身舎を構成する全ピットと北面廂の303ピットで柱痕跡が認められた（写真図版33-106～34-114）。身舎北東隅の332ピットの底部からは、枕木と考えられるヒノキ材が出土した（図155-524 写真図版34-115）。

建物北側の柱列の北側約1mに平行するように外周柱穴列と考えられる321・294・303ピットが存在することから、建物は北面廂を有した可能性がある。294ピットにはスギ材の柱根（図156-540）が残っていた。

各ピットの出土土器は8世紀中頃～後半の土師器・須恵器を主体とするが、その前後のものや製塙土器も含まれる（図156-498～523・525～529）。加えて、北辺中央の328ピットから泥岩、東辺の334ピットからは不明骨片（「第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体」参照）が出土した。

**掘立柱建物2**（図59）掘立柱建物1の身舎と位置的に重複するが、ピットの重複はない。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位N5°W、桁行2間以上・梁行1間以上の側柱建物である。北西隅の329ピットは単層だが、その他の3個のピットでは柱痕跡が認められた。

331ピットから8世紀前半～中頃の須恵器杯（図156-532）やスギ材の柱根（図156-533）が出土し、他のピットからも8世紀の土師器や古代の製塙土器などが出土した。

**197・199溝** 9区東部に位置する。この2本の溝は道路側溝と考えられる。

197溝の主軸方位はN25°E。検出長7.0m、幅0.6～0.8m、深さ49cm。埋土は、上層が

図56 9区 第6面





道標番号のみはピット

● 柱痕跡あり

● 柱根あり

0 (1/150) 10m

図57 9区 第6面東部

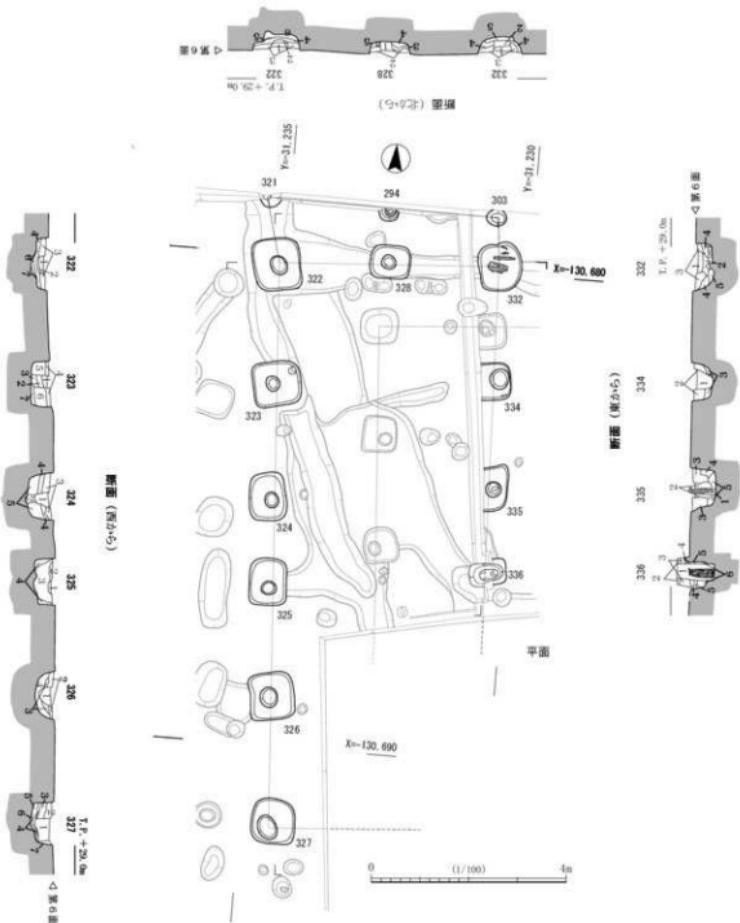


図58 9区 第6面掘立柱建物 1

### 322 ピット

1. 10Y85/2灰黄黒 細砂混じりシルト
2. 10Y84/2灰黄黒 細砂混じりシルト
3. 10Y84/4にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
4. 10Y84/1褐色 細砂～粗砂混じりシルト 硫化鉄を含む
5. 2.5Y6/2灰黒 細砂混じりシルト
6. 2.5Y4/1 黄黒 シルト
7. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト

### 323 ピット

1. 2.5Y5/2暗灰黒 細砂～中砂混じりシルトに  
2. 5Y5/4 黄黒 細砂混じりシルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
2. 2.5Y4/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに
3. 10Y84/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y6/2灰黒 黃土～シルトブロックが混じる
4. 2.5Y5/4 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト上  
10Y84/2灰黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
5. 10Y84/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/6にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2. 5Y6/2暗灰黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
6. 2.5W/3にぶい黄 黄土～粗砂混じりシルトに  
10Y84/2灰黒 黄土～粗砂混じりシルト
7. 10Y84/1褐色 中砂～粗砂混じりシルト

### 324 ピット

1. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/4明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 硫化鉄を含む
2. 2.5Y4/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y6/2灰黒 黃土～シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
3. 10Y84/1褐色 細砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒 細砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1灰白 シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
4. 2.5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルトと 10Y86/8明黄黒  
細砂混じりシルトと 10Y86/1褐色 細砂混じりシルトが混じり合う
5. 2.5Y4/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y85/6 黄黒 細砂～中砂混じりシルトブロックと  
2. 5W/3/2灰黒 黃土～粗砂混じりシルトブロックと

### 325 ピット

1. 2.5Y5/1灰 黃砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5W/8明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
2. 2.5W/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5W/6明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
3. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5W/6明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2. 5Y7/2灰黒 シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
4. 2.5Y4/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 硫化鉄を含む

### 326 ピット

1. 10Y85/1褐色 細砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒 細砂～粗砂混じり  
シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
2. 2.5W/2灰黒 細砂～粗砂混じりシルトに 2.5W/8明黄黒 細砂～粗砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる  
硫化鉄を含む
3. 10Y84/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒 粗砂～粗砂混じり  
シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む

### 327 ピット

1. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒 細砂～粗砂混じり  
シルトが混じる 硫化鉄を含む
2. 10Y84/4褐色 細砂～粗砂混じりシルト
3. 10Y84/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトに 10Y85/6黄黒 細砂～粗砂混じりシルト  
に 10Y86/6黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 硫化鉄を含む
4. 10Y86/6褐色 細砂～中砂混じりシルト
5. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト 硫化鉄を含む
6. 2.5Y5/2暗灰黒 細砂～粗砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒 細砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1灰白 シルトブロックが混じる 硫化鉄を含む
7. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトと 2.5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルト  
と 2.5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う

### 328 ピット

1. 10Y85/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/4にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 硫化鉄を含む
2. 2.5Y5/2灰黒 細砂～粗砂混じりシルトに 10Y86/8明黄黒  
細砂～粗砂混じりシルトと 2.5Y7/1灰白 細砂混じりシルト
3. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/8明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
4. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトと  
10Y86/8明黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
5. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト

### 329 ピット

1. 10Y85/4にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
2. 10Y85/1褐色 細砂～粗砂混じりシルト
3. 10Y86/6 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト
4. 10Y85/2灰黒 細砂～粗砂混じりシルト
5. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルト 硫化鉄を含む

### 330 ピット

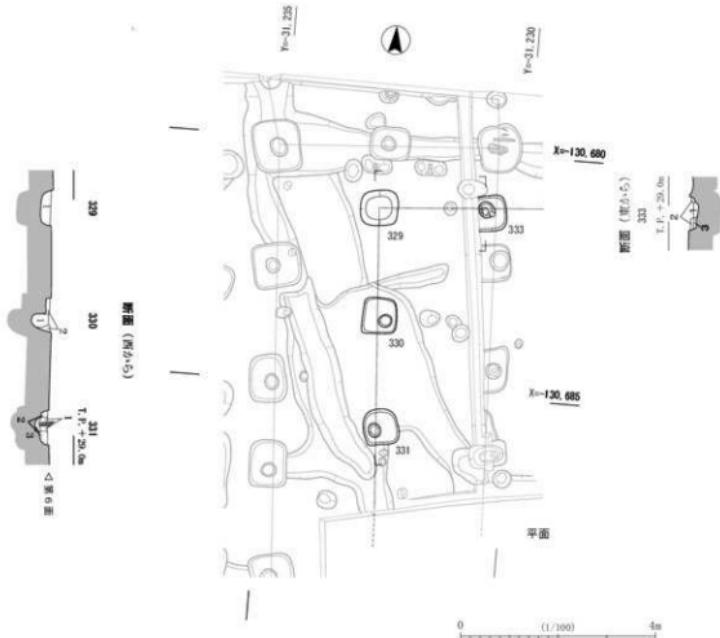
1. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y86/6褐色 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
2. 10Y85/1褐色 細砂～粗砂混じりシルトと  
10Y86/6褐色 細砂～中砂混じりシルトと  
2. 5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
3. 2.5Y5/1 黑黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y85/6 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2. 5Y7/1灰白 シルトブロックが混じる

### 331 ピット

1. 2.5Y5/1灰 黃砂～粗砂混じりシルト
2. 2.5Y5/1灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y6/2灰黒 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 硫化鉄を含む
3. 10Y85/5褐色 細砂～粗砂混じりシルトと  
10Y86/6褐色 細砂～中砂混じりシルトと  
2. 5Y7/1灰白 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
4. 10Y86/8 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y7/1灰白 細砂～中砂混じりシルトが混じり合う
5. 2.5Y5/1 黄黒 細砂～粗砂混じりシルトと  
2. 5Y5/1灰 黃砂～粗砂混じりシルト

### 332 ピット

1. 10Y85/1褐色 細砂混じりシルト
2. 10Y85/4褐色 細砂～粗砂混じりシルト
3. 10Y85/4にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルト
4. 10Y85/4にぶい黄黒 細砂～粗砂混じりシルトに  
2. 5Y7/2灰黒 シルトブロックが混じる
5. 10Y85/2暗灰黒 細砂混じりシルト
6. 2.5Y5/1暗灰黒 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
7. 10Y85/6 黄黒 細砂混じりシルトブロックが混じる



#### 329 ピット

1. 2.5Y5/2 増灰 黃 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい 黄褐色
- 細砂～粗砂混じりシルトブロックと 2.5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる  
僅 1cm 程度の繊を少量含む

#### 330 ピット

1. 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂混じり
- シルトブロックが混じる 炭化鉱を含む
2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐  
細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる

#### 331 ピット

1. 10YR5/1 黄灰 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐  
細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい 黄褐色
3. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐  
細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化鉱を含む

#### 333 ピット

1. 10YR5/1 黄灰 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐  
細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
2. 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい 黄褐色
3. 10YR4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルト

図59 9区 第6面掘立柱建物2

2.5Y6/1 黄灰色中砂～粗砂混じりシルトに 10YR4/4 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトや粗砂が混じる、中層が炭を多く含む 10YR6/1 褐灰色細砂混じりシルトと 2.5Y6/1 黄灰色細砂～中砂混じりシルト、下層が 2.5Y6/1 黄灰色中砂～粗砂混じりシルト。8世紀を主体とする土師器・須恵器（図 156 - 541 ~ 548）などが出土した。

199溝の主軸方位は N 24° E で 197 溝とほぼ並行する。検出長 22.0 m、幅 0.5 ~ 1.3 m、深さ 22 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり中砂～粗砂に 2.5Y7/1 灰白色シルト混じり中砂～粗砂と 10YR6/6 明黄褐色シルト混じり中砂～粗砂が混じる。8世紀末の須恵器（図 156 - 554 ~ 556）、9世紀中頃の縁軸陶器（図 156 - 557）、瓦（図 156 - 558・559）などが出土した。

197 溝と 199 溝は、心々距離 5.8 m、溝の内側間 5.1 m でほぼ並行しており、その間には 199 溝に先行する 198 溝があるものの、199 溝の東側に多く展開するピットがほとんどみられない。また、両

溝間の幅員の中央部には幅約 2 m に渡って地山層の上面に 4 ~ 5 cm 程度の厚さに N6/ 灰色粗砂混じりシルトに粗砂～径 3 cm 程度の礫がきわめて多く混じった層がみられ、小砂利が敷かれていた名残と考えられる。以上により、197 溝と 199 溝の間は道で、両溝はその側溝であった可能性が高い。

**198 溝** 上記 199 溝のすぐ西側、道と想定した範囲内に位置する。主軸方位は道とほぼ並行ではあるが、197・199 溝よりも蛇行している。検出長 13.5 m、最大幅 1.5 m。深さは、197・199 溝よりもかなり浅く 7 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白～6/1 黄灰色細砂～中砂。道の中のくぼみ的な溝であろう。8 世紀末の須恵器（図 156・549～552）と 9 世紀の縁軸陶器（図 156・553）が出土した。

**208・277 溝** 両溝とも 199 溝の東に、やや蛇行するが 0.4 ~ 0.8 m の間隔をもってほぼ並行する。

208 溝は、長さ 6.5 m、幅 0.4 ~ 0.9 m、深さ 4 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色細砂～中砂。6 個のピットと重複関係にある。8 世紀の土師器や 9 世紀の灰釉陶器（図 156・560）などが出土した。

277 溝は、208 溝東北端から 5.4 m 隔たって存在する。長さ 6.0 m、幅 0.6 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y6/6 灰白色細砂～中砂混じりシルトが混じる。4 個のピットと重複関係にある。そのうち 278 ピットでは溝理土の下層で柱痕跡が認められた。古代の土器細片が出土した。

溝とピットからなる平面形は、布掘り柱掘方に類するものである。その場合、ピットの方が新しくなるのが通例であろう。平面検出時には両溝ともピットの方が新しいようにも見えたが、断面を検討したところ溝の方が後から埋まったことが判明した。以上の状況から、208・277 溝は、197・199 溝を側溝とする道に沿った壇のような施設の柱穴であったものが、柱がなくなった後に埋まつたものと推測する。

**224・225 溝** 9 区南東部に位置する。半弧状の 2 本の溝が向かい合うようにあり、それらに囲まれた 2.5 m 四方程度の内部空間にはピットなどが見当たらない。

224 溝は、最大幅 1.3 m、深さ 13 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～中砂に 2.5Y5/6 黄褐色シルト混じり細砂～中砂や 5Y8/1 灰白色シルト混じり細砂～中砂が混じる。8 世紀の土師器鉢や製塙土器細片などが出土した。

225 溝は、最大幅 1.4 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂～中砂に 2.5Y6/6 明黄褐色シルト混じり細砂～中砂が混じる。8 世紀の土師器杯や製塙土器細片などが出土した。

**272 溝** 掘立柱建物 1 と重複関係にあり、それよりも古い。主軸方位は北北西 - 南南東。検出長 8.4 m、幅 0.7 m、深さ 12 cm。埋土は、2.5Y5/1 ~ 4/1 黄灰色細砂～中砂混じりシルト。出土遺物なし。

**285 溝** 272 溝の東に重複し、主軸方位は同じ。重複する周辺の遺構よりも古い。検出長 2.6 m、幅は 1.2 m 以上あるが、深さは 5 cm と浅い。埋土は、2.5Y7/6 明黄褐色細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**292 溝** 主軸方位はほぼ東西で、掘立柱建物 1 北辺の 3 個のピットと重複関係にあり、それよりも古い。西端で 272 溝につながる。検出長 6.0 m、幅 1.3 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂が混じる。出土遺物なし。

**300 溝** 掘立柱建物 1 の内部、掘立柱建物 2 の西辺近くに位置する。主軸方位は 272 溝とほぼ直交する東北東 - 西南西。西端は 271 落ち込みと重複し、それよりも古い。検出長 1.5 m、幅 0.4 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR4/2 灰黄褐色シルト～礫混じり細砂が混じる。出土遺物なし。

**201 土坑** 9区南東部に位置し、その南部は攪乱されている。平面は北北東・南南西に長い長楕円形と推定され、長径 1.2 m 以上、短径 0.7 m、深さ 34 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR5/6 黄褐色シルト～粗砂が斑状に混じる、下層が 2.5Y5/1 黄灰色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**256 土坑** 9区東部に位置する。平面は北西・南東に長い不整楕円形で、長径 1.6 m、短径 0.9 m、深さ 44 cm。埋土 4 層に分かれ、上層から順に、2.5Y5/2 暗灰黄色～5/6 黄褐色シルト混じり細砂～中砂、2.5Y7/1 灰白色～2.5Y5/6 黄褐色中砂～粗砂混じりシルト、2.5Y6/6 明黄褐色～5G7/1 明緑灰色細砂混じりシルトで、最下層は 2.5Y5/6 黄褐色～10YR6/1 暗灰色細砂～中砂混じりシルト。出土遺物なし。

**ピット** 掘立柱建物を構成するもの以外では、260 ピットと 277 溝と重複する 278 ピットで柱痕跡が認められたのみである。埋土が複数に分かれるピットが比較的多いが大半は単層で、配列からも建物や柵列などの復元には至らなかった。

これらのピットの出土遺物は 8 世紀の土師器・須恵器（図 156 - 534 ~ 539）が主体で、土鍾や古代の製塙土器細片なども出土した。

**271 落ち込み** 9 区北東部に位置する。重複関係からみて、285・300 溝よりも新しく、272 溝や 273・274・330・331 ピットよりも古い。東西幅 2.8 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりシルトに 2.5Y6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。瓦（図 156 - 561）などが出土した。

## 第9節 10区（A棟）・10-2区（防火水槽A）の遺構

10区は調査地南東部に位置する。建設工事との関係で、南側で東西に長い住宅A1棟と北東部のA2棟に分けて調査を行った。さらに、10-2区はA1棟の東側に接する防火水槽Aの設置に伴う調査である。以下、この3者を合わせて報告する。T.P.+30.8～31.2mの現地表面から、T.P.+28.6～29.7mの第5面まで調査した。最終面での調査面積は、A1棟・A2棟・防火水槽Aを合わせて1717m<sup>2</sup>である。

第1面は昭和14（1939）年爆発関連層の上面。倉庫や土管溝などを検出した。

第2面は昭和14年爆発関連層を除去した面。臨時構築物である掘立柱建物や軽便軌道に伴う枕木などとともに多数の爆発穴を検出した。

この10区では、8区・9区・12区のような土塁と火工場（爆発後は倉庫）が主体となる調査区とは異なり、昭和14年の爆発の前（第2面）後（第1面）で禁野火薬庫の建物が一変する。

第3面は中世～近世の面。溜池、土坑、溝を検出した。

第4面・第5面は基本的に古代の面で、一部それ以前の遺構もみられる。

A1棟（10区南側）では中央部の広い範囲には第4層が分布せず第4面段階で地山層が露出し、西部では第4面と第5面が分離できた。

A2棟（10区北西部）では第4面と第5面の分離が困難であった上に、今回の調査では最も密度高く掘立柱建物、井戸、土坑、ピット、溝などの遺構が検出された。このような状況のため、A1棟では第4面と第5面を分けて報告し、A2棟については遺構の検出状況に鑑み第4面と第5面を合わせて報告する。

### 層序（図60 写真図版51-193）

10区では南壁の断面を図示し、東壁（写真図版51-193）と西壁（写真図版51-194）の断面写真も掲げる。

第0層（1～4）は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層である。

第1層は、基本層序の第I層【昭和14（1939）年爆発関連層】に該当する。10区では爆発後に倉庫が建てられており、その際に相当な整地作業がなされたようである。しかし、爆発穴や復旧作業のための廃棄土坑的な土坑など（6～12）もかなり残っている。

第2層は、基本層序の第II層に該当する。火薬庫造成に伴う盛土層（13～22）を主体とし、それ以前の旧作土層（24）や中世～近世の包含層（25・27～34）も含む。

第3層（35～41）は、基本層序の第III層・第V層に該当する。この層を除去した第4面調査段階で10区南東部では地山層（第VII層）上面に達した。

第4層（42）は、基本層序の第VI層に該当する。今回の調査地は基本的に南西が高く北東が低くなる地形で、10区北東部も同様の傾向にある。しかし、10区西側では西方の11区に向かって谷状に低くなる範囲にのみ第4層が分布しており、それを除去して検出した第5面が地山層（第VII層）上面となる。

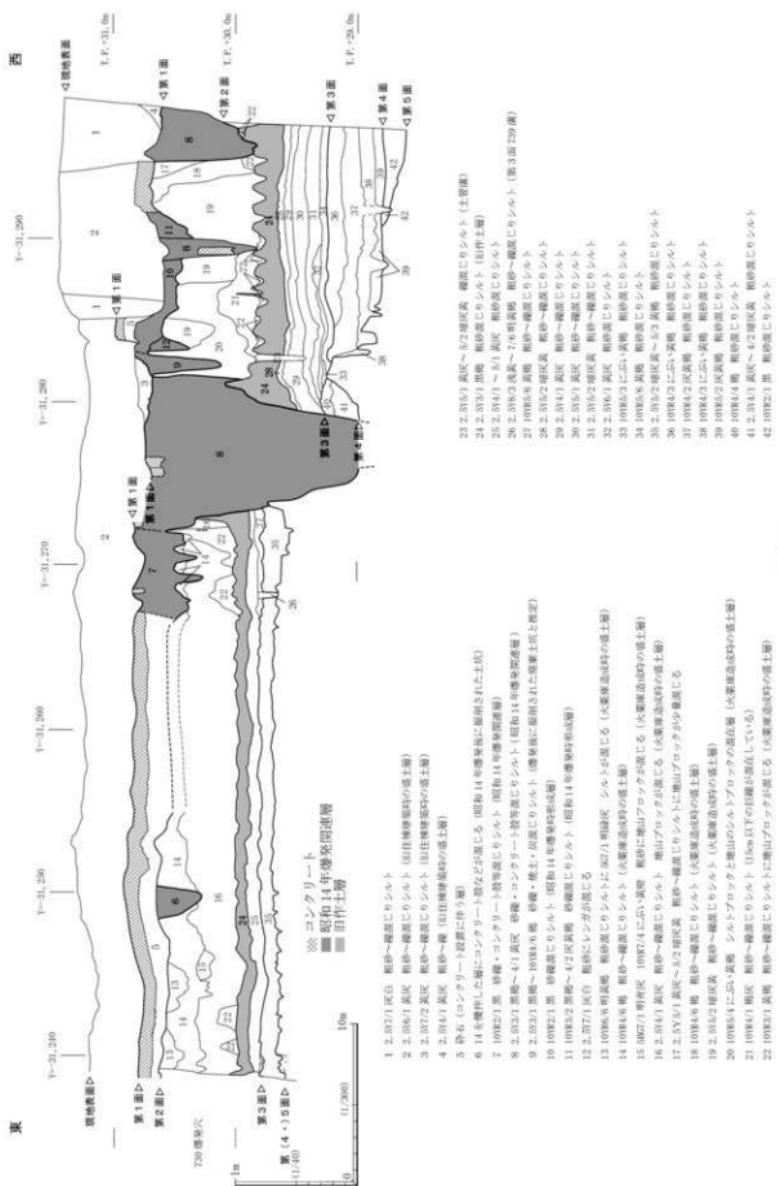


図 61 10区 第1面



## 第1面（図61 写真図版36-122～37-125）昭和14年以後

昭和14（1939）年爆発関連層の上の盛土のさらに上に設置されたコンクリート土間の検出面である。面の高さは、T.P.+30.4～30.7m。遺構として、倉庫や土管溝などを検出した。

**1～3建物** これらの土間コンクリートは、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」に記載された、南から、第16号倉庫（1建物）、第17号倉庫（2建物）、第18号倉庫（3建物）に該当する。

昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」では、第17号倉庫が第7号倉庫に改称されており、第16号倉庫と第18号倉庫は描かれていない。

昭和23（1948）年の米軍による航空写真では、第16号倉庫と第18号倉庫の土間コンクリートは比較的良好に残存しているように見える。

昭和29（1954）年に撮影された大阪大学の施設として使用されていた当時の航空写真を観察すると、第16号倉庫（1建物）は土間コンクリートが東側一部で破損を受けているようだが残存し、第17号倉庫（2建物）部分には建物が存在し、第18号倉庫（3建物）は東端部分を除き土間コンクリートが破損を受けている。今回の調査でも、1建物（第16号倉庫）の東部では土間コンクリートが破損を受けており、3建物（第18号倉庫）の残存状況は悪かった。

昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」には、それぞれの倉庫内に東西方向と南北方向に軽便軌道が敷設されていることが記されている。今回の調査では1建物（第16号倉庫）で南北方向（写真図版38-126・127）の、2建物（第17号倉庫）で東西方向（写真図版38-132）の軽便軌道の一部を検出できた。しかし、東西・南北方向の軽便軌道が交差する部分の転車台は検出できなかった。

各倉庫には北辺と南辺にそれぞれ4箇所ずつ、東辺と西辺にそれぞれ1箇所ずつ、合計10箇所の出入口が設けられていた。扉の溝の一部には鉄製レールが遺存する部分もあり、引戸であることが判明した。

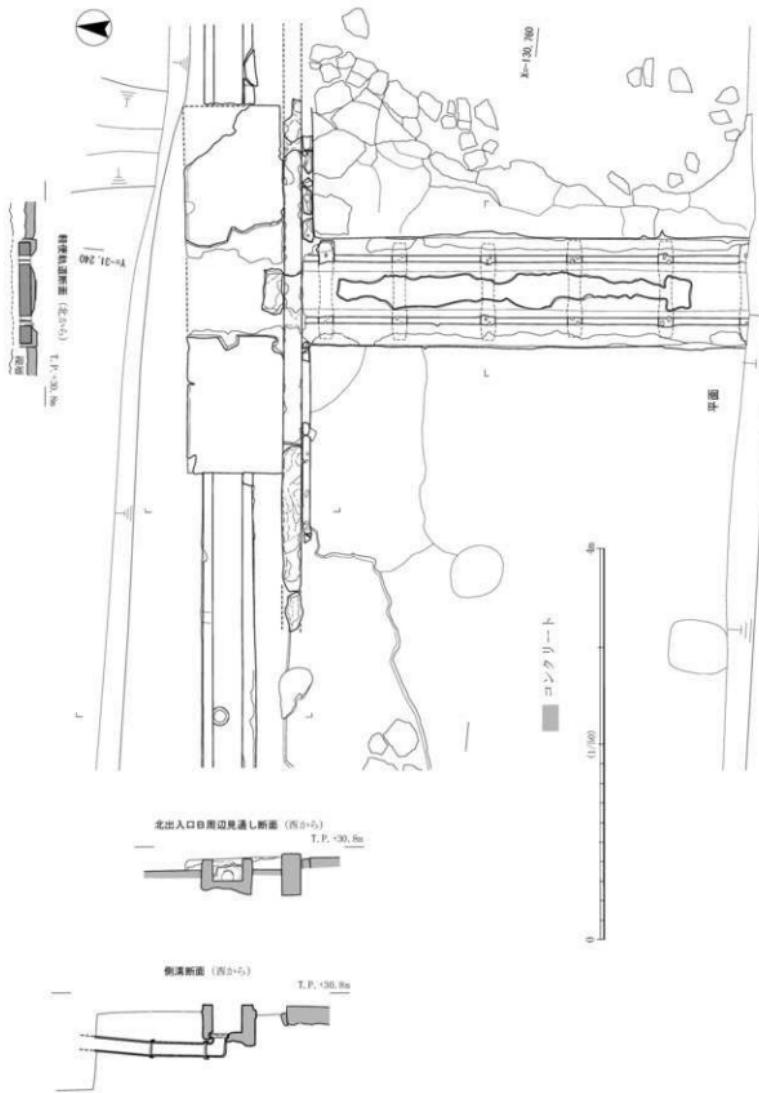
**1建物** の北部を、10区南部において東西74m、南北6mにわたって検出した。出入口は、北辺の4箇所全てを検出できた。そのうち北出入口B（図62）には南北方向の軽便軌道が敷設され、建物内部の床面に続いている（写真図版38-126・127）。コンクリート枕木の間隔は基本的には0.9mごとに配置されているが、出入口近くでは0.75mに詰まっている。軌間（ゲージ）は600mm。枕木6本の孔合計22箇所のうち11箇所に犬釘（図143-209～212）が残っていた。コンクリート土間の厚さは、出入口周辺で約10cmあり、その下層に径1～5cmの礫が厚さ10～20cmに敷かれている。

建物北辺外縁に造られた側溝（写真図版38-128）の外幅は50cmで、内法は幅30cm、深さ22～28cm。北出入口Bから2.4m西の側溝底には、L字形に屈曲した土管（図130-32）を用いた排水管が設えられていた。

残りの良い北出入口C（写真図版38-129）でコンクリート土間の規模を測ると、幅1.0m・長さ3.7mであった。土間の下には暗渠として土管（図130-33）が設置されていた。

**2建物** を、南北約11m、東西69mにわたって検出したが、破壊されている部分も広い。本来の規模は、昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」の第7号倉庫に「280坪」（924m<sup>2</sup>）と記されているので、南北約11mであることから（6間強）、東西は84～85m（約46.5間）と推定できる。

図 62 10区 第1面 1 建物北出入口B周辺



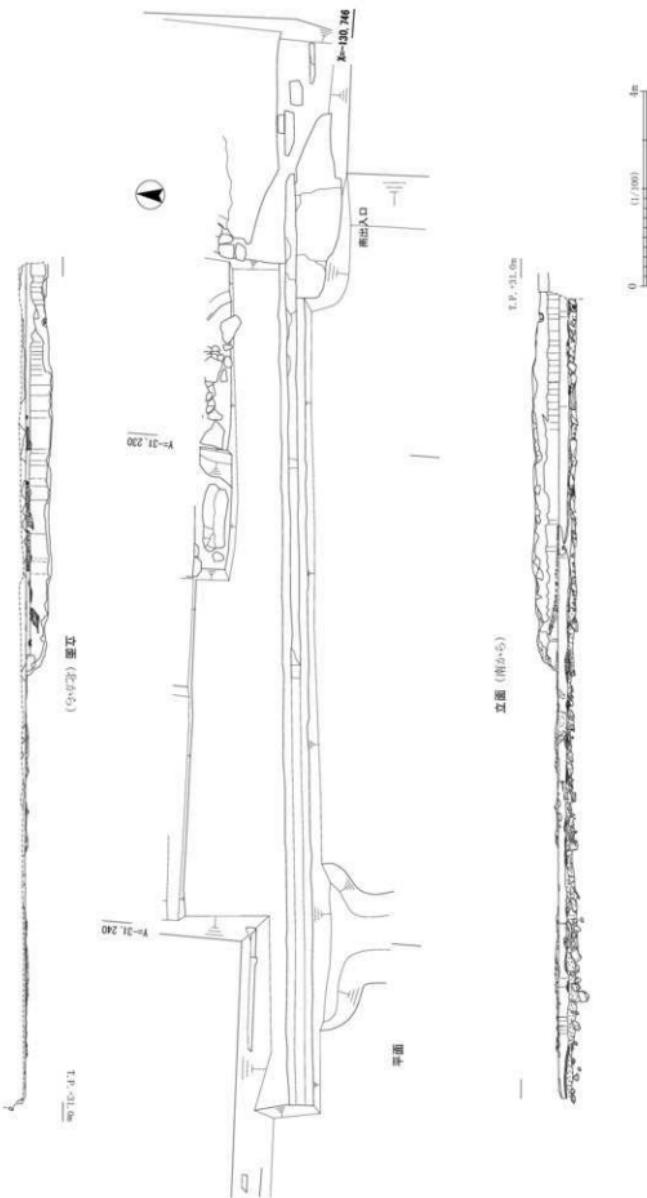


图 63 10 区 第 1 面 2 建物南辺東部

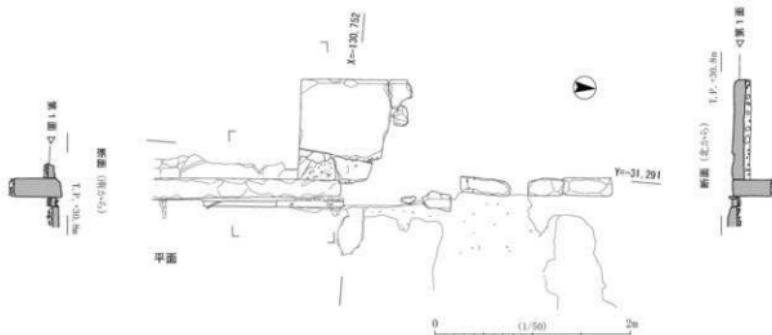


図64 10区 第1面2建物西出入口

比較的遺存状況の良い建物南辺東部の基礎（図63）では、栗石と捨てコンの上にフーチングを築き、さらにその上にコンクリート製の基礎を立ち上げた状況がわかった。基礎の外面には型枠痕が残る。他の調査区の基礎に埋め込まれていたような鉄筋は判然としない。

北出入口（写真図版38-130）周辺では、側溝と建物内部のコンクリート土間を検出できた。西出入口（図64・写真図版38-131）には、コンクリート土間と鉄製の引戸下棒（写真図版82-1111）が残っていた。痕跡的ではあるが、建物の中央部を東西に貫く軽便軌道（写真図版38-132）もみられた。

建物の北辺と南辺には、コンクリート製の側溝が設けられており、側溝の底に土管が埋め込まれている箇所もある。排水用と考えられるが、2建物では土管が連なっている状況は確認できなかった。

3建物は、北辺の出入口1箇所とその周辺のコンクリート土間や側溝が残るのみであった。

**40～43 土管溝** 2建物と3建物の間に敷設されている。44会所（橋）を交点として東西に41・43土管溝が、南北に40・42土管溝がつながる。配置箇所からすると、2・3建物（第17・18号倉庫）建設に伴って設置されたものであろう。1建物（第16号倉庫）の北側外縁にある側溝の状況を参考とし、土管の接合方向や勾配を加味して考えると、3建物南辺の側溝から南下する40土管溝・2建物北辺の側溝から北上する42土管溝・西から流下する43土管溝からの排水を44会所に集め、41土管溝で東に流すように配置されている。

42・43 土管溝に用いられた土管を、図130-34～36に掲げる。

## 第2面（図65 写真図版39-133～40-136）昭和14年以前

第1面検出の土間コンクリートや昭和14年爆発関連層（第1層）を除去し検出した爆発以前の禁野火薬庫に関する遺構面である。面の高さはT.P.+30.0～30.4 m。

第2面では、第1面で検出した倉庫以前の昭和12（1937）年に軍需動員に伴う臨時構築物とされる塩填作業場の掘立柱建物、軽便軌道に伴うと考えられる枕木などを検出した。ただし、昭和14年の爆発により生じた穴が多数あったため、これらの遺構はかなり損傷していた。

**第3号雑器庫** 10区北東隅において第1面の第18号倉庫（3建物）に重複するように検出されたコ

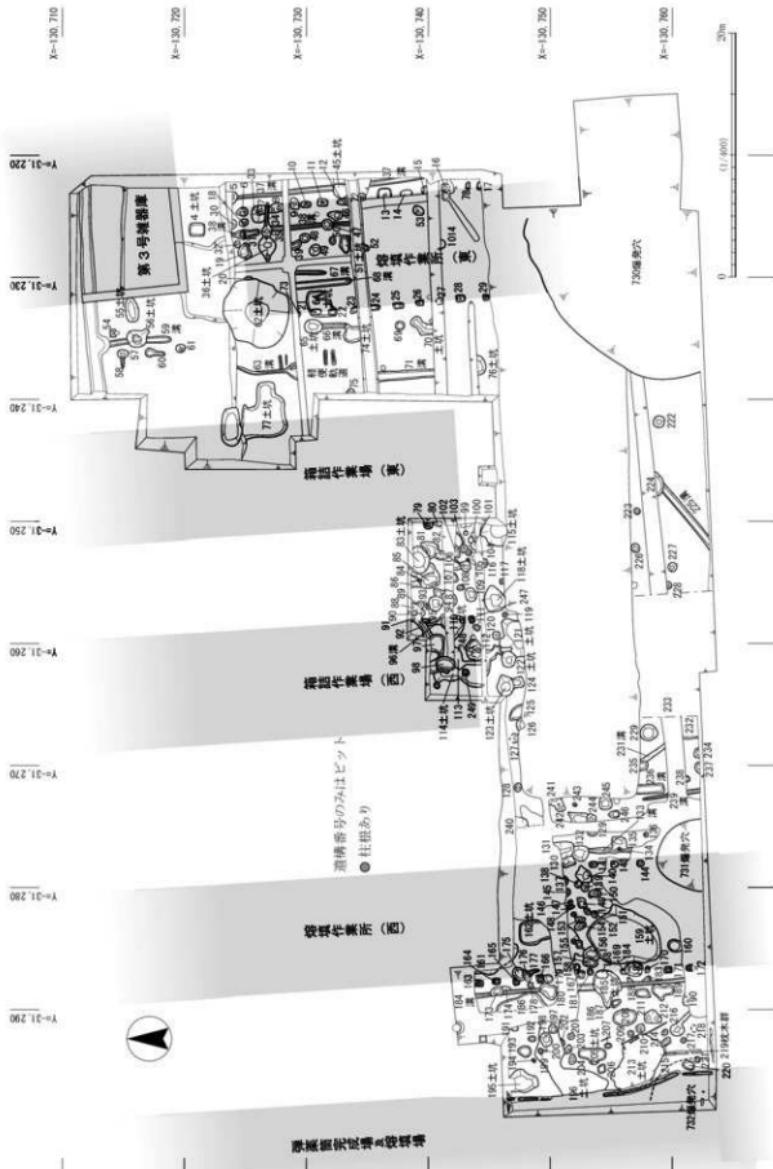


図 65 10区 第2面

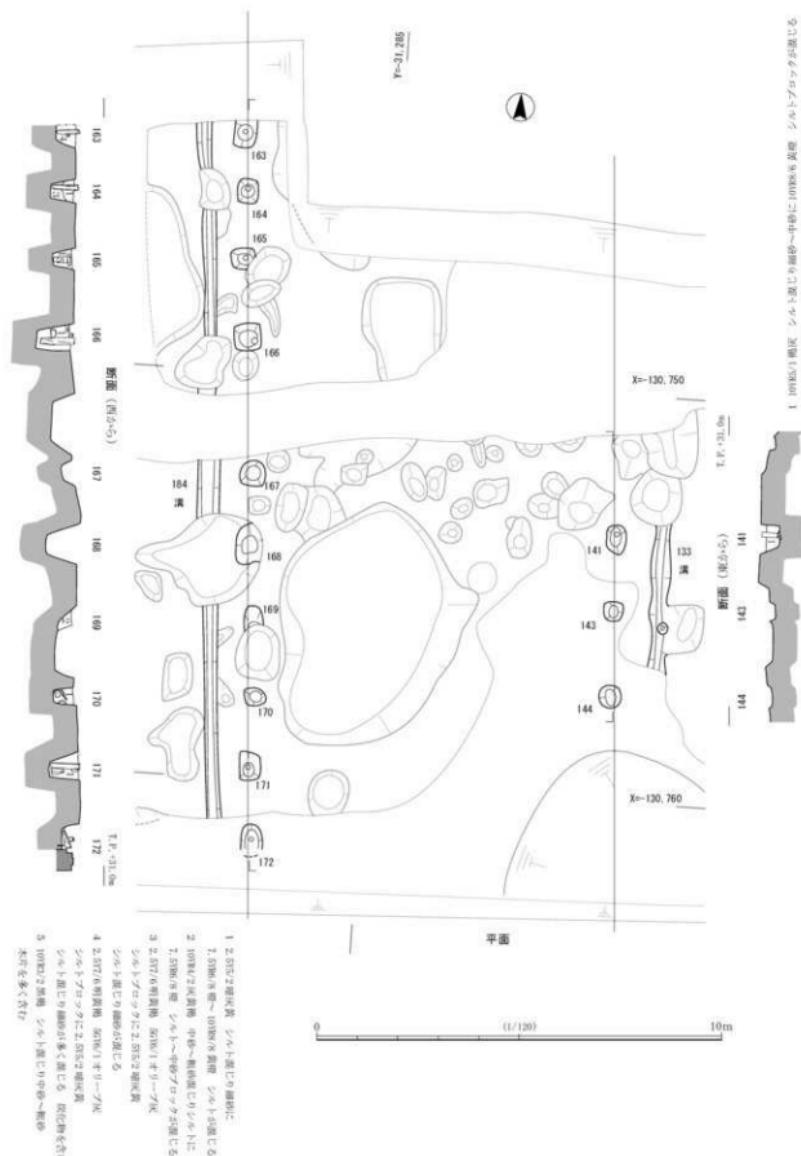


図66 10区 第2面熔填作業場（西）

ンクリート基礎である。東西・南北とも 8.5 m 以上の規模がある。第 3 号雑器庫は、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には描かれているが、同年の「禁野倉庫大阪工廠管要図」には記載がないことから、3 月 1 日の爆発により廃絶したものと推測できる。

**熔塙作業場（東）** 10 区東部、第 3 号雑器庫の南西側に位置する。検出できた範囲では、6 ピットが建物の最も北東に位置しそこから南の 17 ピットまで 19.5 m なので南北はそれ以上、73 ピットと 21 ~ 29 ピットが建物西辺と推定できるので東西は約 9 m の規模となる。ピットの埋土は、N2 / 黒色細砂～粗砂混じりシルトに 5Y6/2 灰オリーブ色シルトのブロックや 10G7/1 明緑灰色粗砂混じりシルトが混じる。柱根は、東辺の 13 ピットと西辺の 21・23 ~ 29 ピットで検出できた。この建物は『昭和 12 年度大阪陸軍兵器支廠歴史』記載の、昭和 12 年 11 月 3 日起工、同年 12 月 20 日竣工の熔塙作業場のうち東側のものに該当すると考えられる。面積は 378 m<sup>2</sup> と記入されており、東西が約 9 m (5 間) であることから、南北約 42 m (23 間) の規模であったと推定できる。また、その位置関係から、37 溝は建物東側の、66 溝は西側の雨落ち溝であったと考えられる。

なお、東西の熔塙作業場とその間にある 2 棟の箱詰作業場は、いずれも昭和 12 年の「軍需動員ニ伴フ臨時構築物」であるためか、コンクリート製の重厚な基礎はなく、掘立柱建物として建てられている。

**熔塙作業場（西）** (図 66 写真図版 41 - 137) 10 区西部に位置する。ピット (写真図版 41 - 138 ~ 142) から出土した柱材の存在などから、おおむね等間隔に掘削された 141・143・144 ピットが熔塙作業場の東辺、163 ~ 172 ピットが西辺に該当すると考えられる。この建物も上記『支廠歴史』に 630 m<sup>2</sup> と記されており、東西が約 9 m (5 間) であることから、南北約 70 m (38 間) と南北に細長い建物であったと推定できる。なお、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、この建物の南端に直径 13 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」が記入されており、10 区の南辺でそれと思われる穴が検出されたので、10 区南辺がこの建物の南端に近いと推定できる。また、熔塙作業場（東）の場合と同様にその位置関係から、133 溝は建物東側の、184 溝は西側の雨落ち溝であったと考えられる。両溝とも、重複関係にある爆発以後の土坑やピットよりも古く、時期的に整合する。

**箱詰作業場（東）（西）** 昭和 12 (1937) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」に「(朱書ハ軍需動員ニ伴フ臨時構築物ヲ示ス)」として追記された配置図には、東西の熔塙作業場の間に、それらよりも明らかに南辺が北に寄った箱詰作業場が 2 棟描かれている。位置的に 10 区中央部北側の張り出し部分のピットのいずれかがそれらを構成する可能性が高く、なかでも柱根の残っている 79・247・249 ピットがそれらの柱穴であると推定できる。熔塙作業場（東）の東西幅が約 9 m (5 間) であることと昭和 12 年や 14 年の配置図では建物がおおむね等間隔に配置されていることから、79 ピットが箱詰作業場（東）の西辺の柱穴、247 ピットが箱詰作業場（西）の南東角、249 ピットが同建物の南辺中央の柱穴であると考えられる。加えて、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」にこの 2 棟の箱詰作業場に該当する建物の内部に小規模な爆発穴が複数描かれている姿が、10 区中央部北側の張り出し部分の検出状況と一致する。

**軽便軌道** 熔塙作業場（東）の西側に南北方向に敷設されている。昭和 12 (1937) 年 12 月 28 日に起工された「鉄道側線延長 115 m」に該当するのものと推定される。軍需動員に伴う臨時構築物とし

て急速敷設されたためか、枕木は禁野火薬庫で多くみられるコンクリート製ではなくスギ材で遺存状況は概して悪い。その中で比較的残りの良い木製枕木（図 143 - 227）は、長さ 97 cm・直径 5 ~ 6 cm の幹に加えて枝も残っていた。その他の枕木も長さ 87 ~ 103 cm・直径 5 ~ 9 cm で、鉄製犬釘の残るもののみられた。その状況から軸間（ゲージ）は 500 mm と判明した。

**弾薬筒完成場及熔墳場** 10 区に西辺際に南北にコンクリート基礎が連なる。各年の配置図と比較すると、昭和 8 年から 14 年の爆発まで存在した弾薬筒完成場及熔墳場の東辺に該当すると考えられる。昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、この建物内部の南側には直径 9 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」が記録されており、この爆発に伴いコンクリート基礎が建物東辺南部で外側に向けてずれて膨らんだものと推定できる。

なお、細かいことだが、昭和 8 (1933) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」には弾薬筒完成場「及」熔墳場、昭和 11 (1936) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には弾薬筒完成場「並」熔墳場、昭和 12 (1937) 年の同図には弾薬筒完成場「並」熔墳場と記されている。

**219 枕木群** (写真図版 41 - 143) 10 区南西部では、6 本のコンクリート製枕木が出土した。2 本ずつ寄り添うように南北方向に縦に 3 組並んでいる。北側の 2 本（図 144 - 231・232）は長さ 90 cm、中央と南側（図 144 - 233）の計 4 本は 105 cm のコンクリート製枕木である。周囲に掘方などは認められず、枕木は当時の地表面に置かれたものと考えられる。

枕木の洗浄を行ったところ、このうち 2 点について新聞が転写されていることが判明した。いずれも大阪毎日新聞のもので、南西から出土した枕木には昭和 2 (1927) 年 8 月 10 日 (水) と 13 日 (土) の、北東から出土した枕木には同年 10 月 29 日 (土) と 30 日 (日) の記事が裏書きしている。新聞が転写されていたのは、枕木の一面のみであった。

この枕木は昭和 2 年以降に製造されたことが明らかである。その時期・位置・検出状況から、弾薬筒完成場及熔墳場の東辺外側に付属していた熔墳場または汽罐室の土台として使われていた可能性もある。昭和 9 (1934) 年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」では弾薬筒完成場及熔墳場の東辺の外側に張り出して熔墳場とその南側に小さな汽罐室、昭和 10 (1935) 年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」と昭和 11 (1936) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には同様な配置図に熔墳場とキカン室が描かれ、昭和 12 (1937) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」ではキカン室を描いていた線は消えたが、熔墳場とキカン室という文字が残る。昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作

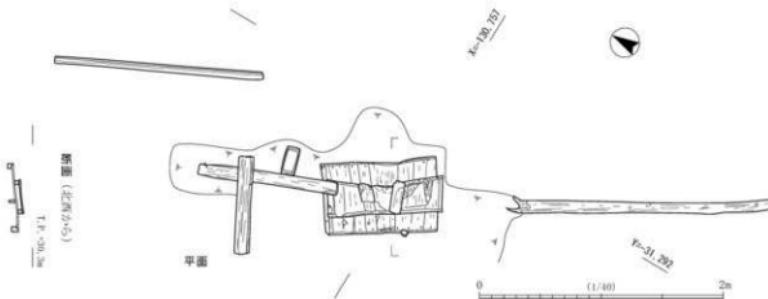


図67 10区 第2面250構造物

業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」では、弾薬筒完成場並熔塙場の位置に建物の表現が残り、そこに付属していた熔塙場やキカン室は消えている。

**250 構造物**（図 67 写真図版 41 - 144）10 区南西部に位置する。縦 60 cm・横 90 cm・厚さ約 10 cm の型枠に類似するが 2 段重ねになった木製品と、一辺 9 ~ 10 cm と一辺約 4 cm の角材がある。位置関係からみると、昭和 14 年の爆発により吹き飛んだ弾薬筒完成場並熔塙場の建築部材の一部の可能性がある。金属製品（図 137 - 135）が出土した。

**爆発穴** 10 区第 2 面では、昭和 14 年の爆発により生じた穴も特徴的な遺構である。「事故発生直前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」に「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」と記された漏斗状の穴が複数確認できた。このなかでも最大のものが 10 区南東部から 10 - 2 区にかけて検出した 730 爆発穴で、直径 20 m と記録されたものに該当しよう。なお、10 - 2 区では、第 2 面調査後一度埋め戻し、その後横矢板を設置しつつ機械掘削を行ったところ、その全域が直径 20 m の爆発穴内であることが判明した。また、10 区南辺西寄りの 731 爆発穴が直径 13 m の、10 区南西隅で上記の弾薬筒完成場並熔塙場内に想定される 732 爆発穴が直径 9 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」に該当する可能性が高い。

この他、10 区北東部の 4・36・45・51・55・56・62・64・65・70・74・76・77 土坑、10 区中央部北側の張り出し部分の 83・110・114・115・118・121・122・123 土坑や建物を構成しないピット群、10 区西部の 159・162・185・195・196・205・213 土坑や建物を構成しないピット群なども、黒々としたその埋土や砲弾片や瓦礫が出土することから、爆発穴あるいは爆発の事後処理のために掘られた土坑と考えられる。

砲弾片や瓦礫に加え、7 ピットから砲弾（図 139 - 150）や金属製品（図 138 - 138）、54 ピットから薬莢（図 140 - 161）、56 土坑から木ネジ（図 137 - 103）、62 土坑から分銅（図 128 - 6・7）や薬莢（図 140 - 162 ~ 164・172）や砲弾関連品（図 140 - 188）、77 土坑から金属製品（図 137 - 131）や薬莢（図 140 - 168）、83 土坑や 122 土坑から木製の托板（図 141 - 204）、162 土坑から樋受（図 128 - 16）や薬莢（図 140 - 174）、179 ピットから啄螺（図 140 - 179）、189 ピットから砲弾（図 139 - 147）や手違い（図 136 - 90）、196 土坑から金属製品（図 137 - 129）、1014 ピットから紙製品（写真図版 75 - 1095 ~ 1099）が出土した。

**溝** 上述のように 37 溝と 66 溝は熔塙作業場（東）の、133 溝と 184 溝は熔塙作業場（西）の雨落ち溝と考えられる。10 区北東部にある 31・38・59・63・66・67・68・71 溝は、熔塙作業場（東）の内外という違いはあるものの、比較的小規模で南北を主軸方位とし昭和 14 年爆発関連層である黒色土を埋土とするという諸点で共通する。10 区西部に位置し南北方向に延びる 236・239 溝や、主軸方位の異なる 225 溝や 231 溝も同様の埋土であり、昭和 14 年の爆発で廃絶した溝であろう。

瓦礫のほかに、37 溝から木ネジ（図 137 - 104・105）や薬包（写真図版 88 - 1120）、59 溝などから瓦（図 133 - 62・63）が出土した。

### 第3面（図 68 写真図版 42 - 145 ~ 147） 中世～近世

禁野火薬庫の盛土層・旧作土層・近世包含層（第 II 層）を除去して検出した第 III 層の上面である。面の高さは、中央南部が T.P.+29.8 m と高く、西部で T.P.+29.2 m まで、北東部で T.P.+29.1 m まで下がる。遺構として、溜池、土坑、溝を検出した。

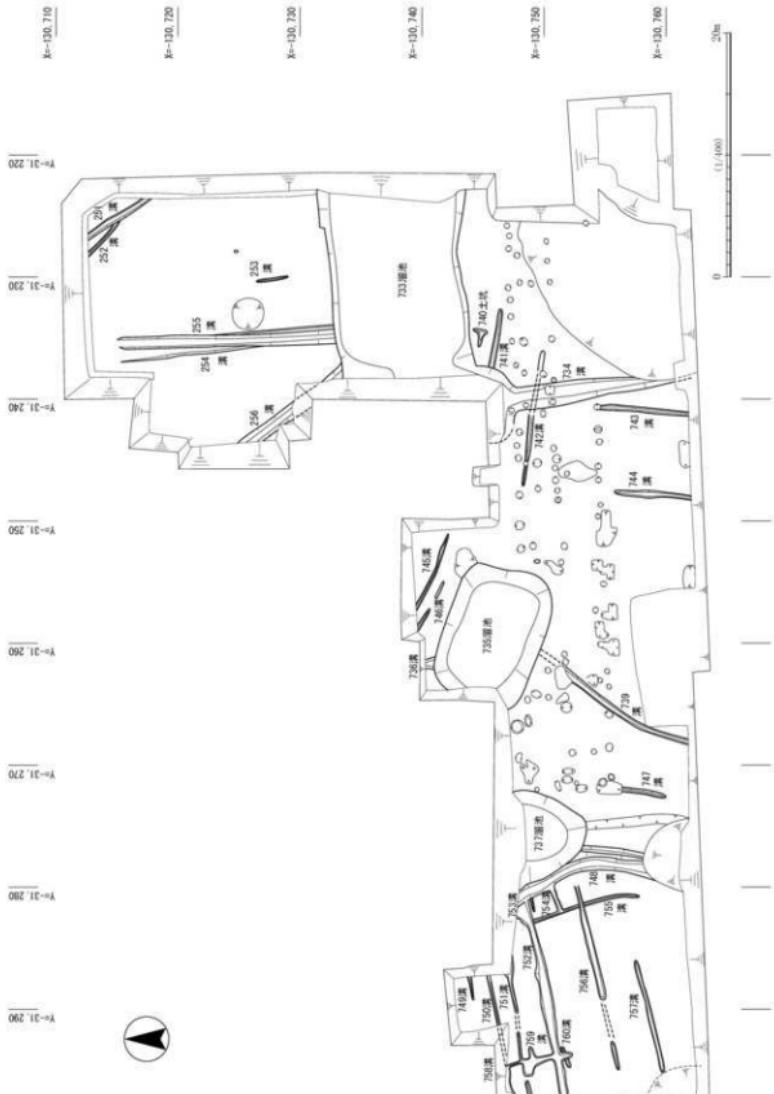


图 68 10 区 第 3 面

**733 溝池** 10区東部に位置する。南北10.5m、東西は調査区幅の15mよりは大きく、南西側に張り出しそこに734溝が取り付く。深さは0.9m以上。出土遺物なし。

**735 溝池** 10区中央部北側に位置する。平面橢円形で、西北西・東南東に長く、長軸約11m、短軸8.0m、深さ1m以上。出土遺物なし。南側に739溝が取り付くと考えられる。

**737 溝池** 10区西部に位置する。平面橢円形の南半を検出したような状況である。東西幅7.0m、南北検出長5.6m、深さ1.1m以上。出土遺物なし。この溜池に出入りする溝は明らかにできなかった。

**740 土坑** 10区東部、733溜池の南側に位置する。平面T字形で、東西1.4m、南北1.2m、深さ14cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**251 溝** 10区北東隅に位置する。主軸方位は北北西・南南東。検出長6.3m、幅0.5m、深さ8cm。埋土は、7.5Y5/1 灰色～2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。瓦細片が出土した。

**252 溝** 251溝と接続し、北西・南東に延びる。検出長3.8m、幅0.3m、深さ2cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**253 溝** 254～256溝とともに10区北東部に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、わずかに北北西・南南東に傾く。長さ2.6m、幅0.2m、深さ4cm。埋土は、252溝と同じ。土器細片が出土した。

**254 溝** 主軸方位はほぼ南北だが、わずかに北で西に偏する。重複関係にある255溝よりも古い。検出長17.6m、幅1.4m、深さ10cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。黒色土器A類碗や製塙土器細片などが出土した。

**255 溝** 主軸方位は南北。検出長17.7m、幅1.0m以上、深さ22cm。埋土は、10YR5/6 黄褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**256 溝** 主軸方位は北西・南東。検出長10.5m、幅1.1m、深さ29cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**739 溝** 10区中央部に位置する。南部では北北東・南南西、北部では北東・南西を主軸方位とし、北東端で735溜池につながると考えられる。検出長約13m、幅0.5m、深さ12cm。埋土は、2.5Y8/3 浅黄色～7/6 明黄褐色粗砂～礫混じりシルト。土器細片が出土した。

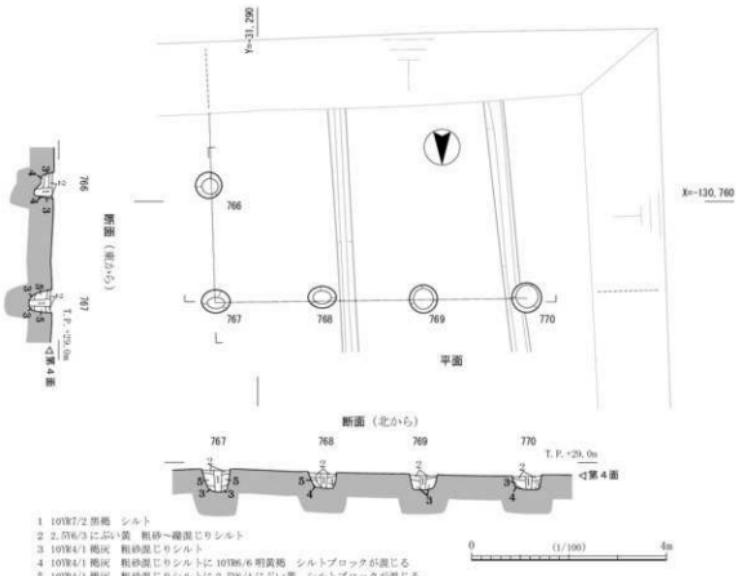
**748 溝** 10区西部に位置する。検出した範囲では、南北を主軸方位としつつ、東に張り出す弧状を描く。検出長約11m、幅0.9～1.1m、深さ16cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。陶器の細片などが出土した。

**その他の溝** 741・742溝は10区東部に位置し、主軸方位はわずかに西北西・東南東。743・744・747溝は10区中央部南側に位置し、主軸方位はほぼ南北。745・746溝は10区中央部北側に位置し、主軸方位は西北西・東南東。749～754・756・757・759・760溝は10区西部に位置し、主軸方位は東北東・西南西。755・758溝はそれらと直交し、主軸方位を北北西～南南東とする。以上の多くは、当面の直上にみられる10YR5/6 黄褐色粗砂混じりシルトなどを埋土とする。いずれも耕作に伴う溝と考えられる。

752溝から15世紀後半の陶器すり鉢、765溝から製塙土器細片、750・757溝から土器細片などが出土した。

図 69 10区 第4面





#### 10区(A1棟)第4面(図69 写真図版43-148・149) 古代

10区には基本層の第IV層は分布しないので、第III層・第V層を除去して検出した第VI層の上面である。その第VI層も10区では西部や北東部(A2棟)にのみ分布し、10区南側の広い範囲では地山層上面に達した。この項では、第4面としては10区西部に分布する第VI層の上面部分を報告する。その部分の面の高さは、T.P.+28.7~29.0m。遺構として、掘立柱建物と溝を検出した。

10区北東部(A2棟)部分については後述する。

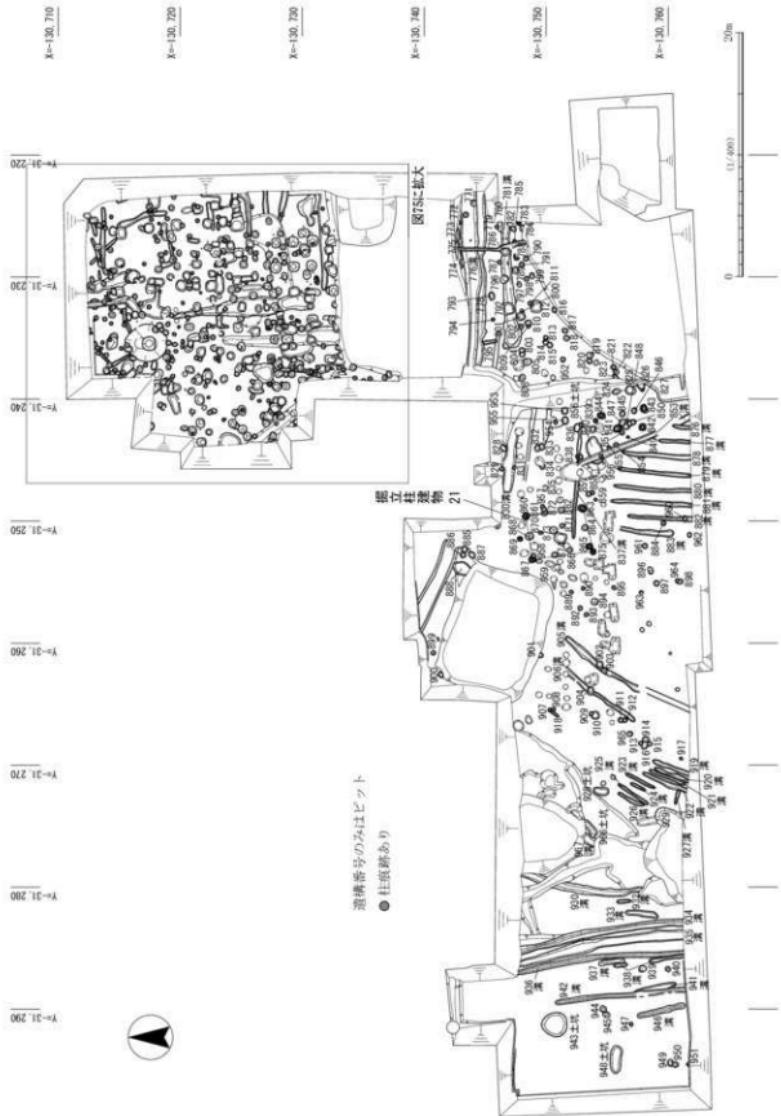
**掘立柱建物20(図70)** 10区南西隅に位置する。方位N89°E、柱間寸法いずれも2.1mで並ぶ767~770ピットと、その東端の767ピットの南2.3mに位置する766ピットの計5個の柱穴を検出した。桁行3間以上・梁行1間以上の側柱建物と推定される。掘立柱建物を構成する各ピットから古代の土器細片が出土した。

**761~765溝** 10区西部にあり、ほぼ南北を主軸方位とする。いずれも耕作に伴う溝と考えられ、第3層下部である10YR5/2灰黄褐色粗砂混じりシルトを埋土とする。764・765溝から古代の土器細片が出土した。

#### 10区(A1棟)第5面(図71 写真図版43-150~153) 古代以前

地山層(第VII層)上面である。面の高さは、10区中央部南側でT.P.+29.7mと高く、北東部でT.P.+28.8mまで、西部でT.P.+28.6mまで低くなる。この項では10区南側(A1棟)の第5面で検出した掘立柱建物、土坑、溝、ピットについて報告する。

図 71 10 区 第 5 面



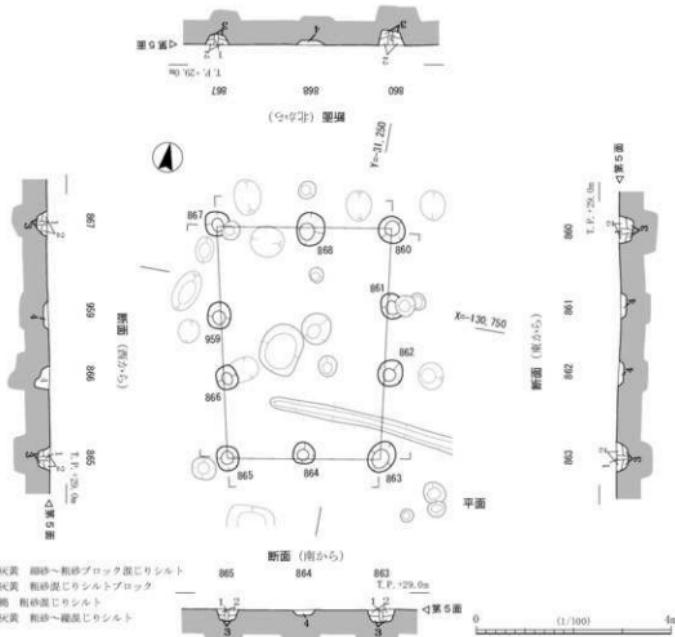


図72 10区 第5面掘立柱建物21

**掘立柱建物21** (図72) 10区中央部に位置する。主軸方位はN 9° Wで、桁行3間 (東4.7m、西4.8m)・梁行2間 (北3.5m、南3.2m)、面積15.9 m<sup>2</sup>の側柱建物である。北側のピットは深くて柱痕跡が認められるが、その他のピットは浅くて単層である。北西隅の867ピットからのみ古代の土器細片が出土した。

**827土坑** 10区南東部に位置する。南側は調査区外に広がり、東側は第2面の730爆発穴に搅乱されている。東西2.0m以上、南北3.3m以上、深さ15cm。埋土は、上層が2.5Y6/1 黄灰色～6/2灰黄色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じりシルト。8世紀後半の須恵器 (図158-615・616) などが出土した。

**856土坑** 10区中央部やや東寄りに位置する。重複関係にある853溝よりも古い。平面は東北東～西南西に長い楕円形で、長径2.2m、短径1.2m、深さ8cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。6世紀末～7世紀初頭の須恵器 (図158-617) などが出土した。

**928土坑** 10区中央部西側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径1.3m、短径0.6m、深さ9cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルトに炭が含まれる。8世紀後半の須恵器杯蓋・皿蓋 (図158-618・619) などが出土した。

**943土坑** 10区西部に位置する。平面はほぼ円形で、直径約2.0m、深さ20cm。埋土は、10YR3/2 黑褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

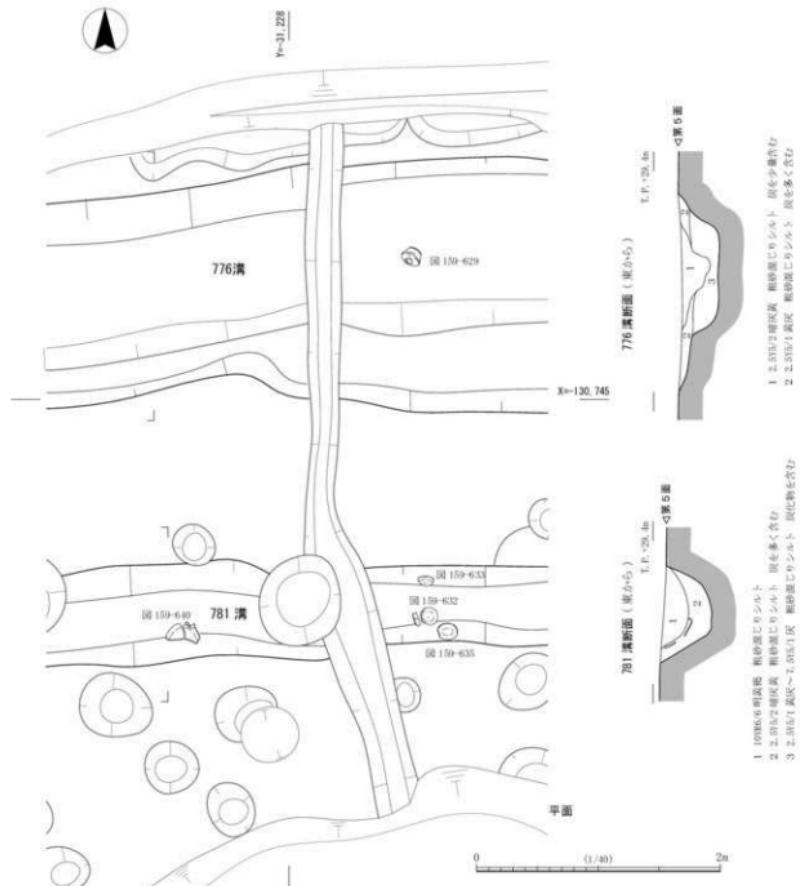


図73 10区 第5面776・781溝

**948 土坑** 10区西部、943土坑の南南西約4mに位置する。平面は東西に長い楕円形で、長径2.2m、短径1.0m、深さ20cm。埋土は、943土坑と同じ10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**966 土坑** 10区中央部、上記928土坑の西北西約2.5mに位置する。平面は北東-南西に長い楕円形で、長径1.5m、短径0.6m、深さ8cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**775溝** 10区東部に位置する。776・781溝と重複関係にあり、それらよりも新しい。検出長は5.7mだが、北半は南北を主軸方位とし、幅0.3m、深さ6cm、南半では南でわずかに東偏し、幅0.5m、深さ12cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**776溝(図73)** 主軸方位は東西で、検出長約14.5m、最大幅2.0m、深さ33cm。埋土は、図73の

1. 2.035/2層灰泥・粗砂混じりシルト
2. 2.035/1層灰・粗砂混じりシルト 壁を多く含む
3. 2.035/1層灰 - 7.035/1層 粗砂混じりシルト・腐化物を含む

1. 10Y6/6明灰泥・粗砂混じりシルト
2. 2.035/2層灰泥・粗砂混じりシルト 壁を多く含む
3. 2.035/1層灰 - 7.035/1層 粗砂混じりシルト・腐化物を含む

ように3層に分かれる。8世紀前半～中頃の土師器・須恵器（図159・620～629）などが出土した。  
**781溝**（図73写真図版51・191）776溝の南約1.3mに並行する。検出長10.2m、最大幅1.4m、深さ41cm。図73のような状況で主に8世紀中頃～後半の土師器・須恵器（図159・630～640）などが出土した。

**795溝**776溝の南側に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、北でわずかに西偏する。長さ1.1m、幅0.3m、深さ6cm。埋土は、2.5Y6/1黄灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**830溝**10区中央部北東側に位置する。主軸方位はほぼ東西だが、西でわずかに北偏する。検出長6.3m、幅0.8mだが一部では1.2mにまで広がり、深さ17cm。埋土は、上層が2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y4/1黄灰色粗砂混じりシルト。8世紀前半の須恵器壺片などが出土した。

**853溝**10区中央部南東側に位置する。主軸方位は北北西～南南東。途中途切れる部分もあるが、検出長約10m、幅0.5m、深さ18cm。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。6世紀末～7世紀初頭の須恵器蓋などが出土した。約30°という中途半端な交差角ではあるが、耕作に伴うと考えられる876～878溝の北端を制するようにのびており、その北東側にはピットが多くみられることから、853溝には区画機能が想定できる。

**905・906溝**10区中央部に位置する。905溝と906溝の主軸方位はN36°E。両溝ともごくごくゆるく弧を描きつつ、心々距離およそ2.0m、溝の内側間1.4～1.9mで並行している。溝よりも新しいピットと重複しているが、溝間には他の遺構が存在しない。以上の平面形からは両溝が道路側溝とも考えられる。しかし、両溝は調査区を貫通せず、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～疊混じりシルトという埋土は前述の耕作に伴う溝と共に通し、道路側溝と推定した9区第6面の197・199溝のような溝間の路盤状の層もない。したがって、905・906溝も耕作に伴う溝であろう。905溝からのみ古代の土器細片が出土した。

**930溝**10区西部に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、北側でごくゆるやかに東へカーブを描く。検出長約10m、幅0.7m、深さ14cm。埋土は、2.5Y7/2灰黄色粗砂混じりシルト。8世紀後半の須恵器壺（図159・641）などが出土した。

**934～936溝**10区西部に位置する。耕作に伴う溝に比べてやや規模が大きく、埋土も異なる。主軸方位はほぼ南北だが、北で西偏する。長さはいずれも13.5m以上である。幅と深さは、934溝が0.7mと27cm、935溝が1.0mと14cm、936溝が0.5mと17cm。埋土は、2.5Y3/2黒褐色粗砂混じりシルトで共通する。934溝から製塙土器細片、935溝から8世紀中頃の土師器（図159・642）・須恵器など、936溝から古代の土器細片が出土した。

周辺の調査成果を援用すると、これらの溝よりも西側は、南北方向の道路であった可能性もある。

**その他の溝**837溝は10区中央部に位置し、主軸方位はほぼ東西だが、西でわずかに北偏する。埋土は、2.5Y6/2灰黄色粗砂混じりシルト。876～883溝は10区中央部南東側に位置し、主軸方位はほぼ南北。埋土は、2.5Y6/2灰黄色粗砂混じりシルト。919～926溝は10区中央部南側に位置し、主軸方位を北北東～南南西。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。932・933・937・938・941・942・946溝は10区西部に位置し、主軸方位はほぼ南北とする。埋土は、やはり2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。これらの溝からの出土遺物は少なく、878溝から古代の土器細片、937溝から8世紀前半頃の須恵器壺片などが出土したのみである。

これらの溝は、形態と埋土と僅少な遺物からみて、耕作に伴うものと考えられる。

**ピット** 10 区 (A 1 棟) の第5面でも、とくに中央部以東で多くのピットを検出した。それらのうち柱痕跡が認められたのは、掘立柱建物 21 の四隅のピット以外では、10 区東部の 783・788 ピット、中央部南東側の 839・841～844 ピット、掘立柱建物 21 周辺の 869・875 ピットの計 9 個のみであった。その中では 839・841～844 ピットが分布状況からみて掘立柱建物を構成する可能性がある。その他のピットは単層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。ピットから出土した土師器・須恵器・瓦 (図 158・605～614) はいずれも 8 世紀の所産である。

#### 10 区 (A 2 棟) 第4・5面 (図 74～76 カラー写真図版 2・3 写真図版 44・154～45・157) 古代

10 区北東部 (A 2 棟) の古代の遺構面である第4・5面においては、今回の調査では最も密度高く、井戸、掘立柱建物や柱列を構成するピット、土坑、溝などの遺構が検出された。面の高さは、第4面で T.P.+28.9～29.2 m、第5面では T.P.+28.0～29.1 m と、おおむね 10 cm 程度の差であった。

第4面の平面 (図 74) では、作業痕跡として、柱穴の段下げ時に柱痕跡が見つかったピットについては下端ではなく柱痕跡の平面形を図化してある。

第5面については、第5面で検出した遺構とともに第4面で検出した遺構を第5面まで掘り下げた状況を薄く示し (図 75)、さらにその図に第4・5面で検出した掘立柱建物・柱列を加えた (図 76)。

以下、堆積状況や検出状況に応じて、第4面と第5面で検出した遺構を合わせて報告する。なお、10 区北東部 (A 2 棟) の遺構番号は、第4面検出が 257～447、第5面検出は 448～770・968～1013 である。

**井戸** A 2 棟北西部に位置する井戸は、630 井戸 → 357 井戸 → 353 井戸 (図 77) の順に重複している。

**630 井戸** 第5面検出。平面ほぼ円形で、直径 3.1～3.5 m。その後重複して 353・357 井戸が設けられているため、その構造などは明らかではない。

掘方から、8世紀後半頃の土師器・須恵器 (図 169・787～791) や製塩土器細片などが出土した。

**357 井戸** 第4面検出。353 井戸により南部を壊されているが、平面は直径約 1.5 m の円形と推定できる。

8世紀後半の土師器杯 (図 169・783) や須恵器甕、製塩土器 (図 169・784～786) などが出土した。

**353 井戸** (図 78 写真図版 46・158～47・166) 第4面検出。重複関係からみて、3基のうち最も新しい。平面円形で、直径 1.5～1.6 m、検出面からの深さ 1.6 m。井戸枠はヒノキ材 (図 165・752～168・770) を用いた横板井籠組構造で、井戸底の集水施設もヒノキ材の曲物である。

8世紀の土師器・須恵器 (図 169・771～775) も混じるが、製塩土器 (図 169・778・779)、瓦 (図 169・780～782)、9世紀の須恵器 (図 169・776)、黒色土器、灰釉陶器 (図 169・777) などが出土した。

井戸同士の重複関係と主体を占める土器の時期から、8世紀後半～9世紀初頭の所産と考えられる。その点で、後述の掘立柱建物 12 が井戸屋形であった可能性が高い。

**掘立柱建物・柱列** 10 区北東部 (A 2 棟) の第4・5面の調査時点で、柱根や柱痕跡のあるピットを中心に検討し、掘立柱建物 10 棟と柱列 2 箇所 (掘立柱建物・柱列 1～12) を復元した。さらに、ピットの埋没状況からは根拠が劣るもの、平面分布などを考慮して掘立柱建物 5 棟と柱列 2 箇所 (掘立

柱建物・柱列 13～19) を想定復元した。それらの遺構は、第4面で完結したものは「第4面」、第4面で検出したが第5面が露出していた部分に位置するものや第4面と第5面で検出したものは「第4・5面」、第5面で検出したものは「第5面」と記載した。

**掘立柱建物 1** (図 79 写真図版 48-167) 第4面において明瞭に検出できた。A2棟北東部に位置する。主軸方位はN 4° Wで、桁行4間(9.6 m)・梁行2間(4.8 m)、面積46.1 m<sup>2</sup>の側柱建物である。個々のピット(写真図版 48-168～49-179)の埋土を図 79 に示す。東辺の 259・260 ピットと西辺の 265・267 ピットからはスギ材の柱根(図 162-698・699・704・705)が出土し、その他のピットでも柱痕跡が認められた。

各ピットから8世紀中頃～末の土師器・須恵器・製塙土器・瓦(図 162-693～697・700～703・706)などが出土した。

**掘立柱建物 2** (図 80) 第4・5面検出。A2棟南東部に位置する。ピットを8個検出したが、南部は第3面 733 深池により搅乱されている。東西3間(4.8 m)・南北2間以上の総柱建物であろう。全てのピットで柱痕跡が認められた。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位はN 5° Wとなる。後述する掘立柱建物9と重複関係にあり、それよりも新しい。掘立柱建物 2・9 の柱穴が重複する位置にある 971 ピットは、平面・断面とも他のピットと状況が異なっており、柱を抜き取った跡とも考えられる。

各ピットから8世紀中頃の土師器・須恵器(図 162-707・708)、製塙土器、瓦片などが出土した。

**掘立柱建物 3** (図 81) 第4・5面検出。A2棟南西部に位置する。南部は搅乱されているが、主軸方位 N 3° W、桁行3間以上(6.5 m以上)・梁行2間(4.5 m)、面積 29.3 m<sup>2</sup>以上の側柱建物である。建物東側の柱列の東側 1.8 m に平行して外周柱穴列が存在することから、東面廂と考えられる。柱痕跡が、身舎の西辺の 286 ピットと東辺の 720 ピットと外周柱穴列の 579 ピットで認められた。

北西隅の 387 ピットから、8世紀の土師器・須恵器(図 162-709・711)とともに9世紀の土師器甕(図 162-710)や綠釉陶器椀(図 162-712)、瓦(図 162-713)なども出土した。他のピットからの出土遺物は、製塙土器や瓦の細片が多い。

**掘立柱建物 4** (図 82) 第4・5面検出。A2棟西部に位置する。主軸方位はN 87° E。桁行は5間以上(8.6 m以上)で、調査区外さらに延びる可能性もある。梁行は2間相当(東4.1 m、西4.0 m)の長さがあるが、梁行中央の柱は確認できなかった。面積 34.8 m<sup>2</sup>以上の側柱建物と考えられる。北西隅の 647 ピットからスギ材の柱根が出土し、柱痕跡が北東隅の 655 ピットと南西隅の 679 ピット以外の9個のピットで認められた。

南辺の 663 ピットに8世紀後半の須恵器蓋(図 162-714)などがみられたほか、各ピットから古代の土器細片も出土した。

**柱列 5** (図 83) 第4・5面検出。掘立柱建物 4 と重複するが、ピット同士の切り合いはない。主軸方位 N 89° E、柱間寸法 1.6～1.9 m で並ぶピット 4 個で構成される。全てのピットで柱痕跡が認められた。掘立柱建物であれば、これらを南辺として北方に展開すると考えられる。あるいは、櫛の可能性もある。

西端の 648 ピットの須恵器杯などの他、各ピットからも古代の土器や製塙土器の細片が出土した。

**掘立柱建物 6** (図 84) 第5面検出。A2棟中央部に位置する。掘立柱建物 1 と重複するが、ピット同士の切り合いはない。主軸方位 N 87° E、桁行2間(4.2 m)・梁行2間(3.3 m)、面積 13.9 m<sup>2</sup>の側柱建物である。南辺中央の側柱は見当たらなかったが、東辺の 520 ピットからスギ材の柱根が出土し、

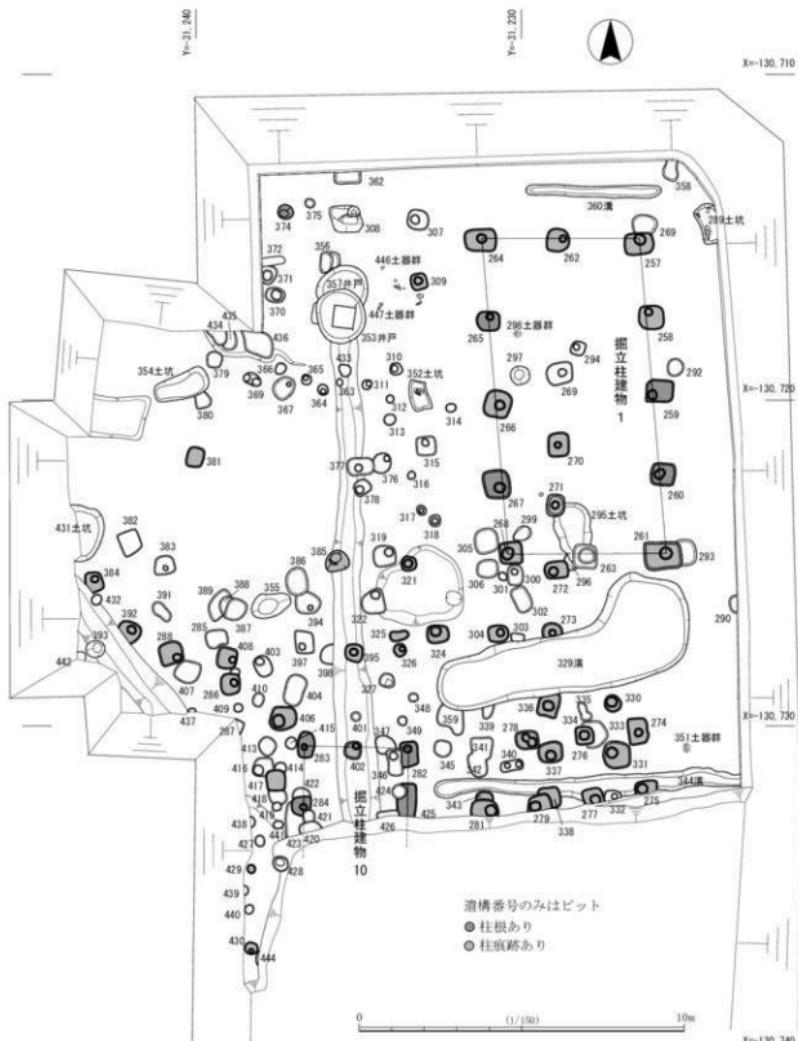


図74 10区(A 2棟) 第4面



図75 10区(A2棟) 第5面



図76 10区(A 2棟) 第4・5面掘立柱建物・柱列配置

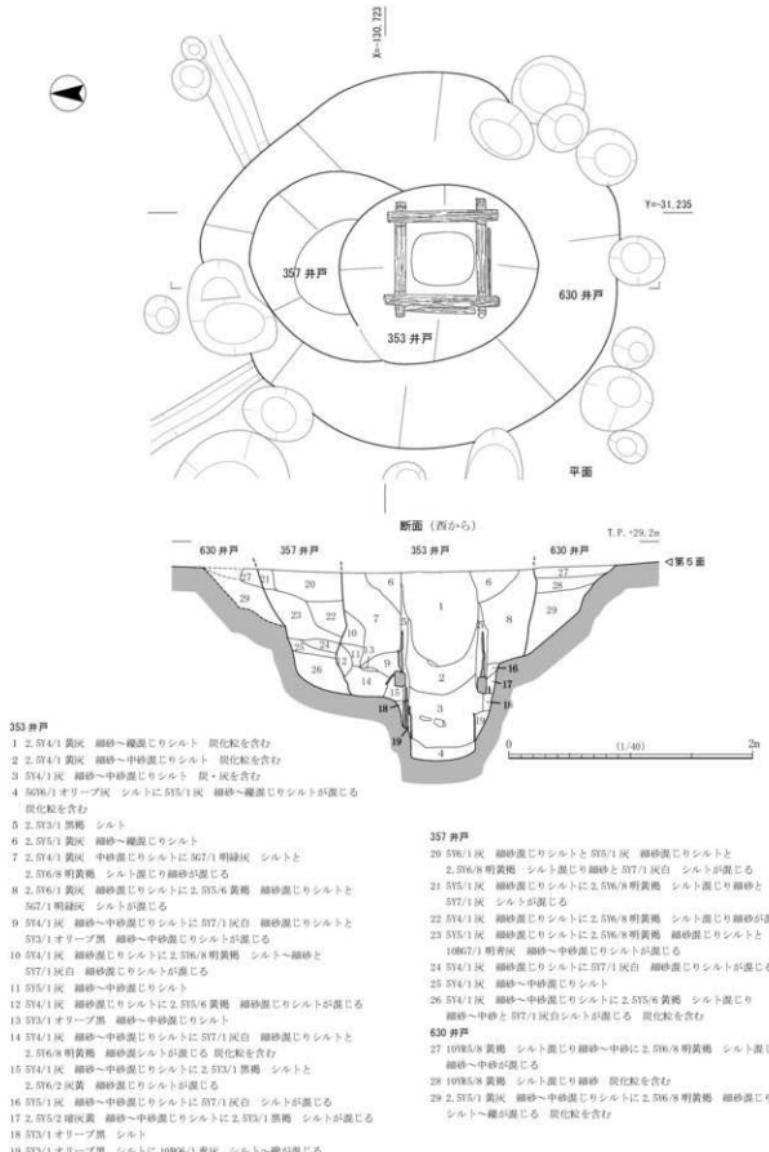
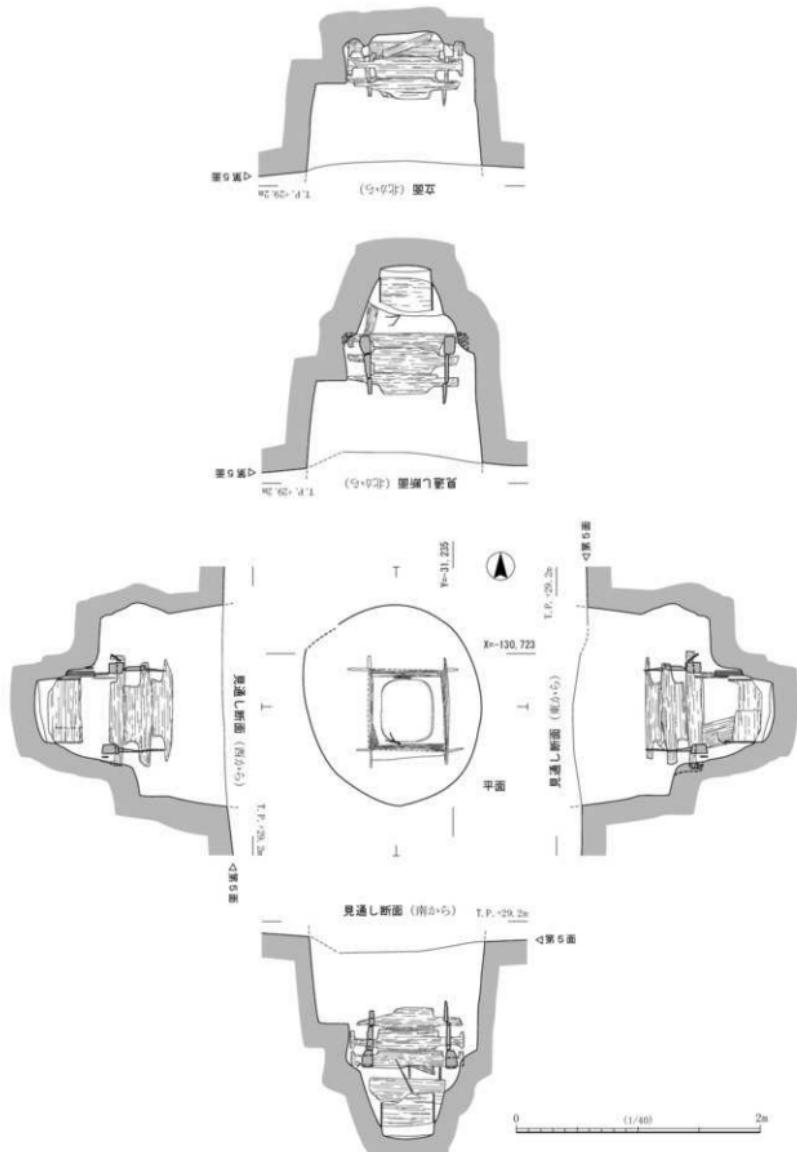


図77 10区 第4面353・357井戸 第5面630井戸



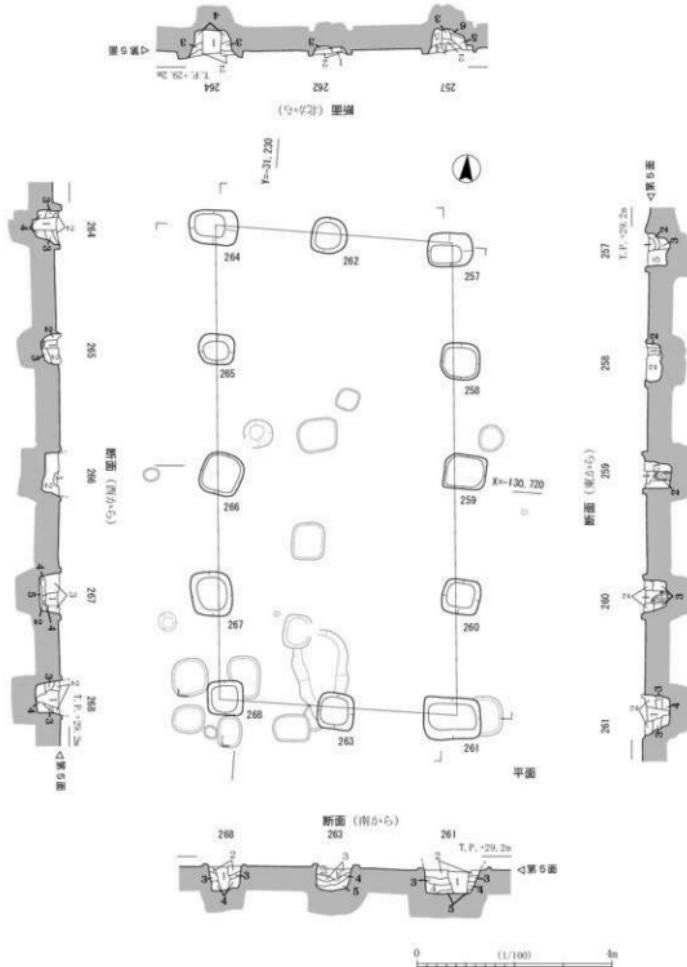


図79 10区 第4面掘立柱建物1

## 257 ピット

- 1 10YR4/1 黄灰 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 黄灰 細砂混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 6 10YR6/1 白 細砂混じりシルトに 10YR4/2 に近い黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 258 ピット

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 に近い黄棕 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 259 ピット

- 1 5Y4/1 白 細砂混じりシルト
- 2 5Y6/1 白 細砂混じりシルト
- 3 2.5Y7/3 黄 細砂混じりシルトに 2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 260 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y7/3 黄 細砂混じりシルトに 2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトブロックと 10YR3/2 黑褐 細砂ブロックが混じる
- 3 2.5Y7/3 黄 細砂混じりシルトに 2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 261 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/5 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄棕 細砂～細繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトのブロックが混じる
- 5 2.5Y7/3 黄 細砂混じりシルトに 2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 262 ピット

- 1 10YR7/2 黑褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄棕 細砂～繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる

## 263 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトに 2.5Y7/8 黄 シルトブロックが混じる
- 2 10YR7/5 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/5 黄棕 細砂～繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y7/1 白 繊混じりシルト

## 264 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄棕 細砂～繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 265 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルトに 2.5Y7/8 黄 シルトブロックが混じる
- 2 10YR7/5 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 266 ピット

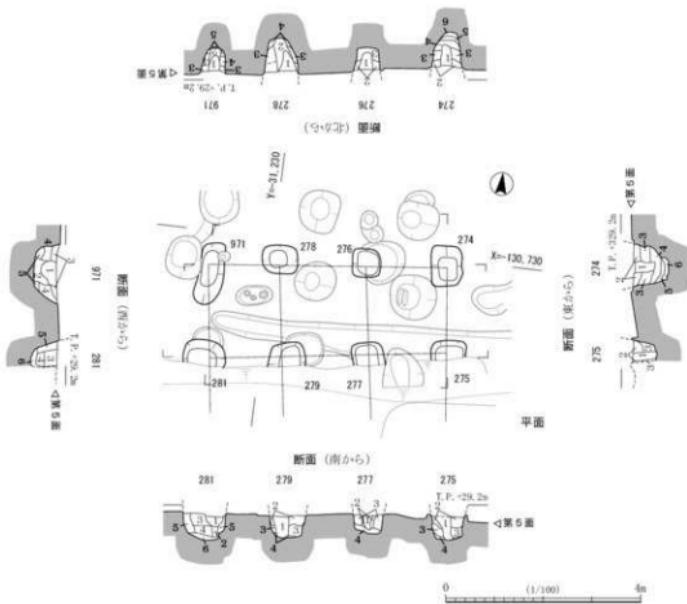
- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト 岩を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 267 ピット

- 1 10YR8/1 白 細砂混じりシルトと 10YR7/6 明黄褐 繊～粗砂混じりシルトの互層
- 2 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルト 岩を含む
- 3 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR7/5 黄棕 細砂～繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる

## 268 ピット

- 1 10YR3/2 黑褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトに 10YR4/2 白 黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄棕 細砂～繊混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂～繊混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに 10YR7/8 黄棕 細砂混じりシルトブロックが混じる



#### 278 ピット

- 1 10YR2/2 黒褐色 細砂～繊維じりシルト
- 2 10YR2/3 黒褐色 細砂～繊維じりシルト
- 3 10YR2/2 黒褐色 繊維じりシルト
- 4 10YR6/1 暗灰 繊維じりシルトに 10YR2/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる

#### 279 ピット

- 1 10YR2/2 黒褐色 細砂～繊維じりシルト
- 2 10YR2/2 黒褐色 繊維じりシルト
- 3 10YR2/2 黒褐色 細砂～繊維じりシルトブロック
- 4 10YR6/1 暗灰 繊維混じりシルトに 10YR2/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに 10YR7/2 にぶい黄褐色 繊維じりシルトが混じる

#### 281 ピット

- 1 7.5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 暗黄褐色 細砂混じりシルト
- 3 10YR4/2 暗黄褐色 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y6/4 にぶい黄～6/6 明黄褐色 シルト混じり土
- 6 5.5Y6 黄褐色 繊維じりシルト

#### 274 ピット

- 1 10YR2/2 黒褐色 細砂～繊維じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐色 繊維じりシルト
- 3 2.5Y6/3 黄褐色 シルトブロック
- 4 10YR3/2 黑褐色 繊維じりシルトブロック
- 5 10YR3/2 黑褐色 細砂～繊維じりシルトブロック
- 6 10YR6/1 暗灰 繊維じりシルトに 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる

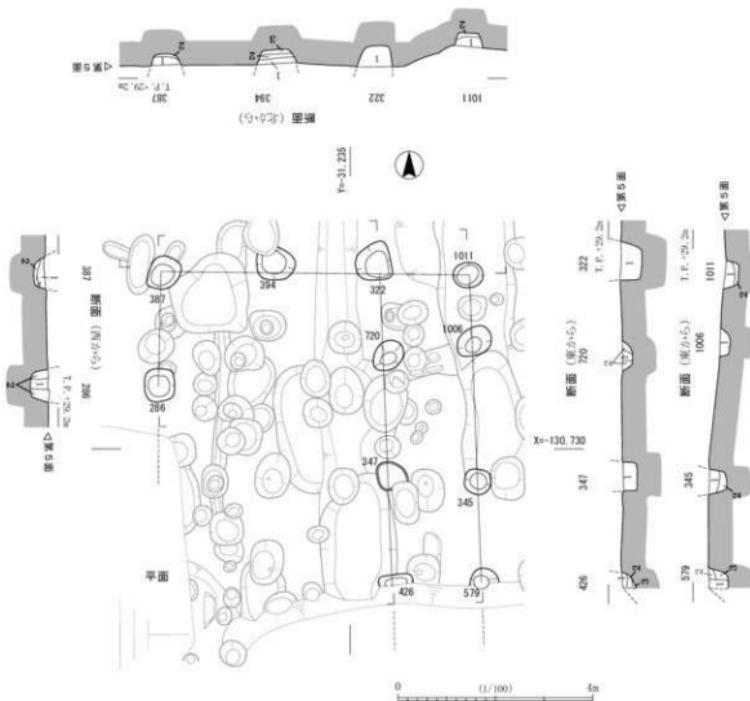
#### 275 ピット

- 1 10YR2/2 黑褐色 細砂～繊維じりシルト
- 2 10YR3/2 黑褐色 繊維じりシルト
- 3 10YR3/2 黑褐色 細砂～繊維じりシルト
- 4 10YR6/1 暗灰 繊維じりシルトに 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる

#### 276 ピット

- 1 10YR2/2 黑褐色 細砂～繊維じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 繊維じりシルト
- 3 10YR3/2 黑褐色 繊維じりシルト
- 4 10YR3/2 黑褐色 細砂～繊維じりシルトブロック

図80 10区 第4・5面掘立柱建物2



#### 286 ピット

1. 7.536/1 黒褐 細砂混じりシルト
2. 7.536/2 黒褐 細砂混じりシルト

#### 387 ピット

1. 572/1 黄 細砂混じりシルト
2. 573/6 オリープ 細砂～粗砂混じりシルト

#### 394 ピット

1. 7.536/2 黒褐 細砂混じりシルトに 2. 577/8 黄 細砂混じりシルトが混じる
2. 577/8 黄 細砂混じりシルト
3. 2. 577/8 黄 細砂混じりシルトに 574/3 オリープ 細砂混じりシルト

#### 322 ピット

1. 2. 536/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
2. 573/2 黒褐 細砂混じりシルトに

#### 720 ピット

1. 2. 536/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
2. 2. 536/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
3. 2. 536/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

#### 347 ピット

1. 2. 536/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
2. 533/2 黑褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

#### 426 ピット

1. 10784/2 黒黄褐 細砂混じりシルト
2. 10784/2 黒黄褐 細砂混じりシルトに  
10786/6 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
3. 10786/6 明黄褐～4.6m 黃 シルト混じり層

#### 1011 ピット

1. 2. 535/6 黄褐 粘土混じりシルト
2. 2. 535/6 黄褐 粘土混じりシルト

#### 1006 ピット

1. 585/1 青灰～2. 567/1 明オリーブ灰 粗砂混じりシルトに  
577/8 黄 粗砂混じりシルトが混じる

#### 345 ピット

1. 10784/3 に5.1 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト 層を含む
2. 574/1 黄灰 細砂混じりシルト

#### 579 ピット

1. 10782/2 黑褐 細砂混じりシルト
2. 10782/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10783/2 黑褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
3. 10787/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10783/2 黑褐 シルトブロックが混じる

図81 10区 第4・5面掘立柱建物3

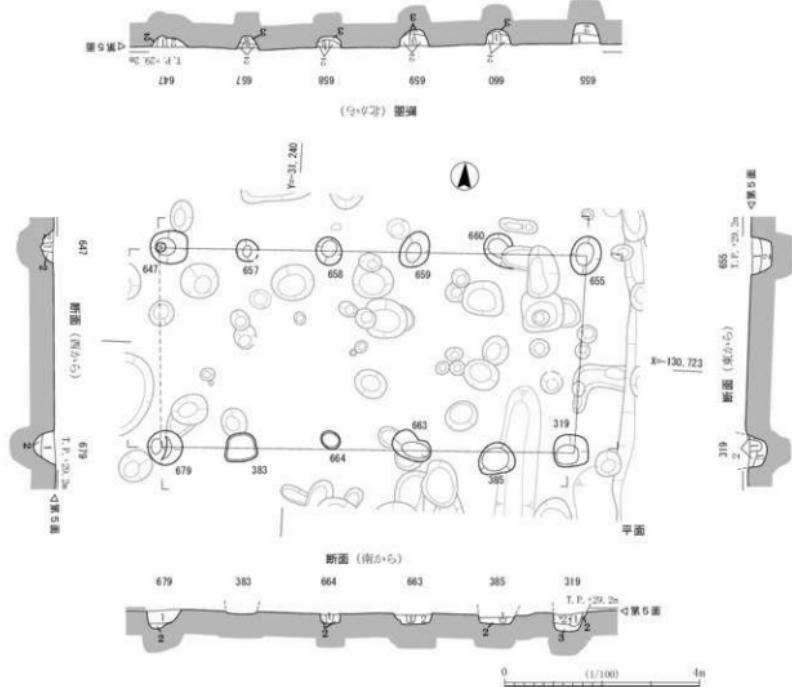


図82 10区 第4・5面掘立柱建物4

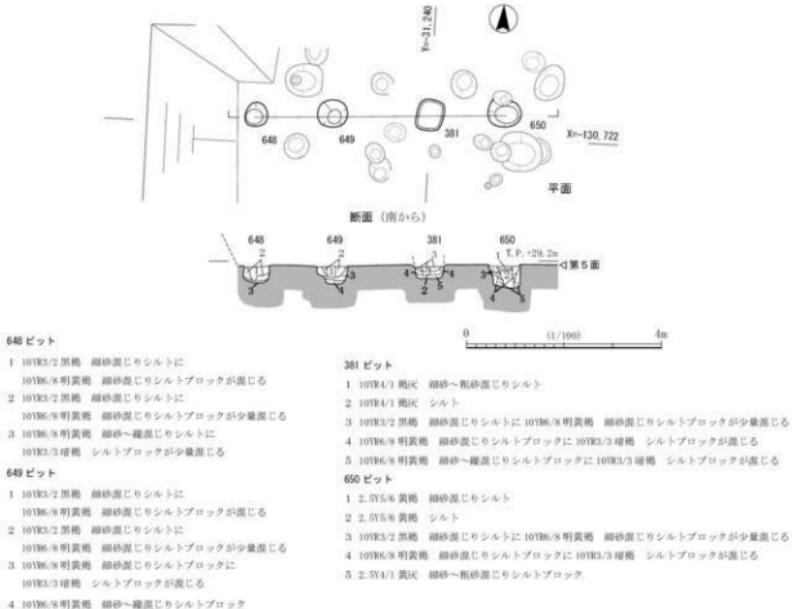


図83 10区 第4・5面柱列5

それ以外の全てのピットで柱痕跡が認められた。

北西隅の523ピットから8世紀頃の土師器杯が出土したほか、各ピットから古代の土器細片も出土した。

**柱列7 (図84)** 第5面検出。A2棟東部に位置する。主軸方位N 12° W、柱間寸法1.6~1.7mで並ぶピット3個からなる。いずれもピットでも柱痕跡が明瞭に認められた。掘立柱建物であれば、それらを西面として東方に展開すると考えられる。

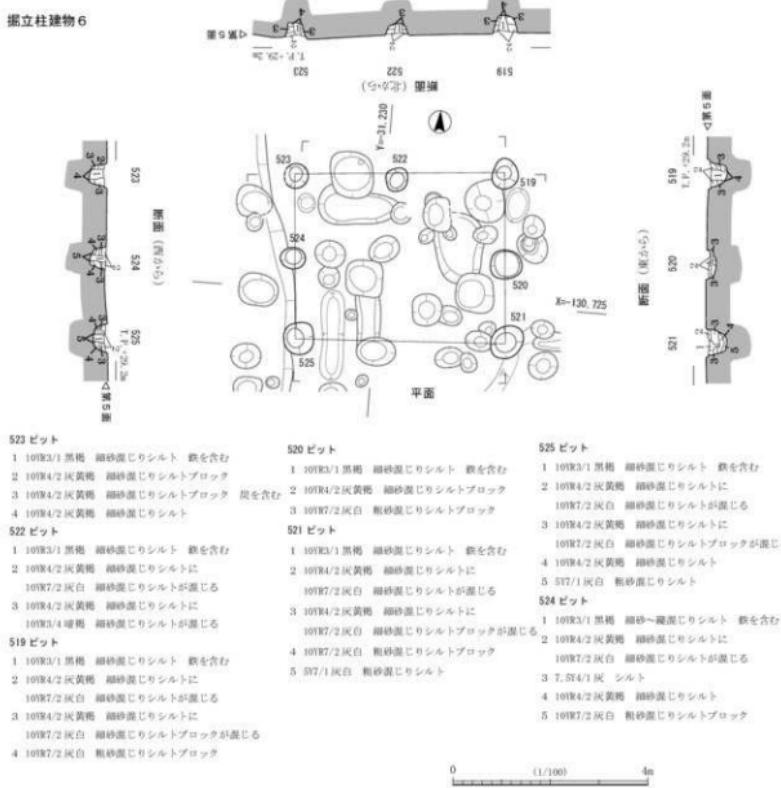
516ピットから製塙土器細片など、517・518ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物8 (図85)** 第4・5面検出。A2棟中央部に位置する。主軸方位N 1° W、桁行3間(5.8m)・梁行2間(3.6m)、面積20.9m<sup>2</sup>の側柱建物である。西辺の582ピットでは不明瞭だが、それ以外のピットでは柱痕跡が認められた。

南東隅の273ピットから製塙土器(図162-715)、南西隅の324ピットから8世紀中頃~後半の須恵器(図162-716・717)、北西隅の581ピットから8世紀の土師器壺(図162-718)などが出土した。その他のピットでは、製塙土器細片の出土が目立つ。

**掘立柱建物9 (図86)** 第4・5面検出。掘立柱建物6の南約1.5mに位置する。主軸方位はN 3° Wで、桁行3間以上(4.3m以上)・梁行2間(4.0m)、面積17.2m<sup>2</sup>以上の総柱建物である。東辺の331ピット(写真図版50-185)からはスギ材の礎板が出土した。西辺には掘立柱建物2の971ピットによる擾乱がある。南東部の332ピットでは不明瞭だが、それ以外のピットでは柱痕跡が認められた。

掘立柱建物 6



柱列 7

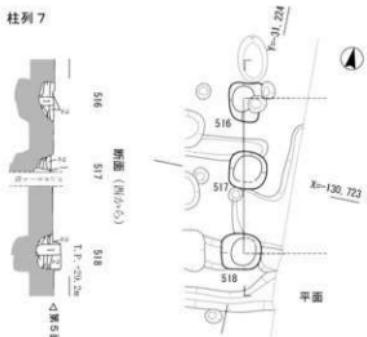
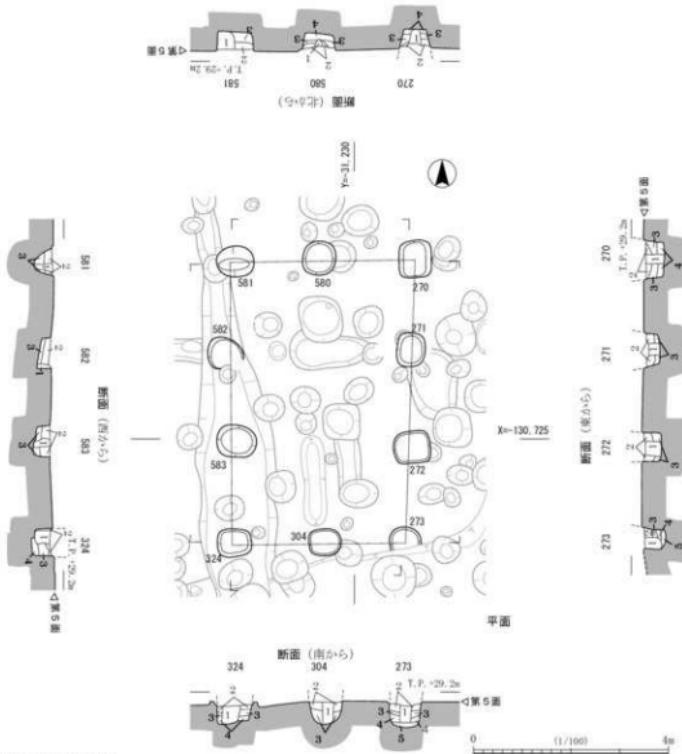


図84 10区 第5面掘立柱建物6・柱列7



#### 581 ピット

- 1 10YR3/3 黒褐色 細砂混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐色 細砂混じりシルト

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

580 ピット

- 1 10YR3/3 黒褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

270 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

3 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

4 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

271 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

#### 272 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR4/3 細砂混じりシルトブロックが混じる

3 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

#### 273 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR4/3 細砂混じりシルトブロックが混じる

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

5 10Y6/1 綠灰 細混じりシルト

#### 304 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルト

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

#### 324 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 2.5Y6/6 明黄褐色 細砂～礫混じりシルトに

10YR4/3 細砂混じりシルトブロックが混じる

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

5 10Y6/1 綠灰 細砂混じりシルト

#### 582 ピット

- 1 10YR3/3 黑褐色 細砂混じりシルト

2 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルト

3 10YR3/2 黑褐色 細砂混じりシルトに

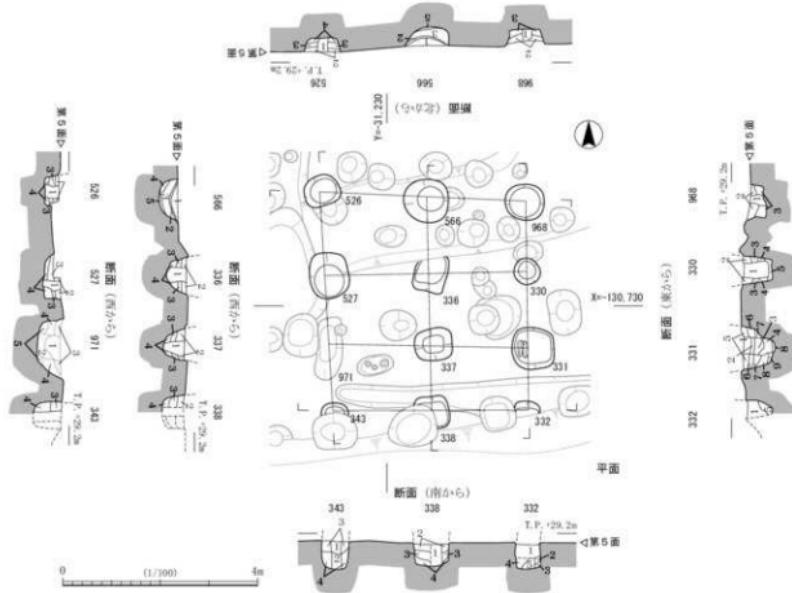
10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

5 10Y6/1 綠灰 細砂混じりシルト

6 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

図85 10区 第4・5面掘立柱建物8



#### 526 ピット

- 1 10YR4/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト
- 2 10YR7/2 にぶい 黄褐 細砂～繊混じりシルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR7/3 にぶい 黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト

#### 527 ピット

- 1 10YR4/2 深黄褐色 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR7/2 にぶい 黄褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト

#### (推定柱建物 2: 971 ピット)

- 1 10YR4/2 黒褐色 繊混じりシルト
- 2 10YR6/2 黑褐色 繊混じりシルトに  
7.5YR7/1 淡白 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/2 深灰褐色 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

#### 343 ピット

- 1 10YR4/2 深黄褐色 細砂～繊混じりシルト
- 2 7.5YR4/1 黑褐色 繊混じりシルト
- 3 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルト
- 4 10YR7/2 にぶい 黄褐色 繊混じりシルト

#### 566 ピット

- 1 10YR5/2 黑褐色 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 黑褐色 細砂混じりシルト
- 3 10YR5/2 黑褐色 細砂混じりシルトに  
10YR7/8 深褐色 細砂混じりシルトが混じる
- 4 7.5YR6/1 淡灰褐色 粗砂混じりシルトに  
10YR4/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 7.5YR6/1 淡灰褐色 粗砂混じりシルト

#### 336 ピット

- 1 10YR4/2 深黄褐色 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 4 10YR7/2 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルト

#### 337 ピット

- 1 10YR4/2 深灰褐色 細砂～繊混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR7/2 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルトが混じる

#### 338 ピット

- 1 7.5YR4/2 黑褐色～10YR4/2 深灰褐色 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト
- 4 2.5YR4/1 黑褐色 粗砂～繊混じりシルト

#### 968 ピット

- 1 7.5YR2/1 黑褐色 細砂～繊混じりシルト
- 2 10YR5/2 黑褐色 細砂～繊混じりシルト
- 3 10YR5/2 黑褐色 細砂～繊混じりシルトに  
2.5YR7/2 淡白～2.5YR6 深黄褐色 シルトが混じる
- 330 ピット

- 1 2.5YR4/2 深黄褐色 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルト
- 5 2.5YR4/1 黄褐色 シルト

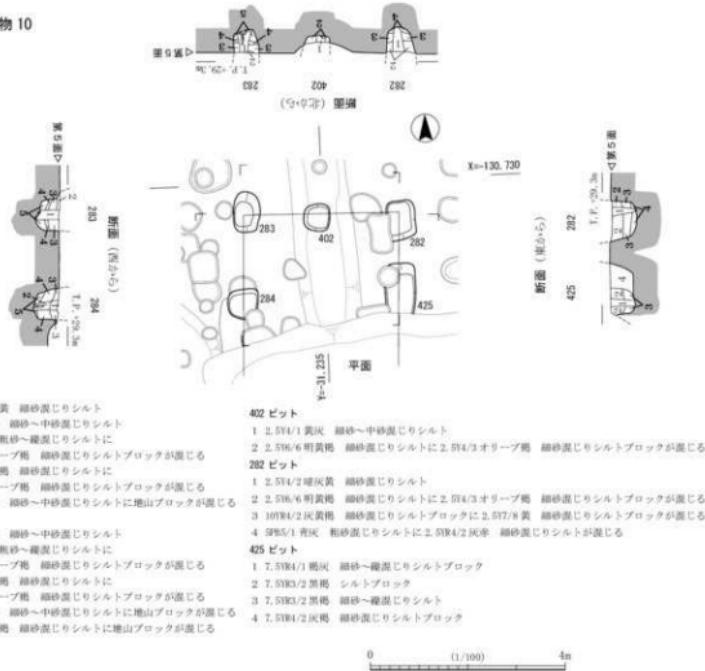
#### 331 ピット

- 1 7.5YR4/2 黑褐色 粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 深灰褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 3 10YR4/2 深灰褐色 細砂～繊混じりシルトブロック
- 4 7.5YR4/1 黑褐色 細砂混じりシルト
- 5 10YR6/6 明黄褐色 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい 黄褐色 細砂混じりシルトが混じる
- 6 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト
- 7 2.5YR4/1 黄褐色 シルト

#### 332 ピット

- 1 10YR6/6 明黄褐色 細砂～繊混じりシルト
- 2 2.5YR4/2 淡灰褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 3 2.5YR4/1 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 4 10YR5/2 黑褐色 細砂混じりシルトブロック
- 5 5YR4/1 黄褐色 シルト

### 掘立柱建物 10



### 掘立柱建物 11

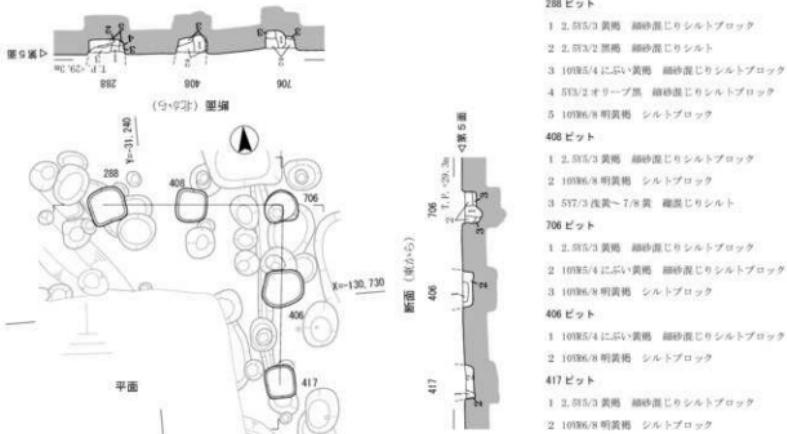
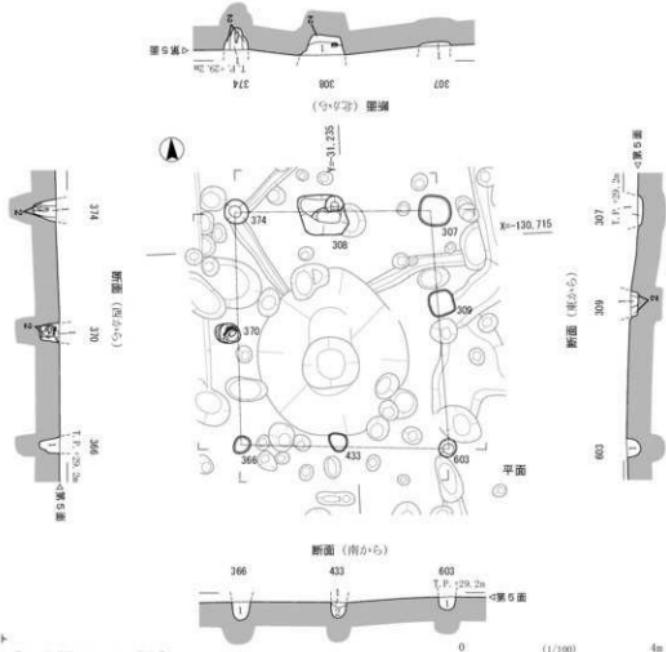


図87 10区 第4面掘立柱建物10 第4・5面掘立柱建物11

掘立柱建物 9 を構成するピットの出土遺物は 8 世紀の土師器、須恵器、製塩土器で、時期の判明するものには、8 世紀中頃の東辺 332 ピットの須恵器（図 163・720）、8 世紀後半の東辺 330 ピット・西辺 527 ピットの須恵器（図 163・719・721）や北辺中央 566 ピットの 8 世紀末の土師器皿（図 163・722）がある。重複する掘立柱建物 2 とは、柱穴の切り合い関係では掘立柱建物 9 が古く、出土土器では掘立柱建物 9 が新しくなるという矛盾が生じている。

**掘立柱建物 10 (図 87)** 第 4 面検出。A 2 棟南部に位置し、南部は攪乱されている。主軸方位 N 1° E、桁行 2 間以上・梁行 2 間 (3.1 m) の側柱建物と考えられる。東辺の 282・425 ピットと西辺の 283・284 ピットにはスギ材の柱根（図 163・723～726）が残っており、北辺中央の 402 ピットでも柱痕跡が認められた。

283 ピットから 6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯、282 ピットから瓦細片、284 ピットから製塩土



374 ピット

1. 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト 岩を含む
2. 2.5Y4/2 塗灰黄 細砂混じりシルトブロック
3. 2.5Y4/2 塗灰黄 細砂混じりシルト

308 ピット

1. 7.5Y6/2 黒褐色 細砂混じりシルト
2. 7.5Y6/2 黒褐色 細砂混じりシルトブロック

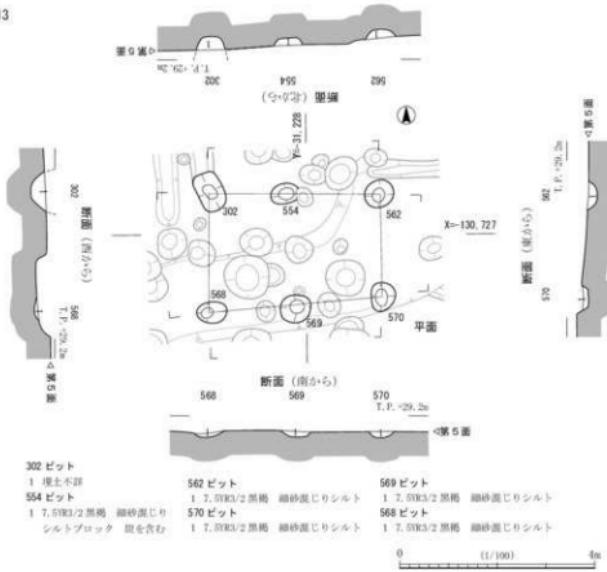
307 ピット

1. 7.5Y6/2 黒褐色 細砂～微混じりシルト 岩を含む
- 309 ピット

1. 7.5Y6/2 黒褐色 細砂混じりシルト
2. 7.5Y6/2 黑褐色 細砂～微混じりシルト 岩を含む

図 88 10 区 第 4・5 面掘立柱建物 12

据立柱建物 13



据立柱建物 14

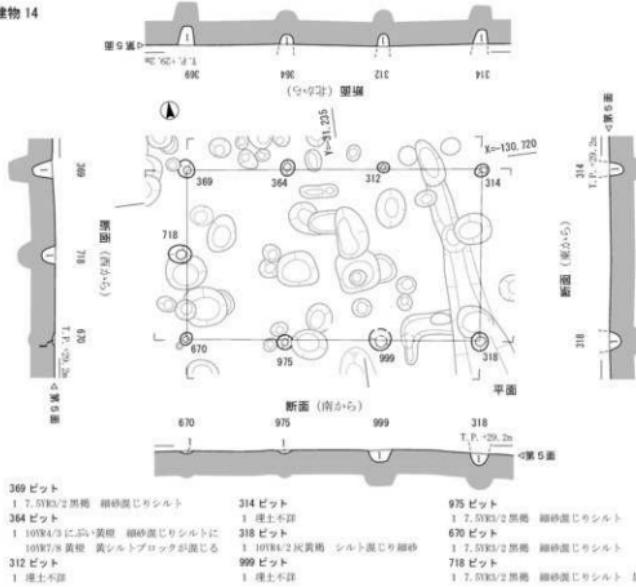


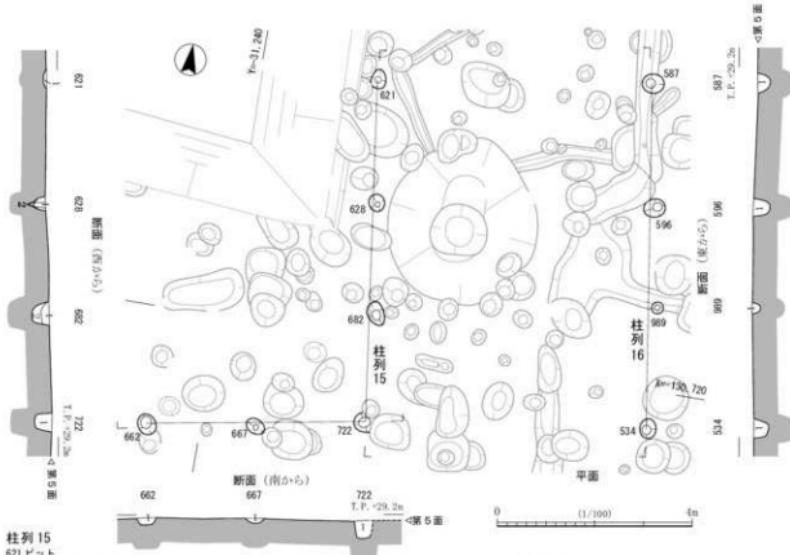
図89 10区 第4・5面据立柱建物13・14

器細片、さらにそれらのピットから古代の土器細片も出土した。

**掘立柱建物 11 (図 87)** 第4・5面検出。A2棟南西隅に位置する。東西・南北とも2間以上と考えられるが、南西側が調査区外となり、調査範囲内でもそれ以上の広がりが不明瞭である。南北に長い建物とすれば、主軸方位はN 4° Eとなる。

北東隅の706ピットからスギ材の柱根が出土し、その他のピットでも柱痕跡が認められた。706ピットから8世紀後半の須恵器杯蓋(図163-727)、北辺の288ピットから須恵器壺、その他のピットからも古代の土器、製塩土器、瓦の細片が出土した。

**掘立柱建物 12 (図88)** 第4・5面検出。A2棟北西部に位置する。主軸方位はN 1° E、桁行2間(4.9 m)・梁行2間(4.2 m)、面積20.6 m<sup>2</sup>で、先述の井戸に伴う屋形の可能性がある。北西隅の374ピットに残りの悪い柱根と南東隅の603ピットにはコウヤマキ材の柱根(図164-743)が遺存していた。東辺の309ピットでは柱痕跡が認められた。北辺中央の308ピット(写真図版50-184)は、他のピットよりも規模が大きいことから、別遺構の重複の可能性もあるが、柱痕跡などは認められなか



#### 柱列 15

621ピット  
1. 7. 51R3/2 黒褐 細砂混じりシルト

628ピット  
1. 10R3/2 黒褐 細砂混じりシルト

2. 10R6/6 明黄褐 油砂～縞混じりシルトブロックに10R4/2灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

682ピット  
1. 10R4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロック

2. 10R2/2 黑褐 細砂混じりシルト

722ピット  
1. 2. 30R6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック 間を含む

667ピット  
1. 7. 51R3/2 黒褐 細砂混じりシルト

662ピット  
1. 10R5/1 煤灰 細砂混じりシルトブロック

#### 柱列 16

587ピット

1. 7. 51R3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロック 間を含む

596ピット

1. 7. 51R3/2 黒褐 細砂混じりシルト

909ピット

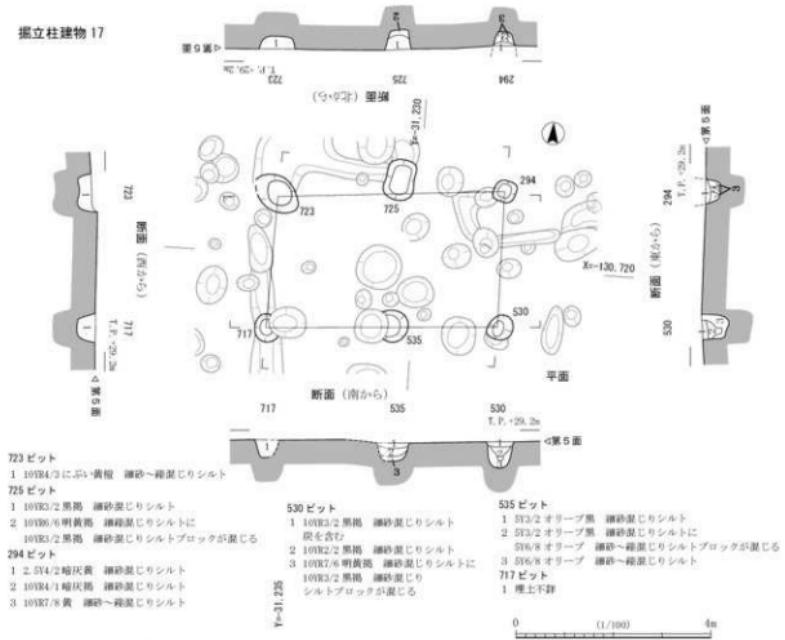
1. 墓土不詳

534ピット

1. 7. 51R3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロック 間を含む

図90 10区 第5面柱列15・16

掘立柱建物 17



掘立柱建物 18

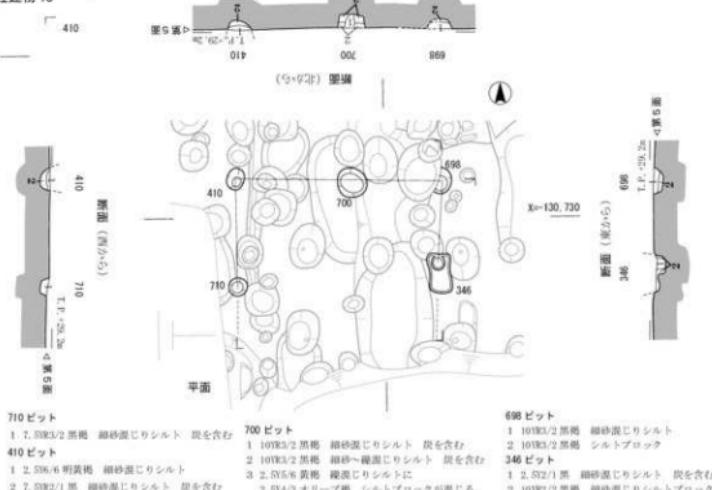
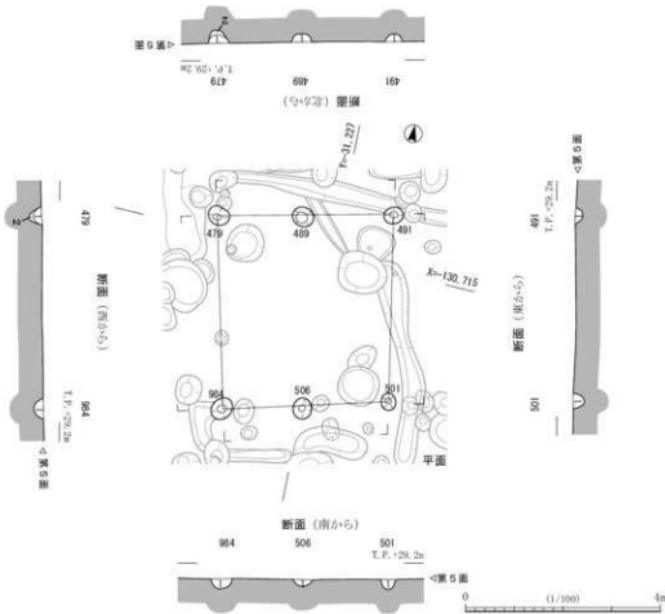


図91 10区 第4・5面掘立柱建物17・18



- 479 ピット  
1. 2. SY7/6 明黄褐 細砂混じりシルトに10VR2/2 黒褐 細砂混じりシルトが混じる  
2. 10VR2/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 489 ピット  
1. 7. SY6/2 黒褐 細砂混じりシルト 壁を含む
- 491 ピット  
1. 7. SY6/2 黒褐 細砂混じりシルト 壁を含む
- 501 ピット  
1. 7. SY6/2 黒褐 細砂混じりシルト 壁を含む  
506 ピット  
1. 7. SY6/2 黒褐 細砂混じりシルト 壁を含む  
984 ピット  
1. 7. SY6/2 黒褐 細砂混じりシルト 壁を含む

図92 10区 第5面掘立柱建物19

った。

出土遺物は多彩で、北東隅の307ピットから製塙土器（図163・728）、308ピットから8世紀後半～末の土師器・須恵器（図163・729～731・733）、「東」と墨書きされた須恵器（図163・732）、長岡京納廟廐寺と同範の軒平瓦片など（図163・734・735）、309ピットから8世紀後半～9世紀の須恵器（図163・736・737）、製塙土器（図163・738）、瓦（図163・739）、西辺の370ピット（写真図版51・189）から均整唐草文軒平瓦などの瓦（図164・740・741）や砂岩製砥石（図164・742）などが出土した。その他各ピットからも、古代の土器、製塙土器、瓦などの細片が出土した。

この掘立柱建物12は、位置関係からは第4面検出の353・357井戸や第5面検出の630井戸のいずれと併存しても矛盾はない。遺物の時期からは、8世紀末頃の357井戸に伴う可能性が最も高い。

**掘立柱建物13（図89）** 第4・5面検出。A2棟南東部に位置する。主軸方位N 85° E、桁行2間（3.5 m）・梁行1間（東2.2 m、西2.4 m）、面積8.1 m<sup>2</sup>の側柱建物である。ピットはいずれも単層で浅く、柱痕跡は認められない。

北西隅の302ピットと南東隅の570ピットから8世紀後半の須恵器杯蓋（図164・744・746）、

南辺中央の 569 ピットから製塙土器（図 164 - 745）、その他のピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 14**（図 89） 第 4・5 面検出。A 2 棟中央部やや北西寄り位置する。主軸方位 N 82° W、桁行 3 間（6.0 m）・梁行 2 間（3.5 m）、面積 21.0 m<sup>2</sup> の側柱建物である。ただし、東辺の梁行中央のピットは検出できなかった。ピットはいずれも単層で、柱痕跡は認められない。

北東隅の 314 ピットから 10 世紀前半と考えられる土師器皿（図 164 - 747）、南東隅の 318 ピットから 8 世紀後半の須恵器（図 164 - 748・750）やカマドの一部の可能性のある土師器（図 164 - 749）が、他のピットからも古代の土器、製塙土器、瓦の細片が出土した。

この掘立柱建物 14 の復元が正しければ、柱穴が小規模な円形であることや主軸方位がこの遺跡の 8 世紀前後の掘立柱建物と異なる。10 世紀前半と考えられる土師器も出土しており、該期の建物の可能性がある。

**柱列 15**（図 90） 第 5 面検出。A 2 棟北西部に位置する。南東角の 722 ピットを南東角として、N 8° W 方向に 4 個、それとほぼ直交する N 80° E に 3 個のピットが並ぶ。北から 2 つめの 628 ピットで柱痕跡が認められた。掘立柱建物を構成する可能性もあるが、次の柱列 16 との関係から、柱列と考えたい。

出土遺物は、南西端の 662 ピットの古代の土器細片のみである。

**柱列 16**（図 90） 第 5 面検出。柱列 15 の南北部分と 5.6 m の間隔をもって、ほぼ並行する N 10° W にピットが 4 個並ぶ。柱列 15 と同様に、それを構成するピットは小規模な隅丸方形や不整円形である。柱列 15 とともに扉のような機能が想定される。

北端の 587 ピットから製塙土器細片など、989 ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 17**（図 91） 第 4・5 面検出。A 2 棟中央部北寄り、主軸方位 N 85° E、桁行 2 間（4.9 m）・梁行 1 間（2.7 m）、面積 13.2 m<sup>2</sup> の側柱建物である。ピットは比較的大きいが、柱痕跡は明瞭ではない。掘立柱建物 8 の北に位置し、重複関係ではそれよりも古いで、8 世紀中頃～後半以前の所産と推定できる。

南東隅の 530 ピットと南西隅の 717 ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 18**（図 91） 第 4・5 面検出。A 2 棟南西隅に位置する。北辺の 700 ピットで柱痕跡が認められた。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位は N 1° E、桁行 2 間（3.7 m）以上・梁行 2 間（3.5 m）の建物と考えられる。

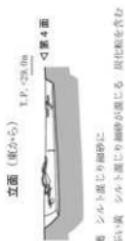
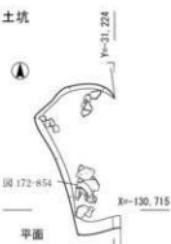
東辺の 346 ピットから古代の土器と黒色土器 A 類細片、北西隅の 410 ピットから古代の土器細片、西辺の 710 ピットから古代の土器と製塙土器の細片が出土した。黒色土器 A 類に注目すれば 10 世紀まで時期が下がる可能性がある。

**掘立柱建物 19**（図 92） 第 5 面検出。A 2 棟北東部に位置する。主軸方位は N 12° W で、桁行 2 間（3.8 m）・梁行 2 間（3.4 m）、面積 12.9 m<sup>2</sup> の側柱建物の可能性はある。しかし、ピットはいずれも小規模で柱痕跡も認められず、さらに桁行中央の柱が東西両辺とも見当たらないという疑問も残る。

出土遺物は、北西隅の 479 ピットの 8 世紀の須恵器（図 164 - 751）、南東隅の 501 ピットの 8 世紀の土師器、古代の土器、製塙土器細片である。

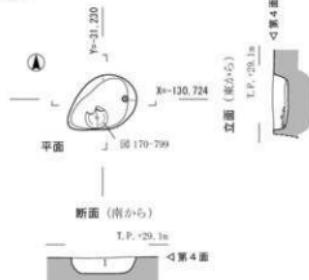
**土坑・ピット・土器群** 10 区（A 2 棟）第 4・5 面検出の土坑、ピット、土器群のうち、掘立柱建物などを構成しないが特記事項のあるものについて遺構番号順に述べる。

## 289 土坑



1. 10W3/1 黄灰  
2. 5W6/4に赤い黄 シルト混じり細砂が混じる 放化鉱を含む

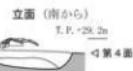
## 299 ピット



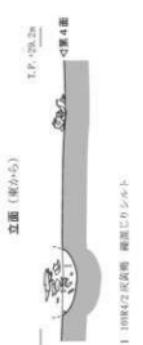
断面 (南から)  
T.P.-29.1m  
図 4 第4面

1. 10W5/1 黄灰 シルト混じり細砂

## 352 土坑

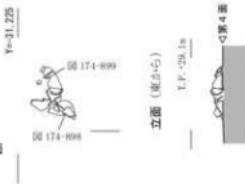


0 (1/40) 2m

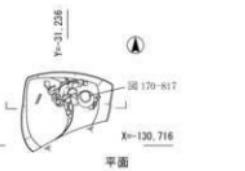
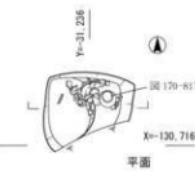


1. 10W4/2 黄灰地 細砂にシリート

## 351 土器群



## 356 ピット



1. 10W3/3 硫鐵 シルト混じり細砂へ移行  
2. 5W6/4に赤い黄 シルト混じり細砂が混じる 放化鉱を含む

図93 10区 第4面289土坑・297ピット・298土器群・299ピット・351土器群・352土坑・356ピット

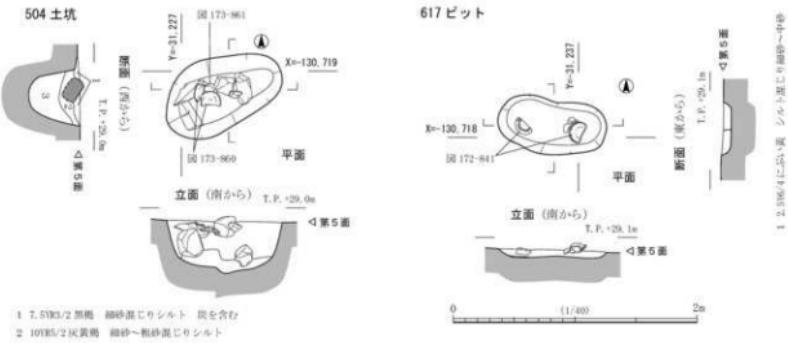


図94 10区 第5面504土坑・617ピット

**289 土坑** (図93 写真図版50-180) 第4面検出。A2棟北東隅に位置する。東部が調査区外に広がるので全貌は明らかではないが、南辺と西辺が直線的で、北辺が弧状を描く。南北1.2m、東西0.7m以上、深さ12cm。埋土は、10YR3/3暗褐色シルト混じり細砂に2.5Y6/4にぶい黄色シルト混じり細砂や炭化粒が混じる。出土遺物は、8世紀中頃を主体とする土師器・須恵器(図172-848~855)である。

**295 土坑** 第4面検出。A2棟中央部東側に位置する。重複関係では、掘立柱建物1や掘立柱建物8よりも古い。平面は南北に長い不整楕円形で、長径1.9m、短径1.1m、深さ11cm。埋土は、5Y4/1灰色シルト混じり細砂に5Y5/6オリーブ色粗砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器や製塙土器の細片が出土した。

**297 ピット** (図93 写真図版50-181) 第4面検出。掘立柱建物1の西辺内側に位置する。平面円形で、直径54~57cm、深さ12cm以上。埋土は、10YR4/2灰黄褐色礫混じりシルト。8世紀後半の須恵器杯蓋(図170-798)、8世紀後半~末の土師器(図170-792~796)、9世紀前半の黒色土器A類(図170-797)、製塙土器細片などが出土した。

**298 土器群** (図93 写真図版50-182) A2棟北東部、297ピットの北約1mに位置する。第4面上で8世紀後半の土師器杯蓋・高杯・鉢・甕(図174-894~897)などを検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**299 ピット** (図93 写真図版50-183) 第4面検出。掘立柱建物1の南西部に位置する。平面は北東・南西に長い楕円形で、長径61cm、短径43cm、深さ11cm。埋土は、10YR5/1褐色細砂混じりシルト。8世紀中頃の須恵器杯蓋(図170-799)がほぼ完形で出土した。

**351 土器群** (図93 写真図版50-186) A2棟南東隅に位置する。第4面上で8世紀後半の土師器甕(図174-898)と須恵器甕(図174-899)を検出した。周辺には遺構の輪郭などは認められなかったが、およそ5cm下層の第5面ではこの周囲が575落ち込みであった。

**352 土坑** (図93 写真図版50-187) A2棟中央部北寄りに位置する。第4面で8世紀後半の須恵器壺(図173-856)が出土し、第5面まで掘り下げるとき土坑の形状が判明した。平面は北北西・南南東に長いややゆがんだ隅丸長方形で、長径1.0m、短径0.6m、深さは、土器の上面から土坑底まで

24 cm。埋土不詳。

**354 土坑** A 2 棟北西部に位置する。第4面検出。平面は東北東・西南西に長い隅丸長方形で、長径 1.7 m、短径 0.8 m、深さ 26 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルトと 7.5YR4/4 褐色シルト混じり細砂のブロックや炭化粒が混じる、下層が 2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルトが混じる。8世紀の須恵器（図 173-857・858）、製塙土器や瓦の細片が出土した。

**356 ピット**（図 93 写真図版 51-188）第4面検出。A 2 棟北西部、357 井戸の北側に位置する。重複関係からすると、630 井戸よりも新しく、357 井戸よりも古い。平面は隅丸方形と推定され、東西 72 cm、南北 65 cm 以上。深さは、東側では 18 cm だが、39 cm と深くなっている。埋土は、10YR3/3 暗褐色シルト混じり細砂に 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂や炭化粒が混じる。8世紀末の一括性のある土師器（図 170-806～813）、須恵器（図 170-814～818）、製塙土器（図 170-819・820）などが出土した。

**431 土坑** 第4面検出。A 2 棟西端に位置し、その西部は調査区外に延びる。平面はほぼ円形と推定され、直径約 1.7 m、深さ 20 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。8世紀前半と考えられる須恵器鉢（図 173-859）などが出土した。

**446 土器群** A 2 棟北西部、357 井戸の東約 1 m に位置する。第4面上で 8世紀の製塙土器（図 174-900）などを検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**447 土器群** A 2 棟北西部、353・357 井戸の東約 0.5 m に位置する。第4面上で 8世紀末の土師器皿や須恵器（図 174-901）を検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**498 土坑** 第5面検出。A 2 棟東辺に位置し、さらに調査区外に延びる。平面は東西に長い楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 1.0 m、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**503 土坑** 第5面検出。A 2 棟北東部に位置する。平面は東西に長いややひしゃげた楕円形で、長径 1.5 m、短径 0.5 m、深さ 9 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**504 土坑**（図 94 写真図版 51-190）第5面検出。503 土坑の南西に接する。平面は東北東・西南西に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 42 cm。埋土は、図 94 のように 3 層に分かれる。8世紀前半～中頃の須恵器（図 173-860～862）などに加えて人頭大の石が 4 個出土した。

**548 土坑** 第5面検出。A 2 棟中央部に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径 1.7 m、短径 0.7 m、深さ 19 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**617 ピット**（図 94）第5面検出。A 2 棟北西部、630 井戸の西側に位置する。平面は東西に長い楕円形で、長径 90 cm、短径 46 cm、深さ 7 cm 以上。埋土は、2.5Y6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂～中砂。8世紀中頃の杯・壺・甕といった須恵器（図 172-841～843）などが出土した。

**623 土坑** 第5面検出。A 2 棟北東部に位置する。平面は西北西・東南東に長い楕円形で、長径 1.3 m 以上、短径 1.0 m、深さ 14 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルトに 10YR6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。古代の土器細片が出土した。

**685 土坑** 第5面検出。A 2 棟南西部に位置する。平面不整形で、東西・南北ともに 1.6 m、深さ 24 cm。埋土は、2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂混じりシルトが主体で、底部に厚さ 2～8 cm で 2.5Y4/2 暗

灰黄色細砂混じりシルトが溜まっており、全体に焼土が含まれる。8世紀中頃の土師器杯（図173-863）、製塙土器や瓦の細片が出土した。

**702 土坑** 第5面検出。A2棟南部に位置する。第3面検出の255溝に攪乱されているが、平面は北北西-南南東に長い楕円形と推定され、長径2.6m、推定短径約1.2m、深さ12cm。埋土は、2.5Y5/4 黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。製塙土器や古代の土器細片が出土した。

**703 土坑** 第5面検出。702土坑の南東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径2.6m以上、短径1.6m、深さ42cm。埋土は、2.5Y5/4 黄褐色細砂～粗砂混じりシルトで、702土坑とよく似ている。古代の土器細片が出土した。

**その他のピット** A2棟（10区北東部）の第4面と第5面では、掘立柱建物や柱列を構成するものや上記以外にも多くのピットを検出した。第4面の321・325・326・384・392・429・430ピットや第5面の470・471・492・531・604・646・695・728・979・1004・1013ピットでは柱痕跡が認められた。その他のピットは、単層あるいは水平方向に分層できるものが多く、建物や柱列などの復元には至らなかった。

これらのピットからの出土遺物は、8世紀の土師器・須恵器（図170-800・802～804、171-823～828、172-832～839・844・846・847）が主体を占めるが、8～9世紀の製塙土器（図170-805、172-845）や瓦（図170-801・822、171-829～831）、9世紀後半の灰釉陶器椀（図171-821）などもみられる。さらに、第4面ではA2棟中央部南側の327ピットから花崗岩、395ピットからアカガシ亜属の木片、第5面では中央部の683ピットから礫岩、南東部の574ピットから鉄製品（図172-840）が出土した。

**1007 石群**（写真図版51-192） 第5面検出。A2棟中央部南側に位置する。東西1.1m以上、南北幅0.6m、深さ16cmの溝状のくぼみに、礫岩と点紋緑色片岩が並んでいる。土器は出土しなかった。

**538 落ち込み** 第5面検出。A2棟東辺に位置し、調査区外に延びる。検出した範囲では、平面は南北1.0m、東西1.2m以上の圓丸長方形で、北部が1.5mほど北に突出する形状である。深さ9cm。埋土は、7.5YR3/1 黒褐色細砂混じりシルト。8世紀の土師器・須恵器（図174-889～893）や製塙土器細片などが出土した。

**575 落ち込み** 第5面検出。A2棟南東隅に位置する。平面が不整三角形で、東西2.6m、南北1.4m、深さ16cm。埋土は、周辺の第4層と同じ2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。7世紀と考えられる須恵器壺や製塙土器細片などが出土した。

**329 溝** 第4面検出。A2棟南東部に位置する。主軸方位は東北東-西南西だが、東端で北に延びる。主軸方位の長さ8.0m、幅2.0m、深さ21cm。重複関係では、周辺ピットよりも新しくなる。埋土は、5Y4/1 灰色シルト混じり細砂に2.5Y5/6 黄褐色シルト混じり細砂のブロック・礫・炭化粒が混じる。出土遺物は、8世紀の土師器（図173-864～872）・須恵器（図173-874～877）を主体とするが、6世紀末～7世紀初頭の須恵器壺蓋（図173-873）、鉄製品（図173-878・879）なども含まれる。

**344 溝** 第4面検出。A2棟南東部に位置する。重複関係では掘立柱建物2や掘立柱建物9よりも古い。主軸方位は東西で、検出長9.4m、幅0.7m、深さ12cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色細砂混じりシルトに2.5YR4/4にぶい赤褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器細片が出土した。

**360 溝** 第4面検出。A2棟北東部に位置する。主軸方位は東西で、長さ4.1m、幅0.4m、深さ8

cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色細砂混じりシルトに 2.5YR4/4 にぶい赤褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器や製塙土器の細片が出土した。

**452 溝** 第5面検出。A 2棟北東部に位置する。主軸方位は北西・南東で、南部でゆるやかに屈曲し南へ延びる。長さ約 7.5 m。幅は北部では 0.2 m、南部の広い所で 0.8 m。深さ 8 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**464 溝** 第5面検出。A 2棟南東部に位置する。主軸方位は東西で、検出長 1.8 m、幅 0.5 m、深さ 7 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂。8世紀後半の土師器杯（図 174 - 881）などが出土した。

**482 溝** 第5面検出。A 2棟北部に位置する。主軸方位は北でやや西に偏する南北で、長さ約 3.5 m、幅 0.7 ~ 1.1 m、深さ 16 cm。埋土は、7.5YR3/2 黒褐色細砂～粗砂混じりシルト。8世紀中頃の土師器甕（図 174 - 882）や製塙土器細片などが出土した。

**588 溝** 第5面検出。482 溝から約 1 m 西に、ほぼ平行に延びる。検出長 3.5 m、幅 0.5 m、深さ 8 cm。埋土不詳。8世紀後半の土師器甕（図 174 - 883）などが出土した。

**600 溝** 第5面検出。A 2棟中央部で南北に延びる。長さ約 10.5 m、幅 1.7 m、深さ 16 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。8世紀の土師器・須恵器（図 174 - 884 ~ 888）が出土した。

**その他の溝** 以上の溝以外にも耕作溝と考えられる平行する浅い溝を複数検出した。重複関係では、第4面検出の 329 溝以外はいずれもビットよりも古い。8世紀の須恵器（図 174 - 880）や製塙土器の細片が出土する溝もあるが、その量は少ない。

## 第10節 11区（B棟）の遺構

11区は調査地南西部に位置する。住宅B棟の建設に伴う調査である。T.P.+31.0～31.3mの現地表面から、最深部でT.P.+28.7mの第6面まで調査した。最終面での調査面積は1146m<sup>2</sup>である。

11区の第1面は、昭和14（1939）年爆発関連層の上面と推定し今回最初に調査に着手した面であった。しかし結果的に、昭和40年代のアパート（旧住棟）建設当時の地表面であることが判明した。

第2面は昭和14年爆発関連層の上面である。爆発復旧後の休憩所と廻を検出した。

第3面は昭和14年以前の禁野火薬庫の面で、建物、軽便軌道に伴う枕木土坑、溝、橋、土坑、ピットといった多くの遺構を検出した。

第4面は中世（～近世）の面で、土坑、ピット、溝を検出した。

第5面は古代（～中世）の面で、水田畦畔、溝、土坑、ピットなどを検出した。

第6面は地山層上面で、古代ないしそれ以前の掘立柱建物、土坑、溝、ピットを多数検出した。

### 層序（図95）

11区では南壁の断面を掲げる。

第1層は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層（1）と擾乱（2）からなる。

第2層（3～10）は、基本層序の第I層に該当する。主体となるのは、昭和14（1939）年爆発後 の整地層（5・6）と爆発関連層（7・8）である。

第3層（11～57）は、基本層序の第II層に該当する。火薬庫造成に伴う碎石（14）や盛土層（17～25）を主体とし、それ以前の溜池状の落ち込み（29～33）や旧作土層（34～37）、中世～近世の包含層など（38～57）に分けられる。旧作土層は、他の調査区と同様に段々に設えられている。

第4層（58～60）は、基本層序の第III層に該当する。この層を除去した第5面調査段階で、11区 の西部や中央部南側では地山層（第VII層）上面に達した。

第5層（64～66）は、基本層序の第V層・VI層に該当する。11区では西部の高い部分と東部に 低い部分にこの層が分布していた。

### 第1面（写真図版52～195） 現代

今回の調査では、平成15・16年度調査の成果に依拠し、昭和14（1939）年爆発関連層の上面から 人力による調査を開始する計画であった。最初に調査に着手した11区では、主にその北東部に分布する黒色を呈する層を昭和14年爆発関連層、その直上の盛土層を爆発後の整地層と推定し、その上面を 第1面として調査した。面の高さはT.P.+30.8～31.0mで、顕著な遺構はなかった。

しかし、この盛土層中から昭和30年代前後の遺物や愛知県常滑市の杉江製陶で昭和42（1967）年 に作られた土管が出土し、11区第1面は昭和40年代のアパート（旧住棟）建設当時の地表面である ことが判明した。そこで、以後の調査ではこの盛土層や黒色層を重機による掘削対象とした。

### 第2面（写真図版52～196・197） 昭和14年以後

昭和14年爆発関連層（第1層）上面である。面の高さはT.P.+30.5～30.9mで、西側が高い傾向に ある。昭和14年以降の施設として、休憩所と廻を検出した。



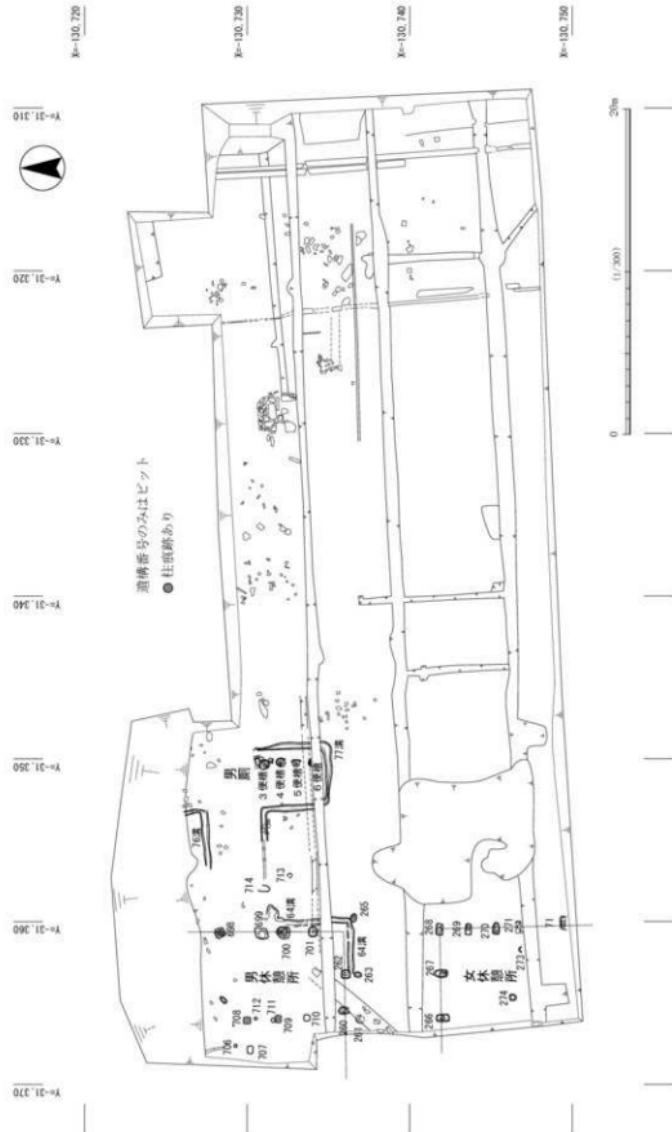


図 96 11区 第2面

**休憩所** 11区西部から調査区外にかけて2棟存在する。昭和14(1939)年の「禁野倉庫大阪工廠移管要図」に人夫休憩所として描かれている建物に該当する。

明治29(1896)年10月から昭和18(1943)年9月までの禁野火薬庫の歴史を編年的に記した『分廠歴史』には、昭和14年授受の木造平屋建て人夫休憩所2棟で748.44m<sup>2</sup>という記事があり、これによると1棟は374.22m<sup>2</sup>(約113坪)となる。また、昭和17(1942)年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠新築増築概要図」では、北側の建物に**男体憩所**、南側には**女体憩所**と記されている。

なお、大正13(1924)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫圖」から昭和10(1935)年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要図」までの各年の配置図には、昭和14年の爆発後に建てられた人夫休憩所とほぼ同様な位置に、十五榴破甲弾完成場と十五榴薬筒完成場という2棟の建物が描かれている。それらは人夫休憩所よりもさらに西側へ長く延びた仮建築(あるいは仮建築物)で、西辺は正門から北上する道路に面している。これに対し、11区の西部で検出した昭和14(1939)年の爆発後に造られた建物の柱穴は、建物の西辺が道路よりも東に20m弱離れた位置にある平成15・16年度調査において検出された建物に連なる。その点から、11区で検出した掘立柱の建物は完成場ではなく、休憩所であったと判

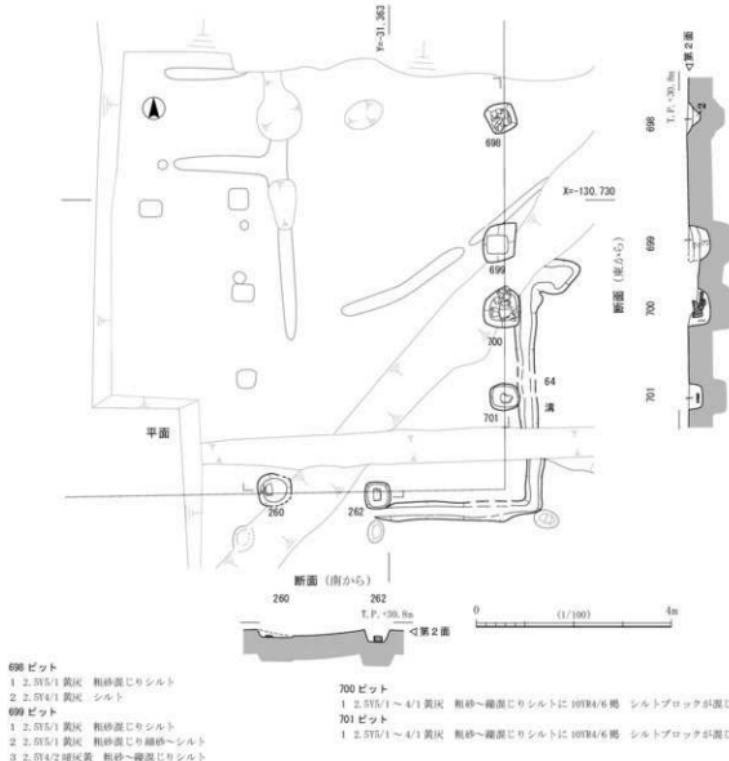


図97 11区 第2面男体憩所

断できる。

男体憩所（図97）は11区北西隅に位置し、平面形が隅丸長方形を呈するピット群で構成される。その周囲をめぐる64溝が男体憩所の雨落ち溝と推定される。男体憩所の東側は男廁につながる。出土遺物は、262ピットの砲弾・不明鉄片などである。

根石として、260ピットに禁野本町遺跡から南東約4kmの交野市倉治付近産の中粒黒雲母花崗岩、262ピットに兵庫県加古川市増田池付近産の可能性のある流紋岩質火山礫凝灰岩、700ピットに高槻層の砂岩に似た細粒砂岩や产地不明の細粒黒雲母花崗岩、花崗岩、石英斑岩が用いられている（奥田尚氏のご教示）。

女体憩所（図98 写真図版53-198）は11区南西隅に位置し、ピットの根石にはいわゆる竜山石が用いられている（写真図版53-199～202）。出土遺物には、267ピットの砲弾、270ピットの棧瓦、271ピットの鉄片などがある。

男廁（3～6便槽）（図99 写真図版54-203～209）11区北西部に位置する。3～6便槽が南北に並ぶ。位置的にみて、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠新築増築概要図」や昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠方分廠構内図」に記載された男廁に伴う便槽であろう。

便槽に用いられた鉢（図129-23～25）内の埋土を全て洗浄したところ、各鉢から、木片、瓦、ガラスが出土した。5便槽からは、生後6カ月未満の幼体のイヌの歯、下頬骨、肩甲骨、肋骨（「第6章

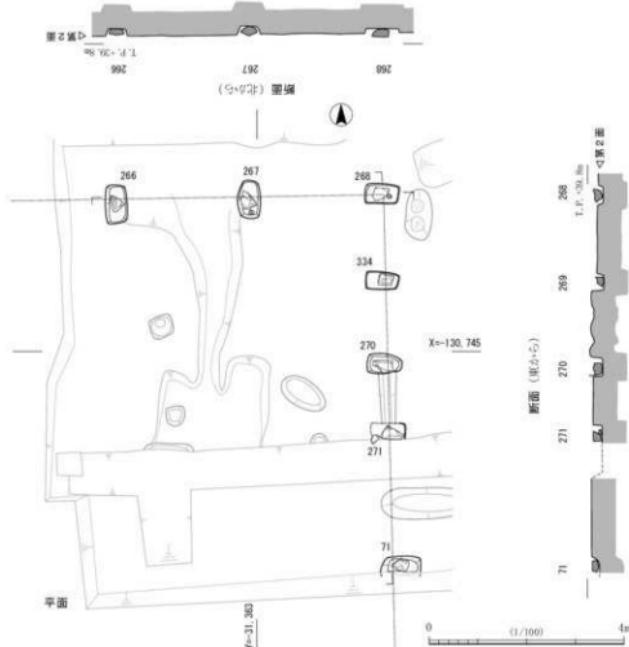


図98 11区 第2面女体憩所

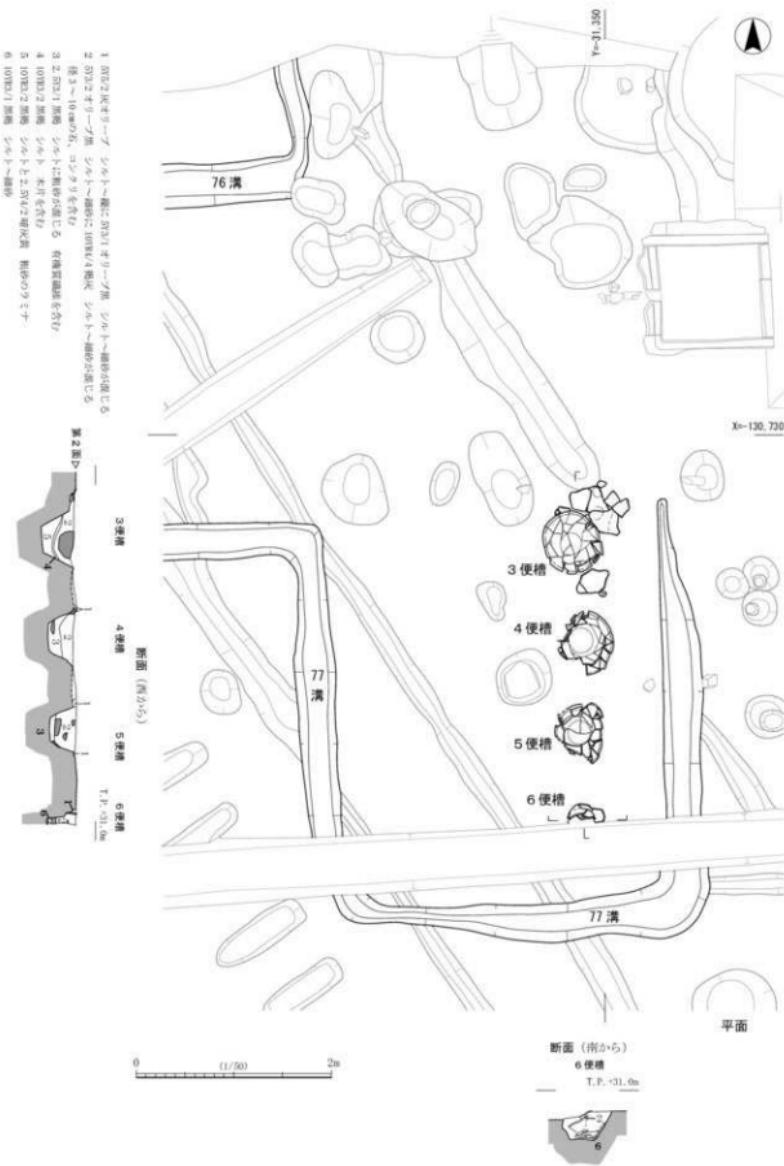


図99 11区 第2面男廁 (3~6便槽)

禁野本町遺跡出土の動物遺存体」参照)が出土した。

3~6便槽の周囲で**76・77溝**を検出した。埋土は、76溝が10YR5/2灰黄褐色~4/1褐灰色粗砂~礫混じりシルト、77溝が10YR3/1黒褐色シルト。これらの溝は、北西・南東に並ぶ枕木土坑群やその北東側に位置する建物よりも新しく、便槽と同時存在としても時期的な矛盾はない。

『分巣歴史』には、昭和14年に授受された木造平屋建ての廻が2棟で延51.30 m<sup>2</sup>という記事があり、これによると男廻はその半分として25.65 m<sup>2</sup>となる。西側に延びる2本の溝に挟まれた部分が男体廻所からの渡り廊下でそれが廻の西辺中央に取り付いていたと仮定して溝の中心を基準として計測すると、溝に囲まれた空間は南北約11 m(約6間)・東西3.7 m(約2間)、面積約40 m<sup>2</sup>となる。約40 m<sup>2</sup>と25.65 m<sup>2</sup>では違いが大き過ぎるので、**76・77溝**は基礎跡ではなく雨落ち溝で、壁の位置はその内側にあったものと考えられる。

### 第3面(図100 写真図版55-210~56-212) 昭和14年以前

第1層を除去した面である。面の高さはT.P.+30.4~30.9 m。11区西端では地山層が露出したが、これ以外の範囲では、禁野火薬庫造成に伴う盛土層(第II層)上面である。昭和14年爆発以前の遺構の他、第2面での検出状況が悪かった爆発後の遺構も合わせて調査した。主な遺構は、建物、軽便軌道に伴う枕木土坑、溝、枠、土坑、ピットである。

**第2荷造場**(写真図版58-222) 11区東部に位置する。昭和8(1933)年頃に設けられた荷造場のコンクリート製基礎である。東西8.9 m。南北19.8 m以上。

荷造場には東辺北寄りと西辺南寄りに出入り口が存在する。東出入口(写真図版58-223)部分のコンクリート基礎には約7.2 mにわたって溝があり、幅1.8 m(1間)の引戸が左右に2枚ある形態であったと推定できる。東西の出入口の外側には幅3.6 m・奥行き0.4 m程の踏み石が設えられている。西出入口(写真図版58-224)の外側には出入口の踏み石よりも南北にそれぞれ約0.3 m広く南北4.2 m・東西0.9 mの範囲にコンクリートが打たれ、さらにこの外側に幅4.3 m・奥行き1.2~1.4 m程の土間がある。

荷造場南部のコンクリートの上面では、細かな凹凸が看取できた。荷造場内には3箇所の漏斗状の穴がみられた。北側の穴の最下層には昭和14年爆発関連層と思しき黒色層がみられ、穴付近のコンクリート基礎は歪み、一部には亀裂が生じていた。また、コンクリートの床面は黒く焦げていた。これらの点から、荷造場建物内の穴は昭和14年の爆発穴であり、また、爆発時に荷造場内で火災が発生したものと推定できる。

**仮建物・十五榴榴霰弾完成場** 11区中央部、8~45枕木土坑(軽便軌道)の北東側に位置し、それと平行して主軸方位を北西・南東とする。この建物に関係深いと考えられるのが以下の溝である。

128溝は枕木土坑30~40の北東側に位置し、コの字形にめぐる。幅0.3~0.6 m、深さ10 cm。埋土は、枕木土坑に近い主軸方位北西・南東の部分とそれに続く北東・南西の部分が2.5Y6/2灰黄色シルト、127ピットに近い北西・南東の部分では10YR1/6褐灰色粗砂混じりシルト。128溝の枕木土坑寄りの北西側の延長線上には、10YR5/2シルト混じり礫を埋土とする**79・80溝**があり、その延長は、128溝のみでは約7.5 m、80溝を含めて約21 m、79溝までをも含めると23.5 m以上となる。なお、**78・82・83・97・118溝**や128溝から南東に突き抜ける**116溝**も同様の主軸方位と埋土である。

Y=31.270

Y=31.360

Y=31.350

Y=31.340

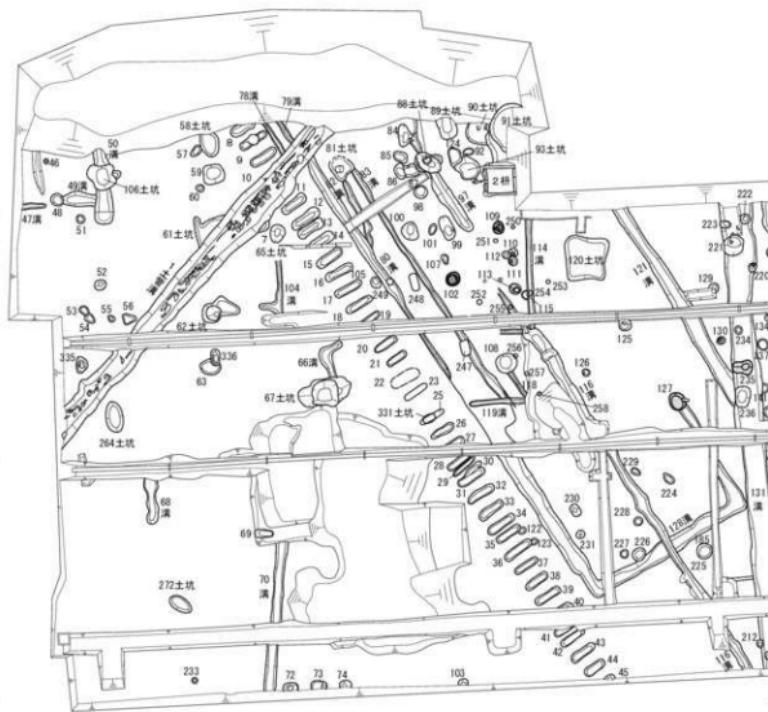


図 100

Y=31,340

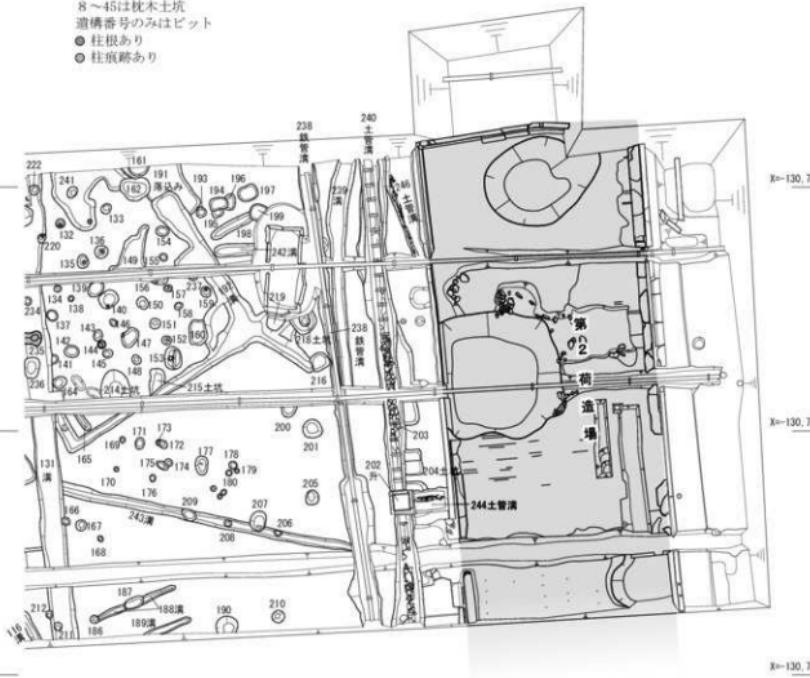
Y=31,300

Y=31,270

Y=31,310

X=130,720

8～45は枕木土坑  
遺構番号のみはピット  
● 柱根あり  
○ 柱痕跡あり



0 (1/200) 10m

**121** 溝は 11 区中央部に位置する。主軸方位が北西 - 南東で幅 0.5 ~ 0.6 m の部分とその南東端で直角に曲がり北東に向かう幅 0.3 ~ 0.4 m の部分がある。深さは 11 cm。埋土は、10YR7/6 明黄褐色 ~ 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。**192** 溝は 121 溝の北東端から北西に延びる。長さ約 7 m、幅 0.6 ~ 1.1 m、深さ 13 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。

これらの溝の相対的位置関係をみると、主軸方位が北東 - 南西の部分は **128** 溝と **121** 溝が 1.6 m の空間をはさんで直列する。一方、北西 - 南東に並行する溝の心々距離は、**128** 溝同士が約 7 m、**128** 溝と **121** 溝は約 2 m、**121** 溝と **192** 溝が約 9 m となる。

大正 2（1913）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫図」には軽便軌道の北東側に隣接して長方形の仮建物が、大正 13（1924）～昭和 4（1929）年の同図には軽便軌道の北東側に隣接して正方形に近い長方形の十五榴榴弾完成場が、昭和 5（1930）年の同図には正方形に近い大きめの建物の北部に一部重複してひとまわり小ぶりの長方形の建物が描かれ両者を示すように十五榴榴弾完成場という文字が、昭和 16（1931）～昭和 8（1933）年の同図では軽便軌道の北東側にやや離れて長方形の十五榴榴弾完成場（昭和 8 年図では十五榴散弾完成場）が、それぞれ描かれている。昭和 9（1934）年以降の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要図」には、北西 - 南東方向の軽便軌道やこの建物の表現はない。

この建物と同じ配置図に描かれている 1 ~ 4 号火工場は、平成 15・16 年度の調査で東西 11 m（6 間強）、南北 7.4 m（4 間強）という規模が判明している。それを一応の目安として仮建物の規模を測定すると、おおむね、大正 2（1913）年の図では、軽便軌道に接して桁行約 20 m・梁行約 9 m、昭和 3（1928）～5（1930）年の図では、軽便軌道に接して桁行約 24 m・梁行約 18 m、昭和 6（1931）～8（1933）年の図では軽便軌道からやや離れて、桁行約 21.5 m・梁行約 8.5 m となる。

以上のような検出遺構と配置図との対比から、建物が溝の底に木材などを設置して土台とする土台建ちのものであったと仮定すると、大正 2 年頃の建築当初は桁行不明・梁行 7.2 m（4 間）～9 m（5 間）の仮建物であったものが、昭和 3 年までには梁行 18 m（10 間）の十五榴榴散弾完成場に拡張され、昭和 5 年に北側に幅約 9 m（5 間）の建物が造られたと考えられる。ただし、第 2 面の男休憩所や男廁のように雨落ちの溝であったとすれば、建物の規模はひとまわり小さくなる。その後、昭和 6 年頃に軽便軌道際の部分の建物が取り払われ、昭和 8・9 年頃には建物と軽便軌道が撤去されたものと推定できる。

建物範囲の内側に多数存在し建物と平行・直交して並ぶピット群の一部は、束柱と考えられる。

**8 ~ 45 枕木土坑（軽便軌道）**（図 101） 12 区西部、仮建物・十五榴榴散弾完成場の南西側に位置し、37 基の枕木土坑が南東 - 北西方向に並ぶ。個々の土坑は、軌道の延長方向に直交し、平面隅丸長方形で、長さ 0.9 ~ 1.3 m、幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 10 ~ 20 cm 程度である。配列状況をみると、12 と 13、25 と 26、34 と 35、41 と 42 の各枕木土坑の間が他の間隔よりも狭くなっている。その間は約 5 m なので、それがレールの長さであると推定できる。この軌道は、各年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫図」を参照すると、大正 2（1913）年頃敷設され、昭和 9（1934）年にはなくなっている。

**1 土管溝**（写真図版 57・216・217） 9 区北西部において、北東 - 南西方向に検出された。幅 1.0 ~ 1.5 m、深さ約 40 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白色礫が混じる。土管の遺存状況は悪いが、外径約 26 cm の土管（図 130・37）が連なっていた。溝底の傾斜と土管の接続部の状況から、南西から北東に水を流していたと考えられる。土管のほか、瓦（図 132・51・52）なども出土した。

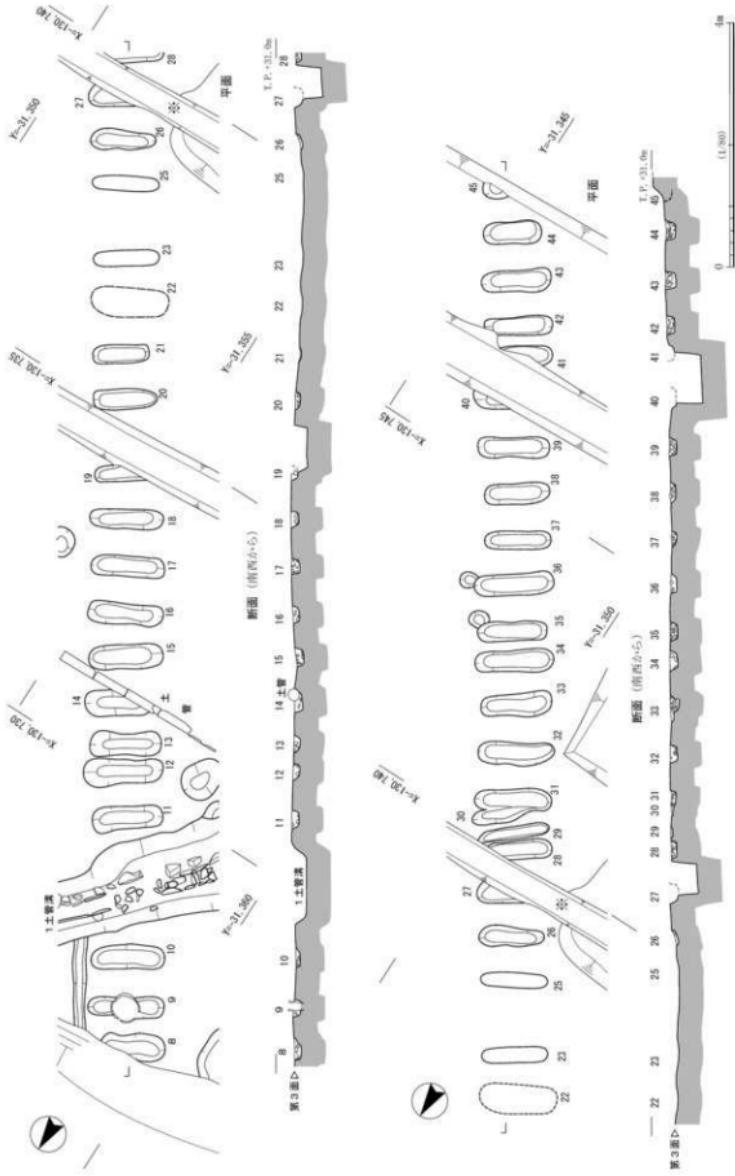


図 101 11 区 第3面 8～45 枕木土坑

枕木土坑 8～44 (29+36)、海上が残ってないもの。未削削の45m高標(T.P.+31.0m) シルト層に埋められた化物を含む  
枕木土坑 29～30 2.3×1.2m開削 シルト～層

**66 溝** 11 区西部、軽便軌道のうちの 20 枕木土坑の西側に位置する。主軸方位が北東・南西の部分と北西・南東の部分が西部でつながり、平面は L 字形となる。幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR2/1 黒色粗砂～礫混じりシルト。

**131 溝** 11 区中央部をほぼ南北に貫く。上記の十五榴榴散弾完成場に関係する 121 溝などと重複関係にあり、それらよりも新しい。幅 0.9 ~ 1.2 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/4 黄褐色粗砂～礫混じりシルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトが混じる。

**188・189 溝** 11 区中央部南辺にあり、東北東・西南西を主軸方位として心々距離 1.5 m で並行する。2.5Y3/1 黑褐色粗砂～礫混じりシルトを埋土とすることから、昭和 14 年の爆発で埋まった可能性が高い。

**198 溝** 11 区中央部北東側、十五榴榴散弾完成場北東辺の 192 溝のさらに北東側に位置する。主軸方位は 192 溝とほぼ直交する北東・南西で、検出長 1.9 m、幅 0.4 m、深さ 10 cm。埋土は、昭和 14 年爆発関連層である 10YR4/1 褐灰色シルト。

**238 鉄管溝** (写真図版 56 - 212) 11 区東部、後述の 2 号荷造場や土管と主軸方位を異にしやや外側に位置する。幅は北部では 0.5 m だが、南部では最大 1.2 m と広くなる。深さは約 40 cm。埋土は、5B6/1 ~ 5/1 青灰色粗砂混じりシルトブロックに N5/ 灰色粗砂混じりシルトが混じる。鉄管の接続部分に、昭和 11 (1936) 年の栗本鐵工所製であることを示す銘がある (写真図版 56 - 214・215)。瓦 (図 132 - 50) なども出土した。

**239 溝** 238 鉄管溝の東に隣接する。主軸方位はほぼ南北だが微妙に曲がり、238 鉄管溝または 240 土管溝とは並行ではない。検出長約 9 m、幅 0.5 ~ 0.8 m、深さ 12 cm。埋土は、昭和 14 年爆発関連層である 10YR4/1 褐灰色シルト。

**240 土管溝** (写真図版 57 - 218・219) 238 鉄管溝と第 2 荷造場との間に位置する。240 土管溝と後述の 202 桁は一連のもので、土管溝の主軸方位は 2 号荷造場に平行している。幅 0.7 ~ 1.2 m、深さ約 40 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色～6/2 灰黄色シルトブロック混じり細砂～シルト。土管 (図 131 - 39 ~ 41) を 30 本検出した。

**243 溝** 11 区中央部南東側に位置する。131 溝や 238 鉄管溝と重複関係にあり、それらよりも古い。主軸方位は西北西・東南東で、検出長約 12 m、幅 0.4 m、深さ 12 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。両端が明確ではないが、溝底が西が高く東が低くなっていることもあり、上記の仮建築関係の 128 溝から東南東への排水を意図したものと推定できる。金属製の樋留 (図 128 - 15) が出土した。

**244 土管溝** 第 2 荷造場から西の 202 桁へ導水する。土管 (図 131 - 42) は破損が著しいが、外径約 18 cm。

**246 土管溝** これも検出状況は不良だが、土管の接続部の状況から南南東から北北西に水を流していたと考えられる。土管 (図 131 - 43) の外径は約 19 cm。

**その他の溝** 主軸方位が南北方向の 68・70・104・114 溝や東西方向の 47・49・117・119・242 溝は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルトや 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトなどを埋土とするものが多い。その方位から、主軸方位を北西・南東とする十五榴榴散弾完成場や軽便軌道廃絶後の昭和 9 (1934) 年以降の所産と推定できる。

**2 桁** (図 102) 11 区北西部に位置する。西側に直径 15 ~ 16 cm の土管 (図 131 - 38) が接続してい

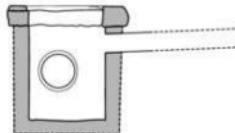
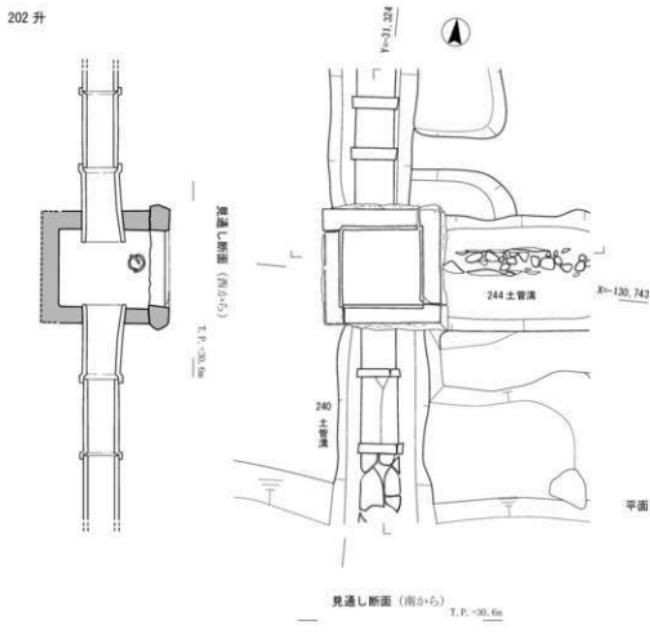
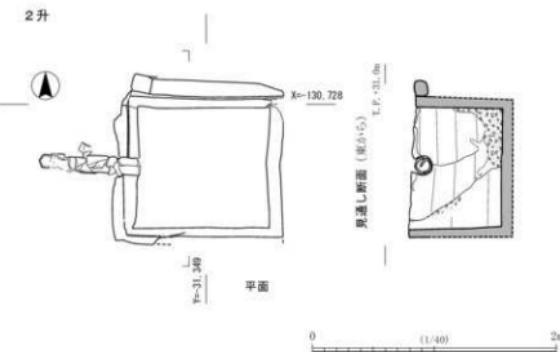


図102 11区 第3面 2・202升

る。枠の内法は東西 110 cm、南北 100 cm、深さ 76 cm。スギ材の建築部材（図 137 - 126）やストレート製波板（写真図版 81 - 1101）などが出土した。

**202 枕**（図 102 写真図版 57 - 220・221）240 土管溝の中ほど位置し、東側に 244 土管溝が接続している。枕本体のコンクリートの上に花崗岩の笠石が設えられている。笠石は 4 つの同形の石材を組み合わせたもので、組み合わせた内側に蓋を受けるための窪みがある。その大きさから、約 68 cm 四方・厚さ約 3 cm の蓋が備えられていたと推定できる。枕の内法は、東西・南北ともに 64 cm、深さ 74 cm である。

**58 土坑** 11 区北西部、8 枕木土坑の西に位置し、その北部は擾乱されている。平面は北北西 - 南南東に長い楕円形と推定され、長径 1.0 m 以上、短径 0.7 m、深さ 15 cm。

この 58 土坑を含め 11 区第 3 面北西部検出の土坑の埋土は、昭和 14 年爆発関係層である 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト、あるいはそれを含むものが多い。

**61 土坑** 11 区北西部、1 土管溝の北西側に重複し、それよりも古い。平面は北西部に突出部のある隅丸方形と推測され、東西 1.4 m 以上、南北 1.1 m 以上、深さ 10 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト、下層が 10YR3/2 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**67 土坑** 11 区西部に位置する。66 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は東北東 - 西西南に長い不整椭円形で、長径 2.3 m 以上、短径 1.2 m、深さは 60 cm と周辺の土坑よりも一段と深い。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**81 土坑** 11 区北西部に位置する。重複関係からみると、76・82・83 溝よりも新しい。平面不整円形で、直径約 1.0 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR3/1 黑褐色粗砂～礫混じりシルト。

**88 土坑** 11 区北西部に位置する。97 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は北西 - 南東に長い楕円形で、長径 1.2 m、短径 0.7 m、深さ 47 cm。埋土は、10YR3/1 黑褐色粗砂～礫混じりシルト。砲弾の弾帯（図 139 - 155）、瓦、ストレートなどが出土した。

**89 土坑** 88 土坑の北東約 1 m に位置し、その北部は擾乱されている。主軸方位をほぼ南北とする楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 0.8 m、深さ 43 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黑褐色礫混じりシルト、中層が 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト、下層は N6/ 灰色礫混じりシルトと 10YR5/2 灰黄褐色礫混じりシルトが混じり、上層と中層の層境に木杭や石が含まれる。

**90 土坑** 88 土坑のすぐ東に位置する。北部は擾乱され、東部は 91 土坑と重複関係にあり、それよりも古い。平面円形と推定され、推定径約 1.2 m、深さ 58 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト、中層と下層は 89 土坑のそれらと同様で、上層と中層の層境にコンクリート塊が含まれる。

**91 土坑** 11 区北西部の北東隅に位置し、90 土坑よりも新しい。平面はほぼ円形と推定され、直径 1.8 ~ 2.0 m、深さも 1.4 m と深い。埋土は、ほぼ水平に各々 15 ~ 40 cm の厚みで、上層から順に、10YR3/1 黑褐色粗砂～礫混じりシルト、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト、7.5Y5/1 灰色粗砂～礫混じりシルト、5GY6/1 オリーブ灰色シルト混じり粗砂、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト、5GY5/2 灰オリーブ色シルトブロック混じりシルト、5GY3/1 オリーブ黒色シルトが堆積しており、底は地山層にまで達している。

**93 土坑** 90 土坑の南約 0.5 m に位置する。平面不整円形で、直径 0.9 ~ 1.1 m、深さ 9 cm。埋土は、10YR3/1 黑褐色粗砂～礫混じりシルト。

**106 土坑** 11 区北西部に位置する。50 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面不整円形で、直径 0.9 ~ 1.3 m、深さ 31 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**120 土坑** 11 区中央部北西側に位置する。平面はややいびつな隅丸方形で、東西・南北ともに 1.8 m、深さ 8 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**204 土坑** 11 区東部に位置する。240 土管溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面方形で南北 1.0 m、東西 0.7 m 以上 1.4 m 以下、深さ 12 cm。埋土不詳。

**214 土坑** 11 区中央部に位置し、その南部は鉄管により搅乱されている。平面は南北に長い楕円形で、推定長径 1.5 m、短径 1.1 m、深さ 25 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。

**215 土坑** 214 土坑の東 0.8 m に位置する。平面は南北に長い隅丸方形で、長径 1.1 m 以上 1.6 m 以下、短径 0.6 m、深さ 19 cm。埋土は、上層に薄く 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂混じりシルトがあり、中層が 10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂混じりシルト、下層が 2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。

**218 土坑** 11 区東部、238 鉄管溝のすぐ西側に位置する。平面は直径約 1.0 m の円形と推定される。埋土は、中央部の直径 43 cm、深さ 30 cm の部分が 2.5Y6/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。その周囲は深さ 8 cm 程度と浅く、10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂混じりシルト。

**264 土坑** 11 区西部に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径 1.2 m、短径 0.7 m、深さ 23 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。金属製品（図 128 - 13・138・142）などが出土した。

**272 土坑** 11 区南西部に位置する。平面は北西・南東に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 11 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。

**191 落ち込み** 11 区北東部に位置する。北部は調査区外に広がる。東西 5.3 m、深さ 11 cm の不定形な落ち込みである。埋土は、第 2 層と同じ 2.5Y4/1 黄灰～3/1 黄褐色粗砂～礫混じりシルト。

瓦礫や木ネジ（図 137 - 110・111）などの金属製品が出土した。

**ピット** 先述の 11 区中央部、121・128・192 溝に囲まれた内部にはピットが多数存在するが、そのうち 102・109 ピットには柱根が残り、127・144・235 ピットでは不明瞭ではあるが柱痕跡の可能性のあるものが認められた。これらは仮建物ないし十五榴櫓震彈完成場の東柱と考えられる。11 区中央部南東側に位置する 205 ピットにも角材の柱根が残っており、そこから心々距離 2.8 m で北に並ぶ 201・216 ピットなどとともに掘立柱建物や柱列を構成する可能性もある。

その他のピットは、土坑と同様に昭和 14 年爆発関係層である 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルトの単層あるいはそれを含むもの多かった。

ピットからの出土遺物には、鉄釘、瓦（図 133 - 58）、木製品、玉器（図 128 - 12）など、さらに混入と考えられる寛永通寶（図 128 - 8）がある。

#### 第4面（図 103 写真図版 59 - 225 ~ 227） 中世（～近世）

旧作土層や近世の作土層など（第 II 層）を除去し検出した。面の高さは T.P.+29.2 ~ 30.8 m であるが、近世頃にひな壇状に造成されたため、西から東へ向かい明瞭な段差をもって低くなっている。また、それぞれの平坦面でも相対的に地形が高い部分である 11 区の南西部や中央部南辺などでは、第 4 面調査時に地山層が露出した。遺構として、土坑、ピット、溝を検出した。

**277 土坑** 11 区北東部に位置する。その北部は搅乱されているが、平面は東西に長い長方形と推定され、長径 2.1 m、短径 1.0 m、深さ 22 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。13 世紀頃の青

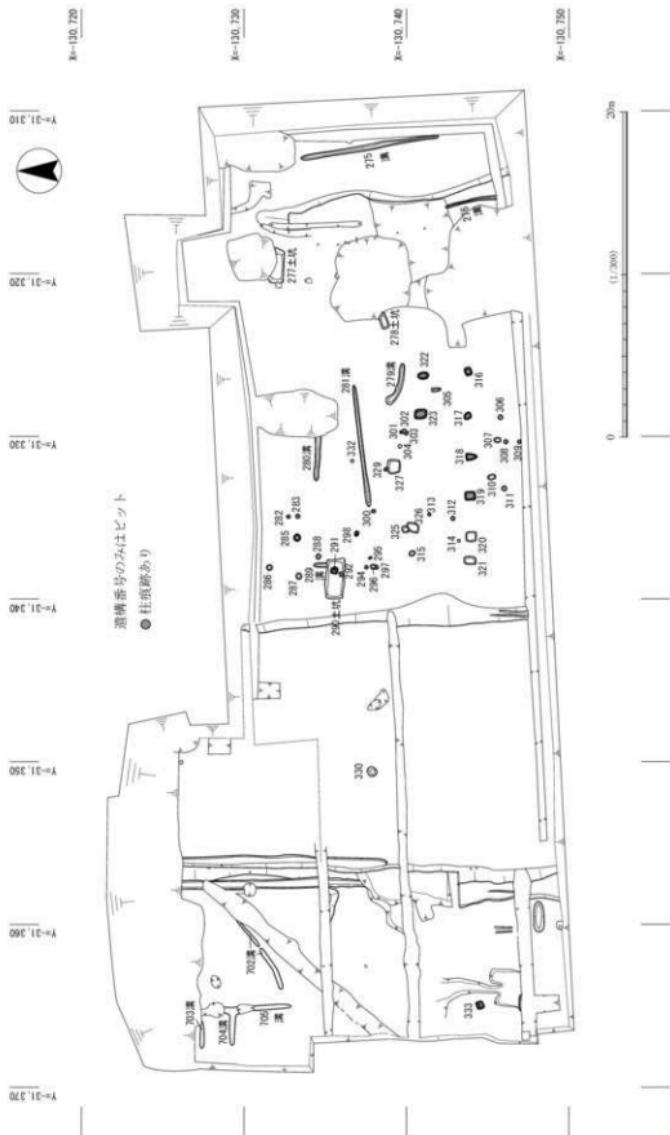


図 103 11区 第4面

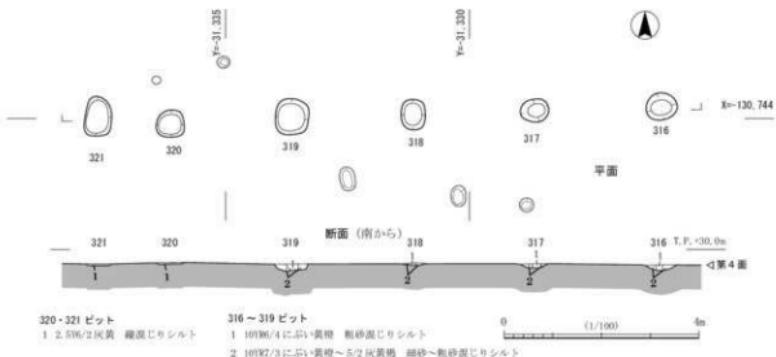


図 104 11 区 第 4 面 316～321 ピット

磁碗(図 176・940)などが出土した。

**278 土坑** 11 区東部に位置する。その北東部は攪乱されているが、平面は東北東・西南西に長い隅丸長方形と推定され、長径 1.0 m 以上、短径 0.5 m、深さ 12 cm。埋土は、旧作土と地山ブロックの混じったもの。土器細片のみ出土した。

**290 土坑** 11 区中央部北寄りに位置する。平面は東西に長い不整長方形で、長径 2.4 m、短径 1.2 m、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y7/2 灰黄色細砂～礫混じりシルト。出土遺物なし。

**316～321 ピット**(図 104) 11 区中央部南側で東西に並ぶ。心々距離は、西端の 321 ピットと東隣の 320 ピットとの間は 1.5 m で、320 ピットから東端の 316 ピットまでは各々 2.5 m である。埋土は、ごく浅い 320・321 ピットでは単層だが、316～319 ピットでは柱痕跡が認められた。このピット列の北方にも柱痕跡のあるピットが散在するが、明確に掘立柱建物を構成するには至らない。いずれのピットからも出土遺物なし。

**その他のピット** 主に 11 区中央部に分布する。柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は 316～319 ピット以外には、285・291・298・322・323・333 ピットで認められた。その他のピットは、埋土が単層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。291 ピットから 8 世紀中頃の土師器杯(図 176・939)、323 ピットから 8 世紀前半の須恵器杯が出土した。

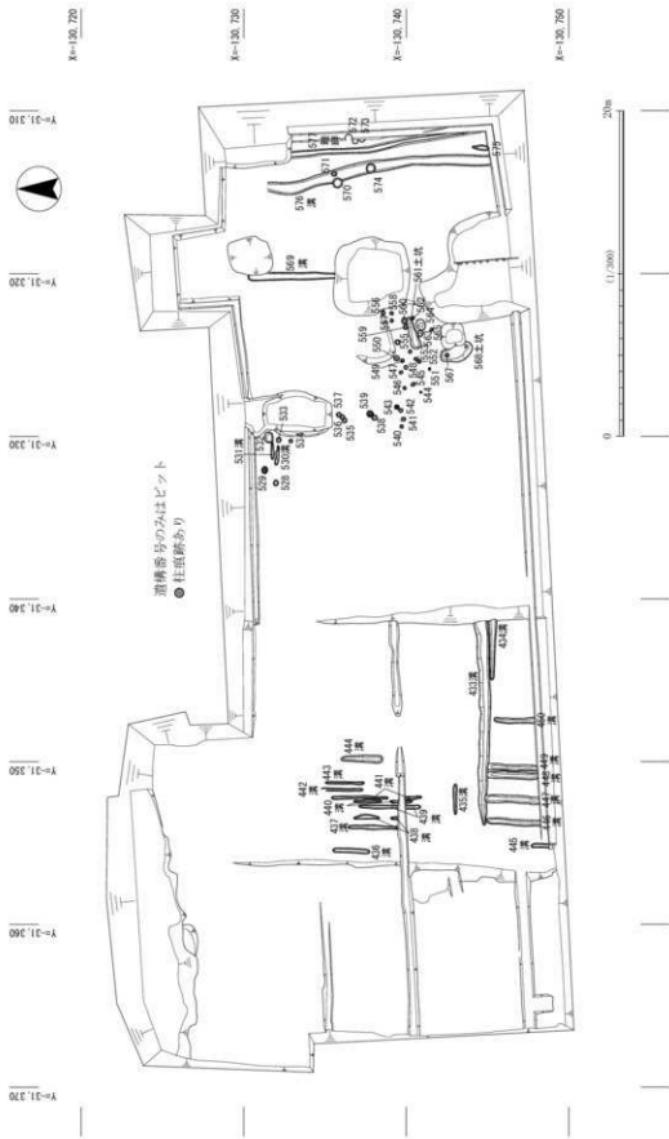
**溝** 東西あるいは南北を主軸方位とする細めの溝が多い。いずれも耕作に伴う溝であろう。279 溝から 8 世紀前半の須恵器杯蓋(図 176・941)や製塩土器(図 176・942)などが出土した。

#### 第 5 面(図 105 写真図版 60・228・229) 古代(～中世)

第 III 層を除去すると、11 区東部の地形が低い部分では第 V 層上面となり、西部や中央部南側では地山層(第 VII 層)が露出する。面の高さは T.P.+29.1 ～ 30.8 m。地山層上面の遺構は古代を主体とするが、古代ないし中世と推測される耕作に伴う溝もみられる。そこで、11 区東部に分布する第 V 層上面で検出した水田畦畔、溝、土坑、ピットと、地山層(第 VII 層)上面で検出した溝を第 5 面の遺構とする。

**577 畦畔** 11 区東辺で検出した。ただし、上面は自然堆積層で覆われず、水田面の一部で地山層が露

図 105 11区 第5面



出することなどから、上層の畦畔部分の下面であるいわゆる擬似畦畔Bと考えられる。

**569溝** 11区東部に位置する。主軸方位はほぼ南北で、検出長5.5m、幅0.4m、深さ7cm。埋土は、10YR4/2灰黃褐色シルト。土器細片が出土した。

**576溝** 11区東辺に位置する。主軸方位は北に西にわずかに偏する南北で、やや蛇行する。検出長約14m、幅0.5～0.8m、深さ4cm。埋土は、2.5Y6/1黄灰色粗砂混じりシルト。製塙土器や瓦の細片などが出土した。

**561土坑** 11区東部に位置する。溝状に細長い土坑で、東北東～西南西を主軸方位とし、長径2.0m、最大幅0.6m、深さ12cm。埋土は、2.5Y6/1黄灰色粗砂～礫混じりシルト。出土遺物なし。

**568土坑** 561土坑の南南西1.3mに位置する。東部は攪乱されているが、平面は北北西～南南東に長い不整楕円形で、長径2.0m、推定短径1.2m、深さ28cm。埋土は、上層が10YR7/4にぶい黄橙色シルト、下層が2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。8世紀中頃の土師器（図176・960）などが出土した。

**ピット** 第5面では、柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は529・539・543ピットで認められた。その他のピットは、埋土が単層のものが多い。377ピットから10世紀後半の土師器皿（図176・956）や黒色土器（図176・957）、他のピットからは8世紀を主体とする土器（図176・958・959）などが出土した。

**433～450溝** 11区中央部南西側に位置する。主軸方位は、433～435溝が東西、436～450溝は南北と、いずれも方位に則る。埋土は、2.5Y6/1黄灰色粗砂～礫混じりシルトで共通し、この直上を覆う第3層である2.5Y4/1黄灰色粗砂～礫混じりシルトにも似る。耕作に伴う溝群と考えられる。433・444溝から、古代の土器細片が出土した。

#### 第6面（図106 写真図版61・232～62・236）古代以前

第V層・第VI層を除去し検出した地山層（第VII層）上面である。面の高さはT.P.+28.7～30.7m。検出構造は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットでほぼ全域に分布しているが、とくに地形的に高い西部と低い東部での密度が高い。

**掘立柱建物1**（図107 写真図版63・237） 11区東部に位置する。南東部は攪乱されているが、主軸方位N76°E、桁行2間（4.2m）・梁行2間（3.9m）、面積16.4m<sup>2</sup>の掘立柱建物である。個々のピットは比較的大きい。建物内側の659・679・660ピットのいずれかも柱穴であるとすれば総柱建物となる。

578・580・581・582ピットから古代の土器細片が出土した。また、579ピットから弥生土器底部（図177・972）が出土したが、これは混入と考えられる。

**掘立柱建物2**（図108） 11区中央部に位置する。主軸方位N6°W、桁行3間（5.5m）・梁行2間（3.4m）、面積18.7m<sup>2</sup>の側柱建物である。ただし、南辺梁行中央のピットは検出できなかった。

520・521・522・523ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物3**（図109） 11区西部に位置する。主軸方位はN20°W、桁行3間（4.7～4.9m）・梁行2間（3.4～3.8m）、面積17.3m<sup>2</sup>、やや台形状の側柱建物である。

出土遺物は、861ピットの6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯、南東隅柱の337ピット（写真図版60・230・231）の8世紀前半～中頃の須恵器壺（図177・973）、722ピットの8世紀前半～中頃の須恵



図 106

Year 340

20

4-31-320

310

$\lambda = -130.72$

遺構番号のみはピット

- 柱根あり
  - 柱痕跡あり



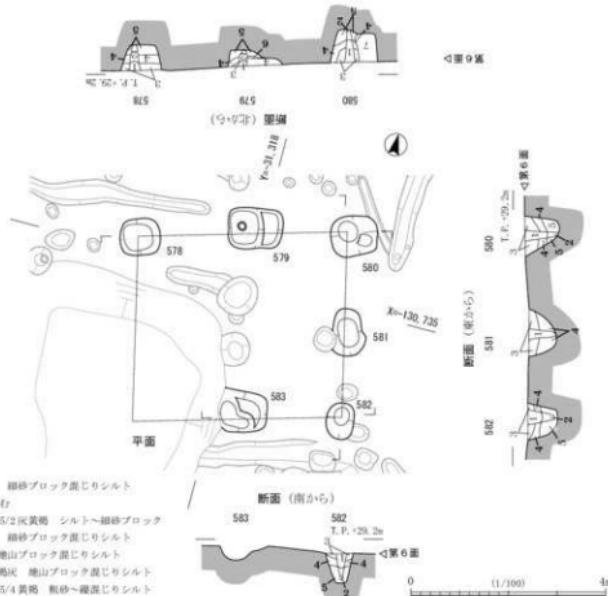


図 107 11 区 第 6 面掘立柱建物 1

器（図 177 - 974・975）などである。337 ピットの須恵器壺が柱を抜いた後の掘方最上部から出土したことから、8世紀前半～中頃に廃絶したと考えられる。

**掘立柱建物 4**（図 110）11 区北西隅に位置する。掘立柱建物 1～3 と同様に梁行 2 間の建物だと仮定すると、主軸方位 N 55° W、桁行不明・梁行 2 間（3.7 m）となる。出土遺物なし。

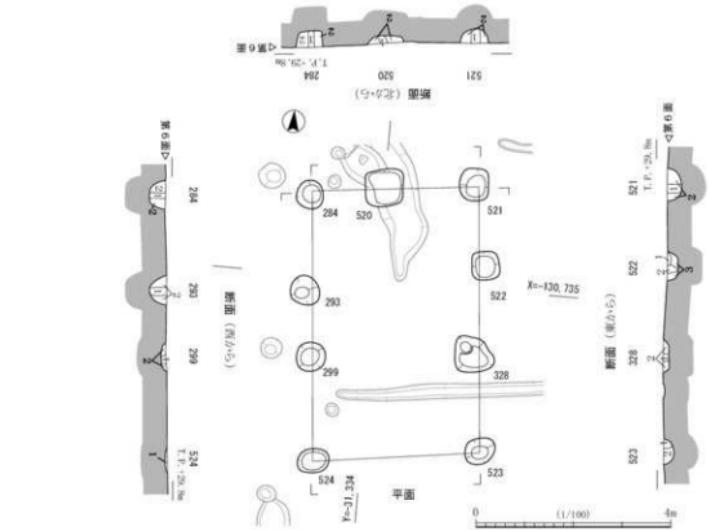
**386 土坑** 11 区南西部に位置する。平面は東西に長い隅丸長方形で、長径 1.3 m、最大幅 0.7 m、深さ 20 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色シルト、下層が 10YR3/2 黑褐色シルトに 10YR4/6 褐色粗 2.5Y5/6 黄褐色シルトのブロックが混じる。製塙土器細片などが出土した。

**478 土坑** 11 区中央部北側に位置し、その北部は調査区外に広がる。平面は東側に突出部のある隅丸長方形と推定され、東西 2.8 m、南北 1.2 m 以上、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/6 褐色粗砂～礫混じりシルト。製塙土器などが出土した。

**586 土坑** 11 区北東部に位置し、その西部は調査区外に延びる。平面は東西に長い楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 0.6 m 以上、深さ 21 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。出土遺物なし。

**589 土坑** 586 土坑の南 0.4 m に位置し、その西部は調査区外に広がる。平面は不整隅丸長方形と推定され、南北 1.7 m、東西 0.3 m 以上、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。出土遺物なし。

**595 土坑** 11 区北東部に位置する。594・596 ピットと重複関係にあり、それらよりも古い。平面は南北に長い隅丸長方形で、推定長径 1.1 m 以上、短径 0.7 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。



#### 521 ピット

- 1 2.5Y6/1 黄灰 シルト
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 520 ピット**
- 1 2.5Y6/1 黄灰 シルト
  - 2 10YR4/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 284 ピット**
- 1 10YR4/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 10YR4/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 293 ピット**
- 1 10YR6/4 に近い黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 10YR7/3 に近い黄褐色～5/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 299 ピット**
- 1 10YR6/4 に近い黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 10YR7/3 に近い黄褐色～5/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 328 ピット**
- 1 10YR4/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 10YR4/2 黑褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 522 ピット**
- 1 2.5Y7/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 2.5Y6/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 3 10YR4/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
- 523 ピット**
- 1 10YR6/4 に近い黄褐色 粗砂～繊混じりシルト
  - 2 10YR7/3 に近い黄褐色～5/2 黄褐色 粗砂～繊混じりシルト

図 108 11 区 第6面掘立柱建物 2

**600 土坑** 595 土坑の北東約 1 m に位置し、その北部は調査区外に広がる。平面隅丸形で、東西 2.5 m、南北不詳、深さ 12 cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色シルト。土器細片が出土した。

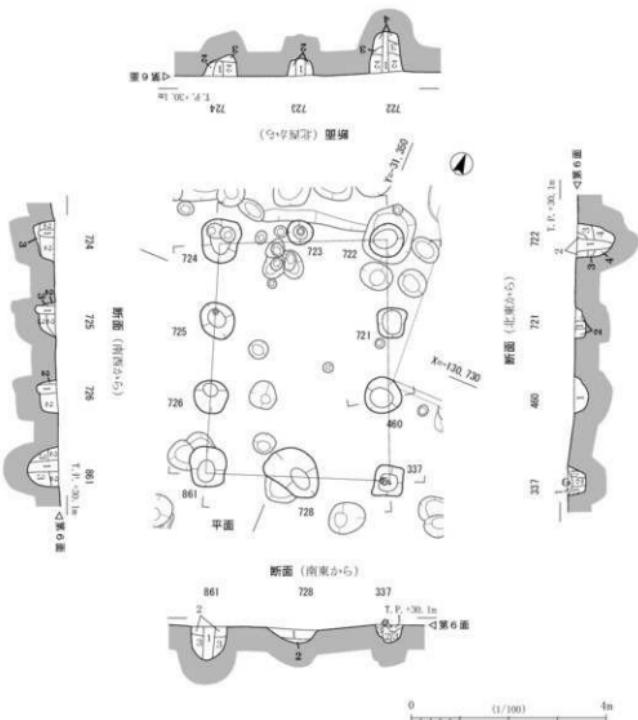
**669 土坑** 11 区東部に位置する。平面は、北西 - 南東に長い不整梢円形で、長径 1.1 m、短径 0.5 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y3/2 黑褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**674 土坑** (図 112 写真図版 63 - 242・243) 11 区南東部に位置する。平面は東辺を底辺とする不整台形状で、幅 0.8 m の溝状に南に延びる。南北 4.2 m、東西 3.0 m、深さ 46 cm。8 世紀後半～末の須恵器 (図 178 - 984 ~ 987)、丸瓦 (図 178 - 988・989)、鉄製品 (図 178 - 990) などが出土した。

**719 土坑** 11 区北西部に位置する。平面不整形で、東西 1.7 m、南北 1.5 m、深さ 33 cm。埋土は、上層が 5B6/1 青灰色シルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトブロックが混じる、下層が 5Y5/1 灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**720 土坑** 719 土坑の南西 3.5 m に位置する。平面は北北東 - 南南西に長い梢円形で、長径 2.6 m、短径 1.3 m、深さ 18 cm。埋土は、2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂～繊混じりシルト。出土遺物なし。

**751 土坑** 11 区北西部、掘立柱建物 3 の北西に位置する。平面はほぼ円形で、直径 1.6 m、深さ 24



#### 722 ピット

- 1 2.5T/3 黄褐色 粗砂混じりシルトに地山ブロックが混じる
- 2 2.5T/2 塗灰黄 褐砂混じりシルト
- 3 2.5T/2 塗灰黄 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂と地山ブロックが混じる
- 4 10TR/1 塗灰～3/1 黒褐色 シルト

#### 723 ピット

- 1 10TR/4/2 塗灰黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが多く混じる
- 2 10TR/4/3 にぶい 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが混じる

#### 724 ピット

- 1 10TR/4/2 塗灰黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが多く混じる
- 2 10TR/4/3 にぶい 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが混じる
- 3 10TR/6/6～6/6 明黄褐色 シルトブロック

#### 725 ピット

- 1 地理上不明
- 2 10TR/4/3 にぶい 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが混じる
- 3 10TR/6/6～6/6 明黄褐色 シルトブロック

#### 726 ピット

- 1 10TR/4/2 塗灰黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが多く混じる
- 2 10TR/4/3 にぶい 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/1 灰白 褐砂ブロックが混じる

#### 861 ピット

- 1 10TR/5/2 塗灰黄～3/2 黒褐色 褐砂混じりシルト
- 2 2.5T/2 塗灰黄 褐砂混じりシルト
- 3 2.5T/1 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/7/6～10TR/6/6 明黄褐色 地山ブロックが混じる

#### 727 ピット

- 1 10TR/7/6～6/6 明黄褐色 シルトブロック
- 2 地理上不明

#### 337 ピット

- 1 10TR/5/2 塗灰黄褐色 シルトに 2.5T/7/1 灰白 シルトが混じる
- 2 10TR/5/2 黑褐色 シルトに 地山ブロックが混じる 紙を多く含む
- 3 10TR/8/2 塗灰黄褐色 シルトに 2.5T/7/1 灰白 シルトブロックが混じる

#### 460 ピット

- 1 10TR/6/6 明黄褐色 シルトに 10TR/4/2 塗灰黄褐色 シルトブロックが混じる

#### 728 ピット

- 1 10TR/5/2 塗灰黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/7/1 灰白

褐砂ブロックが混じる

- 2 10TR/4/3 にぶい 黄褐色 褐砂混じりシルトに 2.5T/7/1 灰白

褐砂ブロックが混じる

図 109 11 区 第 6 面掘立柱建物 3

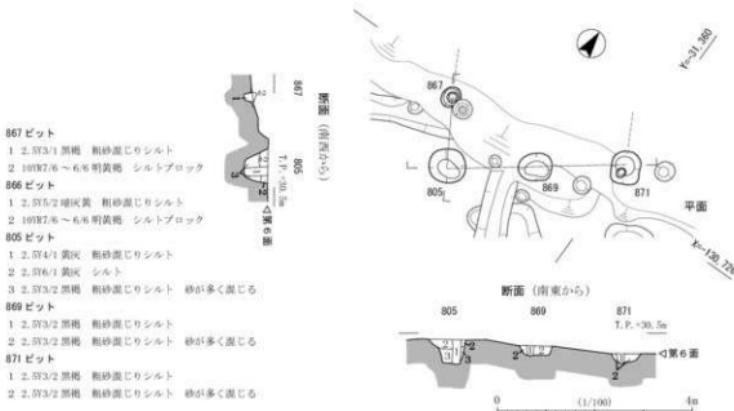


図 110 11 区 第6面掘立柱建物 4

cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**784 土坑** 751 土坑の西南西 1.7 m に位置する。平面は、北北西 - 南南東に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 15 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

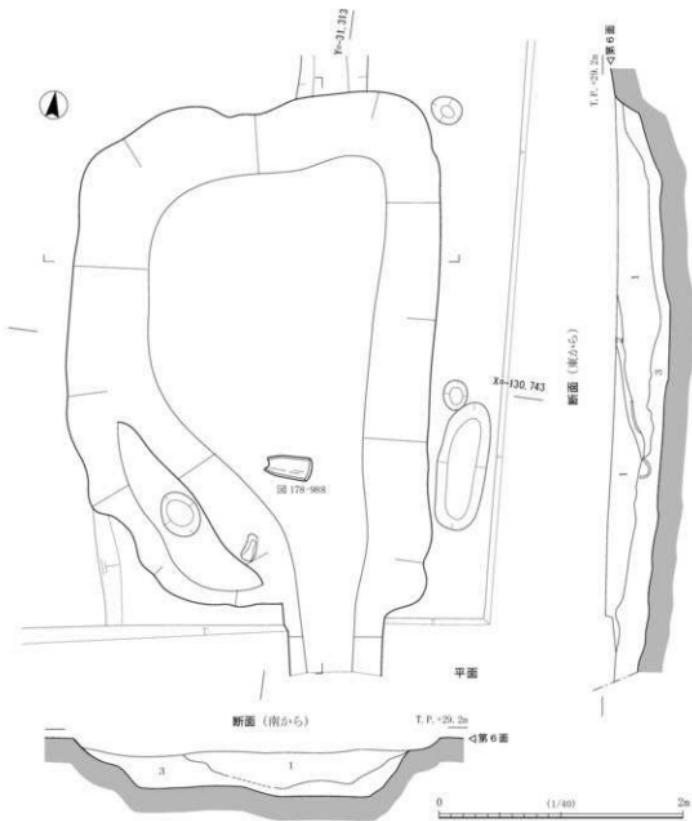
**785 土坑** 784 土坑の北 0.2 m に位置する。平面は、不整台形とも南西側がくぼんだ隅丸方形ともいえる。南北 2.0 m、東西 1.5 m、深さ 18 cm。埋土は、2.5Y5/2 噴灰黄色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**803 土坑** 11 区北西部に位置する。799 溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面不整方形で、南北 1.4 m、東西 1.8 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/2 噴灰黄色粗砂混じりシルト。6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯（図 178 - 991）などが出土した。

**611 溝** 11 区東部に位置する。主軸方位は東西に近い東北東 - 西南西で、検出長 5.9 m、溝の両肩には出入りが多く幅は 0.5 ~ 1.8 m、深さ 25 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルトと 2.5Y5/2 噴灰黄色細砂～粗砂混じりシルトが混じり合い、マンガン斑を多く含む。出土遺物なし。



図 111 11 区 第6面 525・526 ピット



1 10G36/4 緑灰・粗砂混じりシルトに BY4/1 シルト・粗砂混じりシルトプロックが混じる  
2 BY4/1 シルト・粗砂混じりシルト  
3 BY4/1 シルト

図 112 11 区 第 6 面 674 土坑

**634 溝** 11 区北東隅に位置する。681 ピットと重複関係にあり、それよりも古い。主軸方位は東北東・西南西で、検出長 5.2 m、この溝も両肩に出入りがあり幅は 0.4 ~ 1.3 m、深さ 15 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**652 溝** 11 区北東隅、634 溝の南東約 3 m に位置する。653 ピットや 651 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は L 字形で、主軸方位は東西の部分と南北の部分がある。東西部分は検出長 1.9 m、幅 0.6 m、南北部分は長さ 2.9 m、幅 0.5 m。深さ 10 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色シルト。8 世紀の土師器鉢（図 178 - 993）や須恵器杯蓋（図 178 - 994）などが出土した。

**652 溝** とその南東側で南北方向に延びる 655 溝（検出長 0.8 m、幅 0.2 m、深さ 4 cm、埋土は 2.5Y6/1 黄灰色シルト）が一連のものとすると、コ字形に囲まれた内部は、東西・南北とも約 2.2 m の

空間となる。

**その他の溝** 11区東部にあり東西あるいは南北を主軸方位とする溝、西部の主軸方位を北北西・南南東あるいはそれと直交方向の溝は、耕作に伴う溝であろう。426溝から8世紀の須恵器杯蓋（図178-992）、802溝から8世紀前半の須恵器杯（図178-995）が出土した。

**525・526ピット**（図111 写真図版63-241） 挖立柱建物1の北側に位置し、その北辺中央の520ピットよりも526ピットは古い。平面では526ピットと525ピットも重複関係があるようにみえるが、埋土は10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルトと共に通し、2つのピットから出土した8世紀末頃の須恵器甕（図177-977）も同一個体である。526ピットからは8世紀後半の須恵器杯蓋（図177-976）も出土した。

**その他のピット** 柱痕跡の認められるものは、掘立柱建物を構成するピット以外にも、11区北東部の低い部分では591・592・599・604・605・621・624・631・642・649・650・666・670ピットがある。なかでも、掘立柱建物1の西側に位置する平面隅丸方形の621ピットと心々距離でその東1.7mにある624ピットには明瞭な柱痕跡がある。

一方、11区西部では、822ピットに柱根が残っていた。柱痕跡は339・342・346・348・351・352・354・379・384・385・387・388・392・399・405・408・410・412・419・422・424・491・752・780・792・800・808・816・818・819・820・821・824・839・841・842・849・852・854・856・860ピットや掘立柱建物3近くの464・465・472・692・736・752ピットで認められた。このうち11区西部から中央部にかけて346・342・352・354・（柱痕跡はないが451・455・461ピット）・465・472ピットが西南西・東北東に並んでおり、柵列などが想定できる。また、北西部の821・820・819（とその東の818）・817（これのみ柱痕跡なし）・816（とその東の824）ピットは心々距離1.4～1.8mでほぼ東西に並ぶことから、その周辺のピットと相まって建物や柵列などを構成する可能性がある。さらに、掘立柱建物3南西隅の861ピットとその北の727ピット、掘立柱建物4南西辺の867ピットとその東の866ピットなどのように、柱痕跡のあるピットが2個近接して存在する例もある。

他のピットは、埋土が単層あるいは水平方向に堆積するものであった。これらのピットからは、8世紀を主体とする須恵器・製塩土器・瓦（図177-978～983）などが出土した。

## 第11節 12区（立体駐車場）の遺構

12区は調査地北東部に位置する。立体駐車場の建設に伴う調査である。最終面での調査面積は1221 m<sup>2</sup>。およそT.P.+31.0 mの現地表面から、最深部でT.P.+27.8 mの第4面まで調査した。

第1面は昭和14（1939）年爆発関連層の上面である。建物と土壌を検出した。爆発以後の建物の拡張が認められた。

第2面は昭和14年以前の禁野火薬庫の面。建物、土壌、軽便軌道などを検出した。土壌は搅乱部分が多くたが、調査区中央部の火工場は良好に残っていた。

第3面は古代～中世の面。溝、土坑、ピットを検出した。

第4面は地山層上面。古代の掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどと中世の土坑やピットを検出した。

### 層序（図113 写真図版73-280）

12区では、東壁の断面を掲げる。

第0層（1）は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層である。

第1層は、基本層序の第1層【昭和14（1939）年爆発関連層】に該当する。12区では土壌部分が広い面積を占めるが、その範囲には昭和14年爆発関連層がみられない。他方、12区北部の土壌よりも北の部分や中央部の火工場が存在した部分では、爆発後の整地層（3～7）やその下層に爆発関連層（14～18）が広がる。

第2層は、基本層序の第II層・第III層に該当する。土壌や建物基礎の掘方（20～45）、土壌の盛土層（46～76）が残る、火薬庫造成に伴う盛土層（77～95）、それ以前の旧作土層（96・97）、古代～近世の包含層（98～103）などからなる。それらのうち、土壌部分では、戦後になって土壌が壊されたことによって盛土層の下部しか残ってはいないが、とくに12区北部の4土壌の断面（46～76）では、北辺の斜面と南辺のコンクリート基礎との間の土の積み方が良く分かる。また、図113の88～94層の堆積順を追うことによって、この断面では火薬庫造成に伴う盛土が南から進められたことが判明した。

第3層（104・105）は、基本層序の第V層・第VI層に該当する。12区では、第3層を除去した第4面で地山層（第VII層）上面に達した。

### 第1面（図114 写真図版64-244）昭和14年以後

旧住棟に伴う盛土層などを除去して検出した、昭和14（1939）年爆発関連層の上面である。ただし、12区では建物と土壌であった範囲が広いこともあってその層の残りは悪く、明確に第1面と第2面とを掘り分けることはできなかった。遺構として建物と土壌を検出したが、第1面では昭和14年の爆発以後の建物2棟についてのみ記述し、爆発以前から存続する遺構については第2面で報告する。面の高さは、建物周辺の当時の地表面と考えられる部分でおよそT.P.+29.8 m。

**1建物** 12区南部に位置する。昭和10（1935）年に建てられ、昭和14（1939）年の爆発時まで存在した8号火工場の位置に、昭和16（1941）年にそれを東西方向へ拡張して新築された第25号倉庫である。昭和20（1945）年の配置図では第13号倉庫と改称されている。先述の9区の調査でこの建物南側の土壌の基礎が見つかっていたが、12区では建物本体の北辺と東西両辺の基礎の一部が検出で

きた。拡張に際し、建物本体周囲に土間コンクリートが設置され、基礎外面にはモルタルが塗りなおされている。1建物北辺の基礎で床下換気口が4箇所確認できた。

**2建物**（図115 写真図版66-249～67-254）12区中央部に位置する。昭和11（1936）年に建てられ、昭和14年の爆発時まで存在した9号火工場の位置に、昭和16（1941）年にそれを東西方向へ拡張して新築された第26号倉庫である。昭和20（1945）年には第14号倉庫と改称したよう、「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内圖」には「第14号倉庫86坪」と記載されており、東西に拡張後の規模【拡張された建物の規模は壁の心々で、東西23.8m、南北12.0m、面積286m<sup>2</sup>（約86.5坪）】と一致する。爆発後の新築に際し東西に1mほど拡張された基礎の状況が明瞭にわかる。

出入口を東西辺で各1箇所、南辺で2箇所検出した（写真図版67-251～253）。出入口部分のコンクリート土間や引き戸を受ける部分も、従来の基礎に追加されている。その下部には昭和14年の爆発に伴うと考えられる黒色層が確認できたので、これらの出入口はそれ以後に新設されたことが判明した。南出入口Aの下には21土管列、南出入口Bの下には20土管列が埋められ、2建物南辺の側溝をつないでいる。21土管列の土管のひとつを図131-44に掲げる。

建物内部には、古い土間コンクリートの上には黒色層を挟んで土台状のコンクリートが設えられ、規則的にアンカーボルトも配置されている。鍵（図136-80）、釘（図137-115～125 写真図版80-1100）、金属製品（図137-134・138-139）などが出土した。基礎の外面には、拡張に際し1建物と同様にモルタルが塗りなおされている。西辺で確認された床下換気口（写真図版67-254・81-1104）の格子はコンクリート製であり、より古く大正時代から昭和時代初期にかけて竣工した火工場の鉄製の格子とは異なる。

## 第2面（図116 カラー写真図版1-2 写真図版64-245～65-247）昭和14年以前

昭和14年爆発関連層を除去した面である。面の高さは、T.P.+29.6～29.7m。第1面と同様な景観だが、爆発により埋没した軽便軌道なども検出できた。

**1建物**（写真図版66-248）12区南部に位置する。建物基礎とそれに囲まれる土間コンクリートを検出した。昭和10（1935）年に建てられ、昭和14（1939）年の爆発時まで存在した8号火工場である。

床下換気口4箇所のうち3箇所の外側では17・18・19土管列が検出できた。比較的遺存状況の良い18土管列（図117）は断面L字型で、1建物北辺側溝の底部から3土壁南辺側溝へ排水する機能をもつ。19土管列では、排水先の側溝との接続部分が塞がれていた。

**2建物**（図115 写真図版66-249・250、67-256）12区中央部、5・6軽便軌道が敷設されている幅約4mの範囲の北側に位置する。昭和11（1936）年に建てられ、昭和14年の爆発時まで存在した9号火工場である。規模は、壁の心々で東西21.8m、南北12.0m、面積262m<sup>2</sup>。8区の調査では今回検出できた建物の西側に築かれた第4師団兵器部保管建物（8区第1面20建物）が検出できたが、これとほぼ同じ形状である。

第1面で記述したように出入口部分は爆発後に改修されているが、爆発前と考えられる基礎には一辺10cm弱の方形の孔の中央部にさらに直径3cmほどの円孔が穿たれており、これが枢（戸臍）であれば、開き戸であったと推定できる。

建物の南側には木枠の溝が設置されており、出入口付近は土管による暗渠となっている（写真図版

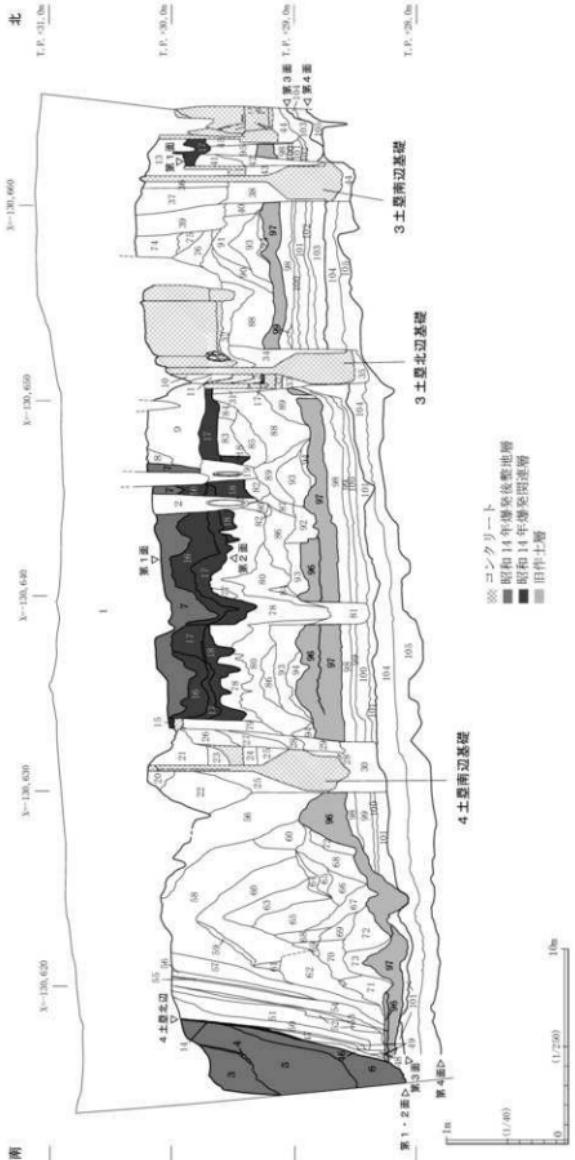
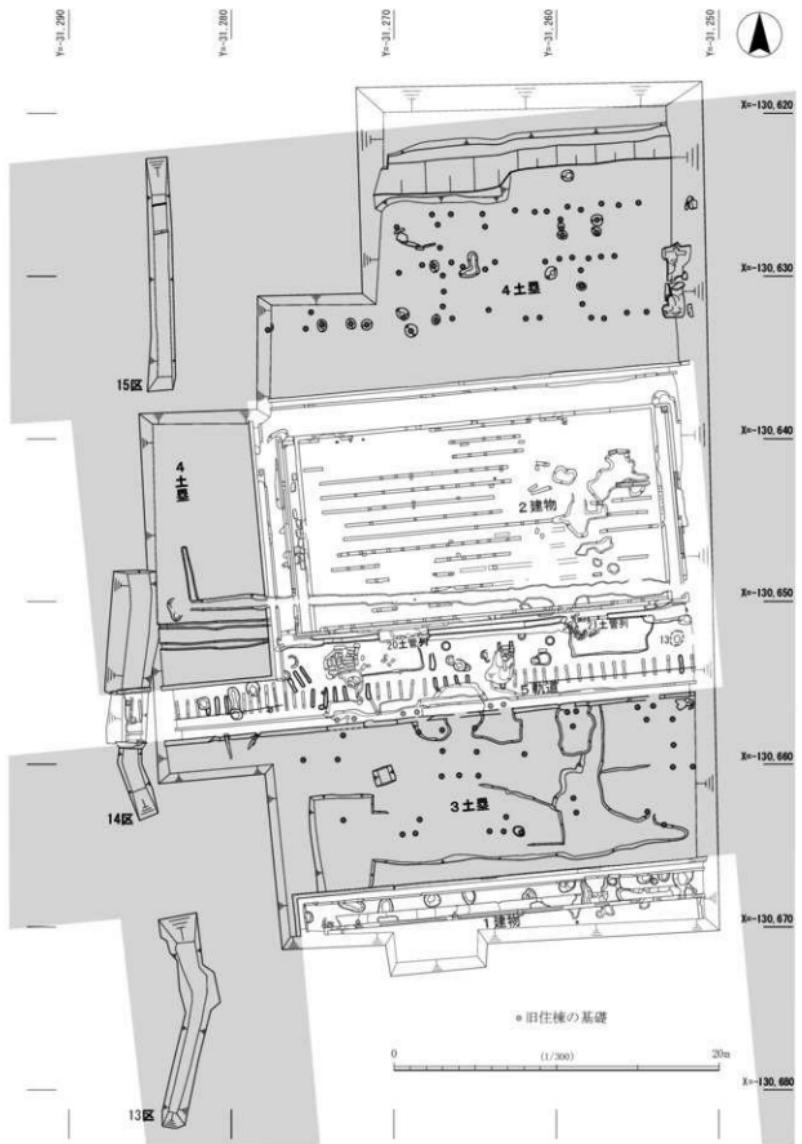


図 113 12 区 東壁断面

1. 2,515/2西原町へ-54.4に=高い高地 風砂～礫原にシルト  
2. 上層  
3. 386/2西原町 レベル・船山ブロッケと  
4. 2,515/2西原町へ-54.4高地 風砂～礫原にシルトが混じる  
5. 2,515/2西原町 シルト～礫原にシルトブロック  
6. 2,517/2西原町 風砂～礫原  
7. 2,518/2西原町 風砂～礫原  
8. 2,519/2西原町 風砂～礫原  
9. 2,519/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルト  
10. 2,519/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルトブロック  
11. 2,515/2西原町へ-54.4高地 風砂～礫原にシルト  
12. 2,516/2西原町 地盤にカシコトで覆う風砂～礫原にシルト  
13. 2,517/2西原町 風砂～礫原にシルト  
14. 2,517/2西原町にカシコト、昭和14年春雨浸食帶  
15. 2,519/2西原町 風砂～礫原にシルト  
16. 2,519/2西原町 風砂～礫原にシルトブロック  
17. 2,519/2西原町にカシコト、昭和14年春雨浸食帶  
18. 2,519/2西原町 船山ブロッケ風砂～礫原にシルト (昭和14年春雨浸食帶)  
19. 2,519/2西原町 風砂～礫原にシルト  
20. 2,519/2西原町 風砂～礫原にシルトブロック  
21. 風砂  
22. 2,517/2西原町 風砂～礫原  
23. 2,515/2西原町 風砂～礫原  
24. 風砂  
25. 2,516/2西原町 風砂～礫原にシルトに  
26. 2,515/2西原町 風砂～礫原にシルトブロックが混じる  
27. 2,515/2西原町 風砂～礫原にシルトブロック  
28. 2,516/2西原町 風砂～礫原にシルトに  
29. 2,515/2西原町 風砂～礫原にシルトブロック  
30. 風砂  
31. 2,515/2西原町 風砂～礫原にシルトに  
32. 2,515/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルトブロックに  
33. 2,515/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルトブロックに  
34. 2,515/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルトブロックに  
35. 風砂
36. 1008/2西原町へ-54.4に=高い高地 風砂～礫原にシルト  
37. 2,517/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルトに礁砂ブロックが混じる  
38. 2,517/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルト  
39. 2,567/2西原町 レベル・船山ブロッケと  
40. 2,517/2西原町 風砂～礫原にシルト  
41. 1008/2西原町に=高い高地 風砂～礫原にシルト  
42. 2,517/2西原町 風砂～礫原にシルト  
43. 風砂
44. 風砂
45. 2,517/2西原町 風砂～礫原にシルト  
46. 2,519/2西原町 風砂～礫原にシルト  
47. 2,518/2西原町 風砂～礫原にシルトブロック  
48. 2,516/2西原町 颗砂風砂シルト  
49. 2,518/2西原町に=高い高地 風砂～礫原  
50. 1008/2西原町に=高い高地 颊砂～礫原にシルトブロック  
51. 2,514/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
52. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト (昭和14年春雨浸食帶)  
53. 2,516/2西原町 颊砂～礫原にシルト (昭和14年春雨浸食帶)  
54. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
55. 2,516/2西原町 颊砂～礫原  
56. 2,516/2西原町 颊砂～礫原  
57. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
58. 2,517/2西原町ナリーフ/2西原町 颊砂～礫原  
59. 2,517/2西原町 颊砂～礫原  
60. 2,516/2西原町 颊砂～礫原  
61. 1008/2西原町 颊砂～礫原  
62. 2,514/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
63. 2,517/2西原町ナリーフ/2西原町 颊砂～礫原  
64. 2,515/2西原町 颊砂～礫原  
65. 2,516/2西原町 颊砂～礫原  
66. 2,515/2西原町 颊砂風砂シルト  
67. 2,516/2西原町 颊砂～礫原  
68. 2,514/2西原町 颊砂～礫原  
69. 2,515/2西原町 颊砂～礫原  
70. 2,519/2西原町 颊砂風砂シルトブロックに  
71. 1008/2西原町 颊砂風砂シルトが混じる
72. 2,518/2西原町に=高い高地 颊砂～礫原にシルト  
73. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
74. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
75. 2,516/2西原町に=高い高地 颊砂～礫原にシルト  
76. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
77. 2,517/2西原町 颊砂～礫原  
78. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
79. 2,518/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
80. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
81. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
82. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
83. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルトブロック  
84. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
85. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
86. 2,518/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
87. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
88. 2,516/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
89. 2,515/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
90. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
91. 1008/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
92. 2,517/2西原町 颊砂～礫原にシルト  
93. 1008/2西原町 颊砂～礫原  
94. 2,518/2西原町 颊砂～礫原  
95. 2,517/2西原町 颊砂～礫原  
96. 2,514/2西原町 颊砂風砂シルト (土作工場)  
97. 2,515/2西原町 颊砂風砂シルト  
98. 2,516/2西原町 颊砂風砂シルト  
99. 2,516/2西原町 颊砂風砂シルト  
100. 2,516/2西原町 颊砂風砂シルト  
101. 1008/2西原町 颊砂風砂シルト  
102. 1008/2西原町 颊砂風砂シルト  
103. 2,517/2西原町 颊砂風砂シルト  
104. 1008/2西原町 颊砂風砂シルト  
105. 1008/2西原町 颊砂風砂シルト



排水用の土管は、2建物の南側には5軌道の下層に、南北方向を基調とする22～24土管列が埋設されている。24土管列の土管のひとつを図131-45に掲げる。建物北東側の状況が不明だが、北西側では25・26土管列が2建物から北方にある4土塁南辺の側溝に向けて排水するように設えられている。それらの代表例として、比較的残りの良い25土管列(図117)を掲げる。

2建物の断面(図115写真図版67-256)を観察すると、旧作土層の上に水平に盛土を行い、一部を掘って基礎を設置し、さらに建物内部を盛土でかさ上げし、コンクリート土間を打っていることが良くわかる。

**3土塁**(図118写真図版66-248) 1建物基礎コンクリートの北側約2mでは、建物を囲む3土塁南辺のコンクリート基礎が検出できた。基礎の南側にはコンクリート製の側溝が設置されている。この北側約10mに3土塁北辺のコンクリート基礎と側溝が検出できた。3土塁の盛土自体は昭和40年代の旧住棟建設時などの破壊を受けているが、断面(図113)に示したように盛土の状況が確認できた。

3土塁北辺の南側(外面)には型枠の痕跡が明瞭に残り、水抜き孔や金具もみられる。北側(内面)には基礎の内部にあるべき鉄筋が露出しているが、その鉄筋は縦に直径18mm、横には6mmのものが使われている。

**4土塁**(写真図版67-257・258) 2建物の北側約2mには4土塁南辺のコンクリート基礎があり、その南側にはコンクリート製の側溝が設置されている。2建物西側から後述の14区の北半にあたる部分の土塁は、各年の配置図を参照すると昭和14(1939)年の爆発の頃までは築かれていません。

4土塁は大部分が削平されていたが、北へ向かい下がる地形が幸いし、北側では比較的良好に土塁盛土が遺存していた。今回の調査で検出した他の土塁は、基本的に土塁裾の両側に重厚な基礎があり土塁盛土を支える構造になっているが、5区南西部・15区北部・12区北部に位置するこの土塁の北辺だけはコンクリートなどの基礎がなく、約45度の角度で地表面から立ち上がる形状である。

**5・6軽便軌道**(写真図版68-259～262) 3土塁北辺のコンクリート基礎と2建物との間では、東西方向に走る軽便軌道が存在し、これに伴うコンクリート製枕木が比較的良好に検出できた。軽便軌道は12区西端で単線だが、これ以外では複線となっている。12区西部の軽便軌道が単線から複線になる部分では、通常のコンクリート製枕木とは異なる長い枕木(図145-238～243)も確認できた(写真図版68-261・262)。なお、軽便軌道は、昭和14年の爆発以後に複線部分(6軌道)が廃止されて単線部分(5軌道)のみとされており、そのため北側の複線部分は単線部分比べて遺存状況が悪い。

通常のコンクリート製枕木は長さ105cmのもので、犬釘(図143-217～226)には木製のくさびでとめているものと、モルタルで埋めているものがある。枕木に残るレール底部幅の痕跡は6cm強であり、10区西部の機械掘削中に出土したレールの底部幅63mmと一致する。軌間(ゲージ)は、600mm(ないし610mm=2フィート)である。

**10・11桶** 2建物の南側に約6mの間隔で東西に並ぶ。両者とも直径50cmの木桶で、高さは30cmあるが上部は消失している。厚さは側・底ともに約1cm。内部には底に10cmほど2.5Y4/1黄灰色細砂～粗砂混じりシルトが溜まり、その上部は10YR4/1褐灰色シルト混じり細砂にスレート、礫、鉄釘が混じる。

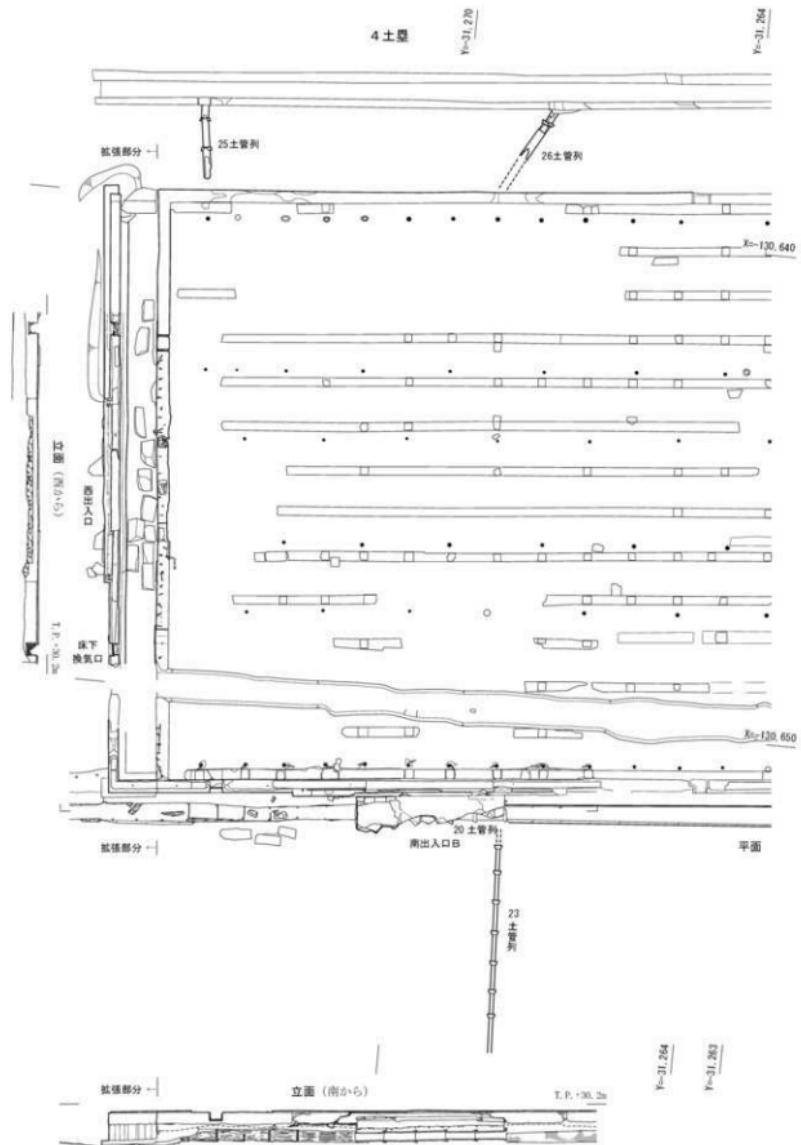
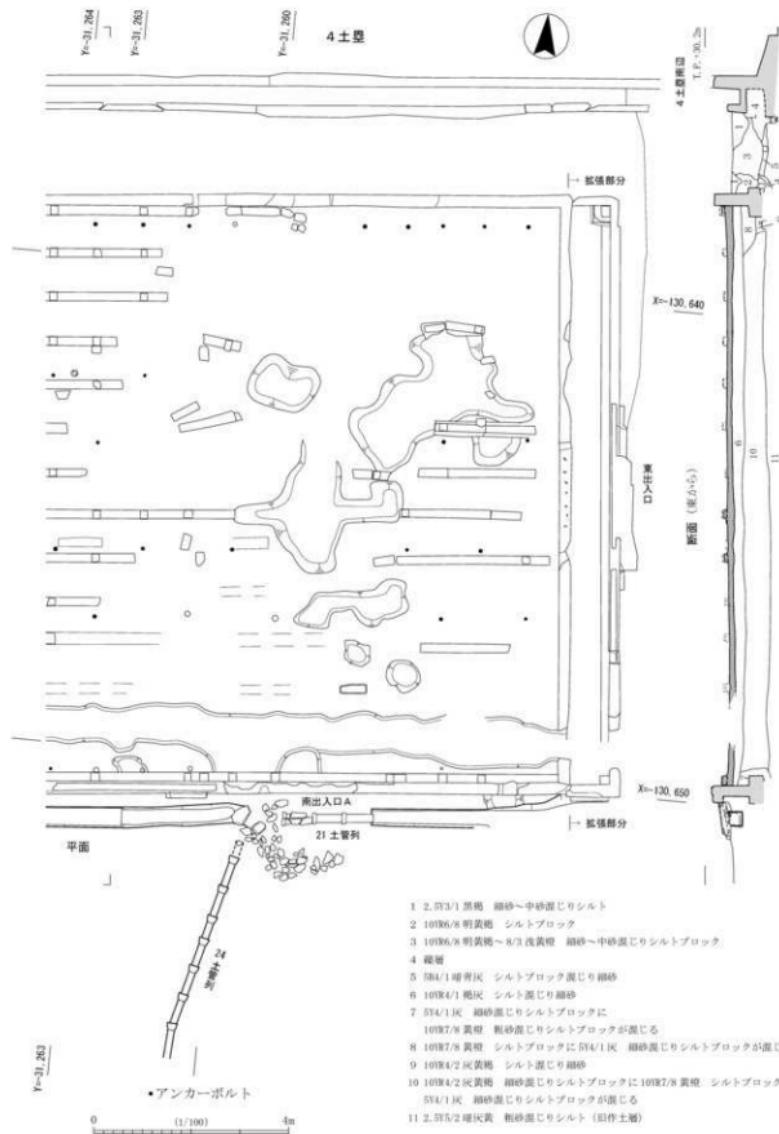


図 115



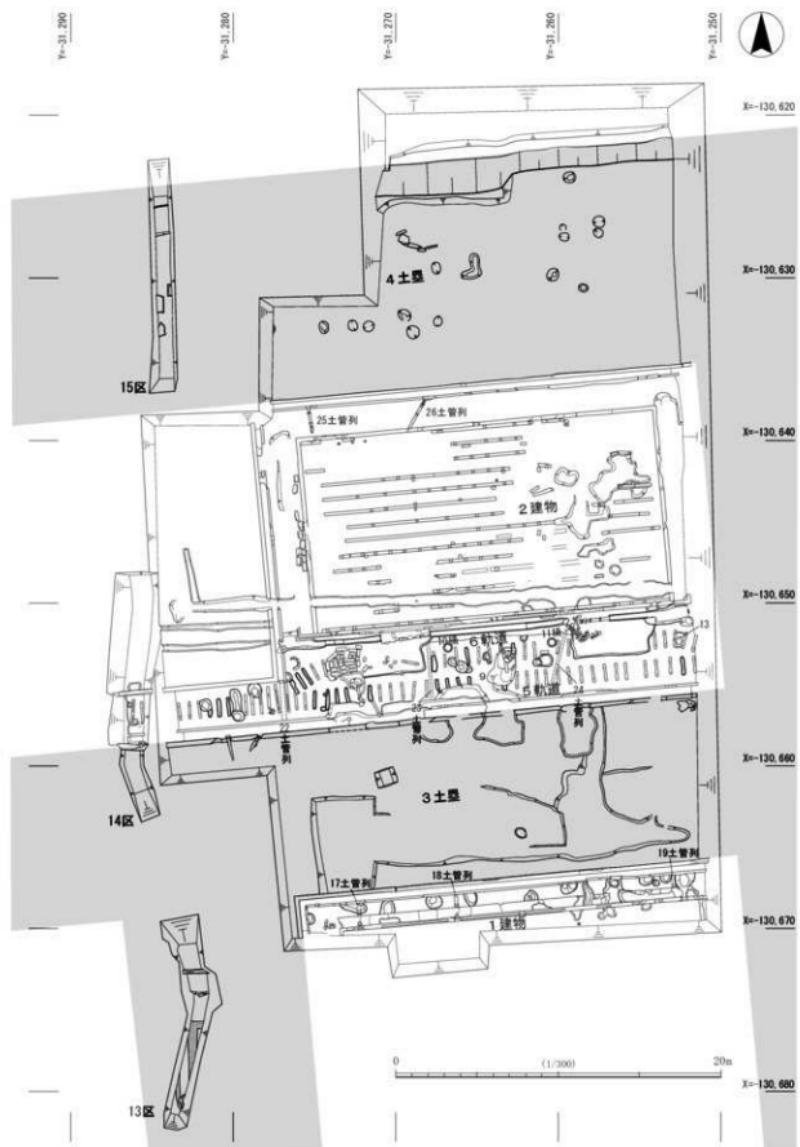


図116 12区 第2面

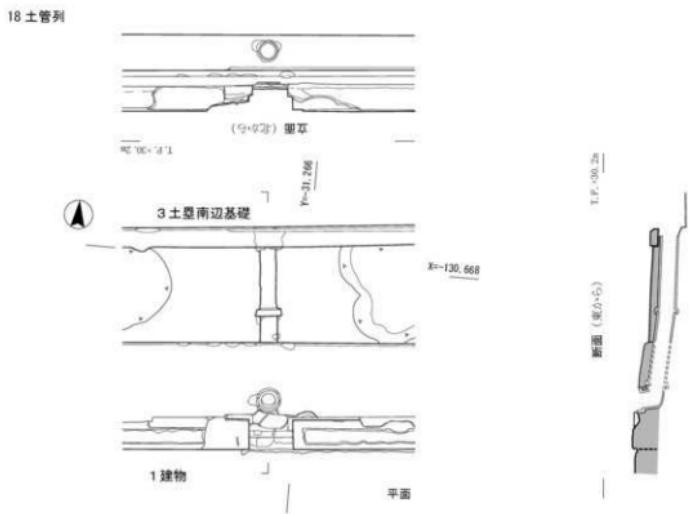


図 117 12 区 第 2 面 18・25 土管列

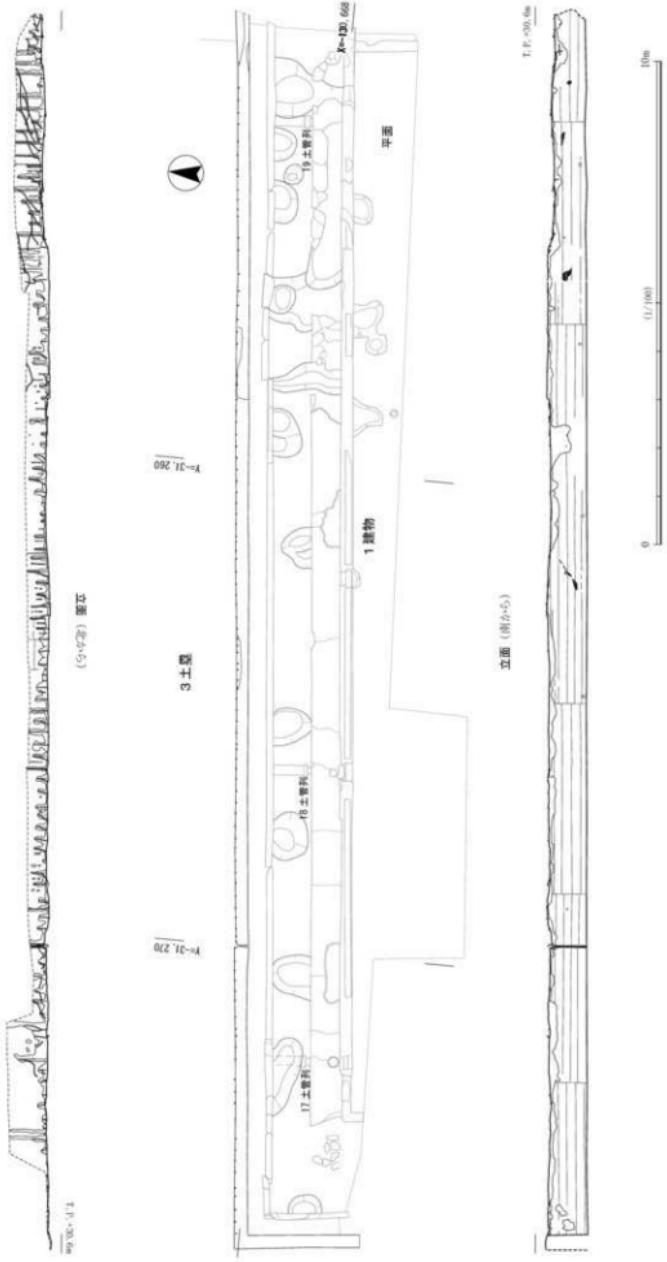


图 118 12 区 第 2 面 3 土壁南边

### 第3面（図119 写真図版69・263・264）古代～中世

禁野火薬庫造成に伴う盛土層やこれ以前の作土層、近世の作土層など（第II層）を除去した面である。面の高さは、T.P.+27.9～29.0 mで、南から北に向かって緩やかに下がる。12区南側で地山層が露出し、それ以外では第V層・第VI層が分布していた。第3面では、溝、土坑、ピットを検出した。

**28・29杭列（図120）** 12区北東部に位置する。両者とも北北東～南南西に並ぶ。杭自体の残りは悪く、28杭列の一部に木質が痕跡的に残る程度であった。個々の杭跡の平面は円形で、直径7～13 cm、深さは15～59 cmである。出土遺物なし。

**32溝** 12区北端に位置する。28・29杭列と同様に北北東～南南西を主軸方位とし、南端で33溝に合流する。幅2.1～3.5 m、深さ22 cm。出土遺物なし。

32溝も含め、以下49溝までの埋土はいずれも、第2層下部と同じ10YR6/4にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトである。

**33溝** 西西北～東南東を主軸方位とし、32溝とT字形に接する。幅1.0～1.4 m、33溝の東部では、北側が南側よりもさらに一段深くなっている、その部分で深さ18 cm。8世紀末の須恵器杯（図179-1005）や製塩土器細片などが出土した。

**38・40・42溝群** 12区中央部から東側にかけて分布する。38・40溝群の主軸方位は北東～南西、42溝群はそれらとほぼ直交し北西～南東を主軸方位とする。個々の溝は、幅0.2～0.7 m、深さは1～3 cmときわめて浅い。これらは、第3面よりも上層の耕作に伴う溝の痕跡であろう。いずれの溝からも出土遺物なし。

**39溝** 38溝群の東側に位置する。北北西～南南東を主軸方位とし、検出長2.2 m、幅0.3 m、深さは2 cmと浅い。主軸方位は異なるが、38・40・42溝群と同様、耕作に伴う溝の痕跡であろう。出土遺物なし。

**41溝** 40溝群の東約3 mに平行する。検出長4.9 m、幅1.0 m、深さ7 cm。出土遺物なし。

**44溝** 12区西部に位置する。直上にある旧作土層により攪乱され遺存状況は悪いが、主軸方位は北西～南東で、検出長4.8 m、幅約0.7～0.9 m、深さ9 cm。出土遺物なし。

**45溝** 12区中央部に位置する。44溝の延長線上に北西～南東に延びる。検出長約14.5 m、最大幅1.6 m、深さ18 cm。出土遺物なし。

**46溝** 12区南東部に位置する。主軸方位は西北西～東南東で、検出長1.7 m、幅0.3 cm、深さ10 cm。出土遺物なし。

**49溝** 12区南部に位置する。40溝群や41溝と同様に、主軸方位は北東～南西で、検出長約9 m、幅0.3～0.8 m、深さ10 cm。土器細片が出土した。

**37土坑** 12区中央部やや北側に位置する。平面は北西～南東に長い楕円形で、長径1.1 m、短径0.9 m、深さ18 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色細砂～粗砂混じりシルト。土器細片が出土した。

**48土坑** 12区南東部、49溝の東約1.3 mに位置する。平面は北東～南西に長い不整楕円形で、長径3.4 m、短径1.1～1.3 m、深さ20 cm。埋土は、10YR4/2 灰黃褐色細砂～粗砂混じりシルト。8世紀前半～中頃の土師器・須恵器（図179-1006・1007）などが出土した。

**ピット** 柱根や柱痕跡の認められるものはない。埋土はいずれも单層であった。配置からみても、建物などを構成するとは考えにくい。出土遺物は少なく、31ピットに陶器、36ピットに8世紀後半の須恵器がみられた程度である。

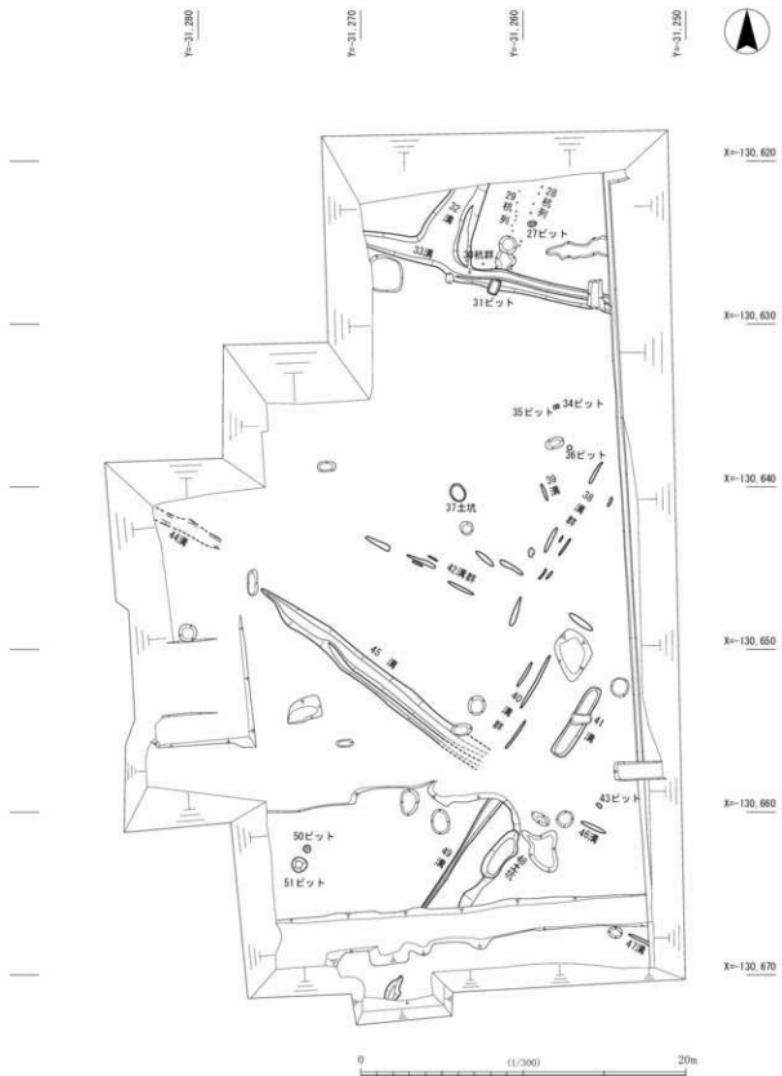


図119 12区 第3面

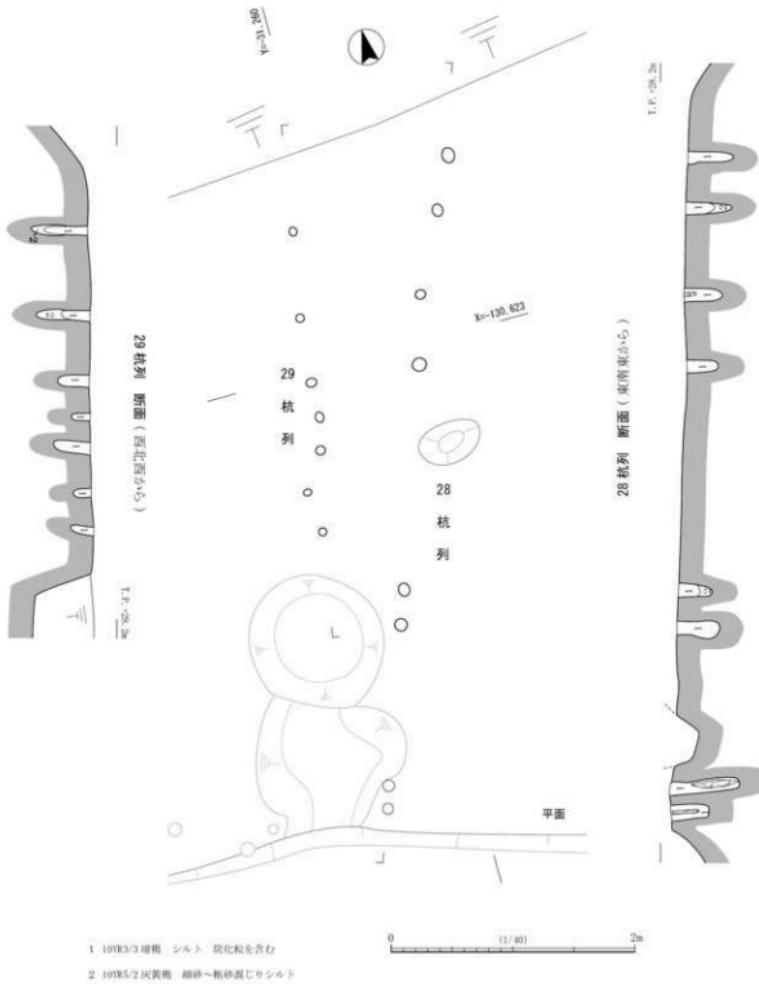


図120 12区 第3面28・29杭列

#### 第4面（図121 写真図版70・265・266）古代～中世

地山層（第VII層）上面である。面の高さは、T.P.+27.8～28.9mで、南から北に向かって緩やかに下がる。掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどを検出した。基本的に古代の遺構・遺物が多いが、12区中央部には中世の瓦器を含む土坑やピットが集中している。

**中世の遺構** 中世の遺物を含む遺構は、ピット、掘立柱建物、土坑、溝、落ち込みである。いずれも12区中央部の地山層上面にまとまって分布する。

**ピット群** 12区中央部の西北西・東南東約13m、北北東・南南西約9mのほぼ長方形の範囲に約160個のピットが集中する（図122）。それらの北辺で典型的なように、西北西・東南東方向に列をなす。個々のピットは、平面円形で、直径15～30cm、深さ10～20cm程度の比較的小規模である。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色ないし2.5Y5/3黄褐色細砂混じりシルトの単層のものが多く、柱根・柱痕跡ともになかった。

これら12区中央部のピットの出土遺物は、古代の土器も若干混じるが、瓦器や土師器といった中世土器（図180・1038～1044・1046～1048）が主体である。179・249ピットからは白磁碗（図180・1045・181・1049）が出土し、249ピットには凝灰岩製砥石（図181・1050）も含まれていた。

**掘立柱建物2**（図123） 中世のピット群の中に、7.5YR4/6褐色細砂～粗砂混じりシルトを埋土とする比較的大きめのピットが存在する。柱根や柱痕跡は確認できなかったが、それらの分布から掘立柱建物が復元できる。主軸方位はN60°W（北東辺はN64°W）で、桁行3間（北東4.9m、南西6.1m）・梁行2間（北3.7m、南4.5m）、面積22.6m<sup>2</sup>のややひしゃげた側柱建物である。建物の内部空間ではピットが疎になる。

全てのピットから中世土器（図180・1027～1031）が出土した。さらに、南東隅の226ピットから平瓦（図180・1032・1033）、南西隅の238ピットから石が出土した。

**261～268ピット** 上記ピット群の南側に分布する。北北東・南南西に3列に261～263ピット、264・265ピット、266～268ピットが並ぶ。心々距離は、北北東・南南西は1.6～1.7mと広く、それと直交方向の西北西・東南東は0.6～0.7mと狭い。直交方向で柱間が著しく異なることから、通常の掘立柱建物とは考えにくい。北北東が開いた匂い的な施設も想定できるが、その場合、中央部に位置する264ピットの存在が疑問である。この261～268ピットも、上記ピット群の北東辺や掘立柱建物2と同様の配列方位をなす。これらピットのうち、267ピットから瓦器細片などが出土した。

**85土坑**（図124 写真図版72・274～277） 12区中央部西側、ピット群の南西側に位置する。北西～南東に長い不整楕円形だが、北西部の立ち上がりは明確ではない。80溝よりも後の構築である。長径約6m、短径約3.5m、深さ約0.3m。埋土は図124のように3層に分かれれる。土坑の底はほぼ平坦で、北西部には数個のピットがみられるが、中央部から南東側にはピットは存在しない。

85土坑からは、12世紀後半～13世紀前半の白磁皿・碗（図181・1054～1057）、11世紀後半の土師器皿（図181・1059）、12世紀前半の灰釉陶器（図181・1058）、12世紀後半の瓦器椀（図181・1060・1061）などに加えて、8～9世紀の瓦（図181・1062～182・1068）や花崗岩を主体とする人頭大の石が27個出土した。

**81溝** ピット群や掘立柱建物2の北西側を画し、85土坑の北西端から北北東に延び、74落ち込みにつながる。検出長約7m、幅0.9cm、深さ11cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト。

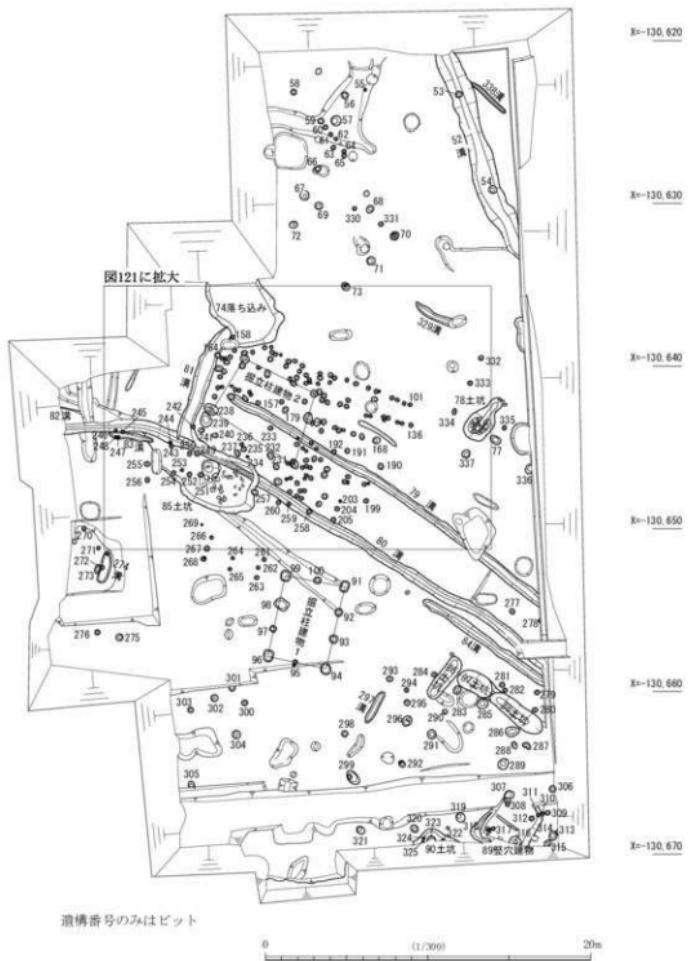


図121 12区 第4面



図122 12区 第4面中央部

12世紀末～13世紀初頭の土師器皿（図184-1089）や13世紀前半の瓦器椀（図184-1090）などが出土した。

**74 落ち込み** 12区北西部、ピット群の北西側に位置する。北部は調査区外に広がるが北北西～南南東に長い不整形と推定され、長径4.5m以上、短径約3.5m、深さ0.4m。埋土は、ほとんどが第3層の下部と同じ10YR3/1～3/2黒褐色粗砂混じりシルトで、底に2～8cmほどの厚みで5YR2/2黒褐色シルトに径1～2cmの焼土塊と微細な炭片が混じったものが溜まっている。

落ち込み内の下層には8世紀の土師器・須恵器（図184-1092～1094）もみられるが、上層から12世紀前半の白磁碗（図184-1091）が出土していることと重複関係では81溝よりも後から埋まっていることから、中世に埋没したものと考える。

**古代の遺構** 以下の掘立柱建物、竪穴建物、土坑、ピット、溝は古代の遺構である。

**掘立柱建物1**（図125 写真図版71-267～269）12区南部に位置する。主軸方位はN9°Eで、桁行3間（東5.4m、西5.1m）・梁行2間（北3.9m、南3.6m）、面積19.7m<sup>2</sup>の側柱建物である。東西側柱のピットは基本的に平面隅丸方形だが、梁行中央のピットはやや小規模な円形である。各ピットの埋土は図125に示すとおりで、西側柱の98ピットの検出面において拳大の石が1個検出できた以外には礎石や礎板は出土しなかった。また、内部に東柱なども見あたらなかった。

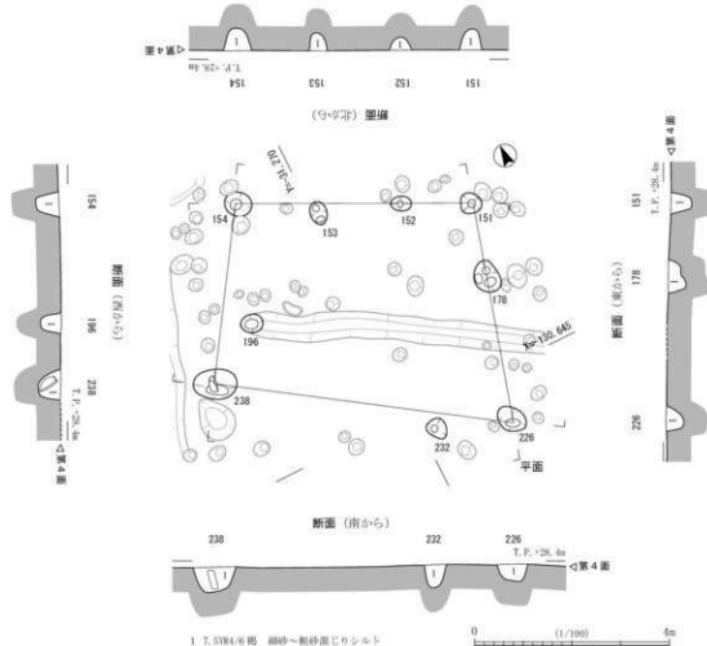
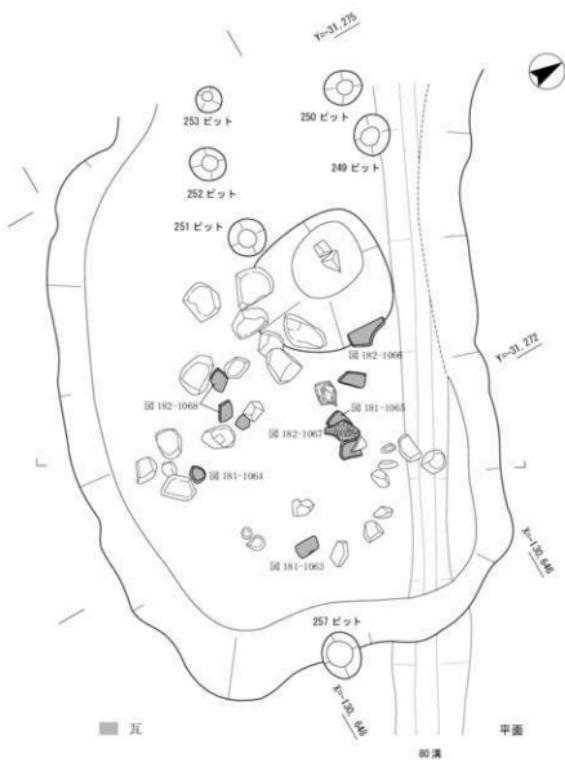
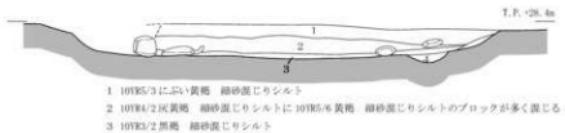


図123 12区 第4面掘立柱建物2



断面（南東から）



0 (1/40) 2m

図 124 12 区 第 4 面 85 土坑

92・94・95 ピットから時期不詳ながら古代の土器細片が出土した。

**89 竪穴建物** (図 126 写真図版 73・278・279) 12 区南東端に位置する。平面隅丸方形で、北東・南西 3.4 m、北西・南東 2.9 m 程度、深さ 0.5 m 以上の規模となる。面積は 9 m 程度で小型の竪穴建物である。炉やカマドといった火処は認められなかった。貼床は竪穴周辺の地山層と判別がつきにくかったが、サブトレーンチを設定して下層を確認したところ、厚さ 3~8 cm の貼床であることが判明した。貼床をはがすと、ピットを検出できた。すなわち、貼床上面で検出した 308・312・316 (掘りすぎたが)・317 ピットが柱痕跡、貼床をはがして検出した 339・340・341・342 ピットが主柱穴となる。主柱は垂直ではなくわずかに内転び傾向にある。貼床は竪穴中央部に比べて周辺では薄くなっている。その結果、壁際は浅い溝状にくぼんでいる。

竪穴建物の埋土からの出土遺物は、6 世紀後半の須恵器や 9~10 世紀頃の黒色土器 A 類も混じるが、主体は 8 世紀中頃の土師器 (図 179-1012~1020)・須恵器 (図 179-1021~1023) である。さらに、製塙土器 (図 179-1024・1025) や丸瓦 (図 179-1026) など出土した。

建物の柱穴であるピットからの出土遺物は少なく、316 ピットの製塙土器細片のみである。

**90 土坑** 12 区南辺、89 竪穴建物の西隣に位置する。遺構の大部分は調査区外に広がると考えられる。検出した範囲では、北端に丸みを帯びた角があり、北東辺と北西辺が直線的である。埋土は、上層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂・礫混じりシルト、下層が 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルトを主とする。8 世紀後半の土師器杯 (図 182-1073)・須恵器杯蓋 (図 182-1074・1075) などが出土した。

90 土坑の底面で検出された 4 個のピットのうち 323 ピットは、柱痕跡は認められないものの直径 44 cm、深さ 24 cm の規模で、柱穴としても位置的におかしくはない。

土坑の平面形状と 323 ピットの存在から、この 90 土坑も竪穴建物の一部である可能性が高い。

**78 土坑** (図 127 写真図版 72-270~273) 12 区東部に位置する。主軸方位は北東・南西で、平面形は、楕円の一端が北東に延びたような、しいて言えばイチジクのような形で、長軸に並行する南東辺と北西辺は直線的になっている。長径 3.1 m、短径 1.5 m。深さは約 30 cm だが、床面はさらに中軸線に沿って幅 40 cm、深さ 12 cm ほど溝状にくぼんでいる。

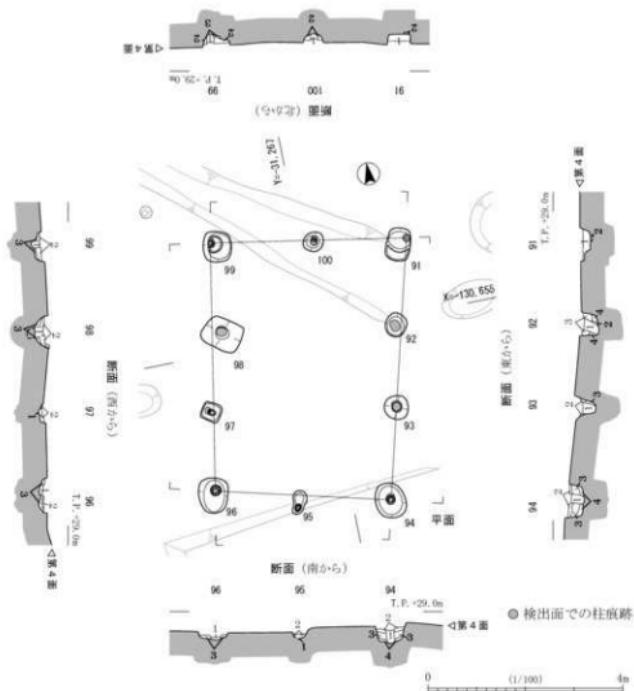
楕円形部分の中心には、平瓦と花崗岩が外径約 1.0 m の環状に並べられ、その中心にも灰色の石と平瓦と焼土塊が存在する。焼土塊は、他にも遺構の北東端部と環状の南西部、すなわち遺構の長軸線上に分布している。遺構の壁面・底面とも顕著な被熱痕跡や火熱による固化は認められない。

埋土は図 126 のように 5 層に分かれるが、いずれも類似した層相である。それほど顕著ではないものの、埋土全体にまんべんなく径 5~20 mm 程度の炭化した粒子が混じっている。

8 世紀初頭の瓦 (図 183-1076~184-1084)、鉄滓 (図 184-1085)、溶壁などが出土した。埋土にも、被熱遺物、微細遺物、土器片、炭化材、骨片、鉱滓などが含まれていると予想されたので水洗したが、それらは見当たらず瓦片のみ出土した。

この遺構の壁面・底面には顕著な被熱痕跡は見当たらぬ。しかし、遺構底の溝状のくぼみ、円形に並べられた瓦と花崗岩の造作、焼土塊の存在といった諸点から、火化 (茶毬) 施設、火葬墓、湯屋 (湯沸し) 遺構、土器焼成坑、炉、窯などといった火熱を用いた遺構のひとつと考えられる。

**77・332~335 ピット** 332~335 ピットは、78 土坑の北西側に北北東・南南西に並ぶ。心々距離は、332 ピットと 333 ピットは 3.3 m、333 ピットと 334 ピットは 4.0 m。78 土坑とは方位を若干異にし、他にピットなどが検出できなかったが、78 土坑の東側にある 77・335 ピットとともに、78 土坑の覆



#### 91 ピット

- 1 10Y4/2 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/6 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルトのブロックが混じる。
- 3 10Y5/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 92 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/4 棕褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/4 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 4 2.515/4 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 93 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/4 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/2 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 94 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/4 塙灰褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/4 棕褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 4 10Y5/4/6 棕褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 95 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/4 棕褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 96 ピット

- 1 10Y5/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/4 棕褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/6 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 97 ピット

- 1 2.515/2 塙灰褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/6 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

#### 98 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/6 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/6 明黄褐色 細砂混じりシルト

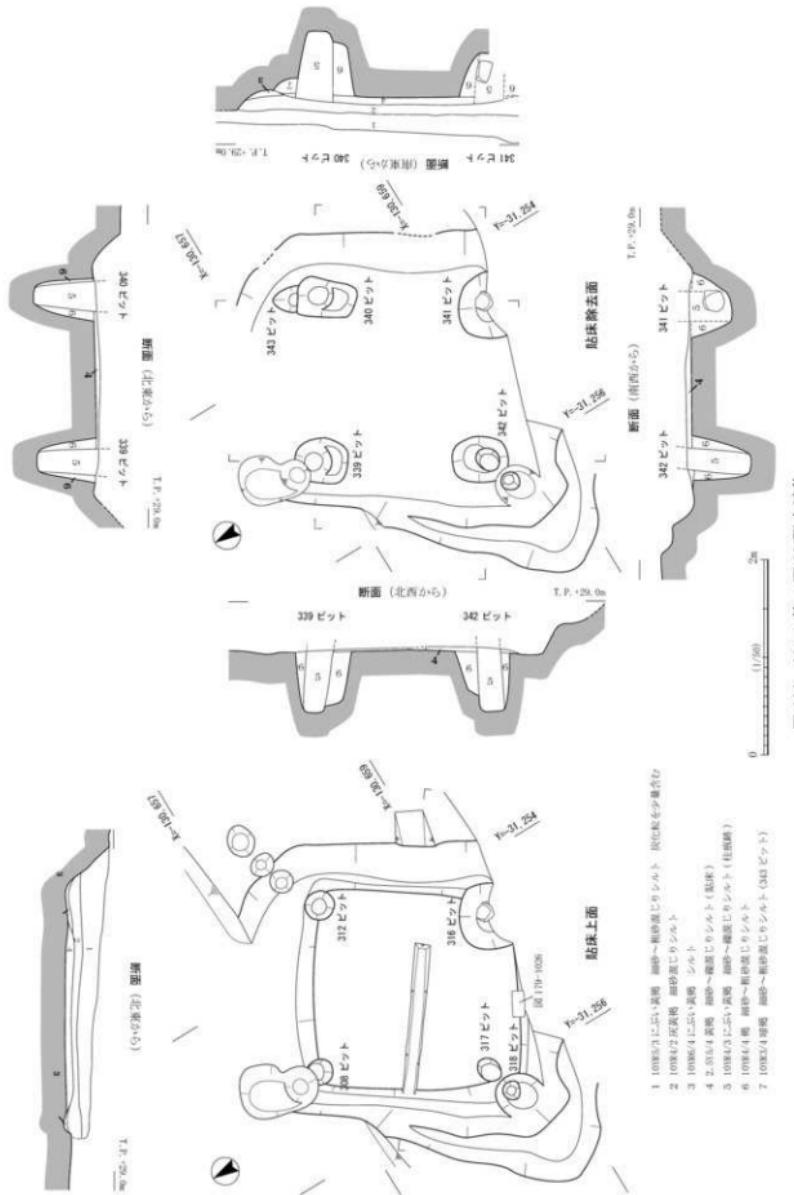
#### 99 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.515/4 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10Y5/6 明黄褐色 細砂混じりシルト

#### 100 ピット

- 1 10Y4/3 にぶい黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10Y5/6 黄褐色 細砂～粗砂混じりシルト

図 125 12 区 第 4 面掘立柱建物 1



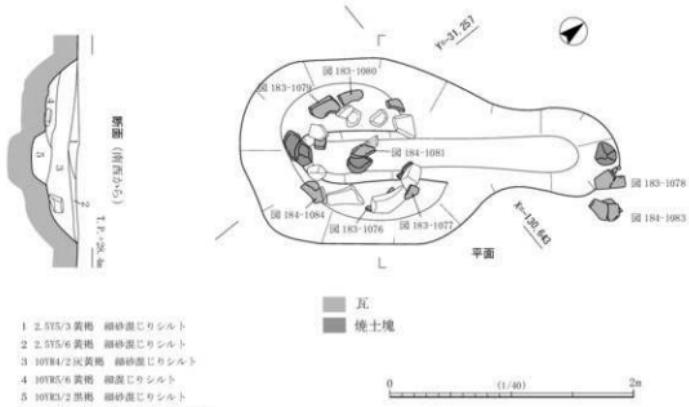


図127 12区第4面78土坑

屋的な遺構も想定できる。

77 ピットの埋土は、上層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト、下層が 5YR4/6 赤褐色細砂混じりシルト。332～335 ピットの埋土は、いずれも第3層下部と同じ 10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルト。

77 ピットからのみ古代の遺物細片が出土した。

**その他のピット** 古代と考えられるピットのうち掘立柱建物 1 を構成する以外には、12 区南東部の 285 ピットからスギ材の柱根が出土し、北部の 67 ピットで柱痕跡が認められた。285 ピット周辺の 12 区南東部では、土坑や溝とともにピットが分布している。67 ピット周辺の 12 区北部では、58～62 ピットや 68・331・70 ピットが北北西・南南東に、62・63・66・67・72 ピットや 70・71・73 ピットが北東・南西に並んでいる。埋土が単層のものが多く柱穴とは確認できないが、これらが柵列などを作成する可能性はある。

57 ピットから 8 世紀末～9 世紀初頭の須恵器杯（図 180-1034・1035）、72 ピットから 8 世紀末の須恵器杯（図 180-1036）や鉄釘（図 180-1037）、277 ピットから 8 世紀の土師器甕（図 181-1051）、279 ピットから 8 世紀の平瓦（図 181-1052）、289 ピットから 8 世紀後半の須恵器甕（図 181-1053）などが出土した。

**86 土坑** 12 区南東部に位置する。平面は北東・南西に長い長楕円形で、長径 3.0 m、短径 0.9 m、深さ 0.3 m。埋土は、上層が 10YR3/3 暗褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層がそれと地山層である 2.5Y5/3 黄褐色シルトがブロック状に混じり合っている。8 世紀中頃の須恵器杯（図 182-1069）などが出土した。

**87 土坑** 86 土坑の東に位置し、それとほぼ直交するよう北西・南東に延びる。平面楕円形で、長径 2.3 m、短径 1.2 m、深さ 0.6 m。埋土は、上層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層が 10YR5/6 黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる、下層が 10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルトに 10YR4/6 褐色細砂混じりシルトのブロックや炭化粒が混じる。8 世紀の須恵器などが出土した。

**88 土坑** 87 土坑の南東側に連なる。87 土坑との間は馬の背状に高まっており、2つの土坑が直列に並んだようにもみえる。長径 3.8 m、短径 1.2 m、深さ 0.6 m。埋土は、上層が 10YR4/4 褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層が 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルトに炭化物が混じったもの、下層が地山層である 2.5Y5/3 黄褐色シルトのブロックに 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト少量混じっている。8 世紀中頃～後半の須恵器（図 182 - 1070 ~ 1072）などが出土した。

**52 溝** 12 区北東部に位置する。北北西 - 南南東を主軸方位とし、検出長約 14 m、幅 1.1 ~ 1.5 m、深さ 0.6 m。埋土は、上層が 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト、中層西側が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層東側が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトのブロックが混じったもの、下層が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂である。出土遺物なし。

**79・80・82 溝** 12 区中央部に位置する。これらの溝は道路側溝と考えられる。

79 溝の主軸方位は N 55° W。検出長約 23 m、幅 0.4 ~ 0.6 m、深さ 14 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。79 溝は上述のピット群のほぼ中央に延びているが、重複関係は全てピットの方が新しい。出土遺物なし。

80 溝の主軸方位は、79 溝と対向部分ではそれとほぼ並行する N 56° W だが、82 溝とした 12 区西部では西へと向きが変わる。80・82 溝の検出長約 33 m、幅 0.5 ~ 0.7 m、深さ 25 cm。埋土は、上層が 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト、下層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。80 溝の出土遺物には中世の土器も少量混入するが、主体は 8 世紀末～9 世紀初頭の須恵器や瓦（図 184 - 1086 ~ 1088）である。82 溝からは古代と考えられる土器細片のみ出土した。

79 溝と 80 溝は、主軸方位 N 55 ~ 56° W、心々距離 2.8 ~ 3.8 m、溝の内側間 2.1 ~ 3.3 m ではほぼ並行しており、その間は道で、両溝はその側溝であった可能性が高い。

なお、この 12 区の南側にあたる 9 区第 6 面でも道路側溝と考えられる 197 溝と 199 溝を検出した。しかし、12 区の 79・80 溝の主軸方位が N 55 ~ 56° W であるのに対し 9 区検出の溝は N 24 ~ 25° E で、その交差する角度は約 80° となり直交とするにはややぶれがある。また、溝間の内法も 9 区では約 5.1 m、12 区では 2.1 ~ 3.3 m と、規模の違いもある。

**83 溝** 12 区西部、82 溝の南に接する。主軸方位は西北西 - 東南東で、長さ 2.7 m、幅 0.5 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**84 溝** 12 区南東部、80 溝の南に並行する。西北西 - 東南東を主軸方位とし、検出長約 9 m、幅 0.6 m、深さ 35 cm。

84 溝も含め、以下の 329 溝まではいずれも、第 3 層下部と同じ 10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルトを埋土とする。84 溝の古代の土器細片以外には、遺物は出土していない。

**274 溝** 12 区西部に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、長さ 2.0 m、幅 0.6 m、深さ 7 cm。

**297 溝** 12 区南東部に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、長さ 2.2 m、幅 0.5 m、深さ 16 cm。

**329 溝** 12 区南東部に位置する。北西 - 南東を主軸方位とし、検出長 2.5 m、幅 0.5 m、深さ 6 cm。

**338 溝** 12 区北東部に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、検出長 2.7 m、幅 0.3 m、深さ 7 cm。52 溝につながり、埋土も 52 溝の上層と同じ 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト。

## 第12節 13区・14区・15区（人孔・管路）の遺構

13区・14区・15区は、調査地中央部、12区の西側、5区・8区の東側に位置する。南北方向に延びる管路とそれに接続する人孔の設置に伴う調査である。

13区・14区・15区の平面は、12区第1面（図114）・第2面（図116）の図に掲げた。

### 13区（写真図版74-281）

9区北西部にある56土壌基礎内側の盛土部分にある。13区北側は搅乱を受けている。T.P.+31.1～31.8mの現地表面から、南側は掘削限界のT.P.+29.3mまで掘り下げた。最終面での調査面積は9m<sup>2</sup>。その面で耕作に伴うと考えられる南北方向の土変わりがみられたのみで、顕著な遺構は存在しなかった。

### 14区（写真図版74-282）

およそT.P.+30.8mの現地表面から調査を開始し、12区中央部において、およそT.P.+29.6mで東に隣接する12区で検出した軽便軌道や土壌基礎の延長などが検出できた。最終面での調査面積は15m<sup>2</sup>。

軽便軌道に伴う枕木はコンクリート製で、単線から複線への分岐部分に相当するため、12区にも存在した長い枕木（図144-234・235）が出土した。さらに、土壌の内側に相当する部分において、14区北側ではT.P.+29.1m、南側ではT.P.+29.6mまで掘り下げたが、遺構・遺物とともに出土しなかった。

### 15区（写真図版74-283）

その大分部が5区や12区北端で検出した土壌の内側に該当する。およそT.P.+30.8mの現地表面から、南部でT.P.+30.0m、北部でT.P.+29.3mまで掘り下げた。最終面での調査面積は10m<sup>2</sup>。

北部において、12区4土壌の北辺斜面の延長部分にコンクリート基礎が存在せず土壌の表層がおよそ45度の傾斜で北に下がる状況が確認できた。他に顕著な遺構は存在しなかった。

## 第5章 遺物の調査成果

### 第1節 近代以降遺物 (図128~145、写真図版75~89・103)

当調査の第0層、昭和14年爆発関連層上面、第1層(昭和14年爆発関連層)、昭和14年爆発関連層下面から出土した、主に近代以降と判断した遺物について種類毎に概要を説明したい。詳細については、巻末の掲載遺物観察表を参照願う。

**磁器**(図128) 磁器碗・皿(1~3)等が出土した。瀬戸焼の印判染付と思われ、同じような文様のものが多い。3は輪花口縁、蛇の目四形高台で、見込みの文様は松竹梅かと思うもので、口縁内面にも鶴の文様がある。内底面にトチン跡がある。1も内底面にトチン跡がある。

**ガラス製品**(図128) 4・5は、茶色の薬瓶の栓と瓶である。同一個体と判断できなかったので、別々に掲載した。栓のつまみ以外と瓶の口縁内面はすりガラス状で、外底部は気泡のざらつきがある。

**分銅**(図128、写真図版81) 6・7は、10区(A2棟)第2面62土坑から出土した。6の上面に「大阪?Y 広 100 g」、7の上面に「尼阪大広 100 g」と刻印がある。

**銭貨**(図128、写真図版81) 8は寛永通寶で、11区第3面166ピットから出土した。裏面に「文」の文字がある文錢で寛文8年(1668年)~天和3年(1683年)に鋳造されたものである。近世の遺物だが、ここに掲載した。

**紙製品**(写真図版75) すべて10区(A2棟)第2面1014ピットから出土した。写真図版75・1095・1096は、「株式会社神戸米穀株式取引所仲買人売買元帳」と書かれたB4判の書類である。1097・1098は、ゼネラルマスク、エーワンマスクの外箱である。1099は外箱のようなボール紙で、墨で何かが書かれている。大正時代後半から昭和時代初頭のものと考えられる。

**碍子**(図128) 9~12は、磁器の碍子で、9はシーリングローゼット(通称 菊)で、まん中の孔からコードを下げ、キーソケットなどに電球を取り付けて照明とした。10は二重碍子、11は茶台碍子で、電柱や建物に取り付け、電線の引き留めに使われる。12は玉碍子で、支線の絶縁に使用される。

**金属製品**(図128) 13~18は生活用品に近いものとしてここに掲載したが、図137・138の建具類のところで扱うものであった。13は口輪と抑え金具、14は戸車、15は樋受金具の豊と控金具、16は樋受金具の軒と金具で針金がくっついており、全体にニス?が塗布され、煤も付着している。掲載しなかったが樋自体の一部も出土している。17は排水目皿で、18はブラインドフランジ(閉止フランジ)で、パイプの閉止に使われる。

**陶器便槽鉢**(図128・129、写真図版76) 19~22は、8区第1面10職工廻の便槽に使われていた陶器の鉢である。口径は57cm前後、器高は37cm前後である。外面体部に接合時の段と思われる2条の凸線があり、外底部に砂粒が付着している。19~21は、外底部に墨書きしきものが書かれている。21の口縁外側直下には、記号かと思われる「○」がある。23~25は、11区第2面3~5便槽に使われていた陶器の鉢で、口径58~60cm、器高31~33cmである。24・25の外面体部に接合時の段と思われる2条の凸線があり、25の外底部に墨書きしきものが書かれている。

**陶器土管**(図129・130、写真図版76) 各調査区に、排水用施設として土管列が検出されている。主な土管列から1~2本を掲載した。26は、5区第1面9土管溝から出土した。この土管暗渠は明治42

年から昭和 11 年の間に構築されたと考えられる。口径 61.8 cm、器高 68.6 cm で、外面口縁直下に「アイチ 並管 △ T トコナメ」の刻印があり、常滑焼である。31 は、9 区第 2 面 351 土管列から出土し、口径 80 cm、器高 71 cm で、当調査で出土した土管のなかで一番大きなものである。32・34 は、10 区（A 1 棟）第 1 面 1 建物、10 区（A 2 棟）第 1 面 42 土管溝から出土した L 字形土管である。

瓦（図 131～133、写真図版 77）各調査区から多量の瓦片が出土した。残りの良いもの、種類の違うもの、刻印されているものを掲載した。46 は軒瓦、47 は組丸瓦、48 は平瓦、49 は棟瓦、50 は引掛付棟瓦、51 は袖瓦（左）、52 は伏間瓦である。53～63 は刻印瓦である。53 は軒瓦で、垂れの部分に「村瓦米」と刻印がされており、54 は棟瓦で、頭に「三州」と刻印がされている。三州は三州瓦を指し、愛知県で作られたものと思われる。55 は、「淡路阿萬 ○○組（？）合 一 谷」と刻印がされている。淡路で作られた瓦と思われる。56 は平瓦で、凹面に「一」と刻印がされている。57～59 は引掛け付平瓦で、凹面にそれぞれ「K 杏」、「S」、「ト」、「隆」と刻印がされている。61～63 は別個体であるが同じ刻印と思われ、繋げると「（上段）○○○○○ MARK （下段に）森分式瓦○○製」となる。平成 15・16 年度調査の報告書『禁野本町遺跡』（以下「第 140 集」と略す）で同様なものが出土し、上段は「TRADE MARK」の一部として紹介されている。

煉瓦（図 134・135、写真図版 78）各調査区から多量の煉瓦が出土した。計測ならびに観察した煉瓦は 419 点である（表 2）。そのうち会社印またはそれと思われる刻印がある煉瓦は 325 点で、大阪窯業株式会社製（67・70・74～76）が 179 点（55.1%）を占め、岸和田煉瓦株式会社製（64～66・73）が 137 点（42.2%）で、2 つの会社製品がほとんどを占める。他には日本煉瓦株式会社製（71・72）が 4 点（1.2%）、堺煉瓦株式会社製（69）が 1 点（0.3%）、会社名は不明だが、ダビデの星型が刻印されたものの（68）が 4 点（1.2%）出土している。他に不明刻印があるもの（77・78）が 21 点あり、釘印？、「ホ」、四本線、「一・二？」、「ウ？」、「ト？」、「ア？」である。大阪窯業株式会社の会社印の中に「8、10？」、「11、12、14？」、「16？」、「18？」、「20？」、「21？」、「23、25、44？」、「60？」という数字が刻印されているものがある。カタカナの「ホ」か「キ」に見えるものも 1 点ある。会社印の横に刻印されているものに、「釘印、ホ、ニ？」、「ト？」、「ヘ、ル、ヌ、ヲ？」、「ワ、一？」がある。岸和田煉瓦株式会社の会社印とともに刻印されているものは、「岸・泉、釘印、イ、ホ、ウ？」、「ト？」がある。日本煉瓦株式会社製（71）の会社印の中には「六」がある。刻印があるもの 346 点中、両面にあるものは 219 点（63.3%）、片面と思われるもの 127 点（36.7%）である。

煉瓦の法量は、大正 13 年（1924 年）に J E S 規格（日本標準規格）（長さ 210 mm、幅 100 mm、厚さ 60 mm）が制定されたが、完全には統一されなかったようである。煉瓦 1 個ずつの法量が煉瓦の規格のどの形なのかまでは調べられなかったが、大阪窯業株式会社製は、長さ 228～230 mm、幅 108～112 mm、厚さ 60 mm が多く、岸和田煉瓦株式会社製は、長さにばらつきがあり、226～228 mm がやや多く、幅も 106～111 mm とばらつき、厚さは 59～60 mm が多い。刻印が無く、また不明会社印の煉瓦は、長さ 225～228 mm、幅 105～108 mm、厚さはばらつきがあるが 58～61 mm がやや多い。

成形には手抜き成形と機械抜き成形があり、419 点中 352 点（84.0%）が手抜き成形で、機械抜き成形は 65 点（15.5%）である。大阪窯業株式会社製 179 点のうち機械抜き成形は 1 点（0.6%）と少なく、岸和田煉瓦株式会社製 137 点中 38 点（27.7%）が機械抜き成形である。日本煉瓦株式会社製、堺煉瓦株式会社製、ダビデの星型印の煉瓦は手抜き成形である。制作会社不明の 94 点のうち 25 点（26.6%）が機械抜き成形である。手抜き成形にはあるとされる、成形（型に粘土を詰める）時上面に

ある線状凹み（当センター 市村慎太郎氏の命名による。從来四線状压痕などと呼称されていたものである）を有するものは 221 点（52.7%）、無いものは 166 点（39.6%）である。機械抜き成形だと思う煉瓦 65 点中に、線状凹み・凹み？があるものは 4 点あるが、機械抜き成形かどうか不確かのものばかりである。線状凹みが無いものは 53 点で、不明は 8 点である。

金属製品（鍵・手違い・ボルト・ワッシャー・工具）（図 136、写真図版 79・80） 79～86 は、鉄製鍵である。47 点ほど出土した鍵は、働き長さが 6.5 cm～15.3 cm まであるが、多いのは 10 cm 台～12 cm 台である。そのなかで 10.5 cm、11.5 cm、12.0 cm がやや多い。ツメの長さ（通常片方が若干長い）は 1.6～5.5 cm まであるが、3～4 cm 台が多い。86 は 36.0 cm を測る特別大きいものである。87～91 は、鉄製手違いである。17 点ほど出土した手違いは、働き長さが 10.1 cm～14.5 cm まであるが、11 cm 台が多く、そのなかで 11.0 cm がやや多い。ツメの長さ（通常片方が若干長い）は 2.3～6.0 cm まであるが、3 cm 台が多い。92～95 は、ワッシャー付ボルトである。ボルトは 30 点ほど出土している。95 は大型で、1.1 cm の厚みのある台形ワッシャー？を付けており、さびついでではなく動く。96 はボルトと思われるが、先端が尖り、ナットの下部に径 0.8 cm の孔が開いている。97・98 は丸と方形のワッシャーである。ワッシャーのみの出土は少ない（丸が 2 点、角（木材用）が 5 点）。99 は盤、100 はやっこ、101 はとび口である。

金属製品（建具類）（図 137・138、写真図版 79・80・82・86） 102～112 は、木ネジまたは木ネジと思われるものである。204 点出土している（表 3 参照）。主な長さは、J E S 規格と一致するものが 25・30・35・38・40・45（銅）・45・50（銅）・50・60・80 mm である（銅と書いていないものは全て鉄）。一番多く出土したのは、50（鉄） mm である。102・103・106～108・112 は頭部にすり切りがない。104 は真鍮で、109～111 も真鍮と思われる。106・107 は、丸のワッシャー付である。112 はサビがネジ切りのような凹凸を示し、木ネジだとすると長さ 151 mm で一番大きい。113～125 は釘である（表 4 参照）。1555 点が完形に近い形で出土している。J I S 規格（日本工業規格）と一致した、釘の主な長さは、25・38・45・50・65・75・90・100・115・125・150 mm である。50 mm・65 mm が多い。1100 は、12 区第 1・2 面 2 建物から出土した多量の木ネジ・釘群である。128 は止め具で、127・129・130・131・136・142 は不明品である。136 は二股に分かれた先端に同形の空豆状のものが取り付けられているが、取り付け方は表裏対応である。132～135・137～141 は、補助金具と思われるものである。135 は長方形の枠で、長側面に孔が 7 個あけられている。142 は、薄い金属の板の周囲を薄い金属で包まれた木枠が回っている。1111 は、10 区第 1 面 2 建物から出土した幅 6.5 cm の引戸下枠である。

木製品（建具類）（図 137、写真図版 103） 126 は、11 区第 3 面 2 枚から出土した建築部材である。スギ材で、6.3～6.6 × 3.2 cm のホゾ 2 個と径 11.0 × 2.0 cm のホゾ孔 1 個を持つ。

コンクリート製品（図 138、写真図版 81・82） 143 は、11 区第 1 層から出土した敷居と思われるものである。コンクリートの中には鉄筋が 2 本入っている。上面には 2 本の筋があるが、磨り減ったような痕跡はない。下面是三角に凹み、両側面に三角形状の切込みが 6 箇所残存している。1104 は、12 区第 1 面 2 建物から出土した床下換気口である。1105 は、11 区第 2 層から出土したコンクリート片である。流し込んだ時の斜格子状の網目が残る。1106～1110 は、コンクリートに平瓦を埋め込んだ堅瓦壁である。

スレート製品（写真図版 81） 1101 は、11 区第 3 面 2 枚から出土した波板である。1102・1103 は

瓦で、1102は袖が付いている。

**砲弾**（図139、写真図版83） 144～152は砲弾で、147は九四式七種榴弾、148は九一式九種尖銳弾、149・150は十四年式鋼性十種銃榴弾かと思われるものである。砲弾の破片は、底部片が60点ほど、先端破片が110点ほど出土している。弾底部径は、3.3cm～15.3cmまであるが、10cm台と6～7cm台が多い。10種、7種の砲弾に対応すると思われる。弾底部から弾帯までの距離は、2.0cm～7.9cmまであるが、3.3cmと3.5cmが多い。先端部のネジ切り幅は、1.1cm～2.5cmまであるが、1.9cmと2.0cmが多い。

153～157は、弾帯である。弾帯幅は、0.8cm～2.4cmまであるが、1.0cmと2.2cm・2.3cmが多い。前者は裏面を細かく刻むものが多く、後者は表面に2条の沈線、裏面に連続しない1条の沈線を持つものが多い。155は、表裏とも何も施さないものである。

**薬莢**（図140、写真図版84） 158～174は、薬莢である。底径のわかるものは90点ほど出土している。10区（A2棟）から多く出土し、第2面62土坑から一括で出土している。底径は5.3cm～14.0cmまであり、8.0cm・8.1cmが多い。九二式歩兵砲の薬莢と思われる。158・159は、底径1.2cmの小薬莢である。158～166・170・171・173・174は爆管が入ったままで、爆管の中心に円形の凹みあるものは（158～166・170・171・173・174）は使用済みの印とのことである（当センター駒井正明氏教示）。薬莢底部と爆管底部には刻印がされており、組合せは表5を参照願う。表5は、同一薬莢の薬莢底部刻印と爆管刻印の組合せを示している。薬莢底部の刻印は大正3年、昭和8～11・13・14年とあるが、昭和14年が58点と多く、爆管の刻印は昭和10年と13年があり、13年が29点と多い。刻印されていないものも5点ある。刻印が何を表すか今のところわかっているのは、「F（材質：Fは真鍮）、昭（年号一昭和）、十四（年）、2（月）、~~九~~（大阪陸軍造兵廠のマーク）、ヤ（不明）、阪（大阪）」で製造所と製造年月日と材質を主にあらわしている。162・165は、刻印とは別に青色で文字と思われるものが書かれている。薬莢の中に薬包が残存しているものもある。165は緑色の絹のような布で、166は麻のような布である。

**薬包**（写真図版85） 1112～1120は薬包の一部で、いずれも布製品である。1112～1119は、第1層から出土した薬莢の中に残存していたものである。1114に書かれている「九二式歩砲（乙）甲」の上には、大阪砲兵工廠のマークや「昭・十三・11」などが、同右側には「4」などの数字が見られた。これらから、出土例の多くが昭和13（1938）年11～12月に作られたものであることがわかる。また、薬莢内の薬包を上から順に摘み上げたところ、4点の薬包片が確認でき、下の2点1118・1119には「3」「4」の数字が確認できた。このことから、「九二式歩砲（乙）丁」の右側の数字は、薬包を薬莢内にためる際の順序を記していると考えられる。また、「九二式歩砲（乙）丁」の「（乙）」は陸軍歩兵学校が昭和13年に発行した『九二式歩兵砲取扱上ノ参考』によれば、九二式歩兵砲の薬莢の種類を記していることがわかった。また、同書からは「丁」などは薬包をつめる順番であることがわかり、「丁」と数字「3」も同書と一致する。

**砲弾関連品**（図140・141、写真図版85・86） 176・177・179は、啄螺である。啄螺は、信管を載せるものである。178は、八八式瞬発信管かと思うものである。中には白いものや炭化したもののが詰まっていて、針金が周囲を回っている。180は、（乙種）信管接続筒である。180には「C O c？」の刻印がある。182～184は、伝火薬筒室である。伝火薬筒室は炸薬と信管の中にあって、爆発を媒介する伝火薬を詰める筒である。182の上端には「D」の刻印がある。189は榴散弾の弾で、型で作

られた痕跡が残っている。191は、口径50mmの演習弾かと思うものである。演習弾は、訓練用に用いられる射撃性能を有するものである。192は、榴散弾内部の弾子と炸薬を隔てるものである。3点出土している。193～195は、爆管である。爆管は、薬莢内の発射薬に点火する装置である。193は中が詰まっている、底面に「六式」の刻印がある。194は上面に布らしきものが残存しており、底面に「民國廿四年 德式十二号 39 種」の刻印がある（同じようなものが平成15・16年度調査でも出土している）。195も上面に布が残存し、布を覆うように銅が覆っている。底面に「16」の刻印がある。198・199は、ベークライト製の弾頭螺塞である。弾頭螺塞は填薬後の砲弾に栓をする蓋である。175・181・185～188・190・196・197・200～202は、不明品である。181は、伝火薬筒室に啄螺がついているような形である。185は中に針金が入っており、突出した部分は十字に別の板状のもので覆われている。186は、上部に炭化物が付着している。187は、中が詰まっている。188は下部のやや太い部分に上方に1箇所、下方に2箇所孔があいている。190は、底部突出部に十字状（中央に孔）の覆いがある。196は側面に切込みが2箇所あり、底面に鉄線らしきものが埋め込まれている。197は、未貫通の小孔が2個ある。200は、底面にネジ回しの凹みがある。201は、下方が非鉄で上方が鉄で作られている。底面にねじ回しの凹みがあり、側面にネジ？が埋め込まれている。202は側面にネジが1本埋め込まれていて、底面に未貫通孔が2個ある。

木製品（砲弾関連）（図141・142、写真図版103）203～208は砲弾を保管するに使われたと思われるものであるが名称が不明なので、托板と仮に呼んでおく〔陸軍技術本部「積載用爆薬箱九四式37耗砲外1点駆載用弾薬箱仮制定の件（大日記甲輯昭和12年）」アジア歴史資料センター〕の中に托板という文字が出てくる。すべてスギ材である。203～205は高さ約7cm、厚み約3～5cmの板を幅11cmの半円に1～2個切りぬいている。突出部には釘を1本ずつ打ち込んでいる。205は、両側面にも釘が残存している。これらを箱の中に数本並べて、砲弾または薬莢を横にして保管していたのではないかと推測する。206～208は長さ約50cm、幅約5cm（端は3.5cm）、厚み約3cmの板を5本並べ、その上に直角に幅約5cm（端は3.5cm）、厚み約1.5cmの板をはめ込み、下に長さ約50cm、幅約38cm、厚み約2cmの板を重ね、さらに下に長さ約38cm、幅10cm、厚み約1.5cmの板を重ねている（今は1枚だが、もう1枚片側にあったと思われる）。上面から見ると、径約8cmの穴が12個開いている。ここに砲弾または薬莢を立てて保管していたのではと推測する。穴の深さは3cmほどなので、どちらかと言えば薬莢の方の保管のほうが安定性はある。

犬釘（図143、写真図版80）209～226は、犬釘である。犬釘は、鉄道のレールに枕木を締結する専用の釘である。軽便鉄道が検出された調査区で出土しているが、12区から多く出土している。完形に近い犬釘は75点（表6参照）出土し、長さは62mm～100mmがあり、70mmが22点とやや多い（現在の9Kレール用の長さは80mm、10～15Kレール用は100mmである）。頭部の形で犬形と亀甲形があり、209・213～216が犬形で、210～212・217～226が亀甲形である。アメリカから鉄道部品の輸入が始まった明治30年代に、当時アメリカで広く使用されていた亀甲形犬釘が導入され、犬形犬釘にとって代わったらしい（第140集に記載）。209・211・217・218・221・222の犬釘には、コンクリート製枕木の孔に埋め込まれた木材が付着している。

枕木（図143～145、写真図版87～89・103）227は、木製の枕木である。スギ材で、長さ95.8cm、厚み約6cmで、犬釘が1本残存していた。かなり腐食してやせていると思われる。228～235・238～243は、コンクリート製枕木である。228・229・230・233が一般的な枕木で、長さ約105

cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cmで、中央が少し細くなっている。コンクリートの中の構造は図 143 の模式図のように、上面に 2 本、下面に 3 本になるように鉄筋を折り曲げ、上下の鉄筋を囲むように横方向に 9 本の鉄筋をめぐらせていると推測する。レールをとめる孔が 4 箇所開いている。228・229 の裏面、233 の表面に製作時の痕跡と思われる若干の段が多数ある。231・232 は、10 区（A 1 棟）第 2 面 219 枕木群のコンクリート製枕木が 6 点集中して出土したうちの 2 点である。この 2 点の裏面に新聞が転写されていることが判明した。いずれも昭和 2（1927）年の大阪毎日新聞のもので、232 には 8 月 10 日（水）と 13 日（土）、231 には 10 月 29 日（土）と 30 日（日）の記事が裏写りしている。新聞が転写されていたのは、枕木の一面のみであり、枕木が新聞紙にくるまっていたのではない。枕木製作時からそれ以降に、新聞紙の上に枕木を置く過程があり、やや湿っていた枕木に新聞紙の文字が転写されたと推定できる。写真図版 88・89 に載せた新聞のコピーは奈良県立情報館のマイクロフィルムをコピーした。○の中の数字が同じものが新聞記事とそれが転写されたコンクリート製枕木の拡大写真である。転写されているので実際は文字が左右逆に反転しているが、わかりやすくするために現像段階で、反転させている。231・232 は、長さ約 96 cm、幅約 12.5 cm、厚み 11～12 cm の細長四角のもので、裏面は製作時の痕跡と思われる若干の段がある。234・235 は、14 区から出土した長さ約 137 cm・158 cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cm の細長四角のものである。234 の裏面は長辺に直角の溝が 3 本あり 1 本に木が付着しており、製作時の痕跡と思われる若干の段もある。235 は、表面に細長い 11 個の孔があり、裏面に 1 本の溝と製作時の痕跡と思われる若干の段があり、コンクリートがとれて鉄筋がむき出しになっている所もある。234・235 は、後述する 12 区第 1・2 面 5 軌道と同じ分岐線の枕木と思われる。238～243 は、12 区第 1・2 面 5 軌道の枕木である。長さ約 126 cm～177 cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cm、分岐線の枕木のため 238 から 243 に徐々に長くなっている。238・239 は、裏面に溝 2 本と、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。240 は、表面に細長い 7 個の孔があり、木が埋まっている所と、モルタルで埋まっている所がある。裏面は溝が 1 本、凹凸状の突帯 1 本、帯状の突帯 1 本があり、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。241 は、表面に細長い孔 5 個があり、中央はモルタルが塗りこんでおり、木が埋まっている所もある。裏面は溝 2 本、凹凸状の突帯 1 本、突帯 1 本があり、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。242 は、表面に細長い 9 個の孔があり、木が埋まっているものと、モルタルで塗り固めているものがある。裏面は、溝が 2 本あり、製作時に痕跡と思われる若干の段がある。243 は、表面に細長い 8 個の孔があり、木が埋まっているものとモルタルで塗り固めているものがある。裏面は溝が 2 本と製作時の痕跡と思われる若干の段がある。

レール（図 144、写真図版 86・87）237 は、鉄製レールである。現長約 300 cm と長く、一部分のみ実測した。写真図版 87 で全体を示している。断面の頭部幅 3.2 cm、底部幅 6.2～6.3 cm、高さ 6.4～6.5 cm を測り、昭和 7 年（1932 年）の J E S 規格で決められた炭素鋼軽軌条の 9 kg レールの規格、頭部幅 32.1 mm、底部幅 63.5 mm、高さ 63.5 mm、重量 8.94 kg/m に近く、9 kg レールと思われる。9 kg は軽量なレールで、一般的な鉄道よりも規格が低く、安価に建設された軽便鉄道に使われたものである。継ぎ目板が一部残存し、幅約 3 cm でボルト 2 箇所で止められている。236 は継ぎ目板で、現長 39.4 cm、幅 4.0 cm で、径 1.6 × 1.9 cm の孔が 4 箇所開いている。

表2 煉瓦集計表 大窯・大版窯業 岸純・岸和田煉瓦 日本・日本煉瓦 塚・堺煉瓦

個数	刻印										線状凹み						成形				
	有		会社印				不明		刻印有		有		無		不明		手抜		機械		
	無	片面	両面	大窯	岸焼	日本	塚	不明	刻印	不明	有	無	不明	手抜	機械	不明	有	無	不明	有	無
42	127(内 59?)	219(内 5?)	179	137	4	1	4	21	31	221(内 23?)	166(内 5?)	32	332(内 4?)	65(内 21?)	2	合計419					

表3 木ネジ集計表

長さ	25 mm	30 mm	35 mm	38 mm	40 mm	42 mm	44 mm	45 mm	45 mm	48 mm	49 mm	50 mm	50 mm	51 mm	52 mm	53 mm	55 mm	58 mm	60 mm	65 mm	70 mm	78 mm	80 mm	81 mm	151 mm	合計
個数	3	7	2	7	17	1	1	2	12	0	1	21	70	1	32	4	1	1	4	1	1	1	12	1	1	204

\* 太枠は木ネジJES規格の長さ

表4 釘集計表

長さ	20 mm	25 mm	25 mm 非鉄	30 mm	35 mm	38 mm	40 mm	42 mm	44 mm	45 mm	47 mm	50 mm	51 mm	51.5 mm	51.5 mm	52 mm	54 mm	55 mm	57 mm	58 mm	60 mm	62 mm	63 mm	64 mm	65 mm
個数	4	1	9	53	7	1	73	16	1	69	3	334	14	3	3	11	1	107	1	34	116	2	7	16	164

長さ	66 mm	68 mm	70 mm	75 mm	76 mm	77 mm	80 mm	82 mm	83 mm	85 mm	90 mm	92 mm	95 mm	100 mm	103 mm	105 mm	107 mm	110 mm	115 mm	120 mm	123 mm	125 mm	126 mm	128 mm	130 mm
個数	13	7	49	72	5	1	55	1	1	27	18	2	18	47	4	78	3	9	3	14	1	18	2	2	20

長さ	132 mm	137 mm	140 mm	145 mm	150 mm	155 mm	200 mm	220 mm	合計
個数	1	1	7	1	22	1	1	1	1555

\* 太枠は釘のJIS規格の長さ

表5 葉英・爆管刻印一覧

葉英底部刻印	爆管刻印	葉英底部刻印	爆管刻印
佐? F 大三5?×久?版	昭十三11?ヤ版	F 昭十四11?ヤ版	昭十三12?ヤ版
短F 昭八4?×子版	不明	F 昭十四1?×版	昭十三12?×版
?×?×?×?×?×?×?	昭十三11 版	F 昭十四1?×イ版	十三12?×版
F 昭九4?×?子版	昭十三11?版	昭十四1?×版	昭十三12?×版
F 昭九5?×?子	昭十三11?版	F 昭十四? Y	不明
F 昭九6?×?子版	不明	F 昭十四? 1?×版	十三?12 版
F 昭九8?×?子版	不明	F 昭十四? 1?×	不明
F 昭九8 版	不明	F 昭十四? 2?×Y	昭十三11
F 昭十3?×?子版	不明	T昭十三12	
F 昭十7?×?子版	昭十三11?版	F 昭十四? 2?×Y	昭十四? 2?×Y版
F 昭十一?×?子版	不明	F 昭十四? 2?×Y版	昭十四? 2?×Y版
F 十?2?×?×?版	昭十10 版	F 昭十四? 2?×Y版	昭十3?×版
F 昭十三1?×?版	昭十三10?版	F 昭十四? 2?×?版	不明
F 昭十三2? Y	昭十三12?×	F 昭十四? 2?×?版	昭十三12
F 昭十三6?×?版	不明	F 昭十四? 2?×?版	昭十三12
F 昭十三11?×?版	昭十三10?版	F 昭十四? 2?×?版	昭十四? 7?×?版
F 昭十三12?×?版	昭十三10?版	F 昭十四? 2?×?版	昭十三12?×版
F 昭十三12 版	昭十三12 版	F 昭十四? 2?×?版	不明
昭十三	昭十三	F 昭十四? 2?×?版	昭十三12?×版(青文字64?)
昭十三	昭十三	F 昭十四? 2?×?版	昭十三
F 昭三12?×?版	昭十三11?×?版ヨ?(青文字7??)	F 昭十四? 2?×?版	十三12?×版
F 昭三12?×?版	昭十三12?版	F 昭十四? 2?×?版	昭十三12?×版
F 昭十四1?×?版	昭十三12? T版	F 昭十四? 2?×?版	不明
	昭十三12?×版(青文字6A?)		

表6 犬釘集計表

長さ	62 mm	64 mm	65 mm	66 mm	70 mm	71 mm	73 mm	75 mm	76 mm	77 mm	78 mm	79 mm	80 mm	82 mm	84 mm	85 mm	86 mm	87 mm	89 mm	90 mm	100 mm	合計
個数	3	1	3	1	22	1	2	7	1	1	2	1	8	2	1	12	1	2	1	2	1	75

\* 太枠は現在の9K用と10~15K用の法量である。

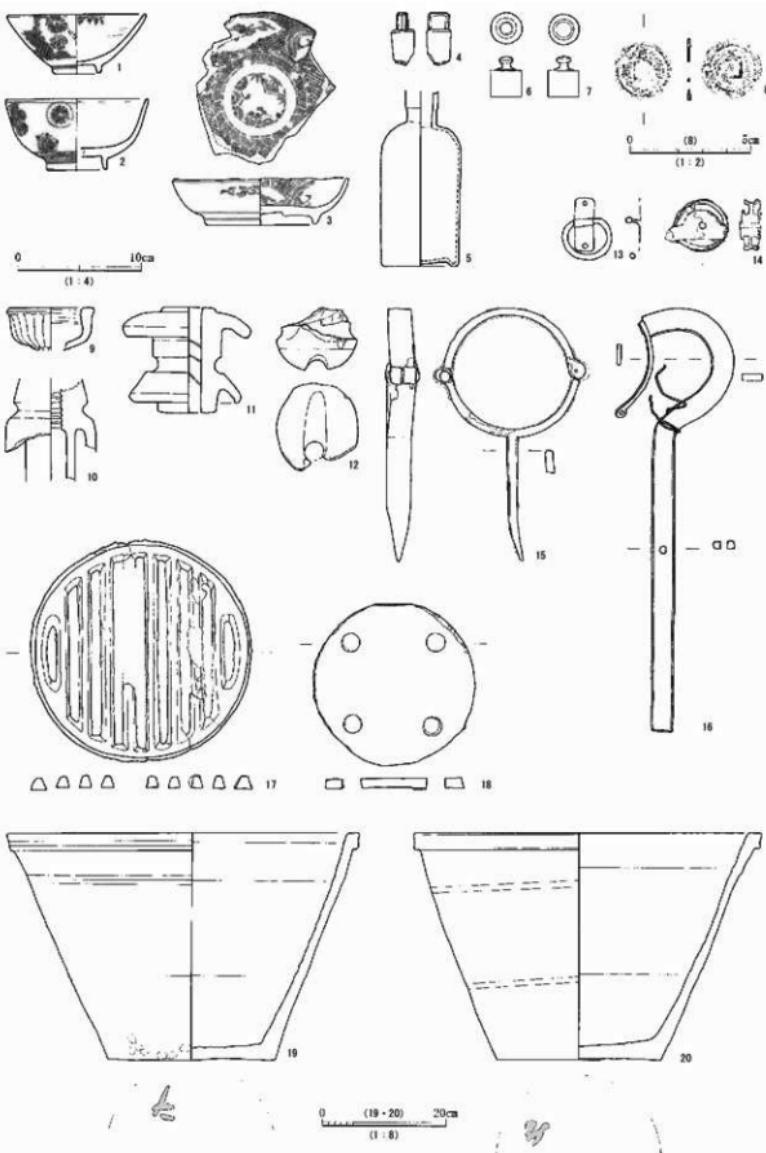


図 128 近代以降遺物 陶磁器・ガラス製品・金属製品（1）

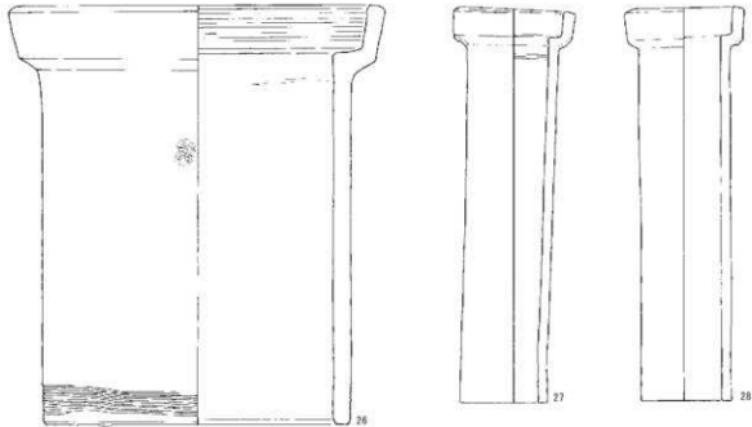
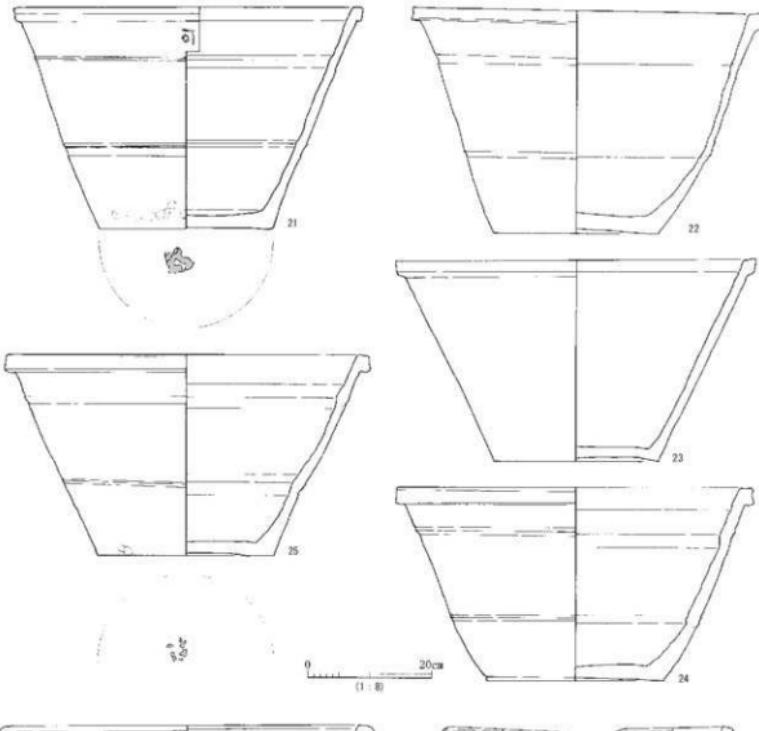


図129 近代以降遺物 陶器 (1)

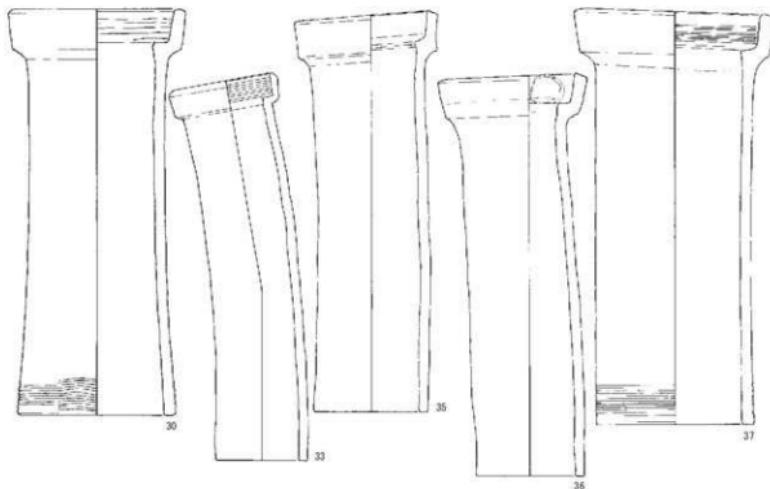
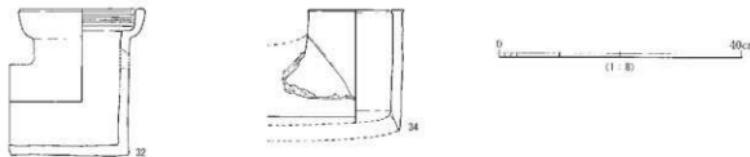
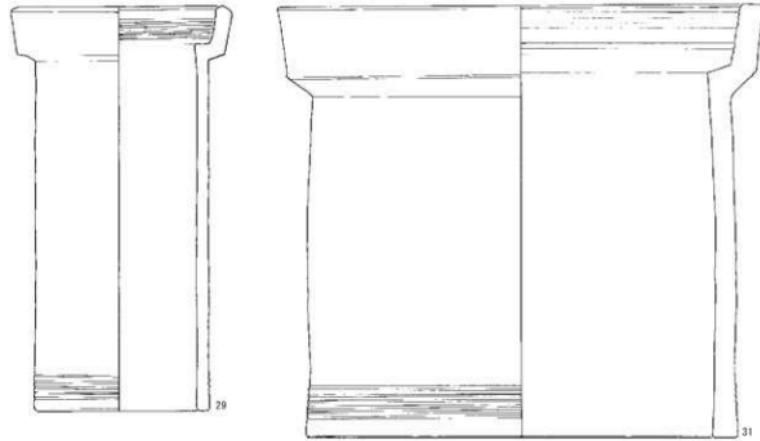
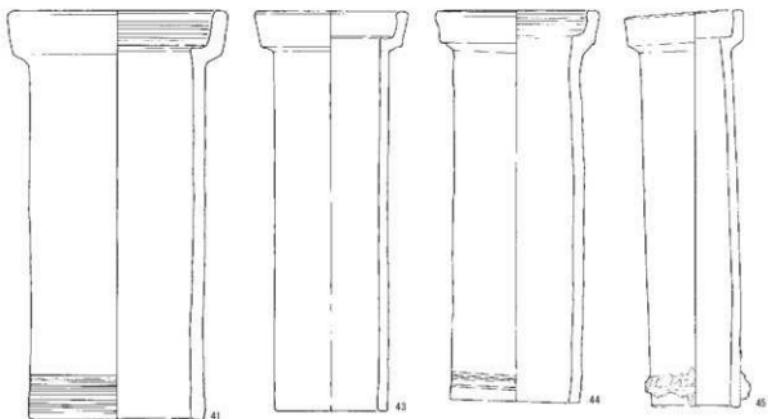
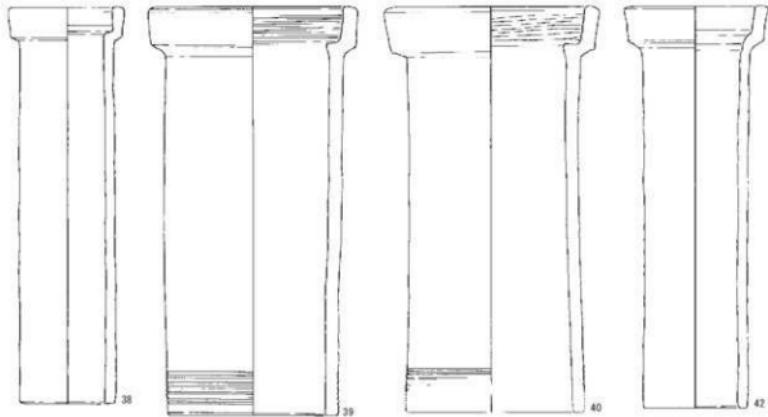


図 130 近代以降遺物 陶器 (2)



0 (38~45) 20cm  
(1:8)

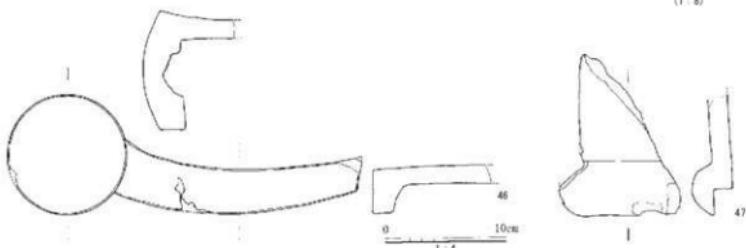


図 131 近代以降遺物 陶器 (3)・瓦 (1)

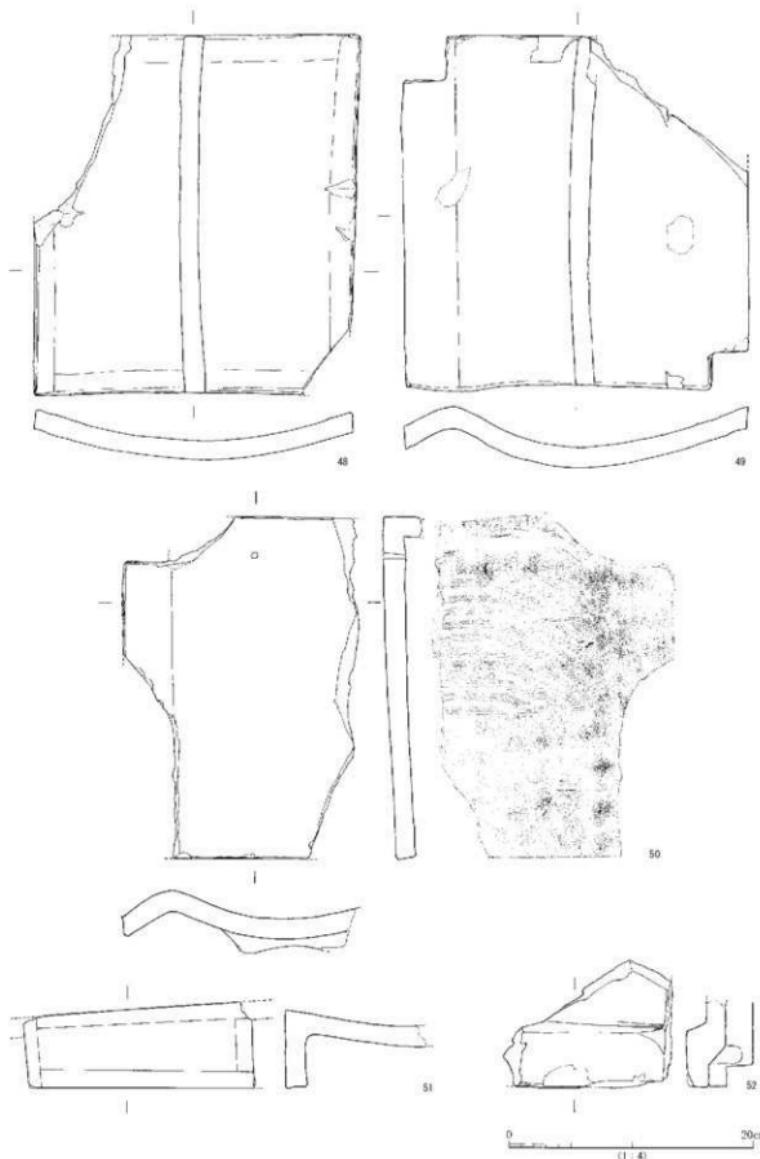


図 132 近代以降遺物 瓦 (2)

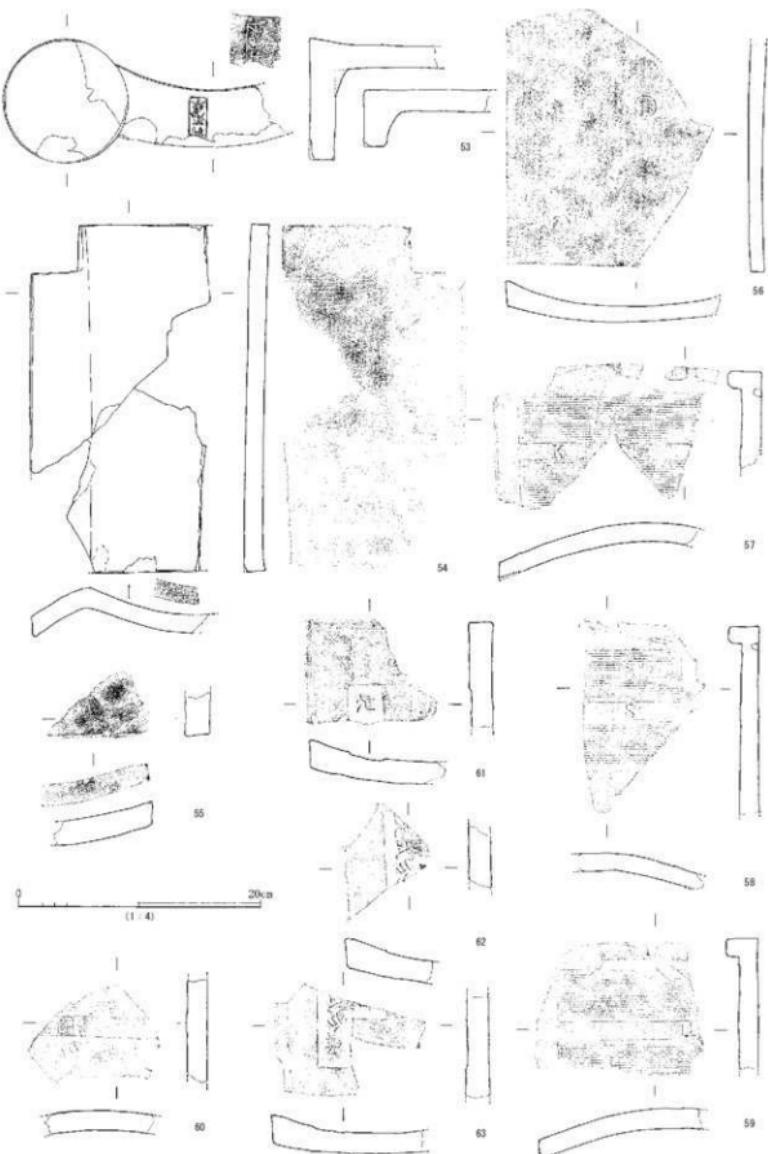


図133 近代以降遺物 瓦(3)



图 134 近代以降遺物 煉瓦 (1)

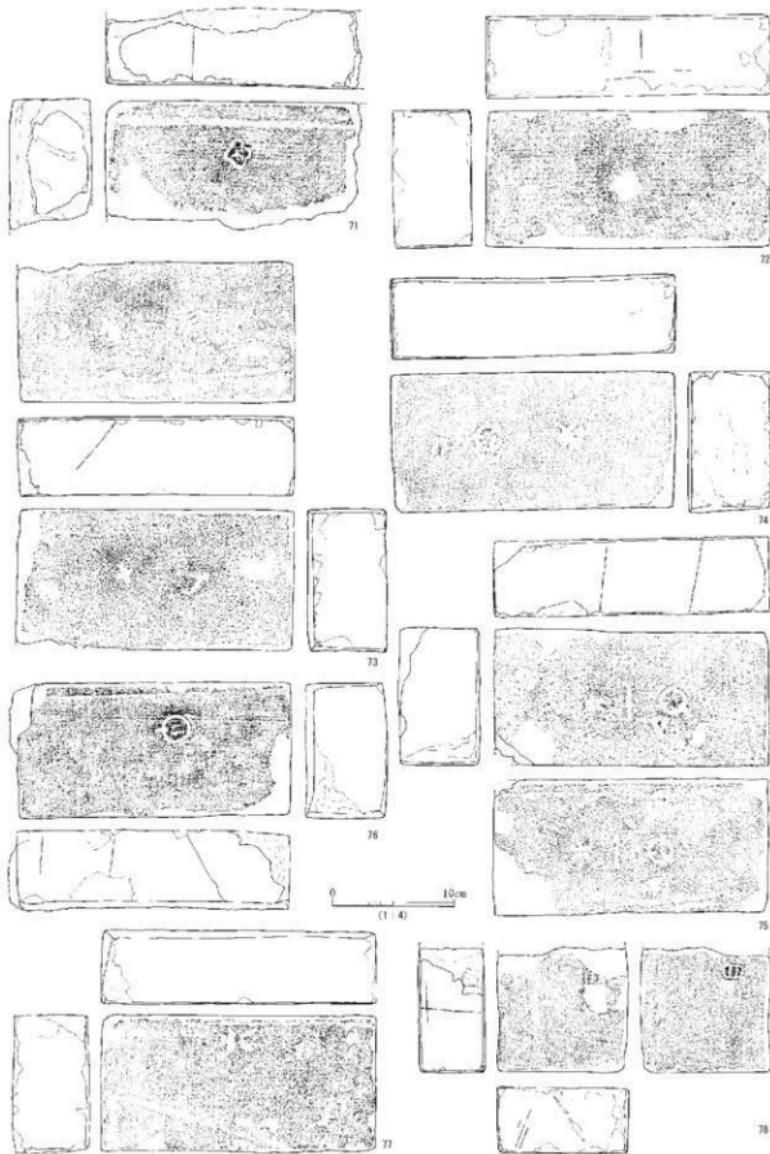


図 135 近代以降遺物 煉瓦 (2)

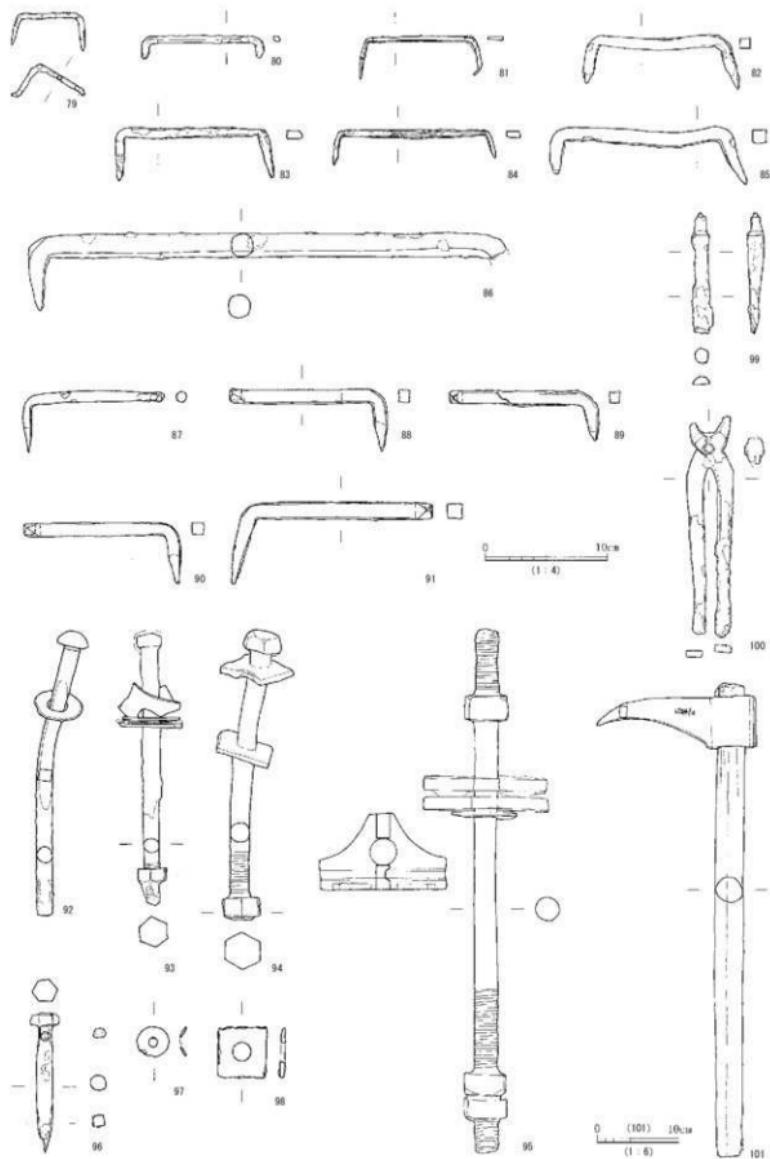


図 136 近代以降遺物 金属製品 (2)

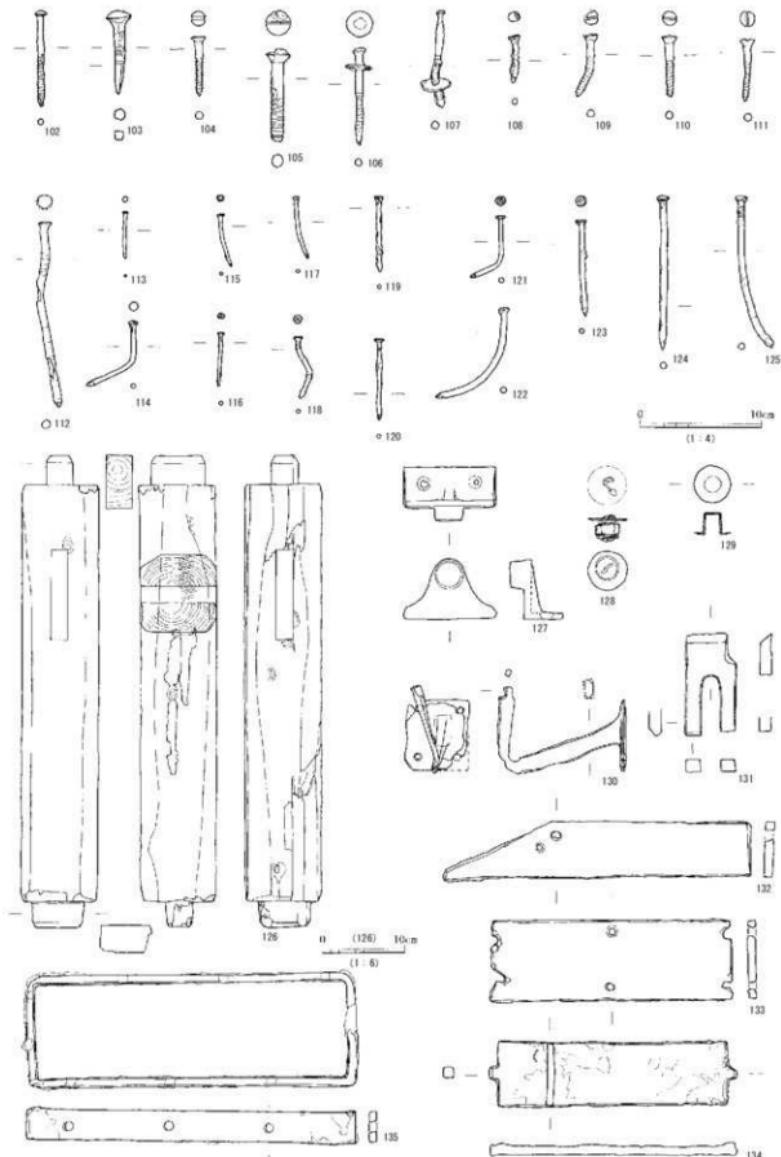


図 137 近代以降遺物 木製品 (1)・金属製品 (3)

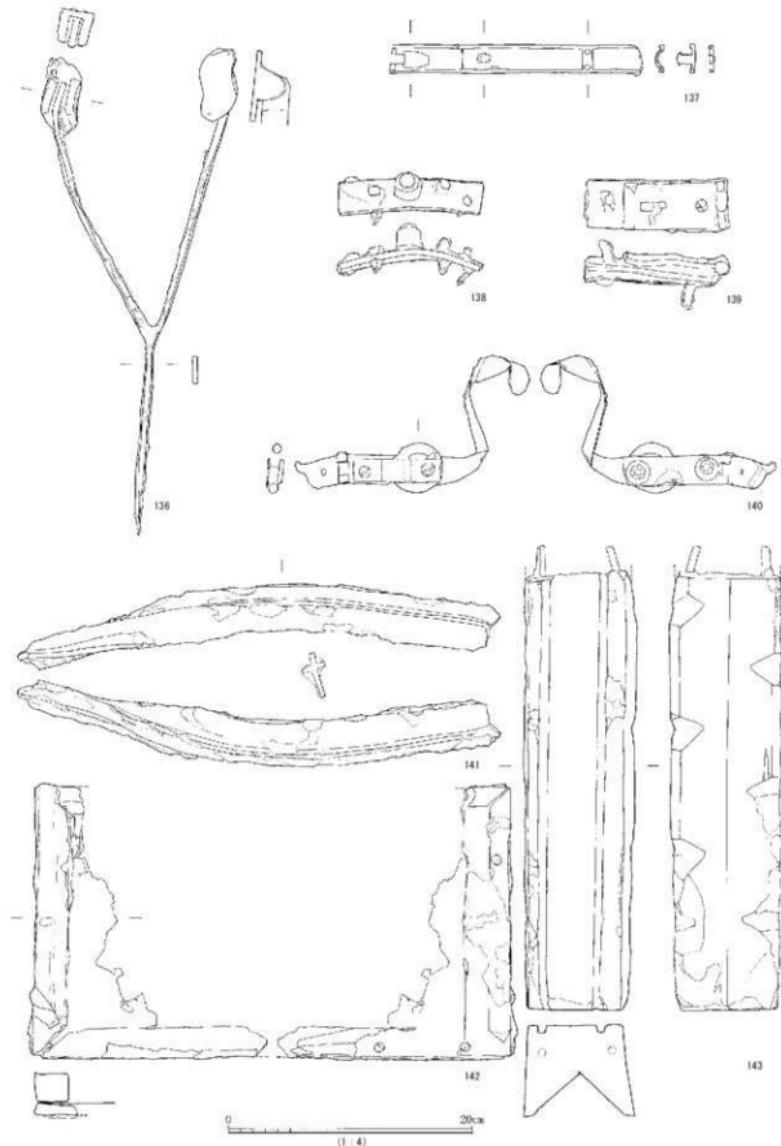


図 138 近代以降遺物 金属製品 (4)・コンクリート製品 (1)

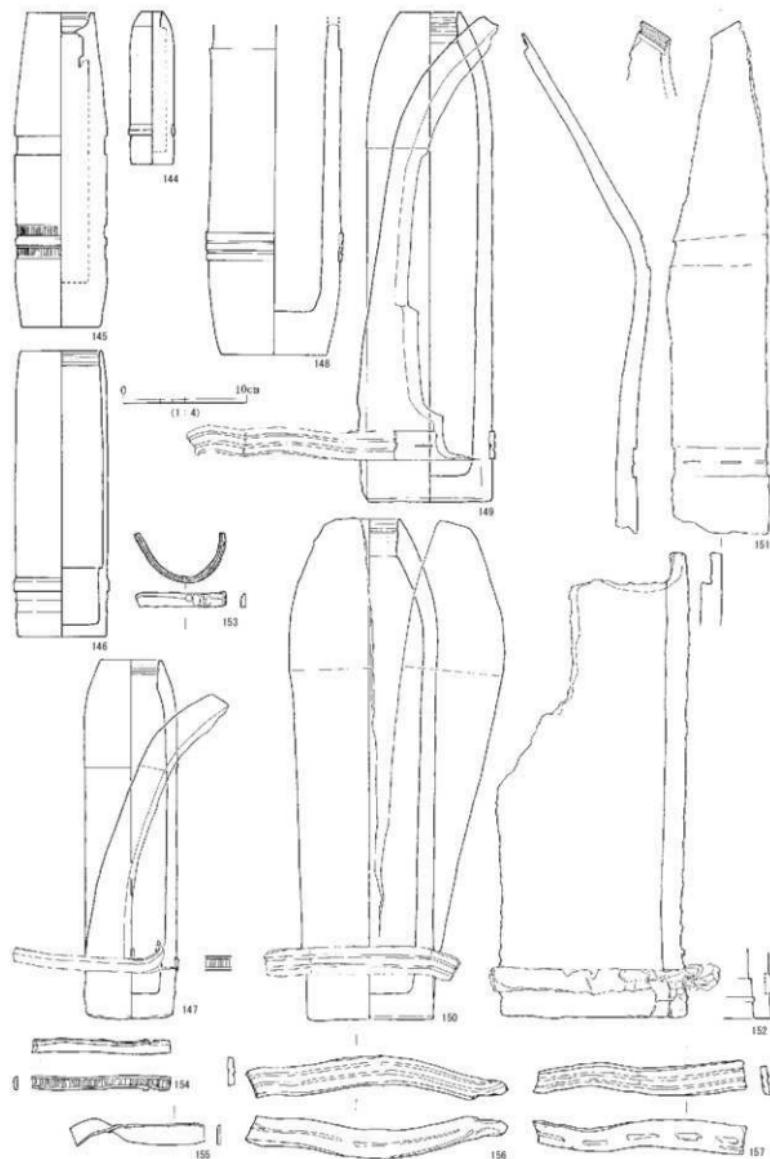


図 139 近代以降遺物 金属製品 (5)

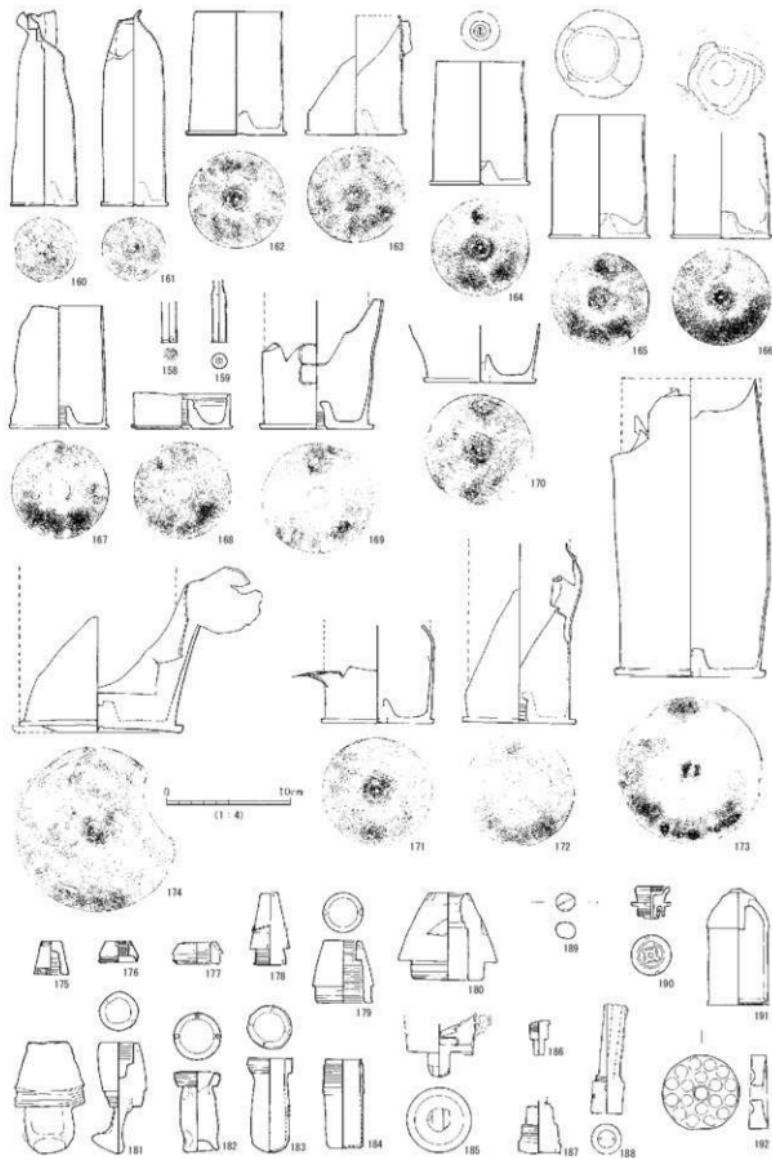


図 140 近代以降遺物 金属製品 (6)

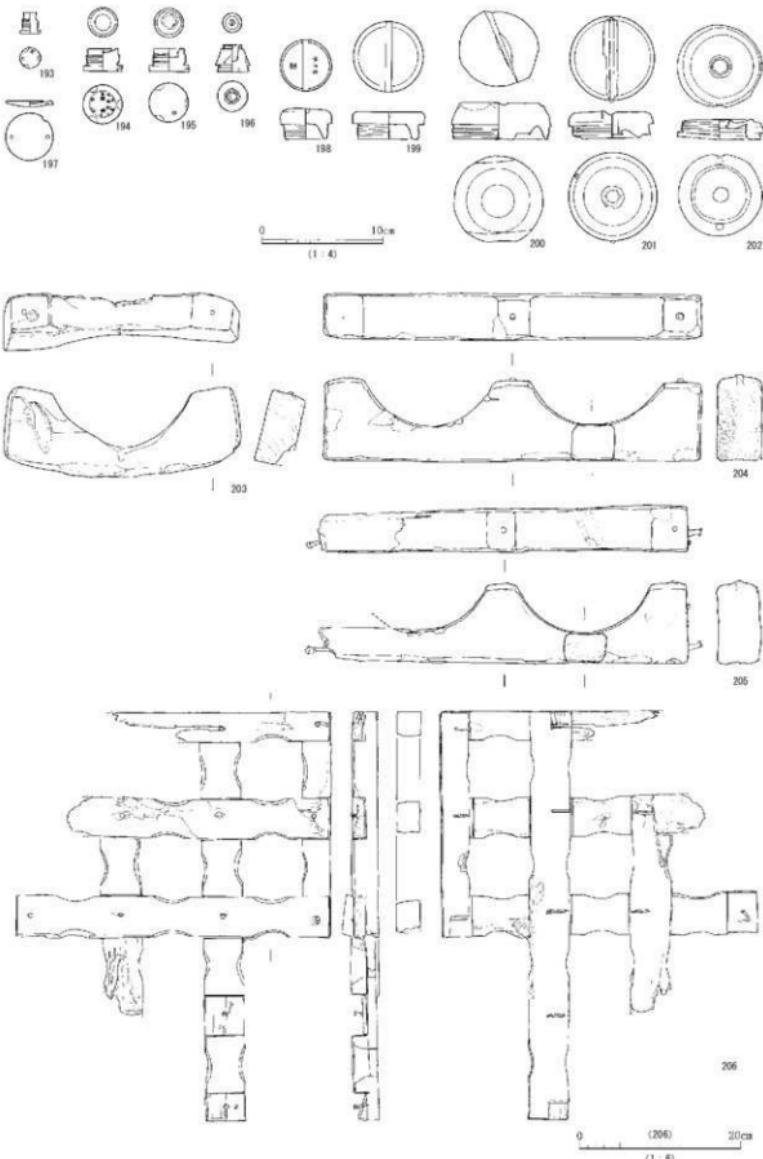


図 141 近代以降遺物 木製品 (2)・金属製品 (7)・ベークライト製品

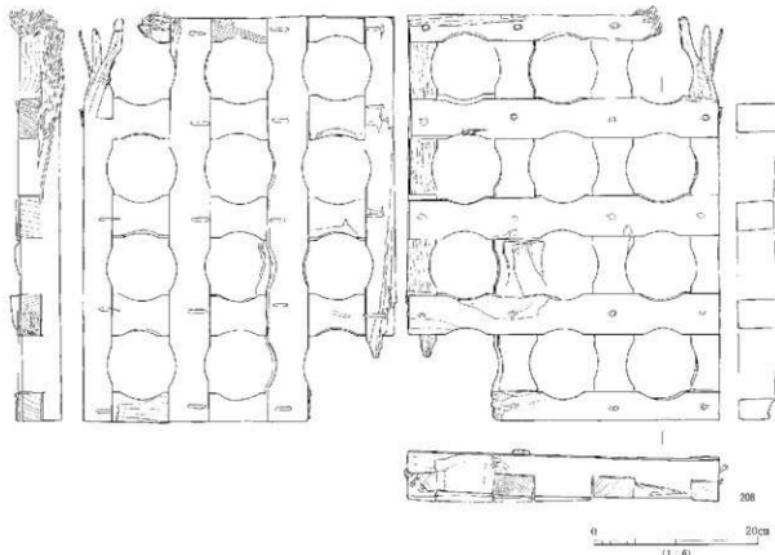
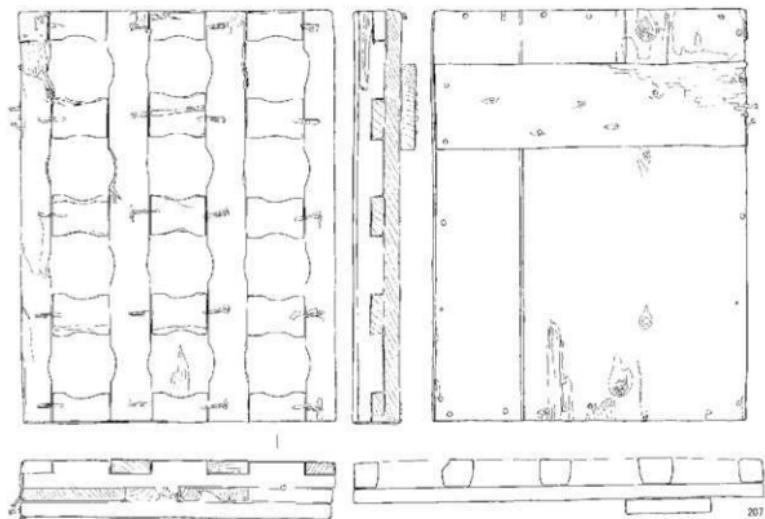
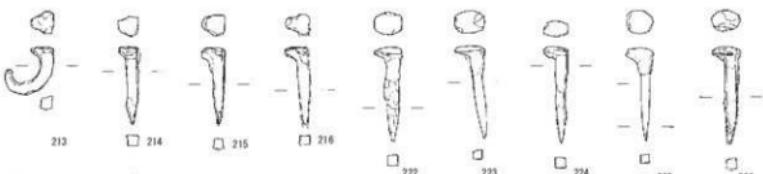
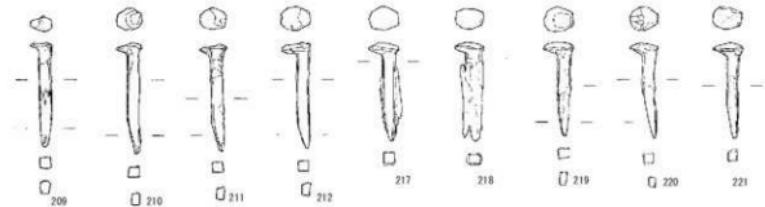
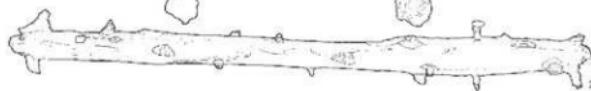


図 142 近代以降遺物 木製品 (3)



0  
(1 : 4)



0 (227)  
20cm  
(1 : 8)



コンクリート製枕木  
様式図



228

229

0 (228 + 229)  
50cm  
(1 : 15)

図 143 近代以降遺物 木製品 (4)・金属製品 (8)・コンクリート製品 (2)

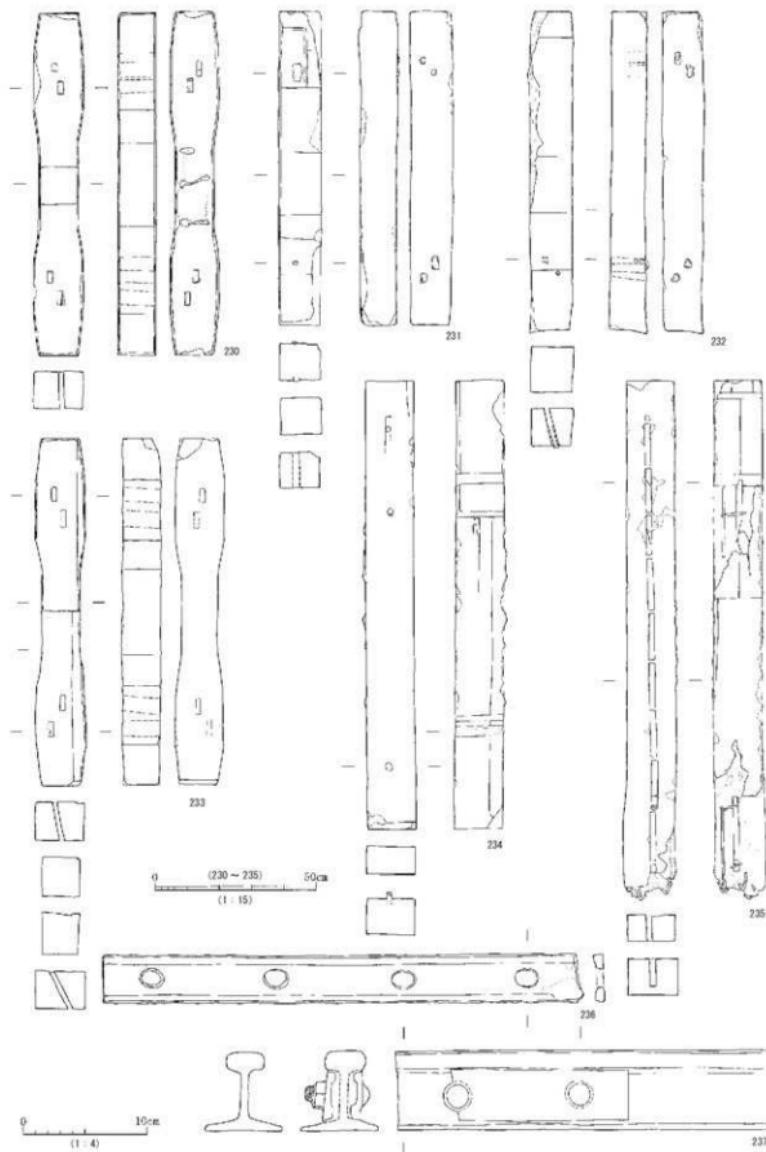


図 144 近代以降遺物 金属製品 (9)・コンクリート製品 (3)

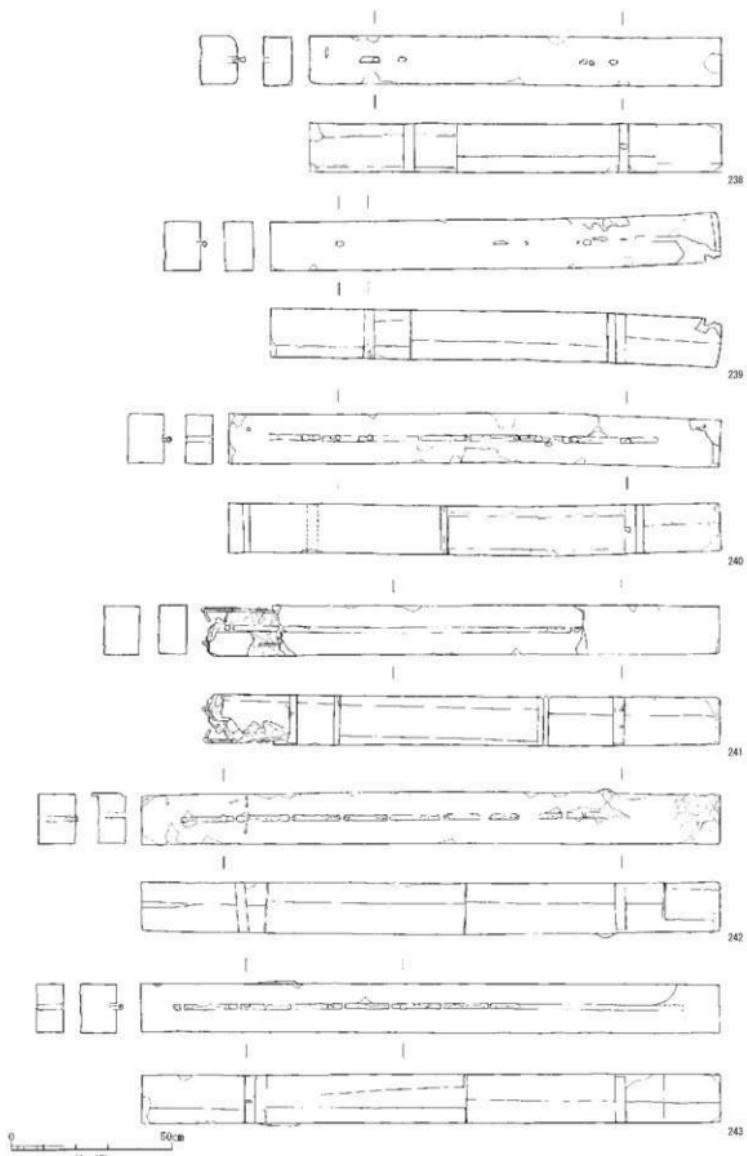


図 145 近代以降遺物 コンクリート製品 (4)

## 第2節 中世・古代遺物（図146～184、写真図版90～102・104～108）

中世・古代の遺物の記述は、近代以降と違って各調査区毎に、上の層から記述していきたい。各遺物の詳細は、巻末の掲載遺物観察表を参照願う。

51X（図146、写真図版90）244～246は、第2層、第2層下部で出土した須恵器である。

247～255は、第3面竪穴建物1から出土した土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯皿・皿A？・鉢・平瓶で、他に炉壁？と思われる細片もある。8世紀前半の遺物が多いが、250の須恵器杯蓋が東壁際溝出土で、6世紀後半と古く、254・255の土師器皿A・甕は埋土出土だが、8世紀後半と新しい。遺構の説明に準じ、8世紀の遺物は、重複する掘立柱建物の遺物と考え、竪穴建物1の時期は6世紀後半と考える。252は土師器鉢Cの模倣かと思われ、高台の胎土が体部の胎土と違う。

256～258は、第3面竪穴建物2から出土した土師器甕、須恵器杯蓋で、時期は6世紀後半である。他に炉壁？と思われるものが多数出土している。256はカマドの支脚に転用されていたようだ。257の須恵器杯蓋の外面に溶着がある。

259～262は、第3面掘立柱建物2から出土した土師器杯、須恵器杯A・杯Bで、時期は8世紀末～9世紀初頭のものが多い。

263・264・(265～267)・268・269〔〔内は同じ遺構出土の遺物で、次に示す遺構に対応している〕〕は、第3面14・31・32・119・134ピットから出土した須恵器高杯・杯、土師器甕？・須恵器杯蓋・杯・高杯である。32ピットの266・267の須恵器杯蓋・杯と119ピットの268の須恵器杯蓋の時期は6世紀後半で、他の遺物に比べ古い。263・269の須恵器高杯も時期は、7世紀である。264は、8世紀中頃である。

270・(271～273)は、第3面17・20土坑から出土した7～8世紀中頃の土師器甕・杯C、須恵器杯蓋・杯B蓋である。(274～277)・(278・279)は、第3面21・44溝から出土した8世紀中頃の須恵器杯・杯B・杯B蓋である。

81X（図147～149、写真図版90・91・98・102・104）280は、第2層以下から出土した均整唐草文軒平瓦で、長岡京内の鞍岡庵寺から出土するT-60型式と同范のものである（平成15・16年度調査でも出土）。

281～287は、第3層から出土したものである。第3層からは、中世の青磁碗、陶器碗・擂鉢、瓦器椀、古代（9～10世紀）の土師器羽釜、黒色土器A類、緑釉陶器水注、灰釉陶器椀、須恵器、古代（7～8世紀）の土師器、須恵器、瓦等が多数出土している。283は緑釉陶器の水注の注口部で、9世紀のものである。284・285は、9世紀前半の灰釉陶器椀である。286は、平城宮6133 A型式を祖型とする単弁10弁軒丸瓦である（百濟寺跡からも出土している）。287は、鉱滓である。

288～296は、第4層から出土したものである。第4層からは、上層からの混入と思う近世の陶磁器、中世の瓦器椀、古代（9～10世紀）の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、古代（7～8世紀）の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦等が多数出土している。293は緑釉（二彩）陶器かと思う皿で、濃緑と薄緑で施釉されている。294は、9世紀中頃と思われる灰釉陶器段皿である。295は、平城宮6291 B型式を祖型とする複弁8弁軒丸瓦である（百濟寺跡からも出土している）。296は、均整唐草文軒平瓦で百濟寺跡から出土したものと同じ吉志部瓦窯産かと思うものである。

297～315は、第5層から出土したものである。第5層からは、古代（7～9世紀）の土師器杯A・

杯B・甕、須恵器杯蓋・杯・杯A・杯B・杯B蓋・高杯・鉢・提瓶・円面硯・壺・甕、緑釉陶器皿?、灰釉陶器皿・長頸壺・土馬、瓦、鉄製品等が多量に出土している。弥生土器底部も1点出土している。304は、円面硯で陸の部分は使い込んで磨耗している。309は、9世紀の緑釉陶器皿かと思うものである。310・311は、9世紀の灰釉陶器皿・長頸壺である。312は土製品の土馬で、上面の2箇所の突出で鞍を表現している。前足・後足が接合面から欠損している。314は不明鉄製品で、315は鉛滓と思うものである。

316は、第6面掘立柱建物1から出土した不明青銅製品である。上から見ると梢円形の形で、口縁端部は玉縁状になっている。掘立柱建物1から出土した土器は細片ばかりであるが、6世紀末~7世紀初頭の須恵器杯と8世紀と思う須恵器杯、土師器甕等である。

317~356は、第6面249井戸から出土したものである。249井戸からは、古代(7~8世紀)の土師器杯A・杯B・皿A・把手付壺A・鍋・甕C・甕、須恵器杯・杯G・杯A・杯B蓋・杯B・高杯・壺・平瓶・甕、製塙土器、木製品、鉄製品等が多数出土した。332・333・344・345が6世紀末~7世紀と思うもので、他は8世紀のものである。土師器杯A・皿Aには、放射状暗文や連結輪状暗文があるものが多い。330は、土師器甕の脚である。331は製塙土器で、積山編年(積山洋 1993「律令制期の製塙土器と塙の流通」『ヒストリア』141号)の5a類と思われる。他に製塙土器細片は多量に出土している。340・342は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。349は須恵器甕で、外底部は手持ちヘラケズリ、体部外面はカキメ調整で、土師器の大型蛸壺に似ている。350は火ぶくれが著しく、他に体部片もあるが復元出来なかった。352~355は木製品で、352・353が、スギ材の舟の一辺と曲物底板である。354・355は、ヒノキ材の火付け棒である。356は不明鉄製品で、割れているためX線写真は撮らずに復元したが、断面Y字状の鋤様のものである。

357・358・359・360・(361・362)・363・364・365・(366・367)は、第6面98・156・160・162・163・176・226・238・248ピットから出土した須恵器甕、製塙土器、平瓦、須恵器杯・杯B、鉛滓、土師器甕、須恵器杯・壺である。357・364・365・367が6世紀後半~7世紀の須恵器甕、土師器甕、須恵器杯・壺で、359が9世紀かと思う須恵器甕である。他は8世紀かと思うものである。363は鉛滓である。

368・369・370・371は、第6面84・113・134・220土坑から出土した須恵器甕・壺L・杯・杯蓋である。368・370・371は、6世紀後半~7世紀初頭のものである。371の須恵器杯蓋は、口縁部外面にハケ状刻目をもつ。369の須恵器壺Lは、8世紀かと思うものである。

372は第6面116溝出土の須恵器杯Bで、8世紀未かと思うものである。

9区(図150~156、写真図版91・92・98・99・101・102・104) 373は、第2層から出土した15~16世紀の瓦質土器土筒である。第2層からは、近代以降の遺物、近世の陶磁器、泥面子、中世の瓦質土器、古代の土師器、須恵器、瓦等が出土している。

375~384は、第3層から出土したものである。第3層からは、近世の磁器転用円盤、陶器、中世の東播系擂鉢、瓦器椀、古代(9世紀)の緑釉陶器(二彩も含む)、灰釉陶器、須恵器、古代(7~8世紀)の土師器、須恵器、製塙土器、瓦等が多く出土している。8世紀代の土師器、須恵器が多い。374・375は9世紀の緑釉陶器椀か皿で、京都産と思われる。376は9世紀の緑釉(二彩)陶器華瓶と思われ、外面に濃緑と薄緑の施釉がされている。377・378は9世紀前半頃と思う灰釉陶器椀・長頸壺である。379~381は8~9世紀の製塙土器である。382は摩滅しているが、8区の286と同じ

く、平城宮 6133 A 型式を祖型とする単弁 10 弁軒丸瓦である。383 は 8～9 世紀の丸瓦、384 は 12～13 世紀の平瓦である。

385・386 は、第 3 層以下から出土した。第 3 層以下からは、近世の陶器、中世の瓦質羽釜、古代（7～8 世紀）の土師器、須恵器、製塙土器等が出土している。385 は 8 世紀後半の土師器杯 A かと思うものであるが、外面に赤色顔料が塗布してある。387・388・389 は、第 4 面 104・110・342 ピットから出土した 8 世紀中頃の須恵器杯 B 盖、土鍾、8 世紀末の須恵器杯 B である。388 は土鍾である。土鍾は、他に第 4 層で 1 点出土しているのみである（他の調査区からは出土していない）。

390・391 は、第 4 面 90 溝状落ち込みから出土したものである。390 は 8 世紀末～9 世紀初頭の円面鏡で、使い込まれて陸部が磨耗している。391 は、9 世紀後半の縦釉陶器皿かと思うものである。

392～408 は、第 4 層出土のものである。第 4 層からは、古代（8～9 世紀）の土師器杯 A・皿・皿 B・椀 C・甕、須恵器杯 A・杯 B 盖・杯 B・鉢 D・壺・甕、黒色土器 A 類土器片、縦釉陶器椀、灰釉陶器椀・壺、製塙土器、土鍾、瓦、鉛滓等である。394 は 8 世紀前半の土師器皿 B で、放射状暗文と連結輪状暗文がある。397・398 は 9 世紀の縦釉陶器椀で、399・400 は 9 世紀中頃～後半の灰釉陶器椀・壺である。401・402 は、8 世紀の製塙土器である。403 は、土鍾である。404 は土製品と思われ、方形の四隅かと思われるものである。405 は、平城宮 6572 A 型式を祖型とする重廓文軒平瓦である（平成 15・16 年度調査でも出土）。406～408 は、8～9 世紀の丸瓦、平瓦である。409～412 は第 4 層以下から出土したものである。第 4 層以下から古代（8～9 世紀）の土師器、須恵器、製塙土器、瓦、鉄製品等が出土している。412 は不明鉄製品で、板状であるが脆い。

413・414・(415・416)・(417・418)・419・420 は、第 5 面 182・185・187・189・190・196 ピットから出土したものである。413 は 8 世紀の須恵器甕、414 は 8 世紀後半の土師器杯 C である。415～418 は 8～9 世紀の丸瓦、平瓦である。419 は 9 世紀の須恵器杯 A で、420 は黒色土器の水滴で、9 世紀かと思うものである。

421 は、第 5 面 191 土坑から出土した 8 世紀中頃の土師器皿 A である。

422～497 は、第 5 層から出土したものである。第 5 層からは、古代（10 世紀）の籠窯鉢、灰釉陶器、古代（8～9 世紀）の土師器杯 A・皿 A・椀 A・椀 C・高杯・鉢 B・鍋 B・甕 A・甕 C、須恵器杯 A・杯 B 盖・杯 B・皿 B 盖・皿 C・高杯・鉢 D・壺蓋・壺 K・壺 Q・台付長颈壺・平瓶・甕、縦釉陶器椀・皿・短颈壺、灰釉陶器皿、黒色土器 A 類、製塙土器、埠、瓦、砥石等が出土している。422 は 8 世紀前半の土師器杯 A で、内面に放射状暗文と連結輪状暗文がある。428～430 は 8 世紀前半の高杯で、粘土紐巻上げ成形である。杯部内面に放射状暗文、連結輪状暗文が、外面に分割ヘラミガキが施され、脚部は面取りが施されている。458 は、8 世紀中頃かと思う須恵器壺蓋である。462 は 8 世紀後半かと思う須恵器壺高台で、高台内面に須恵器破片が溶着している。466 は 9 世紀の須恵器小型壺 P かと思うもので、底部は未調整で、体部は回転ナデ調整だが、外面底部近くを部分的に手で押えている。468・469 は、8 世紀中頃～後半の須恵器平瓶である。472 は、10 世紀中頃と思われる籠窯鉢である。473～477 は 9 世紀の縦釉陶器で、476 は大型椀かと思うもので、477 は、二彩かと思う短颈壺である。478・479 は、9～10 世紀の灰釉陶器である。480 は土師器の不明土器で、推定口径が約 29 cm を測る。481～488 は 8 世紀の製塙土器で、488 は内面に布目痕がある。489 は土製品と思われるもので、上面に段と突帯がはがれた跡があり、下方に一部突出し、下面にも突帯がはがれた跡がある。490 は幅 15.3 cm の埠で、当調査で 1 点のみ出土している。上面にヘラ痕がある。491～496 は、

8～9世紀の丸瓦・平瓦である。497は砂岩製の砥石で、砥面は3面か4面である。

498～531は第6面掘立柱建物1から出土したもので、322・324～328・332・334～336ピット順に掲載している。主な時期は、8世紀中頃～後半のものである。500～503・511は8世紀中頃の土師器皿A・Bで、放射状暗文がある。504は8世紀後半と思う土師器皿Aで、外面をヘラケズリしている。512は体部外面はヘラケズリ？調整、内面はハケ状ナデ調整のもので、時期はよくわからない。515・516・518～520・522・529は、8世紀の製塙土器である。各ピットから数点ずつ出土しているが、335ピットから少し多く出土している。524・530・531は、それぞれ332・335・336ピットから出土した柱根である。524はヒノキ材、530・531はスギ材である。

532・533は第6面掘立柱建物2の331ピットから出土したもので、掘立柱建物2からは、8世紀の土師器皿・高杯、須恵器皿A・杯B蓋、製塙土器等が出土している。532は8世紀前半～中頃の須恵器皿Aで、533はスギ材の柱根である。

534・535・(536～538)・539・540は、第6面214・216・241・283・294ピットから出土した土師器皿B、須恵器皿A・杯B蓋、土師器高杯、柱根である。241ピットから出土したものの時期は、8世紀前半かと思うもので、他に比べてやや古い。

541～548は、第6面197溝から出土したものである。時期は8世紀中頃のものが多い。197溝からは、土師器皿A・皿A・椀C・壺A・甕、須恵器皿B蓋・杯B・壺・平瓶・甕、製塙土器、瓦等が出土している。541は8世紀中頃と思う土師器皿Aで、内面にまばらな放射状暗文がある。546も8世紀中頃の須恵器皿Bで、外底部に墨が付着しているが擦痕は認められない。547は6世紀後半かと思う須恵器壺で、他のものに比べ時期が古い。549～553は、第6面198溝から出土したものである。8世紀末のものが多い。198溝から、土師器甕、須恵器皿A・杯B蓋・杯B・鉢A・壺・甕、緑釉陶器、瓦等が出土した。土師器が少ない。551は須恵器壺底部で、外底部に他の須恵器の溶着がある。553は、9世紀後半と思う緑釉陶器である。554～559は、第6面199溝から出土したものである。8世紀末のものが多い。199溝からは、土師器皿A・高杯・甕・羽釜、須恵器皿B・鉢・甕C、緑釉陶器、製塙土器、瓦等が出土した。556は須恵器甕C底部で、外面の調整は格子状タタキの後一部板ナデで、内面の調整は同心円文で具痕と板ナデである。557は、9世紀中頃の緑釉陶器である。558・559は、8～9世紀の丸瓦・平瓦である。560は9世紀かと思う灰釉陶器で、第6面208溝から出土したものである。208溝からは、他に土師器皿A・高杯、須恵器片も出土している。

561は第6面271落ち込みから出土した、8～9世紀の平瓦である。271落ち込みからは、他に須恵器皿・丸瓦も出土している。

10区(A1棟)(図157～159、写真図版92・93・98・101・102) 562～601は、第3層から出土したものである。第3層からは、古代(8～9世紀)の土師器皿A・杯B蓋・杯B・高杯・壺B・甕・羽釜、須恵器皿A・杯B蓋・杯B・皿・椀・高杯・鉢A・擂鉢・壺(A・G・L・M・N・Q)・平瓶・円面甕・甕(B・C)、灰釉陶器壺、黒色土器A類椀、黒色土器B類、製塙土器、瓦、轍の羽口、砥石等が多く出土した。579は、8世紀後半かと思う須恵器円面甕である。透孔は7個と推定でき、内面は磨耗しており、使用された痕跡かと思われる。586は、8世紀末の須恵器壺Gである。壺Gは、山中章氏(1997「桓武朝の新流通構造・壺Gの生産と流通」『古代文化』Vol. 49 No. 11)によると、壺Gは平城V期に出現し、長岡京に盛行して、平安京初期の9世紀初頭には姿を消す寿命の短い土器であり、官衙(的)遺跡からも出土するものの、堅穴建物等、居住空間から発掘される例が多く、日常的

にも使用する容器であり、東国からの衛士の必需品（水筒）として長岡京へ、一方で東国から微発された兵士の携帯用水筒として各國府へ、持ち込まれたものではないかと推測されている。壺Gは、10区（A2棟）の第3層からも1点（678）出土している。591・592は、9世紀の灰釉陶器壺で同一固体片と思われる。593・594は8世紀後半～9世紀前半の製塙土器で、破片は多数出土している。595は輪の羽口で、外面は二次的に火を受けたことにより黒色化し、発泡しており、内面は赤色化している。596は、平城宮6291B型式か6282型式を祖型とする複弁8弁軒丸瓦である（百済寺跡からも出土している）。597は、平城宮6012型式を祖型とする重圓文軒丸瓦である（百済寺跡からも出土している）。598は、平城宮6702G型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦で、同文異范は百済寺跡からも出土している。599・600は、8～9世紀の丸瓦（無段式）・平瓦である。601は砂岩の砥石で、砥面は3面である。

602～604は、第3・4層から出土した。第3・4層からは、上層からの混じりこみの陶磁器片、古代（9世紀）の灰釉陶器壺、古代（7～8世紀）の土師器杯A・高杯・鉢・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・鉢・壺・高杯・甕、製塙土器、瓦等があり、他に敲き石、サヌカイト片、鉄製品がある。603は砂岩の敲き石で、表裏ともに二次的に火を受けたような痕跡がある。604は、不明鉄製品である。

605・606・（607～612）・（613・614）は、第5面789・819・888・929ピットから出土した須恵器杯A・甕B、土師器杯A・皿A、須恵器杯B・杯E・杯B蓋・軒平瓦である。888ピットは、8世紀後半の時期のものが多い。614は、平城宮6667A型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦である。

（615・616）・617・（618・619）は、第5面827・856・928土坑から出土した須恵器杯B蓋・壺蓋・杯・皿B蓋である。856土坑出土の617は、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯である。

620～629は、第5面776溝から出土したものである。主に8世紀中頃のものが多い。776溝からは、土師器杯A・高杯・鉢F・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿B蓋・壺K・甕、製塙土器、紅簾片岩片等が出土した。621は土師器杯Aで、内面に放射状暗文がある。622は土師器鉢Fで、低い高台が付いているが、その高台を付けるためと思われる3本の円がある。626は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。628は、須恵器皿B蓋である。629は8世紀前半かと思う須恵器壺Kで、肩部と体部の境に沈線2本がある。外面と内底面に自然軸が付着し、外面肩部には溶着があり、外底面は発泡している。630～640は、第5面781溝から出土した。時期は、8世紀中頃～後半のものが主である。781溝からは、土師器杯A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿B蓋・皿B・壺A・甕、製塙土器等が出土した。630は土師器杯Aで、内底面に連結輪状暗文がある。639は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。641・642は、第5面930溝・935溝から出土したものである。641は8世紀後半の須恵器壺高台で、930溝からは、他に土師器杯B・高杯、須恵器壺、瓦等が出土している。642は8世紀中頃と思う土師器杯Aで、内面に放射状暗文があり、外体部はヘラケズリ調整である。935溝からは、他に土師器杯C、須恵器杯B、製塙土器等が出土している。

10区（A2棟）（図160～175、写真図版93～96・98・99・101・102・104～108）643は、第2層から出土した9世紀前半かと思う緑釉陶器（二彩）椀である。644～646は第2層最下部から出土し、第2層は近代以降の遺物や近世の遺物を含むが、第2層最下部からは中世と古代（8～9世紀）の遺物がほとんどである。644は、中世の青磁碗である。645・646は、9世紀後半の緑釉陶器椀、灰釉陶器椀である。

647～692は、第3層から出土したものである。第3層からは、中世の青磁碗、瓦器椀、古代（8～9世紀）の土師器杯（A・B・C）・皿A・高杯・鉢F？・甕A・甌・竈、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿C・高杯・鉢A・壺蓋・壺（C・G・M・Q）・甕B・甕C・甌、綠釉陶器椀、灰釉陶器椀・皿、黒色土器A類、製塙土器、瓦、砥石、鉄製品等が出土した。647は、14世紀かと思う龍泉窯系青磁碗である。648・649は8世紀中頃かと思う土師器杯Aで、放射状暗文があり、648は連結輪状暗文もある。655が8世紀中頃の心棒成形の高杯で、656・657が、8世紀中頃と8世紀末の粘土紐巻上げ成形の高杯である。655・656には連結輪状暗文がある。661は、8世紀後半かと思う土師器甌である。662は土師器竈で、破片を図上復元したものである。底の上部に突帯があげられ、焚口の縁は脚となり突出している。669は8世紀後半の須恵器杯Bで、外底部にヘラ痕がある。674は8世紀後半かと思う須恵器皿Cで、内外底面に火ダスキ痕がある。678は8世紀末～9世紀初頭の須恵器壺Gで、山中氏の細型になる〔10区（A2棟）第3層図157・586で詳述〕。壺Gは、今回の調査で2点出土している。681は9世紀かと思う須恵器甌で、図上復元である。把手が付いていた跡があり、蒸気孔は2個残存している。682は9世紀前半かと思う綠釉陶器椀で、内底面に「×」のヘラ記号がある。683・684は、9世紀の灰釉陶器椀・皿である。685～689は8世紀後半～9世紀前半かと思う製塙土器で、製塙土器は多数出土している。690は8～9世紀の平瓦で、瓦も多数出土している。691は砂岩の砥石で、砥面は2面である。692は、小柄状の鉄製品である。

693～706は、第4面掘立柱建物1から出土したもので、257・259・260・261・262・264・265・267・268ピットの順で掲載している。8世紀中頃～末のものである。掘立柱建物1から土師器杯A・杯B・皿C・高杯・鉢B・甕・羽釜、須恵器杯B蓋・杯B・甕、製塙土器、瓦等が出土した。700は8世紀中頃かと思う土師器高杯で、内面に放射状暗文と連結輪状暗文があり、外側調整はヘラケズリである。701は8世紀中頃かと思う土師器杯Bで、内面に連弧状暗文と放射状暗文があり、外側調整はヘラミガキである。702は8世紀中頃かと思う土師器皿Cで、口縁端部にススが付着している。706は8～9世紀の丸瓦で、有段式である。698・699・704・705は259・260・265・267ピットの柱根である。いずれもスギ材で、698・699・704は底部に加工痕と思われるものがある。

707・708は、第4・5面掘立柱建物2の276・279ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯Bである。掘立柱建物2から土師器杯A・高杯・鉢・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・壺・甕、製塙土器等が出土した。

709～713は第4・5面掘立柱建物3の387ピットから出土したもので、8世紀中頃と9世紀前半かと思うものである。掘立柱建物3から土師器杯A・杯B蓋・杯B・甕、須恵器杯B蓋・皿・甕、綠釉陶器椀、製塙土器、瓦等の細片が出土した。712は、9世紀前半かと思う綠釉陶器椀である。

714は、第4・5面掘立柱建物4の663ピットから出土した8世紀後半かと思う須恵器杯B蓋である。掘立柱建物4からは、他に土師器杯A・甕、須恵器杯・皿B蓋・壺・甕、製塙土器等の細片とスギ材の柱根の一部が出土している。

715～718は、第4・5面掘立柱建物8の273・324・581ピットから出土したもので、8世紀中頃～後半のものである。掘立柱建物8からは、土師器杯A・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B、製塙土器等が出土した。715は、8世紀後半の製塙土器である。製塙土器が多数出土している。

719～722は第4・5面掘立柱建物9の330・332・527・566ピットから出土した、8世紀中頃～末のものである。掘立柱建物9からは、土師器杯A・杯B・皿A、須恵器杯A・杯B・壺・甕、製塙

土器等が出土した。722は8世紀末の土師器皿Aで、内面にヘラ記号かと思うものがあり、外面調整はヘラケズリである。

723～726は、第4面掘立柱建物10の282・283・284・425ピットの柱根である。すべてスギ材である。掘立柱建物10からは、土師器杯A・鉢・甕、製塙土器等の極細片が出土した。

727は第4・5面掘立柱建物11の706ピットから出土した、8世紀後半の須恵器杯B蓋である。掘立柱建物11からは、他に土師器杯A・高杯、須恵器杯A・杯B・壺、製塙土器、瓦等の極細片とスギ材の柱根の一部が出土した。

728～743は第4・5面掘立柱建物12の307～309・370・603ピットから出土したもので、8世紀後半～末のものが多い。掘立柱建物12からは、土師器杯A・皿A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B・皿C・鉢D・壺、墨書き土器、製塙土器、瓦等が出土した。732は、須恵器片に「東」と墨書きがある。平成15・16年度調査で「西」と墨書きされた須恵器杯B蓋が出土している。734は、鞘岡廃寺出土T-60型式と同範の均整唐草文軒平瓦である。8区第2層以下(図147-280)からも出土している。740は、平城宮6702G型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦である(百済寺跡からも出土している)。742は砂岩の砥石?で、擦ったような跡はあるが、平らではない。743は603ピットの柱根で、スギ材が多い中、コウヤマキ材である。

744～746は、第4・5面掘立柱建物13の302・569・570ピットから出土した須恵器杯B蓋、製塙土器である。主に8世紀後半のものである。掘立柱建物13からは、他に土師器杯A、須恵器杯A等が出土した。

747～750は、第4・5面掘立柱建物14の314・318ピットから出土したもので、8世紀後半と10世紀前半のものである。掘立柱建物14からは、土師器杯A・皿・甕C・壺、須恵器壺蓋・壺・甕、製塙土器、瓦等の細片が出土した。747は、10世紀前半かと思う土師器皿である。749は、土師器壺の底である。748・750は、8世紀後半の須恵器壺蓋・甕である。

751は、第4・5面掘立柱建物19の479ピットから出土した8世紀の須恵器杯Aである。掘立柱建物19からは、他に土師器杯A・甕等の極細片が出土した。

752～782は、第4面353井戸から出土したものである。8世紀後半から9世紀前半のものが多い。353井戸からは、土師器杯A・皿A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿・鉢A・円面鏡・壺A・甕、黒色土器A類楕、灰釉陶器楕、製塙土器、瓦等が出土した。752～770は、横板井籠構造の井戸枠材である。752～754が北側の枠で上から内側を表にして掲載している。755は北側から出土したものであるが、井戸枠ではなく、周縁部に小孔が25個残存しているものである。756～758も北側から出土したものであるが細片である。759～761は、東側の枠で上から掲載している。762・763・765は、南側の枠で上から掲載している。764は、南側から出土した細片である。766～768は、西側の井戸枠で上から掲載している。769・770は、西側から出土したものであるが細片である。770は端部が円形を成しているので、桶等の底板かもしれない。すべてヒノキ材である。775は8世紀後半かと思う円面鏡で、陸部は使用痕と思う磨耗がある。777は、9世紀後半かと思う灰釉陶器楕である。778・779は8～9世紀の製塙土器で、779は内面に布目痕がある。製塙土器が多数出土している。780は、鞘岡廃寺出土T-60型式と同範の均整唐草文軒平瓦である。今回の調査で3点出土している。781は、8～9世紀の丸瓦(無段式)である。

783～786は、第4面357井戸から出土した。8世紀後半のものである。357井戸からは、土師器

杯A・皿・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・甕、製塙土器等が出土した。783は土師器杯Aで、外面部の調整はヘラケズリである。784～786は8世紀の製塙土器で、786は内面に布目痕がある。

787～791は、第5面630井戸から出土したものである。主に8世紀後半のものが多い。630井戸からは、土師器皿A・甕、須恵器杯A・杯B蓋・甕・盤、製塙土器等が出土した。791は、8世紀後半の須恵器盤である。

10区（A2棟）は第4面と第5面が分けにくく、以下は遺構の種類毎に、番号順に掲載した。

792～798は297ピットから出土した土師器皿A・椀A・高杯・甕、須恵器杯B蓋・黒色土器A類杯で、8世紀後半～9世紀前半のものである。297ピットから、他に土師器杯A・羽釜等の細片が出土した。795は粘土紐巻上げ成形の土師器高杯で、内面に放射状暗文がある。797は黒色土器A類杯で、内面に暗文がある。799・800・801は、299・300・325ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯B蓋・8世紀後半の須恵器杯B、8～9世紀の平瓦である。802～805は、355ピットから出土した土師器皿A・須恵器杯C・壺蓋・製塙土器で、8世紀後半～末のものである。他に、土師器甕・須恵器杯・杯B蓋等の破片が出土した。806～820は356ピットから出土したもので、8世紀末の一括資料と考えられる遺物である（当センター 秋山浩三氏教示）。土師器杯A・杯C・椀C・皿A・須恵器杯A・杯B・皿A・製塙土器等が多く出土した。810は、外面部を口縁までヘラケズリ調整をしている。808・809の土師器椀Cは、胎土が粗く地元で作られたものかもしれない。814・816の須恵器杯Aは、焼きが甘い。817の須恵器杯Bの外底面にヘラ記号がある。820の製塙土器の内面は、布目痕がある。821・822・(823～825)は、391・392・403ピットから出土した9世紀後半の灰釉陶器椀、8～9世紀の丸瓦、8世紀中頃の土師器椀C？、8世紀前半の須恵器杯A・杯Cである。(826・827)・(828～831)・832・833・834は、(434・435)・445・470・471・486ピット[10]の中はどちらかの遺構出土から出土した8世紀後半の須恵器杯B蓋・壺H、8～9世紀の丸瓦（無段式）・平瓦、8世紀中頃の須恵器杯B、8世紀前半の杯B蓋・杯Aである。835・836・(837～839)・840は、553・559・564・574ピットから出土した8世紀前半の須恵器壺L、8世紀後半の須恵器杯B、8世紀中頃の土師器甕C、8世紀後半の須恵器杯B蓋、不明鉄製品である。(841～843)・844・845・846・847は、617・619・632・633・973ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯B・壺Q、8世紀の甕C？、8世紀後半の土師器高杯、8世紀後半～9世紀前半の製塙土器、8世紀後半の須恵器杯A、8世紀中頃の須恵器杯B蓋である。841の須恵器杯Bの外底部には、ヘラ痕がある。

848～855は、289土坑から出土した土師器杯C・椀C・甕C・甕B・羽釜、須恵器杯A・杯B・甕で、8世紀中頃のものである。856は、352土坑から出土した8世紀後半の須恵器壺Qである。

857・858は、354土坑から出土した8世紀中頃～後半の須恵器杯A・甕である。859は、431土坑から出土した8世紀前半の須恵器鉢Aである。860～862は、504土坑から出土した8世紀前半～中頃の須恵器杯B蓋・杯B・鉢Bである。861の須恵器杯Bの外底部にはヘラ記号がある。862の須恵器鉢Bは、片口である。863は、685土坑から出土した8世紀中頃の土師器杯Cである。

864～879は、329溝から出土した主に8世紀中頃～8世紀末のものである。土師器杯A・皿A・皿B・高杯・鍋B・甕C・甕、須恵器壺蓋・杯B蓋・杯B・甕B、不明鉄製品等が多く出土した。329溝からは、他に須恵器鉢A・壺、製塙土器等の細片が出土した。873は、6世紀末～7世紀初頭の須恵器壺蓋である。869は、形の変わった高杯である。880・881・882・883は、457・464・482・588溝から出土した8世紀中頃～後半の須恵器甕C？、土師器杯B・甕C・甕である。884～888は

600 溝から出土した、8世紀中頃～後半の土師器高杯・甕・竈、須恵器杯B蓋・壺である。他に、600 溝から土師器杯A、須恵器杯A等の細片が出土している。

889～893は、538 落ち込みから出土した8世紀中頃～後半の土師器壺・甕、須恵器鉢・壺A蓋である。538 落ち込みからは、土師器杯A・高杯・鉢・壺A等の細片も出土している。

894～897は、298 土器群から出土した8世紀後半の土師器杯B蓋・高杯・鉢B・甕Cである。898・899は、351 土器群から出土した8世紀後半の土師器甕C、須恵器甕Cである。900・901は446・447 土器群から出土した8世紀の製塙土器、8世紀末の須恵器杯Bである。

902～936は、第4層から出土したものである。8世紀中頃～末のものが主である。土師器杯A・杯B蓋・皿A・皿C?・高杯・甕A・甕C・竈?、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・杯C・皿C・高杯・壺(A・C・Q)・平瓶・甕、土製円板、丸瓦である。902の土師器杯Aは、内底面に放射状暗文と連結輪状暗文がある。第4層からは他に、土師器鉢A・壺、須恵器鉢A、製塙土器、平瓦等が出土している。

11区(図176～178、写真図版96～99・101・102) 937・938は、第3層下部と以下から出土した8世紀後半の須恵器杯A、砥石である。938の砥石は、砂岩で砥面は1面である。

939は第4面291ピットから出土した8世紀中頃の土師器杯Aで、放射状暗文がある。

940は、第4面277土坑から出土した13世紀の龍泉窯系青磁小碗である。

941・942は、第4面279溝から出土した8世紀前半の須恵器杯B蓋、8世紀の製塙土器である。

943は、第4層上部出土の12～13世紀の軒丸瓦である。944～954は、第4層出土のものである。第4層から、陶器、土師器杯A・高杯・鍋・甕・羽釜、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿C・盤・壺蓋・壺・竈・横瓶・甕、灰釉陶器椀、瓦等が出土している。944は、10世紀後半～11世紀中頃かと思う白磁碗である。945は7～8世紀の新羅系土器片で、外面に列点文かと思うものと竹管文がある。本調査では1点のみの出土である。946は8世紀前半の土師器杯Aで、内面に放射状暗文がある。951は、6世紀後半の竈で、外面に波状文と沈線文と凸線文がある。952は、10世紀前半の灰釉陶器椀である。953・954は8世紀後半の製塙土器で、953は内面に布目痕がある。955は、第4層下部出土の9世紀の小型壺かと思う。

956・957は、第5面377ピットから出土した10世紀後半の土師器皿、黒色土器B類?椀である。

958・959は、第5面537・539ピットから出土した8世紀中頃の須恵器鉢、製塙土器である。

960は、第5面568土坑から出土した8世紀中頃の土師器皿Aである。

961～971は、第5層から出土したもので、6世紀末～10世紀末までのものを含む。第5層からは、黒色土器A類杯、黒色土器B類椀、土師器小皿・杯A・高杯・甕・羽釜、須恵器杯・杯B蓋・杯B・皿・鉢・壺・甕B、製塙土器、瓦が出土している。961は、10世紀末の小皿(ての字)で、962は、9世紀中頃の黒色土器A類杯で内面に暗文がある。963は、10世紀後半の黒色土器B類椀である。965は、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯である。969は8世紀後半の壺で、外底部にヘラ記号がある。

972は、第6面掘立柱建物1から出土した弥生第VI様式～庄内期と思う壺底部で、混入である。

973～975は、第6面掘立柱建物3から出土した8世紀前半～中頃の須恵器長頸壺・皿A・壺Aである。975は頸部に重ね焼された蓋の一部が溶着している。

976・977は、526・(525・526)ピットから出土した8世紀後半～末の須恵器杯B蓋・甕である。

978・979・(980・981)・982・983は、(603or604)・605・696・840・844ピットから出土したものである。8世紀後半の須恵器壺A蓋、8世紀の製塙土器、8世紀中頃の須恵器杯B蓋、8～9世紀の平瓦である。

984～990は、第6面674土坑から出土した8世紀末のものである。須恵器杯B蓋・杯B・壺・甕、丸瓦（無段式）、不明鉄製品である。990の不明鉄製品は輪状である。991は、第6面803土坑から出土した6世紀後半～7世紀初頭の須恵器杯である。

992・(993・994)・995は、第6面426・652・802溝から出土した。8世紀後半の須恵器杯B蓋、8世紀の土師器鉢、8世紀末の須恵器杯B蓋、8世紀前半の須恵器杯Aである。

12区（図179～184、写真図版97・99・100・102）996は、近代の第0層から出土した8世紀前半の須恵器壺C？である。古代の遺物で目に付いたのでここに掲載した。997～1004は、第2層最下部から出土したものである。997～1000が12世紀の白磁碗で、1001が12世紀末～13世紀初頭の楠葉型瓦器椀である。1002が12世紀かと思う土師器羽釜で、1003は14～15世紀の菊花文スタンプがある瓦質浅鉢かと思うものである。1004は、9世紀後半の灰釉陶器椀である。

1005は、第3面33溝から出土した8世紀末の須恵器杯Aである。

1006・1007は、第3面48土坑から出土した8世紀前半～中頃の土師器鉢A、須恵器壺Qである。1007の須恵器壺Qの外底部にヘラ記号がある。

1008～1011は、第3層から出土したものである。第3層から瓦器椀、黒色土器A類椀、土師器杯A・高杯・甕、須恵器杯B蓋・杯B・壺Q・甕、石鐵等が出土した。1008はサヌカイト製の凹基式石鐵で、1点のみ出土した。須恵器は8世紀後半～末のものである。1010の須恵器杯Bの外底部にヘラ痕がある。

1012～1026は、第4面89竪穴建物から出土した土師器杯A・杯C・杯B・椀C・高杯・鉢B・甕A、須恵器杯B蓋・杯B、製塙土器、丸瓦で、8世紀中頃のものである。他に須恵器皿C・甕等が出土している。1013・1014・1016の土師器杯A・杯C・杯Bは、内面に放射状暗文や連結輪状暗文がある。1023の須恵器杯Bの外底部にヘラ記号がある。

1027～1033は、第4面掘立柱建物2の153・178・232・226ピットから出土した12世紀後半の白磁碗、土師器小皿・皿、楠葉型瓦器椀と8～9世紀の平瓦である。

1034・1035は、第4面57ピットから出土した8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯A・杯Bである。1036・1037は、第4面72ピットから出土した8世紀末の須恵器杯Aと鉄釘かと思うものである。1038・1039・1040・1041・1042は、第4面124・125・126・130・150ピットから出土した12～13世紀の土師器皿・小皿、瓦器小皿・椀である。1043・1044は、第4面174ピットから出土した12世紀の土師器皿、楠葉型瓦器椀である。1045・1046・1047・1048は、第4面179・211・217・235ピットから出土した12世紀の白磁碗、楠葉型瓦器椀・小皿、土師器皿である。1049・1050は、第4面249ピットから出土した12世紀後半の白磁碗と凝灰岩製の砥石である。1050の砥石は、砥面は3面である。1051・1052・1053は、第4面277・279・289ピットから出土した8世紀の土師器甕C、平瓦、須恵器甕である。1052の平瓦の凸面には格子状タタキが残る。

1054～1068は、第4面85土坑から出土した主に12世紀後半～13世紀前半の白磁皿・碗、灰釉陶器小皿、土師器小皿、楠葉型瓦器椀と8～9世紀の丸瓦・平瓦である。1069は、第4面86土坑から出土した8世紀中頃の須恵器杯Aである。1070～1072は、第4面88土坑から出土した8世紀中

頃～後半の須恵器杯B蓋・杯C・壺Qである。1073～1075は、第4面90土坑から出土した8世紀後半の土師器杯A、須恵器杯B蓋である。1076～1085は、第4面78土坑から出土した8世紀初頭の丸瓦（無段式）・平瓦と鈍津である。平瓦の凸面に格子状タタキが残り、凹面は布目痕が残る（時期に関しては枚方市教育委員会の竹原伸仁氏にご教示願った）。すべて焼きが甘い。

1086・1087は、第4面80溝から出土した8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯B、8世紀かと思う須恵器甕である。80溝からは、他に土師器杯A・皿・高杯・甕、須恵杯B蓋・壺A等の細片が出土している。1088は、第4面80溝または85土坑（85土坑が80溝を切る）から出土した平瓦である。遺構の時期から見ると、80溝に伴うものと思う。1089・1090は、第4面81溝から出土した12世紀末～13世紀前半の土師器小皿、楠葉型瓦器椀である。

1091～1094は、第4面74落ち込みから出土した12世紀前半の白磁碗と8世紀後半～末の土師器皿A、須恵器杯B・甕Cである。1094の須恵器甕Cは把手痕が4箇所ある。74落ち込みから土師器鉢・高杯、須恵杯B蓋等の細片が出土している。

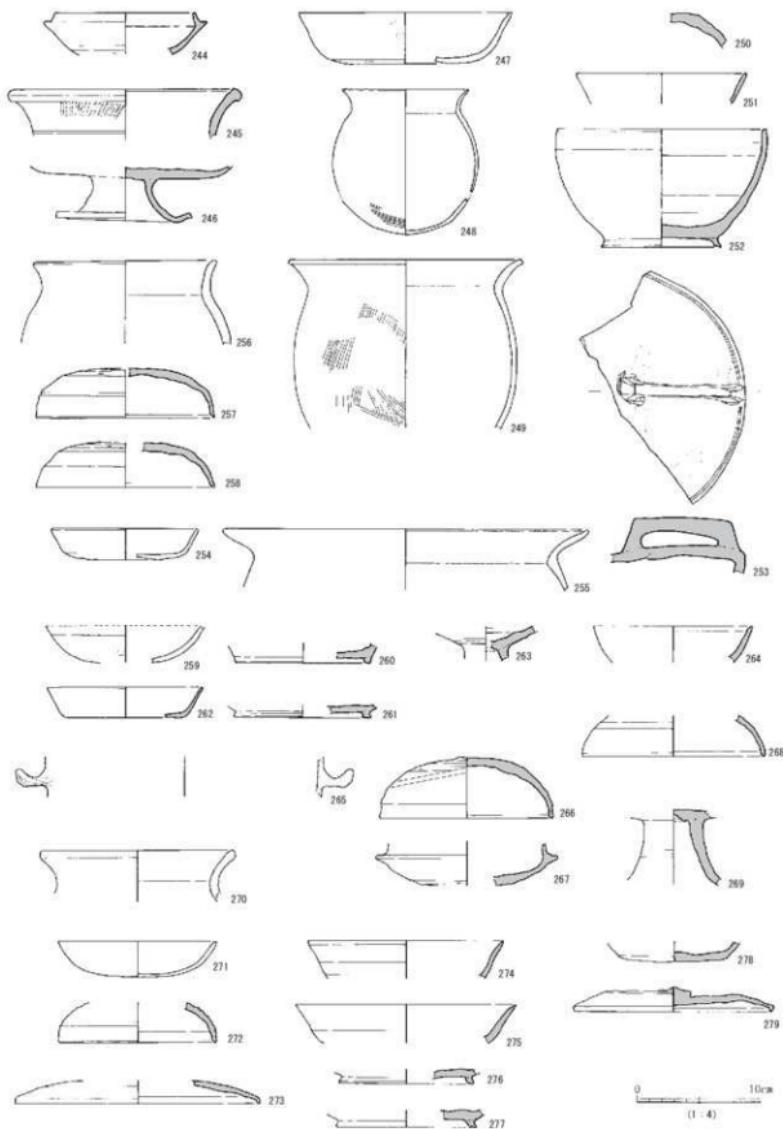


図 146 5区 古代遺物 (第2層、第2層下部、第3面型穴建物1・2、孤立柱建物2。14・31・32・119・134ピット、17・20上段、21・44溝出土)。

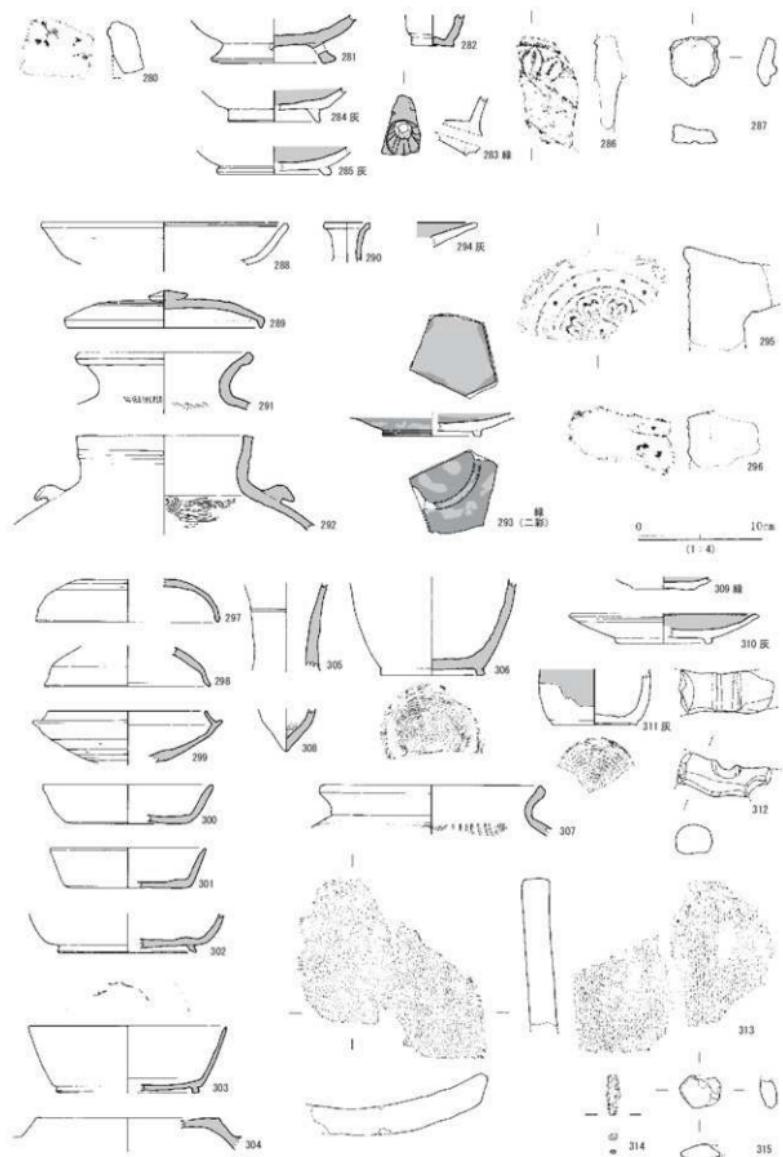


図 147 8区 古代遺物 (1)

(第2層以下、第3層、第4層、第5層出土)

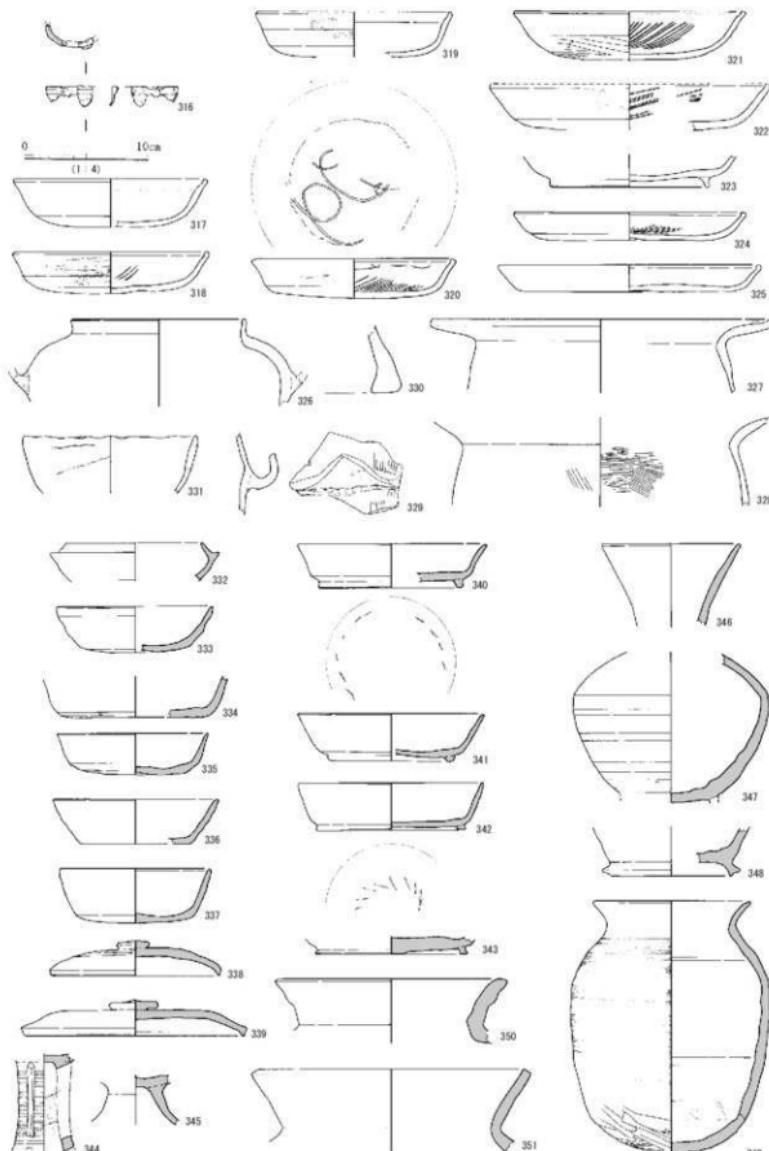


図 148 8 区 古代遺物 (2)

(第6面振立柱建物 1、249 井戸出土)

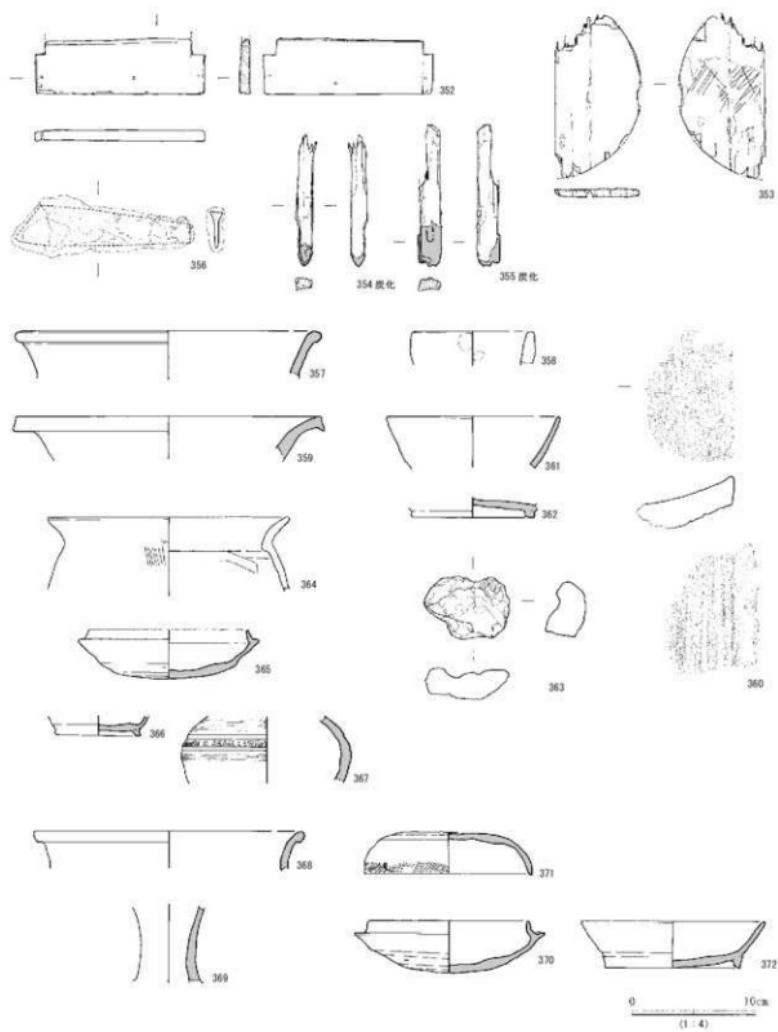


図 149 8区 古代遺物 (3)

(第6面 249井戸, 98・156・160・162・163・176・226・238・248 ピット, 84・113・134・220 土坑, 116 墓出土)

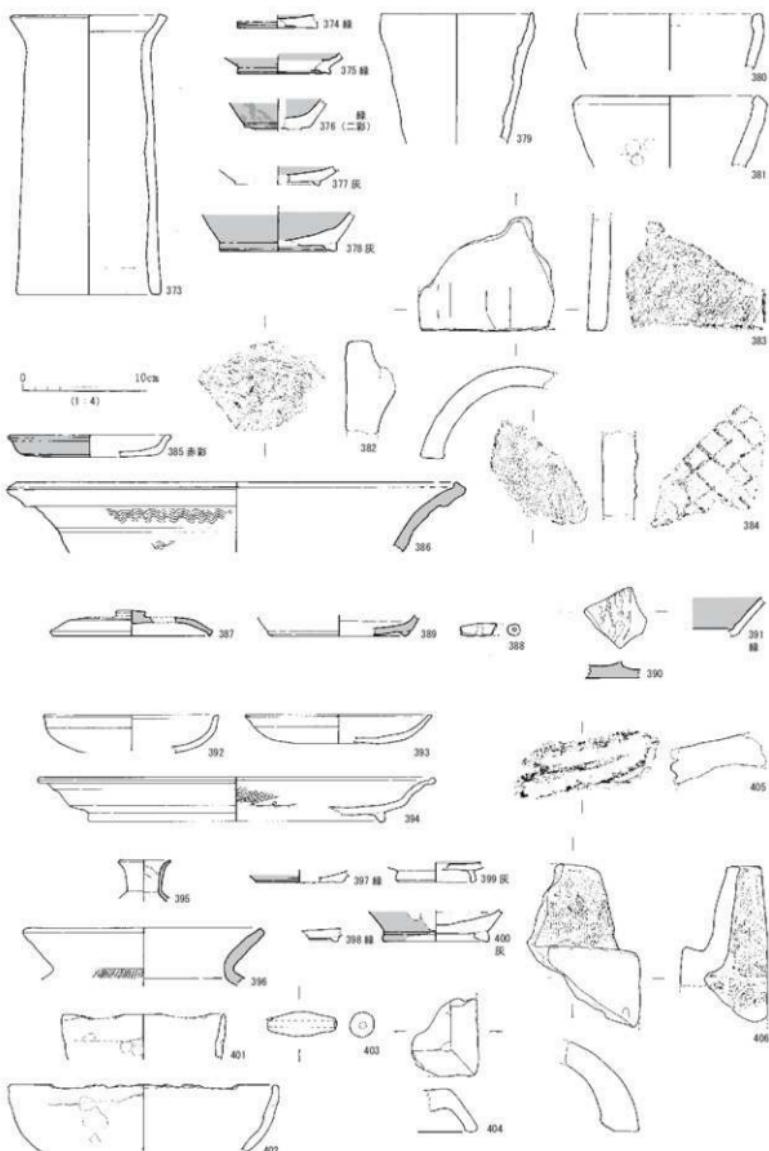


図 150 9区 中世・古代遺物

(第2層、第3層、第3層以下、第4面 104・110・342 ピット、90 滝状落ち込み、第4層出土)

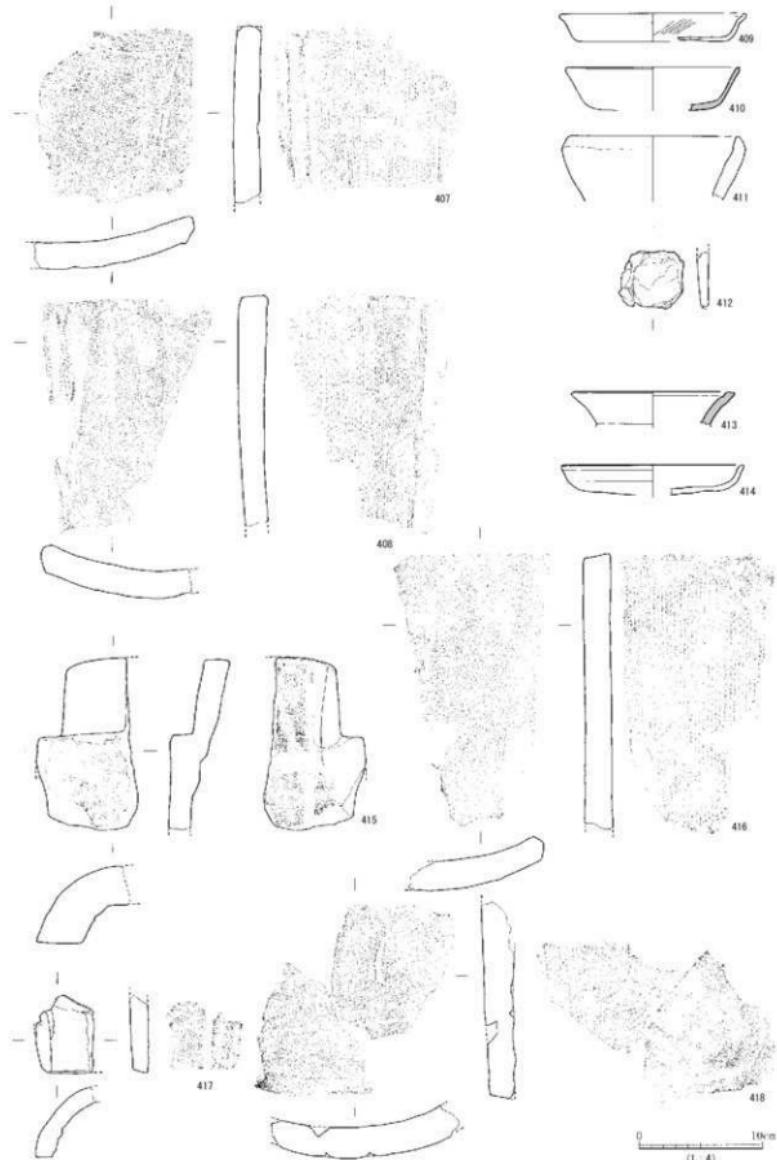


図 151 9区 古代遺物 (1)

(第4層、第4層以下、第5層 182・185・187・189 ピット出土)

0  
(1:4)  
10cm

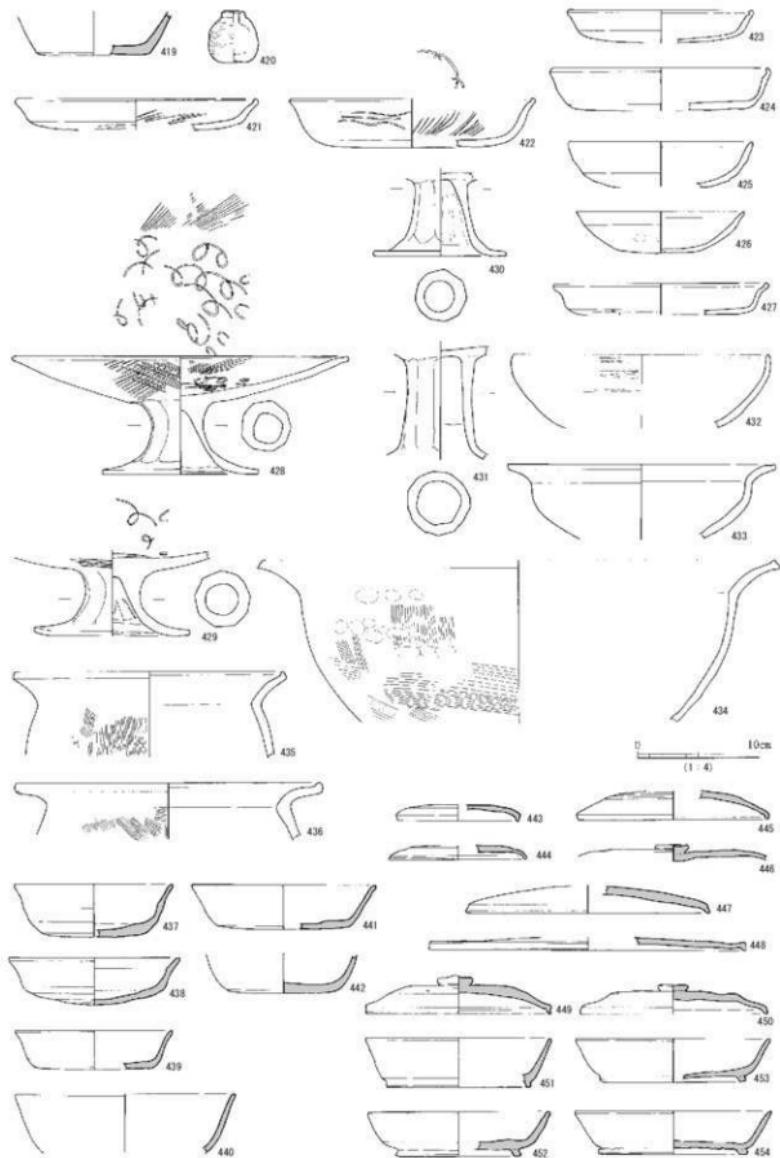


図 152 9区 古代遺物(2)

(第5面 190・196 ピット、191 土坑、第5層出土)

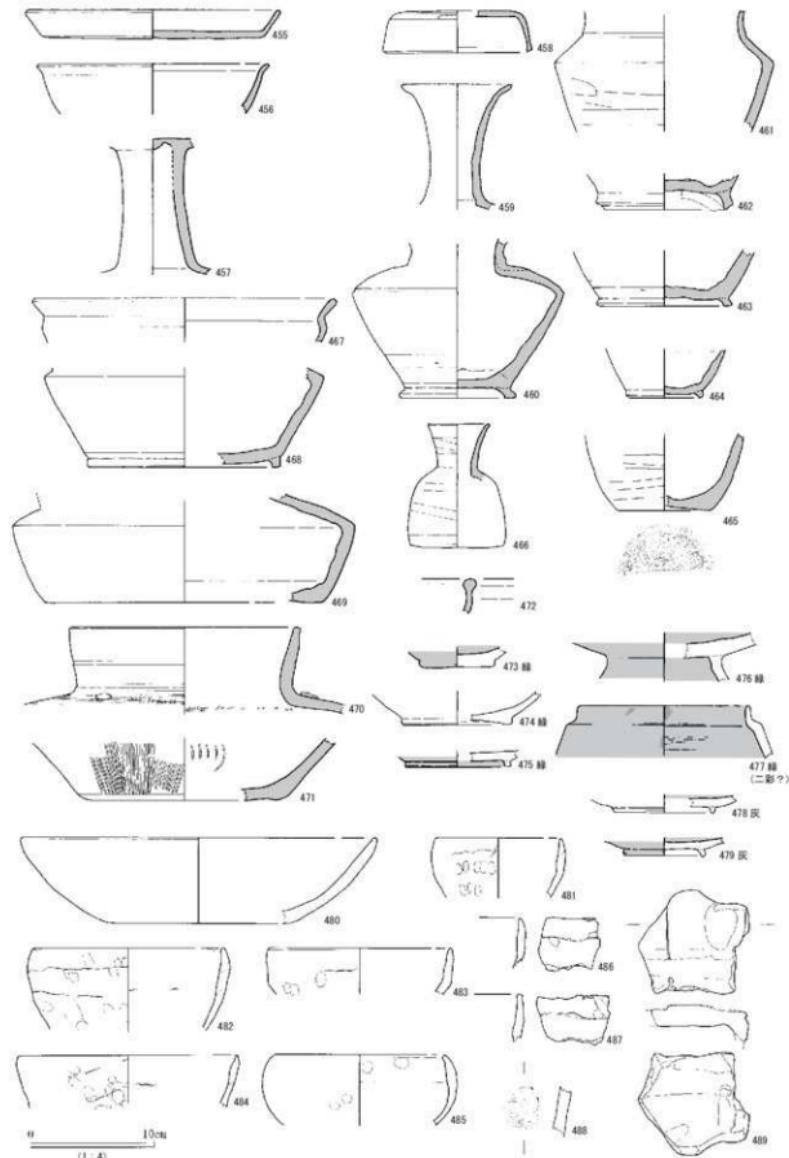


図 153 9区 古代遺物 (3)

(第5層出土)

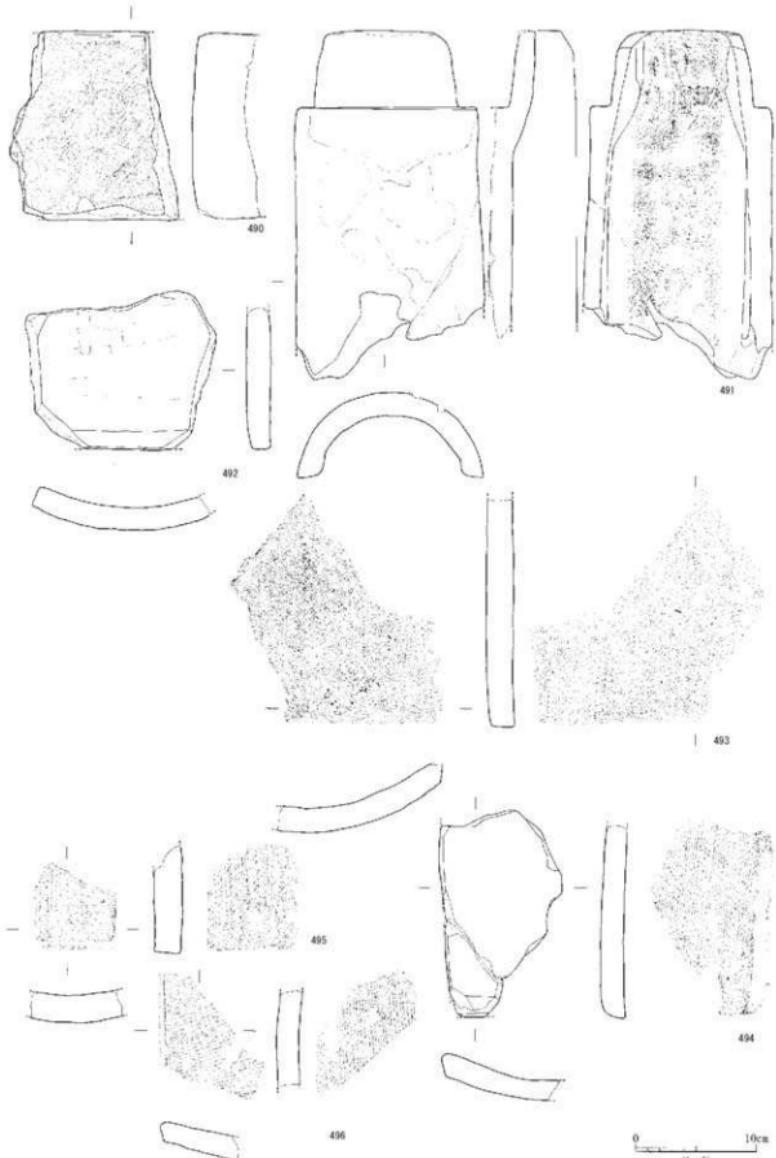


図 154 9区 古代遺物 (4)

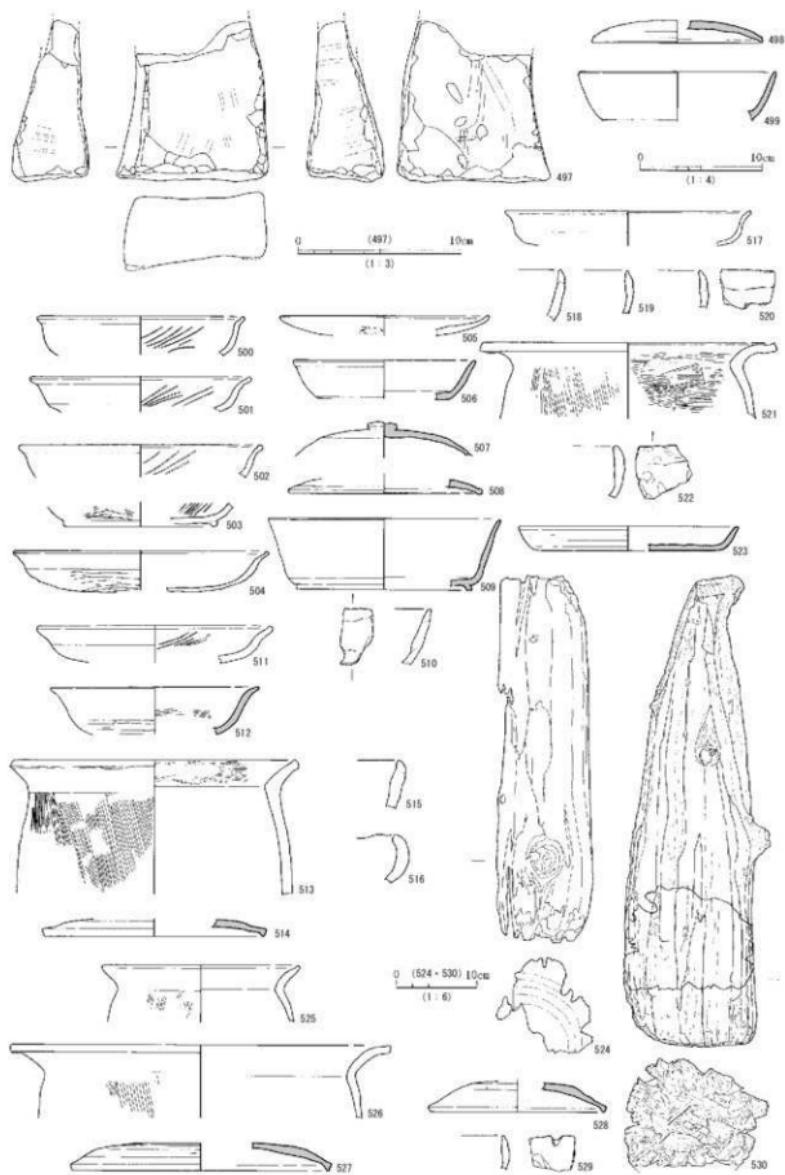


図 155 9区 古代遺物 (5)

(第5編、第6面廻立柱建物1出土)

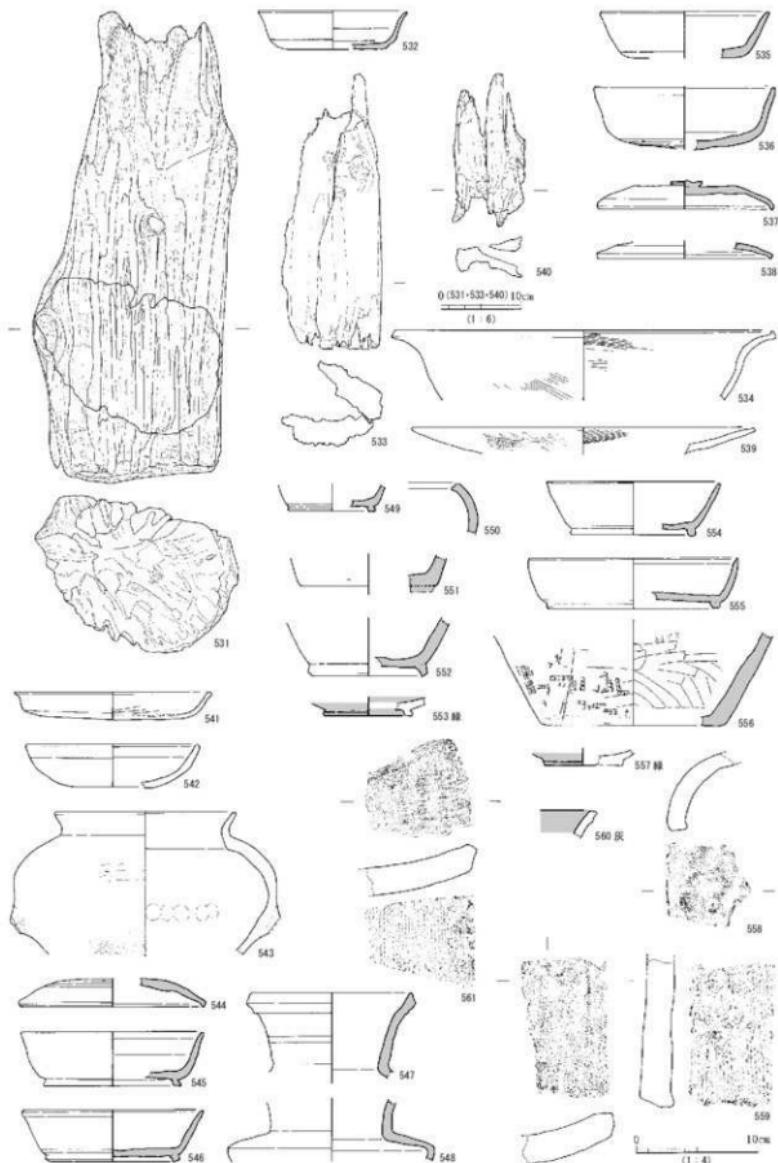


図 156 9区 古代遺物 (6)

(第6面断立柱建物 1・2, 214・216・241・283・294 ピット, 197・198・199・208 滝, 271 落ち込み出土)

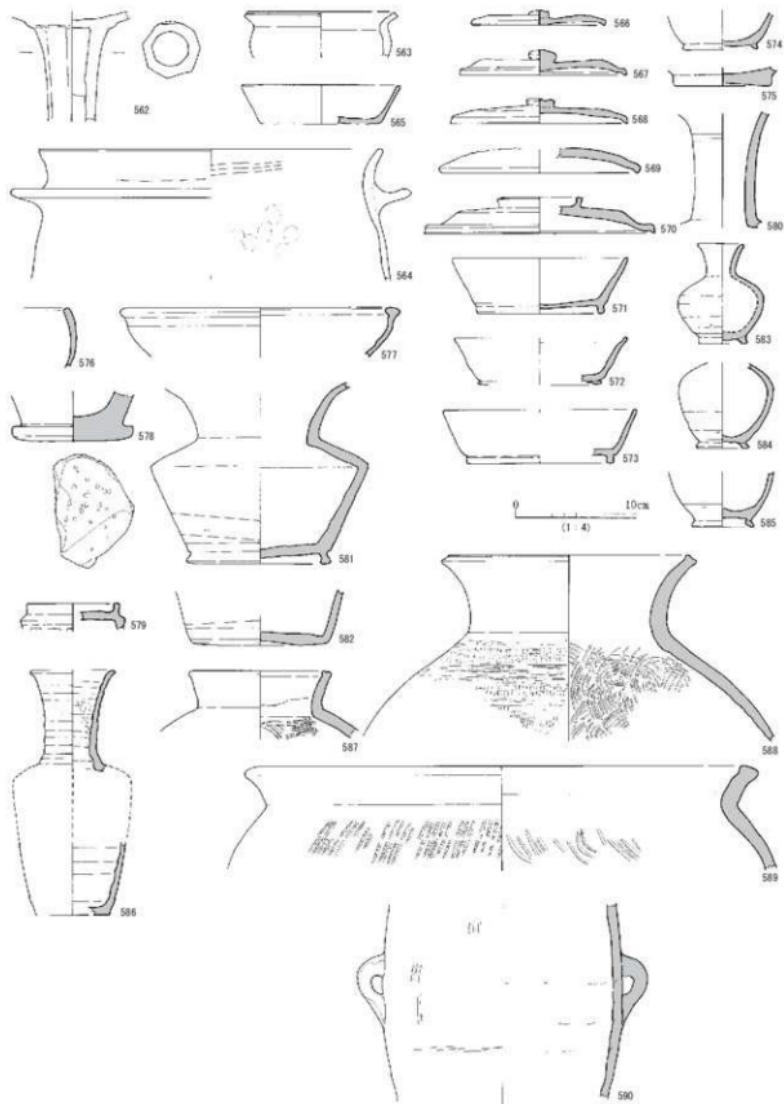


図 157 10 区 (A 1 株) 古代遺物 (1)

(第3刷出土)

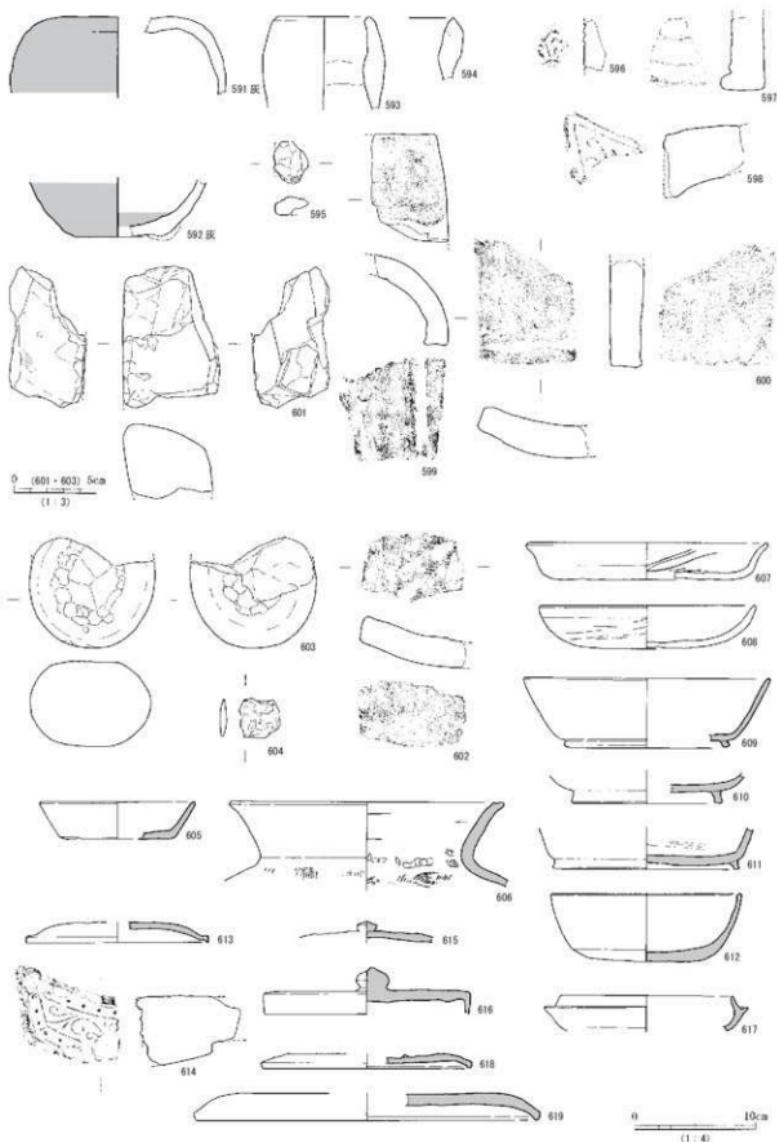


図 158 10 区 (A 1 株) 古代遺物 (2)

(第3解、第3・4刷。第5面 799-819・888-929 ピット、827-856・928 土紙出土)

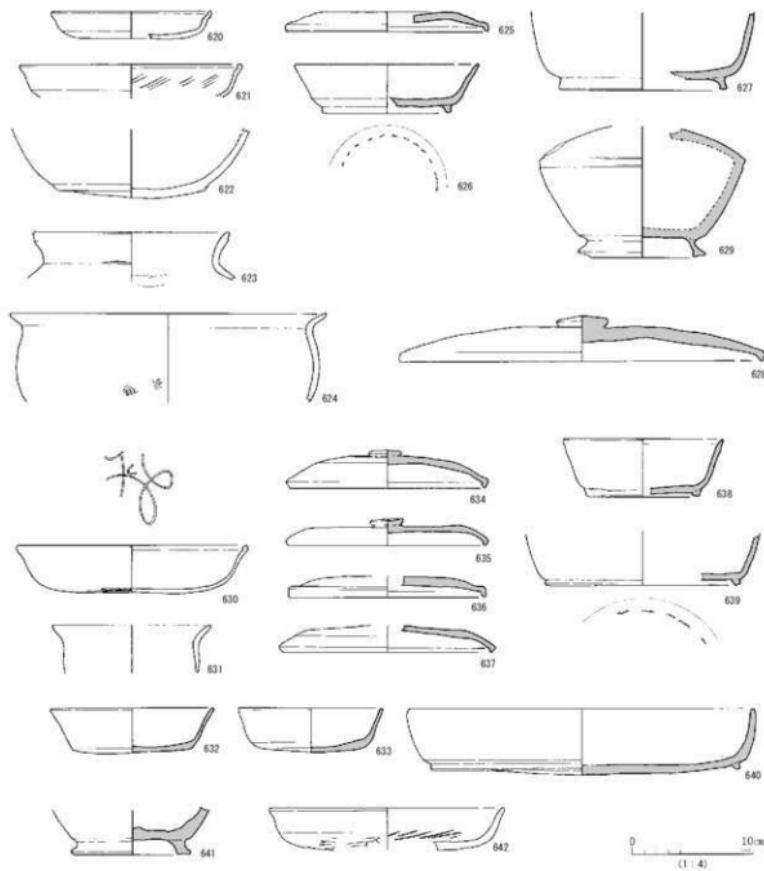


図 159 10 区 (A 1 株) 古代遺物 (3)

(第 5 面 776・281・930・935 蔵出土)

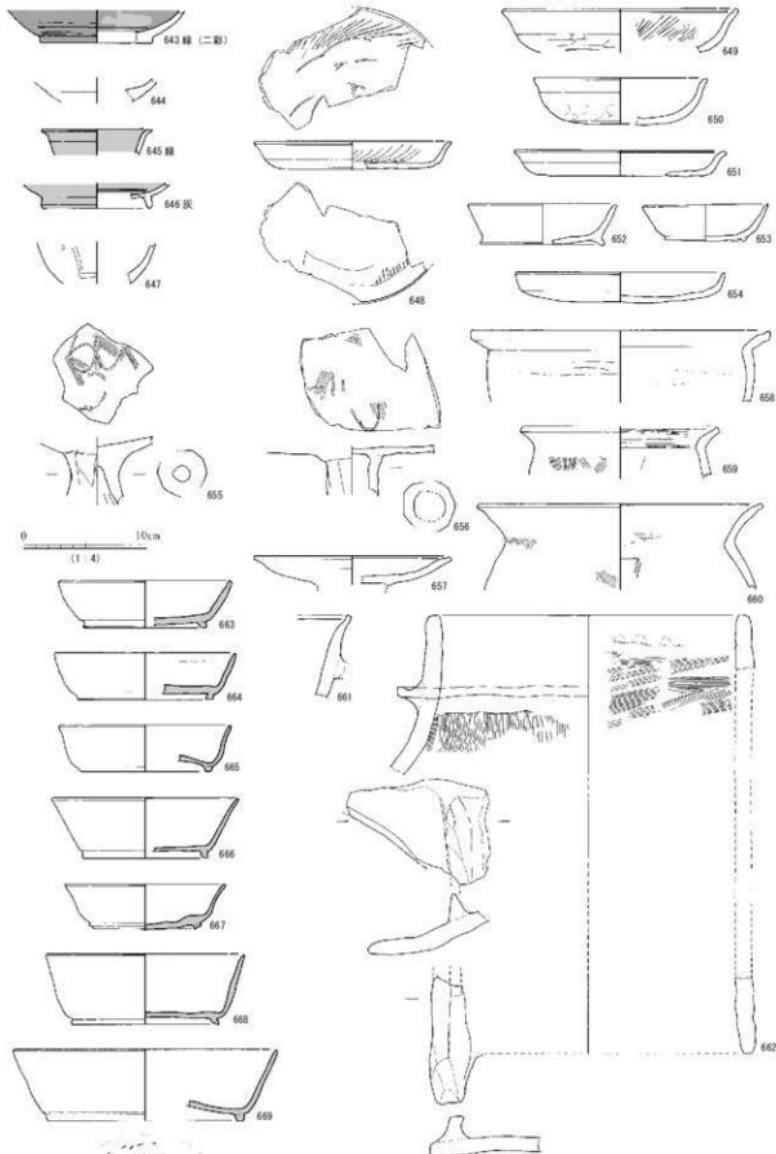


図 160 10 区 (A 2 株) 古代遺物 (1)

(第2層、第2層最下部、第3層出土)

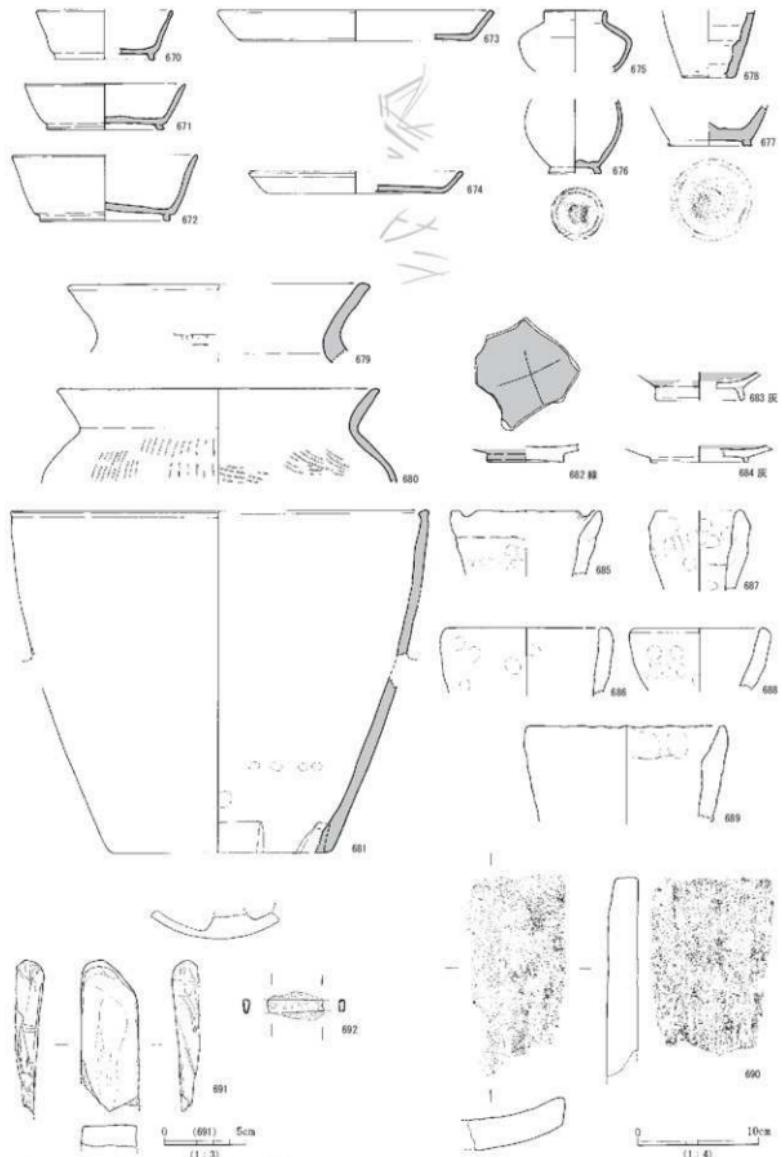


図 161 10区 (A2棟) 古代遺物 (2)

(第3層出土)

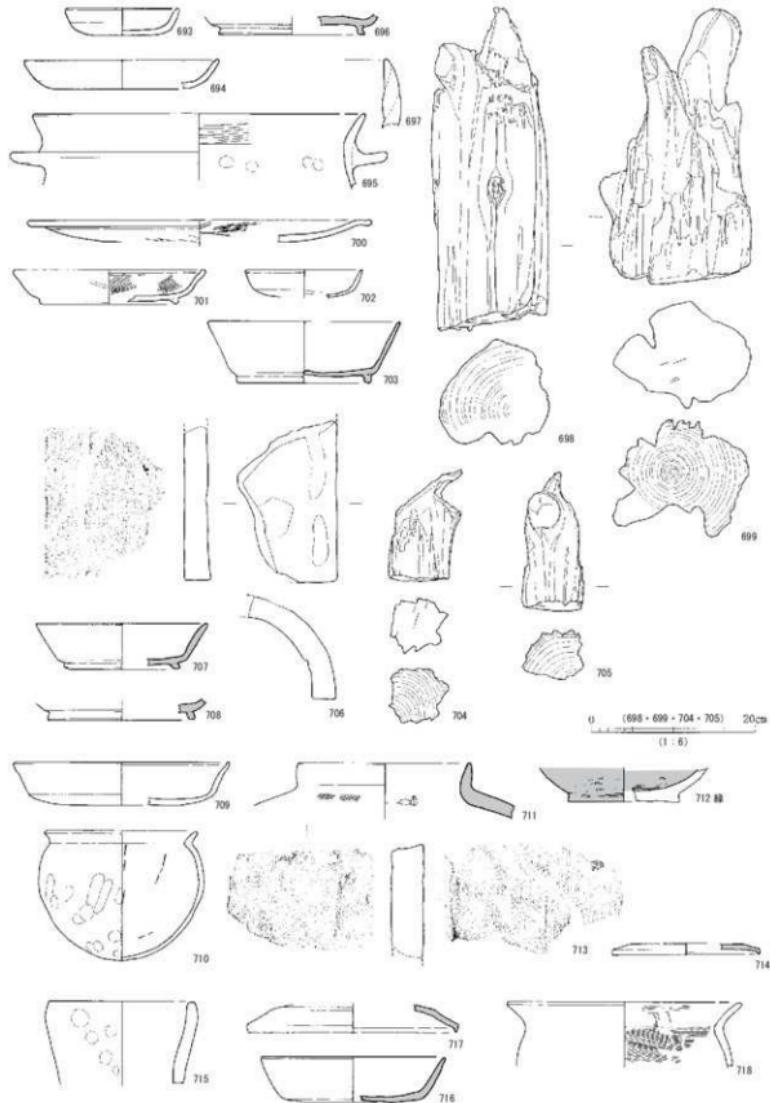


図 162 10 区 (A 2 株) 古代遺物 (3)

(第 4 面面立柱建物 1、第 4・5 面面立柱建物 2・3・4・8 出土)

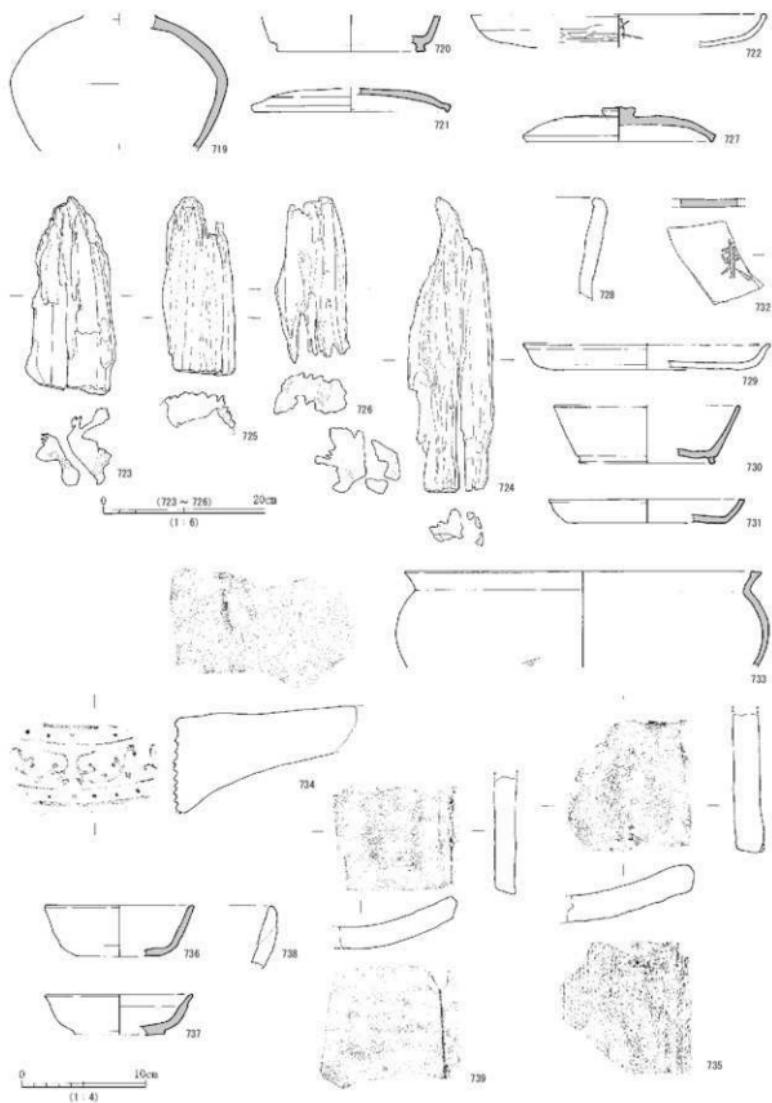


図 163 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (4)

(第4・5面板立柱建物 9、第4面板立柱建物 10、第4・5面板立柱建物 11・12出土)

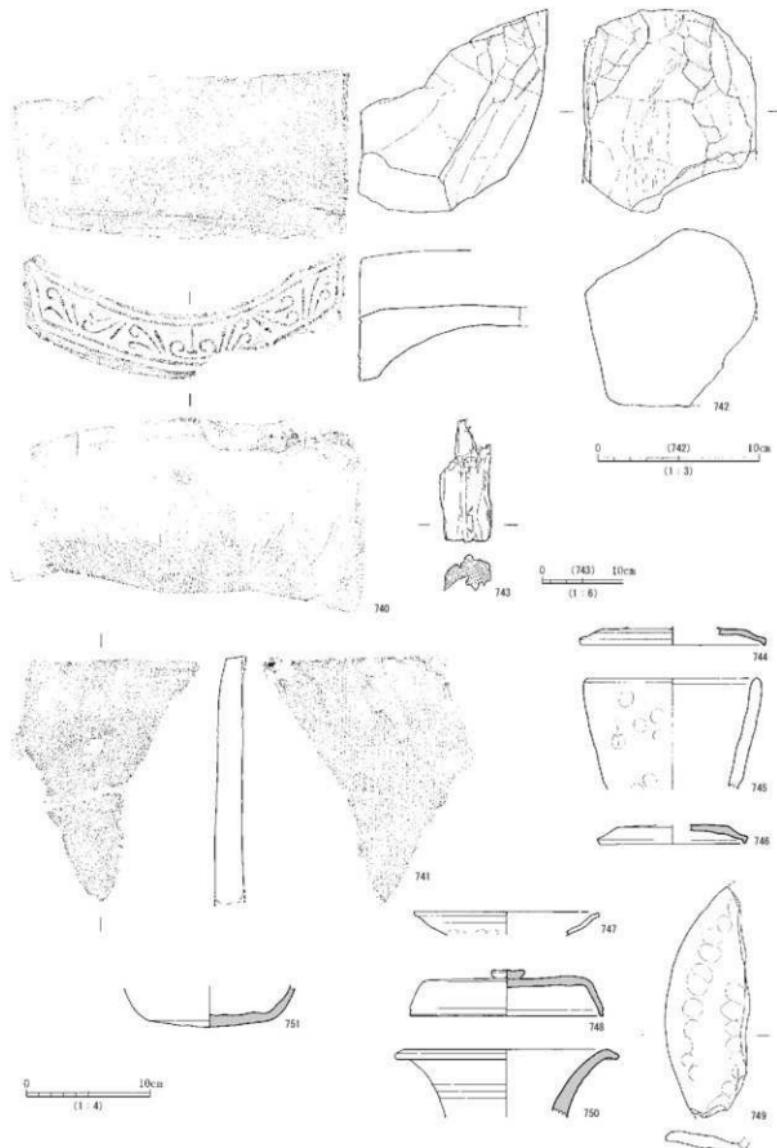


図 164 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (5)

(第 4・5 面断立柱建物 12・13・14・19 出上)

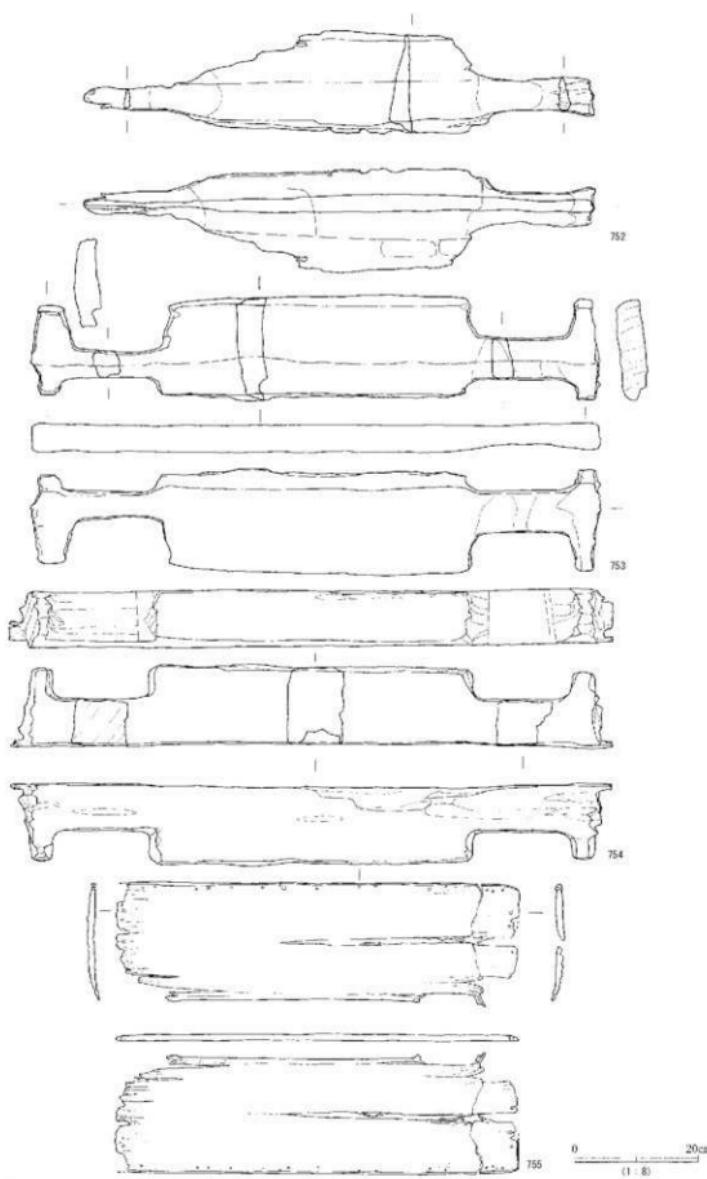


図 165 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (6)

(第4面 353井戸出土)

0 20cm  
(1 : 8)

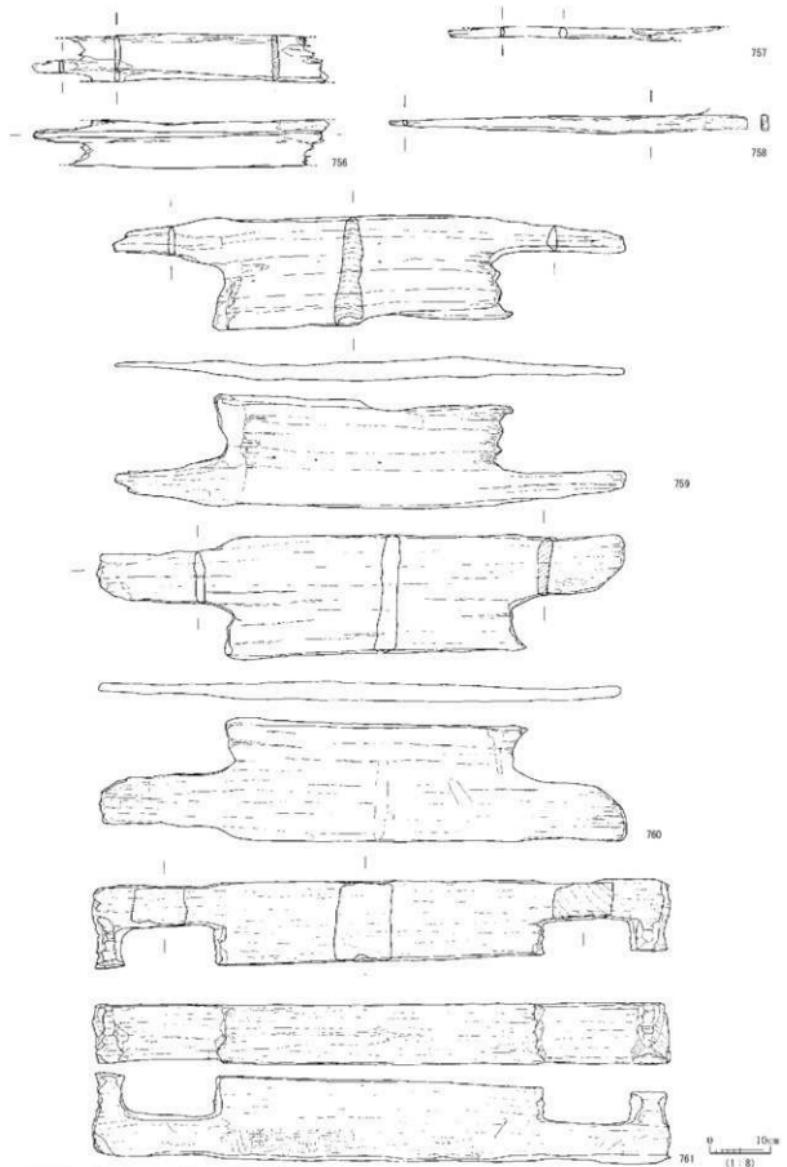
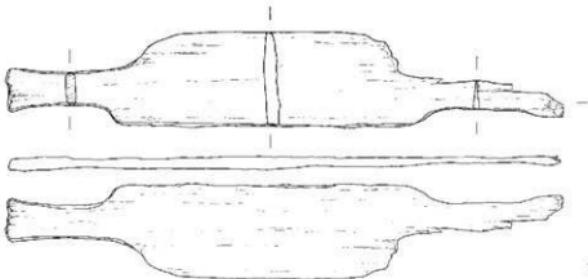
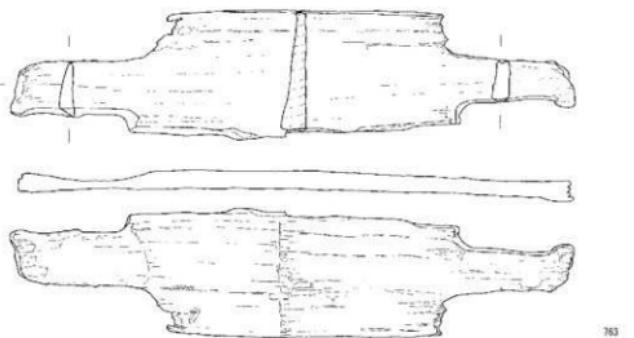


図 166 10 区 (A 2 株) 古代遺物 (7)

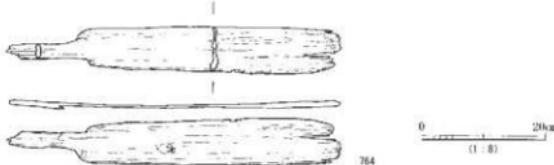
(第4面 353 井戸出土)



762



763



764



765

図 167 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (8)

(第 4 面 353 井戸出土)

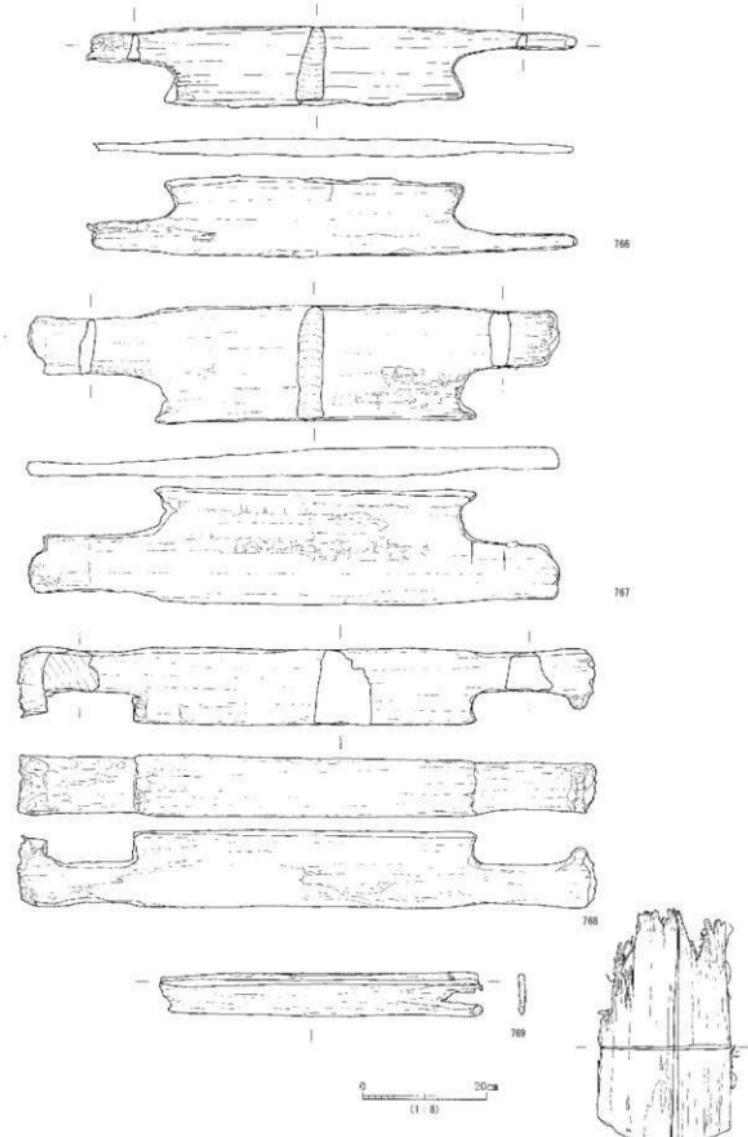


図 168 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (9)

(第 4 面 353 井戸出土)

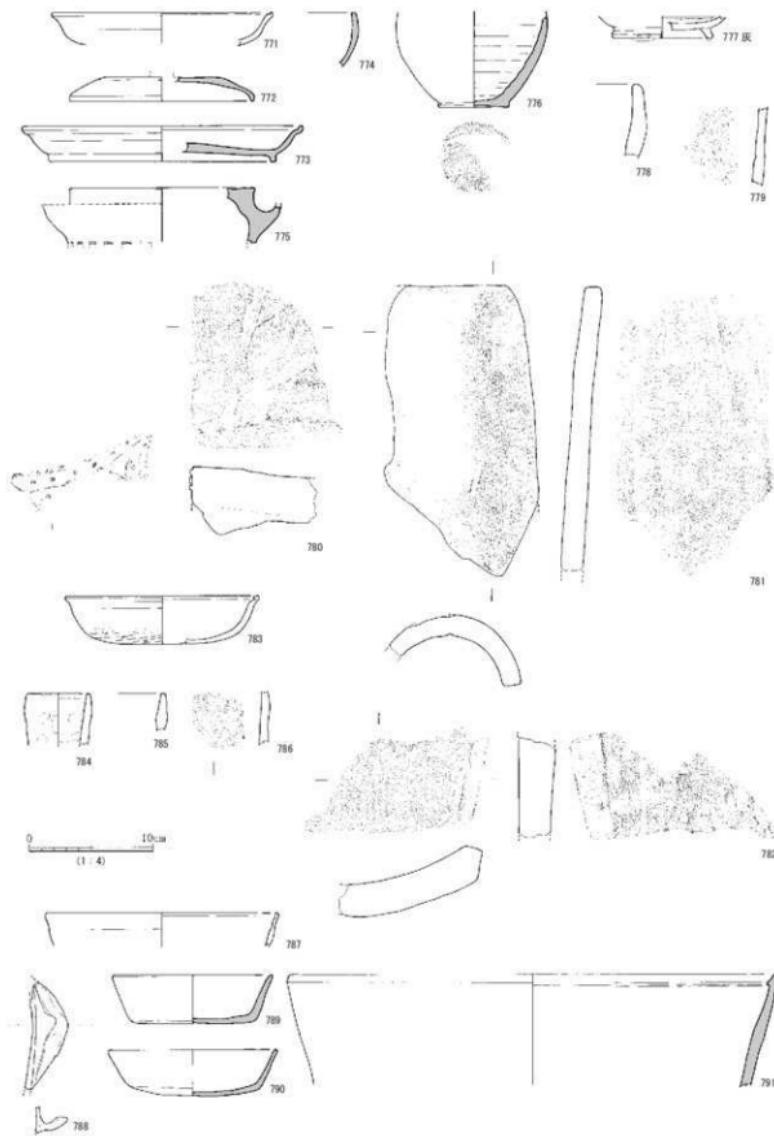
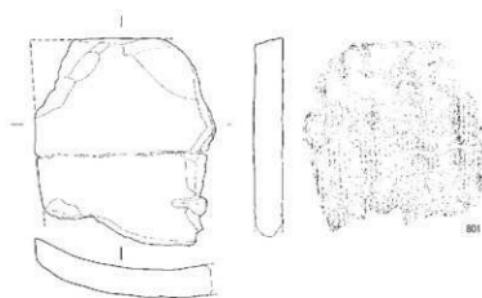
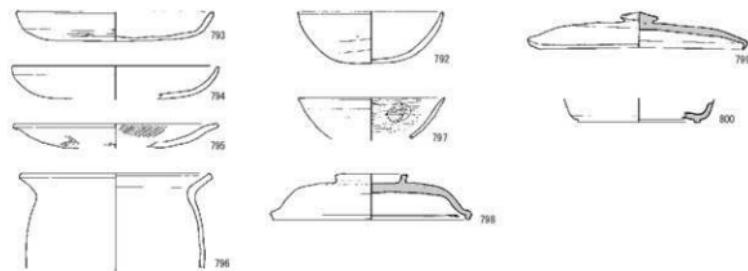


図 169 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (10)

(第 4 面 353・357 井戸、第 5 面 630 井戸出土)



0 10cm  
(1:4)

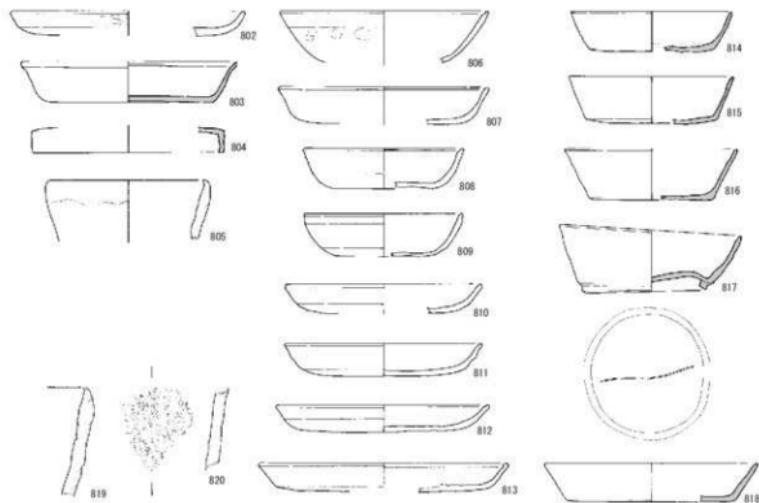


図 170 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (11)

(図 4 面 297・299・300・325・335・356 ピット出土)

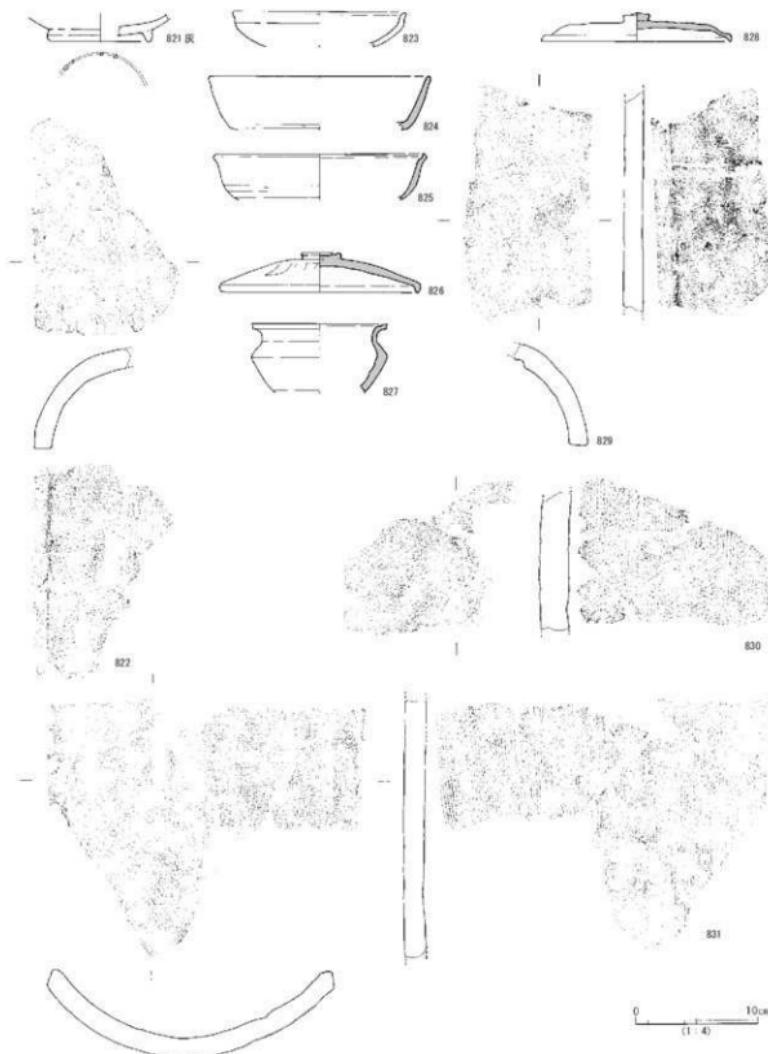


図 171 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (12)

(第 4 画 391・392・403・(434・435)・445 ピット出土)



図 172 10 区 (A 2 株) 古代遺物 (13) (第 5 面 470・471・486・553・559・564・574・617・619・632・633・973 ピット、第 4 面 289 土坑出土)

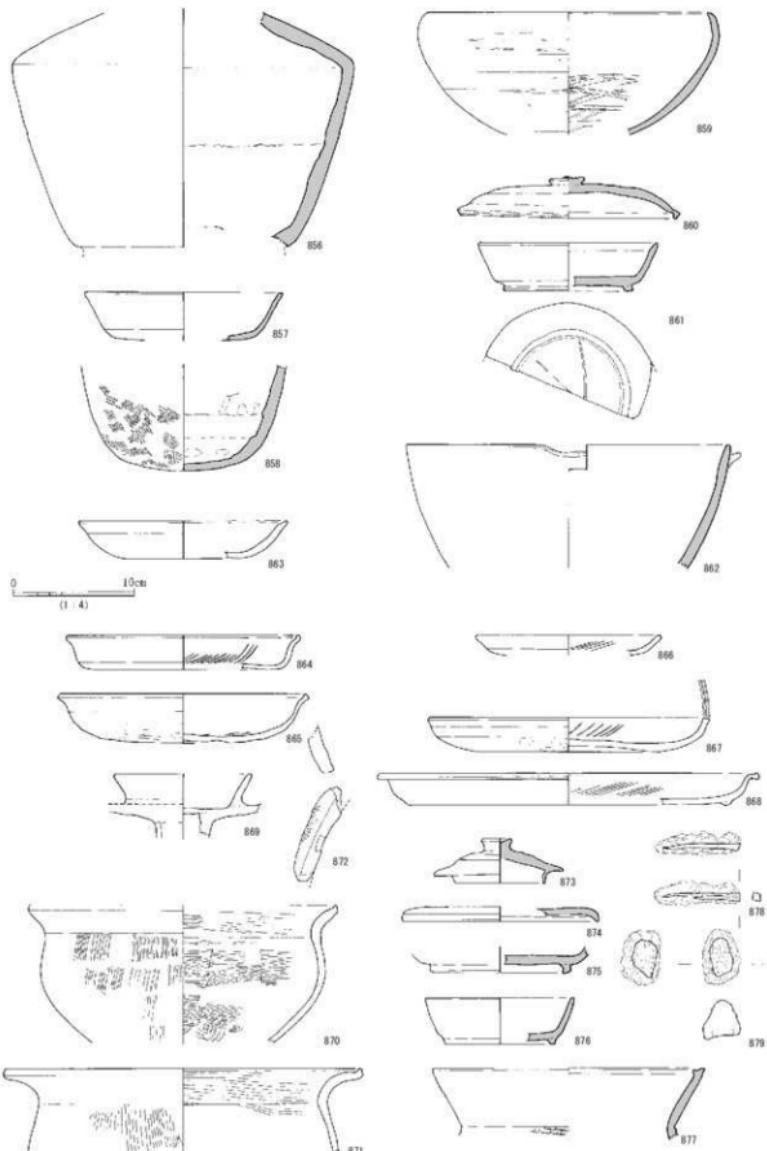


図 173 10区(A2棟) 古代遺物(14)

(第4面 352・354・431・504・685 土灰。329土出)

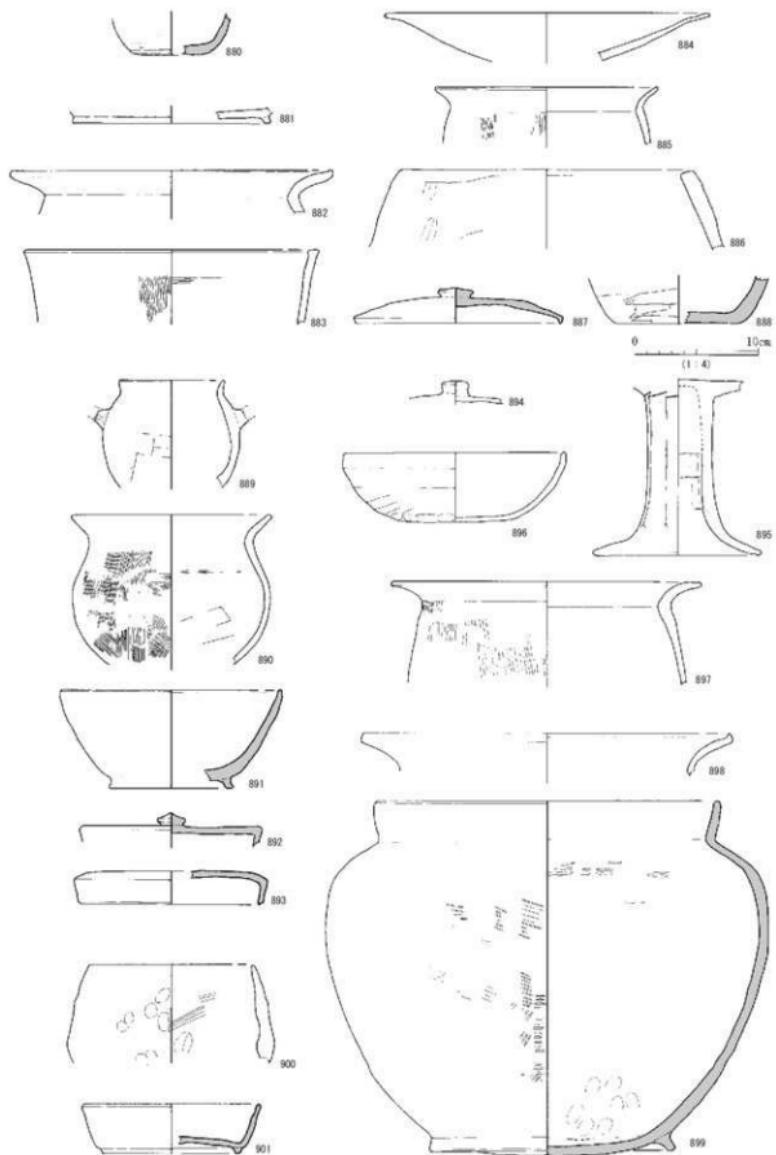


図 174 10 区 (A 2 株) 古代遺物 (15) (第 5 面 457・464・482・588・600 潟、538 落ち込み、第 4 面 298・351・446・447 土器群出土)

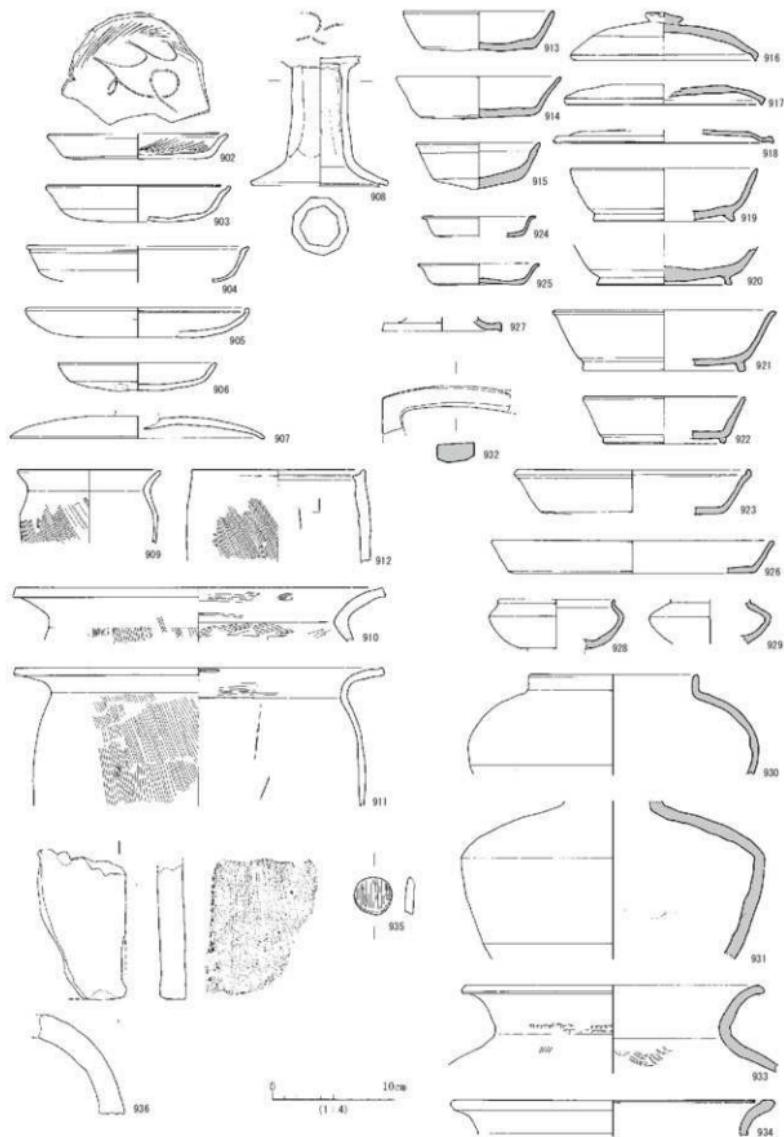


図 175 10区(A-2棟) 古代遺物(16)

(第4層出土)

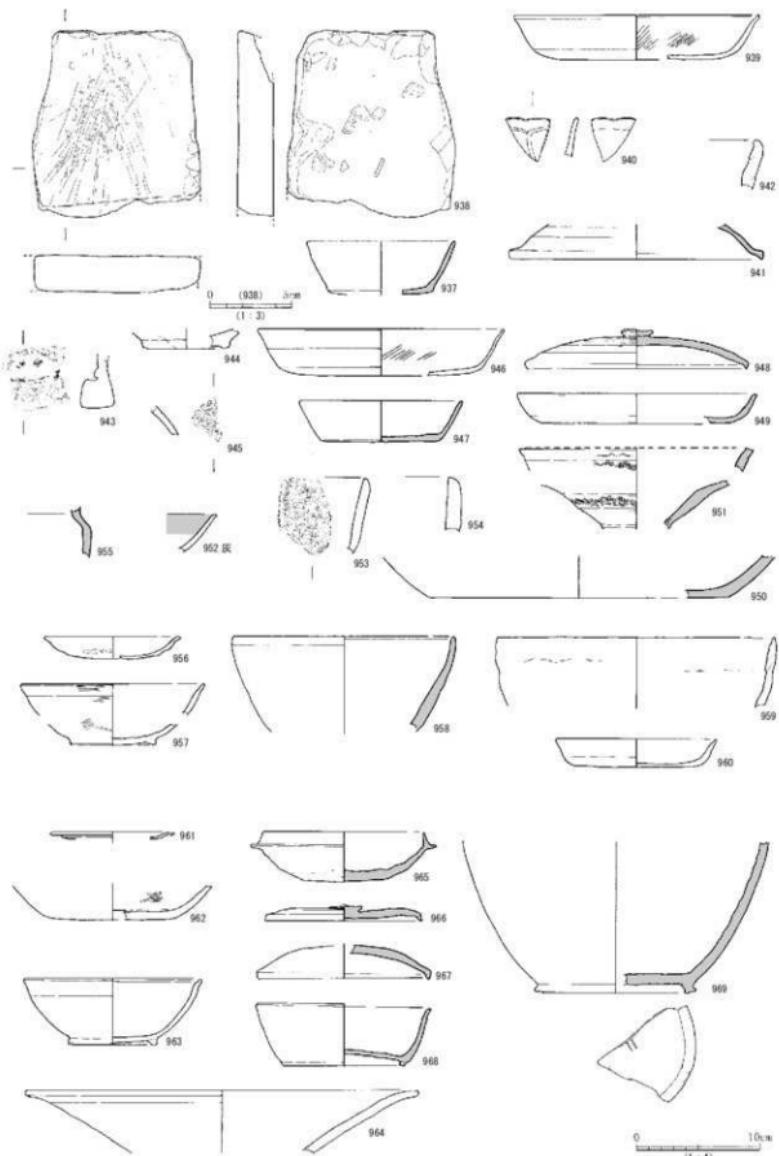


図 176 11区 中世・古代遺物

(第3層下部、第3層以下、第4面 291 ピット、277 土坑、279 土坑、第4層以下、  
第4層、第4層下部、第5面 377・537・539 ピット、568 土坑、第5層出土)

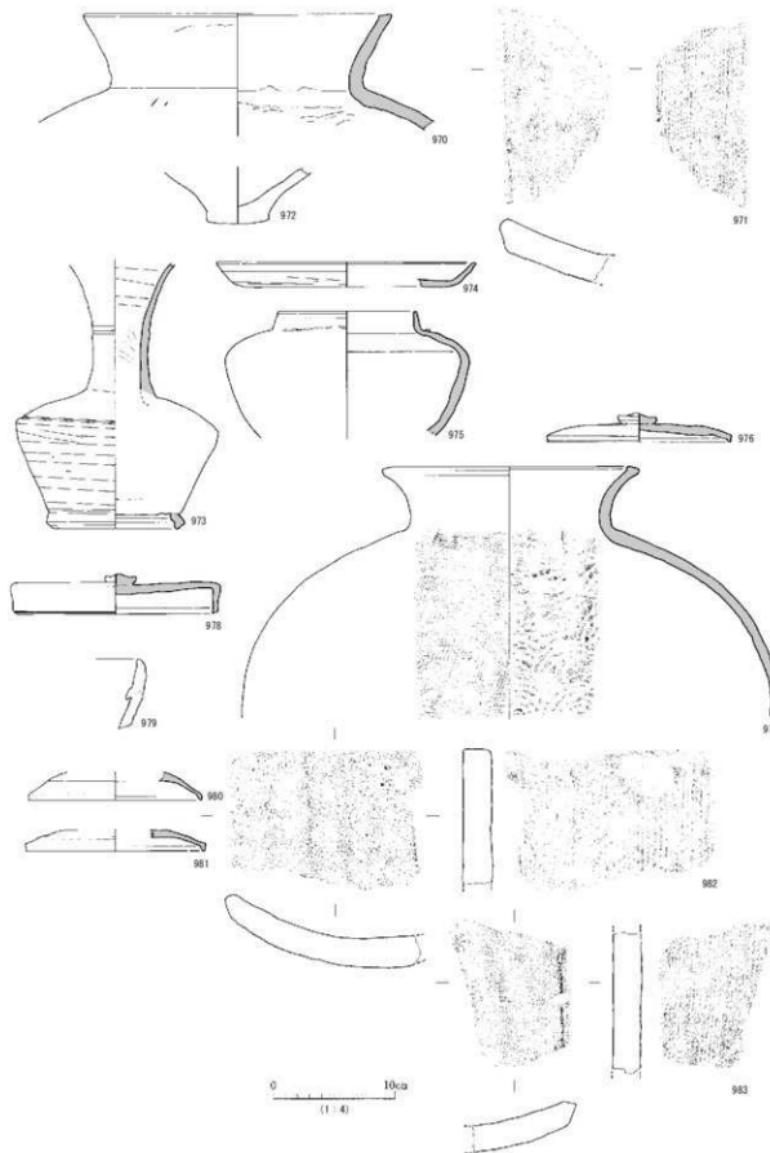


図 177 11 区 古代遺物 (1) (第 5 層、第 6 面板の柱建物 1・3、603・926・(603 or 604)・605・696・840・844 ピット出土) \*972 は朱上面

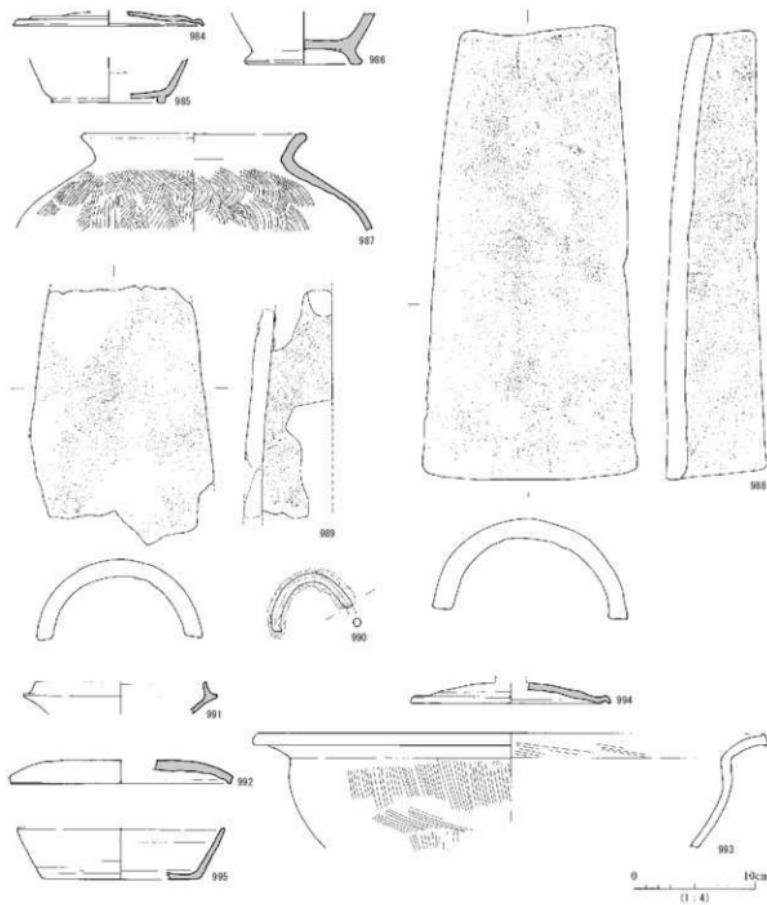


図 178 11 区 古代遺物 (2)

(第6面 674・803 土坑, 426・632・802 深出上)

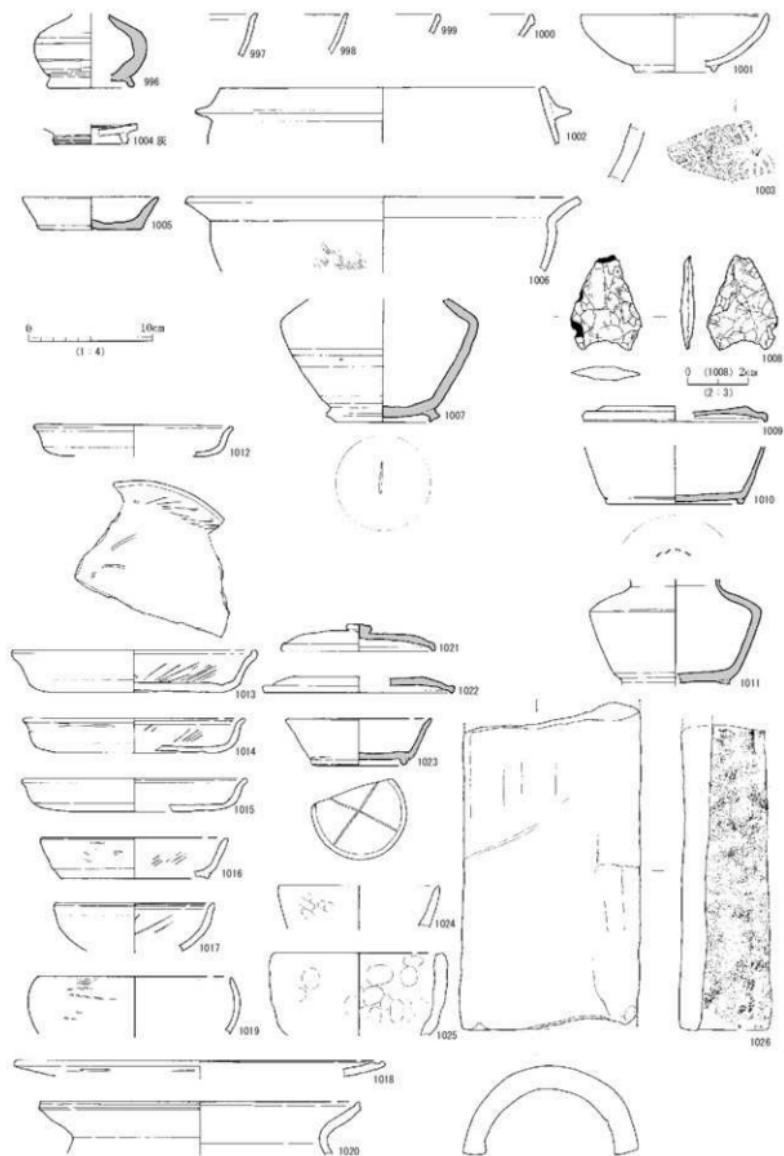


図 179 12 区 中世・古代遺物 (1)

(第 0 層、第 2 層最下部、第 3 層 33 個、48 土坑、第 3 層、第 4 層 89 型穴律物出土)  
\*1008 号調文～弥生時代

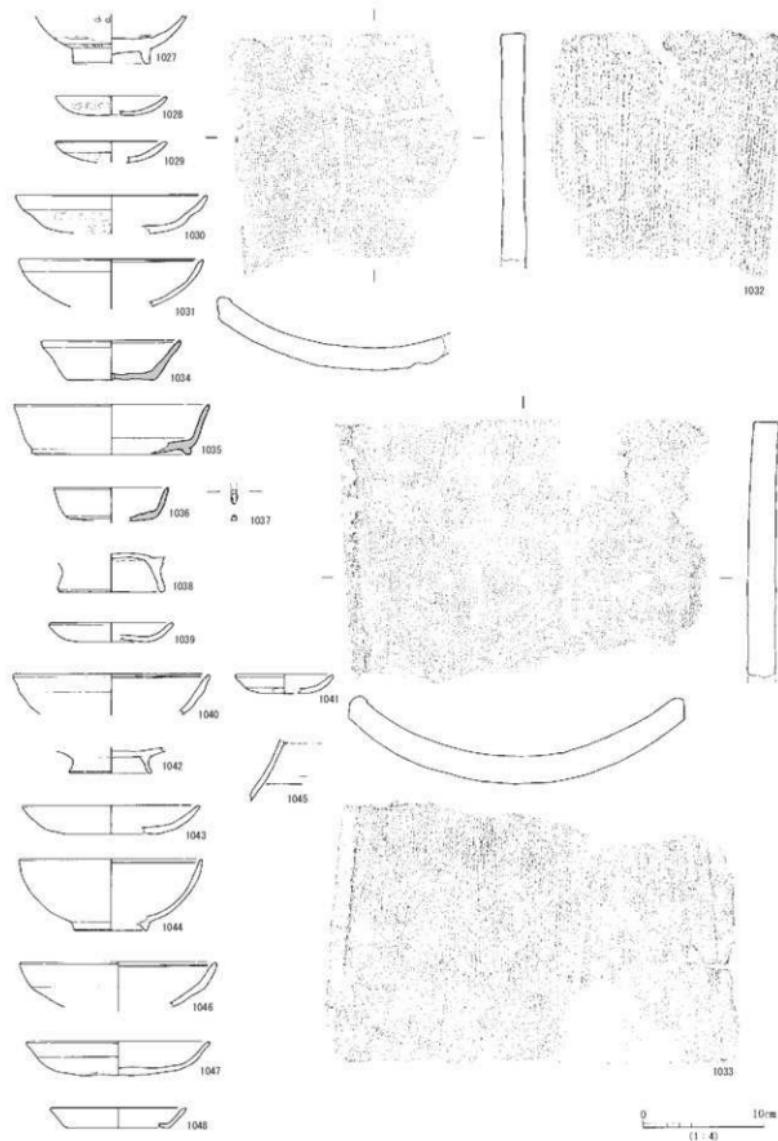


図 180 12 区 中世・古代遺物 (2)

(第4面断立柱建物 2、57・72・124・125・126・130・150・174・179・211・217・235 ピット出土)

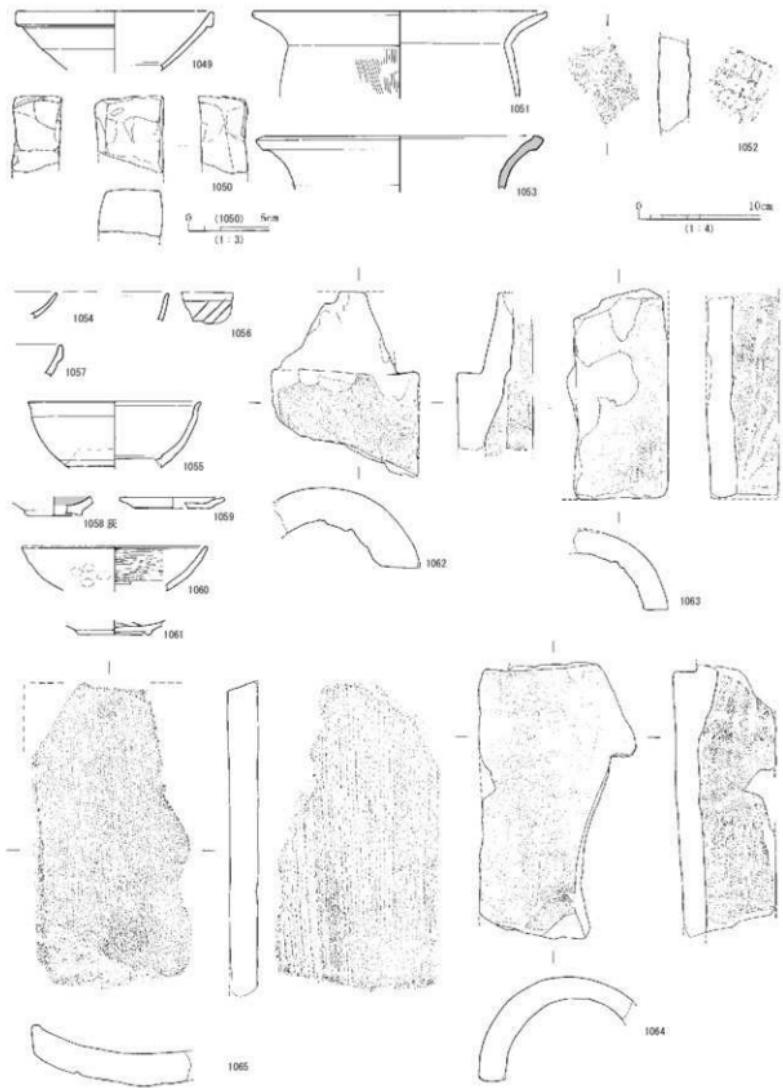


図 181 12 区 中世・古代遺物 (3)

(第4面 249・277・279・289 ピット。85 上原出土)

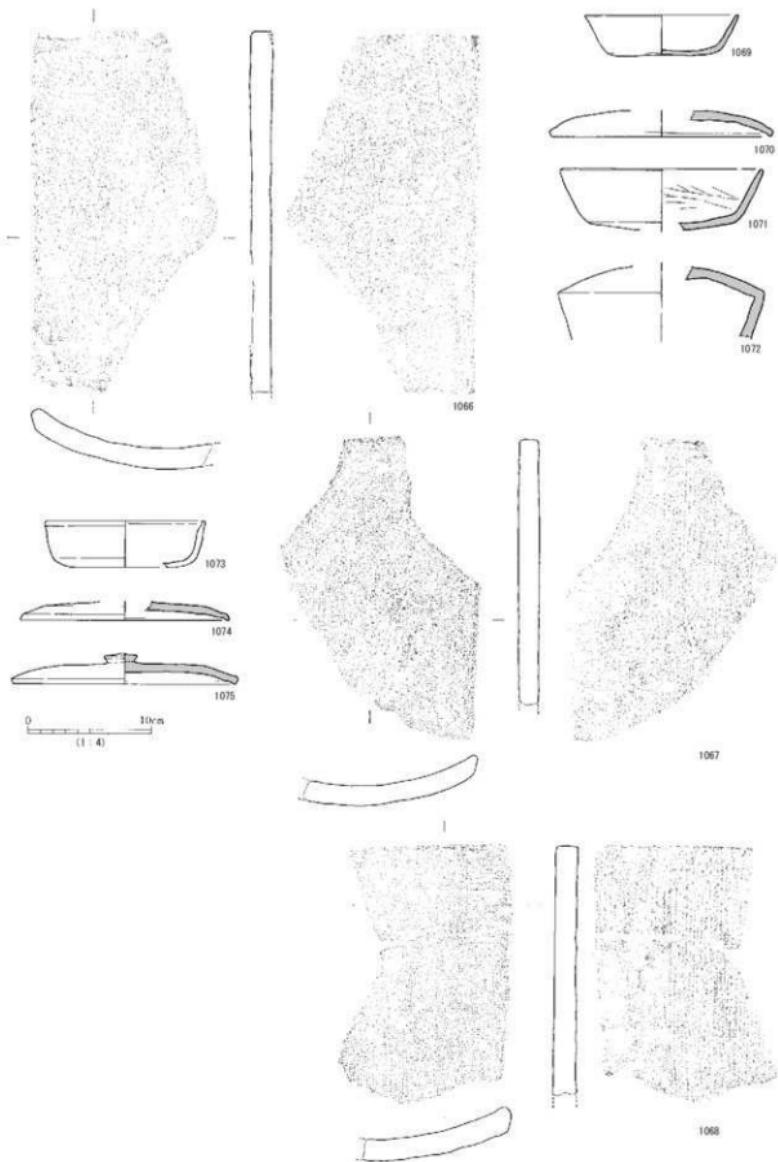


図 182 12 区 古代遺物 (1)

(第4面 85・86・88・90 土坑出土)

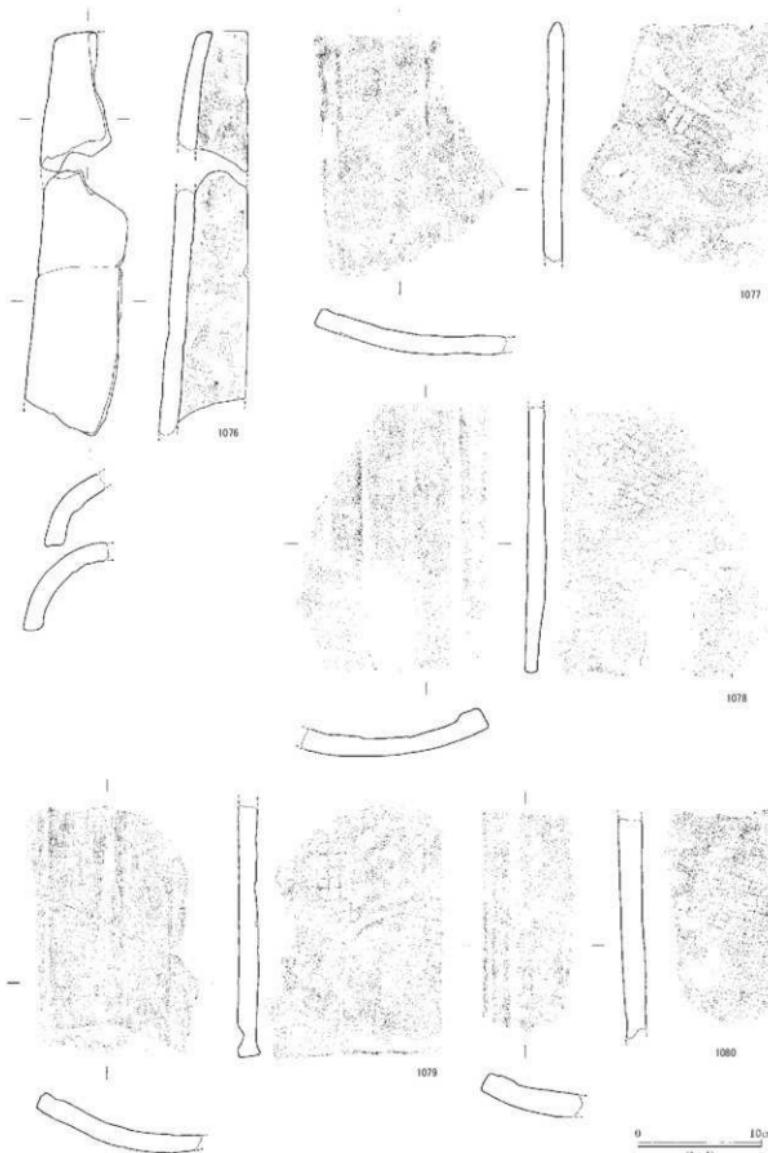


图 183 12 区 古代遗物 (2)

(第4面 78 土坑出土)

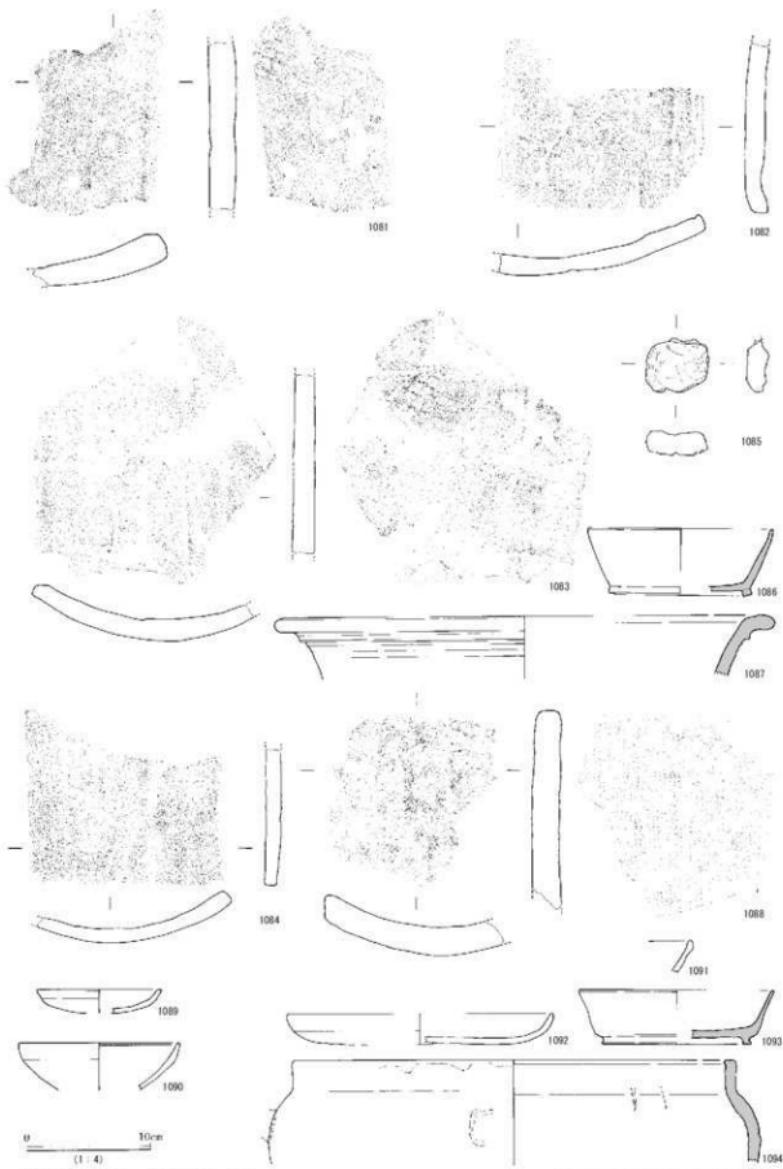


図 184 12 区 古代遺物 (3)

(第4面 78上段、80+81段、74落丸出土)

## 第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体

大阪市立大学 大学院 医学研究科器官構造形態学（解剖学第2） 安部みき子

本遺跡から出土した動物遺存体は17点で、このうち9区334ピット（第6面掘立柱建物1東辺8世紀中頃前後か）から出土した3点は骨の表面の緻密質がはがれたものである可能性が高い。

11区5便槽（第2面男廁 昭和14～20年）の西半から出土した骨は、イヌの左肩甲骨と7点の左肋骨、左右不明の肋骨片が11点で、骨の状態からいずれも幼体である。

同じく5便槽の東半からはイヌの左右の下顎骨と乳白歯、歯の破片の4点が出土しており、左右の下顎骨には第3乳白歯が遺存しており、後臼歯は全て未崩出であった。これらの下顎骨は同一個体であり、永久歯が未崩出であることや乳犬歯の歯槽が深いことなどから、生後6カ月未満と推定される。

さらに5便槽内埋土の西半と東半の骨片も、同一個体の可能性が高い。

表7 禁野本町遺跡の動物遺存体

出土遺構	種名	出土部位		詳細および計測値 (mm)	資料
		左右	部位名		
9区 第6面 334ピット	不明	不明	不明	3点 骨の緻密質の層のみ?	
	イヌ	左	肩甲骨	幼体。関節窩未骨化	資料B
	イヌ	左	肋骨	最大長 52.20	
	イヌ	左	肋骨	最大長 42.14	
	イヌ	左	肋骨	最大長 50.81	
11区 第2面 5便槽 (西半)	イヌ	左	肋骨	最大長 51.79	
	イヌ	左	肋骨	最大長 49.25	
	イヌ	左	肋骨	最大長 45.60	
	イヌ	左	第1肋骨	最大長 29.21	
	イヌ	不明	肋骨	6点 肋骨頭～骨体中央まで遺存	
	イヌ	不明	肋骨	5点 骨体中央～胸骨端まで遺存	
11区 第2面 5便槽 (東半)	イヌ	右	下顎骨	左右ともに第3乳白歯遺存。後臼歯は全て未崩出。	資料A
	イヌ	左	下顎骨	乳犬歯の歯槽あり。生後6カ月未満	
	イヌ	不明	乳白歯	1点	
	イヌ	不明	歯	1点 破片	

表8 イヌの下顎骨の計測値

資料番号	A	
	右	左
下顎骨全長 (1) id - goc	61.36	61.38
下顎骨全長 (2) id - Cm	62.79	62.80
下顎枝長 M 後縁より goc	14.94	14.89
goc より Pm 2 前縁まで	47.47	47.28
歯槽最大長 id - M 後縁	48.58	46.10
頬臼歯長 (1) Pm 1 - M 後縁	37.58	37.08
頬臼歯長 (2) Pm 2 - M 後縁	34.31	35.17
小白歯長 (1) Pm 1 - Pm 4	25.83	25.11
小白歯長 (2) Pm 2 - Pm 4	22.71	23.33
大臼歯長 M 1 - M 後縁	12.63	11.38
顆高 gov - 4	11.31	11.25
下顎枝高 gov - Cr	21.06	21.47
下顎体高 (1) M 後縁	13.89	14.25
下顎体高 (2) M 1 - Pm 4	11.37	11.83
下顎体高 (3) Pm 2 の前	10.60	11.17
下顎体厚 M 1 - M 2	6.95	7.07

表9 イヌの肩甲骨の計測値

資料番号	B	
	左	
肩甲骨長 (肩甲棘に平行な脊椎線から肩甲関節窓前縫間の距離)	38.96	
棘長	30.65	
関節窓最大高	13.56	
関節窓最大幅	8.55	
関節面高	未骨化のため 計測不可	
頭部最小幅	11.40	
頭部最小高	7.23	

## 第7章 禁野本町遺跡の植物遺体

### 1. はじめに

禁野本町遺跡（10・1調査）8区第6面249井戸（奈良時代）出土の植物遺体について報告する。同定分類した植物遺体は、以下のとおりである。

[被子植物（単子葉植物）] ( ) …植生環境を示す。

- |                            |   |
|----------------------------|---|
| 1. イバラモ科 Najadaceae        | イバラモ属 <i>Najas</i> sp. (池沼)             |
| 2. イネ科 Gramineae           | イネ <i>Oryza sativa</i>                  |
| 3. カヤツリグサ科 Cyperaceae (湿地) |   |
| 4. ツユクサ科 Commelinaceae     | イボクサ <i>Aneilema keisak</i> (一年草 水湿地)   |
| 5. ミズアオイ科 Pontederiaceae   | コナギ <i>Monochoria vaginalis</i> (池中 水田) |

[被子植物（離弁花類）]

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| 6. ヒュ科 Amaranthaceae  | ヒュ属 <i>Amaranthus</i> sp. (草本)               |
| 7. バラ科 Rosaceae       | モモ <i>Prunus persica</i>                     |
| 8. カタバミ科 Oxalidaceae  | カタバミ <i>Oxalis corniculata</i> (平地)          |
| 9. ブドウ科 Vitaceae      | ブドウ属 <i>Vitis</i> sp.                        |
| 10. ウリ科 Cucurbitaceae | ノブドウ <i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (山野) |
| [被子植物（合弁花類）]          | ヒヨウタンの仲間 <i>Lagenaria</i> sp.                |
| 11. シソ科 Labiatae      | イヌコウジュ属 <i>Mosla</i> sp. (草地)                |

[珪藻綱 Bacillariophyceae (羽状目 Pennales)] ( ) …生息環境を示す。

- |                           |  |
|---------------------------|--|
| 1. フナガタケイソウ科 Naviculaceae | <i>Pinnularia viridis</i> (湖沼沿岸性)<br><i>Pinnularia borealis</i> (湖沼) |
| 2. ニッチャ科 Nitzchiaceae     | <i>Hantzschia amphioxys</i> (湖沼)                                     |
| 3. イチモンジケイソウ科 Eunotiaceae | <i>Eunotia arcus</i> (広域)<br><i>Eunotia pectinalis</i> (湿地)          |
| 4. オビケイソウ科 Fragilariaeae  | <i>Synedra ulna</i>  |

### (1) 植物遺体についての調査方法

禁野本町遺跡（10・1）の井戸遺構から取り上げられたブロック土を水洗ふるいわけをして、植物遺体を拾い出す。これらの植物遺体は乾燥すると変形して同定調査ができなくなるためサンプル瓶に水没けで保管する。これらの植物遺体の同定は、現生種の知識に基づいて標本と比較対照して行った。

### (2) 珪藻分析

珪藻は主として水域に生息する珪酸の被殻を持つ单細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべて

の水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多様な環境要因に生育する。珪藻の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺体の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に利用できる。

#### 珪藻分析の方法

1. 土壌を約 10g 程度ビーカーに採取して 30%過酸化水素水を加えて、有機物の分解と土壌粒子の分散を行う。
2. 化学反応終了後水を加え一昼夜放置してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す。
3. ビーカーに残った残渣は、遠心分離器により細粒土を回収する。
4. 回収した細粒の適量を取りマウントメディア（封入剤）を用いて、プレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡 400 ~ 1000 倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行いプレパラート全面について精査した。

#### 2. 結果

植物遺体と珪藻分析の結果については、以下に示した。

#### 植物遺体同定結果

ヒヨウタン	果皮片	6 個
コナギ	種子	1 個
カヤツリグサ科	種子	4 個
ブドウ属	種子	1 個
モモ核半分		1 個
カタバミ		7 個
イネ科	苞穎	61 個
イネ科	糊殻	2 個
ヒユ属	種子	15 個
イバラモ属	種子	3 個
イヌコウジュ属	種子	1 個
イボクサ	種子	2 個
ノブドウ属	種子	1 個
計		105 個

#### 珪藻分析結果

<i>Eunotia arcus</i>	4 個
<i>Eunotia pectinalis</i>	4 個

<i>Hantzschia amphioxys</i>	3個
<i>Pinnularia borealis</i>	1個
<i>Pinnularia subgibba</i>	2個
<i>Pinnularia viridis</i>	22個
<i>Synedra ulna</i>	2個
珪藻 遺殻片	5個
計	43個

井戸遺構の堆積環境は、ハネケイソウ属 (*Pinnularia* sp.)、イチモンジケイソウ属 (*Eunotia* sp.) が優占している湿地環境であり、ハリケイソウ属 (*Synedra* sp.) は、一般的に淡水に多く含まれる種類である。これらの種は、通常単独で浮遊生活などが考えられ、これらの生息環境から古環境を推定した。

さて、遺跡から検出される珪藻種に関して、小杉(1986)が陸生珪藻種と水生種に大きく分類している。今回検出した珪藻種は、この分類群から考えると水生種が高率で検出していると同時に、水生植物も優占することから沼沢地の古環境も復元できる。

同時に、井戸から採取した堆積物を観察した結果、その堆積物から検出した珪藻群の特徴から、詳しく分析すればもっと環境変遷を推定できるが、その詳しい解析は珪藻研究者との共同研究が必要なので、局地的な古環境の復元に留めている。

井戸から検出した植物遺体の同定結果水生植物が多く、遺跡周辺の湿地環境を物語ることと近くの丘陵地に、ノブドウなどや雑草類が植生していたとも想像できる。イネ、モモ、ヒヨウタンなど人間活動が盛んなこと、水田農耕など生産活動も盛んであったことも示唆できる。

今回検出した淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区別している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、本試料では水生珪藻が多くを占めており、陸生珪藻は9%以下と極めて低率にしか確認できなかった。

#### 参考文献

1. 大井次三郎、北川政夫(1983) 新日本植物誌 踏花編、至文堂
2. 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用、東北地理 42, p73~88
3. 伊東吉永・堀内誠示(1987) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、Diatom6, p23~44
4. 小杉正人(1989) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用、第四紀研究 27, p 1~20
5. 小杉正人(1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—、植生史研究 1, p29~44
6. K.Kramer,H. Lange-Bertalot(1997) Süsswasserflora von Mitteleuropa 1.Teil:Naviculaceae.Gustav Fischer
7. K.Kramer,H. Lange-Bertalot(1997) Süsswasserflora von Mitteleuropa 2.Teil: Bacillariaceae.Epithemiaceae.Surirellaceae. Gustav Fischer
8. Asai & Watanabe T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa. Diatom 10, 35-47

## 第8章　まとめ

### 第1節　概要

禁野本町遺跡は、淀川を見下ろす台地上に立地する。今回の10・1調査では、15の調査区において、縄文ないし弥生時代から近代までの遺物と古代から近代までの遺構を検出した。

**縄文時代～古墳時代** 今回の調査で最も古い遺物は、縄文時代～弥生時代と考えられる石鐵（図179-1008）である。弥生時代前期～中期の遺構・遺物は見つからなかった。弥生時代後期後半～庄内式頃と考えられる土器（図177-972）が、少量ながら出土した。今回の調査ではこの時期の遺構は検出できなかったが、平成15・16年度調査では竪穴建物が確認されている。

古墳時代中期の遺構・遺物は見当たらず、古墳時代後期～7世紀前半頃までの土器（図146-244・266～268、147-297～299、149-367・370・371ほか）が出土した。

**古代** 調査範囲のほぼ全域で、掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑、ピットなどの遺構群を検出した。出土遺物には、土師器や須恵器（図153・174・175ほか多数）に加えて、百濟寺と同范関係がみられる軒丸瓦（図147-295、150-382）、軒平瓦（図164-740）や長岡京内の鞍岡廃寺出土瓦と同范の軒平瓦（図147-280、163-734、169-780）、製塙土器（図155-515・516・518～520・522・529、158-593・594、161-685～689、169-778・779・784～786、179-1024・1025ほか）、縄釉陶器（図147-283・309、150-374・375・391・397・398、153-473～477、156-553、161-682、162-712ほか）や灰釉陶器（図147-284・285・294・310・311、150-377・378・399・400、153-478・479、158-591・592、161-683・684、169-777ほか）などもある。墨書き土器（図163-732）や陶硯（図147-304、150-390ほか）は検出できたが、木簡は出土しなかった。遺構・遺物を時期的にみると、7世紀中頃～8世紀初頭は希薄だが、8世紀前半～中頃には一定量存在し、8世紀後半～9世紀初頭が主体を占め、9世紀前半～10世紀にも掘立柱建物などがみられる。この傾向は既往の調査とほぼ同様である。

**中世** 遺構・遺物は、12区中央部にまとまって分布する。遺構には、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みがある。出土遺物は、瓦器（図179-1001、180-1044・1046、181-1060・1061ほか）や土師器（図180-1038・1041～1043、181-1059、184-1089ほか）が主体で、白磁（図179-997～1000、181-1049・1054～1057、184-1091ほか）などもある。

**近代** 禁野火薬庫（正式には時期によって出張所、彈薬庫、倉庫、兵器補給廠分廠）の火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、棚、貯水池などの遺構を検出できた。これらは、諸記録と符合するものが多くあり、実年代の特定や構造物配置の変遷を検証することが可能な資料である。また、砲弾（図139-144～152）、薬莢（図140-160～174）、信管類（図140-175～188）、弾丸を保持する木製品（図141-203～142-208）などの軍事関連遺物や、便槽として用いられた鉢（図128-19～129-25）、土管（図129-26～131-45）、瓦（図131-46～133-63）、煉瓦（図134-64～135-78）、各種金属製品（図136-79～137-125、137-127～138-142）などの建築関連遺物、犬釘（図143-209～226）、枕木（図143-227～144-235、145-238～243）、レール（図144-237）、といった軽便鉄道関連遺物も、近代遺跡ならではの貴重なものである。

以下に、今回の中心的な調査対象となった古代の建物と明治時代後葉から太平洋戦争終結までの禁野火薬庫の変遷をまとめる。

## 第2節 古代集落の変遷

今回の発掘調査では、主に最終遺構面において重複関係の著しい掘立柱建物群、竪穴建物、溝、井戸、土坑、ピットなどの遺構と、須恵器や土師器といった一般的な土器はもちろん、長岡京内の遺跡出土瓦と同範囲にある軒瓦、綠釉陶器や灰釉陶器などの遺物を検出した。

今回の調査で検出した古代（一部中世を含む）の遺構の全容を付図1と図185に掲げ、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、その他主要な遺構の変遷を図186・187に示した。

**10区（A2棟）の掘立柱建物・柱列** 10区（A2棟）第4・5面では、今回の調査で最も密度高く遺構が検出できた。調査地全域の古代集落の変遷をたどる前に、それらを簡潔に整理しておく。

10区（A2棟）第4・5面で検出した掘立柱建物・柱列のうち、ほぼ全てのピットにおいて柱根または柱痕跡が認められたものは掘立柱建物1・2・4・6・8・9・10と柱列5・7である。掘立柱建物3・11・18でも一部のピットで柱痕跡が見つかった。掘立柱建物12・13・14・17・19と柱列15・16についてはピットの平面分布からその存在を推定復元したが、断面観察では柱痕跡は認められなかった。

10区（A2棟）の掘立柱建物自体やそれを構成する個々のピットの重複関係と出土遺物の時期を照合すると、おむね古→新への変遷が追認できるとともに、掘立柱建物10（古代）→掘立柱建物3（9世紀前半）→掘立柱建物18（10世紀）の変遷も導かれる。掘立柱建物1（8世紀中頃～末）と掘立柱建物6（古代）と掘立柱建物8（8世紀中頃～後半）と掘立柱建物19（古代）などが重複関係にあることから、10区（A2棟）第4・5面では、8世紀中頃～末に数回の建物群の変遷があったことも確認できる。

**建物の主軸方位** 古代集落の研究においては、建物の主軸方位の検討が大きな比重を占めている。禁野本町遺跡の既往の調査でも、とくに南方約500mに位置する百済寺跡の中軸線（N4°30'W）との関係に着目して、掘立柱建物の主軸方位が検討されている。

ここでは、平成15・16年度調査でのA～Cグループ（に若干の幅をもたせた）にDグループ（N8°～14°W・N76°～82°E）とその他（「他」）を追加し、表10の主軸方位欄に記号で示した。

Aグループ〔北でわずかに東偏（N3°～5°E）またはこれに直交する〕は、各時期に散発的に存在する。

Bグループ〔北でわずかに西偏（N2°～5°W）またはこれに直交する〕は百済寺跡の中軸線であるN4°30'Wとほぼ同様な主軸方位で、8世紀中頃～末に位置づけられる11棟の掘立柱建物のうち8棟を占める。

Cグループ〔ほぼ東方向（E1°～2°N）を向く〕の10区掘立柱建物20・柱列5は出土遺物からは時期が特定できないが、Bグループの南北建物と主軸方位が直交する東西建物として大きな違和感はない。

10区掘立柱建物19を時期不詳の柱列7・15・16とともにDグループとしたが、それらはBグループよりもさらに北で西偏するものである。

A～Dグループに該当しない掘立柱建物のうち、11区掘立柱建物3は柱穴からの出土土器に年代幅があり、10区掘立柱建物11は建物北東部のみの検出で全体像が判明しないものである。8世紀末～9世紀初頭の5区掘立柱建物2や10世紀後半の10区掘立柱建物14が8世紀に類例の多いBグループと主軸方位が異なることは、時期差を表す傍証ともなりうる。

**集落の変遷** 以上の整理を踏まえ、遺構の状況、出土遺物、重複関係などを勘案すると、今回の調査地における古代を主体とする集落は次のように変遷したと考えられる（図186・187）。

**6世紀後半** 今回の調査地における集落の初現である。5区第3面堅穴建物1・2がある。その他、この時期の土器を含む土坑やピットも調査地に散在する。

これに続く7世紀～8世紀初頭の遺構・遺物は希薄である。

**8世紀前半～中頃** 建物では9区掘立柱建物2、10区掘立柱建物2、11区掘立柱建物3が出現する。それらのうち10区掘立柱建物2は総柱建物である。さらに、8区第6面249井戸、12区第4面78土坑をはじめ、多くの溝、土坑、ピットもこの時期に存在する。

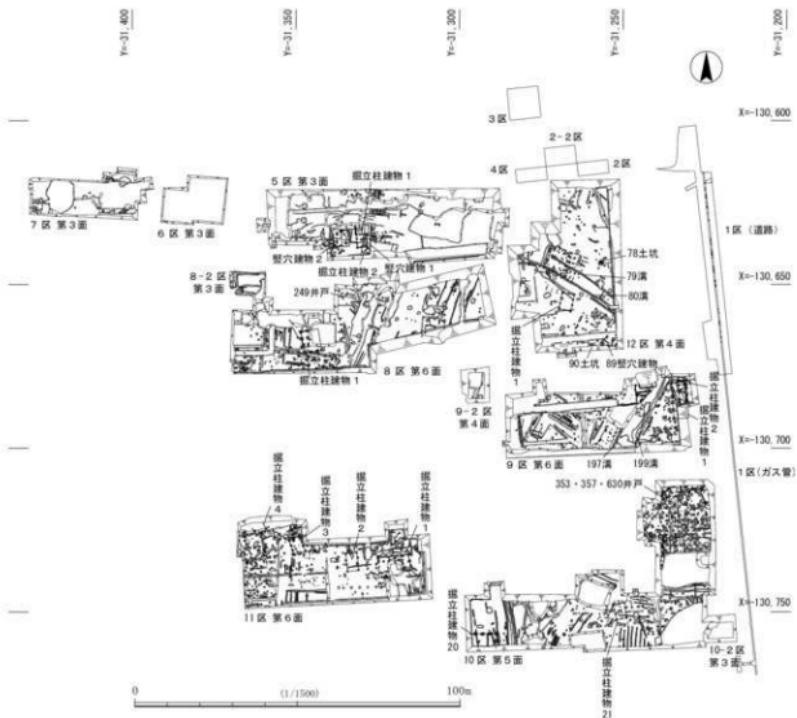


図185 古代の主要遺構

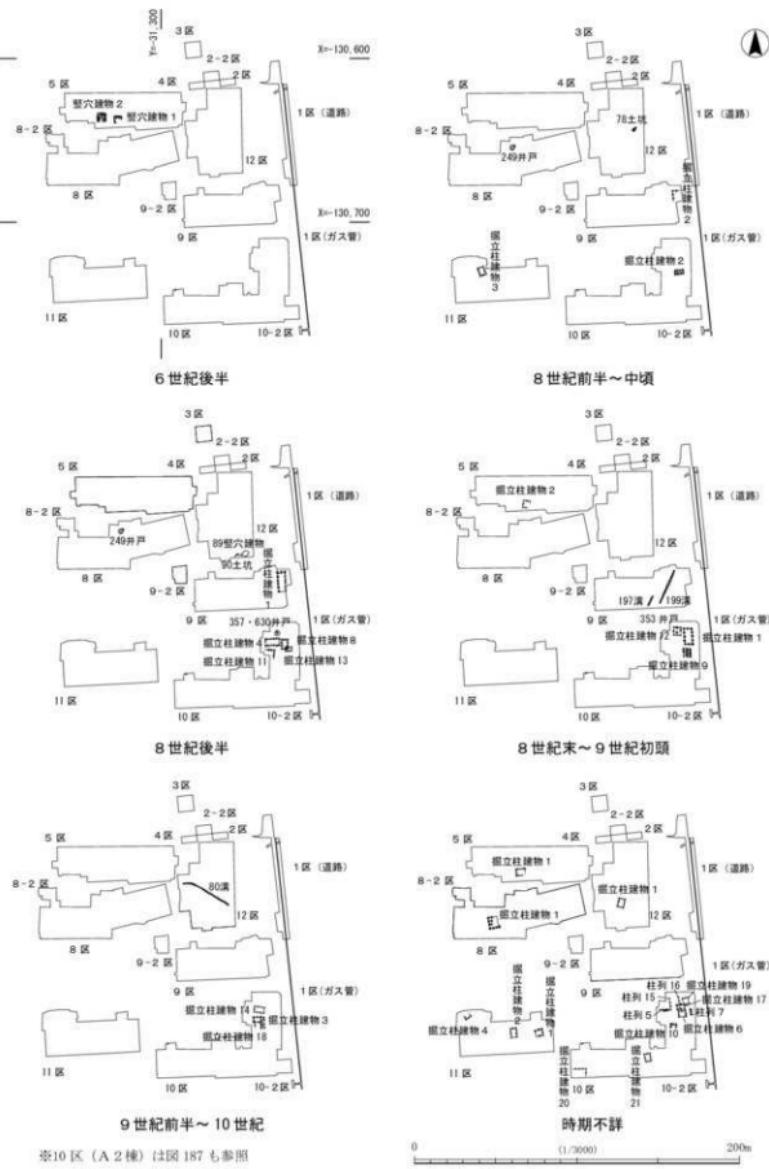


図186 古代の建物等の変遷（全体）

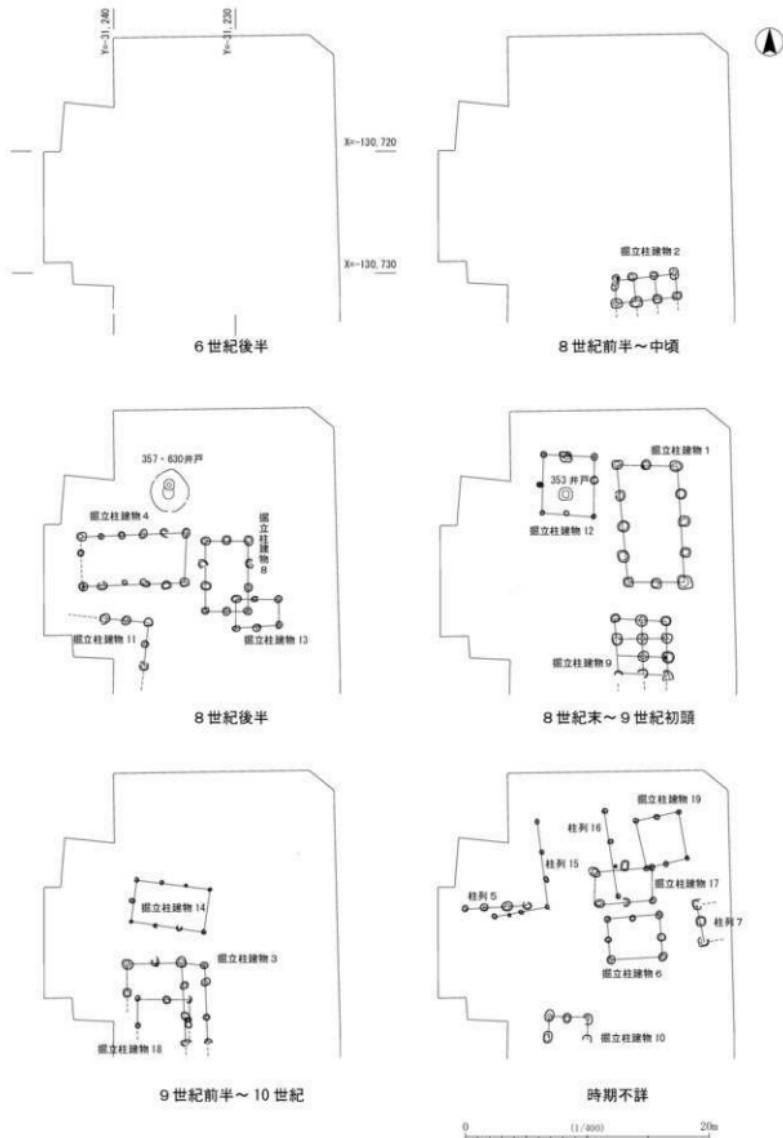


図187 古代の建物等の変遷 [10区 (A 2棟)]

**8世紀後半** この時期は、百済王氏がこの付近に居住していたと考えられている。遺構・遺物は多く、9区掘立柱建物1や10区掘立柱建物4・8のように、百済寺と主軸方位の近似した南北または東西方向の掘立柱建物（Bグループ）が目を惹く。これに加えて、表10に掲げるように、今回検出した8世紀前半～末の11棟の掘立柱建物のうち8棟を百済寺跡の主軸であるN4°30'Wに近いBグループが占める。時期不詳の掘立柱建物のうち主軸方位Bグループもこの時期に属する可能性が高い。なお、禁野本町遺跡における既往の調査で検出された8世紀代の建物も、同様の主軸方位であるものが多い。

**12区第4面89堅穴建物**は堅穴としては比較的小規模で、隣接する90土坑も堅穴建物の一部である可能性が高い。住居というよりは工房的な性格の建物とも考えられる。

**10区（A2棟）**北西部に位置し3基の井戸が重複関係にあるうち、古い方の630・357井戸もこの時期の所産である。その他、溝、土坑、ピットなどの遺構も多い。

**8世紀末～9世紀初頭** 10区では、南北に長い掘立柱建物1、その南に総柱の掘立柱建物9、西に横板井籠組構造の353井戸とその井戸屋形と考えられる掘立柱建物12が、それぞれ近接しながら重複なく存在する景観が想定できる。5区掘立柱建物2もこの時期の可能性が高い。

**9区199溝**からはこの時期の土器が出土し、それと対になる197溝とともに、道路側溝であると考えられるが、百済寺中軸線を基準とした方形区画とは主軸方位が異なる。

なお、10区第4面西部の一段低い部分（第5面934溝よりも西の部分）は、南に隣接する財団法人枚方市文化財研究調査会による禁野本町遺跡第172次調査（『禁野本町遺跡第172次調査 第2回現地説明会資料』2011年8月6日）や奈良時代型方形地割復元モデルなどと対照すると、南北方向の道路部分に該当する可能性もある。

**9世紀前半～10世紀** 10区掘立柱建物3には8世紀の土器とともに9世紀前半の土師器や縁釉陶器が、10区掘立柱建物18には細片だが黒色土器A類が、10区掘立柱建物14には10世紀前半と考えられる土師器がそれぞれ伴っている。ことに掘立柱建物14は、柱穴が小規模な円形であることや主軸方位がこの遺跡の8世紀前後の掘立柱建物と異なる。ほかにこの時期の土師器や黒色土器A類を含む遺構もあるが、その数は少ない。

**12区80溝**（と無遺物だがそれと対になる79溝）も、前出の9区第6面197・199溝と同様に道路側溝である可能性が高い。時期の違いによるものかあるいは地形的な制約によるものかは不詳だが、両者とも百済寺中軸線とは主軸方位が異なりながらも直交しない。

**時期不詳** 時期不詳の掘立柱建物などについても、既往の調査成果、建物の新旧関係、建物の配置、出土土器の時期、柱間寸法などを含めて時期を検討した。しかし、10区（A2棟）にみられるように、主軸方位が共通していても重複関係があり同時存在ではない掘立柱建物同士の例も多く、主軸方位のみでその変遷を跡づけることは難しい。ただし、遺構の出現頻度と細片ではあるが出土土器の時期から、8世紀中頃～9世紀の遺構が主体であると推定できる。

他の建物に比べて正方位からの傾きの大きい10区掘立柱建物19や柱列7・15・16は、配置や類似した主軸方位からみて、この一群が同時期の可能性があろう。

また、12区では中世のピット群も正方位ではなく8世紀の溝と若干は角度を違えながらも西北西・東南東に並ぶことから、この場所ではおそらく地形的な条件により西北西・東南東方向の土地利用がなされていた可能性もある。

禁野本町遺跡の南方数百mに百済寺跡が存在する。百済寺が百済王氏の建立になるもので、禁野本町

表 10 古代の掘立柱建物・柱列

推定期期	掘立柱建物・柱列							
	区	検出面	遺構名	構造	主軸方位	桁行(m)	梁行(m)	面積m <sup>2</sup>
8世紀前半～中頃	9区	第6面	掘立柱建物2	側柱?	N5W	B	2間以上	1間以上
	11区	第6面	掘立柱建物3	側柱	N20W	他	3間(4.8)	2間(3.6)
8世紀中頃	10区	第4・5面	掘立柱建物2	総柱	N5W?	B	2間以上	3間(4.8)
8世紀中頃～後半	9区	第6面	掘立柱建物1	側柱	N5W	B	5間(11.5)	2間(4.5)
	10区	第4・5面	掘立柱建物8	側柱	N1W	B	3間(5.8)	2間(3.6)
8世紀後半	10区	第4・5面	掘立柱建物4	側柱	N87E	B	5間(8.6)以上	2間(4.1)
	10区	第4・5面	掘立柱建物11		N4E?	A	2間以上	2間以上
	10区	第4・5面	掘立柱建物13	側柱	N85E	B	2間(3.5)	1間(2.3)
8世紀中頃～末	10区	第4面	掘立柱建物1	側柱	N4W	B	4間(9.6)	2間(4.8)
	10区	第4・5面	掘立柱建物9	総柱	N3W	B	3間(4.3)以上	2間(4.0)
8世紀後半～末	10区	第4・5面	掘立柱建物12	側柱	N1E	A	2間(4.9)	2間(4.2)
8世紀末～9世紀初頭	5区	第3面	掘立柱建物2		N8E	他	2間(4.2)	2間(3.9)
9世紀前半	10区	第4・5面	掘立柱建物3	側柱	N3W	B	3間(6.5)以上	2間(4.5)
10世紀前半	10区	第4・5面	掘立柱建物14	側柱	N82W	他	3間(6.0)	2間(3.5)
10世紀	10区	第4・5面	掘立柱建物18	側柱	N1E	A	2間(3.7)以上	2間(3.5)
古代	5区	第3面	掘立柱建物1	側柱	N86E	B	4間(5.6)	3間(4.0)
	8区	第6面	掘立柱建物1	総柱	N10W	D	3間(6.7)	3間(5.9)
	10区	第4・5面	柱列5		N89E	C	3間(5.1)以上	
	10区	第5面	掘立柱建物6	側柱	N87E	B	2間(4.2)	2間(3.3)
	10区	第5面	柱列7		N12W	D		2間(3.3)
	10区	第4面	掘立柱建物10	側柱	N1E	A	2間以上	2間(3.1)
	10区	第5面	柱列15		N8W N80E	D	3間(7.1)	2間(4.5)
	10区	第5面	柱列16		N10W	D	3間(7.0)	
	10区	第4・5面	掘立柱建物17	側柱	N85E	B	2間(4.9)	1間(2.7)
	10区	第5面	掘立柱建物19	側柱?	N12W	D	2間(3.8)	2間(3.4)
	10区	第4面	掘立柱建物20	側柱	N89E	C	3間(6.3)以上	2間以上
	10区	第5面	掘立柱建物21	側柱	N9W	D	3間(4.8)	2間(3.4)
	11区	第6面	掘立柱建物1	総柱?	N76E	D	2間(4.2)	2間(3.9)
	11区	第6面	掘立柱建物2	側柱	N6W	B	3間(5.5)	2間(3.4)
	11区	第6面	掘立柱建物4		N55W?	他		2間(3.7)
	12区	第4面	掘立柱建物1	側柱	N9E	他	3間(5.3)	2間(3.8)
								19.7

遺跡がその居住域であるとする見解が今日一般的である。

今回の調査地における集落は、時期的にみると、6世紀末頃から10世紀にいたる期間の掘立柱建物などが展開するが、百濟寺が創建された8世紀後半から9世紀初頭にかけての数十年間が盛行期であった。

位置的には、百濟寺を基準に想定されている方形区画復元案ではその北西端から外方にあたる。百濟寺の主軸方位であるN 4° 30' Wに近い掘立柱建物が多いが、やや遠方にあるためか主軸方位の異なる掘立柱建物や方位の異なる道路側溝と思しき溝も検出された。既往の調査成果でも台地西端部では主軸方位の異なるものもあり、自然地形の制約や百濟寺との距離に反比例する形で、計画的な地割りは徹底されていなかったと考えられる。

### 第3節 禁野火薬庫の変遷

禁野火薬庫（正式には時期によって出張所、弾薬庫、倉庫、兵器補給廠分廠）は、明治30（1897）年から昭和20（1945）年まで存続した。交野台地の北西端部にあたる平成15・16年度調査地は、主に明治29（1896）年に用地買収された部分であり、明治30（1897）年の禁野火薬庫（当時は禁野出張所）開設当初からの遺構が検出された。それに対し、その北から東に隣接する今回の禁野本町遺跡10・1の調査地は、明治39（1906）年から明治43（1910）年にかけて用地が買収され、それ以降に施設の設置が行われた範囲を中心とする。

発掘調査により、多数の砲弾、薬莢、薬包などの軍事関連遺物や、瓦、煉瓦、枕木、レール、犬釘といった建築・鉄道関連遺物とともに、火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、廐、貯水池といった禁野火薬庫の諸施設を検出した。

一方、図面など禁野火薬庫の記録も残されている。表11に掲げるよう、開設から大正12（1923年）までについては現存する図面類は少ないが、大正13（1924）年から昭和14（1939）年の爆発にいたるまでは『大阪陸軍兵器補給廠歴史』所収の「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫圖」や「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要圖」などによりほぼ毎年の状況が判明する。爆発後も、その後、太平洋戦争中の昭和17（1942）年、昭和20（1945）年の終戦後の状況が記録されている。図面などの記録によると、施設の建築、施設の改造や用途の変更、あるいは名称の変化などが著しい。

検出できた遺構と図面などの記録を対比しながら、禁野火薬庫の構造物の実年代の特定や配置の変遷を簡潔にたどる。平成15・16年度と今回の調査で検出した禁野火薬庫関係の遺構の全容を付図2と図188に掲げ、変遷を表12と図189～197に示した。各図に示した建物などの規模・形状には一部想定復元を含む。また、その時点よりも古い施設を薄く表示した。

なお、各年の配置図では範囲外になるので付図2にのみ掲げるが、平成15・16年度調査地の南西端でわずかに検出された建物がある。これは、明治30年の火薬庫創設以来、手入場とされていた部分に、昭和11（1936）年に雑物庫として建てられ、昭和12年から昭和14年3月1日の爆発まで第1号雑器庫と呼称されていたものである。

「大阪兵器支廠禁野彈薬庫一般配置図」[明治42（1909）年]との対比（図189）

土塁や軽便軌道の設置は進んでいる。しかし、火工場や火薬庫といった建物はあまり設けられていない

表 11 禁野火薬庫の配置図等

西暦	和暦	月 日	図 面	所収文書・備考
1897	明治 30			「開設当時ノ主ナル律造物調」
1898	明治 31			
1899	明治 32			
1900	明治 33			
1901	明治 34			
1902	明治 35			
1903	明治 36			
1904	明治 37			
1905	明治 38			
1906	明治 39			
1907	明治 40			
1908	明治 41		陸軍測量部 1/20000 正式図（高標）	→『シンボ 2011』82 頁に掲載
			大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫一般配置図	「禁野火薬庫変火薬庫」『明治 42 年 陸軍兵器本願歴史』 →『セ 140 集』6 頁（図 5）に掲載
1909	明治 42			「被害状況調査（新薬及模様替諸建物）」 菊池侃二「禁野火薬庫爆発事件調査報告書」
1910	明治 43			
1911	明治 44			
1912	明治 45			
1913	大正 2		大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』→『禁野火薬庫資料集』 →『セ 140 集』7 頁（図 6）に掲載
1914	大正 3			
1915	大正 4			
1916	大正 5			「禁野火薬庫道路拡張ノ件」
1917	大正 6			
1918	大正 7			
1919	大正 8			
1920	大正 9			
1921	大正 10			
1922	大正 11			
1923	大正 12			
1924	大正 13	11 1	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』
		12 30	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』 『禁野火薬庫ノ沿革』
1925	大正 14			
1926	大正 15			
1927	昭和 2			
1928	昭和 3		大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』
1929	昭和 4	9 1	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』（大正 9 年の図を日付改訂）
1930	昭和 5	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』
1931	昭和 6	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』
1932	昭和 7	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』（紙を貼って日付を 12 月 31 日に改訂）
1933	昭和 8	8 1	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』→『シンボ 2011』8 頁に掲載
		12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』（日付を 8 月 1 日から 12 月 31 日に改訂）
1934	昭和 9	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』
1935	昭和 10	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』（紙を貼って日付を 12 月 31 日に改訂）
1936	昭和 11	12 31	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』（日付を 2 月から 12 月 31 日に改訂）
1937	昭和 12	3	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『大阪陸軍兵器補給歴史』→『セ 140 集』8 頁（図 7）に掲載
1938	昭和 13	12	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図 (朱書ハ軍需勤員ニ伴フ臨時構築物ヲ示ス)	『大阪陸軍兵器補給歴史』（日付を 2 月から 12 月 31 日に改訂）
1939	昭和 14	12	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫図	『禁野火薬庫災害関係書類稿』
1940	昭和 15	10	大阪陸軍兵器支廠禁野火薬庫配置図 禁野火薬庫大阪工務管署圖	『昭和 14 年度大阪陸軍兵器補給支廠歴史』
1941	昭和 16	1		
1942	昭和 17 夏?		大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図	『昭和 17 年度大阪陸軍兵器補給支廠歴史』 →『セ 140 集』9 頁（図 8）に掲載
1943	昭和 18	頃?		『分廠歴史』
1944	昭和 19			
1945	昭和 20	12 25	大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図	豊田家文書→『資料集』→『セ 140 集』10 頁（図 9）に掲載

ゴシック体は、図 189～197 の参考とした図面

豊田家文書：終戦時に禁野火薬庫勤務の技術（兵技）中尉であった豊田義氏が保管されていた禁野火薬庫関係の文書類。その一部が枚方市より「禁野火薬庫資料集」として公開されている。

『分廠歴史』明治 29 年 10 月～昭和 18 年 9 月 30 日 豊田義氏編纂から『禁野火薬庫資料集』所収

『資料集』：『禁野火薬庫資料集』枚方市 1989 年

『大阪陸軍兵器補給廠歴史』明治 29 年～昭和 18 年 1899 年関係者が防衛研究所に寄贈

『セ 140 集』：駒井正明編『禁野本町遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 140 集 2006 年（図を再トレース）

『シンボ 2011』：財团法人大阪府文化財センター『いま、よみがえる 枚方の 20 世紀』2011 年（図を再トレース）

い。調査範囲内では在来建築物としてワ号手入庫がすでに存在し、他には火工場や火薬取扱所が土壘に囲まれた部分に工事未着手として記されている程度である。

なお、明治 42（1909）年 8 月 20 日に爆発した、2 号清涼火薬庫（第 2 号爆発ダイナマイト格納倉庫）や 1 号（後の 2 号）乾燥火薬庫（第 1 号誘発磁山火薬格納庫）は、各図の左上方（北西）欄外に位置する。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫図」[大正 2（1913）年]との対比（図 190）

徐々に施設の設置が進む。主要施設である火工場や火薬庫に加えて、調査地中央部の職工廄（8 区第 1 面 10 職工廄）や、南部のレール（軽便軌道）（11 区第 3 面 8 ~ 45 枕木土坑）とその横に建つ仮建物（11 区第 3 面 仮建物）も設置されている。

平成 15・16 年度調査区で、ガス管・水道管の埋設による搅乱が著しく調査不要とされた部分は、禁野火薬庫の正門からまっすぐに北に向かう道路に該当する。その道路のすぐ東側に、東西に長い建物が 4 棟描かれているが、それらは平成 15・16 年度調査で掘立柱建物として検出された。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫図」[昭和 8（1933）年 12 月 31 日]との対比（図 191）

大正 2（1913）年の図と比較すると、調査地南部にあった 4 棟の東西に長い建物がなくなり、北西 - 南東方向のレールに沿った仮建物がその北東側に十五榴弾完成場（11 区第 3 面十五榴弾完成場）として移転している。さらにその東側に荷造場（11 区第 3 面第 2 荷造場）と弾薬筒完成場及熔塙場（10 区第 2 面弾薬筒完成場及熔塙場）とそれに伴うレール（軽便軌道）が設けられている。

大正 13（1924）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫図」から昭和 10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野彈薬庫要図」までの各年の配置図には、十五榴弾完成場と十五榴弾筒完成場という 2 棟の建物が描かれている。それらは東西方向に長い仮建物（あるいは仮建築物）で、西辺は正門から北上する道路に面している。発掘調査では、その位置・規模の建物は確認できなかった。

しかし、それらと重複する位置にあたる 11 区西部から平成 15・16 年度調査区にかけて、道路よりも東に 20 m 引離れた位置を西辺とする 2 棟の掘立柱建物を検出できた。各年の配置図と比較すると、それらは昭和 14（1939）年の爆発後いち早く設けられた人夫（男女）休憩所（11 区第 3 面男体休憩所・女体休憩所）であったと考えられる。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」[昭和 11（1936）年 12 月 31 日]との対比（図 192）

調査地北東部に土壘（9 区第 2 面 55 ~ 57 土壘基礎 12 区第 2 面 3・4 土壘ほか）とそれに囲まれた第 4 師団兵器部保管建物と 3 棟の火工場などが設けられている。これらの施設は、昭和 19（1934）年の図ではなく、昭和 10（1935）年の図には南半の 7 号火工場（9 - 2 区第 2 面 1 建物基礎）と 8 号火工場（12 区第 2 面 1 建物）とその周囲の土壘（8 区第 1 面 19 土壘 9 区第 2 面 55 ~ 57 土壘基礎 12 区第 2 面 3 土壘ほか）が描かれている。一方、北半の第 4 師団兵器部保管建物（8 区第 1 面 20 建物）と 9 号火工場（12 区第 2 面 2 建物）の北と東西を囲む土壘（12 区第 2 面 4 土壘）は、昭和 11（1936）年の図に初出だが、以後昭和 13（1938）年の図までは、他の土壘よりも幅が狭く、かつ、両建物の中間にても土壘がないように表現されている。この北半の土壘では、発掘調査によりコンクリート基礎が土壘構築後にその盛土を切りこんで設置されたことが判明したので、この昭和 11 年頃には土盛

土 地 買 収 の 時 期	調査区	調査時の施設名 〔「」は施設名称〕	斜体字で示す面積に 明治 42 (1909) 年 大正 2 (1913) 年 昭和 8 (1933) 年 昭和 11 (1936) 年 昭和 12 (1937) 年 明治 36 (1903) 年 4 月から 大阪陸軍兵器支廠野澤庫				
			施設全体の名称:				
			図 並				
			レール(軌道)の表現:				
明治 29 年	平成 15・16 年度調査区	「土壟」	大坂兵器支廠野澤庫	大阪陸軍兵器支廠 禁野澤庫	大阪陸軍兵器支廠 禁野澤庫要園	大阪陸軍兵器支廠 禁野澤庫要園	斜体字で示す面積に 明治 42 (1909) 年 大正 2 (1913) 年 昭和 8 (1933) 年 昭和 11 (1936) 年 昭和 12 (1937) 年 明治 36 (1903) 年 4 月から 大阪陸軍兵器支廠野澤庫
	8 区 (D 帯)	第 1 面 16 土壠	土壠	土壠	土壠	土壠	土壠
	平成 15・16 年度調査区	「軽便軌道」	土壠	土壠	土壠	土壠	土壠
	7 区 (E 帯)	第 2 面 3 ~ 16 枕木土坑	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール
	7 区 (E 帶)	第 2 面 17 ~ 20 枕木土坑	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール
	7 区 (E 帯)	第 2 面 21 ~ 25 枕木土坑	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール
	8 区 (D 帯)	第 1 面 8 石組溝	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール
	平成 15・16 年度調査区	「手入場及塗装場」	手入場及塗装場	手入場及塗装場	手入場及塗装場	手入場及塗装場	手入場及塗装場
	平成 15・16 年度調査区	「1 号火工場」	火工場	火工場	火工場	火工場	火工場
	平成 15・16 年度調査区	「2 号火工場」	火工場	火工場	火工場	火工場	火工場
	平成 15・16 年度調査区	「3 号火工場」	火工場	火工場	火工場	火工場	火工場
	平成 15・16 年度調査区	「4 号火工場」	火工場	火工場	火工場	火工場	火工場
	5 区 (調査地)	第 1 面 「建物基礎」	ヒ号(工事未着手)	火工場	火工場	火工場	火工場
	8 区 (D 帯)	第 1 面 7 建物	セ号(工事未着手)	火工場	火工場	火工場	火工場
	平成 15・16 年度調査区	「火薬試験場」	火薬試験場	火薬試験場	火薬試験場	火薬試験場	火薬試験場
	平成 15・16 年度調査区	「1 号未使用彈丸庫」	彈丸庫	彈丸庫	彈丸庫	彈丸庫	彈丸庫
	平成 15・16 年度調査区	「1 号乾燥火薬庫」	乾燥火薬庫	乾燥火薬庫	乾燥火薬庫	乾燥火薬庫	乾燥火薬庫
	8 区 (D 帯)	第 1 面 10 職工間	職工間	職工間	職工間	職工間	職工間
	平成 15・16 年度調査区	樹立柱建物	樹立柱建物	樹立柱建物	樹立柱建物	樹立柱建物	樹立柱建物
	平成 15・16 年度調査区	「第 1 号倉庫」	雜物庫	雜物庫	雜物庫	雜物庫	雜物庫
	平成 15・16 年度調査区	「材料庫」	雑造材料庫	雑造材料庫	雑造材料庫	雑造材料庫	雑造材料庫
	平成 15・16 年度調査区	樹立柱建物	人夫休息所	人夫休息所	人夫休息所	人夫休息所	人夫休息所
	平成 15・16 年度調査区	「貯水池」	貯水池	貯水池	貯水池	貯水池	貯水池
	8 区 (D 帯)	第 1 面 9 貯水池	貯水池	貯水池	貯水池	貯水池	貯水池
明治 40 年	11 区 (B 帯)	第 3 面 8 ~ 45 枕木土坑	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール	北東 - 南西方向レール
	11 区 (B 帯)	第 3 面 「假建筑物」	假建筑物	十五櫛櫛數標完成場	十五櫛櫛數標完成場	十五櫛櫛數標完成場	十五櫛櫛數標完成場
	11 区 (B 帯)	第 3 面 「男体脚部」					
	11 区 (B 帯)	第 3 面 「女体脚部」					
	11 区 (B 帯)	第 3 面 「第 2 英造場」					
	10 区 (A 帯)	第 2 面 「彈丸庫完成場及塗装場」					
	10 区 (A 带)	第 2 面 「汽鍛室」	荷造場	荷造場	荷造場	荷造場	荷造場
	10 区 (A 带)	第 2 面 「烟填場」	彈藥庫完成場及塗裝場	彈藥庫完成場及塗裝場	彈藥庫完成場及塗裝場	彈藥庫完成場及塗裝場	彈藥庫完成場及塗裝場
	10 区 (A 带)	第 2 面 「箱詰作業場」(西)	キカニ室	キカニ室	キカニ室	キカニ室	キカニ室
	10 区 (A 带)	第 2 面 「烟填作業場」(西)	烟填場	烟填場	烟填場	烟填場	烟填場
	11 区 (B 帶)	第 2 面 3 ~ 6 便器					
	9 区 (C 帯)	第 1 ~ 2 面 1 ~ 4 枕木土坑					
	8 区 (D 帯)	第 1 面 21 軽便軌道					
	9 区 (C 帯)	第 1 ~ 2 面 5 ~ 40 枕木土坑					
明治 43 年	9 ~ 2 区 (防水地 C)	第 2 面 2 ~ 3 枕木					
	9 ~ 2 区 (防水地 C)	第 1 ~ 2 面 1 塊基基礎					
	12 区 (立体駆車場)	第 1 ~ 2 面 1 建物					
	12 区 (立体駆車場)	第 1 ~ 2 面 2 建物					
	9 区 (C 帯)	第 1 ~ 2 面 55 ~ 57 土壟基礎					
	12 区 (立体駆車場)	第 1 ~ 2 面 3 土壟					
	10 区 (A 帯)	第 2 面 「第 3 号掩體庫」					
	8 区 (D 帯)	第 1 面 20 建物					
	9 区 (C 帯)	第 1 ~ 2 面 コンクリート土間					
	5 区 (調査地)	第 1 面 「土壟基礎」					
	8 区 (D 帶)	第 1 面 19 土壟					
	12 区 (立体駆車場)	第 1 ~ 2 面 4 土壟					
	13 区 (管路・人孔)	第 1 面 「土壟」					
	14 区 (管路・人孔)	第 1 面 「土壟」					
明治 48 年	15 区 (管路・人孔)	第 1 面 「土壟」					
	10 区 (A 帯)	第 2 面 「烟填作業場」(東)					
	10 区 (A 帯)	第 2 面 「箱詰作業場」(東)					
	12 区 (立体駆車場)	第 2 面 5 軌道					
	12 区 (立体駆車場)	第 1 ~ 2 面 6 軌道					
	14 区 (管路・人孔)	第 1 面 「軽便軌道」					
	1 区 (道路・ガス管)						
	1 区 (道路・ガス管)						
	1 区 (道路・ガス管)						
	10 区 (A 帯)	第 1 面 1 建物					
明治 52 年	10 区 (A 帯)	第 1 面 2 建物					
	10 区 (A 帶)	第 1 面 3 建物					
	10 区 (A 帶)	第 1 面 コンクリート枕木					
	10 区 (A 帶)	第 1 面 1 建物					
	10 区 (A 帶)	第 1 面 2 建物					

## 禁野火薬庫の主要施設

表現はあるが個々の施設名のないもの			施設名	年代・備考
昭和 14 (1939) 年	昭和 17 (1942) 年	昭和 20 (1945) 年		
陸軍兵器支廠禁野倉庫		昭和 15 年 5 月から 大阪陸軍兵器総合廠敷地内に分置		
事故発生前二於ケル御 製誤製作業場ノ配置及光 成彈薬納状況要圖	大阪陸軍兵器支廠 禁野倉庫配置圖 禁野倉庫大阪工場 移管要圖	大阪陸軍兵器構造 微枚方分廠新製彈 薬根要圖	大阪陸軍兵器構造 微枚方分廠構内圖	
なし	なし	なし	なし	
土壠	土壠	土壠	土壠	
土壠	土壠	土壠	18 土壠	明治 42 年頃
			軽便軌道	
			3~16 枝木土坂	明治 42 年以前~昭和 14 年
			17~20 枝木土坂	
			21 石油溝	明治 42 年頃~昭和 14 年。レールは未輸出
			8 石組溝	明治 42 年頃~昭和 14 年
			手入港及走坂場	
1 号火工場	第 29 号倉庫	第 17 号倉庫	1 号火工場	
2 号火工場			2 号火工場	明治 42 ~ 44 年建築物 昭和 14 年の爆発後に増改築
4 号火工場	第 30 号倉庫	第 18 号倉庫	3 号火工場	
5 号火工場			4 号火工場	
			建物基礎	明治 42 ~ 44 年建築物 断面でのみ確認
6 号火工場	第 30 号倉庫	第 18 号倉庫	7 建物	明治 42 ~ 44 年建築物 昭和 14 年の爆発後に増改築
			火薬試験場	明治 45 年以前竣工~昭和 14 年以前
1 号未填薬彈丸庫			1 号未填彈丸庫	明治 45 年以前竣工~昭和 14 年
1 号乾燥火薬庫	乾燥庫	乾燥庫	1 号乾燥火薬庫	明治 45 年以前竣工 乾燥庫は昭和 16 年授受
			10 脱工頭	大正時代頃
			孤立柱建物	
第 1 号掩器庫			第 1 号掩器庫	昭和 9 年授受か
材料庫			材料庫	昭和 11 年竣工
			孤立柱建物	昭和 12 ~ 13 年竣工。軍需勤員に伴う臨時構築物
	貯水池	貯水池	貯水池	
	貯水池	貯水池	貯水池	昭和 16 年授受
	貯水池	貯水池	9 貯水池	
原			8~45 枝木土坂	大正 2 年頃~昭和 8 年
和			假建築物	
人夫休憩所	男休憩所		男休憩所	完成場は大正 13 年以前~昭和 10 年。
14	人夫休憩所	女休憩所	女休憩所	人夫休憩所は昭和 14 年 4 月授受
建物			第 2 荷造場	昭和 8 年頃設置~昭和 14 年
建物			荷造元運送・荷造場	昭和 9 年設置~昭和 14 年
年			汽罐室	昭和 9 年~昭和 11 年?
			煙突場	昭和 9 年~昭和 14 年以前
建物	月		箱詰作業場(西)	昭和 12 年竣工。軍需勤員に伴う臨時構築物
建物			箱詰作業場(西)	
1	建物	昭	3~6 使便	男休憩所に付属、昭和 14 年授受
			軽便軌条	1~4 枝木土坂 昭和 7 年以降
			軽便軌条	21 軽便軌道 昭和 9 年以降か。(昭和 7 年の図にもあるが)
			軽便軌条	5~40 枝木土坂 昭和 10 年には存在
7 号火工場	第 27 号倉庫	第 15 号倉庫	2~3 枝木	複数部分 昭和 10 年には存在~昭和 14 年
8 号火工場	第 25 号倉庫	第 13 号倉庫	1 建物基礎	昭和 10 年授受
9 号火工場	第 26 号倉庫	第 14 号倉庫	1 建物	
土壠	土壠	土壠	2 物	昭和 10 年授受 昭和 14 年の爆発後東西に拡張
土壠	土壠	土壠	55~57 土壠基礎	
建物			3 土壠	昭和 10 年以降
建物			第 3 号掩器庫	昭和 11 年には存在~昭和 14 年
建物			20 建物	
道路	舗装道路	舗装道路	コンクリート土間	
土壠	土壠	土壠	土壠基礎	
土壠	土壠	土壠	19 土壠	
土壠	土壠	土壠	4 土壠	
土壠	土壠	土壠	土壠	
土壠	土壠	土壠	土壠	
土壠	土壠	土壠	土壠	
建物			箱詰作業場(東)	昭和 12 年竣工。軍需勤員に伴う臨時構築物
建物			箱詰作業場(東)	
			5 軌道	昭和 12 年敷設
			6 軌道	複数部分 昭和 12 年敷設~昭和 14 年
			軽便軌条	昭和 12 年以降
火工場?	第 4 号雨覆庫	建物		
火工場	第 24 号倉庫	建物		火工場は昭和 12 年竣工。軍需勤員に伴う臨時構築物
火工場	第 3 号雨覆庫	建物		
建物?	第 16 号倉庫		1 建物	
	第 17 号倉庫	第 7 号倉庫	2 建物	昭和 16 年竣工 各倉庫西部の土地は明治 40 年買収
	第 18 号倉庫		3 建物	
			コンクリート枕木	合庭内に 70 枝条を敷設

を主とした簡易な構造であったと推定できる。

これらの土塁の南側にある道路部分は、この年に舗装道路（9区第2面コンクリート土間）として授受され、昭和14年の爆発後も機能していた。

調査地南西部では、かつて2号兵器庫があった位置に、昭和11年に平面規模の大きな荷造材料庫が設けられ、それに伴い軽便軌道も変更されている。

弾薬筒完成場・疊焼場（10区第2面弾薬筒完成場及疊焼場）の東辺に付属する疊焼場とキカン室は図面に描かれているが、残念ながら発掘調査では判然としなかった。

「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要圖（朱書ハ軍需動員ニ伴フ臨時構築物ヲ示ス）」[昭和12(1937)年12月31日]との対比（図193）

表題の図に、さらに建物やレール（軽便軌道）が朱色で追記されている。

戦時体制の強化とともに禁野火薬庫（当時は禁野倉庫）の施設も拡充されてきたが、この年の臨時動員に伴ってさらに調査地東部に火工場や疊焼場作業場が設けられた。

調査地南東部に位置する箱詰作業場2棟（10区第2面箱詰作業場（東）・（西）、疊焼場作業場（西）（10区第2面疊焼場作業場（西））、弾薬筒完成場・疊焼場（10区第2面弾薬筒完成場及疊焼場）の間に木製枕木を用いた仮設的な軽便軌道（10区第2面軽便軌道）が敷設されていた模様である。これら4棟は、その北側にある舗装道路（9区第2面コンクリート土間）に規制され、北辺がほぼ並んでいた可能性が高い。疊焼場作業場（東）（10区第2面疊焼場作業場（東））は、『昭和12年度大阪陸軍兵器支廠歴史』に面積は378m<sup>2</sup>と記されており、東西が約9m（5間）なので、南北約42m（23間）と考えられる。

正門から北上する道路の東に面した南北に長い掘立柱建物は、この図に追記された構築物のうち、人夫体憩所に該当すると考えられる。昭和12年・13年の図によると、この建物の南の調査範囲外に同様な建物がもう1棟存在した模様である。

なお、この図では、火薬試験所の西隣にそれよりも一回り大きな火薬取扱所があり、その北側でレールが屈曲したように（追記ではなく）印刷されている。翌昭和13（1938）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要圖」にも火薬試験所と火薬取扱所が描かれているが、その図では火薬試験所のほうが大きく、レールも昭和11年以前と同様に北東・南西方向に直線的に描かれている。

「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要圖」[昭和14(1939)年]との対比（図194）

3月1日の爆発時点は、禁野火薬庫（当時は禁野倉庫）の最盛期であったともいえる。爆発の発火点は、今回の調査範囲の北東端から東へ約250mも離れた15号未填薬弾丸庫であったが、従来の火工場などの施設に加えて昭和12年頃からの臨時構築物も多数立ち並んでいた今回の調査範囲も爆発により灰燼に帰した。

この図面には表題のとおり、爆発直前にどの施設に何がいくつあったかが詳細に記録されている。「作業実施中ノ場所」も明示され、今回の調査範囲ではその南東部の疊焼場作業場（東）（西）（10区第2面疊焼場作業場（東）・（西））、弾薬筒完成場・疊焼場（10区第2面弾薬筒完成場及疊焼場）、第2荷造場（11区第3面第2荷造場）に作業中の丸印が付けられている。実際にそれらの建物では、発掘調査によ

って「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」を検出した。

ただし、この図にはその趣旨からか、軽便軌道が記入されていない。また、細部の状況からみて、爆発当日よりも新しい時期の状況を下敷きにして描いた可能性もある。図 194 には、それらを勘案して軽便軌道と土塁の状況などを推定復元した。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫配置図 禁野倉庫大阪工廠移管要図」[昭和 14 (1939) 年 10 月]との対比 (図 195)

元々の表題を二重線で消し、その下方にやや小振りな字で「禁野倉庫大阪工廠移管要図」と書かれている。

爆発の約半年後の状況である。建物の表現がほとんどなく、わずかに 2 棟の人夫休憩所（11 区第 3 面男休憩所・女休憩所）とその東側の廻（11 区第 2 面 3 ~ 6 便槽）と考えられる建物などが描かれている。軽便軌道の表現は一切なく、その復旧状況は不明である。

他方、土塁はほとんど表現されている。仔細にみると、かつての 4 号火工場西側の土塁はその西半部が欠損したように描かれている。また、爆発前の図では、9 号火工場（12 区第 1 面 2 建物）と第 4 師団兵器部保管建物（8 区第 1 面 20 建物）を囲む土塁（12 区第 2 面 4 土塁）は他の土塁よりも簡略に表現されており、発掘調査ではこの土塁の北辺にはコンクリート製の基礎が築かれていなかったことが判明した。これらの土塁は構造的に弱いことから、爆発により崩壊したのであろうか。

ただし、発掘調査の成果と諸記録によると、この土塁（12 区第 2 面 4 土塁）は、おそらく爆発後から昭和 17 年までの間に、コンクリート基礎は設置されなかったもののさらに北に拡張されて、結果的にその北西部で在来の土塁に接するようになった。さらに、土塁で囲まれた内部でも、9 号火工場とその西隣の建物との間にも軽便軌道部分を除いた部分に、コンクリート基礎をもつ土塁（12 区第 2 面 4 土塁）が新たに築かれた模様である。

#### 「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」[昭和 17 (1942) 年夏頃]との対比 (図 196)

新築建物として、7 棟の倉庫が図示されている。それらのうち、第 26 号倉庫（12 区第 1 面 2 建物）と第 28 号倉庫（8 区第 1 面 20 建物）では、昭和 14 年の爆発前の建物の基礎を東西に各 1 m ほど拡張して倉庫を新築していることが今回の調査で確かめられた。第 25 号倉庫（12 区第 1 面 1 建物）・第 27 号倉庫（9 - 2 区第 1 面 1 建物基礎）も同様に基盤が再利用された可能性が高い。第 29 号倉庫・第 30 号倉庫は、平成 15・16 年度調査と 8 区第 1 面 7 建物の調査の結果、各々爆発前の 3 棟の火工場とその間の土塁を撤去して、3 棟の火工場を連ねたような東西に長い倉庫として新築されたことが判明した。第 24 号倉庫は 1 区において、基礎と推定されるコンクリート構造物がごくわずかに検出できとにとどまるため、新築状況は不詳である。

また、爆発後に設けられた 2 棟の人夫休憩所は、北が男休憩所（11 区第 3 面男休憩所）、南が女休憩所（11 区第 3 面女休憩所）と男女別になっている。

昭和 14 年の爆発前まで乾燥火薬庫があった位置には軽油庫が描かれている。軽油庫はこの図と昭和 20 年図とともにやや南北に長く、昭和 20 年の図に 20 坪と注記されていることから、南北 5 間（約 9 m）・東西 4 間（約 7.2 m）と推定して図示した。

軽便軌道が、昭和 14 年の爆発以前と比べてかなり少なくなっているのが目に付く。

「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」[昭和 20 (1945) 年 12 月 25 日]との対比(図 197)

8月 15 日の終戦により、禁野火薬庫(当時は枚方分廠)の機能も停止した。

終戦から 4か月後のこの図によると、調査地の南東部では、昭和 16 年に建てられた倉庫のうち第 16 号倉庫と第 18 号倉庫が撤去され、第 17 号倉庫から改称された第 7 号倉庫(10 区第 1 面 2 建物)のみになっている。第 7 号倉庫の規模は 280 坪(924 m<sup>2</sup>)と記されており、南北 6 間強(約 11 m)なので、東西約 46.5 間(84 ~ 85 m)と推定できる。その他の倉庫も、番号が改められている。男女の休憩所もなくなり、それらに付属していた廁(11 区第 2 面 3 ~ 6 便槽)だけが残っている。軽便軌道はこの図には表示がなく、その状況は不明である。

いわゆる禁野火薬庫は、明治 30 (1897) 年 4 月に砲兵第二方面本署禁野出張所として開設され、同年 9 月に大阪陸軍兵器本廠禁野彈藥庫、次いで明治 36 (1903) 年に大阪陸軍兵器支廠禁野彈藥庫と改称され、明治時代後葉から昭和時代初期にわたって文字どおり彈藥庫として徐々に整備してきた。建物基礎や側溝などの使用材料は、明治時代には煉瓦や石材が、昭和時代にはコンクリートが多用される傾向がある。

1936(昭和 11) 年頃に大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫と改称された頃からは、戦闘的な「彈藥庫」から一見非戦闘的な「倉庫」への名称変更とは裏腹に、日中戦争から太平洋戦争に至る軍備拡張につれて火薬庫としての機能が急激に拡充された。しかし、昭和 14(1939) 年 3 月 1 日の爆発で機能が崩壊した。復旧にあたって、その大部分が枚方製造所に移管され、昭和 15 (1940) 年以降は大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠として主に倉庫を擁する補給組織として機能していた。それらの変遷が施設の消長にも明確に反映されている。

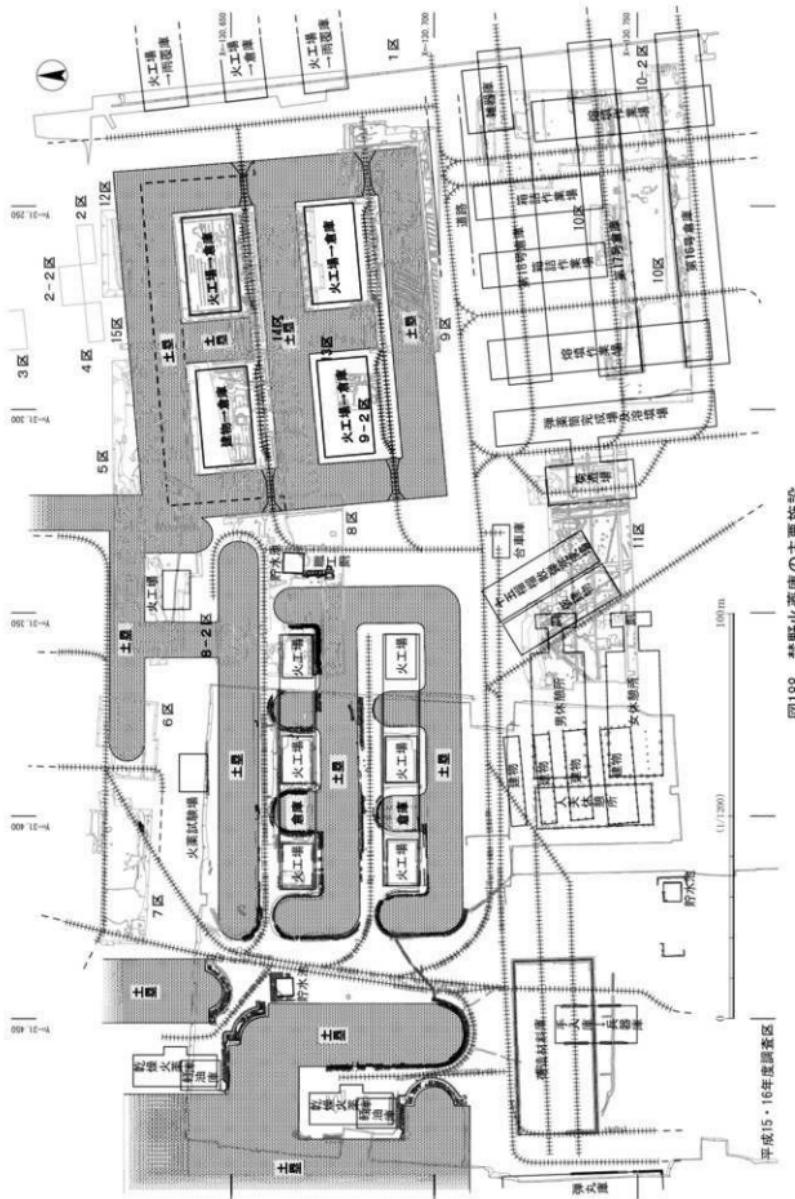


図188 禁野火薬庫の主要施設

平成15・16年度調査区

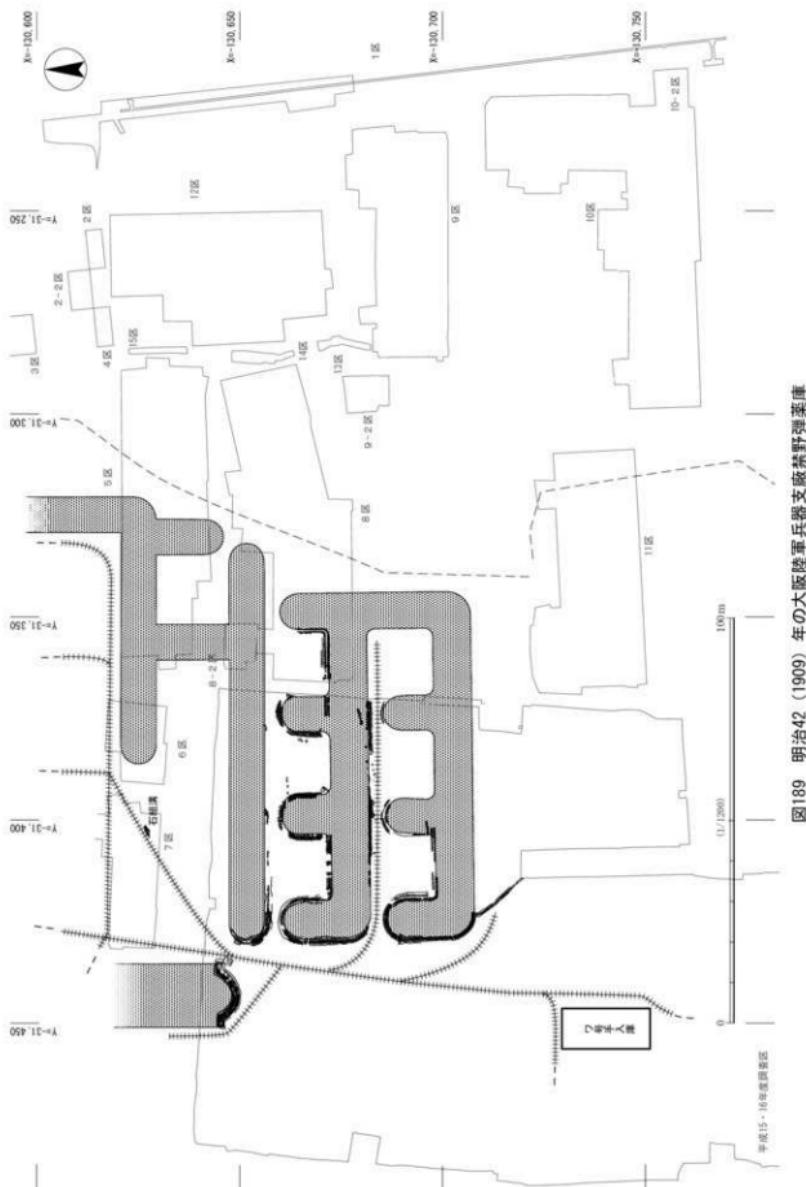


図189 明治42（1909）年の大阪陸軍兵器支廠兼野彈薬庫

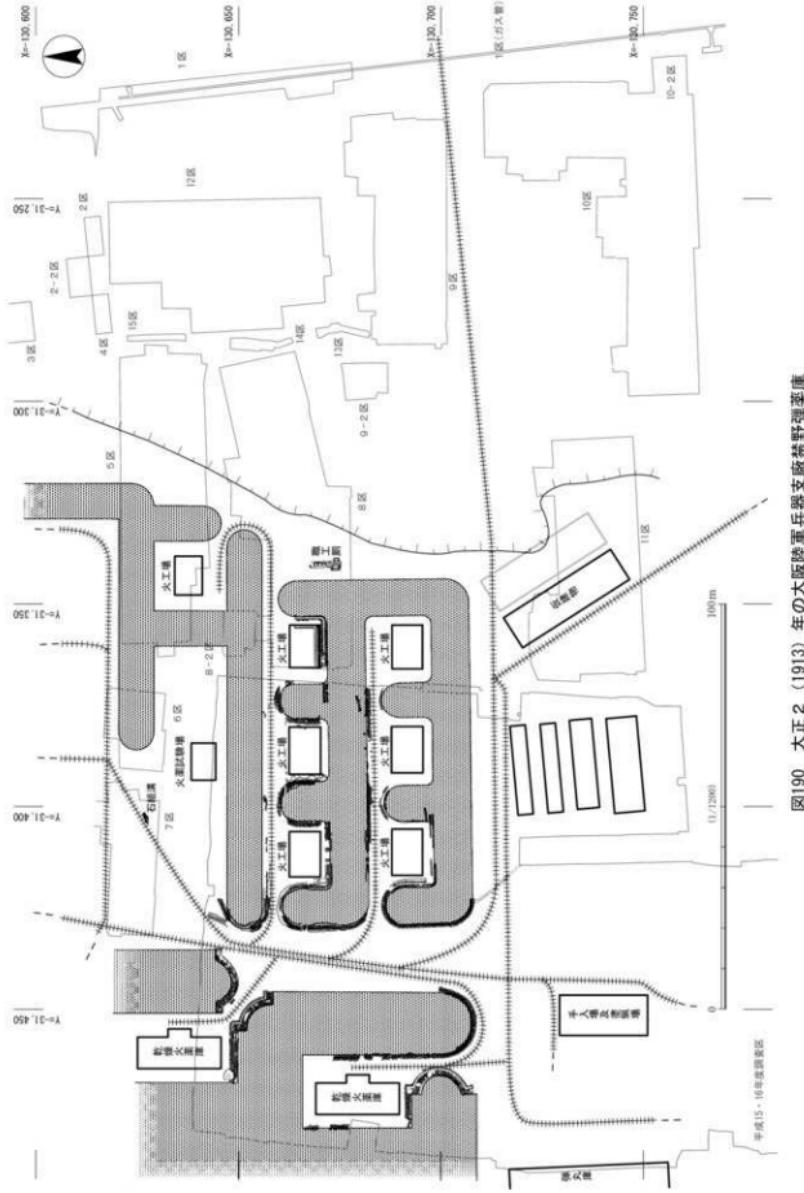


図190 大正2（1913）年の大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫

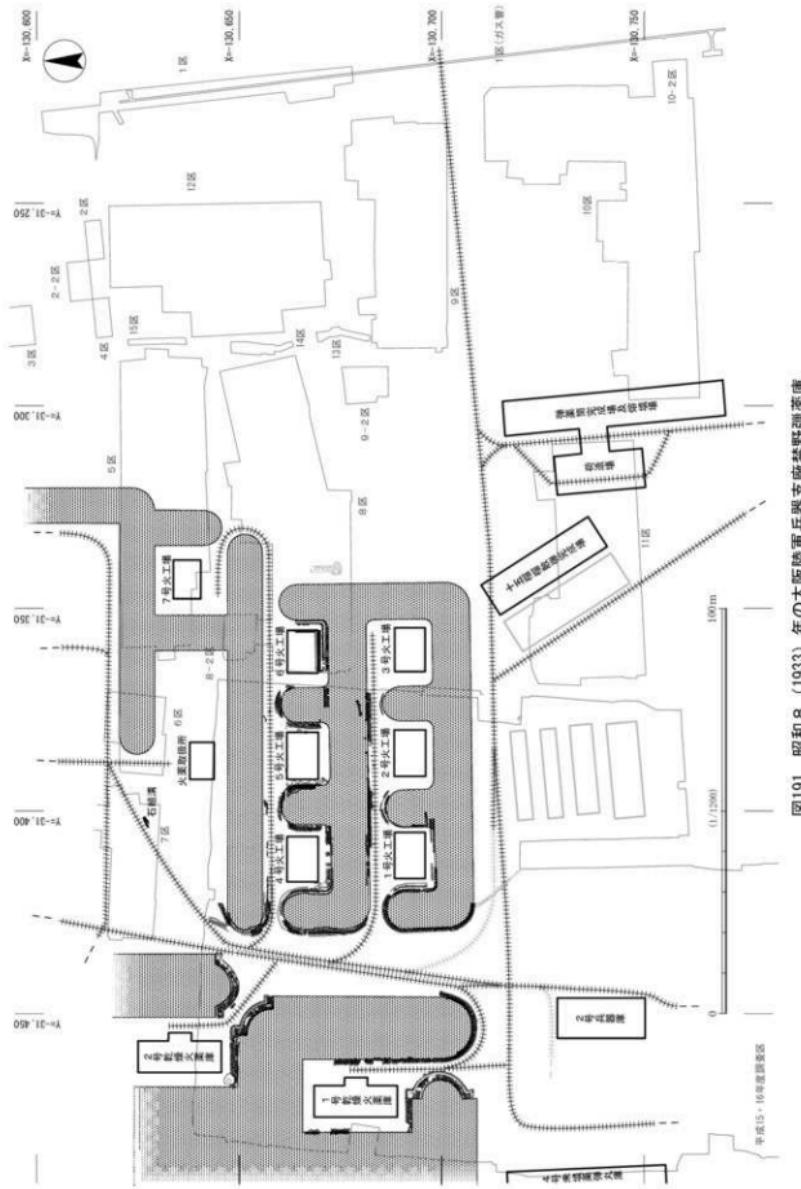
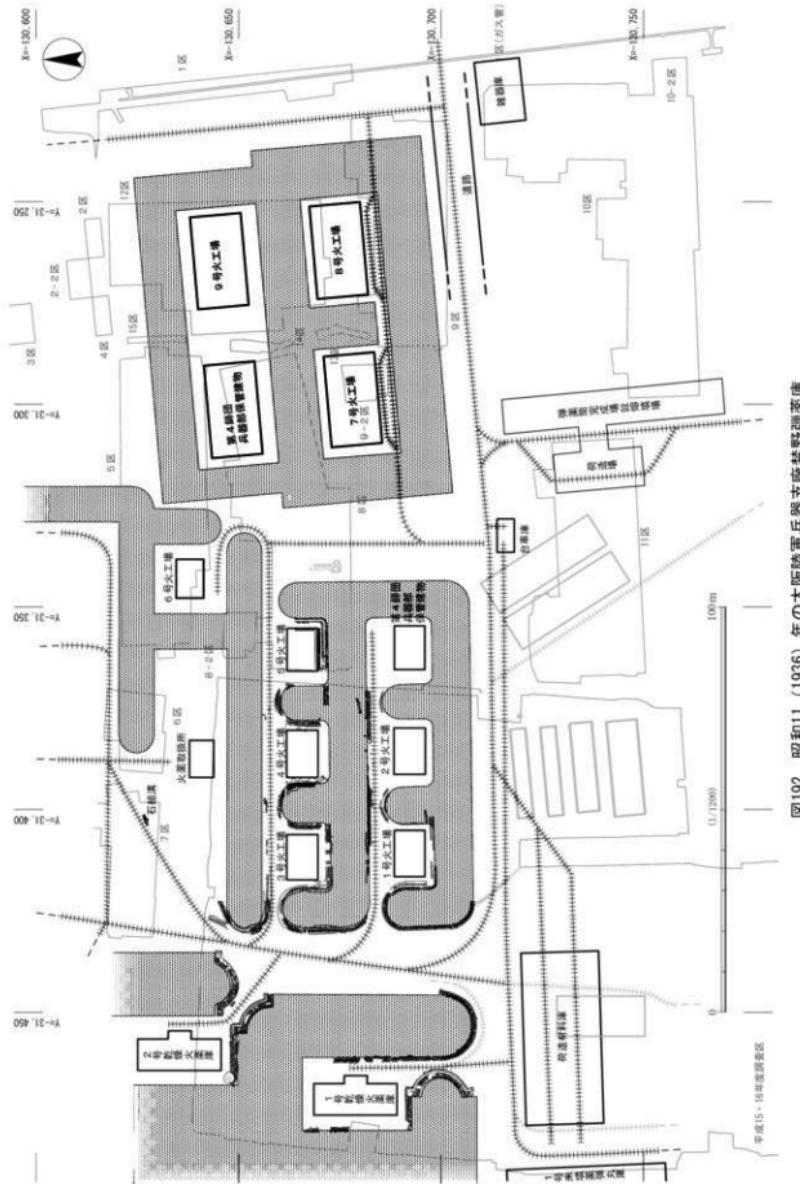


図191 昭和8（1933）年の大阪陸軍兵器支廠野彈薬庫



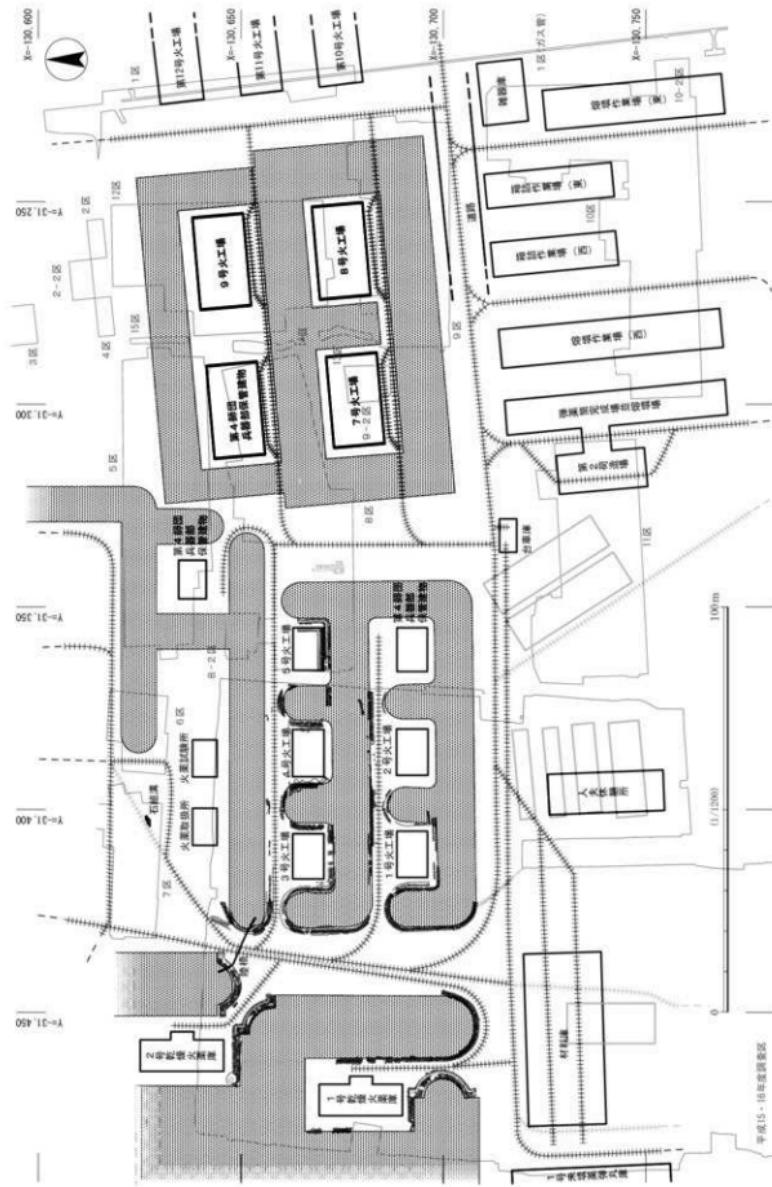


図193 昭和12（1937）年の大阪陸軍兵器支廠禁野彈薬庫

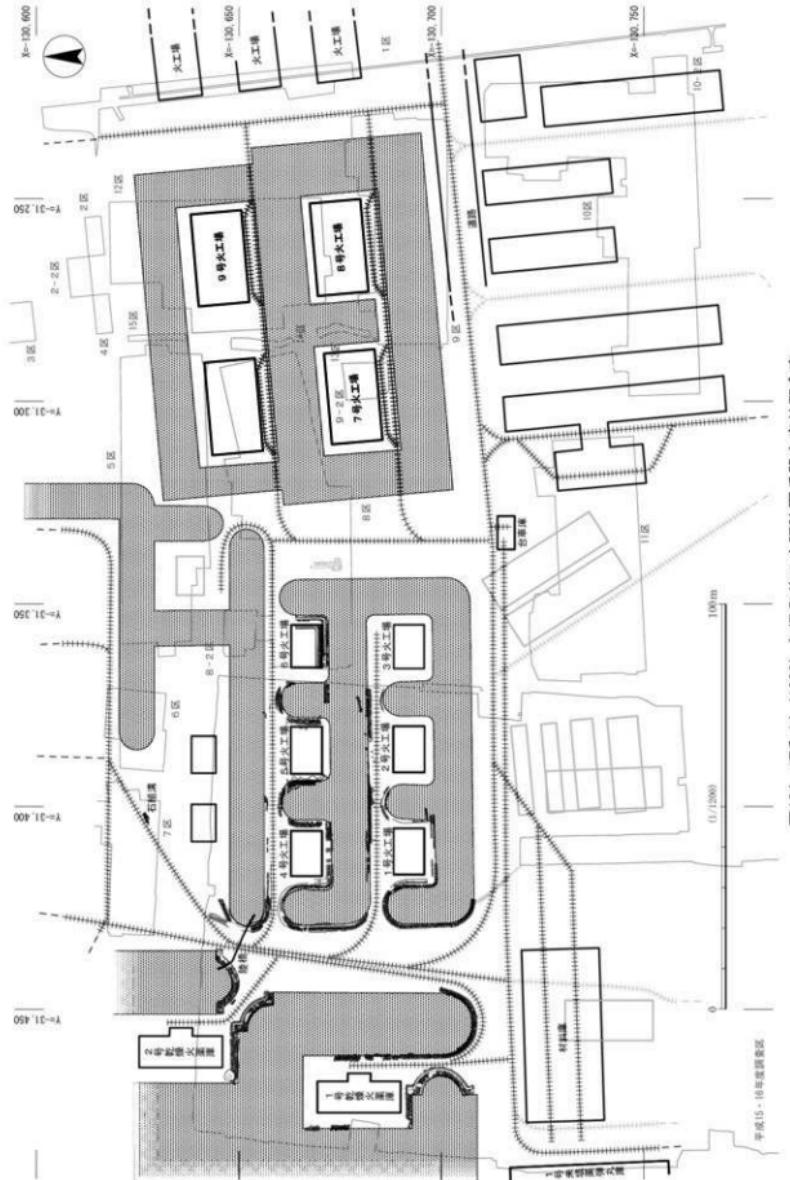


図194 昭和14（1939）年爆発前の大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫

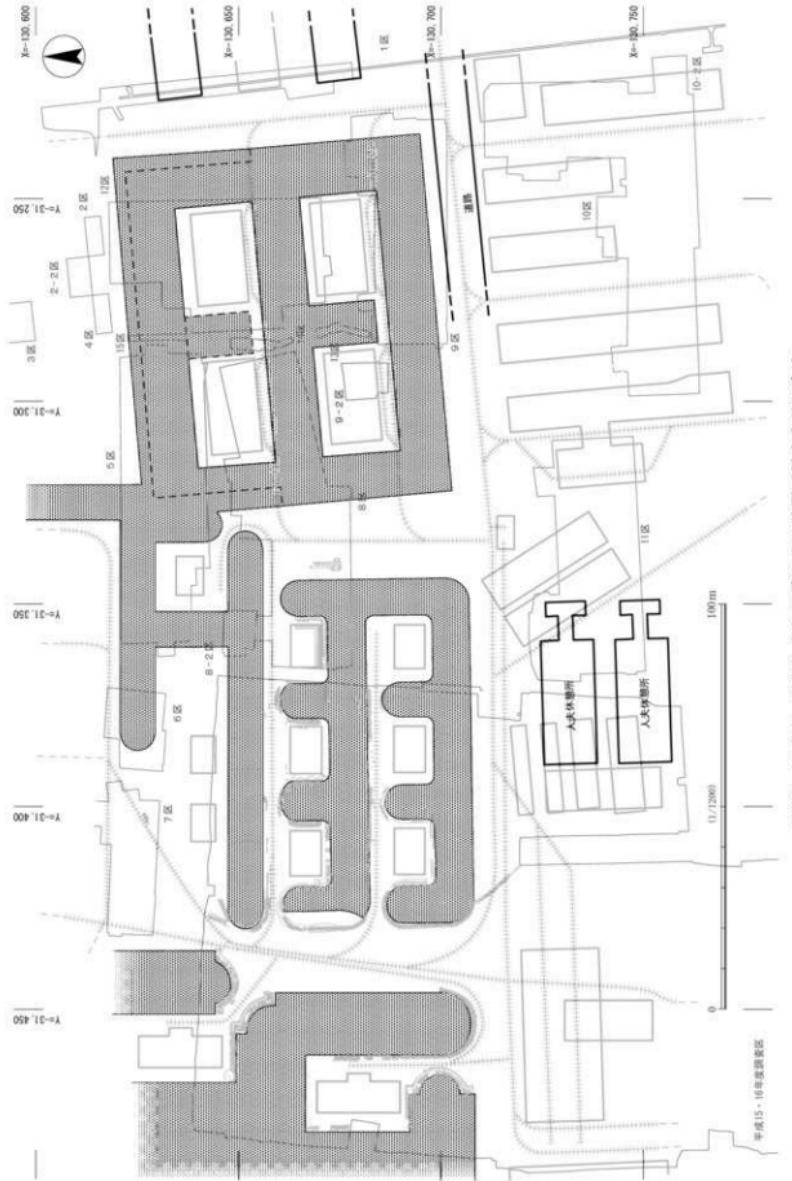


図195 昭和14（1939）年爆発後の大坂陸軍兵器支廠禁野倉庫

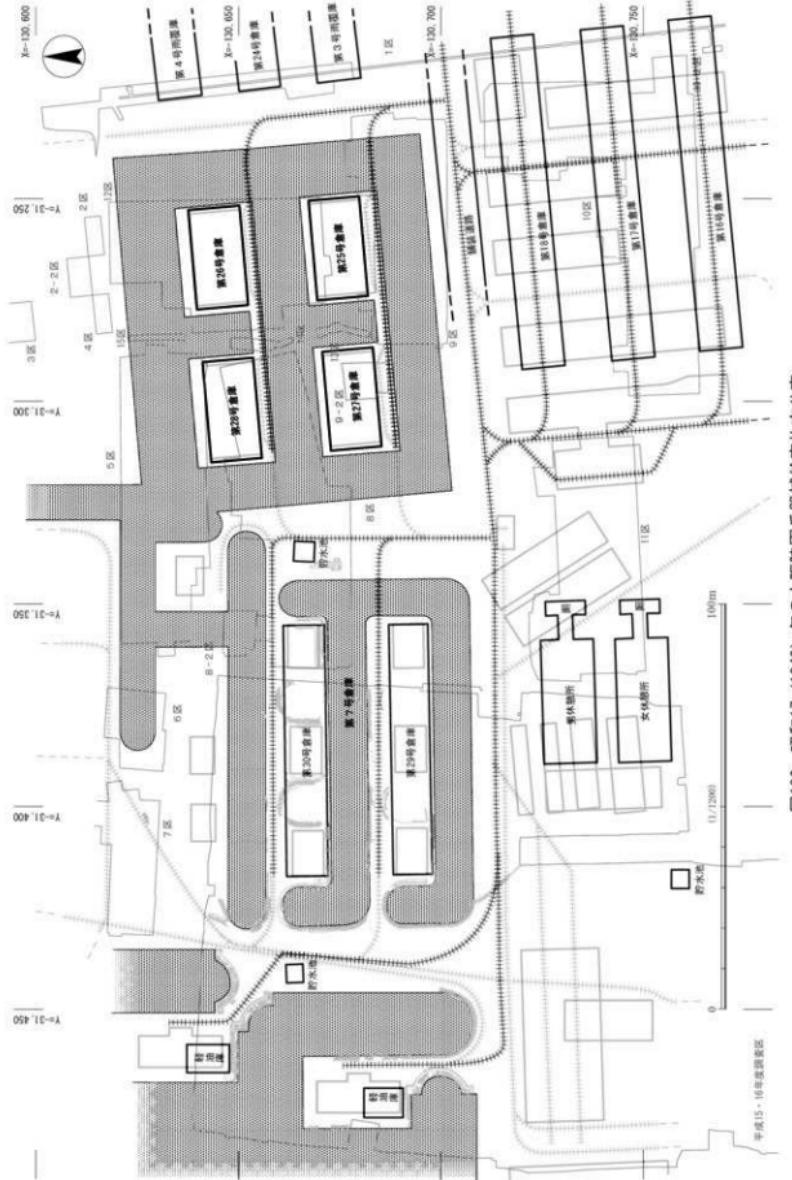


図196 昭和17（1942）年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠

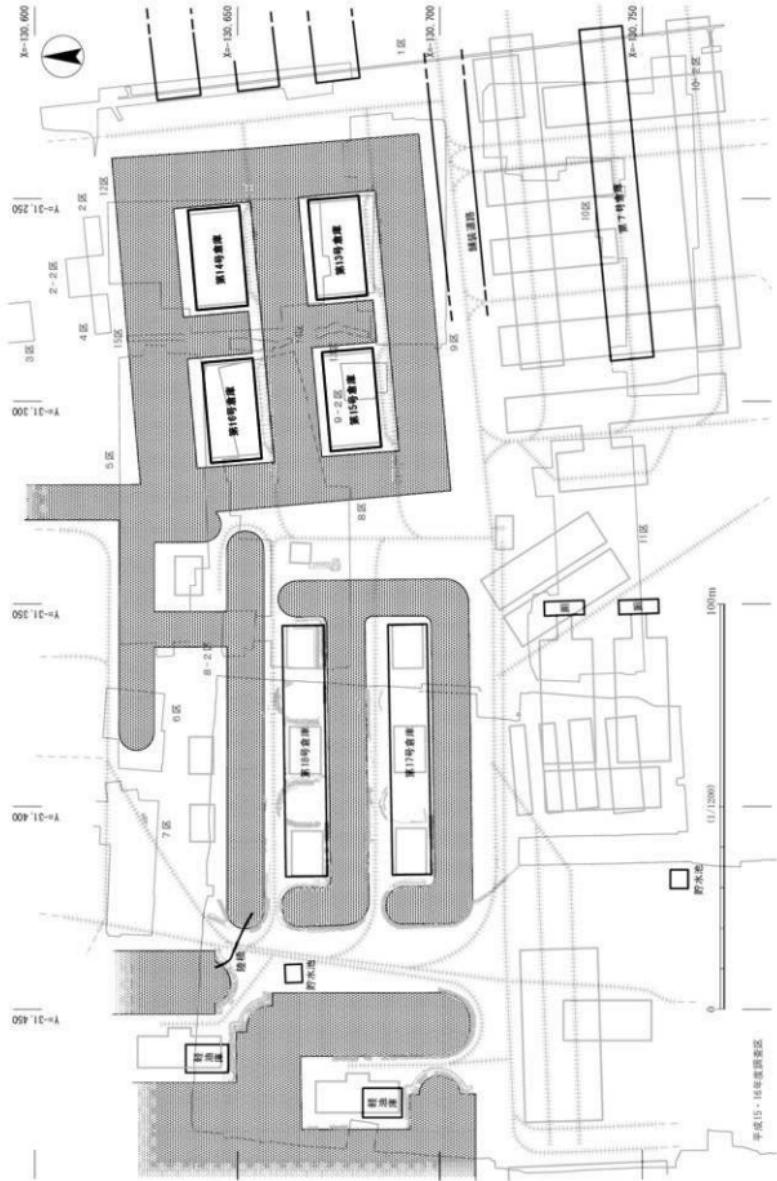


図197 昭和20（1945）年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠

掲載遺物観察表 (1)

排置 番号	因番 番号	因版 番号	地区	遺構面	遺構・洞名	種類	器種	時期	法量 (kg) (○内は残存率)	調査等(ヨコナメ、印判ナダは否否) (秒~10秒~1カケズリで秒が動いた 場合は示す)	外面色調	備考
126 1		11区		第1層	磁器	染付窯	近代以降	口径:11.3(手のひら) 高さ:3.6(1/2寸) 番号:4.9	外墨:印判付文、施釉(底部僅部露胎) 内墨:印判付文、施釉、重ね使痕。トネントン跡あり	T.50R8/1 明朝 灰		
126 2		11区		第3層下部	磁器	染付窯	近代以降	口径:11.4(2寸) 高さ:4.9	外墨:印判付文、施釉(底部僅部露胎) 内墨:印判付文、施釉	T.50R7/1 明朝 灰		
126 3		11区		第1層	磁器	染付窯	近代以降	口径:14.4(1/2寸) 高さ:8.9(3/4寸) 番号:3.9	外墨:印判付文、施釉、輪花口縁、乾の白目跡多岐舌 内面 印判染付文、施釉、トランジ跡あり	50R9/1 灰白、 (乾)青		
126 4		6区		第1層	ガラス 製品	栓	近代以降	最大幅:2.0	クマムシの巣すりガラス状、奥側からの空切絞あり	S.51R6 オリーブ		
126 5		6区		第1層	ガラス 製品	瓶	近代以降	底径:6.0	内面:口縁すりガラス状、外底部気泡のざらつきあり	T.50R3/3 雪場		
126 6 81	1008 (A.2)	第2面	红土坑	金銀 製品	分銅	近代以降	長:3.35 幅:2.57 重さ:99.4g	刻印:大仏(?)T 11 100.0g		非鉄		
126 7 81	1008 (A.2)	第2面	红土坑	金銀 製品	分銅	近代以降	長:3.36 幅:2.54 重さ:99.6g	刻印:小仏 11 100.0g		非鉄		
126 8 81		11区	第3面	166ビット 鍵真	金銀 製品		1668~1683年	径:2.5 重さ:0.6 重さ:0.12 斧 さ:1.0	斧永通寶 文様 2刷	鋸		
126 9		12区		第0層	磁器	シリンドル ローゼット	近代以降	口径:6.8(1寸)	外墨:施釉 内面:ネジ切り、施釉 細/灰白			
126 10		11区		第1層	磁器	二重焼子	近代以降	下部脚径:4.0 (1/4寸)	外墨:施釉 内面 ネジ切り、施釉 細/灰白			
126 11		11区		第2層	磁器	茶台椅子	近代以降	口径:4.8 口部内径:2.1 底 径:4.2 番号:8.6	外墨:施釉(上部露胎) 内面 施釉、模様 状の次締あり	細/灰白		
126 12		11区	第3面	147ビット	磁器	玉獅子	近代以降	孔径:1.6	外墨:施釉 内面 施釉	2.50R4/4 にぶ い赤堀		
126 13		11区	第3面	264土坑	金属 製品	口輪と 押さえ金具	近代以降	径:5.0 重さ:4.0 重さ:1.3			非鉄	
126 14		10区 (A.1)		第1層	金属 製品	戸戸	近代以降	径:4.2 重さ:5.1 重さ:1.8			鉄	
126 15		11区	第3面	243清	金属 製品	穩健金具	近代以降	長:20.6 幅:9.2 重さ:0.6	模様2		鉄、堅り く立地金具	
126 16		10区 (A.1)	第2面	162土坑	金属 製品	穩健金具	近代以降	長:24.5 幅:9.7 重さ:0.6	針が書きついている、丸1、全体にニ 々?付番、全体にス付番		鉄、軒とり 金具	
126 17		11区	第2層	排水口目皿	金属 製品		近代以降	径:16.0 重さ:1.0			鉄	
126 18		10区 (A.2)	第1層	閉止 器具	金属 製品	フランジ	近代以降	径:13.2 孔径:1.6 重さ:0.9	孔4		鉄	
126 19		B区	第1面	10職工房 (12便携)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.6(一部欠) 底径: 27.4(完) 番号:37.2	外墨:凸線2、指印モード、施釉(底部露 胎)、底部に成形跡の砂粒付着、歪曲有 り 内面 施釉	2.50R3/3 に ぶい赤堀 (鉢) 2.50R2/3 内面 施釉		
126 20	76	B区	第1面	10職工房 (12便携)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.0(一部欠) 底径: 27.0(完) 番号:37	外墨:凸線2、施釉(底部露胎)、底部に ナチ、直線と成形跡の砂粒付着、歪曲有 り 内面 施釉	S.50R2/3 緑赤堀		
126 21		B区	第1面	10職工房 (13便携)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.2(一部欠) 底径: 28.3(完) 番号:36.2	外墨:凸線2、記印モード、施釉(底部露 胎)、底部に成形跡の砂粒付着、歪曲有 り 内面 施釉	2.50R3/2 地 方 2.50R2/2 内面 施釉		
126 22		B区	第1面	10職工房 (17便携)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.0(3寸) 底径: 27.0(完) 番号:36	外墨:凸線2、底部に成形跡の砂粒付 着、施釉(底部露胎) 内面 施釉	2.50R2/4 極 端		
126 23	76	11区	第2面	3便携	陶器	鉢	近代以降	口径:57.8~60.5(一部欠) 底径:27.1~27.5(完) 番号: 33.2	外墨:施釉(底部一部剥離) 内面 施釉	2.50R3/2 緑赤 堀		
126 24		11区	第2面	4便携	陶器	鉢	近代以降	口径:58.4(1/2寸) 底径: 29.6(完) 番号:31.7	外墨:凸線2、指印モード、施釉(底部露 胎)、底部に成形跡の砂粒付着、歪曲有 り 内面 施釉	2.50R4/2 地 方 2.50R2/2 内面 施釉		
126 25		11区	第2面	5便携	陶器	鉢	近代以降	口径:59.3(3/2寸) 底径: 29.0(完) 番号:32.9~33.7	外墨:凸線2、指印モード、底部に墨書有 り、施釉(底部剥離)、内面 施釉	2.50R6/6 極 端 2.50R2/2 内面 施釉		
126 26		5区	第1面	9土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:61.8(2/2寸) 底径: 50.0(1/2寸) 番号:66.6	外墨:暗目(6合)、刻印あり、底部に砂 粒付着し、内面 豊富な砂粒付着、施釉 有り、底部(6合)、施釉	2.50R5/3 に ぶい赤堀 (鉢) 2.50R2/2 内面 施釉		
126 27		9区	第2面	347土管利	陶器	土管	近代以降	口径:20.0(完) 底径: 14.6(完) 番号:64.8	外墨:暗目(6合)、刻印あり、底部に砂 粒付着し、内面 豊富な砂粒付着、施釉 有り	10R1/1.7 黒		
126 28		9区	第2面	348土管利	陶器	土管	近代以降	口径:19.6(完) 底径: 14.8(完) 番号:64.6	外墨:対称に2つの突起あり、施釉 内 面 砂粒付着、接合したような凹みあり 施釉	2.50R5/2 に ぶい赤堀 (鉢) 2.50R2/2 内面 施釉		
126 29		9区	第2面	349土管利	陶器	土管	近代以降	口径:24.3(完) 底径: 28.5(一部欠) 番号:45.5~ 66.5	外墨:暗目(5合)、底部に砂粒付着 内 面 暗目(5合)、砂粒付着	N.5/ 黒		
130 30		9区	第2面	350土管利	陶器	土管	近代以降	口径:30.0(1/2寸) 底径: 25.0(1/2寸) 番号:66.5	外墨:暗目(5~6合)、施釉 内面 巻管[ 3~4合] 施釉	2.50R2/1 赤堀		
130 31	76	9区	第2面	351土管利	陶器	土管	近代以降	口径:30.0(完) 底径: 70.8(完) 番号:71.0	外墨:暗目(7合)、施釉 内面 ナデによる 心臓広の横割(5合)、施釉	2.50R2/1 赤堀 2.50R6/6 極 端		
130 32		10区 (A.1)	第1面	1建物	陶器	L字形土管	近代以降	口径:20.1(3寸) 底径: 15.8(0.2寸) 番号:	外墨:施釉 内面 暗目(6合), 施釉	12/ 黒	昭和16年建 工	
130 33		10区 (A.1)	第1面	1建物北 入口付近	陶器	土管	近代以降	口径:16.0~18.8(1/2寸) 底 径:10.0(一部欠) 番号:66.7~ 63.8	内面 暗目(4合)、土管と接合してい た痕跡あり	10R2/1 黒		
130 34		10区 (A.2)	第1面	42土管溝	陶器	L字形土管	近代以降	口径:23.5(1~2寸) 底径: 18.8(1~2寸) 番号:64.2~ 65.8	外墨:底部に砂粒付着 内面 深く一部モ ルタル?付着	N.5/ 黒		
130 35	76	10区 (A.2)	第1面	43土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:23.5(1~2寸) 底径: 18.8(1~2寸) 番号:64.2~ 65.8	外墨:底部に砂粒付着 内面 深く一部モ ルタル?付着	7.50R2/1 黒		

掲載遺物觀察表 (2)

登録番号	図版番号	図版番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	0.1mに生存率	調査等(ヨコナガ、回転ナグは省略)(砂=0.2、ヘラカケリで砂の割いた方向を示す)	外面色調	備考
130	36	109(A2)	第1面	43土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:24.4(周) 深径:17.4(口) 基盤:65.0-69.5	外面:施釉、底面に一組埋設していた土管片付着 内面:白粉付着 内面:施釉、モルタル付着	SFH1.7/1 黒			
130	37	76	11区	第3面	1土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:33.2(周) 深径:25.5-26(周) 基盤:66.6-68.2	外面:幅目(7段)、底面に砂粒付着 内面:素目(5段)	2.5HR2/1 桃黒		
131	38		11区	第3面	2井	陶器	土管	近代以降	口径:18.8(口) 深径:15-16 基盤:64.8	外面:施釉、底面に砂粒付着 内面:施釉	7.5HR2/1 黒		
131	39		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:34.4(一部欠) 深径:28.0-1(周) 基盤:65.0	外面:幅目(7段)、底面に砂粒付着、施釉 内面:幅目(6-7段)、砂粒付着、施釉	NH1.5/ 黒		
131	40		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:35.5-36.0(周) 深径:28.2(周) 基盤:66.5	外面:幅目(5段)、底面に砂粒付着、施釉 内面:幅目(6段)、砂粒付着、施釉	2.5HR3/1 緑赤灰		
131	41		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:26.2(一部欠) 深径:29.0(4.5) 基盤:61.0	外面:幅目(6段)、底面に砂粒付着、施釉 内面:幅目(5段)、砂粒付着、施釉	2.5HR5/6 明赤褐色		
131	42		11区	第3面	244土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:23.6(1.2) 深径:18.0(1.2) 基盤:65.9	外面:施釉、内面:施釉	10HR2/1 黒		
131	43		11区	第3面	246土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:25.0(1.2) 深径:18.6(2.0) 基盤:65.4	外面:施釉、モルタル付着、底面に砂粒付着 内面:砂粒付着、施釉	2.5HR3/1 緑赤		
131	44		12区	第2面	21土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:27.0(1.2) 深径:21.4(4.0) 基盤:64.3	外面:幅目(6-7段)、砂粒付着、施釉 内面:幅目(5段)、砂粒付着、施釉	10HR2/1 黒		
131	45		12区	第2面	24土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:19.5(1.2) 深径:14.5(一部欠) 基盤:63.8-65.1	外面:施釉、モルタル付着、底面に砂粒付着 内面:施釉、砂粒付着	10HR3/1 緑赤灰		
131	46		5区	第1面		瓦	軒瓦	近代以降	裏長:10.1 幅端:29.1 平瓦面 幅端:3.7 斧丸端:9.6-9.8	凸面:ナギ、ヘナナギ 凹面:板ナギ、ナギ、竹ナギ、ナナギ	NZ/ 緑灰		
131	47		11区	第2層	瓦	袖丸瓦	近代以降	基高:5.8	凸面:ナギ、ヘナナギ 凹面:ナギ、ヘナナギ	NZ/ 緑灰			
132	48	109(A2)	第2層	瓦	平瓦	近代以降	裏長:29.3 幅端:26.2 扇形 面端:1.5 底端:面端:1.5	凸面:ナギ 凹面:ナギ	NZ/ 緑灰				
132	49	109(A2)	第2層	瓦	楕瓦	近代以降	裏長:29.0 幅端:26.2 扇形 面端:1.6 底端:面端:1.7	凸面:ナギ 凹面:ナギ	NZ/ 黒				
132	50		11区	第3面	238鉄骨溝	瓦	引掛村楕瓦	近代以降 底端面厚:1.4	裏長:27.7 鉄骨面厚:1.6 底端面厚:1.4	凸面:ナギ、型跡?あり 幅端:幅目(16条) 底端:幅目(15条)、幅目(16条)	NZ/ 緑灰		
132	51		11区	第3面	1土管溝	土瓦(左)	近代以降	幅端:18.5	凸面:ナギ 凹面:ナギ	SFH1/ 緑白			
132	52		11区	第3面	1土管溝	土瓦(右)	近代以降	基高:5.4	凸面:ヘラ模様、型跡か	NH/ 灰			
133	53	77	11区	第2層	瓦	軒瓦	近代以降	裏長:10.5 斧丸端:9.8~10.0 平端:4.6(6段)	凸面:ナギ、ナナギ 幅端:ナギ、ヘラナギ 幅端:斧印(2段)	NZ/ 緑灰			
133	54	77	9区	第0層	瓦	楕瓦	近代以降	裏長:28.5 扇形面厚:1.4 底端面厚:1.3	凸面:ナギ、ヘナナギ 幅端:ナギ、ヘラナギ 幅端:斧印(3段)	NH/ 灰			
133	55	77	11区	第2層	瓦	近代以降	側部厚:1.8 側面部厚:1.7	凸面:ナギ、ヘナナギ 幅端:ナギ、ヘラナギ 幅端:斧印(2段) 泥裏:○形(?)合1谷)	7.5HR6/3 にぶい灰				
133	56	77	9区	第1面	56土竪基礎 東邊側溝	瓦	平瓦	近代以降	側面幅:2.1 技埋幅:1.0-2.0 下端幅:2.1	凸面:型押しの痕跡、ナギ 凹面:ナギ、鋸刃型?	NH/ 灰		
133	57	77	11区	第2層	瓦	引掛け平瓦	近代以降	広底厚:2.5 端部厚:1.5	凸面:ナギ、ナギ 幅目(19条)、鋸刃 [K]型、幅目 幅端:ナギ、ナギ、丸孔(未確認)	NH/ 灰			
133	58	77	11区	第3面	205ピット	瓦	引掛け平瓦	近代以降	広底厚:2.3	凸面:ナギ、ナギ 幅目(19条)、鋸刃 [S]型、幅目(19条)、ナギ 幅端:ヘナナギ、 ナギ、丸孔(未確認)	NH/ 灰		
133	59	77	11区	第2層	瓦	引掛け平瓦	近代以降	側面幅:1.5 広端面厚:1.4 引掛け厚:2.5	凸面:ナギ、ナギ 幅目(20条)、鋸刃 [T]型、幅目 幅端:ナギ、型押しの痕跡?	NH/ 灰			
133	60	77	11区	第2層	瓦	近代以降	体部厚:1.6	凸面:幅目、ナギ、鋸刃型? 幅端:ナギ	NH/ 灰				
133	61	77	11区	第3面	80土坑	瓦	近代以降	端部厚:1.8 側面部厚:2.1	凸面:ナギ、ナギ、型押しの痕跡?、ナギ 凹面:ナギ、ナギ、型押しの痕跡?、ナギ、 鋸刃型?!	2.5YR2/2 黒黄			
133	62	77	109(A2)	第2面	59溝	瓦	近代以降	側部厚:2.1	凸面:ナギ、ナギ、型押しの痕跡?、ナギ 凹面:ナギ、ナギ、型押しの痕跡?、ナギ、 鋸刃型?「瓦式」	NH/ 灰			
133	63	77	109(A2)	第2面	59溝	瓦	近代以降	側部厚:2.3	手形跡 上面:板ナギ、縦筋状みあり、 乾燥後の凹みあり 下面:板ナギ、鋸刃型?、 丸孔(?)あり、モルタル付着 小口端:未調 理?、底:モルタル付着 長手面:ナギ、モルタル 付着?、凹み、小さな段差あり	NH/ 灰			
134	64	78	8区		焼瓦		近代以降	長:22.8 幅:11.0 厚:6.5	機械成形 上面:鋸刃型? (二重切し)、 モルタル付着 下面:鋸刃型? 小口面 ナギ? 長手面:ナギ? 乾燥後の段差 あり、ヘラ模様?	10HR5/6 桃 10HR5/2 泥質黃瓦	[岸和田焼 瓦]		
134	65	78	11区	第1層	焼瓦		近代以降	長:22.0 幅:31.0 厚:6.1	手成形 上面:鋸刃型? (二重切し)、 縦筋状みあり、鋸刃型? 小口面 ナギ? 長手面:ナギ? 乾燥後の段差 あり、ヘラ模様?	10HR5/4 桃	[岸和田焼 瓦]		
135	66	78	11区	第2層	焼瓦		近代以降	長:22.7 幅:11.3 厚:6.5	手成形 上面:鋸刃型? (二重切し)、 縦筋状みあり、鋸刃型? 小口面 ナギ? 長手面:ナギ? 乾燥後の段差 あり、ヘラ模様?	10HR5/6 桃	[岸和田焼 瓦]		
134	67	78	9区		焼瓦		近代以降	長:23.2 幅:11.2 厚:6.5	手成形 上面:鋸刃型? (二重切し)、 縦筋状みあり、鋸刃型? 小口面 ナギ? 長手面:ナギ? 乾燥後の段差 あり、ヘラ模様?	2.5HR5/6 桃	[大阪窯業]		
134	68	78	9区	第0層	焼瓦		近代以降	長:22.8 幅:10.9 厚:6.2	手成形 上面:鋸刃型? (二重切し)、 縦筋状みあり、鋸刃型? 小口面 ナギ? 長手面:ナギ? 乾燥後の段差 あり、ヘラ模様?	2.5HR5/6 明赤 褐色			

掲載遺物観察表 (3)

博物 番号	因番 番号	因版 番号	地区	遺構面	遺構・部名	種類	器種	時期	法量(cm) (内)は残存率	調査等(ヨコナラ、印判ナラは否否) (印ナラは「タケナラ」で跡が判いた 場合は記す)	外面色調	備考
134	69	76	9区		焼瓦			近代以降	長 22.3 幅 11.0 厚 6.5	手成形 上面 斜ナギ、錐鉄込みあり、モルタル付材あり 下面、板ナギ、スヌ?仕上、ナギ仕上あり 小口面、モルタル付材の痕跡あり、他のモルタル付材	10R4/2 茶赤	[原焼瓦]
134	70	76	9区		焼瓦			近代以降	長 21.0 幅 11.5 厚 6.5	手成形 上面 板ナギ、一部錐鉄込みあり、印判ナラあり 下面、斜ナギ、モルタル付材あり、斜鉄込みあり 小口面、ナギ、長手面、ナギ、モルタル付材	10R6/8 茶橙	[大阪瓦屋]
135	71	76	7区		機械窯盤	焼瓦		近代以降	長 21.0 幅 11.0 厚 6.4	手成形 上面 板ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラあり 下面、斜ナギ、モルタル付材あり、斜鉄込みあり 小口面、ナギ、長手面、ナギ、モルタル付材	2.5YR6/8 橙	[日本焼瓦]
135	72	76	10区 (A 2)		焼瓦			近代以降	長 22.4 幅 11.3 厚 6.5	手成形 上面 板ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラあり 下面、斜ナギ、モルタル付材あり、斜鉄込みあり 小口面、ナギ? 長手面、痕跡の跡あり、ナギ	10R6/6 茶	[日本焼瓦]
135	73	76	7区		機械窯盤	焼瓦		近代以降	長 22.8 幅 11.5 厚 6.5	手成形 上面 斜鉄込みあり、印判ナラあり、斜鉄込みあり、印判ナラ(二重押し)、斜鉄込みあり、印判ナラ、板ナギ、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	2.5YR8/4 にぶ 赤褐	[岸和田焼瓦]
135	74	76	1区		焼瓦			近代以降	長 23.3 幅 11.6 厚 6.8	手成形 上面 斜鉄込みあり、印判ナラあり、印判ナラ(二重押し)、斜鉄込みあり、印判ナラ、板ナギ、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	10R5/6 赤	[大阪瓦屋]
135	75	76	9区		焼瓦			近代以降	長 22.6 幅 11.2 厚 6.1	手成形 上面 板ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラあり、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	10R4/3 赤褐	[大阪瓦屋]
135	76	76	9区		焼瓦			近代以降	長 22.5 幅 11.0 厚 5.6	手成形 上面 板ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラあり、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	10R4/4 赤褐	[大阪瓦屋]
135	77	76	9区		焼瓦			近代以降	長 22.6 幅 11.1 厚 6.1	手成形 上面 板ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラあり、印判ナラ(二重押し)、斜鉄込みあり、印判ナラ、板ナギ、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	2.5YR6/4 にぶ 赤褐	[大阪瓦屋]
135	78	76	8区 第1面		焼瓦			近代以降	長 10.3 幅 11.0 厚 5.4	手成形 上面 指印えナラ後施ナギ、斜鉄込みあり、印判ナラ(二重押し)、斜鉄込みあり、印判ナラ、板ナギ、モルタル付材、斜鉄込みあり 小口面、ナギ手面	2.5YR3/3 明赤褐	[岸和田焼瓦]
136	79	76	7区 第2面	2ビット	金属 製品	錠		近代以降	現長: 3.1 球幅: 5.9 厚: 0.3			鉄
136	80	79	12区 第1、 2面	2建物	金属 製品	錠		近代以降	現長: 1.8 球幅: 10.0 厚: 0.5			鉄
136	81	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	錠		近代以降	現長: 3.3 球幅: 10.0 厚: 0.3			鉄
136	82	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	錠		近代以降	現長: 4.4 球幅: 12.8 厚: 0.9			鉄
136	83	79	11区 第1層下部 (1号 荷造場)	金属 製品	錠			近代以降	現長: 4.4 球幅: 12.0 厚: 0.6			鉄
136	84	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	錠		近代以降	現長: 2.9 球幅: 13.3 厚: 0.5			鉄
136	85	79	11区 第1層下部 (1号 荷造場)	金属 製品	錠			近代以降	現長: 4.7 球幅: 16.2 厚: 1.1			鉄
136	86	79	7区 第2面	2ビット	金属 製品	錠		近代以降	現長: 6.1 球幅: 39.1 厚: 1.9			鉄
136	87	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	手違い		近代以降	現長: 4.9 球幅: 11.5 厚: 0.9			鉄
136	88	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	手違い		近代以降	現長: 5.2 球幅: 12.8 厚: 1.0	全体にニス?付属		鉄
136	89	79	11区 第2層下部	金属 製品	手違い			近代以降	現長: 4.2 球幅: 12.2 厚: 0.8(?)			鉄
136	90	79	10区 (A 1)	第2面 189ピット	金属 製品	手違い		近代以降	現長: 5.1 球幅: 12.9 厚: 1.0			鉄
136	91	79	7区 第1層	金属 製品	手違い			近代以降	現長: 6.7 球幅: 16.0 厚: 1.2			鉄
136	92	79	10区 (A 2)	第1層	金属 製品	ボルト		近代以降	現長: 23.5 直径: 1.3	円頭ワッシャー(径 4.0、丸頭、ネジ切り)(6枚+0)、輪部断面 上方は四角、下方は丸		鉄
136	93	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	ボルト			近代以降	現長: 22.5(ナット間17.5mm 直径: 1.3)	方頭ワッシャー(3枚 (4.5×4.5mm 0.25)、六角形ナット、ネジ切り(6枚+0))		鉄
136	94	79	10区 (A 1)	第1層	金属 製品	ボルト		近代以降	現長: 23.8(ナット間20.5mm 直径: 1.6)	方頭ワッシャー2枚(径 4.0~4.5×4.5mm 0.45)、六角形ナット2枚、ネジ切り(14枚)		鉄
136	95	79	11区 第1層	金属 製品	ボルト			近代以降	長 42.6(ナット間39.1mm 直径: 1.9)	台形ワッシャー2枚(下: 10.高さ 6.3mm、上: 1.1mm)、方頭ワッシャー1枚(径: 5.1×5.0、厚: 0.2)、方頭ナット3枚、ネジ 切り(18枚、34枚?)		鉄
136	96	80	10区 (A 2)	第1層	金属 製品	ボルト?		近代以降	長 11.4 球部外径: 2.0 球部 内径: 1.2 孔径: 0.6~0.8	球部: 六角孔、孔1、輪部断面: 上方丸、 下方四角		鉄
136	97	80	9区 第2面	25枕木枕	金属 製品	ワッシャー		近代以降	直徑: 2.5 孔径: 0.7 厚: 0.2	丸		鉄
136	98	80	11区 第1層	金属 製品	ワッシャー			近代以降	4.1~3.9 孔径: 1.5 厚: 0.3~ 0.4			鉄
136	99	80	11区 第2層	金属 製品	ワッシャー			近代以降	現長: 9.9 球幅: 1.7 球幅: 1.2			鉄
136	100	80	10区 (A 2)	第2面	6枕木	やっこ		近代以降	現長: 18.0 球幅: 3.9 厚: 1.5			鉄
136	101	80	11区 第1層	金属 製品	とび口			近代以降	現長: 57.4 幅: 19.5 球幅: 3.4	柄ととび口 とび口に記号?		鉄・木

掲載遺物観察表 (4)

登録番号	国番号	国番号	地区	遺構番	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内は生存率 丸は、△は、△△はケズで砂が詰いた 方向を示す)	外面色調	備考
137	102	80	9区	第2番	20枕木状	金属製品	木ねじ	古代以降	長.7.7 幅.0.5	丸頭.ネジ切り(15箇)	銀	
137	103	10区 (A1)	第2番	56土坑	金属製品	木ねじ?	古代以降	長.6.7 幅.0.5	丸頭.ネジ切り(9箇)、輪部断面(上方 丸、下方ケズ)	銀		
137	104	10区 (A2)	第2番	37溝	金属製品	木ねじ	古代以降	長.4.8 幅.0.6	圓頭にナリ切リ、ネジ切り(31箇)	真庭		
137	105	80	10区 (A2)	第2番	37溝	金属製品	木ねじ	古代以降	長.7.2(さびなし) 幅.0.5	圓頭にナリ切リ、ネジ切り(21箇)	銀	
137	106	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	木ねじと ワッシャー	古代以降	長.7.9 幅.0.6	丸頭.ねじ切り12箇	銀		
137	107	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	木ねじと ワッシャー	古代以降	長.7.9 幅.0.6	丸頭.ねじ切り16箇?	銀		
137	108	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	木ねじ?	古代以降	長.4.0 幅.0.5	圓頭に木質付属、ネジ切りの痕跡	銀		
137	109	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	木ねじ	古代以降	長.5.0 幅.0.7	圓頭にナリ切リ、ネジ切り12箇	非鉄		
137	110	80	11区	第3番	191落ち込み	金属製品	木ねじ	古代以降	長.4.9 幅.0.6	圓頭にナリ切リ、ネジ切り10箇	非鉄	
137	111	80	11区	第3番	191落ち込み	金属製品	木ねじ	古代以降	長.5.1 幅.0.6	丸頭にナリ切リ、ネジ切り11箇	非鉄	
137	112	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	木ねじ?	古代以降	長.15.1 幅.0.7	圓頭にナリ切リ、ネジ切りのよう凹凸あり	銀		
137	113	80	11区	第2層	釘	古代以降	長.3.9	圓頭径.0.4 幅.0.2	圓頭にナリ切リ、ネジ切りのよう凹凸あり	非鉄		
137	114	80	11区	第1層下部 (1号 荷造場)	金属製品	釘	古代以降	長.5.3 幅.0.4	折れ曲がる	銀		
137	115	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.4.4 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ	銀	
137	116	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.4.5 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ (4箇)	銀	
137	117	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.5.1 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ	銀	
137	118	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.5.0 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ (8箇)	銀	
137	119	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.6.1 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ	銀	
137	120	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.6.6 幅.0.3	圓頭に斜格子模様、輪部一部にスジ切リ (4箇)	銀	
137	121	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.5.0 幅.0.3	圓頭に斜格子模様	銀	
137	122	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.7.4 幅.0.9	圓頭にナリ切リ、曲がる	銀	
137	123	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.7.8 幅.0.4	圓頭に丸子模様、頭部と輪部の間にV 字の凹み出しあり	銀	
137	124	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.12.6 幅.0.5	圓頭に丸子模様、頭部と輪部の間にV 字の凹み出しあり	銀	
137	125	80	12区	第1-2 層	2建物	金属製品	釘	古代以降	長.12.4 幅.0.5	スジ切リ(9箇)	銀	
137	126	103	11区	第3番	2枚	木製品	建築部材	古代以降	幅.11.0×2.0	ギヤ付丸孔1.小孔1、側面に加工痕 かとと思われる液波あり		
137	127	108	10区 (A1)	第1層	木製品	?	古代以降	長.4.9 幅.0.6	止めたためと思われる丸孔(内1は半分 のみ通)	銀		
137	128	79	10区 (A1)	第1層	木製品	止め具	古代以降	直徑(上)3.2(下)1.7 深さ 2.1	直徑(上)3.2(下)1.7 深さ 2.1	大きな鉄製円板の間にコルク?をはさ み針で閉じている	銀	
137	129	108	10区 (A1)	第2番	196土坑	木製品	かぶせ?	古代以降	直徑.3.0 高さ.1.6 厚.0.1	圓頭に斜格子模様	真庭	
137	130	79	10区 (A1)	第1層	木製品	コート フック	古代以降	横長.10.5 高幅.7 厚.0.4(土 台)	側面にナリ	銀		
137	131	10区 (A2)	第2番	77土坑	木製品	?	古代以降	横長.8.3 高幅.4.1 厚.1.0	二段に分かれた先端部の裏面が違う、上 面の裏面に深い凹み	銀		
137	132	7区	第2番	2ビット	木製品	横吹金具	古代以降	長.25.2 幅.6.6 厚.0.6	孔2	銀		
137	133	66	7区	第2番	2ビット	木製品	横吹點給油 物	古代以降	現長.20.0 高幅.6.6 厚.0.6	孔6(内4半程)	銀	
137	134	66	12区	第1-2 層	2建物	木製品	建築部材	古代以降	長.20.3 幅.5.3 厚.0.6	周縁に突起	銀	
137	135	66	10区 (A1)	第2番	250横遺物	木製品	裏面金?	古代以降	長.27.9×2.8 厚.2.6 厚.0.6 孔径.0.7	側面に孔7	銀	
138	136	8区	第1面	8石構溝	木製品	?	古代以降	現長.39.8 高幅.16.0 厚.0.6	二段に分かれた先端部の裏面が違う、上 面の裏面に深い凹み	銀		
138	137	11区	第2層	建型部材	古代以降	現長.20.7 高幅.2.2 厚.1.5 (高い所)0.4(低)0.5	孔2	側面に孔7	銀			
138	138	79	10区 (A2)	第2番	7ビット	木製品	建築部材	古代以降	現長.12.0(幅) 厚.2.6 (の)厚.0.6	木ネジ4	銀	
138	139	79	12区	第1-2 層	2建物	木製品	建築部材	古代以降	現長.11.7 高幅.4.3 厚.2.6 (重なった所)	螺母と挟み板状の重なり、釘2	銀	
138	140	79	10区 (A1)	第1層	木製品	建築部材	古代以降	現長.19.2 高幅.4.0 厚.2.6 (重なった所)	螺母と挟み板状の重なり、釘2 4.0cmをブリッジ状の薄板ではさむ、丸 ワッシャー(厚.2.0mm)2、六角形ナット (厚.1.2mm)2、孔1.0mm	銀		
138	141	10区 (A1)	第1層	木製品	?	古代以降	現長.39.4 高幅.4.0 厚.2.1 (凸出合心)	断面十字状	銀			

掲載遺物観察表 (5)

排回	因番	因番	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	内に保存率	調査等(ヨコナ、回転ナダは否)	外面色調	備考
138	142	11区	第3面	264土坑	金属製品+木製品	?		古代以降	現長:22.4 幅幅:18.5 厚:2.5		裏面全周の表面を薄い金属で包まれた木枠が回る。訂3		非鉄・木
138	143	81	11区	第1層	コンクリート製品	敷居		古代以降	現長:37.8 幅幅:9.2 高さ:0.0		前面2面に挿入されている、上面に2本の筋、下面に三角状の切り込み6箇		
139	144	83	9区	第1層	金属製品	砲弾		古代以降	口径:5.4(約6cm)あり 素径:3.4(約4.5cm) 素高:12.6 幅:0.77 厚:0.0		弾体1、ネジ切り(6条)		鉄?
139	145	83	9区	表様	金属製品	砲弾		古代以降	口径:5.4(約6cm)あり 素径:3.4(約4.5cm) 素高:12.6 幅:0.77 厚:0.0		弾体1、ネジ切り(6条)		鉄?
139	146	108(A.1)	表様	金属製品	砲弾			古代以降	口径:6.7(約7cm) 素径:7.2(一部) 素高:22.4 幅:0.4~0.5 厚:0.0		弾体2、ネジ切り7条		鉄・真鍮
139	147	108(A.1)	第2面	189ピット	金属製品	砲弾		古代以降	口径:5.0(約5cm) 重量:6.7(約7cm) 素径:3.0(約3.5cm) 素高:20.2 厚:0.9 ~1.3 厚:0.0		弾体1、ネジ切り(6+α条)、ゆがむ		鉄・真鍮、 九一式銃弾か
139	148	83	11区	第2層	金属製品	砲弾		古代以降	口径:8.6 幅:1.0~1.6 厚:0.2~0.3		内部墨塗り		鉄・真鍮、 九一式尖板彈か
139	149	83(A.1)	第1層	金属製品	砲弾			古代以降	口径:5.1(約5cm) 重量:10.0(約1.0kg) 素径:3.0(約3.5cm) 素高:19.7 幅:1.1~1.7 厚:0.2		ネジ切り(9条)、ゆがむ		鉄・真鍮、 十四年式機銃弾殻か
139	150	108(A.2)	第2面	7ピット	金属製品	砲弾		古代以降	口径:5.0(約5cm) 重量:10.0(約1.0kg) 素径:3.0(約3.5cm) 素高:19.7 幅:1.1~1.7 厚:0.2		ネジ切り(9条)、ゆがむ		鉄・真鍮、 十四年式機銃弾殻か
139	151	83	108(A.1)	第0層	金属製品	砲弾		古代以降	口径:5.0(約5cm) 重量:10.0(約1.0kg) 素径:3.0(約3.5cm) 素高:19.7 幅:1.1~1.7 厚:0.2		ネジ切り(9条)、ゆがむ		鉄・真鍮、 十四年式機銃弾殻か
139	152	83	11区	第3層	金属製品	砲弾		古代以降	口径:4.2~4.3 幅:0.6 厚:0.6		弾体2、ネジ切り5条、小孔1		鉄
139	153	108(A.1)	第1層	金属製品	砲弾			古代以降	口径:15.3 幅:1.7 厚:0.6		ネジ切り(6条)		鉄・真鍮
139	154	86(A.2)	第1層	金属製品	砲弾			古代以降	無標幅:(上)1.0(下)1.1 厚:0.2~0.3		外面に金属が張らかい状態のときになつたたなび後退、表面剥み		真鍮
139	155	11区	第3面	60土坑	金属製品	砲弾		古代以降	無標幅:(上)0.95(下)1.0 厚:0.25		表面剥み		真鍮
139	156	108(A.1)	第1層	金属製品	砲弾			古代以降	無標幅:(上)1.0(下)1.05 厚:0.25		剥みなし		真鍮
139	157	86(A.1)	第1層	金属製品	砲弾			古代以降	口径:2.0(約2.4cm) 幅:0.45		外面2条の注線、表面連続しない1条の沈窓		真鍮
139	158	11区	機械廻軸中	金属製品	小薬莢			古代以降	口径:1.2(約1.8cm) 幅:0.05		使用中心:円形の凹み(使用済みの印)、各方向の凹み3、剥印?		真鍮
139	159	84	11区	機械廻軸中	金属製品	小薬莢		古代以降	口径:0.7 幅:0.1(約1.0cm) 厚:0.05? 素径:0.55		使用中心:円形の凹み(使用済みの印)		真鍮
140	160	84(A.1)	第1層	金属製品	薬莢			古代以降	口径:0.6(約0.7cm) 幅:0.05		使用中心:円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	161	84(A.2)	第2面	54ピット	金属製品	薬莢		古代以降	口径:0.6(約0.7cm) 幅:0.05		使用中心:円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	162	84(A.2)	第2面	60土坑	金属製品	薬莢		古代以降	口径:7.0(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:15.9 幅:0.1		使用中心:円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?二?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	163	108(A.2)	第2面	60土坑	金属製品	薬莢		古代以降	口径:6.9(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:15.9 幅:0.1		剥れ痕あり、底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	164	84(A.2)	第2面	60土坑	金属製品	薬莢		古代以降	口径:7.1(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:15.9 幅:0.1		底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	165	84(A.2)	第1層	金属製品	薬莢			古代以降	口径:7.1(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:15.9 幅:0.1		内面緑色の帶で囲う、底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	166	84(A.2)	第1層	金属製品	薬莢			古代以降	口径:8.0(約1kg) 素径:8.0 厚:0.1		内面に青緑色、底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	167	108(A.2)	第1層	金属製品	薬莢			古代以降	口径:7.1(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:10.1 幅:0.1		ネジ切り(8条?)、前印(F) 略十?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	168	84(A.2)	第2面	77土坑	金属製品	薬莢		古代以降	口径:7.0(約7cm) 重量:8.0(約1kg) 素径:8.0(約1kg) 素高:10.1 幅:0.1		底部縫合に剥み、ネジ切り(4条、9色の文字)6.4?		真鍮
140	169	9区	表様	金属製品	薬莢			古代以降	口径:9.2(約1kg) 素径:9.0 厚:0.2		ネジ切り(8条)、前印(F) 略十?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	170	10-2区	2次機械廻軸中	金属製品	薬莢			古代以降	口径:9.0(約1kg) 重量:9.4 厚:0.15~0.2		底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	171	10区(A.1)	第1層	金属製品	薬莢			古代以降	口径:9.0(約1kg) 重量:9.0 厚:0.15~0.3		底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、前印(F) 略十?三?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	172	84(A.2)	第2面	60土坑	金属製品	薬莢		古代以降	口径:9.2(約1kg) 重量:14.2 厚:0.1~0.15		ネジ切り(9条)、前印(F) 略十?四?五?ヤ版(略十?三?四?五?ヤ版)		真鍮
140	173	10-2区	2次機械廻軸中	金属製品	薬莢			古代以降	口径:12(約1kg) 重量:24.3 厚:0.1~0.2		底部縫合に剥み、内面墨塗り		真鍮

掲載遺物観察表 (6)

登録番号	図版番号	図版番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量 (dm)	○内は生存率	調査等 (ヨコゲ、巡回ナグは省略) (砂=0.5m、ヘラケツリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考	
140	174	84	(A.1)	第2面	162土坑	金属製品	薬莢	近代以降	直径 13.5 (0.5mあり) 高さ 13.5 厚 0.2~0.6		切られ削れ跡がある。底割中心に円形の凹部(使用済みの穴)、斜印 F 短四辺形*4面板 (図-3*4面版)	真庭		
140	175	118		機械面附中		金属製品	?	近代以降	上径 1.6 (完) 下径 2.8 (完)		上端に下端に細かい刃込み、ネジ切り 9 個	赤	非鉄	
140	176	109	(A.2)	第1層		金属製品	喉嚨	近代以降	上径 2.0 (完) 下径 3.1 (完)		上端に切り込み 2、ネジ切り (3 条、12 個)	黒		
140	177	109	(A.1)	第1層		金属製品	喉嚨	近代以降	上径 3.1 下径 3.7 高さ 1.8 厚 0.8		切り込み 2、ネジ切り (3 条、5 個)	黒		
140	178	85	128		第1層	金属製品	喉嚨	近代以降	直径 2.5~2.6 棱円形にゆがむ? 高さ 6.0		中は詰まっている。針金が回っている。沈線 1、切り込み 2、ネジ切り (5 条)、小孔 1	赤	非鉄? 八八式鉄砲 信管か	
140	179	85	(A.1)	第2面	179ビット	金属製品	喉嚨	近代以降	上径 3.1 (完) 下径 4.5 (完) 高さ 5.1 厚 0.5~0.8		切り込み 2、ネジ切り (7 条、14 個)	黒		
140	180	85	(A.1)	第1層		金属製品	?(2種) (薬莢接続部)	近代以降	上径 3.1 (一部欠) 下径 5.5 (一部欠) 高さ 7.1 厚 0.5~2.3		上端に中央に切り込み 2 個付く。沈線 1、ネジ切り (5 条、1~2 条)、斜印 C?、O?、R?、e?	黒		
140	181	85	(A.1)	第1層		合葉製品	?	近代以降	上径 3.2~3.3 高さ 1.1		圧力ひしひかげる。上端に切り込み 2、ネジ切り (4 条、7 条)	黒		
140	182	85	(A.1)	第1層		合葉製品	佐久薬莢室	近代以降	上径 (内) 2.8 高さ 0.55		上端部に斜印小孔 2、ネジ切り (5 条)	赤	非鉄	
140	183	8	8	第1面	8石結構	合葉製品	佐久薬莢室	近代以降	上径 3.35~3.65 (ほぼ完) 高さ 7.7 厚 0.25		上端に小孔 2、ネジ切り (5 条)	黒		
140	184	109	(A.1)	第1層		合葉製品	佐久薬莢室	近代以降	上径 3.0 (一部欠) 高さ 7.3 厚 0.15		ネジ切り (2 条)	黒		
140	185	110		第1層		合葉製品	?	近代以降	下径 3.5 高さ 5.1 厚 0.1		折れ曲がる。針金中に入り込む、突出部分を十字に裏抜板が張る	真庭		
140	186	9	9	第2面	14粒木枕	合葉製品	?	近代以降	下径 0.8 (完) 高さ 2.6		上部に原化粧付箋、ネジ切り (4 条)	ベーカライ ト?		
140	187	129		第1層		合葉製品	?	近代以降	下径 2.4~3.3 (へしやげる) 高さ 4.1		中が詰まっている。ネジ切り (7 条)	黒		
140	188	109	(A.2)	第2面	62土坑	合葉製品	?	近代以降	上径 1.7 (完) 下径 2.4 (完) 高さ 6.9~7.0		底面に小孔 2、筒部に小孔 1~3、ネジ切り (2 条)	黒		
140	189	129		第1層		環形刀群の群	近代以降	直径 1.5 重さ 16.3g		型づくりの段が残る	赤	非鉄		
140	190	118		第2層		金属製品	?	近代以降	上径 2.5 (3/4) 下径 1.0 (0.5) 高さ 2.6 厚 0.4~0.9		中央右側に切り込み 2、底部突出部に十字状の穴 (1~4 条)、スクリーフ (5 条、4 条、4 条)	赤	非鉄	
140	191	83	(A.1)	第1層		金属製品	薬莢彈?	近代以降	直徑 5.0 (0.5mあり) 高さ 9.5 厚 0.25		上部に木片付箋、ネジ切り (3 条)	黒?		
140	192	86	9	第2層		金属製品	?	近代以降	直徑 6.0 厚 1.2 乳頭: 1.15 ~1.3		孔 1、出目 1 (高: 1.0~1.1)	黒		
141	193	110		機械面附中		金属製品	喉嚨	近代以降	上径 1.0 (完) 下径 1.8 (完) 高さ 1.8		中が詰まっている。底割に切り込み 3、斜印「六六式」、ネジ切り (4 条)	赤	非鉄	
141	194	86	110	第1層		金属製品	喉嚨	近代以降	上径 2.4 (完) 下径 3.2 (完) 高さ 1.9		ドライズ 内に土と布を複数枚、底部に切り込み 3~4、斜印「民國廿四年 德式十二年 39」(?)	赤	非鉄	
141	195	86	110	第1層下部 (1号 建造物)		金属製品	喉嚨	近代以降	上径 2.4 (完) 下径 3.2 (完) 高さ 1.9		内面に土と布を複数枚、底面に切り込み 3~4、斜印「16」	赤	非鉄	
141	196	86	110	第1層下部 (1号 建造物)		金属製品	?	近代以降	上径 1.45 (完) 下径 2.4 高さ 2.2		切り込み 2、底面に難読字?、底面に木片付箋、ネジ切り (2 条)	赤	非鉄	
141	197	110		第1層下部 (1号 建造物)		金属製品	?	近代以降	上径 3.7 (完) 高さ 0.5 厚 0.3		未貫通孔 2	赤	非鉄	
141	198	85	110	第2面		保護樹叢	近代以降	上径 3.9 (完) 下径 2.9 (完) 高さ 2.5		底面にねじ留し切り込み、浮き彫り印「手太文」、ネジ切り (5 条)	ベーカライ ト?			
141	199	85	110	第1層		保護樹叢	近代以降	上径 5.2 (完) 下径 4.4 (完) 高さ 2.2		底面にねじ留し切り込み、ネジ切り (4 条)	ベーカライ ト?			
141	200	85	7	第2面	6粒木枕	合葉製品	?	近代以降	上径 5.4~7.3 (ゆがむ) 下径 5.9~6.3 高さ 3.0		底面にねじ留し切り込み、ネジ切り (5 条)	黒		
141	201	85	129	第1層		合葉製品	?	近代以降	上径 4.1 (完) 下径 6.0 (完) 高さ 2.3		底面にねじ留し切り込み、ネジ切り (3 条)、アクリル板が接着、違う素材を合体している	黒・非鉄		
141	202	109	(A.1)	第1層		合葉製品	?	近代以降	上径 5.1 下径 6.7 高さ 1.7		孔 1、底面に木片付箋 2、ネジ切り (4 条、3 条)、ネジ 1 個入	黒		
141	203					木製品	托板	近代以降	長 19.4 高さ 7.3 厚 3.0		スギ材 全表面に木片受けが付いて、山の部分に斜 1 本木柱 2 本	赤		
141	204	103	(A.1)	第2面	83土坑か 122土坑	木製品	托板	近代以降	長 31.0 高さ 6.7 厚 5.3		スギ材 全表面に木片受けが付いている、山の部分に斜 1 本木柱 2 本	赤		
141	205	109	(A.1)	第1層		木製品	托板	近代以降	長 32.4 高さ 6.7 厚 3.3~4		スギ材 全表面に木片受けが付いて、山の部分に斜 1~2 本木柱 2 本	赤		
141	206					木製品	托板	近代以降	長 50.9 幅 38.5 厚 7.0		スギ材 穴 12 (径: 8cm)、斜 21 孔	赤		
142	207	103	10~2	区		木製品	托板	近代以降	長 49.59 幅 38.2 厚 6.4		スギ材 穴 12 (径: 8.5cm)、斜 21 孔	赤		
142	208	10	2	区		木製品	托板	近代以降	長 49.59 幅 38.2 厚 6.4		スギ材 穴 12 (径: 8.5cm)、斜 21 孔	赤		
143	209	80	10	区	第1面	1種物	合葉製品	大灯	近代以降	高さ 9.5 頭部径 1.7~1.4 軸部径 0.9		大形 枝木の木が付箋	黒	
143	210	10	区	第1面	1種物	合葉製品	大灯	近代以降	高さ 9.9 頭部径 2.1~1.7 軸部径 0.9~1.0		亜甲形 刃み?	黒		

掲載遺物観察表 (7)

博物館番号	国番号	団番号	地区	遺構面	遺構・品名	種類	器種	時期	法量(cm) (□内は保存率)	調査等(ヨコナリ、回転ナリ等有無) (△印は「ラケケズリ」で移が動いた方向を示す)	外面色調	備考
142	211	80	10区 (A.1)	第1面	1遺物	金属製品	大釘	近代以降	長:8.7 幅:2.2×1.8 輪部径:0.8	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	212		10区 (A.1)	第1面	1遺物	金属製品	大釘	近代以降	長:8.7 幅:2.4×1.9 輪部径:0.8×0.9	亀甲形	黒	
143	213	80	11区	第1層		金属製品	大釘	近代以降	長:3.8 幅:1.8×1.9 輪部径:1.0	大形 曲がっている	黒	
143	214		11区	第1層		金属製品	大釘	近代以降	長:6.3 幅:1.8×1.7 輪部径:1.0	大形	黒	
143	215		11区	第2層		金属製品	大釘	近代以降	長:6.1 幅:1.7×1.8 輪部径:0.9	大形	黒	
143	216	80	11区	第2層		金属製品	大釘	近代以降	長:6.5 幅:1.8×2.0 輪部径:0.9	大形	黒	
143	217		12区	第1・2面	5軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:8.0 幅:1.9×2.4 輪部径:1.0	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	218	80	12区	第1・2面	5軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.9 幅:1.7×2.3 輪部径:1.1×1.2	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	219		12区	第1・2面	5軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.7 幅:1.9×2.4 輪部径:0.9×1.0	亀甲形	黒	
143	220	80	12区	第1・2面	5軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.9 幅:1.8×2.2 輪部径:0.8×0.9	亀甲形	黒	
143	221	80	12区	第1・2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.8 幅:1.7×2.3 輪部径:0.8	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	222		12区	第2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.7 幅:1.8×2.3 輪部径:0.9	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	223	80	12区	第2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.5 幅:1.9×2.4 輪部径:0.7×0.9	亀甲形	黒	
143	224		12区	第2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.8 幅:1.4×1.9 輪部径:0.8×0.8	亀甲形	黒	
143	225		12区	第2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.6 幅:2.2×1.9 輪部径:0.7	亀甲形	黒	
143	226		12区	第2面	6軌道	金属製品	大釘	近代以降	長:7.9 幅:1.7×2.4 輪部径:0.8×0.9	亀甲形 枝木の木が付着	黒	
143	227	102	10区 (A.2)	第1面		木製品	枕木	近代以降	長:95.0 幅:5.9 高さ:枝の原 (10.2) 高:0.0(釘と板の隙 11.5)	スギ材 枝1、米真通孔1、大釘1、節や 枝が目立つ	黒	
143	228		8区	第1面	21軽便軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:104.5 幅:15.2 厚:11.5 孔径:4.3×1.5	孔4、裏面に段あり	黒	
143	229		B区	第1面	21軽便軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:104.5 幅:14.8 厚:11.3 孔径:4.3×1.5	孔4、裏面に段あり	黒	
144	230	87	9区	第2面	35枕木支柱	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:105.0 幅:15.0 厚:11.0 孔径:4.1×1.5	孔4、裏面に鉄筋露出	黒	
144	231	89	10区 (A.1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:96.0 幅:10.0~12.5 厚: 12.0 孔(最大) 4.0×2.0	新規記事記載写、孔4(内2木が充填、大 釘2枚)	黒	
144	232	88	10区 (A.1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:95~96.0 幅:12.0~13.0 厚: 10.7~11.0 孔(最大) 孔径:1.6~ 1.7	新規記事記載写、孔4(木が充填している ものあり、大釘1枚)	黒	
144	233		10区 (A.1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:105.5 幅:14.7 厚:11.5 孔径:4.2×1.7	孔4(木が充填している、裏面に木が付 着、裏面に段あり)	黒	
144	234	87	14区	第1面		コンクリート製品	枕木	近代以降	長:137.4 幅:14.5~16.8 厚: 8.6~11.0 孔(最大) 2.0×1.5	孔3(大釘2枚)、裏面の凹みに木が付 着、裏面に段あり	黒	
144	235	87	14区	第1面		コンクリート製品	枕木	近代以降	長:158.8 幅:14.5~15.3 厚: 8.3~11.4 孔(最大) 22.8× 1.8	孔11、裏面に段あり、一部表面が欠陥し て底面が露出	黒	
144	236	86	12区	第2面		金属製品	離ぎ日板	近代以降	長:94.4 幅:4.0 厚:0.8 孔 径:6~1.9	孔4	黒	
144	237	87	10区	第0層		金属製品	レール	近代以降	長:126.3 幅:14.8~15.0 厚: 8.6~11.7 孔(最大) 6.6× 1.6	離ぎ目板(幅約3cm)を六角ナットと ボルトで止めている	黒	
145	238	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:150.6 幅:15.2 厚:8.5~ 11.0 孔(最大) 12.5×1.5	孔8(大釘2枚)、裏面に凹み2、段あり	黒	
145	239	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:150.6 幅:14.5~15.0 厚: 8.2~11.0 孔(最大) 30.5× 1.8	孔7(大釘6枚、木が充填しているもの とモルタルで埋められているものあり、裏 面に凹み2、凸状の穴に充填1、突起1、段 あり)	黒	
145	240	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:150.6 幅:15.2 厚:8.5~ 11.0 孔(最大) 12.5×1.5	孔5(木が充填しているものとモルタ ルで埋めているものあり)、裏面の表 面の表と一部が欠損して底面が露出、 裏面に凹み2、凸状の穴に充填1、突起1、段 あり)	黒	
145	241	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:150.6 幅:15.0 厚:8.5~ 11.0 孔(最大) 14.7×1.8	孔9(木が充填しているものとモルタ ルで埋めているものあり)、裏面の表 面の表と一部が欠損して底面が露出、 裏面に凹み2、凸状の穴に充填1、突起1、段 あり)	黒	
145	242	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:177.4 幅:15.1~15.9 厚: 8.4~11.2 孔(最大) 19.2× 1.8	孔10(大釘2枚)、裏面の表と一部が 欠損して底面が露出、裏面に凹み2、段あり	黒	
145	243	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:177.2 幅:14.8~15.0 厚: 8.3~11.1 孔(最大) 16.4× 1.7	孔8(大釘2枚、木が充填しているもの とモルタルで埋めているものあり)、裏 面に凹み2、段あり)	黒	
146	244		5区	第2層	須恵器	杯		6世紀末~7 世紀初期か	口径:11.4(1/6)	外蓋 回転ラムケズリ	白/灰	
146	245		5区	第2層	須恵器	壺		7世紀後半	口径:18.0(1/7)	外蓋 平行タキ後転ナヂ、沈線? 1	白/灰	
146	246		5区	第2層下部	須恵器	高杯	8世紀前半	脚部都付	底:11.2(一部欠)	外蓋 扇形 内蓋 深部内面はナ シ	白/灰	

掲載遺物観察表 (8)

登録番号	国名	固有番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) (□内は生存率)	調整等 (ヨコナメ/回転ナメは名前) (印=は、ヘラケズリで砂が動いた跡を示す)	外面色調	備考	
146_247	90	5区	第3面	堅穴建物1	土器部	杯A	8世紀前半	口径:17.5(1/0個) 高台径:4.2	外面:摩崖 内面:摩崖	5786.6 緑			
146_248		5区	第3面	堅穴建物1	土器部	蓋	8世紀前半か	口径:16.6(1/6個) 高台径:9.0(1/0個) 最大腹径:12.0	圓上背元 外面:摩崖,一部ハケメ残名 9.0(1/0個) 最大腹径:12.0	5.5987/3, 5.5986/4 にぶんL緑			
146_249		5区	第3面	堅穴建物1	土器部	蓋	8世紀前半か	口径:18.6(7.0の内) 高部径:16.0(1/1個)	外面:指笄えナデー部ハケメ 内面:摩崖	10195.4 にぶんL緑			
146_250	5区	第3面	堅穴建物1	須恵器	杯蓋	6世紀後半		内面凹透:8.6(1/6)	外面:指笄えナデー部ハケメ (砂印)。一部自然跡付	1016/1~5/1 緑 (印)N/2/緑 (印)N/2/緑			
146_251	5区	第3面	堅穴建物1	須恵器	蓋A?	8世紀前半	口径:14.0(3/5)			7.575/1 紫			
146_252	90	5区	第3面	堅穴建物1	須恵器	鉢	8世紀前半	口径:17.0(3/6) 高台径:9.6(一部) 蔵高:9.7	外面:高台の無孔が違う 内面:回転ナメ 乎後ナメ	5.5987/1 紫, 5.5986/1~5/1 土器部Cの様模			
146_253		5区	第3面	堅穴建物1	須恵器	平瓶	8世紀前半		把手部分: 内面:把手はハケメり後 部はナメによる成形, 次第1 内面:ナメ	576/1 紫, N/2/緑			
146_254		5区	第3面	堅穴建物1	土器部	蓋A	8世紀後半	口径:11.9(1/4個) 高台径:9.8(一部) 蔵高:9.7	外面:指笄え、表面削磨 内面:表面削磨	5.5987/6 緑, 5.5986/4 にぶんL緑			
146_255	5区	第3面	堅穴建物1	土器部	蓋	8世紀後半	口径:30.0(7.0の内)	外面:摩崖 内面:摩崖	10197/3 にぶんL緑				
146_256	90	5区	第3面	堅穴建物2	土器部	蓋	6世紀後半	口径:15.0(3/6個)	外面:摩崖 内面:摩崖	7.576/6/3 にぶんL緑	カマドの支脚に転用か		
146_257		5区	第3面	堅穴建物2	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:11.0(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(砂印)。後の名残の跡み1.一部溶脹差し、全体に反かぶり 内面:ナメ	N/1 紫, 586/1 青紫			
146_258		5区	第3面	堅穴建物2	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.6(6.0の内) 檻径:11.0(3/6)	外面:回転ヘラケズリ(砂印)	586/1~5/ 紫			
146_259		5区	第3面	堅穴建物2	土器部	杯	8世紀後~9世紀初期	口径:20.1(1/2ピット)	8世紀後~9世紀初期 (印)定立(湖東久) 外面:指笄えナデ 内面:ナデ	10197/4 にぶんL緑			
146_260		5区	第3面	堅穴建物2	須恵器	杯B	8世紀後~9世紀初期	口径:11.0(1/2)	8世紀後~9世紀初期 (印)定立	N/1~5/ 紫			
146_261		5区	第3面	堅穴建物2	須恵器	杯B	8世紀後~9世紀初期	口径:11.2(1/2)	8世紀後~9世紀初期 (印)定立	586/6/1 青紫			
146_262		5区	第3面	堅穴建物2	須恵器	杯A	8世紀後~9世紀初期 (印)定立	口径:10.0(1/3) 蔵高:2.5	8世紀後~9世紀初期 (印)定立 (砂印)、最深部:2.5	外面:摩崖 内面:摩崖	2.573/2 黄		
146_263		5区	第3面	14匹縫	須恵器	高杯	7世紀前半	口径:9.5(1/2個)	外面:回転ヘラケズリ	586/1~5/1 青紫			
146_264		5区	第3面	31匹縫	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:13.0(1/10)	8世紀中頃 (印)定立(湖東久)	10196/1~5/1 紫			
146_265		5区	第3面	32匹縫	土器部	蓋?	8世紀		把手部分: 内面:把手部分指による成形、摩崖 内面:摩崖	7.597/2~7/4 にぶんL緑			
146_266	90	5区	第3面	32匹縫	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.0(1/4) 蔵高:5.0	外面:回転ヘラケズリ(砂印)	7.597/1 紫白~7.597/1 紫			
146_267	5区	第3面	32匹縫	須恵器	杯	6世紀後半	受贈者:15.0(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(砂印)	10196/1 紫				
146_268	5区	第3面	117匹縫	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.8(1/10)	外面:回転ヘラケズリ(砂印)	N/1~5/ 紫				
146_269		5区	第3面	134匹縫	須恵器	高杯	7世紀後半	脚柱直径:4.8(1/2)	外面:底面2.7、灰かぶり 内面:ナデ。脚柱前面工事跡?	N/1~5/ 紫			
146_270		5区	第3面	17土坑	土器部	蓋	7世紀後半	口径:16.0(1/4個)	外面:摩崖 内面:摩崖	10197/2~7/3 にぶんL緑			
146_271	90	5区	第3面	20土坑	土器部	杯C	8世紀中頃	口径:12.0(1/6) 蔵高:2.9	外面:摩崖 内面:摩崖	5786/6~6/8 緑			
146_272		5区	第3面	20土坑	須恵器	杯蓋	7世紀初頭	口径:12.8(1/13)	外面:壁の名残の凹跡!	1015/1 紫			
146_273		5区	第3面	20土坑	須恵器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:20.0(1/13)		586/1~5/2~2 黄			
146_274		5区	第3面	21溝	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:16.0(1/6個)	外面:自然斜付	N/1~5/ 紫 (印)572/1 黒			
146_275		5区	第3面	21溝	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:18.6(1/1)		N/1~4/ 紫			
146_276		5区	第3面	21溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.0(1/6個)		N/1~5/ 紫			
146_277		5区	第3面	21溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.4(1/6個)	外面:ナデ	576/1 青紫			
146_278		5区	第3面	44溝	須恵器	杯	8世紀中頃	底径:6.5(3/4)	外面:ハサカ切羽(摩崖)	2.578/2 白			
146_279		5区	第3面	44溝	須恵器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:16.0(1/4個) 蔵高:3.1	外面:つまみ部分の捻り付けは指による成形、内面:回転ナメ 乎後ナメ	10193/1 緑青 N/1~5/1 紫 2.578/2~2.577/2 白			
147_280	98	8区	第2層以下	瓦	軒平瓦		8世紀後半か		均量草文、鶴岡唐寺T-6型式と同窓	2.579/2 白	第140集団 09-1號		
147_281		8区	第3層	須恵器	蓋	8世紀前半	高台径:8.0(1/4個)	外面:カケズリワナデ。高台に焼成前穿孔1. 内面:新しい? 断面物あり	N/1~5/ 紫				
147_282		8区	第3層	須恵器	輪	9世紀	高台径:7.4(1/4個)	外面:ナデ、ヘラケズリ、所々に縞難が残る	N/1~5/ 紫白				
147_283		8区	第3層	灰斑陶器	水注	9世紀		外面:ナデ、ヘラケズリ、所々に縞難が残る	N/1~5/ 紫白		630? 東邊の財品の可搬性ある?		
147_284		8区	第3層	灰斑陶器	輪	9世紀前半	高台径:7.4(1/4個)	外面:ナデ、施脂	577/1 紫白				
147_285		8区	第3層	灰斑陶器	輪	9世紀前半	高台径:9.0(1/4個)	内面:施脂	N/1~5/ 紫				
147_286	98	8区	第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半		単井10井連華文 平城宮613號式と同型とする	10197/3 にぶんL緑				
147_287	102	8区	第3層	金属製品	輪		現長:4.1 現幅:4.1 厚:1.6						
147_288		8区	第4層	土器部	杯A	8世紀中頃	口径:20.0(1/17)	外面:摩崖 内面:摩崖	5786.6 紫				

掲載遺物観察表 (9)

博物館番号	国番号	団番号	地区	遺構面	遺構・部名	種類	器種	時期	法量 (cm) (□内は残存率)	調査等 (ヨコナメ、回転ナメは否否) (秒一ノラケズリで転がれた、内面を示す)	外面色調	備考
147	289		B区	第4層	遺患者	杯口壺	8世紀前半	口径: 16.0 (1/3) 残高: 3.0	外面: ナデ、回転ヘラケズリ (秒一) 内面: ナデ	M6/ 灰		
147	290		B区	第4層	遺患者	壺	9世紀前半か	口径: 3.6 (1/4)	口元?	M7/ 灰白	口縁部分がみあり	
147	291		B区	第4層	遺患者	壺	7世紀か	口径: 14.0 (1/4弱)	外面: 平行ヘタキ後ナデ (?) 内面: 同心円文哉ハ真銀	M7/ 灰白		
147	292		B区	第4層?	遺患者	壺?	7世紀か	口径: 14.4 (2/5)	外面: 回転 2 (浅化) 一部自然剥付有 摩滅 内面: 同心円文タキシ 一部自然剥付有	M6/ 灰、(點) M9/6/2 灰才 M9/6/3 灰		
147	293	91	B区	第4層	縦割 施器	壺	9世紀	高台径: 8.0 (1/4弱)	外面: ヘラミガキ、施胎 (質入あり) 内面: ヘラミガキ、施胎 (質入あり)	M6/ 灰 2,507/1 黄灰 2,507/2 灰才 2,507/3 灰	縫隙と溝跡	
147	294		B区	第4層	灰和 施器	壺	9世紀中頃か		内面: 施胎	M6/ 灰白		
147	295	96	B区	第4層	瓦	薪丸瓦	8世紀後半	直径: 約15.0 (3)	複合8字墨書文 (底文) 平城宮629年式を模倣する 口凸 直ナデ バッセ 施胎ヘラケズリ (一部ナデあり)	10YR7/1 灰灰 97-559	第140集団 97-559	
147	296	96	B区	第4層	瓦	薪平瓦	8世紀後半か		均整唐草 大志部瓦窯産か	M6/ 灰	第140集団 97-569	
147	297		B区	第5層	遺患者	壺蓋	6世紀後半~ 7世紀初	口径: 15.0 (1/8)	外面: 回転ヘラケズリ (秒一)	M6/ 灰		
147	298		B区	第5層	遺患者	壺蓋	7世紀初	口径: 13.6 (1/8)	外面: 回転ヘラケズリ	M4/ 灰		
147	299		B区	第5層	遺患者	杯	6世紀後半~ 7世紀初	口径: 13.0 (1/4) 残高: 15.5	外面: 回転ヘラケズリ (秒一)	M6/ 灰		
147	300		B区	第5層	遺患者	杯A	8世紀後半	口径: 14.0 (1/3) 残高: 10.2 直径: 3.2	外面: ヘラ傾り	2,507/1 灰灰 2,507/1 前才 2,507/2 灰		
147	301		B区	第5層	遺患者	杯A	8世紀後半	口径: 12.8 (1/4弱) 残高: 10.2 直径: 3.2	外面: ヘラ傾り、火ダスキあり 内面: 灰 タキシあり	M6/ 灰		
147	302		B区	第5層	遺患者	杯B	8世紀後半	直径: 11.4 (1/8)	外面: 邪門にヘラ痕あり 内面: ナデ	M6/ 灰		
147	303		B区	第5層	遺患者	杯B	8世紀後半	口径: 11.8 (1/4弱) 残高: 5.5	外面: ヘラ傾り 内面: ナデ	M6/ 灰		
147	304	91	B区	第5層	遺患者	円筒規	8世紀か	直径: 15.0 (1/4弱)	外面: 隆起は便い込んで摩耗 内面: 自然剥付有	M6/ 灰		
147	305		B区	第5層	遺患者	壺	8世紀	口径: 5.8 (1/3)	外面: 横線 1	2,516/1 黄灰		
147	306		B区	第5層	遺患者	壺L	9世紀前半	高台径: 8.4 (4/5)	外面: 手切り感 内面: 基部に一部粘土 が付着	M6/ 灰白		
147	307		B区	第5層	遺患者	壺	7世紀後半か	口径: 10.0 (1/4弱)	外面: カキ目 内面: 同心円文当て黄斑 スス付有	2,517/1 灰白		
147	308		B区	第5層	遺患者	?			外面: 自然剥付有 内面: 縞り目	2,514/2 硝才 リーフ		
147	309		B区	第5層	縦割 施器	壺?	9世紀	直径: 5.2 (5/6)	外面: 摩滅 内面: 摩滅	2,516/2 灰白		
147	310	91	B区	第5層	灰和 施器	壺	9世紀前半か	直径: 7.5 (5/6) 残高: 2.4	内面: わざかに施胎	2,518/1 灰白		
147	311		B区	第5層	施器	長颈瓶	9世紀後半	底径: 6.8	外面: ケキリ感、施胎	5Y7/1 灰白		
147	312	91	B区	第5層	土製品	土鳥	8世紀		鈴を表現、前足・後足が接合面から下掛 り	10YR7/4 にぶい 黄斑		
147	313		B区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	広場面幅 2.0 例面幅: 1.9	凸面: 縞目タキ後押出し 四面: 布目 伝後板ナデ	M6/ 灰 2,515/1 黄灰		
147	314	102	B区	第5層	金属製品	不明鉄製品	8世紀	横長: 3.2 調理 (サビ色) 1.1 厚: 0.2~0.5	外面: 摩滅			
147	315	102	B区	第5層	金属製品	瓶?		横長: 2.6 横幅: 3.3 厚: 1.4			鐵	
148	316	102	B区	第6面	獨立建物1 (D6イット)	不明骨董陶器 製品	8世紀	横幅: 3.8 高さ: 0.0~0.35	横円形 上縁端部は玉縁状			
148	317		B区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径: 15.7 (1/8強) 残高: 3.9	外面: 底面 内面: 摩滅	7,5YR7/6 棕	
148	318	90	B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 15.8 (1/2) 残高: 3.4	外面: ヨコナメナデ後一部へラミガキ 施胎ナデ 内面: 放射状模文、放射状模文、縞状模文	7,5YR6/6 棕	
148	319		B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 15.0 (1/4)	外面: 一部へラミガキ後残る	5YR6/6 棕	
148	320	90	B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 16.1 (1/3強) 残高: 3.2	外面: 一部へラミガキ 内面: 施胎状模文、 施胎状模文	5YR6/6 棕	
148	321		B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 18.8 (1/4弱) 残高: 3.1	外面: ヘラケズリ 内面: 放射状模文、 底面摩滅	5YR6/6 棕	
148	322		B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 23.0 (1/7) (縦脚欠)	外面: 一部へラミガキ、ヘラケズリ? 内面: 放射状模文	10YR4/2 灰黒褐	
148	323		B区	第6面	249井戸	土師器	瓶B	8世紀後半か	底径: 12.0 (5/6)	外面: 摩滅 内面: 摩滅	7,5YR6/6 棕	
148	324		B区	第6面	249井戸	土師器	A	8世紀前半	口径: 19.0 (1/8) 残高: 2.3	外面: 底部摩滅 内面: 放射状模文、追跡 輪状模文	5YR6/6 棕	
148	325	90	B区	第6面	249井戸	土師器	皿A	8世紀後半	口径: 21.3 (1/3) 残高: 2.2	外面: 摩滅 内面: 摩滅	10YR7/4 にぶい 黄斑	
148	326		B区	第6面	249井戸	土師器	把手付舟A	8世紀	口径: 14.0 (1/8)	外面: 把手付、底面 内面: 摩滅	5YR6/6 棕	
148	327		B区	第6面	249井戸	土師器	壺C	8世紀か	口径: 27.6 (1/8)	外面: 摩滅 内面: 摩滅	10YR7/4 にぶい 黄斑	
148	328		B区	第6面	249井戸	土師器	?	8世紀か	口径: 22.6 (1/4)	外面: 摩滅、一部へラミガキ後残る 内面: ハマ ノ、摩滅	10YR7/3 にぶい 黄斑	
148	329		B区	第6面	249井戸	土師器	把手付壺	8世紀		外面: ハケメ、指押え、内面: 指押え、ナデ スナデ	5YR6/6 棕 2,516/1 灰白	
148	330		B区	第6面	249井戸	土師器	壺			脚部 外面: ハケメ 内面: 指押え、ナデ スナデ	5YR6/6 棕	
148	331		B区	第6面	249井戸	土師器	製陶土器	8世紀前半か	口径: 14.0 (1/8弱)	脚部 分類5a類 外面: 指押えナデ 内面: ナデ	10YR7/3 にぶい 黄斑	

掲載遺物観察表 (10)

登録号	図書号	図版号	地区	遺構番号	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm)	内寸(既存率)	調査等(ヨコナギ、回転ナグは省略) (砂=土、ヘラケズリで砂が動いた 方向を示す)	外面色調	備考
148	332	8区	第6面	249戸	須恵器	杯	6世紀末～7世紀初頭	口径:11.0(1/7限)	外面:回転ヘラケズリ	白	N4/ 灰		
148	333	8区	第6面	249戸	須恵器	杯G	7世紀前半か 後半	口径:12.8(1/8) 奥高:9.4 基底:3.7	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	ゆがみあり		
148	334	8区	第6面	249戸	須恵器	杯A	8世紀前半	口径:12.1(1/9)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面: ナデ	N6/ 灰			
148	335	8区	第6面	249戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.25(1/10) 奥高: 3.4	外面:ヘラ切り 内面:摩滅	7.5H6/6 程			
148	336	8区	第6面	249戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.4(1/14) 奥高: 9.0(1/14限) 奥高:4.0	地上復元 外面:ヘラ切り痕	5H7/4 にぶい 程			
148	337	8区	第6面	249戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.2 高さ:8.0(1/2) 基底:4.5	外面:ヘラ切り?	2.5H2/灰白			
148	338	9区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀前半	口径:13.7(1/12) つまみ 径:2.8(0.8限) 奥高:2.9	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面: ナデ	N7/ 灰白			
148	339	8区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀前半	口径:18.0(1/16) つまみ 径:3.9(2.3限) 奥高:2.9	内面:ナデ	2.5H2/灰白			
148	340	8区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.4(1/7限) 高台: 11.8 奥高:3.8	外面:底膨ナデ、ヘラ底あり	N6/ 灰			
148	341	9区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.2(1/12限) 高台: 10.4(1/2限) 基底:3.9	外面:粘土棒を貼り付けた様な高台、 底膨ナデ	N6/ 灰			
148	342	8区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.0(1/11限) 高台: 12.1 奥高:3.8	外面:ヘラ切り、底面にヘラ底あり 内 面:ナデ	N6/ 灰			
148	343	8区	第6面	249戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:12.5(3.5)	外面:底部調整 内面:ナデ	N6/ 灰			
148	344	8区	第6面	249戸	須恵器	高杯	6世紀後半	脚柱径:4.5(1/2)	外面:カキ目、凹縁2、透孔3(2段) 内面:絞り目、ナデ	N6/ 灰			
148	345	8区	第6面	249戸	須恵器	高杯	7世紀前半か 後半	脚柱径:4.5(4.5/5)	内面:ナデ	N2/ 灰白			
148	346	8区	第6面	249戸	須恵器	平底	8世紀前半	口径:11.2(1/4)	外面:自然付着	5H7/1 灰白			
148	347	8区	第6面	249戸	須恵器	壺L?	8世紀後半	最大幅徑:16.0(完)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面: 底部に一筋自然剥付帶	N6/ 灰			
148	348	8区	第6面	249戸	須恵器	壺	8世紀前半	高台径:9.7(1/4)	外面:ナデ	2.5H7/1 灰白			
148	349	9区	第6面	249戸	須恵器	壺	8世紀前半	口径:12.6(1/7限) 奥高: 20.7	外面:カキ目、後縁2、透孔3(2段) 内面:絞り目、ナデ	5H6/1 海青			
148	350	9区	第6面	249戸	須恵器	壺	8世紀か	口径:19.0(1/5)	火ぶくれが美しい	N4/ 灰			
148	351	8区	第6面	249戸	須恵器	壺	8世紀後半	口径:22.9(1/5)	外面:自然付着	5H5/2 戻オリー ナデ			
149	352	10区	第6面	249戸	木製品	枕の一辺		長:13.9 幅:4.5 厚:0.9	木棺材 小孔2(木釘)、小孔??:1				
149	353	10区	第6面	249戸	木製品	曲物底座		長:12.8 幅:7.0 厚:0.6	木棺材 内面に線刻あり				
149	354	10区	第6面	249戸	木製品	火付け棒		長:10.7 幅:1.4 厚:1.0	ヒノキ材 先端部炭化				
149	355	10区	第6面	249戸	木製品	火付け棒		長:11.6 幅:1.9 厚:1.0	ヒノキ材 先端部炭化				
149	356	10区	第6面	249戸	金属製品	不明鉄製品		現長:(サビ含)15.0 奥高: (本体):6~3.2 厚:(本 体):0.4~1.1	新面Y字状				
149	357	8区	第6面	98ビット	須恵器	壺	7世紀後半	口径:24.0(1/9)		N6/ 灰			
149	358	8区	第6面	156ビット	土師器	製塙土器	8世紀	口径:10.0(1/12)	外面:摩滅 内面:摩滅	5H6/1 灰			
149	359	8区	第6面	156ビット	須恵器	壺	9世紀か	口径:25.0(1/11)		10H5/2 灰黄褐			
149	360	8区	第6面	162ビット	瓦	平瓦	B~9世紀	側面幅:2.0	凸面:網目タキ 四面:布目直 黄	2.5H6/3 にぶい 黄			
149	361	8区	第6面	163ビット	須恵器	杯	8世紀後半	口径:14.0(1/9)		N6/ 灰			
149	362	8区	第6面	163ビット	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:10.0(1/8)	外面:底部ナデ?	10H5/1 灰			
149	363	10区	第6面	176ビット	金属製品	監澤		現長:5.1 番幅:7.0 厚:2.9			鉄		
149	364	8区	第6面	226ビット	土師器	壺	7世紀か	頭部径:17.0(1/4)	外面:タタキ?後ハケメ? 内面:ヘラ ナデ?	10H7/4 にぶい 黄褐			
149	365	9区	第6面	238ビット	須恵器	杯	6世紀後半	口径:13.0(1/8) 奥高:4.0	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内 面:ナデ	2.5H7/2 灰黄褐			
149	366	8区	第6面	248ビット	須恵器	杯B	8世紀後半か	高台径:7.0(3/4)	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	7.5H5/1 灰			
149	367	8区	第6面	248ビット	須恵器	壺	6世紀末~7世 紀初期	横径:14.0(1/6)	外面:カキ目、次縁1、列点穴1、次 縁1、カキ目	2.5H7/1 灰白			
149	368	8区	第6面	84土状	須恵器	壺	7世紀後半か	口径:22.0(1/11)		5H5/1 灰			
149	369	8区	第6面	113土状	須恵器	壺L?	8世紀後半か	頭部径:5.3(定)	外面:自然難付帯	5H6/2 戻オリ ナーブ			
149	370	9区	第6面	134土状	須恵器	杯	6世紀後半~ 7世紀初	口径:13.0(2/5) 奥高:4.3	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内 面:ナデ	5H6/1 灰			
149	371	9区	第6面	220土状	須恵器	杯蓋	7世紀初	口径:13.8(1/4) 奥高: 3.5	外面:回転ヘラケズリ(砂:→),ハケ 刷毛目 内面:ナデ	N6/ 灰			
149	372	8区	第6面	116漬	須恵器	杯B	8世紀末	口径:15.0(1/4限) 奥高: 3.8~4.1	外面:底部ヘラケズリ? 内面:ナデ	7.5H6/1灰			
150	373	9区	第2層	瓦質土器	土器	15~16世紀	口径:12.6(若干の内) 奥 高:11.4(1/3) 奥高:22.9	外面:摩滅 内面:摩滅	N4/ 灰				
150	374	9区	第3層	緑釉陶器	楕か皿	9世紀中	高台径:6.5(1/4)	軟質 外面:削り出し乾の目高台、無輪 内面:ヘラナギ、重ね燒痕あり、無輪 底	2.5H7/3~7/4 (無底)	京都府 産			
150	375	9区	第3層	緑釉陶器	楕か皿	9世紀後半	高台径:8.6(1/8)	硬質 外面:ヘラミガキ、削り出し輪高 台(幅広)、無輪 内面:ヘラミガキ、重 ね燒痕あり、無輪	N6/5~灰/ 灰	京都府 産			
150	376	9区	第3層	緑釉陶器 (二彩?)	華瓶?	9世紀	胴下部径:5.4(1/3)	外面:沈維(二彩) 内面:無輪 縫と縫隙の色	5H6/4 オリーブ 黄 5H5/2 戻オリー ナーブ (無底)	東海か?			

掲載遺物観察表 (11)

排置 番号	因番 番号	因版 番号	地区	遺構面	遺構・部名	種類	器種	時期	法量 (cm) (内に残存率)	調査等 (ヨコナ、回転ナデは省略) (秒→タキで括り切った 方向を示す)	外面部調	備考
150 377		9区		第3層	灰釉 陶器	瓶		9世紀前半	高台径: 6.8(1/5)	内面: 摩滅。施釉(自然離?)	2.5Y7/1 灰白。 5RS/1 灰灰 (輪) 波紋	K14(後段 報)
150 378		9区		第3層	灰釉 陶器	長頸壺		9世紀前~中	高台径: 9.6(1/6)	外面: あつり底か?。施釉 内面: 施 釉	SYB/1~7(1/7) 灰 白。(粒) 波紋	K14~ 90(後段 報)
150 379		9区		第3層	土師器	製塙土器		8~9世紀	口径直下径: 11.0(1/4弱)	外面: 摩滅 内面: 摩滅	SYR5/3 にぶ い黄壁	
150 380		9区		第3層	土師器	製塙土器		8~9世紀	口径: 15.0(1/8)	外面: 摩滅 内面: 摩滅	SYR5/6 明赤 地。2.5Y7/2 灰白	
150 381		9区		第3層	土師器	製塙土器		8~9世紀	口径: 14.6(1/11)	外面: 指押えナデ 内面: ナデ?		
150 382	98	9区		第3層	瓦	軒丸瓦		8世紀後半		扉井10井蓬塗文 平城宮6133A型式 を想形とする	2.5Y8/2 白灰 灰	第140集因 97-565
150 383		9区		第3層	瓦	丸瓦		8~9世紀	広端面幅: 1.4 側面幅: 1.7	凸面: ナデ 凹面: 布目模 白	N5/1 灰	
150 384		9区		第3層	瓦	平瓦		12~13世紀か		1枚つくり 凸面: 大きい格子状タタ キ 凹面: 布目模	10YR6/4 にぶ い黄壁。SY7/1 灰白	
150 385		9区		第3層以下	土師器	杯 A?		8世紀後半	口径: 13.0(1/12) 器高: 1.6	外蓋: 色釉斜面塗文 内面: 底部摩滅	2.5Y7/2 灰白	
150 386		9区		第3層以下	須恵器	便		7世紀後半	口径: 36.0(1/8)	外蓋: 波状文(4条)、団練 1、波状文 (3条+2)	7.5Y5/1 灰	
150 387		9区		第4面	104ピット	須恵器	杯口蓋	8世紀中頃	口径: 12.8(1/4強) つまり 径: 2.5(2/3)	外蓋: ヘラケズリ(秒...) 内面: ナ デ?	SY7/1 灰白	
150 388		9区		第4面	110ピット	土師品	土器		径: 1.1		10YR6/2 反黄 地	
150 389		9区		第4面	342ピット	須恵器	杯口	8世紀末	高台径: 11.4(1/4弱)	内面: ナデ	2.5Y8/1 灰白	
150 390		9区		第4面	90溝状落 ち込み	須恵器	円面皿	8世紀末~9 世紀初頭か	外蓋: 押切織目、へら模? あり 内 面: ナデ?	2.5Y7/1 灰白		
150 391		9区		第4面	90溝状落 ち込み	須恵器	皿?	9世紀後半か	外蓋: 施釉 内面: 施釉	SY4/1 灰		
150 392		9区		第4面	土師器	碗 C		8世紀後半	口径: 14.1(1/7)	外蓋: 摩滅 内面: ナデ	SYR6/6 褶	
150 393		9区		第4層	土師器	皿		8世紀後半	口径: 15.0(1/5) 器高: 2.3	外蓋: 摩滅 内面: 摩滅	2.5Y7/2 反黄 地	
150 394		9区		第4層	土師器	皿		8世紀前半	口径: 32.0(若干の手) 高 台径: 24.0(1/9) 器高: 3.6	外蓋: 成都ナデ 内面: 放射状暗文、 連続模状暗文、ナデ	SYR6/6 褶	
150 395		9区		第4層	須恵器	壺		9世紀前半か	口径: 4.0(2/3)	外蓋: 一列灰をかぶる 内面: 回転ナ デの後工具痕	2.5Y6/1 黄灰	
150 396		9区		第4層	須恵器	便		9世紀中頃か	口径: 19.0(1/6)	外蓋: ナデ, 平行タタキ	N4/1 灰	
150 397		9区		第4層	須恵器	碗		9世紀前半か	底径: 7.0(1/8)	外蓋: 摩滅。施釉 内面: 庫滅	2.5Y6/1 黄灰	
150 398		9区		第4層	須恵器	碗		9世紀後半か		外蓋: 高台内面施釉 内面: ナデ	2.5Y7/2 白	
150 399		9区		第4層	灰釉 陶器	壺		9世紀後半	高台径: 6.0(1/7)	内面: 施釉	2.5Y7/1 灰白	
150 400		9区		第4層	灰釉 陶器	壺		9世紀中頃か	高台径: 8.5(1/5)	外蓋: 回転ヘラケズリ、底部回転ヘ ラケズリ、施釉	SY7/1 灰白	
150 401		9区		第4層	土師器	製塙土器		8世紀	口径: 12.9(1/6)	外蓋: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	10YR7/2 にぶ い黄壁	
150 402		9区		第4層	土師器	製塙土器		8世紀	口径: 21.7(1/6)	外蓋: 指押えナデ。一部スヌ夫磨 内面: 指押えナデ	10YR7/3 にぶ い黄壁	
150 403	91	9区		第4層	土製品	土器		幅: 1.9 孔径: 0.5 深さ: 19.4g			2.5Y7/2 反黄	
150 404		9区		第4層	土製品	?				方角の角か 外蓋: 摩滅 内面: ナデ	2.5Y8/2 白	
150 405	96	9区		第4層	瓦	軒平瓦		8世紀後半		重複文 平城宮6572A型式を想形す る。曲面ナデ?	2.5Y7/1 灰白	第140集因 69-192
150 406		9区		第4層	瓦	丸瓦		8~9世紀	玉締縦面幅: 1.1 侧面幅: 1.8	凸面: 縞目タタキ後ナデ 凹面: 布目 底	10YR6/3 にぶ い黄壁	
151 407		9区		第4層	瓦	平瓦		8~9世紀	広端面幅: 1.8 侧面幅: 1.0	凸面: 縞目タタキ 凹面: 布目底後板 ナデ	N4/1 灰	
151 408		9区		第4層	瓦	平瓦		8~9世紀	広端面幅: 2.2 侧面幅: 1.9	凸面: 縞目タタキ 凹面: ナデ, 布目 底	SYR7/1 灰白	
151 409		9区		第4層以下	土師器	杯 A		8世紀中頃	口径: 15.0(1/7) 器高: 2.3	外蓋: 指押え後ヘラケズリ? 内面: 放射状暗文、連続模状暗文?	SYR6/6 褶	
151 410		9区		第4層以下	土師器	杯 A		8世紀中頃	口径: 14.1(1/6)	外蓋: ナデ。へら切り?	N7/1 黄灰	
151 411		9区		第4層以下	土師器	製塙土器		8~9世紀	口径: 13.8(1/7)		2.5Y6/6 褶, 7.SYR7/4 にぶ い黄壁	
151 412	102	9区		第4層以下	金属性 製品	不明鉄製品		現長: 4.7 珪量: 5.3 厚: 0.7~0.8		板状、匙い		
151 413		9区		第5面	182ピット	須恵器	壺	8世紀か	口径: 13.5(1/4弱)	内面: 自然點付箋	SY4/1 灰	
151 414		9区		第5面	183ピット	土師器	杯 C	8世紀後半	口径: 15.0(1/5)	外蓋: 指押えナデ? 内面: 次練 1. (ハケ伏) ナデ?	SYR6/6 褶	
151 415		9区		第5面	187ピット	瓦	丸瓦	8~9世紀	津軽面幅: 1.7 玉締縦面幅: 1.9 玉締凸側縦幅: 1~1.7	凸面: ナデ, 縞目タタキ後ナデ 凹 面: 布目底	2.5Y7/1 灰白	
151 416		9区		第5面	187ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅: 2.0 侧面幅: 1.1 ~1.5	凸面: 縞目タタキ 凹面: 布目底	N4/1 灰, N8/ 反白	
151 417		9区		第5面	189ピット	瓦	丸瓦	8~9世紀	端面幅: 1.2 侧面幅: 1.1	凸面: ナデ 凹面: 布目底	10YR7/2 にぶ い黄壁	
151 418		9区		第5面	189ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	端面幅: 2.0	凸面: 縞目タタキ後指押えナデ 凹 面: 布目底後一部板ナデ.ナデ	N4/1 灰	
151 419		9区		第5面	190ピット	須恵器	杯 A	9世紀	底径: 9.0(1/3)	外蓋: 須恵ナデ?	N8/ 灰白, N4/ 灰	

掲載遺物観察表 (12)

登録番号	図版番号	図版番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内は生存率	調査者(ヨコハマ)、回転ナジ(は名前)(△内は、ヘラケズリで砂の點いた方向を示す)	外面色調	備考
152 420	91	9区	第5面	19世紀ピット 土器	水漬	9世紀か	口径:16(死) 高さ:2.3(死)	外面:海苔えナデ後へラミガキ、底板へラミガキ	10/84/1 棕灰				
152 421		9区	第5面	19世紀 土器	盤A	8世紀中後	口径:20.0(1/12)	外面:ヘラケズリ 内面:放射状繪文	SYR6/6 棕				
152 422		9区	第5面	土器	杯A	8世紀前半	口径:20.0(1/10) 基高:5.0	外面:一部へラミガキ、ナジナデ後一部ヘラケズリ 内面:放射状繪文、連結繋状繪文	SYR6/6 棕				
152 423		9区	第5面	土器	杯A	8世紀後半	口径:15.0(1/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	SYR6/6 棕				
152 424		9区	第5面	土器	杯A	8世紀後半	口径:17.6(1/12) 基高:3.4	外面:ナジナデ後へラケズリ 内面:摩滅	SYR6/8 棕				
152 425		9区	第5面	土器	盤C	8世紀中後	口径:15.0(1/8)	外面:摩滅	7.SYR7/3 にぶい性				
152 426	92	9区	第5面	土器	盤A	8世紀末~9世紀初頭か	口径:13.8(3/7) 基高:3.5	外面:海苔えナデ 内面:摩滅	7.SYR7/4 にぶい性、NA灰				
152 427		9区	第5面	土器	盤A	8世紀後半	口径:17.4(若干のみ) 基高:2.5	外面:ヘラケズリ、ナデ 内面:ナデ	SYR6/6 棕				
152 428	92	9区	第5面	土器	高杯	8世紀前半	口径:27.6(1/6) 脚部部径:12.5(1/2) 基高:9.7	粘土焼垂上げ式形 外面:分離へラミガキ、脚部部垂り(10面) 内面:割縫1、2 ヘラケズリ、押押ナデ	SYR6/6 棕				
152 429	92	9区	第5面	土器	高杯	8世紀前半	底径:12.7(4/5)	粘土焼垂上げ式形 外面:ヘラミガキ、脚部部垂り(10面) 内面:連結繋状繪文、脚部内面はヘラケズリ	7.SYR7/6 棕				
152 430		9区	第5面	土器	高杯	8世紀前半	脚部部径:10.9~11.0(1/5)	粘土焼垂上げ式形 外面:脚部部垂り(10面) 内面:ナデ、脚部内面は海苔えナデ	SYR7/6 棕				
152 431		9区	第5面	土器	高杯	8世紀前半	脚柱部径:5.7(死)	外面:摩滅	SYR6/6 棕				
152 432		9区	第5面	土器	盤B	8世紀前半	口径:21.0(1/8)	外面:部分的へラミガキ 内面:ナデ	7.SYR6/6 棕				
152 433		9区	第5面	土器	盤B	8世紀	口径:22.0(1/9) 底径:18.0(3/12)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.SYR7/6 棕				
152 434		9区	第5面	土器	盤	8世紀	口径:42.0(1/6)	外面:ナカ、押押え、一部スス付唇 内面:ナデ	SYR6/6 棕				
152 435		9区	第5面	土器	盤C	8世紀	口径:22.0(1/4)	外面:ハケメ 内面:摩滅	7.SYR6/6 棕				
152 436		9区	第5面	土器	盤A	8世紀	口径:25.0(1/9)	外面:ナカ 内面:炭化物付唇	SYR6/6 棕				
152 437		9区	第5面	土器	盤A	8世紀	口径:13.0(1/8) 底径:8.5(1/2) 基高:4.3	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 438		9区	第5面	済患器	杯A	8世紀中後	口径:14.0(1/2) 基高:3.9	内面:ナデ	7.SYR1/1~7/1 灰白	△がみあり			
152 439		9区	第5面	済患器	杯A	8世紀中後	口径:13.0(1/5) 基高:3.2	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 440		9区	第5面	済患器	杯	8世紀中後	口径:18.0(1/7)	内面:ナカ	NA/ 灰				
152 441		9区	第5面	済患器	杯A	8世紀中後	口径:15.7(若干のみ) 底径:8.0(2/5) 基高:3.6	外面:ヘラ切引 内面:ナデ	SYR7/4 にぶい性、NA/ 灰				
152 442		9区	第5面	済患器	杯A	8世紀中後	底径:9.0(1~一部)	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 443		9区	第5面	済患器	杯B	8世紀中後	口径:10.4(1/4)		2.5/6/1 黄灰				
152 444		9区	第5面	済患器	杯B	8世紀中後	口径:11.3(1/4)	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 445		9区	第5面	済患器	杯B	8世紀中後	口径:15.5(1/4)	外面:底面へラケズリ	NA/ 灰				
152 446		9区	第5面	済患器	杯B	8世紀中後	口径:15.0(2/3) 底径:2.8(2)	外面:底面へラケズリ(後一部)	NA/ 灰				
152 447		9区	第5面	済患器	杯B	8世紀中後	口径:19.8(1/2)	外面:自然輪廓く付唇 内面:ナデ	7.SYR6/3 オリーブ灰				
152 448		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:26.0(1/1)	外面:自然輪廊く付唇	SYR6/1 灰				
152 449		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:15.7(若干のみ) 基高:3.1	外面:回転へラケズリ(後一部)、回線1	NA/ 灰				
152 450		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:15.3(1/6) 基高:2.5	外面:底面へラケズリ(後一部)	NA/ 灰				
152 451		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:15.0(1/7) 基高:4.0	外面:底面へラケズリ	NA/ 灰				
152 452		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:15.0(2/2) 基高:3.6	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 453		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:16.0(2/4) 基高:3.5	外面:ヘラ切引?	NA/ 白				
152 454		9区	第5面	済患器	皿D	8世紀中後	口径:16.0(1/10) 基高:3.5	外面:ヘラ切引	NA/ 灰				
152 455		9区	第5面	済患器	皿C	8世紀中後	口径:21.0(1/10) 基高:2.3	外面:ナデ 内面:ナデ	NA/ 灰白				
152 456		9区	第5面	済患器	皿C	8世紀中後	口径:19.0(1/8)	外面:ヘラ切引?、ヘラナデ、自然輪廊く付唇	NA/ 灰				
152 457		9区	第5面	済患器	皿C	9世紀前半	口径:6.0(1/6)	内面:ナデ	NA/ 灰				
152 458		9区	第5面	済患器	皿C	8世紀中後	口径:12.0(1/7) 基高:3.4	外面:ヘラ切引?、ヘラナデ、自然輪廊く付唇	NA/ 灰				
152 459		9区	第5面	済患器	皿C	8世紀中後	口径:9.0(1/7) 底径:5.0	外面:自然輪廊く付唇	2.5/6/1 黄灰				
152 460		9区	第5面	済患器	台付長腹皿	8世紀前半	高台径:9.5(1/2)	外面:沈没1.1、回転へラケズリ(後一部)、周縁に自然輪廊く付唇 内面:底板付沿面から	SYR6/1 灰				
152 461		9区	第5面	済患器	皿Q	8世紀後半か	底径:13.0(1/10) 最大直径:18.0(1/4)	外面:ヘラケズリ?	NA/ 灰				
152 462		9区	第5面	済患器	皿	8世紀後半	底径:9.8(1/8)	外面:高台内面に済患器痕跡が溶着	NA/ 灰				
152 463		9区	第5面	済患器	皿	8世紀後半	底径:15.4(1/3)	外面:回転へラケズリ(後一部)、底面えナデ	NA/ 白				
152 464		9区	第5面	済患器	皿H?	8世紀末か	底径:9.5(1/4)	外面:ナデ 内面:ナデ	NA/ 灰				
152 465		9区	第5面	済患器	皿	9世紀前半か	底径:7.0(1/2)	外面:ヘラナデ、系切り底	NA/ 白				
152 466	92	9区	第5面	済患器	小型差P?	9世紀か	口径:4.9(1/4) 底径:7.6(1/6) 基高:10.0(1/4)	外面:底形未復原、部分的に手で持たれた所あり	NA/ 白				
152 467		9区	第5面	済患器	皿D	世紀後半	口径:25.0(1/7)		2.5/9/6/2 黄灰				
152 468		9区	第5面	済患器	平皿	8世紀後半	高台径:15.4(1/3)	外面:ナデ	7.SYR5/1 灰				
152 469		9区	第5面	済患器	平皿	8世紀中後	底径:23.0(1/10)	内面:底面に付唇物あり	NA/ 白				
152 470		9区	第5面	済患器	皿C	8世紀中後	口径:19.0(1/3)	外面:沈没2.1、円形未復原、平行タキヒカキメ 内面:同上	NA/ 白				

掲載遺物観察表 (13)

博物館番号	国番号	団番号	地区	遺構面	遺構・部名	種類	器種	時期	法量 (cm) (□内は既存率)	調査者等 (ヨコナラ、回転ナダは省略) (秒~ナダ、タケズリで跡が残いた場合を示す)	外面部調	備考
153	471		9区	第5層	遺物器	土器底	9世紀か	底径: 15.0 (1/4弱)	外面: 平行タタキ、ナダ 内面: 同心円文 当直須後ナダ、ナダ	57/1 灰白		
153	472		9区	第5層	遺物器	鉢	10世紀中頃か		縦溝	57/1 灰白		
153	473		9区	第5層	縦溝 施器	櫛か皿	9世紀前~中	底径: 6.2 (1/5)	数段 外面: ハラミガニキ、四壁高台、施 器 内面: ハラミガニキ、施器	57/1~7/1 底 白 (施) 泥質	南北	
153	474		9区	第5層	縦溝 施器	碗	9世紀中頃か	底径: 9.0 (1/4強)	縦溝は痕跡なし 外面: 摩滅 内面: 摩 滅	107R/1 4淡黄褐		
153	475	91	9区	第5層	縦溝 施器	皿?	9世紀後半	高台径: 8.6 (1/5)	横溝 外面: ハラミガニキ、四壁高台、施 器 内面: ハラミガニキ、施器	57/1~1 灰 (施) 横溝	横投査	
153	476	91	9区	第5層	縦溝 施器	大型焼?	9世紀か	高台基盤径: 9.4 (1/3)	横溝 外面: ハラミガニキ、四壁高台、施 器 内面: ハラミガニキ、施器	57/1 灰白~ 57/6 1 灰 (施) 横溝	K14~80? (施投査)	
153	477		9区	第5層	縦溝 施器(二 種?)	短縦甌	9世紀	口径: 14.0 (1/2) 底径: 16.0	横溝 外面: ハラミガニキ、四壁高台、施 器 内面: ハラミガニキ、施器	57/1~2 灰白		
153	478		9区	第5層	灰被 施器	皿	9世紀前半	高台径: 8.2 (1/9)	外面: ハラミガニキ、三日月高台、内面: ハ ラミガニキ、施器	57/1~7 1 灰白~ 57/6 1 灰 (施) 横溝	K14 (横投)	
153	479	91	9区	第5層	灰被 施器	皿	9世紀末~10 世紀前半	高台径: 6.0 (2/3)	外面: ハラミガニキ、三日月高台、内面: ハ ラミガニキ、施器	57/6 1 (施) 摩 滅	摩滅	
153	480		9区	第5層	土器器	?		内面底盤径: 14.0 (1/9) 高 7.0	外面: 摩滅 内面: 摩滅	57/1 灰白 57/6 1 (施) にぶい 摩滅		
153	481		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀	口径: 10.2 (若干のみ)	外面: 指押えナデ 内面: ナデ	57/8/4 にぶ い摩		
153	482	92	9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀	口径: 15.4 (若干のみ)	外面: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	57/9/4 にぶ い摩		
153	483		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀	口径: 14.0 (若干のみ)	外面: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	57/7/1 灰白		
153	484		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀	口径: 19.0 (1/5)	外面: 指押えナデ、赤色化 内面: ナデ、 赤色化	57/9/4 にぶ い摩		
153	485		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀	島大歳径: 16.0 (1/6)	外面: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	57/9/4 にぶい 摩滅		
153	486		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀		外面: 指押えナデ 内面: 摩滅	57/9/3 にぶい 摩滅		
153	487		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀		外面: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	57/9/3 にぶい 摩滅		
152	488		9区	第5層	土器器	製造土器	8世紀		外面: 指押えナデ 内面: 白目痕	2.57/5 黄褐色		
153	489		9区	第5層	土器品	?			上面にとく突起がはれた跡があり、下 方に凹み、下面にも突起がはれた 跡あり	107R/3 にぶい 摩滅		
154	490	99	9区	第5層	埴			幅: 15.3	外面: ハラミ(ヘラナデ)?、板ナデ	57/7/1 灰白		
154	491	99	9区	第5層	瓦	瓦	8~9世紀	五重堆塗面: 1.1 倒面幅: 1.6 五重塗: 10.8 断面幅: 15.0	外面: 里面: 内面: 希少(摩滅)、絞り跡 、ハラミ、痕滅、綱目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/5/1, 6/1 灰		
154	492		9区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	8~9世紀	外面: 縞目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/1 灰白		
154	493		9区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	8~9世紀	外面: 縞目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/1 灰白		
154	494		9区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	8~9世紀	外面: 縞目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/5/1 灰白		
154	495		9区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	8~9世紀	外面: 縞目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/5/1 灰白		
154	496		9区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅: 1.4	外面: 縞目タタキ 四面: ナデ、 ハラミタタキ	57/1 灰白		
155	497	101	9区	第5層	石製品	砾石		長径: 9.8 短径: 9.3 厚度: 4.7	砂岩 外面: 磨面 3+1?	57/9/1~7/1 磨面		
155	498		9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞白	8世紀中頃	口径: 14.0 (1/5)	内面: 回転子ナデ	57/1~7/1 磨面	
155	499		9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞白	8世紀後半	口径: 16.0 (1/6)	57/1 灰		
155	500	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞A	8世紀中頃	口径: 16.6 (1/2)	外面: 一部スス付帶 内面: 放射状紋文、 追跡状紋文か、一部スス付帶	2.57/2 灰白~ 2.57/4 1 灰		
155	501	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞A	8世紀中頃	口径: 18.2 (1/1)	外面: ハラミタタキ、一部スス付帶 内面: 放射状紋文、スス付帶	107R/2 灰黃褐色		
155	502	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞A	8世紀中頃	口径: 19.5 (1/10)	外面: 一部スス付帶 内面: 放射状紋文、 スス付帶	107R/2 灰黃褐色		
155	503	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞B	8世紀中頃	高台径: 12.6 (1/7)	外面: 回転子ナデ後へラミガニキ、底部ナデ 後へラミガニキ、一部スス付帶 内面: 放 射状紋文、一部スス付帶	57/7/6~6 灰 57/9R/4~4 6/1 磨面		
155	504	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞A	8世紀後半	口径: 20.7 (1/2)	外面: ハラミタタキ、指押えナデ 内面: 摩 滅	2.57/7/2 淡黄		
155	505	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	糞B	8世紀中頃	口径: 17.0 (1/9)	粘土粗巻上成形 外面: 分割へラミガ ニキ 内面: 摩滅	2.57/7/2 淡黄		
155	506	9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞A	8世紀後半	口径: 15.0 (1/8)	外面: ハラミタタキ	57/6 灰		
155	507	9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞B	8世紀中頃	口径: 2.3~2.5 (3)	外面: 回転子ナデ後へラミガニキ、底部ナデ 後へラミガニキ、一部スス付帶 内面: 放 射状紋文、一部スス付帶	57/6/1~5/1 底 57/8/4~4 6/1 磨面		
155	508	9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞B	8世紀中頃	口径: 16.0 (1/8)	57/6/1 灰			
155	509	9区	第6面	獨立柱建物?	遺物器	糞B	8世紀中頃	口径: 19.0 (1/8)	内面: 口縁一部スス付帶	57/5/1 灰		
155	510	9区	第6面	獨立柱建物?	土器器	製造土器	8世紀		外面: 摩滅 内面: 指押えナデ	2.57/9/3 にぶ い摩		

掲載遺物観察表 (14)

登録番号	図書番号	国宝番号	地区	遺構面	遺様・形名	種類	器種	時期	法量(cm)	0内に生存率	調査等(ヨコナギ、回転ナゲは省略)(砂=0.5、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
155	511	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径: 19.0(1/13)			外面: 厚底 内面: 旋放状縞文、ナデ	SFR/6 棕	
155	512	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	済患器	杯	8世紀か	口径: 17.0(1/10) 髪部下 部径: 13.0		外面: ヘラケズリ? 内面: ハウチナゲ	MS/ 灰		
155	513	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	壺A	8世紀	口径: 23.0(1/5)		外面: ハナメ、スス付唇 内面: ハナメ、ナ デ、スス付唇	SFR/3 透黃 109RS/3 にぶい 黄地		
155	514	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	済患器	杯口壷	8世紀中頃	口径: 16.0(1/11)		外面: ヘラケズリ	MS/ 灰		
155	515	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 厚底 内面: 厚底	SFR/4 にぶ い壁		
155	516	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 指押えナゲ 内面: ナデ	MS/ 灰		
155	517	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	壺A	8世紀後半	口径: 20.0(1/11)		外面: ヘラケズリ	SFR/6 棕		
155	518	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	壺	8世紀			外面: 指押えナゲ 内面: 厚底	109RS/3 透黃		
155	519	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 指押えナゲ 内面: ナデ	SFR/6 棕		
155	520	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 指押えナゲ 内面: ナデ	109R/4 にぶい 黄地		
155	521	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	壺C	8世紀	口径: 24.0(1/11)		外面: ハナメ 内面: ハナメ	109RS/3 にぶい 黄地		
155	522	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 指押えナゲ 内面: 赤色化	SFR/1 淡白		
155	523	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	済患器	皿	8世紀中頃	口径: 17.8(1/10) 唇高: 2.1		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →) 内面: 回 転ナゲ後ナゲ	SFR/1 淡白		
155	524	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	木製品	柱桿		長: 45.0 幅: 11.8 厚: 12.6		ヒノキ材			
155	525	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	甕	8世紀後半か	口径: 16.0(1/8)		外面: ハナメ(厚底により一部のみ残る) 内面: 厚底	SFR/4 にぶい 黄地		
155	526	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	壺C	8世紀	口径: 31.0(1/9)		外面: ハナメ(厚底により一部のみ残る) 内面: 厚底、指くさ付唇	109RS/3 透黃 SFR/6 棕		
155	527	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	済患器	杯口壷	8世紀中頃	口径: 21.0(若干のみ)		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →) 内面: ナ デ	SFR/1 淡白		
155	528	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	済患器	杯口壷	8世紀中頃	口径: 14.2(3/5)		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →) 内面: ナ デ	MS/ 灰		
155	529	9区	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	土師器	製塗器	8世紀			外面: 狹伏の回みあり	109R/3 にぶい 黄地		
155	530	104	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	木製品	柱桿		長: 57.6 幅: 17.9 厚: 13.7		スギ材 底面に加工痕あり			
155	531	104	第6面	獨立柱建物1 (32ビット)	木製品	柱桿		長: 57.6 幅: 25.5 厚: 19.6		スギ材 底面に加工痕あり			
155	532	9区	第6面	獨立柱建物2 (31ビット)	済患器	甕A	8世紀前半～ 中頃	口径: 12.1(1/4) 唇高: 3.1		外面: ヘラ切り	MS/ ~NA/ 灰		
155	533	9区	第6面	獨立柱建物2 (31ビット)	木製品	柱桿		長: 33.1 幅: 11.9 厚: 9.3		スギ材、2分割になっている			
155	534	9区	第6面	214ビット	土師器	瓶B	8世紀	口径: 31.0(1/8)		外面: ハナメ(厚底により一部のみ残る) 内面: ハナメ(厚底により一部のみ残る)	SFR/8 棕		
155	535	9区	第6面	216ビット	済患器	杯A	8世紀中頃	口径: 13.0(1/8)		外面: ナデ	SFR/1 ~7/1 淡白		
155	536	9区	第6面	241ビット	済患器	杯A	8世紀前半	口径: 14.6(若干のみ)		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →) 内面: 回 転ナゲ後ナゲ	109R/1 淡白 109E/1 淡白		
155	537	9区	第6面	241ビット	済患器	杯口壷	8世紀前半	口径: 14.2(若干のみ)		内面: 回転ナゲ後ナゲ	MS/ 灰		
155	538	9区	第6面	241ビット	済患器	杯口壷	8世紀前半	口径: 14.2(1/4)			MS/ 灰		
155	539	9区	第6面	283ビット	土師器	高杯	8世紀中頃	口径: 28.0(1/8)		粘土絶巻上部成形 外面: ヘラケズリ(僅 部分的に分離)ヘラミガキ 内面: 細目放 射状縞文、連続状縞文	SFR/5 朝赤褐色		
155	540	9区	第6面	294ビット	木製品	柱桿		長: 17.6 幅: 8.6 厚: 5.1		スギ材、2分割している			
155	541	9区	第6面	197溝	土師器	皿A	8世紀中頃	口径: 16.0(1/6) 唇高: 2.3		外面: ハナメ(厚底により一部のみ残る) 内面: ハナメ(厚底により一部のみ残る)	SFR/6 棕		
155	542	9区	第6面	197溝	土師器	瓶C	8世紀中頃	口径: 14.0(1/5) 唇高: 3.5		外面: 厚底、指押えナデ? 内面: 厚底	SFR/4 にぶい 黄地		
155	543	9区	第6面	197溝	土師器	甕A	8世紀	口径: 14.0(1/5) 唇高: 3.5		外面: ハナメ(厚底により一部のみ残る) 内面: ハナメ(厚底により一部のみ残る)	SFR/4 にぶい 黄地		
155	544	9区	第6面	197溝	済患器	杯口壷	8世紀前半	口径: 15.0(1/12)		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →)	MS/ 灰		
155	545	9区	第6面	197溝	済患器	杯口壷	8世紀中頃	口径: 14.8(1/49) 唇高: 4.4		内面: 回転ナゲ後ナゲ	MS/ ~6/ 灰		
155	546	9区	第6面	197溝	済患器	杯口壷	8世紀中頃	口径: 14.8(1/29) 唇高: 10.0(1/8)		外面: 成部座付着 内面: 回転ナゲ後ナゲ	SFR/1 淡白		
155	547	9区	第6面	197溝	済患器	壺	8世紀後半か	口径: 13.0(1/8)		外面: 沈縛 I. 自然融付着 内面: 自然融 付着	SFR/1 淡白 SFR/3 朝オ リーブ		
155	548	9区	第6面	197溝	済患器	壺Q	8世紀	口径: 10.0(1/4) 唇高: 径: 17.0(1/5)			MS/ MA/ 灰		
155	549	9区	第6面	198溝	済患器	杯口壷	8世紀末	高台径: 7.0(1/4)		外面: ナデ	MS/ 灰		
155	550	9区	第6面	198溝	済患器	杯A	8世紀末			外面: ハナミガキ	MS/ 灰		
155	551	9区	第6面	198溝	済患器	壺	8世紀	底径: 11.0(1/4)		外面: 回転ヘラケズリ(秒 →), 高台 部へラミガキ	MS/ 灰		
155	552	9区	第6面	198溝	済患器	壺	8世紀末	底径: 11.0(1/4)		内面: ナデ	MS/ 灰		
155	553	9区	第6面	198溝	済患器	壺	9世紀後半	高台径: 7.0(1/12)		欽賀 外面: ハウミガキ、施斑、高台 部へラミガキ、貼り付け輪高台 内面: ハウミガキ、施斑	SFR/1 淡白~ SFR/1 灰(箱) 備註		

掲載遺物観察表 (15)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は残存率 (秒~12~) ラケグリで秒が切れた 方向を示す)	調査等(ヨコナガ、回転ナデ(右番)) 外番、ナデ 内面、ナデ	外面色調	備考
156 554	9区	第6面	199溝	須恵器	籽臼	8世紀末	口径:14.0(口のみ) 高台 径:10.0(1.4) 基部:4.3	外番、ナデ 内面、ナデ	N/ 灰、2.578/1 灰白			
156 555	9区	第6面	199溝	須恵器	籽臼	8世紀末	口径:17.0(口のみ) 高台 径:14.0(1.7) 基部:4.1	外番、ヘラ切りか 内面、ナデ	1071/1 灰白			
156 556	9区	第6面	199溝	須恵器	甕C	8世紀末	底径:15.0(1/4)	外番、格子タタキ後~一部縦ナナメ、底部 ヘラケグリ? 内面 同心円文当てと直角 縦ナナメ	N/ 灰			
156 557	9区	第6面	199溝	須恵器	瓶か皿	9世紀中頃か	高台径:6.4(口のみ)	摩滅、歌銘 外番、ラミガキ、ヘラズ リ、無り口出、蛇の目高台、施跡 内面、ヘ ラミガキ	2.577/2 灰黄 陶/灰黄絞	京都産		
156 558	9区	第6面	199溝	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.1	無段式? 内面、ナデ、ヘラケグリ 四面 布目底	N/ 灰			
156 559	9区	第6面	199溝	瓦	平瓦	8~9世紀	狭端幅:2.4 前面幅:1.1	外番、綱目タタキ一部指揮えナデ 四面 布目底	N/ 灰			
156 560	9区	第6面	208溝	灰釉陶器	壺や小型壺	9世紀		外番、施跡 内面、施跡(薄い)	1071/2 オレー 陶			
156 561	9区	第6面	271溝ら込み	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7	外番、綱目タタキ後~一部ナデ 四面、布目 底後後方子ナナメ	N/ 灰			
157 562	10区 (A.1)	第3層	土師器	高杯	8世紀後半	継唇部径:6.0(1/2)	外番、摩滅、副輪面取り(8面) 内面、摩 滅、腹部内部には絞り目	7.578/7.6 横				
157 563	10区 (A.1)	第3層	土師器	甕D	8世紀後半	口径:12.0(1/4) 高さ:3.2	外番、沈線?、ナデ? 内面、ナデ?	7.578/6.6 横				
157 564	10区 (A.1)	第3層	土師器	羽茎	8世紀後半か	口径:28.0(1/5)	外番、摩滅、内面、摩滅、一部ハケメ、指揮 え	7.578/4 に赤 い模様				
157 565	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽A	8世紀後半	口径:12.8(口のみ) 高さ: 10.0(1.4) 基部:3.2	外番、ナデ、内面、ナデ	N/ 灰				
157 566	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽白蓋	8世紀後半	口径:10.8(2.5) つまみ径: 1.6(1.6) 基部:1.2	外番、回転ヘラケグリ?	N/ 灰				
157 567	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽白蓋	8世紀後半	口径:13.6(1/4) 高さ:2.0	外番、ナデ、内面、ナデ	N/ 灰				
157 568	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽白蓋	8世紀後半	口径:14.4(1/4) つまみ径: 2.3(2.0) 基部:2.0	内面、ナデ	N/ 灰				
157 569	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽白蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/4)	内面、ナデ	7.571/1 灰白				
157 570	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽白蓋	8世紀後半	口径:18.8(1.2) つまみ径: 6.8(1.7) 基部:2.9	外番、ナデ、内面、ナデ	N/ 灰白				
157 571	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽D	8世紀後半	口径:14.2(1/3) 高台径: 10.4(1.3) 基部:4.5	外番、ナデ、内面、ナデ	571/1 灰白				
157 572	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽D	8世紀後半	口径:14.0(1/3) 基部:3.9		N/ 灰白				
157 573	10区 (A.1)	第3層	須恵器	籽D	8世紀後半	口径:15.7(口のみ) 高台 径:12.0(1.4) 基部:4.4	外番、ナデ	N/ 灰白				
157 574	10区 (A.1)	第3層	須恵器	瓶?	9世紀前半	高台径:6.2(2.3)	外番、摩滅、内面、摩滅	N/ 灰白				
157 575	10区 (A.1)	第3層	須恵器	瓶	9世紀前半	口径:7.6(1/2)	外番、ナデ、内面、ナデ	N/ 灰白				
157 576	10区 (A.1)	第3層	須恵器	瓶A	8世紀中頃		外番、ヘラミガキ、内面、ナデ?	N/ 灰				
157 577	10区 (A.1)	第3層	須恵器	瓶	9世紀中~後半	口径:23.0(1/7)		N/ 灰白				
157 578	10区 (A.1)	第3層	須恵器	瓶鉢	9世紀中~後半	体部下部径:8.4(1/3)	外番、摩滅、底部に孔少?多数 内面、摩 滅	978/1 灰白				
157 579	10区 (A.1)	第3層	須恵器	円面鏡	8世紀後半か	脚部基内径:7.0(1/4)	外番、透孔(7個か) 内面、基輪(使用痕 か)	N/ 灰				
157 580	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺L	8世紀後半	脚部径:5.5(完)	外番、沈線1、頭部自然輪付壺	10765/1 梶原				
157 581	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺Q	8世紀後半か	高台径:11.7(1.2/3)	回上復元、外番、回転ヘラケグリ(一) 字、底部未剥離、肩部に自然輪薄く付壺 内面、ナデ	571/1 灰白				
157 582	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺N	8世紀中頃	底径:11.0(1/3)	外番、回転ヘラケグリ?、ナデ 内面、ナ デ	N/ 灰				
157 583	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺M	8世紀末	口径:3.6(4.5) 高台径: 4.0(完) 高さ:3.3	外番、回転ヘラケグリ(秒~)	N/ 灰				
157 584	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺M	8世紀末	高台径:4.3(口のみ)	外番、回転ヘラケグリ(秒~)	N/ 灰				
157 585	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺M	9世紀前半	高台径:4.8(3/4)	外番、回転ヘラケグリ(秒~) 内面 一部自然輪付壺	2.578/1 灰白				
157 586	10区 (A.1)	第3層	須恵器	壺G	8世紀末	口径:7.0(1/4) 底径: 5.9(1/6)	外番、系吊り底、内面、絞り目、ナデ	571/1 紫皮				
157 587	10区 (A.1)	第3層	須恵器	甕C	8世紀前半	口径:11.6(1/3)	外番、平行タタキ? 内面、同心円文当て 底丸	N/ 灰				
157 588	10区 (A.1)	第3層	須恵器	甕B	8世紀末	口径:19.6 圓周径:16.0(1/5)	外番、平行タタキ後カ口日 内面、同心円 文当てと直角	571/1 灰白				
157 589	10区 (A.1)	第3層	須恵器	甕	8世紀中頃	口径:42.0(1/8)	外番、平行タタキ後ナデ、ヘラナデ? 内 面、絞り目のような痕跡	N/ 灰				
157 590	10区 (A.1)	第3層	須恵器	甕N?	8世紀後半か	最大腹径:18.6(1.6)	外番、平行タタキ後ナデ、ヘラナデ? 内 面、絞り目のような痕跡	7.576/2 灰皮 590と同一 個体か				
158 591	10区 (A.1)	第3層	灰釉陶器	甕	9世紀	口径:15.0(1/4)	外番、一部施薬あり、施跡	7.576/2 灰皮 591と同一 個体か				
158 592	10区 (A.1)	第3層	灰釉陶器	甕	9世紀		外番、ヘラナデ?。施薬あり、施跡	7.576/2 灰皮 592と同一 個体か				

掲載遺物観察表 (16)

登録番号	図版番号	図版番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内に生存率	調査等(ヨコナガ、回転ナガは省略)(砂=2-,ハラケズリで砂が黏いた方向を示す)	外面部調	備考	
158 592	10区(A1)	第3層	土師器	製陶土器	8世紀後半~9世紀前半	最大腹径: 10.0(1/S)		外面 指拌えナダ 内面 摩減	S19E/6 種					
158 594	10区(A1)	第3層	土師器	製陶土器	8世紀後半~9世紀前半			外面 指拌えナダ 内面 指拌えナダ	S19E/4 にぶい赤端					
158 595	92 (A1)	第3層	土製品	輪の羽口				外面 黒化色、発泡 内面 赤色化	N2/ 黒					
158 596	98 (A1)	第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半	中居高: 約1.0		横井合併複文 平底窓沿引D型式か 62空腔式を複合とする	N2/ 灰	第140面圖 97-559-55				
158 597	98 (A1)	第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半	直径: 17.0(1/11) 瓦当厚: 3.0		変形文 8世紀宮01の式型を複合とする △面 摩減 形成 摩減	N2/ 白灰	第140面圖 97-573				
158 598	98 (A1)	第3層	瓦	軒平瓦	8世紀後半	側面幅: 1.7 瓦当厚: 1.7		均整な草文 平底窓沿30.2G型式を複合とする △面 摩減 ナダ 回転 ハラケズリ	N2/ 灰	第140面圖 97-594				
158 599	10区(A1)	第3層	瓦	丸瓦	B~9世紀	扶搖形幅: 1.5 側面幅: 1.5		無段式 口面 網目タキ 回転 布目端	N2/ 白灰 N4/ 灰					
158 600	10区(A1)	第3層	瓦	平瓦	B~9世紀	扶搖形幅: 2.1 側面幅: 1.6		口面 網目タキ 回転 布目端後ナダ	N2/ 白灰 N5/ 灰					
158 601	101 (A1)	第3層	石製品	砾石	現長: 6.6 砥幅: 5.5 砥厚: 4.7			砂岩 砂砾3						
158 602	10区(A1)	第3~4層	瓦	平瓦			側面幅: 2.0	1枚作り 口面 布目端 回面 網目タキ キ後押捺ナダ?						
158 603	10区(A1)	第3~4層	石製品	耐き石	現長: 6.8 砥幅: 7.7 砥厚: 5.2			砂岩 両面が2次的に火を受けている						
158 604	10区(A1)	第3~4層	金属製品	不明鉄製品	現長: (ヤビ合) 4.4 砥幅: (本体) 2.9 厚: (本体) 0.5									
158 605	10区(A1)	第5面	789ピット	消應器	8世紀後半	口径: 12.6(1/10) 器高: 3.0		外面 摩減 内面 摩減	N2/ 白灰					
158 606	10区(A1)	第5面	819ピット	消應器	要日	8世紀中頃	口径: 22.1(1/4)	外面 平行タキ 内面 ナデの上工具 あり、同心円文当てと具復	N19E/1 白灰 N19E/3 にぶい 赤端					
158 607	10区(A1)	第5面	888ピット	土師器	杵A	8世紀中頃	口径: 19.4(1/1) 器高: 3.0	外面 摩減 内面 摩減、まばらな放射状 紋理	S19E/6 種					
158 608	92 (A1)	第5面	888ピット	土師器	蓋A	8世紀後半	口径: 17.6(3/5) 器高: 3.5	外面 ハラケズリ、摩減 内面 摩減	S19E/6 朝焼					
158 609	10区(A1)	第5面	888ピット	消應器	杵B	8世紀後半	口径: 20.0(2/5) 器高: 5.7			S1E/1 底				
158 610	10区(A1)	第5面	888ピット	消應器	杵B	8世紀後半	高台径: 12.3(1/3)	外面 ナデ 内面 ナデ(部分的に擦耗し た所あり)	N2/ 灰					
158 611	10区(A1)	第5面	888ピット	消應器	杵B	8世紀後半	高台径: 15.0(1/2) 器高: 5.5	外面 ヘア切り 内面 一部ヘラミガキ?	S1E/1 白白					
158 612	92 (A1)	第5面	888ピット	消應器	杵E	8世紀後半	口径: 15.4(2/5) 器高: 5.5	外面 ナデ、へら切り 内面 ナデ	N7/ 白灰					
158 613	10区(A1)	第5面	929ピット	消應器	杵臼蓋	8世紀後半	口径: 14.9(若干のみ)	内面 ナデ		S1E/1 白白				
158 614	98 (A1)	第5面	929ピット	瓦	軒平瓦	8世紀後半	瓦当厚: 5.6 瓦脚厚: 0.7 物 置面: 5.2	均整な草文 平底窓沿A型式を複合 とする△面 ナダ、網目タキ 回転 等ナダ	N2/ 灰 S19E/1 S19E/3					
158 615	10区(A1)	第5面	827土坑	消應器	杵臼蓋	8世紀後半	つまみ径: 1.6(国)	外面 ナデ 内面 ナデ	N5/ 灰 S015/1 オリーブ灰					
158 616	10区(A1)	第5面	827土坑	消應器	蓋蓋	8世紀後半	壁径: 13.0(若干のみ) つまみ 径: 2.6	外面 回転ヘラケズリ?	N7/ 白灰					
158 617	10区(A1)	第5面	856土坑	消應器	杯	6世紀後半~7世紀初期	口径: 14.0(1/13)	内面 回転ヘラケズリ	N2/ 灰					
158 618	10区(A1)	第5面	926土坑	消應器	杵臼蓋	8世紀中頃	口径: 17.0(1/4)	外面 ナデ?、部分的に自然剥付帶 内面 ナデ	N5/ 灰					
158 619	10区(A1)	第5面	926土坑	消應器	皿臼蓋	8世紀中頃	口径: 20.0(1/9)	内面 ナデ	N5/ 灰					
158 620	10区(A1)	第5面	776溝	土師器	杵A	8世紀中頃	口径: 13.0(1/3) 器高: 2.3	外面 摩減 内面 摩減	S19E/3 種					
158 621	10区(A1)	第5面	776溝	土師器	杵A	8世紀中頃	口径: 18.0(1/5)	外面 摩減、ヘラケズリ? 内面 摩減、放 射状紋理	S19E/6 種					
158 622	10区(A1)	第5面	776溝	土師器	杵F	8世紀中頃	高台径: 12.3	外面 摩減、蓋部に円形に3本縫あり(高 台をつくる前の印)、低い高台 内面 摩減	2.5/7/2 底黄, 2.5/2/1 黒					
158 623	10区(A1)	第5面	776溝	土師器	甕	8世紀	口径: 16.0(1/6)	外面 摩減、蓋部に工具痕?あり 内面 摩減、一部ナデ	2.5/7/1 白白					
158 624	10区(A1)	第5面	776溝	土師器	甕	8世紀前半か	口径: 24.0(1/5)	外面 摩減、一部ハケ残る、スス付帶 内 面 摩減	2.5/7/4 にぶ い橙					
158 625	10区(A1)	第5面	776溝	消應器	杵臼蓋	8世紀中頃	口径: 16.4(1/5)		N2/ 灰					
158 626	10区(A1)	第5面	776溝	消應器	杵B	8世紀中頃	口径: 15.0(1/8) 高台径: 10.0 (1/2) 器高: 4.0	外面 ナデ、蓋部にヘラ痕あり 内面 ナ デ	N2/ 灰					
158 627	10区(A1)	第5面	776溝	消應器	杵B	8世紀中頃	高台径: 13.6(1/2) 器高: 5.5	外面 蓋部ナデ、回転ヘラケズリ? 内面 ナデ	N2/ 灰					
158 628	10区(A1)	第5面	776溝	消應器	皿臼蓋	8世紀中頃	口径: 29.4(1/8) つまみ径: 3.4(1~3分) 器高: 3.7	内面 ナデ	2.5/7/1 白白					
158 629	93 (A1)	第5面	776溝	消應器	皿K	8世紀前半	高台径: 8.4(3) 高台久留多 い最大高径: 16.9(1~5分)	外面 沈跡2、自然剥付帶、溶着あり、底 部先端をしている 内面 蓋部に自然剥 付帶	2.5/7/1 底白, 2.5/2/1 黒 リープ					
158 630	93 (A1)	第5面	781溝	土師器	杵A	8世紀前半	口径: 18.0(1/4) 器高: 3.9	外面 ヘラケズリ、摩減 内面 蓋部に擦 痕あり、摩減	S19E/6 種					
158 631	10区(A1)	第5面	781溝	土師器	甕	8世紀後半か	口径: 13.0(1/4)	外面 摩減 内面 摩減	2.5/7/4 にぶ い橙					

掲載遺物観察表 (17)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構番号	遺構・用名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は復存率(%)	調査等(ヨコナガ、回転ナデは否否)(砂=1、ヘラカズリで砂が削いた方向を示す)	外面色調	備考
159	632	93	10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯A	8世紀中頃	口径:13.2~13.4(一部欠け) 器高:3.7	外面:ヘラ切り、口縁部変色(重ね焼の跡ほか) 内面:ナデ	N6/ 灰	
159	633	93	10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯A	8世紀中頃	口径:11.7~11.9(完) 器高:3.6	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	S9Y/1 灰白、S9Y/1 灰	
159	634	93	10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:16.0(1/2周) つまみ 径:2.7(完) 器高:3.1	外面:回転ヘラカズリ後ナデ 内面:ナデ	S9Y/1 灰	
159	635	93	10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:16.2(4/4周) つまみ 径:2.8(完) 器高:2.2	外面:回転ヘラナデ	N6/ 灰	
159	636		10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:16.0(2/5)	外面:回転ヘラナデ	N6/ 灰	
159	637		10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯白蓋	8世紀中頃	口径:17.2(1/3)	外面:回転ヘラナデ? 内面:ナデ	S9Y/1 灰	
159	638		10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯B	8世紀後半	口径:13.0(1/2周) 高台径:9.2(5) 器高:4.7	外面:ナデ 内面:ナデ	10YR3/2 黒褐	
159	639		10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	杯B	8世紀後半	高台径:15.0(1/4)	外面:底部にヘラ痕あり(ヘラナデ?)	N6/ 灰	
159	640	93	10区(A.1)	第5面	781溝	須惠器	皿B	8世紀後半	口径:28~28.2(1/2周) 径:25~25.2(1/2) 器高:9.4	外面:岸誠 内面:岸誠	2.5Y/4 透黄、2.5Y/4 透白	
159	641	1088(A.1)	第5面	930溝	須惠器	壺	8世紀後半	高台径:9.4(完)	外面:ナデ 内面:指揮えナデ	N6/ 灰		
159	642	1088(A.1)	第5面	935溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/10)	外面:ヘラカズリ 内面:放射状鉛文	S9Y/8/4 にぶい理		
160	643	1088(A.2)	第2層		縦横隔壁(第二期)	板	9世紀前半か	高台径:9.0(1/6)	外面:ヘラカズリ、底部ヘラカズリ、 陈稚 内面:線織、蓋鉢	S9Y/1 灰白、N6/ 灰		
160	644	1088(A.2)	第2層	蓋下部	器蓋	青磁碗	中世	体部下部径:8.1(1/5)	外面:施釉 内面:施釉	S9Y/2 反オーリーブ		
160	645	1088(A.2)	第2層	蓋下部	器蓋	網	9世紀後半	口径:8.2(若干のみ)	外面:施釉 内面:施釉	S9Y/2 反オーリーブ		
160	646	1088(A.2)	第2層	反輪器	網	9世紀後半	高台径:8.8(若干のみ) 高 台基部径:9.0(1/8)	外面:施釉(高台内面露胎) 内面:施 釉、蓋と底底あり	S7.5Y/6 反オーリーブ			
160	647	1088(A.2)	第3層		器蓋	召見室系青磁 昭和	14世紀か		外面:凹みあり(連子か)、施釉 内面: 施釉	10Y/2 反オーリーブ		
160	648	1088(A.2)	第3層		土師器	杯A	8世紀中頃	口径:16.0(1/8) 器高:2.2	外面:口縁垂筋(文線)、子、底部ヘ ラカズリ 内面:ナデ後放射状鉛文、 縦横結構状文	10YR7/3 に ぶい理黄、S9Y/6 褐		
160	649	1088(A.2)	第3層		土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/8)	外面:ヘラカズリ 内面:放射状鉛文	S9Y/6 褐		
160	650	1088(A.2)	第3層		土師器	杯A	8世紀後半	口径:14.0(若干のみ) 径 幅:5.1(2) 器高:3.75	外面:指揮えナデ 内面:ナデ	2.5Y/7/2 透黄		
160	651	1088(A.2)	第3層		土師器	杯C	8世紀後半	口径:17.0(1/6) 器高:2.1	外面:岸誠 内面:沈縫1、ナデ	S7.5Y/6 褐		
160	652	1088(A.2)	第3層		土師器	杯B	8世紀末	口径:12.0(1/7) 高台径: 10.0(1/6) 器高:3.3	外面:岸誠 内面:岸誠	S9Y/6 褐		
160	653	93	10区(A.2)	第3層	土師器	杯B	8世紀末	口径:10.1(2/3) 高台径: 8.4(完) 器高:3	外面:岸誠 内面:岸誠	2.5Y/7/4 透黄、 S9Y/6 褐		
160	654	1088(A.2)	第3層		土師器	皿A	8世紀後半	口径:17.0(2/5) 器高:2.4	外面:岸誠 内面:岸誠	7.5Y/9/6 にぶい黄、10YR7/3 に ぶい黄		
160	655	1088(A.2)	第3層		土師器	高杯	8世紀中頃	脚柱基部径:5.0	心棒成形 外面:ナデ2、脚柱部足り (9~10面) 内面:ハケメ後連結 状鉛文、脚柱内面はヘラカズリ	S9Y/6 褐		
160	656	1088(A.2)	第3層		土師器	高杯	8世紀中頃	脚柱基部径:6.2(2)	粘土紹導上成形 外面:ナデ、脚柱 足取り(9~10面) 内面:ハケメ後 連結状鉛文、脚柱内面はナデ	2.5Y/6/6 褐		
161	657	1088(A.2)	第3層		土師器	高杯	8世紀末	口径:16.0(1/4)	粘土紹導上成形 外面:岸誠 内面: 岸誠	S9Y/6 褐		
160	658	1088(A.2)	第3層		土師器	鋸F?	8世紀後半	口径:24.4(1/9)	外面:岸誠 内面:岸誠	7.5Y/7/4 にぶい 理		
160	659	1088(A.2)	第3層		土師器	甕	8世紀後半か	口径:16.0(1/7)	外面:ハケメ 内面:ハケメ、岸誠(工 良痕あり)	10YR7/3 にぶい 黄		
160	660	1088(A.2)	第3層		土師器	甕A	8世紀	口径:23.0(1/8)	外面:ハケメ(岸誠により一部の内面 残る) 内面:ナデ?、一部ハケメ残る	10YR7/4 にぶい 黄		
160	661	1088(A.2)	第3層		土師器	甕	8世紀後半か		外面:岸誠 内面:ナデ?	10YR7/3 にぶい 黄		
160	662	93	10区(A.2)	第3層	土師器	甕		口径:26.0(1/9) 進径: 22.9	圓上僅元 外面:ハケメ、ナデ、底部 板ナデ? 内面:ナデ?、底部板ナデ? スヌ付筋	10YR7/3 にぶい 黄		
160	663	1088(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:13.8(1/4) 高台径: 10.0(1/3) 器高:3.8~4.0	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	S9Y/1 灰		
160	664	1088(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:8.4~8.6(1/2周) 高台径:11.2(5) 器高:3.9 ~4.0	外面:ナデ 内面:ナデ	S9Y/5/1 灰		
160	665	1088(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:14~14.6(1/2周) 高台径:10.6(3/5) 器高: 3.8~4.0	外面:底部に重ね痕あり 内面:ナ デ	N6/ 灰		
160	666	1088(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:15.2(1/4周) 高台 径:10.2(1/3) 器高:4.9~ 5.2	外面:ナデ 内面:一部ナデ	N6/ 灰		
160	667	10区(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:13.1(1/3) 高台径: 8.6~9.2(1/3) 器高:3.6~ 3.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N6/ 灰		
160	668	10区(A.2)	第3層		須惠器	杯B	8世紀後半	口径:16.2~16.4(1/3) 器高: 12.0(3/4) 器高: 5.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N2/ 黒、 S9Y/1 灰		

掲載遺物観察表 (18)

登録番号	国宝/重要文化財	国宝/重要文化財番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法堂(㎡)	○内は生存率	調査等(ヨコナラ、回転ナラは省略)(砂=レバ、ハラケズリで砂が剥いた方向を示す)	外面部調	備考
161	669	10区(A2)		第3層	須恵器	杯B		8世紀後半	口径:21.4(1/9) 高台径:16.0(1/6) 基高:5.9~6.0	外面:ナデ、底部にへら底あり 内面:ナ	7.5H/1 灰		
161	670	10区(A2)		第3層	須恵器	杯B		8世紀後半	口径:11.0(1/8) 高台径:8.2(2/5) 基高:4.9~5.0	外面:ナデ	N/ 灰		
161	671	10区(A2)		第3層	須恵器	杯B		8世紀後半	口径:13.0(1/11) 高台径:9.6(2/9) 基高:3.7~4.8	外面:へら切り?	7.5H/1 灰白		
161	672	10区(A2)		第3層	須恵器	杯B		8世紀後半	口径:15~15.4(1/2) 高台径:10.6(1/2) 器高:1.8	外面:ナデ 内面:ナデ	N/ 灰 口縁部分が ナ有り		
161	673	10区(A2)		第3層	須恵器	皿C		8世紀後半	口径:22.0(1/10) 厚底:2.5 高さ:14.4(3/10) 器高:1.6	外面:摩減 内面:厚底	5H/1 灰白		
161	674	10区(A2)		第3層	須恵器	皿C		8世紀後半	口径:17.6(4寸の底) 底径:14.4(3/10) 器高:1.6	外面:ナデ、へら切り、底部に火ダスケ痕 あり 内面:底部に火ダスケ痕あり	5H/1 灰白		
161	675	10区(A2)		第3層	須恵器	皿C		8世紀中頃	口径:5.0(1/5)		7.5H/1 灰		
161	676	10区(A2)		第3層	須恵器	壺M		8世紀末~9世紀初頭	高台径:4.0~4.4(1完)	外面:糸切り	7.5H/1 灰		
161	677	10区(A2)		第3層	須恵器	壺		8世紀末~9世紀初頭	高台径:6.7(1~部分欠)	外面:糸切り	5H/1 灰白		
161	678	93 10区(A2)		第3層	須恵器	壺G		8世紀末~9世紀初頭	底径:4.2(1/4)	外面:回転ヘラケズリ、糸切り	5H/1 灰白		
161	679	10区(A2)		第3層	須恵器	壺B		8世紀後半か	口径:23.4(1/6)	外面:平行タタキ	5H/1 灰白		
161	680	10区(A2)		第3層	須恵器	壺C		8世紀後半	口径:26.0(1/8)	外面:平行タタキ後ナデ 内面:同心円文 当て具痕後ナデ	N/ 灰		
161	681	10区(A2)		第3層	須恵器	壺		9世紀か	口径:若干のみ 深径:18.0(1/6)	団上模元 瓦面:ナデ、底部蒸気孔2個、 把手痕あり 内面:ナデ、ヘラケズリ	5H/1 灰白		
161	682	93 10区(A2)		第3層	陶器	瓶		9世紀前半か	底径:6.3(3/4)	外面:回転ヘラケズリ、旋ね 内面:「×」 のへり記号あり、施難	10H/6 灰 手 リープ、10H/7/2 にぶい 黄緑		
161	683	10区(A2)		第3層	灰粘土陶器	瓶		9世紀後半か	高台径:7.0(1/5)	外面:施難 瓦面:灰難?のはげた跡?	5H/1, 7/2 灰 白		
161	684	10区(A2)		第3層	灰粘土陶器	壺		9世紀前半か	高台径:8.0(1/5)	外面:底部回転ヘラケズリ 内面:施難(一部剥離)	5H/1 灰白		
161	685	93 10区(A2)		第3層以下	土師器	製塙土器		B~9世紀	口径:12.0(1/4)	二次成形赤色化 外面:口縁部に神で 押したような凹みあり、指押えナデ 内 面:底部ナデ	7.5H/2 明褐 色		
161	686	93 10区(A2)		第3層	土師器	製塙土器		B~9世紀	内径:12.2(1/6翻)	外面:指押え 内面:福字?	7.5H/3 にぶい 灰		
161	687	93 10区(A2)		第3層	土師器	製塙土器		B~9世紀	口径直下径:8.0(1/6)	外面:指押え 内面:指押え	7.5H/7/6 灰		
161	688	93 10区(A2)		第3層	土師器	製塙土器		B~9世紀	内径:10.0(1/6)	外面:指押えナデ 内面:ナデ	10H/7/4 にぶい 黄緑、10H/7/1 灰白		
161	689	10区(A2)		第3層	土師器	製塙土器		B~9世紀	口径直下径:15.6(1/5)	外面:摩減 内面:摩減	2.5H/3 にぶい 黄		
161	690	10区(A2)		第3層	瓦	平瓦		B~9世紀	広幅垂幅:1.5~1.8 側面幅 2.1	凸面:綺妙タタキ 凹面:ナデ、布目痕	2.5H/2 灰白		
161	691	10区(A2)		第3層	石製品	砾石			長径:9.3 短幅:3.6 深厚:1.8 砂岩	底面2			
161	692	10区(A2)		第3層	金属製品	小柄?			長径:5.2 短幅:(サビ 含)5.2(本体)0.5~0.6 厚: 0.2~0.5			鉛	
162	693	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	土師器	杯A		8世紀末	口径:9.2(1/4) 器高:2.2	外面:摩減 内面:沈線 1.5	5H/6 灰		
162	694	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	土師器	杯A		8世紀末	口径:16.1(1/6) 基高:2.4	外面:摩減、指押えナデ? 内面:沈線 1.5	5H/6 灰		
162	695	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	土師器	羽垂		8世紀末	口径:27.2(若干のみ) 深径: 31.0(3/8)	外面:ハメコ、指押え	7.5H/5/3 にぶい 灰		
162	696	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	須恵器	杯B		8世紀中頃	口径:27.2(若干のみ) 深径: 31.0(1/8)	外面:へら切り?	N/4 灰		
162	697	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	土師器	製塙土器		8世紀後半		外面:摩減、指押えナデ 内面:摩減、指押 えナデ	7.5H/7/4 にぶい 灰		
162	698	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	木製品	柱根			長:38.5 cm 幅:13.7 厚:12.7	スギ材 底面に加工痕?			
162	699	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (25ビット)	木製品	柱根			長:33.3 幅:18.4 厚:16.0	スギ材 底面に加工痕?			
162	700	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (26ビット)	土師器	高杯		8世紀中頃	口径:28(1/12)	外面:ハラケズリ 内面:放射状縞文、透 結構状縞文	5H/6 灰		
162	701	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (26ビット)	土師器	杯B		8世紀中頃	口径:15~15.6(1/4翻) 高台 径:11.0(1/4翻) 器高:2.8~ 2.9	外面:一部へラミガキ、底部ナデ、削難 度:透状縞文、放射状縞文、刻難	7.5H/6 灰		
162	702	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (264ビット)	土師器	皿C		8世紀中頃	口径:9.4(1/4翻)	外面:口縁部一部スス付難、底部ナデ	2.5H/2 灰黄		
162	703	94 10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (264ビット)	須恵器	杯B		8世紀末	口径:15.6(2/5) 高台 径:10.8(3/2翻) 器高:5.0~5.1	外面:ナデ 内面:ナデ	N/ 灰		
162	704	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (265ビット)	木製品	柱根			長:13.2 幅:7.7 厚:6.6	スギ材 底面に加工痕?			
162	705	10区(A2)	第4面	獨立柱脚物1 (267ビット)	木製品	柱根			長:16.7 幅:7.7 厚:6.0	スギ材			

掲載遺物観察表 (19)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm) (□内は残存率)	調査等(ヨコナガ、回転ナガは否否)(秒~ラケズリで秒が切いた方向を示す)	外面色調	備考
162	706	10区(A.2)	第4面	竪立社建物1 (270ピット)	瓦	丸瓦		8~9世紀	広幅面幅:2.1 側面幅:1.8	有底式 凸面 ナデ? 回面 布目底	2.5Y5/1 黄灰	
162	707	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物2 (270ピット)	須恵器	籽臼		8世紀中頃	口径:14.0(1.4) 高台径:8.6 基盤:3.7	外面:ナデ? 内面:ナデ	N/G 白灰	
162	708	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物2 (270ピット)	須恵器	籽臼		8世紀中頃	高台径:12(1.6)	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/2 黄灰	
162	709	94	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	土師器	瓶A	8世紀中頃	口径:17.6(1.4倍) 基高:3.5	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 棕	
162	710	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	土師器	甕		9世紀	口径:12.2(1.4)	上回復元 両面:指押え 全体にスス付 内面:ヘラナデ? ハラ底あり	5YR6/4 にぶい 程	
162	711	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	須恵器	甕B?		8世紀中頃	口径:14.0(1.8)	外面:平行タキ 内面:工具痕あり	N/G 白	
162	712	94	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	粘土陶器	甕	9世紀前半	底径:9.0(1.6)	外面:ヘラガキ? ハラ切り、施釉 内面: ヘラナキ? 織縫、施釉	7.5Y7/3 浅黄	近江系?
162	713	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	瓦	平瓦		8~9世紀	広幅面幅:2.4 侧端面幅:1.0	凸面:縁目タキ 回面 ナデ、布目底	N/G 白	
162	714	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	須恵器	籽臼		8世紀後半	口径:12.0(1.10)	外面:ヘラ切り?	N/G 白	
162	715	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	土師器	製陶土器		8世紀後半	口径:12.0(1.11)	外面:指押えナデ、スス付着 内面:ナデ	5YR7/3 にぶい 黄壁	
162	716	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	須恵器	籽A		8世紀中頃~ 後半	口径:15.0(1.6) 基高:3.7	外面:ヘラ切り?	7.5Y6/1 黄	
162	717	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	須恵器	籽白蓋		8世紀中頃~ 後半	口径:17.0(1.8)	外面:ナデ?、ヘラナデ? 内面:ナデ	N/G 白	
162	718	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	土師器	甕		8世紀	口径:19.0(1.11)	外面:摩滅 内面:ハケメ、スス付着	5YR6/4 にぶい 程	
162	719	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物3 (307ピット)	須恵器	甕L		8世紀後半	最大腹径:17.8(1.4)		N/G 白	
163	720	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物9 (324ピット)	須恵器	籽臼		8世紀中頃	高台径:12.0(1.10)		N/G 白	
163	721	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物9 (324ピット)	須恵器	籽白蓋		8世紀後半	口径:16.0(1.4)		2.5Y8/1 白灰	
163	722	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物9 (324ピット)	土師器	皿A		8世紀末	口径:24.0(1.15)	外面:ヘラケズリ 内面:ヘラ記号?、摩 滅	5YR6/6 明治模	
163	723	10区(A.2)	第4面	竪立社建物10 (324ピット)	木製品	柱根			長:23.8 楪:8.9 幕:9.3	スギ材 全体に腐食食しい		
163	724	10区(A.2)	第4面	竪立社建物10 (324ピット)	木製品	柱根			長:35.5 楪:10.1 幕:8.0	スギ材 2分割になっている		
163	725	10区(A.2)	第4面	竪立社建物10 (324ピット)	木製品	柱根			長:21.3 楪:8.7 幕:4.5	スギ材		
163	726	10区(A.2)	第4面	竪立社建物10 (324ピット)	木製品	柱根			長:19.8 楪:8.6 幕:4.9	スギ材		
163	727	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 11(706セット)	須恵器	籽臼		8世紀後半	口径:15.4(1.8) つまみ桂: 2.8(完) 番高:2.9	外面:ヘラケズリ(珍) 内面:ナデ	7.5Y6/1 黄	
163	728	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(307セット)	土師器	製陶土器		8~9世紀		外面:指押えナデ、摩滅 内面:摩滅	2.5Y5/1 黄灰	
163	729	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(307セット)	土師器	皿A		8世紀末	口径:20.0(1.5) 基高:2.1	外面:摩滅 内面:摩滅、底面スス?付着	5YR6/6 棕 5YR7/4 にぶい 黄壁	
163	730	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 13(308セット)	須恵器	籽臼		8世紀末	口径:15.0(1.10) 高台径: 11(1.6) 基高:4.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N/G 白	
163	731	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 13(308セット)	須恵器	皿C		8世紀末	口径:16.0(1.6) 底径: 13.0(1.6) 基高:1.9	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y7/1 白	
163	732	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 13(308セット)	須恵器	籽臼				外面:ヘラ切り? 内面:ナデ、表著「東」	N/G 白	
163	733	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 13(308セット)	須恵器	皿D		8世紀末	口径:29.0(1.5)		N/G 白	
163	734	96	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物8 (230ピット)	瓦	斜平瓦	8世紀後半	瓦当周:7.8 上外縫隙:0.3	均整草文、斜圓周舟出土T-60型式と 同形 □面:摩滅、布目後後ナデ? □面: 摩滅	N/G 白	第140集団 69-196
163	735	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物8 (230ピット)	瓦	平瓦		8~9世紀	側面幅:1.2 狹端面幅:1.6	外面:縁目タキ後持脚?・板ナデ? 回面: 布目後後ナデ?ナデ	N/G 白	
163	736	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物8 (230ピット)	須恵器	籽A		8世紀後半	口径:12.0(1.7)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	7.5Y7/1 白	
163	737	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物8 (230ピット)	須恵器	籽A		9世紀初	口径:12.0(1.7) 底径: 7.2(1.0) 基高:3.3	外面:ヘラ切り?	7.5Y6/1 白	
163	738	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物8 (230ピット)	土師器	製陶土器		8世紀		二次焼成で赤色化 外面:摩滅、指押えナ デ 内面:摩滅	5YR8/3 浅黄 壁	
163	739	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	瓦	平瓦		8~9世紀	狭端面幅:1.6 側面幅:1.3	外面:縁目タキ後ナデ? 回面:布目底 ナデ?	N/G 白	
164	740	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	瓦	斜平瓦		8世紀後半	上端幅:26.7 瓦当周:5.3 瓦底: 1.4	均整草文、平城宮6702G型式を組型 とする □面:ナデ?、縁目タキ? 回面: 板ナデ?、布目後後ナデ?	2.5Y7/2 白灰	第140集団 97-562
164	741	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	瓦	平瓦		8~9世紀	広幅面幅:1.5	外面:指押えナデ?、縁目タキ? 回面: 板ナデ?、布目後後ナデ?	10YR5/2 白	
164	742	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	石製品	砾石?			長:12.5 異質? 10.7 異質?	砂岩、表面に箆跡の凹みがあり、撲った 跡あり		
164	743	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	木製品	柱根			長:14.8 楪:8.5 幕:4.2	コウヤマキ材		
164	744	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	須恵器	籽臼		8世紀後半	口径:15.0(1.6)	外面:ヘラ切り?、ヘラナデ? 内面:ナデ	N/G 白	
164	745	10区(A.2)	第4~5面	竪立社建物 12(309ピット)	土師器	製陶土器		8~9世紀	口径:14.0(1.9)	外面:指押えナデ? 内面:ナデ	10YR8/3 浅黄 壁	

掲載遺物観察表 (20)

件番	図書 号	記号	地区	面構面	面構名	種類	器種	時期	法量(cm) (内)は生存率	調査等(ヨコナデ、回転ナゲは省略) (紺=2、ヘラケズリで紺が無い 方向を示す)	外面色調	備考
164	746		10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (3×7ピット)	調査器	杯口壺	8世紀後半	口径: 12.0(1/7)	外面: ヘラナデか 内面: ナデ	7.5% / 灰	
164	747		10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (4×14ピット)	土師器	壺	10世紀前半	口径: 15.0(1/6)	外面: 指押えナデ 内面: 摩滅	7.5% / 6 横	
164	748	94	10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (4×18ピット)	調査器	壺	8世紀後半	口径: 15.6(1/7) つまみ紐: 2.7(完) 器高: 3.8	外面: 回転ヘラナデ?、ヘラ切り? 内面: ナデ	No/ 灰 N7/ 灰白	
164	749		10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (4×18ピット)	土師器	壺			内面: ヘラナデか	10% / 3 深葉模	
164	750		10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (4×18ピット)	調査器	壺	8世紀後半	口径: 18.0(1/7)		10% / 1 灰	
164	751		10区 (A.Z)	第4-5 面	直立柱建物 面 (4×18ピット)	調査器	杯A	8世紀	口径: 10.0(3/5)	外面: ヘラ切り 内面: ナデ	7.5% / 1 灰	
165	752	105	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 84.2 幅: 16.9 厚: 3.7	ヒノキ材		東側上
165	753	105	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 92.7 幅: 16.7 厚: 4.8	ヒノキ材		東側中
165	754	105	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 100.0 幅: 9.4 厚: 13.2	ヒノキ材		北側下
165	755	105	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	不明品		長: 66.5 幅: 19.0 厚: 1.5 扉	ヒノキ材 圓錐形に小孔25個(内18に木 栓)付		
166	756	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	板状不明品		長: 48.0 幅: 7.6 厚: 1.0	ヒノキ材		
166	757	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	木片		長: 44.5 幅: 1.6 厚: 1.1	ヒノキ材		
166	758	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	木片		長: 58.0 幅: 2.8 厚: 1.4	ヒノキ材		
166	759	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 84.2 幅: 17.7 厚: 4.8	ヒノキ材		東側上
166	760	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 85.9 幅: 20.2 厚: 4.3	ヒノキ材		東側中
166	761	106	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 95.3 幅: 9.8 厚: 13.2	ヒノキ材		東側下
167	762	107	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 91.8 幅: 15.2 厚: 2.0	ヒノキ材		南側上
167	763	107	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 91.5 幅: 22.0 厚: 3.0	ヒノキ材		南側中
167	764	107	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	板状不明品		長: 55.0 幅: 7.6 厚: 0.9	ヒノキ材		
167	765	107	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 100.1 幅: 10.3 厚: 11.4	ヒノキ材 凹部に墨なり底あり		南側下
168	766	108	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 80.7 幅: 13.0 厚: 2.8	ヒノキ材		西南上
168	767	108	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 87.5 幅: 18.9 厚: 4.2	ヒノキ材		西南中
168	768	108	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	芦舟		長: 94.4 幅: 9.2 厚: 11.5	ヒノキ材		西南下
168	769	108	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	板状不明品		長: 53.2 幅: 7.1 厚: 1.1	ヒノキ材		
168	770	108	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	木製品	不明品		長: 39.0 幅: 21.0 厚: 0.8	ヒノキ材 底板か		
169	771		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	盤A	8世紀後半	口径: 18.0(1/8)	外面: 制限 内面: 斜端	7.5% / 4 に墨 い掛	
169	772		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	調査器	杯口壺	8世紀末	口径: 15.0(1/6)	外面: ナデ、ヘラナデ? 内面: ナデ	7.5% / 4 に墨 い掛	
169	773		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	調査器	壺	8世紀後半	口径: 23.0(1/5) 高台径: 16.6(1.5) 番高: 2.9±2.0	外面: 尾部ヘラナデ 内面: ナデ	SIT/ 1 灰白	
169	774		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	調査器	杯A	8世紀後半		外面: ヘラミガキ	墨/ N5/ 灰	
169	775	95	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	調査器	内面板	8世紀後半	縦径: 15.0(1/6)	外面: 表面磨耗(使用感か)、透孔あり	5% / 1 灰	
169	776		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	調査器	壺	9世紀前半	縦径: 5.6(2/4個)	外面: 糙目	5% / 1 灰	
169	777		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	灰粒	碗	9世紀後半	高台径: 8.2(1/4)	外面: 尾部溶落あり、施釉 内面: 施釉	2.5% / 1 灰白	
169	778	96	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	埴塗土器	8~9世紀		外面: 摩滅 内面: 摩滅	10% / 3 に墨 い掛 SIT/ 1 灰	
169	779	96	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	埴塗土器	8世紀		外面: 摩滅 内面: 白目底	10% / 2 深葉模	
169	780	96	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	瓦	籽平瓦	8世紀後半	外縁厚: 0.5	吻擅座文 絞頭裏寺出土 T-60型式と 同蓋 瓦蓋 板ナデ、布目底板ナデ、スヌ 付有	5% / 2 灰オリーブ ノグ	
169	781		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	瓦	丸瓦	8~9世紀	侧面幅: 1.5 扇端幅: 1.2	無段式 口面: 網目タキ後ナ寸 口面 老目板	2.5% / 3 浅黄	
169	782		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	瓦	平瓦	8~9世紀	侧面幅: 2.2~2.7	凸面 板ナデの面 布目底、スヌ付有	2.5% / 3 浅黄 ノグ	
169	783		10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	埴塗土器	8世紀後半	口径: 15.8(1/4個) 器高: 3.9	外面: 指押えナデ、ヘラケズリ 内面: ナ デ	SIT/ 6 横	
169	784	96	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	埴塗土器	8世紀後半	口径: 5~6.0(1/4)	外面: 指押えナデ 内面: 指押えナデ	10% / 6 明照模	
169	785	96	10区 (A.Z)	第4面	3S1井戸	土師器	埴塗土器	8世紀後半		外面: 摩滅 内面: ナデ	2.5% / 3 浅黄 2.5% / 1 灰白	

掲載遺物観察表 (21)

博物館番号	因番	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内に既存率	調査等(ヨコナガ、回転ナデは否否) (砂・土はラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面部調	備考
169	766	96	10区(A.2)	第4面	357井戸	土師器	製埴土器	8世紀後半			外面: 指拌えナデ 内面: 目口底	7.5YR7/4 にぶい壁	
169	767		10区(A.2)	第5面	630井戸	土師器	皿A	8世紀後半	口径: 19.0(1.9)		外面: 厚底 内面: 麻溝	10YR7/3 にぶい壁	
169	768		10区(A.2)	第5面	630井戸	土師器	皿	8世紀後半			外面: ハケメ、指ナデ 内面: 指拌えナデ	7.5YR6/6 植	
169	769		10区(A.2)	第5面	630井戸	須志器	杯A	8世紀後半	口径: 13.0(1.4) 器高: 4.0		外面: ヘラ切り	2.5YR7/3 磁黄	
169	790	96	10区(A.2)	第5面	630井戸	須志器	杯A	8世紀後半	口径: 13.8(2.5) 器高: 3.9		外面: ヘラ切り? 内面: ナデ?	9YR1/灰白	
169	791		10区(A.2)	第5面	630井戸	須志器	皿	8世紀後半	口径: 40.0(1.11)			9YR1/灰白	
170	792	94	10区(A.2)	第4面	297ビット	土師器	碗A	8世紀末	口径: 11.8(2.3) 器高: 4.2		外面: 指拌え後ヘラケズリ 内面: 厚底	5YR5/6 明赤褐	
170	793	94	10区(A.2)	第4面	297ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 16~15.6(一部欠) 器高: 2.4		外面: ヘラケズリ 内面: 厚底	10YR7/3 にぶい壁	
170	794		10区(A.2)	第4面	297ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 17.0(1.6)		外面: 厚底 内面: 厚底	10YR7/4 にぶい壁	
170	795		10区(A.2)	第4面	297ビット	土師器	碗B	8世紀後半	口径: 16.6(1.3)		粘土縦巻上げ形 枕面: 分割ヘラミガキ 内面: 容射状文	7.5YR6/6 植	
170	796		10区(A.2)	第4面	297ビット	土師器	皿	8世紀後半	口径: 15.6(1.3)		外面: 厚底、一部ハケメ、縫隙部スス付裏 内面: 厚底	10YR7/3 にぶい壁	
170	797		10区(A.2)	第4面	297ビット	土器	杯A	9世紀前半	口径: 12.0(1.8)		外面: 一部ヘラミガキ 内面: 槌方向へマガキ後挫文	2.5YR5/2 磁灰黄	
170	798		10区(A.2)	第4面	297ビット	須志器	杯B直	8世紀後半	口径: 16.10(5.1) つまみ径: 6.0(1.5) 器高: 3.7		外面: ナデ 内面: ナデ	NH/灰	
170	799	94	10区(A.2)	第4面	299ビット	須志器	杯B直	8世紀前半	口径: 17.4(7.7) つまみ径: 3.0(0.8) 器高: 3.7		外面: ナデ、回転ヘラナデ 内面: ナデ	NH/灰	口縁部若干のうがい跡有り
170	800		10区(A.2)	第4面	300ビット	須志器	碗B	8世紀後半	高台径: 10.0(1.5)		外面: ヘラ切り? 内面: ナデ	NH/灰	
170	801		10区(A.2)	第4面	325ビット	瓦	平瓦	8~9世紀	古墳面幅: 2.1 側面幅: 1.8		凸面: 指拌えナデ、縫目タキ凹面: 厚底	2.5YR1/灰白	
170	802		10区(A.2)	第4面	325ビット	土師器	皿A?	8世紀末	口径: 19.0(1.6)		外面: ヨコナデ後一部ヘラミガキ、指拌えナデ	10YR6/2 磁灰黄	
170	803	94	10区(A.2)	第4面	355ビット	須志器	杯C	8世紀後半	口径: 17.5(1.4) 器高: 3.2		外面: 厚底、ヘラケズリ 内面: 厚底	10YR7/1 灰白	
170	804		10区(A.2)	第4面	355ビット	須志器	皿A	8世紀末	口径: 15.0(1.6)		外面: ナデ? 内面: ナデ	2.5YR1/灰白	
170	805		10区(A.2)	第4面	355ビット	土師器	製埴土器	8世紀	口径: 13.0(1.6)		外面: 指拌えナデ、厚底 内面: 指拌えナデ、厚底	5YR7/6 植	
170	806		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	杯A	8世紀末	口径: 17.0(1.4) 器高: 3.2		外面: 指拌えナデ	7.5YR6/4 にぶい壁	
170	807		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	杯Cカ	8世紀末	口径: 17.0(1.9)		外面: 指拌えナデ、厚底 内面: 沈縫: 1.7 字: 厚底	5YR6/6 植	
170	808		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	杯C	8世紀末	口径: 13.0(1.2) 器高: 3.2		外面: 厚底、内面: 沈縫1、厚底	10YR7/2 にぶい壁	0.8mの チーマー合
170	809	94	10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	杯C	8世紀末	口径: 13.0(1.2) 器高: 3.5		外面: 厚底(指拌えナデ) 内面: 厚底	2.5YR7/2 進黄 胎土隔離	
170	810		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 16.0(1.5) 器高: 3.5		外面: ヘラケズリ(厚底) 内面: 厚底	10YR7/3 にぶい壁	
170	811		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 16.0(2.5) 器高: 2.7		外面: 厚底 内面: 厚底(ナデ?)	7.5YR7/4 にぶい壁	
170	812	94	10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 17.4(1.2) 器高: 2.3		外面: 厚底 内面: 厚底	10YR7/3 にぶい壁	
170	813		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	皿A	8世紀末	口径: 20.3(1.4)		外面: 厚底、ナデ?、指拌えナデ? 内面: 厚底	2.5YR7/6 植	
170	814	94	10区(A.2)	第4面	356ビット	須志器	杯A	8世紀末	口径: 13.1(1.2) 器高: 3.3		外面: ヘラ切り 内面: ナデ	5YR1/灰白	俄成甘い
170	815		10区(A.2)	第4面	356ビット	須志器	杯A	8世紀末	口径: 13.4(1.2) 器高: 3.8		外面: ナデ、ヘラ切り 内面: ナデ	5YR1/灰白	
170	816	94	10区(A.2)	第4面	356ビット	須志器	杯A	8世紀末	口径: 14.10(1.3) 器高: 4.2		外面: ヘラ切り? 厚底に粘土の柔らか い時にかけられた痕跡あり 内面: ナデ	2.5YR1/灰白	俄成甘い
170	817	95	10区(A.2)	第4面	356ビット	須志器	碗B	8世紀末	口径: 14.7(0.5) 高台径: 10.2(0.8) 器高: 5.6		外面: ヘラ切り、高部にヘラ記号あり	NH/灰	高台部分が み有り
170	818		10区(A.2)	第4面	356ビット	須志器	皿A	8世紀末	口径: 17.4(1.7) つまみ径: 1.8 底径: 13.1(1.3) 器高: 3.1		外面: ヘラ切り? 内面: ナデ	5YR1/灰白	
170	819		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	製埴土器	8世紀後半			外面: 指拌えナデ 内面: 指拌えナデ	2.5YR7/2 磁黄	
170	820		10区(A.2)	第4面	356ビット	土師器	製埴土器	8世紀後半			外面: 指拌えナデ 内面: 綿かい布目底	7.5YR7/3 にぶい壁	
171	821		10区(A.2)	第4面	381ビット	灰皮陶器	楕	9世紀後半か	口径: 8.2(1.1)		外面: ヘラケズリ、蒸合縫部凹み(ヘラ 跡?)? 内面: ナデ?	5YR1/灰白	
171	822		10区(A.2)	第4面	392ビット	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅: 1.3		凸面: 縫目タキ後ナデ 内面: 厚底	5YR1/灰白, 7.5YR1/灰白	
171	823		10区(A.2)	第4面	403ビット	土師器	皿C?	8世紀中頃	口径: 14.0(1.10)		外面: 厚底 内面: 厚底	5YR6/6 明赤	
171	824		10区(A.2)	第4面	403ビット	須志器	杯A	8世紀前半	口径: 18.0(1.8)		外面: ヘラケズリ(器...)	5YR1/灰白	
171	825		10区(A.2)	第4面	403ビット	須志器	杯C	8世紀前半	口径: 17.0(1.9)		外面: ヘラケズリ(器...)	5YR1/灰白, 5YR1/灰	
171	826		10区(A.2)	第4面	434~435 ビット	須志器	杯B直	8世紀後半	口径: 16.2(3.0) つまみ径: 3.2(0.8) 器高: 1.2		外面: 回転ヘラナデ?、板ナデ 内面: ナ デ	NH/灰白	

掲載遺物観察表 (22)

登録号	国番号	国番号	地区	遺構番	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	0区内生存率	調査等(ヨコナギ、回転ナギは省略)(砂へ・ラケズリで砂が剥いた方向を示す)	外面色調	備考	
171	827	10区 (A2)	第4面	434-435	須恵器	壺H		8世紀後半	口径:11.0(1/8)		内面:口縁部に凹みあり、ナデ	N/ 灰		
171	828	95 (A2)	第4面	445ビット	須恵器	杯D直		8世紀後半	口径:15.5(1/8前) つまり 径:2.1(8) 基高:2.3		外面:回転へたり?	N/ 灰	口縁部分が み有り	
171	829	1088 (A2)	第4面	445ビット	瓦	丸瓦		B~9世紀	側面幅:1.4		無段式か 口凸:綱目タキ 回面:布目	7.5M/7.4 にぶ い壁 2.5M/1 黄灰		
171	830	1088 (A2)	第4面	445ビット	瓦	平瓦		B~9世紀			凸面:綱目タキ 回面:布目底	10M/2.2 黄瓦場		
171	831	99 (A2)	第4面	445ビット	瓦	平瓦		B~9世紀	側面幅:1.5 廓幅:幅:7.6 上		凸面:綱目タキ後一部板ナギ、指揮丸 凹面:布目底後一部板ナギ、ヘラナギ	10M/1 白瓦		
172	832	1088 (A2)	第5面	470ビット	須恵器	杯D		8世紀中頃	高台径:13.0(1/7)		外面:△切妻? 内面:ナデ	S/4.1 灰		
172	833	1088 (A2)	第5面	471ビット	須恵器	杯D直		8世紀前半	口径:17.0(1/6)		外面:ヘラナギ?	N/ 灰		
172	834	1088 (A2)	第5面	486ビット	須恵器	杯A		8世紀前半	口径:20.6(6.5のみ) 高台 径:15.0(1.8) 基高:7.8		内面:ナデ	2.5M/1 黄灰		
172	835	1088 (A2)	第5面	553ビット	須恵器	壺L		8世紀前半	口径:10.6(1.5)		外面:自然釉付着 内面:自然釉付着	N/ 灰 N/ 灰		
172	836	1088 (A2)	第5面	559ビット	須恵器	杯D		8世紀後半	高台径:10.0(1/5)		内面:ナデ	N/ 白		
172	837	1088 (A2)	第5面	564ビット	土師器	甕C		8世紀中頃	口径:27.0(1/8)		外面:△カケズリ? (摩滅のため不明確) 内 面:ナデ	2.5M/2.2 白灰		
172	838	1088 (A2)	第5面	564ビット	土師器	甕C		8世紀	側面幅:25.0(1/10)		外面:△カケズリ 内面:板ナギ、ハケメ、指 揮丸	10M/2.2 白灰, 7.5M/7.6 種		
172	839	1088 (A2)	第5面	564ビット	須恵器	杯D直		8世紀後半	口径:14.0(1/9)		外面:△切妻? 内面:ナデ	N/ 灰		
172	840	1088 (A2)	第5面	574ビット	金属製品				横長: (本体:2.1, 附幅: (本 体:1.0, 幅:1.7) 厚:1.7)					
172	841	95 (A2)	第5面	617ビット	須恵器	杯D		8世紀中頃	口径:16.2(2.0) 高台:6. 4(4.4) 基高:4.6		外面:底部回転ヘラカゼリ(砂へ...)、△ カケズリ 内面:ナデ	N/ 灰		
172	842	1088 (A2)	第5面	617ビット	須恵器	壺Q		8世紀中頃	基台径:9.8(8.8) 壁厚:8.2 壁厚:18.0(1.0)		外面:次元H、△カケズリ? ナデ、自然釉 付着 内面:△付着物あり	N/ 白		
172	843	95 (A2)	第5面	617ビット	須恵器	甕C?		8世紀	口径:27.0(1/14)		外面:△カケズリ 内面:把手を付け た時の跡?	S/7.1 白灰, N/7.1 白		
172	844	1088 (A2)	第5面	619ビット	土師器	素杯		8世紀後半	脚柱形径:5.1(3/4)		外面:△カケズリ(砂へ)、△カケズリ 内面:底厚、刮削 内面にはナデ、ハ ケメ	10M/6.6 種		
172	845	1088 (A2)	第5面	632ビット	土師器	製塗土器		B~9世紀	口径:若干のみ		外面:指揮ナデ 内面:摩滅	10M/2.3 にぶ い壁		
172	846	95 (A2)	第5面	633ビット	須恵器	杯A		8世紀後半	口径:13.0(3/4) 器高:3.4		外面:ナデ、△カケズリ	S/7.1 白		
172	847	1088 (A2)	第5面	973ビット	須恵器	杯D直		8世紀中頃	口径:18.0(1/10)			S/5.5 紫灰		
172	848	1088 (A2)	第4面	289土坑	土師器	甕C		8世紀中頃	口径:14.0(1/4側)		外面:△カケズリ(砂へ)、△カケズリ 内面:底厚、刮削 内面にはナデ、ハ ケメ	10M/2.3 にぶ い壁		
172	849	1088 (A2)	第4面	289土坑	土師器	甕C		8世紀中頃	口径:12.0(1/7)		外面:△カケズリ(砂へ)、△カケズリ 内面:底厚	10M/2.3 にぶ い壁		
172	850	1088 (A2)	第4面	289土坑	土師器	甕C		8世紀中頃	口径:28.0(1/11)		外面:△カケズリ、口縁部二次焼成のため赤 化 内面:底厚	10M/8.4 淡黄褐		
172	851	1088 (A2)	第4面	289土坑	土師器	甕D		8世紀中頃			外面:△カケズリ、指揮ナデ、ナデ 内面: 指揮ナデ	7.5M/7.6 種		
172	852	1088 (A2)	第4面	289土坑	土師器	羽垂		8世紀中頃	体部径:21.0(1/7)		外面:△カケズリ、底厚、一部スス付着 内面: 底厚、一部スス付着	10M/2.4 にぶ い壁		
172	853	1088 (A2)	第4面	289土坑	須恵器	杯A		8世紀中頃	口径:12.0(1/10) 器高:3.9		外面:△カケズリ 内面:ナデ	N/6 灰		
172	854	94 (A2)	第4面	289土坑	須恵器	杯B		8世紀中頃	口径:16.0(1/28) 器高:6. 6(1.6/1.9) 基高:4.3~6.6		外面:△カケズリ 内面:ナデ	S/6.1 灰		
172	855	1088 (A2)	第4面	289土坑	須恵器	甕		8世紀中頃	脚柱形径:21.0(1/6)		外面:波状文、ナデ、平行タキ、自然釉 付着 内面:筒型円文舌状と直痕	N/ 灰 2.5M/6.1 オ リーブ灰		
172	856	1088 (A2)	第4面	352土坑	須恵器	壺Q		8世紀後半	口径:28.0(1/3)		外面:自然釉付着	7.5M/7.1 白		
172	857	1088 (A2)	第4面	354土坑	須恵器	杯A		8世紀中頃	口径:16.0(1/8)		外面:ナデ	N/ 灰		
172	858	1088 (A2)	第4面	354土坑	須恵器	甕		8世紀後半か	口径:26.2(2/7) 器高:4. 3~6.6		外面:△カケズリ(砂へ) 内面:指揮ナ デ	N/ 灰		
173	859	1088 (A2)	第4面	431土坑	須恵器	杯A		8世紀前半	口径:23.0(1/7)		外面:部分的に△カケズリ、△カケズリ 後(砂へ)一部ラミガキ 内面:ハケ 状ナデ	7.5M/7.1 白 灰		
173	860	95 (A2)	第5面	504土坑	須恵器	杯D直		8世紀中頃	口径:17.6(3/4) つまり 径:3.0 基高:3.4		内面:ナデ	7.5M/6.1 灰	口縁部分が み有り	
173	861	95 (A2)	第5面	504土坑	須恵器	杯B		8世紀中頃	口径:14.6(1/10) 基台径: 10.4(2/7) 基高:3.9		外面:△カケズリ、△カケズリ 内面:ナデ	N/ 灰		
173	862	10区 (A2)	第5面	504土坑	須恵器	杯B		8世紀前半	口径:26.2(2/7) 口縁直下 径:25.0(1/6)		片口 外面:△カケズリ(砂へ) 内面:回 転ナギ	N/ 灰		
173	863	10区 (A2)	第5面	685土坑	土師器	甕C		8世紀中頃	口径:17.0(1/11) 器高:3.1		外面:ナデ 内面:摩滅	10M/8.4 淡黄褐		
173	864	10区 (A2)	第4面	329甕	土師器	杯A		8世紀中頃	口径:19.0(1/9) 器高:2.8		外面:摩滅 内面:放射状縦文	S/6.6/4 にぶ い壁		
173	865	10区 (A2)	第4面	329甕	土師器	杯A		8世紀中頃	口径:20.1(1/4) 器高:4.0		外面:指揮ナデ(△カケズリ) 内面: 摩滅(△カケズリ)	10M/7.6 種		
173	866	10区 (A2)	第4面	329甕	土師器	甕A		8世紀中頃	口径:15.0(1/7)		外面:ナデ 内面:放射状縦文	10M/7.3 にぶ い壁		

掲載遺物観察表 (23)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm) (□内は復元率)	調査等(ヨコナガ、引脚ナダは否否)(砂・土、ラケズリで砂が剥いた方向を示す)	外面色調	備考
173	667	96	10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	皿A	8世紀中頃	口径: 22.6(1/2倍) 器高: 2.8	外面: 深縁、旋脚状縄文 内面: 指押えナダ?	5978/7/2 にぶい 黄碧	
173	668		10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	皿B	8世紀中頃	口径: 30.6(若干のみ) 高台往: 26.0(1/8) 器高: 2.6	外面: ラケズリ 内面: 旋脚状縄文	5978/4 にぶい 緑	
173	669	96	10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	蓋C	8世紀	口径: 11.0(5.6)	外面: 摩減、脚附面取り(8面) 内面: 海藻	5978/7/4 にぶい 黄碧	
173	870		10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	蓋D	8世紀	口径: 25.0(1/10)	外面: 平行タタキ、ナデ傷一部ハケメ 内面: 合心円文也て具痕有ハケメ	2.597/2 灰白	
173	871		10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	蓋E	8世紀中頃	口径: 12.0(若干のみ) 高台往: 8.1(1.7) 器高: 3.8	外面: ハケメ、スス深くくき巻 内面: ハケメ、モクシ	2.597/2 反灰 5978/5/3 反灰	
173	872		10区(A.2)	第4面	329溝	土師器	蓋F	8世紀	口径: 11.6(1/4)	外面: ナダ? 既削に一筋入ス付巻 内面: ハケメ、ナダ?	5978/6/4 にぶい 黄碧	
173	873	96	10区(A.2)	第4面	329溝	須恵器	壺G	6世紀末~7世紀初	口径: 12.1(4倍) つまみ紐: 2.4 器高: 3.6	外面: 回転ラケズリ? 一部自然釉付帯、溶着あり 内面: ナダ?	5978/1 灰白	
173	874		10区(A.2)	第4面	329溝	須恵器	杯H	8世紀後半	口径: 16.0(1/4倍)	外面: ラケズリ? 内面: ナダ	5978/1 灰	
173	875		10区(A.2)	第4面	329溝	須恵器	杯I	8世紀後半	高台往: 11.6(1/2倍)	外面: ラケズリ 内面: ナダ	5978/1 反	
173	876		10区(A.2)	第4面	329溝	須恵器	杯J	8世紀末	口径: 12.0(若干のみ) 高台往: 8.1(1.7) 器高: 3.8	内面: ナダ	5978/1 灰	
173	877		10区(A.2)	第4面	329溝	須恵器	蓋K	8世紀後半	口径: 22.0(1/9)	外面: 蓋目?	5978/1	
173	878	102	10区(A.2)	第4面	329溝	金属製品	不明鉄製品	現長: (体体: 6.3 鎌幅: (本体: 6.0 厚: 0.6) × 6	外面: ハケメ 内面: ハケメ	5978/6 陸		
173	879	102	10区(A.2)	第4面	329溝	金属製品	不明鉄製品	現長: (体体: 12.2 鎌幅: (本体: 9.2-2.2 厚: 0.6) × 3.2)	外面: ハケメ 内面: ハケメ	5978/4 にぶい 黄碧		
174	880		10区(A.2)	第5面	457溝	須恵器	壺C?	8世紀中頃	口径: 6.0(1/5)	外面: ハケズリ 内面: ナダ?	5978/1 反	
174	881		10区(A.2)	第5面	464溝	土師器	杯D	8世紀後半	高台往: 16.0(1/8)	外面: 摩減(ナダ?) 内面: 摩減	5978/6 陸	
174	882		10区(A.2)	第5面	482溝	土師器	蓋E	8世紀中頃	口径: 26.0(1/10)	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/4 にぶい 黄碧	
174	883		10区(A.2)	第5面	508溝	土師器	瓶F	8世紀後半か	口径: 24.0(1/13)	外面: ハケメ 内面: ハケメ	5978/1 灰白	
174	884		10区(A.2)	第5面	600溝	土師器	高杯G	8世紀後半	口径: 26.0(1/11)	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/4 にぶい 赤場	
174	885		10区(A.2)	第5面	600溝	土師器	壺H	8世紀後半か	口径: 18.0(1/9)	外面: ハケメ 内面: 摩減	5978/7/3 にぶい 黄碧	
174	886		10区(A.2)	第5面	600溝	土師器	杯I	8世紀後半	口径: 24.0(1/9)	内面: スス付巻	5978/6/4 にぶい 黄碧	
174	887		10区(A.2)	第5面	600溝	須恵器	杯J	8世紀中頃	口径: 16.3(1/7) つまみ紐: 2.9(空) 蓋高: 1.9	内面: 摩減	5978/1 灰白	
174	888		10区(A.2)	第5面	600溝	須恵器	蓋K	8世紀中頃	口径: 10.1(1/7)	外面: ナダ? ハケズリ? ナダ 内面: ナダ?	5978/1 灰白	
174	889	95	10区(A.2)	第5面	538溝も込み	土師器	壺Aか小型壺	8世紀中頃	口径: 若干のみ 大體部径: 11.4(1/4)	外面: ハケズリ 内面: ナダ? 、把手手付巻: 2.8付巻 内面: ナダ?	5978/4 にぶい 黄碧 10978/3/にぶい 黄碧	
174	890		10区(A.2)	第5面	538溝も込み	土師器	蓋L	8世紀後半か	口径: 16.0(1/10) 体部下部: 15.0(1/6)	外面: タタキ之後ハケメ、薄くスス付巻 内面: ハケズリ? ナダ? 手付巻: 2.8付巻	5978/6/4 にぶい 黄碧	
172	891		10区(A.2)	第5面	538溝も込み	須恵器	鋸M	8世紀中頃	口径: 18.0(1/12) 高台往: 10.0(1/6) 器高: 8.0	内面: ナダ	5978/1 灰白	
164	892		10区(A.2)	第5面	538溝も込み	須恵器	壺A	8世紀中頃	口径: 15.0(1/7) つまみ紐: 2.4	外面: 自然釉付巻	5978/1 反	
163	893		10区(A.2)	第5面	538溝も込み	須恵器	壺A	8世紀中頃	口径: 14.6(1/4倍)	外面: ヘラナダ? 内面: ナダ?	5978/1 灰	
174	894		10区(A.2)	第4面	296土器群	土師器	杯N	8世紀後半	つまみ紐: 2.2(完)	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/4 にぶい 黄碧	
174	895	96	10区(A.2)	第4面	296土器群	土師器	高杯O	8世紀後半	脚附部斜: 13.3(1/2)	脚土組巻上げ形 制外脚附面取り(9面) 内面: 摩減 内面: 足跡	5978/7/4 にぶい 黄碧	
174	896	96	10区(A.2)	第4面	296土器群	土師器	杯P	8世紀後半	口径: 18.1(3/4) 器高: 5.7	外面: 椎坪井之後ヨコマサ? 指押え後へハケズリ? 内面: 指押え1、ナダ?	5978/4 にぶい 黄碧	
174	897		10区(A.2)	第4面	296土器群	土師器	蓋Q	8世紀後半	口径: 25.2(1/10)	外面: ハケメ 内面: 摩減	5978/4 にぶい 黄碧	
174	898		10区(A.2)	第4面	351土器群	土師器	蓋R	8世紀後半	口径: 30.0(1/7)	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/4 にぶい 黄碧	
174	899	96	10区(A.2)	第4面	351土器群	須恵器	蓋S	8世紀後半	口径: 28.0(1/3) 高台往: 20.0(1/3) 器高: 29.0	外面: 平行タタキ、肥厚ナダ? 内面: 合心円文で真赤? 指押えナダ?	5978/4 にぶい 黄碧 7.5978/2 灰白	
174	900		10区(A.2)	第4面	446土器群	土師器	製埴土器	8世紀	体部径: 16.0(1/5)	外面: 指押えナダ? 内面: 指押え後ナダ?	5978/6 陸 10978/4 にぶい 黄碧	
174	901		10区(A.2)	第4面	447土器群	須恵器	杯T	8世紀末	口径: 14.4(1/4) 器高: 4.0	外面: ヘラナダ? 内面: 摩減	5978/1 反	
175	902		10区(A.2)	第4面	土師器	杯U	8世紀前半	口径: 12.0(1/2倍) 器高: 2.0	外面: 椎坪井後一部ヘラケズリ? 内面: 放射状紋章、透鉢織状紋	5978/6/4 にぶい 黄碧		
175	903		10区(A.2)	第4面	土師器	杯V	8世紀中頃	口径: 15.0(1/7) 器高: 2.9	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/6 陸		
175	904		10区(A.2)	第4面	土師器	杯W	8世紀後半	口径: 18.0(1/7)	外面: 摩減 内面: 摩減	10978/3 にぶい 黄碧		
175	905		10区(A.2)	第4面	土師器	蓋X?	8世紀後半	口径: 18.1(1/7) 器高: 2.4	外面: 摩減 内面: 摩減	5978/6 にぶい 黄碧		
175	906		10区(A.2)	第4面	土師器	蓋Y?	8世紀末	口径: 13.0(1/10) 器高: 2.3	外面: 指押えナダ? 摩減 内面: 摩減	5978/7/4 にぶい 黄碧		
175	907		10区(A.2)	第4面	土師器	杯Z	8世紀後半	口径: 20.6(若干のみ)	外面: ヘラナダ? 内面: 摩減	5978/7 にぶい 黄碧		
175	908		10区(A.2)	第4面	土師器	蓋A?	8世紀後半	口径: 11.0(1/10) 器高: 4.0	外面: 椎坪井後一部ヘラケズリ? 内面: 放射状紋章、透鉢織状紋	5978/6 にぶい 黄碧		
175	909		10区(A.2)	第4面	土師器	蓋B?	8世紀中頃	口径: 11.6(1/4)	外面: ハケメ 内面: 摩減、口縁部スス付巻	10978/1 灰灰		

掲載遺物観察表 (24)

登録番号	図書番号	国宝登録番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内は生存率 (砂=2号、ヘラケズリで砂が詰いた 方向を示す)	調整等(ヨコナギ、回転ナギは省略) (砂=2号、ヘラケズリで砂が詰いた 方向を示す)	外面色調	備考
175	910	1088 (A2)		第4層	土師器	壺A	8世紀中頃	口径:30.0(1/7)			外面:ハケメ 内面:ハケメ、板ナデ?	1087/3 にぶい 黄裡	
175	911	1088 (A2)		第4層	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:30.0(1/11)			外面:ハケメ 内面:ハケメ、指押丸後板 ナデ?	1087/4 にぶい 黄裡	
175	912	1088 (A2)		第4層	土師器	瓶?	8世紀か	口径:14.0(若干のみ)			外面:ハケメ 内面:板ナデ、ナデ	1087/3 にぶい 黄裡	
175	913	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:12.2(1/2) 器高:3.3			外面:ヘラ切り 内面:ナデ	NB/ 灰	
175	914	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.1(1/2倍) 器高:3.5			外面:ヘラ切り?	2.5NB/1 灰白	
175	915	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀末	口径:10.0(1/7) 器高:3.6			外面:底未鉢型	NB/ 灰	ゆがみ有り
175	916	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯口壺	8世紀中頃	口径:14.9(1/4倍) つまみ紐 3.0(3倍) 器高:3.9			外面:一部自然輪付 内面:ナデ	NB/ 灰白	ゆがみ有り
175	917	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯口壺	8世紀後半	口径:16.0(1/8)			内面:ナデ	NB/ 灰	
175	918	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯口壺	8世紀末	口径:18.0(1/7)			外面:ナデ 内面:ナデ	NB/ 灰	
175	919	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.3(若干のみ) 高台 底:11.4(1/2) 器高:4.3			外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	976/1 灰	
175	920	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.1(1/6)			外面:ナデ 内面:ナデ	2.5NB/1 黄灰	
175	921	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:17.8(若干のみ) 高台 底:13.0(1/2) 器高:4.9			外面:摩滅 内面:摩滅	976/1 灰白	
175	922	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀末	口径:13.0(1/7) 高台径: 9.9(1/4倍) 器高:3.8			外面:ナデ 高台横円脚か 内面:ナデ	NB/ 灰	
175	923	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯C	8世紀後半	口径:19.0(1/12)				977/1 灰白	
175	924	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯?	8世紀後半か	口径:9.0(1/7)			外面:ナデ	977/1 灰白	
175	925	1088 (A2)		第4層	須恵器	杯?	8世紀後半か	口径:9.6(若干のみ) 深程: 7.6(1/4) 器高:1.7			外面:ヘラ切り?	977/1 灰白	
175	926	1088 (A2)		第4層	須恵器	皿C	8世紀後半	口径:23.0(1/9) 器高:2.6			外面:摩滅 内面:摩滅	NB/ 灰白	
175	927	1088 (A2)		第4層	須恵器	高杯	8世紀後半	底径:9.6(1/5)				NB/ 灰	
175	928	1088 (A2)		第4層	須恵器	皿C	8世紀中頃	口径:9.4(1/14) 横径: 11.0(1/10)				1098/1 滅灰	
175	929	1088 (A2)		第4層	須恵器	皿C	8世紀中頃	最大腹径:10.0(1/6)				NB/ 灰白 M/ 灰	
175	930	1088 (A2)		第4層	須恵器	壺A	8世紀中頃	頭部径:14.0(1/11)			外面:回転ヘラケズリ(砂一)、自然輪一 脚付蓋	NB/ 灰	
175	931	1088 (A2)		第4層	須恵器	壺Q	8世紀後半	横径:24.8(1/6)			外面:回転ヘラケズリ、自然輪付蓋	2.5NB/1 灰白	
175	932	1088 (A2)		第4層	須恵器	平瓶	8世紀後半			外面:ナデ、ヘラケズリ 内面:ヘラケズ リ	NB/ 灰		
175	933	1088 (A2)		第4層	須恵器	壺	8世紀後半か	口径:24.0(1/6)			外面:平行タタキ 内面:同心内文皆て真 直	NB/ 灰	
175	934	1088 (A2)		第4層	須恵器	壺	8世紀か	口径:26.0(1/7)				977/灰白	
175	935	93	1088 (A2)	第4層	土製品	転用円板		径:3.1			外面:摩滅 内面:ハケメ	1087/2 にぶい 黄裡	
175	936	1088 (A2)		第4層	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:2.0			凸面:ナデ 四面:布目痕後板ナデ	7.5NB/2 にぶい 黄裡	
176	937	11区	第3層下部	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.0(1/5) 深程: 8.6(1/3)				外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	977/1 灰白	
176	938	101	11区	第3層以下	石製品	硯石		横長:11.5 橫幅:10.3 深程: 2.3					
176	939	11区	第4層	291ピット	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:20.0(1/9) 器高:3.6			外面:摩滅 内面:スス付蓋 内面:放射状 縞文、薄くスス付蓋、摩滅	1096/6 紙	
176	940	96	11区	第4層	277土块	磁器	鹿児島青高 錦文小鏡片	12世紀か			1788 外面:施釉 内面:施釉	1086/2 才方 リーフ	
176	941	11区	第4層	279溝	須恵器	杯口壺	8世紀前半	口径:20.6(1/4倍)			外面:ヘラナデ?	NB/ 灰	
176	942	11区	第4層	279溝	土師器	製陶土器	8世紀			外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	NB/ 灰		
176	943	96	11区	第4層上部	瓦	軒丸瓦	12~13世紀	高台径:1.0 外縁高:1.3				977/1 灰白	
176	944	96	11区	第4層	磁器	白磁碗	10世紀後半~ 11世紀中頃か	高台径:7.0(1/4倍)		X 11腰か 外面:施釉(迄部露胎)、高台 堆塑模様 内面:施釉	7.5NB/1 灰白		
176	945	96	11区	第4層	新羅系土器		7~8世紀			外面:糸文1、竹葉文、糸文? 1 内 面:ナデ	NB/ 灰		
176	946	11区	第4層	土師器	杯A	8世紀前半	口径:20.0(1/7) 器高:3.8			外面:削離 内面:放射状縞文、削離	7.5NB/6 紙		
176	947	11区	第4層	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.0(2/4) 器高:3.4			外面:ヘラ切り 内面:ナデ	NB/ NS/ 灰		
176	948	11区	第4層	須恵器	杯口壺	8世紀前半	口径:18.0(1/4) つまみ紐: 2.8(3/4) 器高:3.2			外面:ヘラケズリ(砂一)、広かぶり、つ まみ紐に施釉あり 内面:ナデ	2.5NB/3 滅黄		

掲載遺物観察表 (25)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm)	内面は複数面ある場合は(砂→)、ラクケズリで砂が剥いた方向を示す)	調査者(ヨコナガ、田村ナデ(有香))	外面色調	備考
176	949	11区		第4層	須恵器	皿C	8世紀前半	口径:19.6(1/1) 底径:15.6(0.7) 器高:2.4	外面:ヘラケズリ(砂→) 内面:ナデ	97/1 白灰			
176	950	11区		第4層	須恵器	盤	8世紀後半	口径:24.6(1/1)			N/	灰	
176	951	11区		第4層	須恵器	縁	6世紀後半		出土復元、内面:波文(6面)、沈綾文1、凸縁1 内面:施り目	97/1 白灰			
176	952	11区		第4層	灰陶器	縁	10世紀前半		外面:ヘラケズリ、施釉 内面:施釉	97/1 白灰、97/3 淩黄			
176	953	11区		第4層	土師器	製塙土器	8世紀後半か		外面:指揮えナデ 内面:布目底	97/1/3 にぶい 黄緑			
176	954	11区		第4層	土師器	製塙土器	8世紀後半か		外面:摩減 内面:底減	97/1/2 にぶい 黄緑			
176	955	11区		第4層下部	須恵器	小型壺?	9世紀か		外面:ナデ 内面:施り目後回転ナデ、ナデ	97/1 白灰			
176	956	11区	第5面	377ピット	土師器	皿	10世紀後半か	口径:11.0(1/1) 器高:1.6	外面:指揮えナデ 内面:摩減	97/1/4 淩黄			
176	957	11区	第5面	377ピット	土師器	縁	10世紀後半か	口径:15.0(者かの内) 高台径:6.8(3.5)	出土復元、内面:摩減(一部へうるガキ剥き) 内面:摩減	97/1/4 亂斑、97/1/1 摧灰			
176	958	11区	第5面	527ピット	土師器	鉢	8世紀中頃	口径:18.0(1/1)			97/1 白灰		
176	959	11区	第5面	529ピット	土師器	鉢	8世紀	内径:21.0(1/1)	外面:摩減 内面:摩減	97/1/6 明治褐			
176	960	11区	第5面	566土坑	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:13.0(1/1) 器高:2.3	外面:摩減 内面:摩減	97/6/2 亂斑			
176	961	11区	第5層	土師器	小皿	10世紀末か	口径:10.0(1/1)		天字状 外面:指揮えナデ	2.57/2 白灰			
176	962	11区	第5層	黒色土器A型	杯	9世紀中頃か	口径:10.0(1/1)		外面:摩減 内面:ヘラミガキ後一部削え	2.57/2 淩黄			
176	963	97	11区	第5層	黒色土器B型	縁	10世紀後半か	口径:14.5(0.7) 高台径:7.5 器高:5.4	外面:摩減、底邊指揮えナデ 内面:波綾	N/	椿桂		
176	964	11区	第5層	土師器	高杯	9世紀前半か		口径:32.0(1/12)	外面:摩減	97/7/4 にぶい 黄緑			
176	965	11区	第5層	須恵器	鉢	6世紀末~7世紀初頭	口径:12.0(者かの内) 受部削え 9世紀初頭	口径:12.8(1.0) 器高:4	外面:ヘラケズリ(砂→)	2.57/1 白灰			
176	966	97	11区	第5層	須恵器	杯BA蓋	8世紀後半	口径:12.9(0.7) 重み:2.8 2.8(克) 器高:1.2	外面:回転ヘラケズリ(砂→)	N/	灰		
176	967	11区	第5層	須恵器	杯白蓋	8世紀後半	口径:14.0(1.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	N/	灰			
176	968	97	11区	第5層	須恵器	杯白	8世紀末	口径:14.3(0.7) 高台径: 10.1(克) 器高:4.7~5.3	外面:回転ナデ後ナデ	97/7~1/5 青 全体的に焼 け茶色			
176	969	11区	第5層	須恵器	壺	8世紀後半	口径:13.0(1/5)		外面:指揮えナデ、底部にヘラ記号あり 内面:ナデ	N/	灰		
177	970	11区	第5層	須恵器	壺B	8世紀末	口径:25.0(1/1)		外面:平行タキナ?後ナデ 内面:同心円	N/	灰		
177	971	11区	第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.8		天文式 平行タキナ?	N/			
177	972	11区	第6面	置立柱建物1 (379ピット)	房土支石 轍	背V-1 庭内	庭面:5.1(2.4)		上面:綱目タキナ 回面:布目底後ナデ	97/5/1 白 2.57/6 亂斑			
177	973	97	11区	第6面	置立柱建物3 (320ピット)	須恵器	台付長縁壺	8世紀前半~中頃	高台径:10.0(完)	外面:盤部斜線1、肩部斜線1、回転ヘラケズリ(砂→)、底部ヘラケズリ(砂→) 98/4(西瀬者井)、98/5(西瀬者井)、98/6(西瀬者井)、98/7(オーリーフ葉)			
177	974	11区	第6面	置立柱建物3 (320ピット)	須恵器	皿A	8世紀前半~中頃	口径:21.0(1/4) 器高:2.0	外面:回転ヘラケズリ(砂→) 内面:ナデ	97/1 白灰			
177	975	11区	第6面	置立柱建物3 (320ピット)	須恵器	壺A	8世紀前半~中頃	口径:11.4(1/4)	外面:盤部斜線1、肩部斜線1、自然駄付窓、細い縫のヘラケズリ後ナデ 97/1	7.57/1 白、N/	継綻		
177	976	11区	第6面	528ピット	須恵器	杯白壺	8世紀後半	口径:15.0(1/4) 重み:2.4 3.2(克) 器高:2.4	外面:回転ヘラケズリ(砂→) 内面:ナデ	N/	灰		
177	977	11区	第6面	529ピット	須恵器	壺	8世紀末か	口径:21.0(1/2)	外面:平行タキナ?後ナデ 内面:同心円 天文式 平行タキナ?	N/	灰		
177	978	11区	第6面	605ピット	須恵器	壺A	8世紀後半	口径:16.0(1/6) 重み:2.6 2.6(克) 器高:1.3	内面:ナデ	N/	灰		
177	979	11区	第6面	605ピット	土師器	製塙土器	8世紀		外面:指揮えナデ 内面:指揮えナデ	7.57/6/4 にぶい 黄緑			
177	980	11区	第6面	606ピット	須恵器	杯白壺	8世紀中頃	口径:14.2(1/4)	外面:回転ヘラケズリ 同面:回転ナデ ナデ	98/1~5/1 青 108/1/1 細綻			
177	981	11区	第6面	606ピット	須恵器	杯白壺	8世紀中頃	口径:14.6(1/10)	外面:回転ヘラケズリ 同面:回転ナデ ナデ	98/1~5/1 青			
177	982	11区	第6面	840ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7 底面幅:2.0	上面:綱目タキナ 回面:布目底	2.57/2 白灰、 98/2/6 亂斑			
177	983	11区	第6面	844ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7	上面:綱目タキナ 回面:布目底	N/	反白		
177	984	11区	第6面	674土坑	須恵器	杯白壺	8世紀末	口径:15.5(1/7)	外面:ナデ	N/	灰		
177	985	11区	第6面	674土坑	須恵器	杯B	8世紀末	高台径:9.0(1/3)	外面:ナデ 内面:ナデ	N/	灰		
177	986	11区	第6面	674土坑	須恵器	壺	8世紀末	高台径:9.0(1/2)	外面:ナデ	N/	灰		
177	987	11区	第6面	674土坑	須恵器	壺	8世紀後半	口径:18.0(1/4)	外面:平行タキナ 内面:同心円文當て 儀	N/	灰 107/1 摧灰		
178	988	99	11区	第6面	674土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	広面面幅:17.5 底面幅:1.4 扶助面幅:12.7 扶助面幅:1.3 側面幅:1.6	同面:凸面 縦目タキナ後ナデ 同面:布目底	2.57/2 白灰		
178	989	99	11区	第6面	674土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.3	無凹面:凸面 縦目タキナ(底面):凹面 布目底:1.6	7.57/2 白灰		
178	990	102	11区	第6面	674土坑	金屬製品	不明	長さ(本体):4.7 残長(本:6.7 重:0.6~0.7)					
178	991	11区	第6面	803土坑	須恵器	杯	6世紀末~7世紀初頭	口径:14.0(1/14)			N/	灰	
178	992	11区	第6面	426墓	須恵器	杯白壺	8世紀後半	口径:18.0(1/5)	外面:ナデ	N/	反白		

掲載遺物観察表 (26)

登録番号	図書番号	国宝・重要文化財番号	地区	遺構面	遺様・層名	種類	器種	時期	法量(cm)	()内は保存率	調査等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂・土・ラクマリで砂が詰いたい方向を示す)	外面部調	備考
178 993	11区	第6面	652溝	土師器	鉢	8世紀	口径:41.4(1/7)	外面: 前いハケメ(4重/cn)、スヌ付唇 内面: 前いハケメ後ヨコナデ、ナデ、押えナデ	7.5MBS/2 底浅				
178 994	11区	第6面	652溝	消済器	杯口壺	8世紀末か	口径:16.2(1/4)	外面: ナデ 内面: ナデ	NS/ 反				
178 995	11区	第6面	802溝	消済器	杯A	8世紀前半	口径:17.0(1/8) 高さ:4.2	外面: 前いハケメ(砂 1)	5M/1 反				
179 996	12区	第6面	802溝	消済器	壺C?	8世紀前半	高台径:7.0(1/3)	外面: 沈没の跡化した凹みへラケメ	NS/ 反				
179 997	12区	第2層 最下部	磁器	白磁碗	12世紀前半か		V2a型か 外面: 斜脚 内面: 斜脚	517/2 底白					
179 998	12区	第2層 最下部	磁器	白磁碗	12世紀後半か		壁I-37型 両面 押輪 内面: 斜脚	1019/1 底白					
179 999	12区	第2層 最下部	磁器	白磁碗	12世紀		笠形 外面: 斜脚(真入あり) 内面: 斜脚(真入あり)	2.5M/2 底白					
179 1000	12区	第2層 最下部	磁器	白磁碗	12世紀後半か		IV10型 外面: 斜脚 内面: 斜脚	NS/ 灰白					
179 1001	12区	第2層 最下部	瓦器	瓶	12世紀末~13世紀初頭	口径:15.2(1/7) 高台径:6.4(重千の手) 高さ:4.7	楕円型 外面: 摩擦 内面: 沈線1、岸底	NS/ 反					
179 1002	12区	第2層 最下部	土師器	羽量	12世紀か	口径:26.0(1/5)	外面: 摩擦 内面: 摩擦	1019/7/3 にぶい 黄裡					
179 1003	12区	第2層 最下部	瓦質土器	浅脚か	14~15世紀か		外面: スタンプ(菊花文) 内面: ナデ	NS/ 反					
179 1004	12区	第2層 最下部	灰陶器	瓶	9世紀後半か	高台径:6.0(1/7) 真台基部 径:6.0(1/4)	外面: 高台一部斜脚 内面: 踵く施跡、重ね模様あり	NS/ 灰白					
179 1005	12区	第3面	33溝	消済器	杯A	8世紀末	口径:11.0(1/6) 高さ:2.7	外面: 底面未調査	NS/ 灰				
179 1006	12区	第3面	48土坑	土師器	瓶A	8世紀後半~中頃	口径:31.8(1/12)	外面: ハケメ 内面: ナデ	1019/7/4 にぶい 黄裡 5M/7/4 にぶい 黄裡				
179 1007	12区	第3面	48土坑	消済器	壺Q	8世紀後半~中頃	高台内径:7.7(一部欠け) 横径:16.2(1/7)	外面: 田舎へラケメ(砂 1)、底部にへら記号あり 内面: ナデ	NS/ 反? 底白				
179 1008 102	12区	第3面	石器	石器	縄文=1生	現長: 2.9 現幅: 2.2 現厚: 0.4	サスクイド 固式	NS/ 灰					
179 1009	12区	第3面	消済器	杯B	8世紀	口径:15.0(1/6)							
179 1010	12区	第3面	消済器	杯B	8世紀末	高台径:11.0(1/4)	外面: ナデ、底部にへら底あり 内面: ナデ	7.5M/1 底白					
179 1011	12区	第3面	89号穴建物	土師器	杯A	8世紀中期	横径:14.0(1/3) 高台基部径: 8.8~10.0(1/4)	外面: ナデ 内面: ナデ	NS/ 反				
179 1012	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯A	8世紀中期	口径:16.0(1/6)	外面: 摩擦 内面: ナデ?	5M/6 種				
179 1013	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯A	8世紀中期	口径:20.0(1/7) 高さ:3.4	外面: 指えナデ後へラケメ(内面: 放射状模様、透結構状模様)	7.5M/7/6 横				
179 1014	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯C	8世紀中期	口径:18.0(1/11) 高さ:2.8	外面: 傷くヌ?テ青、底部岸底 内面: 放射状模様、透結構岸底	5M/4 にぶい 黄裡				
179 1015	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯C	8世紀中期	口径:18.2(1/4) 高さ:2.7	外面: ヨコナデ一部ラミガキ、へらケメ? 内面: 透結構岸底	5M/6 種				
179 1016	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯B	8世紀中期	口径:15.2(若干の手) 高さ:2.3 横径:12.0(1/7) 厚さ: 3.3	外面: 岸底(一部へらガキ残存) 内面: 放射状模様	5M/6 種				
179 1017	12区	第4面	89号穴建物	土師器	壺C	8世紀中期	口径:13.0(1/5)	外面: 摩擦 内面: 沈線1、岸底、工具痕あり	5M/6 種				
179 1018	12区	第4面	89号穴建物	土師器	高杯	8世紀中期	口径:30.0(1/7)	外面: ヘラミガキ 内面: 摩擦	5M/6 種 1019/7/3 にぶい 黄裡				
179 1019	12区	第4面	89号穴建物	土師器	杯B	8世紀中期	口径:16.0(1/8)	外面: ヘラミガキ 内面: 摩擦	7.5M/7/4 にぶい 黄裡				
179 1020	12区	第4面	89号穴建物	土師器	妻A	8世紀中期	口径:26.0(1/10)	外面: スス一部付唇	1019/7/4 にぶい 黄裡				
179 1021	12区	第4面	89号穴建物	消済器	杯B	8世紀中期	口径:12.4(1/5) つまみ棒: 2.1(約) 基本: 2.2	内面: ナデ	NS/ 反				
179 1022	12区	第4面	89号穴建物	消済器	杯B	8世紀中期	口径:15.4(1/6)	外面: ヘラナデ? 内面: ナデ	NS/ 反				
179 1023	12区	第4面	89号穴建物	消済器	杯B	8世紀中期	口径:17.8(1/3) 高さ: 3.5	外面: 底面にへら記号あり	NS/ 反				
179 1024	12区	第4面	89号穴建物	土師器	製造土器	8世紀	口径:13.0(1/7)	外面: 指押えナデ 内面: ナデ	7.5M/7/6 横				
179 1025	12区	第4面	89号穴建物	土師器	製造土器	8世紀	口径:13.8(1/7)	外面: 指えナデ 内面: 指押えナデ	5M/4 にぶい 黄裡				
179 1026	12区	第4面	89号穴建物	瓦	丸瓦	8~9世紀	広幅側面縁: 14.6 広幅側面縁: 1.5 側面縁: 2.2	有段式、凸面、摩擦、ナデか 内面: 布目痕	M/1 底白、M/6 反				
180 1027 97	12区	第4面	獨立柱建物2 (153 ピット)	磁器	白磁碗	12世紀第4 半期か	高台径: 6.0(1/2)	V1aから 外面: 口沿のなる丸筒のよう なものへら、ヘラケメ、施跡(真入り)、 高台端部擦痕 内面: 黒縫1、施跡(真入り)	2.5M/2 底白 (M/5B/2 底白)				
180 1028	12区	第4面	獨立柱建物2 (176 ピット)	土師器	小皿	12世紀後半か	口径: 9.0(1/4) 高さ: 1.6	外面: 指押えナデ、摩擦 内面: 摩擦	1019/8/3 浅黄裡				
180 1029	12区	第4面	獨立柱建物2 (176 ピット)	土師器	小皿	12世紀後半か	口径: 9.0(1/5)	外面: 摩擦(指押えナデ) 内面: 摩擦	2.5M/3 底黄				
180 1030	12区	第4面	獨立柱建物2 (226 ピット)	土師器	皿	12世紀後半か	口径: 15.6(1/4)	外面: 指押えナデ 内面: 摩擦	1019/6/4 にぶい 黄裡				
180 1031	12区	第4面	獨立柱建物2 (226 ピット)	瓦器	瓶	12世紀後半か	口径: 15.0(1/3)	楕円型 外面: 摩擦 内面: 沈線1、摩擦	1019/1 底白				
180 1032 99	12区	第4面	獨立柱建物2 (226 ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	側面縁: 1.7 底面縁: 1.9	凸面: 縞目タキ 凹面: 布目底	7.5M/1 底白				
180 1033 100	12区	第4面	獨立柱建物2 (226 ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	広幅側面縁: 2.0 底面縁: 2.1 側面縁: 1.7	凸面: 縞目タキ 凹面: 布目底後一部板 ナデ	7.5M/1 底白				
180 1034	12区	第4面	57 ピット	消済器	杯A	8世紀末~9世 紀初期か	口径: 11.2(1/4) 高さ: 3.2	外面: ヘラ切	7.5M/1 底白				
180 1035	12区	第4面	57 ピット	消済器	杯B	8世紀末	口径: 16.0(1/11) 高さ: 4.1			2.5M/3 浅黄	生焼け		
180 1036	12区	第4面	72 ピット	消済器	杯A	8世紀末	口径: 9.4(1/40)	外面: ナデ、ヘラ切 内面: ナデ	NS/ 反				

掲載遺物観察表 (27)

博物館番号	因番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・形名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は保存率 合/本体×0.4 度/0.4	調査等(ヨコナタ/回転ナダは否否) (秒/度) ハラケグリで秒が割いた 方向を示す)	外面色調	備考
180	1037	102	12区	第4面	72ビット	金銀製	表釘?		表長:1.1 底幅: (ヤツ 合)0.5(本体×0.4 度. 0.4			
180	1038		12区	第4面	124ビット	土師器	皿	11世紀後半～ 12世紀初頭か	高台径: 8.4(1/2) 器高: 1.5	外面: 摩滅 内面: 摩滅	10PR/2 淡黄褐	
180	1039		12区	第4面	125ビット	瓦器	小皿	11世紀前半か	口径: 10.0(1/0) 器高: 1.5	外面: 摩滅、スス付唇 内面: 摩滅、スス付唇	N/ 灰灰	
180	1040		12区	第4面	126ビット	瓦器	楕	12世紀か	口径: 16.0(1/4) 器高: 1.5	大和型か 外面: 摩滅 内面: 沈線1,摩滅	7.5Y4/1 灰	
180	1041		12区	第4面	130ビット	土師器	小皿	11世紀か	口径: 8.0(1/4) 器高: 1.5	外面: 摩滅、指揮えナダ 内面: 摩滅	7.5Y8/4 浅黄褐	
180	1042		12区	第4面	150ビット	土師器	皿	11世紀後半～ 12世紀初頭か	高台径: 6.6(1/2) 器高: 2.3	外面: ナダ? 内面: ナダ?	2.5Y7/3 淡黄	
180	1043		12区	第4面	174ビット	土師器	皿	12世紀の半か	口径: 14.5(1/1) 器高: 2.3 5.8(1/1) 器高: 5.8	外面: 摩滅 内面: 摩滅	2.5Y7/3 淡黄	
180	1044		12区	第4面	174ビット	五器	楕	12世紀	口径: 14.8(1/1) 高台径: 12.5(1/1) 器高: 2.3	椭圆形 外面: 摩滅 内面: 沈線1,摩滅	7.5Y6/1 灰	
180	1045	97	12区	第4面	179ビット	磁器	白磁碗	12世紀中～ 13世紀前半か	口径: 15.0(1/0) 器高: 2.0	W318類 外面: 指揮え(黄入りあり) 内面: 沈線1,施釉	9Y8/2 灰白	
180	1046		12区	第4面	211ビット	瓦器	楕	12世紀前半か	口径: 16.0(1/1)	椭圆形 外面: 摩滅 内面: 沈線1,摩滅	7.5Y4/1 灰	
180	1047		12区	第4面	217ビット	土師器	皿	12世紀後半か	口径: 15.0(1/1) 器高: 2.0	外面: 指揮えナダ、摩滅 内面: 摩滅	7.5Y7/6 棕	
180	1048		12区	第4面	235ビット	瓦器	小皿	12世紀後半か	口径: 11.0(1/5) 器高: 1.6	外面: 摩滅 内面: 摩滅	10Y5/1 灰	
181	1049	97	12区	第4面	249ビット	磁器	白磁碗	12世紀後4年半 期	口径: 16.0(1/1) 器高:	W41類 外面: 施釉(黄入りあり) 内面: 沈線1,施釉(黄入りあり)	7.5Y7/2 灰白	
181	1050	102	12区	第4面	249ビット	石製品	砾石	横長	4.8 横幅: 4.2 厚さ: 2.9	越尻岩 磨石3		
181	1051		12区	第4面	277ビット	土師器	蓋 C	8世紀	口径: 24.0(1/5)	外面: ハクメル 摩滅 内面: 摩滅	7.5Y7/6 棕	
181	1052		12区	第4面	279ビット	瓦	平瓦	8世紀		上面: 楕子状タキ 回転面: 布目底(凸凹 あり)	7.5Y6/6 棕	
181	1053		12区	第4面	289ビット	須恵器	甕	8世紀後半か	口径: 22.0(1/9)	内面: 自然釉付唇	9Y6/1 灰	
181	1054	97	12区	第4面	305土坑	磁器	白磁碗	12世紀後半～ 13世紀前半か	口径: 15.0(1/1) 器高: 2.0	青磁 外面: 指揮え(黄入りあり) 内面: 沈線1, 施釉(黄入りあり)	9Y7/2 灰白	
181	1055	97	12区	第4面	305土坑	磁器	白磁碗	12世紀後半か	口径: 14.0(1/6)	X31類 外面: 回転ヘケタジ、施釉 内面: 太い施釉(施釉1,施釉	2.5Y8/1, 5Y8/1 灰白	
181	1056	97	12区	第4面	305土坑	磁器	白磁碗	12世紀後半か	口径: 14.0(1/6)	V18類 外面: へうきぼき、施釉 内面: 施 釉	9Y7/2 灰白	
181	1057	97	12区	第4面	305土坑	磁器	白磁碗	12世紀第4年半 期		IV2類 外面: 薄い施釉 内面: 薄い施釉	9Y7/2 灰白	
181	1058		12区	第4面	305土坑	灰陶陶器	小皿	12世紀前半か	高台径: 4.2(1/4)	内面: 施釉	2.5Y8/1 灰白	
181	1059		12区	第4面	85土坑か	土師器	小皿	11世紀後半か	口径: 8.4(1/6) 器高: 0.9	T字状 外面: 指揮えナダ 内面: ナダ	10PR/4 淡黄褐	
181	1060	97	12区	第4面	85土坑	瓦器	楕	12世紀後半	口径: 15.0(1/1)	種茎型 外面: 指揮え 内面: 沈線1,へう ミガキ	N5/ 灰	
181	1061	97	12区	第4面	85土坑	瓦器	楕	12世紀後半か	口径: 9.5(1/6)	外面: 摩滅 内面: 摩滅、平行線状維文	M5/ 灰	
181	1062		12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8～9世紀	口径: 8.0(1/6)	外面: 緋目タキ 回転面: 布目底	5Y7/1 灰白	
181	1063		12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8～9世紀	口径: 8.0(1/6)	外面: 緋目タキ後板ナダ 回転面: 布目底 後一部ナダ、指揮え	M5/ 灰	
181	1064	100	12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8～9世紀	口径: 8.0(1/6)	外面: 緋目タキタキナダ 回転面: 布目底、 布目底小くタキ?	9Y6/1 灰	
181	1065		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8～9世紀	口径: 2.5(1/2) 侧倒幅: 2.0	外面: 緋目タキ 回転面: ナダ、布目底後 一部断ナダ	2.5Y8/1 灰白	
181	1066	100	12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8～9世紀		外面: 緋目タキ 回転面: 布ナダ、布目底	9Y6/1 灰白	
182	1067		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8～9世紀	口径: 2.5(1/4) 侧倒幅: 1.4	外面: 緋目タキ 回転面: 布目底(摩滅)	2.5Y8/1 灰白	
182	1068		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8～9世紀	口径: 2.5(1/4) 侧倒幅: 1.4	外面: 緋目タキ 回転面: 布目底(摩滅) 後一部ナダ	2.5Y7/1 灰白	
182	1069		12区	第4面	85土坑	須恵器	杯 A	8世紀中頃	口径: 12.4(1/6) 高度: 9.2 器高: 3.4	外面: ヘラ切り 内面: ナダ	2.5Y7/3 淡黄 生焼け	
182	1070		12区	第4面	85土坑	須恵器	杯 B 盒	8世紀中頃	口径: 18.0(1/5)	内面: ナダ	M5/ 灰	
182	1071		12区	第4面	85土坑	須恵器	杯 C	8世紀中頃	口径: 16.4(1/5) 器高: 5.0	外面: ナダ、へう切りかへラナダ 内面: 沈線1,回転ナダナダ?	M5/ 灰	
182	1072		12区	第4面	85土坑	須恵器	蓋 Q	8世紀後半	口径: 17.0(1/2) 厚	外面: 自然釉付唇	9Y7/1 灰白 S5Y6/2 灰灰 リープ	
182	1073	12区	第4面	90土坑	土師器	杯 A	8世紀後半	口径: 13.0(1/6) 器高: 3.8	外面: 摩滅 内面: 摩滅	7.5Y8/6 棕		
182	1074	12区	第4面	90土坑	須恵器	杯 B 盒	8世紀後半	口径: 17.0(1/6)	外面: 回転ヘラナダ?	M5/ 灰白		
182	1075	97	12区	第4面	90土坑	須恵器	杯 B 盒	8世紀後半	口径: 18.2(2/5) つまみ紐: 2.7(1/6) 厚	内面: ナダ	9Y7/1 灰白	
182	1076	100	12区	第4面	76土坑	瓦	丸瓦	8世紀初期	側倒幅: 1.4 狹幅厚: 1.3	無鉄系 凸面 ナダ 四面: 布目底	2.5Y3/1 オリーブ 黒	
183	1077	12区	第4面	76土坑	瓦	平瓦	8世紀初期	側倒幅: 1.0 例倒幅: 1.3	凸面: ナダ一部接合状タキ 四面: 布目底 後後一部分ナダ、巻き筋の痕跡あり	2.5Y3/1 オリーブ 黒		
183	1078	100	12区	第4面	76土坑	瓦	平瓦	8世紀初期	側倒幅: 1.4 狹幅厚: 1.0	凸面: 摩滅、一部接合状タキ 四面: 布目底、 巻き筋の痕跡あり	2.5Y4/1 灰	
183	1079	100	12区	第4面	76土坑	瓦	平瓦	8世紀初期	側倒幅: 1.4 狹幅厚: 1.3	凸面: 一部接合状タキ 四面: 布目底、 巻き筋の痕跡あり	9Y3/1 オリーブ 黒	

掲載遺物観察表 (28)

登録番号	国番号	国番号	地区	遺構番	遺構名	種類	器種	時期	法量(cm)	○内に生存率	調査等(ヨコナメ、回転ナメは省略) (砂=土、ヘラケツリで砂の割いた 方向を示す)	外面色調	備考		
183	1080	12区	第4面	70土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅	1.5	凸面:格子状タキ、ナデ:凹面:布目底	1079E/4にぶい 黄地				
184	1081	12区	第4面	70土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅	1.8	凸面:ナーベル模様状タキ:凹面:布目底、横巻の痕跡あり	2.578/3・淡黄、 NA/ 灰				
184	1082	100	12区	第4面	70土坑	瓦	8世紀初頭	広端面幅	1.1	側端面幅	1.4	2.578/1・灰			
184	1083	12区	第4面	70土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅	1.1	凸面:摩利:凹面:布目底、横巻の痕跡あり	NA/ 灰				
184	1084	12区	第4面	70土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅	1.1	凸面:摩利(ナデか):凹面:布目底、横巻の痕跡あり	NA/ 反、7.577/1 淡白				
184	1085	102	12区	第4面	70土坑	金属製品	龍渦	現長	4.4	現幅	5.1	1.9		鐵	
184	1086	12区	第4面	80溝か	溝唐草	杯	8世紀から9世紀初頭	口径:15.0(1/4)	高台:11.6(1/4)	口蓋:5.4	外面:ナデ	NA/ 灰			
184	1087	12区	第4面	80溝か	溝唐草	甕	8世紀か	口径:40.0(1/11)		外面:凸帯	NA/ 白、NA/ 埋灰				
184	1088	12区	第4面	80溝+85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅	1.6	側端面幅	1.8	凸面:綾目タキ:凹面:布目底後板ナデ	2.576/1・黃灰		
184	1089	12区	第4面	81溝	土器部	小皿	12世紀前半~13世紀初頭	口径:10.0(1/4)	口蓋:1.9	外面:摩利 内面:摩利	10797/2にぶい 黄地				
184	1090	12区	第4面	81溝	瓦器部	甕	12世紀前半	口径:13.0(1/6)		錐茎足 外面:摩利 内面:沈線1、摩利	NA/ 灰				
184	1091	97	12区	第4面	74落ち込み	磁器部	白磁碗	12世紀前半	口径:15.0(1/8)	高台:2.5	外面:摩利 内面:施釉	7.577/2・淡白			
184	1092	12区	第4面	74落ち込み	土器部	甕A	8世紀末	口径:21.6(1/48)	高台:2.5	外面:摩利 内面:摩利	2.5796/8 檀				
184	1093	12区	第4面	74落ち込み	渦唐草	杯	8世紀後半	口径:15.0(1/8)	高台:2.5	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	NA/ 灰				
184	1094	12区	第4面	74落ち込み	渦唐草	甕C	8世紀	口径:26.0(1/10)		外面:把手(あひ)(4箇所)、摩利 内面: 摩利、工具痕跡あり	NA/ 白				
写のみ	1095	75	A区	第2面	1014ビット	紙製品	用紙	近代以降	長:24.0	幅:32.0	「株式会社 神戸米穀株式取引所仲買人 先賣人城」A4判				
写のみ	1096	75	A区	第2面	1014ビット	紙製品	用紙	近代以降	長:17.0	幅:12.0	「株式会社 神戸米穀株式取引所仲買人 先賣人城」				
写のみ	1097	75	A区	第2面	1014ビット	紙製品	外箱	近代以降	長:9.0	幅:8.5	ゼネラルマスク				
写のみ	1098	75	A区	第2面	1014ビット	紙製品	外箱	近代以降	長:8.0	幅:7.5	エーランマスク				
写のみ	1099	75	A区	第2面	1014ビット	紙製品	外箱	近代以降	長:8.0	幅:7.5	墨で何かが書かれている				
写のみ	1100	80	12区	第1~2面	2建物	木ネジ+釘	近代以降				ネジ:25mm~40mm~45mm~50mm~60mm~65mm~70mm~75mm~80mm~90mm~100mm~105mm~125mm~130mmの釘、ワッシャー付釘				
写のみ	1101	81	11区	第3面	2升	スレーブ品	波板	近代以降	廣長:約45	現幅:約50					
写のみ	1102	81	8区	第1面	8石組溝	スレーブ品	瓦	近代以降	廣長:約10	現幅:約10 高さ:約5	植付				
写のみ	1103	81	11区		第2層	スレーブ品	瓦	近代以降	廣長:約13.5	現幅:約9.5					
写のみ	1104	81	12区	第1面	2建物	コクラン リート 器具	床下換気口	近代以降	廣長:約21.5	現幅:約27.5 厚:約1.5					
写のみ	1105	81	11区		第2層	コクラン リート 器具	?	近代以降	廣長:約14	現幅:約27.5 厚:約1.5	斜格子状の網目が残る				
写のみ	1106	82	12区		第1層	コクラン リート 器具+瓦	壁瓦	近代以降	廣長:約10	現幅:約40 厚:約10	平瓦がコンクリートの中に埋められて いる				
写のみ	1107	82	12区		第1層	コクラン リート 器具+瓦	壁瓦	近代以降	廣長:約47	現幅:約22 厚:約12.5	平瓦がコンクリートの中に埋められて いる				
写のみ	1108	82	12区		第1層	コクラン リート 器具+瓦	壁瓦	近代以降	廣長:約46	現幅:約22 厚:約16	平瓦がコンクリートの中に埋められて いる				
写のみ	1109	82	12区		第1層	コクラン リート 器具+瓦	壁瓦	近代以降	廣長:約32	現幅:約25 厚:約10.5	平瓦がコンクリートの中に埋められて いる				
写のみ	1110	82	12区		第1層	コクラン リート 器具+瓦	壁瓦	近代以降	廣長:約30	現幅:約23 厚:約9	平瓦がコンクリートの中に埋められて いる				
写のみ	1111	82	1058	第1面	2建物	布製品	引手下鉢	近代以降	廣長:約73	幅:6.5 高さ:約2			鐵		
写のみ	1112	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約6	現幅:約6.5	緑色				
写のみ	1113	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約7.3	現幅:約7.3	緑色				
写のみ	1114	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約6.2	現幅:約7.1	「昭十三年九月九二式歩道(乙)甲4」				
写のみ	1115	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約5.0	現幅:約7.2	「昭十三年九月九二式4」				
写のみ	1116	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約7.3	現幅:約5.1	一番上にあった				
写のみ	1117	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約4.3	現幅:約7.3	上から2番目にあった「昭十三年九月九二式歩道(乙)」				
写のみ	1118	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約5.9	現幅:約7.3	上から3番目にあった「九二式歩道(乙)T3」				
写のみ	1119	85	10区	(A区)	第1層	布製品	糸包	近代以降	廣長:約7.6	現幅:約4.8	上から4番目にあった「十三年九月九二式歩道(乙)4」				
写のみ	1120	85	10区	(A区)	第2面	37溝	布製品	糸包	近代以降	廣長:約7.2	現幅:約25.5(ひ も含まず)	麻狀			